

最強の剣神、辺境の村娘に生まれ変わる。

カゲムチャ（虎馬チキン）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、悪の帝国によって引き起こされた大陸全土への侵略戦争において、帝国の首魁たる皇帝を討ち果たし、戦争を終わらせた救国の大英雄『剣神』エドガー・ナイトソード。

だが、世界最強の剣士とまで呼ばれた彼も老いには勝てず、最期には弟子達に全てを託し、七十年の生涯に幕を降ろした。

しかし、気づいた時には、彼は国の辺境に住まう村娘「リンネ」として生まれ変わっていた！

そうして、いたいけな少女となった元世界最強の剣士による、新たな伝説が幕を開ける。

幼馴染達と冒険者をやり、前世の弟子達に会う為に王都へと旅立ち、様々な出来事に首を突っ込んでいくリンネ。

相次ぐ強敵達との戦い。

そして、やがてリンネの前には、過去の因縁が立ち塞がって……

最強の少女剣士による、異世界王道ファンタジー！



小説家になろうとのマルチ投稿です。

目次

0章

登場人物紹介

1

第1章 転生編

1 プロローグ

12

2 転生

23

3 友達

33

4 騎士様

44

5 天才少年 VS 元剣神

54

6 天才少年の事情

64

7 剣術教室

75

8 娘は天才

83

9 最寄りの街トリス

88

10 冒険者登録試験

98

11 初依頼

110

12 危険度A

119

13 戦いに生きる覚悟

127

14 昇格試験に向けて

135

15 魔物襲来

146

16 領都防衛戦

155

17 ドラゴン討伐

165

18 戦いの後

174

19 将来の話

187

20 旅立ち

195

番外 後に、剣神と呼ばれる少年

205

第2章 入学編

2 1 王都

2 2 入学試験

2 3 『氷剣』のユウリ

2 4 ナイトソード家

2 5 『剣神』アレク・ナイトソード

2 6 シオンの入学初日

2 7 目が覚めて

2 8 孫娘

2 9 国王

3 0 初登校

3 1 アリス VS リンネ

3 2 大臣の息子

3 3 秘密特訓

3 4 『炎剣』のマグマ

3 5 非道の刺客

3 6 合同訓練開始

3 7 アリス VS フォルテ

3 8 合同訓練終了

3 9 墓参り

第3章 辻斬り編

4 0 休日

4 1 雷の侍

4 2 大臣の密会

4 3 護衛依頼

429 418 408 400 394 386 376 366 356 346 337 323 311 301 292 283 274 264 254 243 234 225 216

6 6	大会初日の夜	654
6 5	大会初日終了	645
6 4	予選Dブロック	634
6 3	予選Cブロック	622
6 2	シオン VS フォルテ	613
6 1	予選Bブロック開始	605
6 0	予選Aブロック	596
5 9	再会と開幕	586
5 8	武闘大会に向けて	578
	第4章 武闘大会編	
番外	『英雄の剣』の大冒険！	566
5 7	そして、次の戦いへ	557
5 6	裏で	552
5 5	辻斬り騒動の後で	543
5 4	リンネ VS カゲトラ	529
5 3	護衛の馬車の中	521
5 2	プロミネンス家	512
5 1	辻斬り討伐作戦	504
5 0	試し斬り	495
4 9	カゲトラという男	484
4 8	お出かけ	472
4 7	連休明け	464
4 6	護衛依頼終了	456
4 5	侍 VS 侍	446
4 4	辻斬り	437

74	始動	739
73	劍聖の告白	731
72	武闘大会終了	721
71	決勝戦	708
70	昼休憩	699
69	アリス VS 劍聖	683
68	リンネ VS シオン 再び	671
67	月下の劍聖	663

0章

登場人物紹介

グラデイウス王国

主人公達の祖国であり、物語のメイン舞台となる国。
大陸の中でも有数の強国。

・リンネ

我らが主人公。

元剣神『エドガー・ナイトソード』の生まれ変わりであり、つまり
元爺で現在は幼女。

前世でも今世でも、自由奔放な性格。

・エドガー・ナイトソード

リンネの前世。

元『剣神』であり、元世界最強の剣士。

幼い頃に戦争で故郷を失い、そこから逃げ出して森の中などをさ
迷った末にグラデイウス王国に辿り着く。

そこから後の嫁さんに拾われて兵士になり、若い頃は戦場に出て大
活躍。

しかし、その戦争で嫁さんを失い、代わりに故郷と嫁さんの仇であ
る敵国の大将をぶつ殺して戦争を終わらせた英雄。

冗談抜きで波乱万丈過ぎる人生を送ってきた男である。

・シャーロット・ナイトソード

通称シャロ。

エドガーの嫁さん。

戦争中に死亡した。

だが、エドガーはリンネとなっても尚、彼女の事を忘れず愛し続け

ている。

永遠の愛とはこの事か！

尚、故人のくせに、ちよくちよく出番がある。

・アレク・ナイトソード

グラディウス王国最高戦力『三剣士』の一人であり、老年期のエドガーが拾ってきて鍛えた一番弟子。

エドガーの死後は彼の技と『剣神』の称号を受け継ぎ、ついでに家まで継いだ正当後継者。

師匠と違って、かなり真面目な性格。

・ユーリ・ナイトソード

通称『氷剣』のユーリ。

『三剣士』の一人にして、アレクの嫁。

エドガーの二番弟子。

結婚前の名前は『ユーリ・グラディウス』であり、その名の通り元王族。

だが、王族の身分を捨てる覚悟でエドガーに弟子入りを申し込み、最後まで食らいついてきた剛の者。

今は騎士学校の教師をしている。

クールな毒舌系女教師。

・マグマ・プロミネンス

通称『炎剣』のマグマ。

『三剣士』の一人にして、王国騎士団長。

エドガーの三番弟子。

リンネには熱血直情馬鹿とか呼ばれているし、実際かなり感情的な人物ではあるが、実は騎士団長としての仕事を全うできるくらいには冷静な判断も下せるので、馬鹿ではない。

少なくとも師匠よりは頭が回る。

ちなみに、三剣士の中では一番年上。

・シグルス・グラデイウス

国王。

ユーリの兄。

かつて王族としての権力に溺れた事があり、その時、エドガーに脅威苦的死導を受けた事がトラウマになっている。

そのおかげなのかは知らないが、今では立派に国王やれている。

・ドレイク

どこに書くか迷った男。

とりあえずここに書いているが、別に王国所属ではない流離いの冒険者。

リンネの父の元パーティーメンバーであり、その縁でリンネ達を気にかけている。

学生組

リンネが通っている学校の生徒達。

騎士学校と文官学校の二つがあるが、大体の奴は騎士学校所属。

・リンネ

主人公

・シオン

リンネの今世における幼馴染の一人。

天才的な才能を持った、雷の魔法剣士。

5歳くらいの頃に、当時住んでいた王都で、とあるクソ貴族の子供と喧嘩してしまい、相手がそれを大事にしまくった結果、父親がエリートコースから左遷。

それに付いて行く形で、リンネのいた村にやって来た。

8歳の頃にリンネと出会い、すったもんだの末に友達になったり、一緒に冒険者やったり、一緒に騎士学校行ったりと、腐れ縁が続いている。

なんだかんだで、リンネとは善き友人関係。

・アリス・ナイトソード

アレクとユーリの娘。

才能ある水の魔法剣士。

エドガーにとっては義理の孫娘であり、そのエドガーの生まれ変わりであるリンネに溺愛されている。

最近はどこぞのクソ貴族のせいで精神的に追い詰められていたが、颯爽とやって来たおじいちゃんによる地獄のレッスンのおかげで見事クソ貴族を撃退し、平穩を取り戻した。

なんだかんだで、おじいちゃんに結構懐いている。

・スカーレット・グラディウス

シグルスの娘であり、第一王女。

文官学校所属であり、王族の名に恥じない優等生。

アリスとは従姉妹に当たり、幼少期から仲が良かった為、もはや姉妹のような関係。

ちなみに、スカーレットの方が一歳年上なので、こっちが姉である。

その為、可愛い妹分に手を出そうとしたどこぞのクソ貴族への当たりが激しい。

・オリビア

スカーレットの護衛。

希少な空間魔法使いにして、剣の腕前も一流。

スカーレットの腹心である為、当然ながら頭も良いというオールラウンダー。

なのに、地味。

スカーレットとは幼少期から共に過ごした仲であり、彼女への忠誠

心がカンストしている。

もはや、護衛というより信者。

だが、問題はないし、百合の気配もしない。

・ランスロット

聖アルカディア教国所属の騎士。

教国最強の騎士『剣聖』の称号を持つ天才だが、まだ経験不足による未熟さが目立つ。

武闘大会の時色々あつた挙げ句、何をトチ狂つたのかリンネに惚れてしまった。

だが、リンネは今でも嫁一筋の為、脈が一切ないクソ哀れな男。

それでも、とりあえず普通の友人関係を築く事には成功したもよう。

・フォルテ・アクロイド

通称クソ虫。

どこぞのクソ貴族。

幼少期にシオンを陥れ、最近はアリスに目をつけていた下郎だが、風の魔法剣士として実力は高かった。

常に優秀であらねば、利用価値がなければ父に捨てられてしまうという歪な家庭環境が彼を歪ませてしまったのだ。

マーニ村の人達

リンネの今世における故郷、マーニ村に住む人達。

・リンネ

主人公。

・シオン

幼馴染。

・ベル

リンネの幼馴染の一人。

物語の英雄に憧れる少年。

幼少期に、リンネを含めた幼馴染全員で冒険者パーティー『英雄の剣』を設立した。

現在はリンネ達と別れ、各地で大冒険を楽しみつつ英雄への階段を登っている。

現在の目標は、リンネとシオンを超える事。

・オスカー

リンネの幼馴染の一人。

風魔法を扱う弓使い。

おもしろい事が好きな、愉快犯のような少女。

一緒にいて一番楽しいと感じるベルについていき、リンネとシオンが抜けた後も冒険者続ける。

だが、パーティーの最高戦力であるリンネと、馬鹿達のストツパー役であったシオンが抜けてしまった為、最近はパーティーの参謀みたいになりつつある。

オスカー的には、それもまた楽しいからオツケー。

・ラビ

リンネの幼馴染の一人。

治癒の魔法を得意とする、水魔法使い。

気弱で臆病な性格だったが、幼馴染達と冒険者をやる内に逞しくなった。

それでも、気弱さは生来の気質なので直らなかつたが。

現在は、リンネとシオンが抜けた『英雄の剣』において、唯一の常識人として頑張っている。

・ジャック

リンネの父。

子煩悩。

最近、娘から送られてくる手紙の内容がぶっ飛んでいるのが悩みの種。

・リンダ

リンネの母。

夫を尻に敷いている。

最近、娘が送ってくるぶっ飛んだ内容の手紙を、冒険小説感覚で読むのが楽しみ。

・ヨハン

シオンの父。

元は王都近衛騎士団所属のエリート騎士だった。

色々と拗れていた家庭環境を改善してくれたリンネに恩を感じている。

最近、リンネ達がいなくなつて寂しいので、村の他の子達に剣や学問を教え始めた。

・ロビンソン

リンネの家で飼われている牧羊犬。

今日も己の責務を全うしている。

・チャールズ

リンネの家で飼われている馬。

最近、よく自分を足に使うリンネ達がいなくなつた事で、ダラダラとした日常を謳歌している。

ナイトソード家

エドガーが戦場での働きによって貴族になった事で作られた家。
現在はアレクが当主をしている。

・アレク・ナイトソード
現在の当主。

・ユーリ・ナイトソード
奥様。

・メアリー
メイド長。

達人剣士でもある戦闘メイド。

元はエドガーが捨てた犬感覚で拾ってきた孤児であり、その事を今でも感謝し、ナイトソード家に忠誠を誓っている。

最近では、リンネに可愛い格好をさせるのが趣味となっている。

・トーマス

ナイトソード家執事長にして、家令。

ナイトソード家が出来た頃から仕える最古参の部下。

エドガーの信頼も厚く、よく仕事を押し付けられて苦勞していた。

それに比べると、今の当主であるアレクは、先代に爪の垢を煎じて飲ませたいレベルで真面目で助かっているが、結局この家で一番仕事をしているのがトーマスである事は変わっていない。

頑張れ社畜。

・使用人軍団

ナイトソード家の使用人達。

その九割が、エドガーによって捨てた犬感覚で拾われてきた元孤児や、どうしようもない環境から救い出された者達。

故に、忠誠心と仲間意識が強い。

だが、エドガーの影響により、全員が大貴族の使用人とは思えない程にフレンドリー。

最近は、リンネドレスアップ計画の賛成派と反対派が熾烈な争いを繰り広げている。

プロミネンス家

王国建国期から続く大貴族。

代々の騎士団長を輩出してきた。

・マグマ・プロミネンス
当主。

・マルティナ・プロミネンス
奥様。

16歳の美少女。

13歳の時に、マグマとロリ婚した。

おっとりして見えるが、実は、自分の不幸な過去とマグマの負い目につけ込んでマグマを落とした肉食系女子。

しかし、旦那様一筋で幸せな家庭を築いているので、結果オーライである。

・イグニ・プロミネンス
マグマとマルティナの娘。

3歳の幼女。

小生意気な性格。

弟子の娘ならば我が孫も同然！ という事でリンネに溺愛されている。

だが、本人はそんなリンネを苦手に思っている。

大臣サイド

クソ貴族一派。

裏で色々と汚い事やってる。

・ピエール・アクロイド

大貴族アクロイド家当主にして、王国大臣。

権力だけの男であり、その性根は腐りきっている。

・フォルテ・アクロイド

クソ虫

・カゲトラ

元は和国出身で凄腕の侍だったが、とある呪いによって墮落し、大臣の使いつ走りの暗殺者に成り果てた男。

最期は、リンネによって一人の武人として斬られ、死亡した。

謎の組織

物語の裏側に度々登場する謎の組織。

帝国を名乗っている。

・陛下

謎の組織のボス。

正体不明の謎の女。

・シャドウ

全身黒づくめの仮面の男。

空間魔法使い。

常におどけた態度を取る。

・スコープオン

扇情的な服装をした紫髪の女。

詳細不明。

・モリメツト

人形のように無反応を貫く男。

詳細不明。

・老人

陛下に忠誠を誓っている。

詳細不明。

・新入り

刀を持つ謎の男。

詳細不明。

ライゾウ

和国出身の侍。

三剣士並みの実力を誇る、雷の魔法剣士。

強い奴と戦うのにワクワクする戦闘狂。

その他

・魔帝

かつて、ダイザスロード帝国という超大国を率いて侵略戦争を引き起こした、当時の帝国皇帝。

若き日のエドガーに討たれた。

第1章 転生編

1 プロローグ

己の半身たる剣を構える儂に、強力な攻撃が迫る。
氷の龍と炎の龍。

正確には、それを模した技。

魔法の力に剣術の威力を乗せた大技であり、間違っても儂のような
いたいけな年寄りに向けて撃つていいものではない。

「閃ッ！」

だが、儂はただの老いぼれではない。

我が名は、エドガー・ナイトソード。

老い衰えたとはいえ、未だ世界最強の剣士の称号『剣神』の名を持
つ男じゃ。

この程度の攻撃で殺られる程、耄碌してはおらん。

気合いの声と共に剣を振るう。

並どころか一流と呼ばれる者達ですら、視認する事も叶わぬ、神速
の一太刀。

横一文字に振るわれた斬撃は、迫り来る魔法の龍どもとかち合い、
凄まじい轟音を立てながら相殺した。

……相殺か。

歴代最強の剣神と呼ばれた儂の剣が止められるとは。

何とも感慨深いものよ。

「ハアアアア！」

そうして感傷に浸る儂の元に、雄叫びを上げながら、一人の青年剣
士が突撃してくる。

速い。

今の儂に匹敵する速度じゃ。

昔より大分遅くはなったが、儂の剣技は数多の敵がひしめく戦場を
駆け抜けて鍛え上げた、速さに特化した剣術。

それに追いつくとは、本当に強くなったものよ！

「おおおおー！」

儂もまた雄叫びを上げ、青年剣士の一撃を真つ向から受け止める。骨が軋んで、筋肉が断ち切れ、全身が悲鳴を上げた。

くたばりかけの爺にはキツイのう……。。

だが、これは儂の意地じゃ。

引く訳にはいかん。

剣に力を込めて、青年剣士を吹き飛ばす。

青年剣士はその力に逆らわず、自ら後ろに跳んで距離を取った。

しかし、青年剣士と入れ替わるように、絶妙なタイミングでその後から一人の女剣士が現れ、手に持った冷気を放つ細剣で儂の首を狙う。

「ぬおお!?!」

剣で受けるのは間に合わないと判定し、咄嗟に体を反らして避けるも、避けきれず、儂の右頬に一筋の刀傷が刻まれた。

そして、細剣が放つ冷気によつて、傷口はみるみる凍りつき、そのまま顔の半分が氷で覆われる。

これぞまさに、年寄りの冷や水!

なんて言ってる場合ではないのう!

これで、右側の視界が潰れてしまった。

だが、優れた剣士は、感覚の全てを視界に頼るような事はしない。

音、気配、魔力。

そういった様々な要素で索敵を行える。

故に、目を潰されたくらいでは、痛手にはなつても致命傷にはならんということじゃ。

死角となつた右側から振るわれた女剣士の剣を、見ないままに受け止める。

「さすがね」

「まだまだ、小娘には負けんわ!」

そのまま青年剣士と同じように、剣に力を込めて吹き飛ばす。

女剣士はこれまた青年剣士と同じく、自ら後ろに跳んで距離を取る。

追撃はできん。

何故なら、ましても絶妙なタイミングで新手が来たからじゃ。

「オラアアアアアア！」

炎を纏った大剣を振り上げた巨漢が上から降ってくる。

炎の射出を推進力として空を飛び、落下の衝撃をも威力に加えた必殺の一撃が儂に迫る。

この威力。

正面から受けきるのは無理じゃな。

まるで隕石のような巨漢剣士の振り下ろしを、剣を斜めに構えて受け流す。

炎がなかなか熱いが、これだけでは儂の『闘気』を貫けはしない。ただ熱いだけじゃ。

そのまま受け流しきった大剣が地面に叩きつけられる。

地面が爆発した。

そして、巨大なクレーターが出来上がった。

相変わらず、なんちゆう破壊力じゃ……。

剣士が出していい火力ではないのう。

剣自体は防げてても、爆発による衝撃までは防ぎきれず、儂は爆心地から遠ざかるように吹き飛ばされる。

「ぐあっ!?!」

だが、ただではやられん。

吹き飛ばされる直前、一瞬のうちに斬撃を放ち、巨漢剣士の足を切り裂く。

無理な体勢から放った一撃じゃ。

そこまでの深手にはならないじやろうが、追撃を阻止することくらいはできよう。

「ゴホッ……」

しかし、こちらも無傷ではない。

衝撃と共に拡散する炎が闘気による硬い守りを僅かに突破し、肌を焼く。

全身を貫く衝撃に、体が悲鳴を上げる。

代わりに右目を覆っていた氷も溶けたが、差し引きとしてはマイナ
スかのう。

体中が痛いわ！

だが、そうも言っておれん。

無防備に吹き飛ばされておる今の儂は、奴らにとって格好的的。

早急に立て直さねばならん。

地面に足を突き立て、その摩擦で強制的に停止する。

剣も突き立てた方が身体への負担は少なくて済むが、剣士が戦いの
最中に自ら剣を使えない状態になるなど、言語道断。

それならば、多少身体を傷つける方が何倍もマシというものよ。

実際、儂の判断は正しかった。

儂が停止したのとほぼ同時に、青年剣士が斬りかかってくる。

剣を地面に差した状態では、これに対処することはできなかつたで
あろう。

「ハッ！」

「ぬん！」

青年剣士の初撃を受け止め、そのまま斬り合いに突入する。

振り下ろし、刺突、足払い、フェイントを混ぜて袈裟懸けの一撃。

高い身体能力、そして厳しい鍛練の末に得た技術で食らいついてく
る青年剣士。

だが、有利なのは儂じゃ。

何故なら、身体能力においても、技術においても、儂の方が上。

特に単純な剣速、剣を振るう速度に大きな差がある。

青年剣士が一度剣を振る間に、儂は三度は剣を振れる。

こやつとて世界有数の剣士。

こと速さに対する対応力においては、他の追隨を許さないじゃろ
う。

そんな青年剣士を持ってして、食らいつくのが精一杯。

これこそが、この剣速こそが、儂を最強足らしめる究極の奥義。

剣神の称号を得てから今日という日まで無敗を誇ってきた、剣神工
ドガーの力よ！

「お前達に倒せるか!? この儂を! 世界最強の剣士を!」

「ぐっ!」

再び青年剣士を吹き飛ばす。

今度は自ら後ろに跳ぶなどという余裕もなく、地面に叩きつけられ、錘揉みしながら飛んで行つた。

だが、青年剣士の低空飛行はすぐに終わりを告げた。

あやつの飛行経路に割り込んだ女剣士が、青年剣士を優しく受け止める。

その隙を守るように巨漢剣士が油断なく此方に剣を構えていた。その体に、先程つけた傷は見当たらない。

青年剣士が儂の足止めをしておる間に、女剣士が治したのじやろう。

あやつは治癒の魔法が使えるからう。

うむ。

いい連携じゃ。

そして、女剣士の腕の中から青年剣士が抜け出し、三人が並んで儂と相対する。

「ふっ」

それを見て、儂は笑つた。

挑戦的な笑みでもなければ、失笑の類いでもない。

自然とこぼれた、穏やかな笑みじゃ。

そう。これは、

「お前ら……本当に強くなったのう」

弟子の成長を感じる師としての笑みよ。

儂は改めて、相対する三人の弟子を見やる。

儂と同等の速度を持つに至り、一対一でも食らいついてきた一番弟子。

黒髪の青年剣士、アレク。

儂の頬に傷を付けた、冷気を放つ華美な細剣を持つ二番弟子。

白銀の髪をなびかせる女剣士、ユーリ。

大地を抉るほどの一撃を放つた、炎を纏う大剣を持つ三番弟子。

赤髪の巨漢剣士、マグマ。

いやはや。

どいつもこいつも、立派に育ったものよ。

「師匠……」

「先生……」

「爺……」

おうおう。

三人揃って、なんて情けない顔しとるんじや。

これは、ちよいとばかり叱責してやる必要があるかの。

「おい、この馬鹿弟子ども。珍しく素直に褒めてやったというのに、なんじや、その泣きそうな面は？ そんな覇気の欠片もない顔したへなちよこどもには、安心して後を任せられないか。儂にまだ戦わせるつもりか？

あー辛いもう。もはや明日をも知れぬ身だというのに、弟子どもが不甲斐ないせいで、まだ戦場に立たねばならんとは本当に辛いもう」
そう言つて、挑発混じりにケツを叩いてやれば、弟子どもの顔が変わった。

さつきまでのちよつとしんみりした空気は完全に消え去り、その顔には戦意が浮かんでおる。

「師匠……！ あなたつて人は……！ こんな時まで……！」

「どうやら寿命が来る前に冥土に行きたいようね」

「上等だ、このクソ爺！ 今、この場で焼き尽くして火葬してやるよ！」

うむ。

いつもの顔に戻ったのう。

その、師匠に対して敬意の一つも見せないクソ生意気な態度はどうかと思うが、それでこそそのお前らじやろう。

最後のとはいえ、これもまたいつもの稽古。

ならば、いつも通りにやるのが一番良い。

——さて、そろそろ儂も本気で行くか。

「「ッ？」「」」

儂の雰囲気が変わったのを感じたのか、弟子どもの顔が強張る。思えば、こいつらを相手に本当の意味での全力で戦うのは、これが初めてか。

儂の真骨頂は、圧倒的な剣速で先の先を取り続け、相手に何もさせずに勝利する速攻。

弟子ども相手にそんな事をしては、ただの虐めじや。

だからこそ、儂の全力は稽古において封印してきた。

だが、これは最後の稽古。

こいつらには儂を超えて行ってもらわねばならん。

であれば本気で、儂が最も得意とする型で、一切の容赦なく相手をする。

攻勢に回った儂は強いぞ。

剣神の本気、存分にその身に刻むがよい。

儂は弟子どもに剣の切っ先を向け、宣言する。

「殺す気で行くぞ」

本気の殺気を籠めたその言葉に、弟子どもが息を飲む。

だが決して怖気づきなどせず、鋭い視線で睨み返してきた。

それでよい。

戦場で臆せば、すぐに命を持っていかれる。

師を相手にそんな顔ができるのならば、合格じや。

心構えは満点をくれてやろう。

そんなことを思いながら、一歩足を踏み出す。

「しんきやく神脚」

体表を覆う身体強化の魔力、闘気を足に集中し、大地に亀裂を入れる程の踏み込みを推進力に変えて、目にも留まらぬ速度で突撃した。

咎だった。

「ゴハアッ!?!」

突如として、儂の身体を激痛が襲った。

胸が！ 胸が痛い！

痛みの原因である肺から込み上げてきた物を吐き出せば、真っ赤な血が口から吹き出した。

そのままゴホゴホと咳き込み、その度に吐血し、体力を使い果たした儂は膝から崩れ落ちる。

これは……あれじゃな。

「ふっ……どうやら儂はこれまでのようじゃな」

「はあああ!?!」

己の終焉を悟り、倒れたままにそれを告げれば、弟子どもがすつとんきような声を上げた。

ユーリだけは呆れたような顔で儂を見ておる。

なんじゃその反応は？

お前ら、儂が不治の病を患っている事も、いつ天に召されてもおかしくない程に症状が進行している事も知つとるじゃろうが。

だから、最後の稽古とか言つて気合い入れてたんじゃから。

「いや知つてますけど、よりによつて今ですか?! 今、寿命ですか?!」

「あれだけかつこつけたくせにこんなオチとか……」

「呆れてる場合じゃねえぞユーリ! 治癒だ治癒! 早く治せ! 俺はこんな結末認めねえぞ!」

ああ、走馬灯が見えてきた。

これは、今は無き我が生まれ故郷か。

懐かしい。

「師匠ツ! しっかりしてください師匠ツ!」

「ユーリツツ!」

「無理ね。治癒の魔法が病気に対して効きにくいのは知ってるでしょう。」

本職じゃない私だと、ここまで進行した病相手には打つ手がないわ。諦めなさい」

走馬灯の場面が切り替わる。

帝国のクズどもが起こした大陸全土への侵略戦争の犠牲となり、故郷が減じる光景。

幼い儂を命懸けで逃がそうとする両親の姿。

苦い記憶じゃ。

「テメエ……! 何でそんなに落ち着いてやがんだこの冷血女! ク

ソ爺とは言え、師匠が死にそうなんだぞ！」

「覚悟ならとつくに決めてきたでしょう。それどころか、私達の手で先生を斬る覚悟すらあった筈よ。あなたこそ、わめいてないで神妙にしないで。見苦しい」

「なんだと、この野郎ッ！」

「私は野郎じゃないわ」

「やめろ二人とも！　こんな時に！」

さらに場面が切り替わる。

故郷を追われ、魔物がひしめく森の中を必死に逃げて、どこかの街の路地裏へと辿り着いた記憶。

路地裏をさ迷い歩き、ある時、とある馬鹿女の財布を狙って失敗し、ボコボコにされた記憶。

その正体は兵士見習いであつた馬鹿女に兵舎に連行され、なんやかんやあつて、そのまま兵士見習いとして引き取られた記憶。

思えばあれが、剣神エドガーの原点じゃつた。

「……師匠の死に目だ。静かにしてくれ」

「アレク……」

「チツ……わかつたぜ。悪かつたよ」

兵舎での賑やかな日々。

がさつでうるさかつたが、なんだかんだで優しかつた兵士達。

自分も似たような立場だからと、姉面して度々絡んできた馬鹿女。

ボコボコにされた恨みを晴らすべく勝負を挑み、返り討ちにあつて更にボコボコにされた思い出。

あれは悔しかつた。

あまりにも悔しくて、だから強くなろうと思えた。

だが、そんな日々も長くは続かなかつたのう。

場面が切り替わる。

戦場を駆け回る。帝国のクズどもとの戦いの記憶じゃ。

儂が兵舎で騒がしい日常を送っていた裏で、久遠の仇敵たる帝国は、ゆつくりと、しかし確実に侵略の魔の手を伸ばしておつた。

そのうち、兵舎の兵士達や儂や馬鹿女にも前線への異動命令が下さ

れ、戦場へと赴いた。

奴らは故郷の仇であり、倒さねばより多くの大切なものを奪っていく敵じゃ。

儂は戦い続けた。

奴らへの恨みを晴らす為に。

大切なものを守る為に。

実戦に勝る稽古はなく、戦えば戦う程に儂の剣は洗練されていったが、帝国は大陸全ての国へと同時に攻め込めるような超大国。

その戦力は圧倒的じゃった。

奴らとの戦いは熾烈を極めた。

最終的には、儂自らの手で奴らの首魁たる帝国皇帝を討ち取り、侵略戦争は終わりを告げたが、結局、儂は多くのものを失った。

一番大切なものも含めてな。

儂は戦争終結の英雄となり、剣神と謳われるようになったが、その当時はあまり嬉しくもなかったのう。

「師匠……今までありがとうございました。安らかに眠ってください」

と、儂が剣神となるまでの半生が走馬灯として流れきった時、周りで神妙な顔をしている弟子どもの姿が目映った。

ああ。思えばこいつらを弟子にしたのは、ずいぶん歳を食ってからのことじゃったのう。

侵略戦争後の小競り合いも落ち着き、半楽隠居状態で世直しの旅

(笑) とかやってる時じゃった。

懐かしい。

……おっと、忘れとった。

儂にはまだ、最後の仕事があった。

剣神として、こいつらに託さねばならんものがあったわ。

「アレク……ユーリ……マグマ……」

「師匠ッ！」

「なにかしら？ 遺言？」

「クソ爺、死ぬなッ！」

あー、まったく騒々しいのう。
最後まで、やかましい奴らじゃ。

まあ、お前らしいといえ、らしいがな。

儂は最後まで握りしめていた剣を、弟子どもに差し出した。

かつて、帝国皇帝より奪い取った、剣神の証にして世界最強の剣を。

「これを……この剣を……お前らに託す……。三人で……決闘でもして……次の持ち主を……次の剣神を決めるがよい……」

最後の力を振り絞って、どうにかそれだけ口にする。

それで、どうやら本当に力を使い果たしたらしく、急速に意識が薄れていきおった。

薄れる意識の中、儂の手の中から剣が消えるのを感じた。

霞む視界で、弟子どもの誰かが剣を受け取る姿をしかと見届ける。

どうやら最後の仕事も無事に終わったようじゃ。

これで、何の憂いもなく成仏できる。

ふわりと、天に浮かぶような感覚がした。

身体から魂でも抜けたか。

抜けた魂は、はたして何処へ行くのかのう。

本当に天国なんでもものに行くのか、それとも地獄か。

どちらにせよ、できれば先に死んでいった戦友達には会いたいものじゃな。

向こうには愛すべき馬鹿も居ることじゃろうし。

不意に、手を引かれたような気がした。

先程まで剣を握りしめていた手を、誰かに引かれたような気がした。

そんな不思議な感覚を最期に、儂の意識は消失した。

2 転生

私の名前はリンネ。

剣神エドガーが守った国であるグラディウス王国の辺境、シヤムシール領の端に位置する田舎村、マーニ村で牧場を営む父と母の間に生まれた生粋の村娘だ。

私には前世の記憶がある。

それを自覚したのはつい最近。

元冒険者の父に剣の稽古をつけてもらった時だった。

私は昔から事あるごとに剣を教えってくれと父に催促してきたが、

その度に父は、「剣は危ないからもっと大きくなってから」とはぐらかし続けてきた。

その本音は、女の子の私を稽古で傷つけたくなかったのだろう。

あの子煩惱め。

まあ、愛されてると分かるから悪い気はしないが。

でも、やはり剣は習いたい。

当時の私の中には剣への憧れというか、習わなければいけないという義務感みたいな感情があったのだ。

なので、私はいつまで経っても駄々をこねそうな父に見切りをつけ、母に相談して外堀から埋める作戦に出た。

母の方は、元々私が剣を習うことに対して特に拒否感はなかったし、

どうやら私が、冒険者を引退した今でもよく剣を振って鍛練してる父に憧れたと思っっているようで、微笑ましいとばかりにむしろ応援してくれた。

そうして、母の説得と私のおねだりによるダブルコンボの前に、あえなく父は撃沈した。

そこから一週間後の私の六歳の誕生日に訓練用の木剣をプレゼントしてくれて、翌日から稽古をつけてくれると約束してくれた。

素直に嬉しかったので「パパ、大好きだー!」といって抱きついてやったら、デレデレとだらしのない笑顔を浮かべながら「よーし! パパが

一人前の剣士に育ててやるからな！」と言って気合いを入れていた。実にチョロい。

そうして迎えた初稽古の日。

私は、父をボコボコにした。

瞬殺だった。

まさかの事態に「い、今のなし！」とか言っただけを要求してきた父をさらに叩きのめし、

その後も「今のは手が滑っただけだから！」とか「今までのパパは本気じゃなかったんだよ。今から本気出すからな！」などのざれ言を吐きながらむきになって戦い続けた父を、言い訳の余地もないくらいに、完膚なきまでに叩き潰した。

父は人生で初めて剣を持った娘にこてんぱんにされた事が相当ショックだったらしく膝を抱えて落ち込み、

母は無邪気に「リンネ凄ーい」と言っただけでパチパチと拍手していた。しかし、私はそれどころではなかった。

まさにその時、前世の記憶を取り戻していたのだから。

剣を握って構えた瞬間、脳裏に電流のような衝撃が走り、村娘リンネとしてではない記憶、剣神エドガーとしての記憶が溢れ出した。

おそらく、剣を持って戦うという出来事が引き金になったのだろう。

そうして頭の方が突然の記憶の奔流に翻弄される中、何も知らない父が剣を構えながら「よーし、どこからでもかかって来い！」と呑気にのたまったものだから、体の方が勝手に反応。

魂に刻まれた達人剣士の動きを持つてして、剣士としてはそこそこの技量しか持たない父を蹂躪したというのが事の次第だ。

ある程度記憶の整理ができた私は、未だに落ち込む父と、父にドンマイコールをかけて慰めている母に向けてこう言った。

「パパ、ママ、私は思い出したぞ」

そこで一拍置いて、とても真剣な声で告げた。

「私は、剣神エドガーの生まれ変わりだったんだ」

その時の二人の目は一生忘れられない。

私はとても真面目な話をしているつもりだった。だってそうだろう。

自分達の娘に前世の記憶があるなんて、特級の異常事態だ。

意味が悪いなんてもんじゃない。

最悪、親子の縁を切られるかもしれない。

そのくらいの覚悟で私は話したのだ。

だというのに、二人が私を見る目はまるで残念な子を見るような、娘が変な方向に成長してしまったのを嘆くような、哀しみと慈しみに満ちた目だった。

世界最強の剣士とまで呼ばれた私が、まさかそんな目で見られる事になろうとは……。

信じてくれていないのは明白なので、私は言葉の限り釈明を繰り返した。

戦争の時のエピソードを話してみたり、弟子どもとの日常話を語ってみたり、果ては秘蔵のラブロマンスまで引っ張り出したが、結局、聞く耳持ってくれず。

最終的には「そっかー、凄く凄く」とだけ言って頭を撫でられ、はぐらかされた。

話せば話す程に残念な子を見るような視線が強くなっていったのは誠に遺憾だ。

いつか二人に私に前世の事を信じさせてやる。

前世の記憶を思い出した日、私はそう誓ったのだった。



それから二日が経ち。

私は特に以前と変わらない生活を送っていた。

前世を思い出したといっても、私はそれに吞まれて人格が変わったりはしていない。

むしろ、殆ど変わらない。

忘れていた過去を思い出しただけで、私がリンネであるという事に変わりはないのだから当たり前だ。

では、私はリンネであつてエドガーではないのか？

それも違う。

私はリンネであり、同時にエドガー・ナイトソードでもあるのだ。

こう……言葉にするのは難しいが。

言ってみれば、今の私は前世と今世の記憶が上手い具合に共存している状態というか。

今世の六年間の下に前世の七十年間を足した感じというか。

そんな感じだ。

今までは忘れていたが、今では前世の最期と今世の始まりが違和感なく繋がっている。

前世からあまり性格が変わっていないというのも、エドガーを昔の自分として素直に受け入れられる大きな要素なのだろう。

変わった事と言えば、性別と口調くらいだ。

自分が女になったという事実は受け入れている。

というか、生まれてからの六年間、男としての記憶が一切ない状態で女として育てられれば、そりゃ女としての自覚が芽生えるものだ。

それでも大分男勝りな感じに仕上がったのは、眠っていた前世の最後の意地だったのだと思う。

まあ、特に問題はない。

そして口調。

これに関しても何の問題もない。

あの、ザ☆爺みたいな話し方は、元々、一番弟子ことアレクを弟子にとつた時に威厳を出そうとして始めた事だ。

それが変わったところで何の問題があると言うのか。
ないだろう。

常識的に考えて。

これが完全に年頃の少女の口調になっていたら、前世の私を知る奴らに再会した時に爆笑されるか、気色悪すぎてゲロを吐かれたかもし

れないが、幸いな事に私の口調は男勝りな感じだ。

元男だと暴露しても、そこまでの生理的嫌悪感を感じないだろう。世の中には、むくつけき男の身体を持ちながらも心は乙女という剛の者だっているんだ。

それに比べれば、どうという事はない。

私はそんな感じで現実を受け入れ、新しい日課に精を出す事にした。

「よし！行くぞロビンソン！」

「ワン！」

私は誕生日に母に貰った動きやすい服に着替え、父に貰った小さな木剣を腰に差して、我が家で飼っている牧羊犬のロビンソンに声をかけた。

時刻は早朝。

朝日が眩しい時間帯だ。

私はこれから、新たな日課となったロビンソンの散歩に出掛ける。ランニングだ。

今までロビンソンの散歩は、元冒険者であり体力のある父がトレーニング代わりにやっていたのだが、私がおねだりして譲ってもらった。

というのも、今は父よりも私の方がトレーニンングが必要だからだ。

前世の記憶を思い出した事によって、私の戦闘力は飛躍的に向上した。

それは技術だけの話ではなく、記憶と一緒に闘気の使い方まで思い出したおかげで、身体能力も六歳の幼女とは思えないレベルまで引き上げられている。

現時点でも、そんじょそこらの剣士には負けないだけの力が出せるだろう。

だがしかし、前世と比べれば比較にならない程に弱体化しているのもまた事実だ。

原因は大きく別けて二つ。

一つは長らく剣を手放し、戦いから遠ざかった事による感覚の鈍化。

これは、地道に取り戻していくしかない。

そして、もう一つが、単純な身体能力の低下。

これが目下最大の問題だ。

私の身体は闘気を纏わなければ、非力でかわいらしい、ただの少女でしかない。

元剣神なのに、闘気がなければまともな剣を持ち上げられないという事実はさすがに堪えた……。

闘気があるからといって、肉体がこんな貧弱なままで良い理由にはならない。

一流の剣士は闘気など使わなくても人間離れした身体能力を持つ。闘気使いの領域とは更にその先。

選ばれた天才が、たゆまぬ努力の末にようやく到達できる境地なのだ。

鍛え抜かれた肉体に、闘気による身体強化を上乗せしているのだから、その力は人間をやめている化け物と言って差し支えないだろう。

前世の私はそんな化け物達の頂点だった。

そして何より重要なのは、弟子どもがそんな私に次ぐ程の力を持っているという事だ！

このぷりちーな貧弱幼女ボディで奴らに勝てるとは到底思えない。

弟子よりも弱い師匠など、私のプライドが許さないのだ！

最後の稽古では私を超えていってくれる事を願ったが、あれは、あくまでも、あれで最後だと思ったからだ。

続きがあるというのなら、話が変わってくる。

せっかくなにして生まれ変わったのだから、いずれは奴らにも会いに行くつもりでいる。

だから、それまでに鍛えて強くなるのだ！

師匠としての威厳が保てるように！

「ワン！」

そんな事をつらつらと考えていた私を見て、ロビンソンが吠えた。たぶん、ちゃんとあつしの散歩に集中してくだせえご主人様、とか言ってるのだろう。

わかったわかった。

お前の散歩を譲ってもらったのも体力作りの一環だからな。

ちゃんと真面目にやる。

「ワフ」

私の答えに満足したのか、ロビンソンはさつきより優しく吠えて元のペースに戻った。

私もロビンソンの疾走について行けるように、最低限の闘気を纏って並走する。

こいつは足が速いから、こうして一緒に走ってるだけでも結構疲れる。

これは良い鍛練になりそうだ。

ロビンソンのリードを離さないようにしながら、今世の故郷マーニ村の中を走り回る。

「あら、おはようリンネちゃん。最近は早起きねー」

「おはよう、おばさんー！」

道中、畑で農作業をしているおじさんおばさん達から声をかけられる。

子供が少ない田舎村において、私みたいな可愛い女の子は人気者なのだ。

たとえば、前世が享年七十歳の爺だとしても。

前世は前世、今世は今世。

今の私は完全に女なのだから、何の問題もない。

さて、こんな朝早くから農作業に精を出すおじさんおばさん達を見てわかる通り、この村は農業が盛んだ。

盛んというか、それしかないとも言う。

ここマーニ村は、どこにでもあるような普通の田舎村だ。

これといった名産品もなければ、迷宮などの名所もない。

唯一の特徴は、ただひたすらに平和だという事くらい。
そもそも、マーニ村があるシャムシール領とやらの存在は、私の記憶にない。

晩年に暇をもて余し、いろいろな仕事を部下に丸投げして、世直しの旅(笑)という名目で国中を旅していた私が知らない領地となると、私が死んでから新しく出来た領地か、記憶に残らない程小さくて目立たない領地かの二択だ。

そして、シャムシール領は後者である。

以前、父に地図を見せてもらったことがあるが、シャムシール領は王国の端の端、辺鄙で何にもない所にある上にとても小さかった。

普通、国端の辺境というものは、他国との境界になっていたり、強い魔物が出たりして、そこそこ重要な土地として扱われるものなのに、ここは例外と言わんばかりに、全くそんな気配がない。

これでは、ただの田舎である。

そして、マーニ村はそんな田舎領地の中でも、さらに端っこの隅っこのある超田舎村だ。

村人達は、自前の田畑で自給自足。

足りない物はお裾分けか物々交換で手に入れる。

最寄りの街まで馬車はなく、徒歩で三日もかかる距離。

そんなに離れている上に、わざわざ街に行かなくてもなんとかなるものだから村人は殆ど村に引きこもり、街とは半ば断絶状態。

冒険者も寄り付かない。

せいぜい、たまに行商人が立ち寄る程度だ。

近場に森があつて魔物が生息してる為、少しだけ危険だが、聞いた話によると、その魔物も危険度E〜Fの動物に毛が生えた程度の小物。

その程度、村の自警団だけでどうとでもなるし、なんなら父一人でも殲滅できる。

そんな前世で体験した戦場とは真逆の平和な村の中を私は走る。

我が家の愛犬ロビンソンと共に。

闘気で強化しているとはいえ、子供の体力ではそんなに長時間は走

れない。

三十分程で切り上げ、汗だくになりながら家に帰る。

家に帰れば、牛の乳絞りをしている父と、ニワトリ小屋から卵を回収してきた母が出迎えてくれた。

「お帰り、リンネ」

「お帰りなさい。今日も汗びっしよりね。早くお風呂入ってきなさい」

父と母は今日もいつも通りだ。

いつも通り、笑顔で幸せそうだ。

平和を謳歌している。

思えば、前世の私が必死こいて戦ったのは、こういう当たり前の平和を守る為でもあった。

多分に私怨が混ざってはいたが、そういう気持ちも確かにあったのだ。

前世の両親は帝国のクソどもに殺された。

だが、今世の両親は、私と死んでいった戦友達が守り抜いた平和の中で生きている。

なんか良いな、こういうのは。

私の努力も、あいつらの犠牲も、無駄じゃなかったと思えるから。

「パパ、ママ」

私は二人に声をかけた。

「ん？」

「どうしたの？」

二人は不思議そうに聞き返す。

「ただいまー」

私は元気にそう言って、とりあえず近くに居た父に抱きついた。

前世の私と、先に死んでいったあいつらが、満足そうな表情を浮かべた気がした。

父は娘に抱きつかれて、締まりのないにやけ面をしていた。

転生なんてものに対して、思うところが無いと言えば嘘になる。

前世の私にこの世への未練なんてものはなかったし、やつと天寿を全うして穏やかに死ねたのだから、できる事なら先に逝った連中に会いたかった。

同じ場所に行きたかった。

でも、この平和そうな村と幸せそうな両親を見て思ったのだ。

しばらくは親孝行でもして存分に甘えながら、この平和な世界で生きていくのも悪くないと。

そんな事を思った。

3 友達

「じゃあ、行って来る！」

家の庭先において、私は元気良くそう宣言した。

「行ってらっしゃい」

「気をつけるんだぞ」

「ワン！」

「わかった！」

両親とロビンソンに見送られながら、私は家の外に向かって歩き出す。

今日は友達と遊ぶ約束があるのだ。

ここ数日、前世を思い出してからは親孝行がしたい気分だったのだ。鍛練の時以外は牧場の仕事を手伝っていた。

だが昨日、しばらく顔を見せない私に怒った友達が家まで押し掛けて来たので、その行動力に免じて今日は遊ぶ約束をしたという訳だ。

前世を思い出して、精神年齢が凄まじく上昇した今、子供の遊びに付き合うなんて苦痛でしかない……という訳でもないのだ、これが。

身体に引き摺られて精神が若返ってるのか、それとも前世では子供の頃に遊べなかった反動か、私は今日の予定を普通に楽しみにしていた。

父と母も「お手伝いは嬉しいけど、子供は遊ぶのも仕事だから、行って来なさい」と言って送り出してくれたし、留守番には頼りになるロビンソンもいる。

今日は何の憂いもなく遊ぶとしよう。

家を出て、待ち合わせ場所である大きな木の下まで走る。

こんな時でも、鍛練は欠かさない。

継続は力なり。

目標は、あと十年くらいで、かつての全盛期を超える事だ！

そうして村の中を疾走しているうちに、目的地が見えてきた。そこは、この村で一番大きな木が生えている場所。

単純に大きいだけで、何の曰くもなければ、特別な種類でもない、ただの大木が生えている場所。

今世の私は、よくここで友達と遊んでいるのだ。

実に平和な幼少期。

滅びる故郷から必死で逃げ出し、魔物が徘徊する森の中やら、チンピラが徘徊する路地裏の中やらを、死にかけながら這いずり回っていた前世とは大違いだ。

大変結構。

だが、今日は、そんな遊び場に先客がいた。

「978……！ 979……！」

大きな木の下で、青髪の小さな少年が、汗だくになりながら剣を振っている。

私が父に貰ったものと似た訓練用の小さな木剣を、振り上げて、振り下ろす。

それを繰り返している。

素振りだ。

だが、その動きは、少年の年齢には不釣り合いな程に、無駄なく、美しく洗練されていた。

見たところ、少年の年頃は、今の私より2〜3歳くらい上。

つまり、8〜9歳くらいに見える。

その年にして、あの剣の冴えは異常だ。

別に、素振りの上手さが剣術の強さに直結する訳ではないが、素振りは剣術の基本中の基本。

これをおろそかにして大成した剣士はいない。

素振りを見れば、そいつの剣士としての力量が、ある程度はわかる。それを踏まえて改めて見ても、少年の剣は異常だ。

正直、素振りだけなら、前世の私や弟子どもを超えている。

あくまでも、同年代の頃という注釈が入るけどな。

それでも、あの少年が天才というのは間違いない事実だろう。

いったい、何歳の頃から剣を振っているのやら。思わず、足を止めて見入ってしまった。

まさか、こんな才能が、こんな田舎村に埋もれているとは。いやはや、世界は広いな。

「おい！ そのお前！ ここは俺達の遊び場だぞ！ 勝手に使うな！」

「そうっすよ！ とつとと出て行くっす！」

「や、やめようよ……喧嘩すると怒られるよ……」

そんな感じで、私がちよつと感心しながら静観していたら、なんか見覚えのある三人が少年に絡みだした。

威勢のいい少年が一人と、それに追従する少女が一人。

そして、そんな二人の後ろでビクビクしてる少女が一人。

見覚えがあるというか、あれが私の友達だ。

何やってんだ、あいつら……。

少年は、そんな三人を不機嫌そうにギロリと睨み付けた後、無視して素振り続けた。

我が友は、そんな少年の態度を見て、額に青筋を浮かべている。うむ。

トラブルの予感しかないな。

私は、急いで少年達の元へと駆け出した。

「無視すんなあ！」

案の定、沸点の低い子供である我が友は、生意気な態度をとった少年に掴みかかった。

子供とは、こういう些細な理由で争いを始めてしまう生き物なのだ。

今は私も子供だから、よくわかる。

これが、ただの子供の喧嘩なら、まだよかった。

私が急いで介入する程の事じゃない。

存分に殴り合った後に、友情でも芽生えればそれでいい。

だが、今回に限っては、そうじゃない。

我が友が掴みかかった相手は、剣の天才。

力を持った子供。

分別のない子供が大きな力を持って振り回せば、それは取り返しのできない事態を引き起こす。

あの少年が、その力に見合うだけの自制心を持っていてほしいが、持っていない可能性もある。

なら、念の為に、取り返しがつかなくなる前に、私が介入した方がいい。

そして、私の嫌な予感は当たった。

「……俺の、邪魔をするな」

小さく、微かに怒りの籠った声で、少年がそう呟き、我が友に向かって剣を振り下ろした。

私は猛スピードでダッシュして二人に近づき、剣が我が友に当たる寸前に、左手で服を掴んで後ろに引き寄せ、同時に右手で腰に差していた木剣を抜き、少年の剣を受け止める。

「!?」

「え!？」

「そこまでだ。剣は、子供の喧嘩に使うもんじゃない」

「リンネ!？」

「リンネちゃん!」

突然の私の登場に、その場にいた全員が驚愕する。

特に、自分の剣を片手で止められた少年は、目を見開いていた。

……だが、思ったよりも軽い攻撃だったな。

これなら、当たっても青アザ程度にしかならなかっただろう。

一応、手加減はしていたらしい。

それでも、ただの子供に向けて剣を振るうのは、褒められた事じゃない。

たとえば、同じ子供同士だとしてもだ。

「先に手を出したこいつも悪いが、ただの子供に剣を振り下ろすのは駄目だぞ。とりあえず謝っとけ」

私は少しだけ殺気を籠めた低い声で、少年を恫喝した。

少年の顔が少しだけ強張る。

ほう。

その程度しか動揺を表に出さなか。

中々に胆力もあるな。

しかし、私の恫喝に便乗して、他の連中が騒ぎ始めた。

「そうだ！ 謝れ！」

「謝るっす！」

怯んだ少年に向かって、我が友二人が、我が者顔で糾弾しはじめた。

おい。

「調子に乗るな！ 私はお前らにも言ってるんだぞ！ ベル！ オス

カー！」

「俺は悪くねえ！」

「ベルに同じっす！」

「ふ、二人とも……素直に謝ろうよ……」

「ラビは黙ってる！」

「ラビは黙ってるっす！」

「ひゃい……！」

「おい、やめろ！ ラビに当たるな！」

というか、騒ぐな！

しかも、反省の色が全くないな、こいつら！

見ろ！

少年も、なんか呆れたような目でこっちを見てるじゃないか！

「……はあ」

そんな私達を見て威勢が削がれたのか、少年はため息を吐いて剣を収め、きびつを返して立ち去ろうとした。

「待てコラ！ 逃げる気か!？」

「……出て行けと言ったのは、お前達だろう」

「言っつてねえよ！」

「あ、それ、あたしが言っつたっす」

「オスカアアアア！」

「ちよ!? なんで、あたしに怒るんすかベル!？」

「や、やめようよ……」

「ああー！ー！ もう、グダグダじゃないか！」

「……………はあ」

グダグダになった空気に呆れたのか、少年は今度こそ振り返らずに立ち去ってしまった。

こっちの三人組は、未だにワーワー言ってる。

まったく！

結局、誰一人として謝らなかったな！

まあ、喧嘩がグダグダのうちに終わっただけでもよしとするか。

怪我人も出なかった訳だしな。

……それにしても。

「その喧嘩っ早さ、もう少し何とかならないのか、ベル？」

「ケツ！」

「ケツ、じゃないぞ。お前、私が助けなければ、危うく怪我するところだったんだからな」

「助けてくれなんて言っただけでねえし！」

ダメだこれは。

早く何とかしないと。

と、こんな感じで、大分ひねくれてるこの少年は、ベル。

今の私よりも二つ年上で、おそらく、さっきの少年と同じ年くらいだろう。

私にからんできたこいつをボコボコにしたのが出会いだった。

その頃から、何一つとして変わっていない。

「オスカー。お前も無駄に煽るような事ばかり言うなよ」

「善処するっす」

「嘘つけ！ 今まで善処なんてした事ないだろ！」

「失礼な！ リンネはあたしを何だと思ってるんすか!？」

「考えなしのお調子者だろうが！」

「その通りっす！」

そして、こっちの、なんも考えてなさそうな少女は、オスカー。

ベルと同じ年で、私が出会うよりも前から二人はつるツルんでいた。

私にボコボコにされるベルを見るや、即座に逃走を選んだ薄情者だが、不思議と仲が悪くなる事はない。

人間的な相性が良いのだろう。

馬鹿だが、ユーモアがあるしな。

「うう……ごめんね、リンネちゃん……止められなくて……」

「あー……まあ、ラビは悪くない。でも、もう少し強く生きような」
「うん……」

最後に、この気弱そうな少女は、ラビ。

他の二人よりも少し年下で、私と同年だ。

常識的で良識的な子だから、もう少し成長すれば、他の馬鹿二人のストッパーになってくれるかもしれない。

だが、今は無理そうだ。

この気弱な性格で、年上で体も大きく、無駄に勢いのある馬鹿二人組を止める事はできないだろう。

「……まあ、いい。で、今日は何するんだ？」

「特訓だ！ 剣の特訓をするぞ！」

さっきの出来事を不問にして、今日の予定を聞いた私に、ベルが元気良く答えた。

いきなり特訓と言い出すとは。

さては、さっき私に助けられた事を気にしてるな。

可愛い奴め。

ちなみに、いつもはベルの好きな「英雄ごっこ」とかで遊んでいる。

たまに村に来る行商人が売ってくれる絵本とか、吟遊詩人が唄う英雄譚とかに感化されて、こいつは英雄に憧れているのだ。

憧れの英雄の中には、当然、前世の私も入っている。

その記憶を思い出した今となっては、微笑ましきしか感じないな。

「勝負だ、リンネ！」

「よかろう」

お気に入りの木の棒を突きつけながらそう言うベルに対し、私も木剣を抜いて応える。

ベルの視線が、一瞬、私の木剣に注がれた。

その目に宿る感情は「羨ましい」の一言。
ベルの家は、この村に引きこもって街に出る事のない、生粋の農家だ。

故に、基本的に街で売られている武器の類いを買ってもらえなかったらしい。

……もしかしたら、さっきの少年につかかったのは、そこらへんの嫉妬心が原因かもしれないな。

あの少年も、木剣持ってたし。

ちなみに、私の木剣は、父が街の酒場に家の牧場で作られた牛乳とか卵とかを売りに行くついでに買って来てくれたものだ。

昨日、こいつらが家に乗り込んで来た時、私の手に握られた木剣を見て「この裏切り者オ！」って叫んでいた。

どんだけ欲しかったのやら。

だが、その気持ちもわからんでもない。

私も、父にこの木剣をプレゼントされるまでは、似たような思いを抱えていた。

……今度から、もう少しこいつに優しくしてやろうかな。

「では、勝負開始っすー！」

「うおおおおおおおー！」

オスカーが審判役を務めて勝負の開始を宣言し、ベルが雄叫び上げながら突撃してきた。

そこに、年下の女の子に対する手加減などというものは、欠片も存在しない。

普通に考えれば、ベルは血も涙もない鬼畜野郎という事になるのだが、これは違う。

これは、私を相手に手加減なんて必要ないとわかっているからこそ、やっているのだ。

「よっ、と」

「このッー！」

ベルの荒い攻撃を簡単に避け、時に木剣で受け流す。

子供の攻撃くらい、鬨気を使わずとも、簡単にさばける。

これは前世の技術を継承したからこそその動きだが、前世を思い出す前でも、このくらいはできた。

ベルとの打ち合いは、昔からよくやっている。

そして私は、ベルとの戦いに、一度として負けた事がない。

おかしい話だ。

ベルと初めて会って、からまれた時、私は喧嘩の経験なんて欠片もない、ただの美少女だった。

対して、ベルは割り喧嘩に慣れた悪ガキだ。

普通に考えれば、勝ち目なんてある筈がない。

それが、蓋を開けてみれば、一方的な私の圧勝。

多分、その頃から前世の影響はあったのだと思う。

思えば、完全に記憶を思い出す前から、前世の片鱗は至るところにあった。

剣を習いたいと強く思った事。

エドガーの絵本を母に読み聞かせてもらった時に感じた、妙な既視感。

ベルとの喧嘩で発揮した、年齢に見合わない戦闘力。

他にも、改めて考えてみれば不思議に思う事はいくつもあった。

だから、私は本当に記憶を失っていただけなのだと思う。

リンネとエドガーは別人ではない。

リンネの過去がエドガーであり、エドガーの未来がリンネなのだ。

「だあああああー！」

そんな事を考えながら、ベルの相手続ける。

私に攻撃が当たらない事がストレスとなり、それが元々荒かった動きを更に荒くする。

「ここまでだな。」

「ほい」

「ぐあっ!?!」

大振りの攻撃を避けた直後、隙だらけのベルの足を蹴って転ばせる。

そして、その眼前に木剣を突きつけた。

「私の勝ちだな」

「そこまで！ 勝負ありっす！」

「クッソオオオオオオ！」

オスカーが勝負の終了を宣言し、ベルが思いつきり声を上げて悔しがる。

ベルは、私に勝った事がない。

だが、負ける度に、こうして悔しがる。

そして、これっぽっちも、めげず、挫けず、こう言うのだ。

「次は勝つからな！」

……普通、子供というのは、これだけ負け続ければ、飽きるか、ふてくされて、やめる。

しかし、こいつは違う。

これだけの実力差を前にしても、決して諦めない。

その姿は、どこか大昔の私と似ている気がした。

馬鹿女にボコボコにされ続けても挑み続けた、弱く、幼かった頃の私と。

それは立派な才能だ。

同じものを持っていた私が保証する。

その才能で、世界最強にまでなった、この私が。

だからこそ、私が返す言葉も決まっている。

大昔、私の才能を伸ばしてくれた奴と、同じ言葉を口にする。

「ハッハッハ！ いつでもかかって来るがいい！」

「じゃあ、今やってやるよ！ もう一回だ！」

「いいだろう！」

そうして、今日もまた、この小さな英雄をボコボコにした。

ベルが本格的にバテてきた後は、オスカーやラビも交ぜて、鬼ごっこだの、かくれんぼだのをして遊んだ。

特訓で体力が削れたせいで負け続けたベルがキレたりした。

そんなベルを、オスカーが煽って締め上げられた。

ラビは、青い顔で、それを見守っていた。

そんな感じで、一日が過ぎた。

とても楽しかった。

4 騎士様

「ふう……良い湯だった」

ベル達と遊んだ翌日。

いつも通りの朝。

日課のロビンソンの散歩を終え、恒例の入浴を済ませた私は、牧場へと赴いた。

今日は家の手伝いをするのだ。

向かった先は牛達がひしめいている牛舎。

そこに着けば、既に父と母が仕事を開始していた。

まずは家族全員で、牛舎の掃除から始めるのだ。

ちなみに、ロビンソンだけは配置が違う。

あいつは、掃除中は外に出す牛達の監視だ。

箒片手に、牛舎の中を掃除していく。

糞が強烈な臭いを発していて鼻がもげそうだけど、このお手伝いはそれなりに長く続けてきたことだ。

慣れれば耐性というものがついてくる。

鼻が馬鹿になってるだけという可能性もあるがな。

「そういえば、リンネって剣が好きになったのよね？」

なるべく臭いを意識しないように努めながら掃除を続けていると、母がそんなことを聞いてきた。

剣が好き、か。

そういえば、考えた事もなかったな。

昔から必要にかられて使ってきて、そのうち無いと落ち着かないようになっただけど、はたしてそれを好きと言っていいのかどうか。

むむ……。

ああ、いや、でも、好きでもないことを終生に渡って続けるなんてできる訳がないか。

うむ。

そういうことなら、私は剣が好きと言って差し支えないな。

「うん。好きになった」

「じゃあ、もつと強くなりたい?」

「なりたい!」

その質問には躊躇なく答えられる。

私は弟子どもよりも強くならねばならないのだ!

師匠としての威厳を守る為にも!

それに、いきという時に力がなければ何も守れないからな。

「よし! じゃあ、リンネ。ヨハンさんっていう人に剣を教わってみない?」

「ヨハンさん?」

「それは駄目だあああああああ!」

うお!?

びっくりした。

どうしたんだ父よ? 今まで会話に参加してなかったのに、いきなり大声なんて出して?

ほら、いきなりの大声に驚いて、外に出しといた牛達が軽くパニツクを起こしてるじゃないか。

ロビンソンが必死に走り回って、庭の外に出ていかないようにしてるぞ。

頑張れロビンソン。

お前だけが頼りだ。

「あなた、いきなり大声出さないで。いったい何がそんなに気に入らないって言うのよ?」

「リンネの剣の師匠は俺だ! 断じてあんな優男ではない! 俺はリンネに約束したんだ! パパが一人前の剣士に育ててやるって!」

「ああ、そういうこと。なら黙ってなさい。弟子よりも弱い師匠に存在価値なんてないのよ」

「ぐはッ!」

ぐはッ!

母よ……今のは私にもダメージが来たぞ。

そうだよな……。

弟子より弱い師匠に存在価値なんてないよな……。

私が内心でショックを受けていると、父が助けを求めるような目でこつちを見てきた。

私はそつと目を逸らした。
すまぬ父よ。

でも、話の流れ的に、父よりも強いと思われるヨハンさんとやらには興味があるんだ。

父が泣きそうな顔になっているのが横目に見えた。

だが、母はそんな父には見向きもせず、「よーし！ それじゃあ仕事
が一段落したら、早速ヨハンさんの所に行くわよ！」と言つて一人テ
ンションを上げている。

父は何も言わずに掃除に戻った。

その背中とは、とても煤けて見えた。

哀れだ。

完全に嫁の尻に敷かれた旦那の末路というのは、実に哀れだ。

私も昔、似たような経験をしたからよくわかる。

今度、肩叩きでもしてやろう。

私は父の背中を見ながら、そう思った。



そして、午後。

昼休憩ということで牧場の仕事を終わらせ、私は母に連れられてヨ
ハンさんとやらの所へと向かっていた。

今日は母が付き添ってくれるらしい。

その代わり、父は母の分も牧場の仕事を押し付けられて、ロビンソ
ンと一緒に留守番だ。

父よ、強く生きろ……。

「ママ、ヨハンさんって、どんな人なんだ？」

哀れな父を記憶の片隅に追いやり、私は母にこれから会いに行くヨ

ハンさんとやらの事を尋ねた。

父の剣士としての技量はそれなりでしかない。

ただし、それはあくまでも元世界最強の剣士から見ればという話であって、世間一般的に見れば、父は十分一流と呼ばれる領域に達している。

そんな父を超える人材が、こんな田舎村にいるというのは、正直驚きなのだ。

「ヨハンさんは、お仕事でこの村を守ってくれてる騎士様よ。とっても強くて優しい人だから、安心なさい」

……ああ。なるほど。

騎士。

正確に言えば、村を守る守護騎士か。

それならば、父よりも強くても不思議ではない。なるほどな。

納得した。

騎士というのは、それ程に強いのだ。

狭き門として有名な王都の騎士学校で、厳しい訓練を積み、シビアな試験を突破し続け、優秀な成績を修めて、卒業資格を得た者だけが名乗れる称号だ。

例外として、私のように大きな武功を上げて兵士から騎士になるというケースもあるが、どちらにせよ精鋭には違いない。

そんな騎士は、下位とはいえ貴族の位を与えられ、国の重要な戦力として数えられる。

そして、この国には、各地の村や街に、最低一人以上の騎士を派遣し、その地を守らせるといふ規則があった。

そうして派遣されて来た騎士の事を『守護騎士』と呼ぶのだ。すっかり忘れていた。

そうだよ。

いくらマーニ村が極度のド田舎村とはいえ、国に所属している村の一つには違いないのだから、守護騎士が居て当然だった。

まあ、こんなド田舎に飛ばされて来るような騎士は、十中八九、左

遷されたのだとは思うが。

とにかく、疑問が解けてすっきりした。

そんな事を考えている間に、私達は目的地に到着した。

この辺りでは一番立派な家屋。

ド田舎村には不釣り合いな程に立派だが、貴族の家と考えれば、かなり質素な部類の建物。

そんな場所だ。

同じ騎士でも、前世の私が住んでいた王都の屋敷とは比べ物にならない。

まあ、私は騎士になった後も出世して、最終的には侯爵になった。侯爵と一介の騎士では、色々と違って当然か。

とにかく、どうやら、ここがヨハンさんとやらの家らしい。

「ごめんくださいーい！」

「はーい。なんででしょうか？」

母は門の外から声をかけ、それに答える声が出た。

若い男の声だ。

イケメンボイスな美声だった。

そして、すぐに声の主が私達の前に現れる。

「あ、リンダさん。こんにちは」

門を開けながら現れたその人物は、一言で言うならイケメンだった。

人好きのする笑顔を浮かべた、青髪のイケメンだ。

私の脳裏に人妻ハンターという単語が浮かんだ。

この人がヨハンさんだろうか？

なんとなく、父がヨハンさんを毛嫌いしていた理由がわかったような気がする。

ちなみに、リンダとは母の名前だ。

「こんにちは、ヨハンさん。この子は娘のリンネです。ほら、リンネ。

この人がヨハンさんよ。ご挨拶して」

「……こんにちは」

「はい、こんにちは、リンネちゃん。僕はヨハン。この村を守る守護騎

士です。よろしくね。……まあ、自警団の皆さんがお強いので、あまり役には立てていませんが……」

青髪のイケメン騎士、ヨハンさんは、そう言って自嘲するように苦笑した。

国内有数のエリート職業である騎士とは思えない、弱々しい笑みだった。

騎士というのは、もつとこう、プライドが高く自信に満ちた奴が多いから、なんだか珍しく感じる。

やはり、左遷されたと見るべきか。

あと、どうでもいいけど、その憂うような表情にも、そこはかとなしいイケメン臭が漂ってるというか、無駄に色気がある。

私は少しだけ、母の浮気を心配した。

思い返せば、ヨハンさんの所に行くと言い出した時、やたらとテンションが高かったような……。

これは、いかな。

実の母を疑うなんてマネ、私はしたくない。

ので、思いきって聞いてみる事にした。

母の服をクイクイと引っ張っぱりながら、私は尋ねた。

「ママ、浮気か？」

「ぶはっ!？」

その言葉に過剰反応したのは、母ではなくヨハンさんの方だった。ゲホゲホと蒸せてる。

一方の母は、「なに言ってるんだ、こいつ？」みたいな呆れた顔で私を見ている。

これは……どっちだ？

「はあ……あの人に何か吹き込まれたのかしら？ 違うわよりンネ。ヨハンさんとは、ただの知り合い。それ以上でもそれ以下でもないわ」

「本当か？ でも、ここに行くと言い出した時、ママはやたらとテンションが高かった。それに、最近のパパは情けないぞ。乗り換えられても不思議じゃないと思える程に！」

「乗り換えって……どこで、そんな言葉覚えて来たのよ……」

母は頭痛を堪えるように額を押さえた後、しやがみこんで私と目を合わせ、語り出した。

「いい、リンネ。私は、ちゃんとパパとリンネを愛しているわ。だから、そういう心配はしなくて平気よ。」

今朝、ちよつと興奮しちやったのは、単に凄いリンネをヨハンさんに自慢したかったただだしね」

「パパが情けないのは？」

「あの人が情けないのは、いつもの事よ。そういうところもひつくるめて愛してるから、安心しなさい」

「……そうか。良かった」

ヨハンさんの目の前で、こんな惚気話ができるのなら、父と母の愛は本物だろう。

弟子ども相手に、恥ずかしげもなく嫁との惚気話を披露した私と同類だ。

ならば、大丈夫。

我が家が、泥沼の家庭崩壊を迎える事はないだろう。

これにて、一件落着！

「あの……それで、お二人は、今日はどんなご用で来られたのでしょうか……？」

そのタイミングを見計らってか、ちよつと蚊帳の外で放置されていたヨハンさんが話しかけてきた。

……そういえば、母の方は大丈夫でも、ヨハンさんはどう思っているのだろうか？

娘の私から見ても、母は結構な美人だ。

それに、さっきの、私が浮気を指摘した時の、あの慌てよう。

実に怪しい。

「違いますからね。僕も妻一筋ですから。浮気なんてしませんよ」

私の疑いの眼差しに気づいたのか、ヨハンさんが慌てて釈明してきた。

というか、この人、結婚してたのか。

その話が本当なら、この人も同志だが……

「蒸せてたのは？」

「普通に驚いたのと、そんな話がジャックさんの耳に入ったら殺されかねないと思っただけです。ただでさえ、嫌われてるのに……」

ジャックとは父の名前だ。

私の脳裏に、母を取られまいと必死にヨハンさんを威嚇する父の姿が浮かんだ。

なんとも、アレな絵面だ。

それが怖いというのは、なるほど、わからないでもない。

一応、筋は通ってるな。

まあ、なんにせよ、そういう事なら。

「疑って、ごめんなさい」

「いえ、わかってもらえたならいいんです」

誤解は解けた。

ヨハンさんは苦笑していたが、切り替えるように軽く頭を振って、話を戻した。

「それで、結局、何のご用でいらつしやったんですか？」

「ええ。実はヨハンさんをお願いしたい事があって」

「お願い、ですか？」

母の言葉に、ヨハンさんが不思議そうな顔をした。

そして、その疑問を解消するように、母は本題を口にする。

「リンネに剣を教えてほしいんです」

「え？ 剣ですか？ でも、それならジャックさんに頼めばいいんじゃない……？ なんて、わざわざ毛嫌いされてる僕の所に？」

「あの人は弱いから、クビにしました」

「そ、それはまた……」

母が容赦ない。

これは、さすがに父が哀れだ。

より一層、哀れだ。

別に、父だって弱くはないというのに……。

そして、ヨハンさんは若干引いていた。

今の発言だけで、我が家の家庭内ヒエラルキーを察したのかもしれない。

そこにおける父の立ち位置も含めて。

「コホン！ と、とにかく、お願いというのは、リンネちゃんに剣術の指導をする事、でいいんですね？」

「ええ。その通りです」

「それ自体はかまわないんですけど、実はちよつと問題がありました……。まあ、とりあえず、上がってください。こんな所でする話でもないですし」

「どうぞ」と言つて、ヨハンさんは私達を家の敷地内に招き入れた。たしかに、門前^{ここ}は、少し長くなりそうな話をするのに向いた場所ではない。

家にかけてくれると言うのなら、断る理由もない。

私と母は、「お邪魔します」と言いながら、ヨハンさんの家の庭へと足を踏み入れた。

「ん？」

と、そこで、私は人の気配を感じた。

気配だけではない。

同時に、ヒュツ、ヒュツと、風を切るような音が聞こえてきた。

とても聞き慣れた音。

今世ではなく、前世において、嫌という程に聞きあきた音。

今さら、その音を聞き間違える筈がない。

これは、剣を振るう音だ。

気配のする方向に目を向ける。

そこには、一人の少年がいた。

青髪の幼い少年が、真剣な顔で素振りをしていた。

その動きは、少年の年齢に似つかわしくない程に洗練されていた。見覚えのある動きだった。

というか、昨日見たばかりの動きだった。

「あ」

「！」

その少年と目が合った。

向こうも私の姿を見て驚いたらしく、素振りをやめて、目を見開いていた。

私は、この少年に見覚えがある。

そして、どうやら、少年の方も私を覚えているらしい。

思わぬ所で、思わぬ再会をしたものだ。

私は、素直にそう思った。

昨日、ベルに絡まれていた天才少年が、そこに居た。

5 天才少年 VS 元劍神

「あれ？ リンネちゃんはシオンと知り合いなんですか？」

「昨日、ちよつと喧嘩を……」

そこまで口にした瞬間、ポンと私の肩に後ろから手が置かれた。振り返ると、そこには怖い顔をした母の顔が。

マズイ！

私の背筋を冷や汗が伝った。

「リンネ、喧嘩したの？」

「い、いや、喧嘩って程の事じゃ……」

「喧嘩、したの？」

「……しました。ごめんなさい」

私は屈服した。

母の怒りを前に私にできる事は、真実を述べて許しをこう事だけだ。

母は怒ると怖いのだ。

元世界最強の剣士を震え上がらせる程に怖いのだ。

それで怯えてしまうあたり、剣神も人の子という事だろう。

「……リンネ。あなたはとっても強いけど、その力を簡単に人に向けちゃダメよ。

そうしたら、いつか必ず取り返しをつかない事になる。それで後悔するのはあなたよ。ママは、リンネにそうなってほしくないわ」

「……うん。わかってる」

何十年も使ってきた自分の力だ。

その危険性は他の誰よりもよくわかってる。

いたずらに使えば、私の前の劍神みたいな悪魔になるって事は。

「よし。自分でわかっているならよろしい。力を使う時は、ちゃんと考えて使いなさい。以上、お説教終わり」

「はいー」

こうして母の怒りは鎮まった。

いや、怒っていたというよりは、叱ってくれたと言うべきだろう。

それはとてもありがたい事だ。

前世において、親も、親代わりだった奴も失った私にはよくわかる。今度こそ絶対に親孝行しよう。

「えっと、あの、リンネちゃん？ シオンと喧嘩したって、その、大丈夫だったんですか？」

と、母のお説教が終わった時、ヨハンさんがあたふたとしながら、そしてシオンと呼ばれた少年にチラチラと視線を向けながら問うてきた。

ああ、見たところ、ヨハンさんはシオン少年に剣を教えている、つまりは師匠に当たる訳だ。

弟子が、こんないたいけな美少女に手を出したかもしれないとなれば、気が気ではないだろう。

監督不行き届きというやつだ。

私も、かつては弟子を持っていた身として、わからんでもない。

そんな不安を払拭してやるべく、私は笑いながら質問に答えた。

「大丈夫だったぞ！ 私は強いからな！ あんな小童こわっぼの一人や二人、楽勝だ！」

「小童って……リンネちゃんの方が小さいでしょうに。でも、その様子だと大きな怪我もなかったようですし、本当によかったです。」

そして、ウチの息子が本当にすみませんでした。あとでよく言っただけ聞かせますので……」

ヨハンさんは、本当に申し訳なきように頭を下げた。

考えてみれば、シオン少年もまた、私と同じで力を持った子供だ。

さつき、母が私を叱った内容が、そのままシオン少年にも当てはまる。

師匠ならば、ちゃんと叱ってやるべきだな。

……ん？

というか、

「息子？」

「え？ あ、はい。シオンは僕の息子です。父親らしい事は何もしてあげられていませんがね……」

そう言つて、ヨハンさんはまた苦笑した。
よく苦笑する人だな。

そして、なにやら訳ありの匂いがする。
こつちに見向きもしないシオン少年といい、ヨハンさんのこの沈んだ表情といい、何かあるな。

親子関係が上手くいっていないのかもしれない。

「それで、さつき言った剣術を教える上での問題なんですけど……その、習うならシオンと一緒にして事になっちゃうんですよね……。」

あの子には基本毎日教えてますし、それ以外の時間は森の見張りとか、魔物の間引きとかの仕事があるので、時間をズラすという訳にもいなくて……。」

「私は問題ないぞ」

「でも、その、大丈夫ですか？ シオンはなんというか……拗れてるといふか、ひねくれているといふか、そんな感じなので、また喧嘩になっちゃうかもしれませんよ？」

「ほー」

言われて、シオン少年の事を改めて見る。

相も変わらず、こつちには見向きもせず、一心不乱に剣を振っている。

だが、決して楽しそうではない。

ずっと不機嫌そうな仏頂面だ。

真面目と言えば聞こえは良いが、その姿には余裕というものが感じられない。

子供にあるまじき、ストイックさだ。

これは……少し危ういな。

シオン少年の人生だ。

そうしたくてそうしているなら、好きにすればいいとは思う。

しかし、あのいつ破裂するかわからないような余裕のなさでは、昨日ベルに向かって剣を振り上げたように、ふとした拍子に力を使つて、取り返しのつかない事態を引き起こしかねないとも思う。
ふむ。

せつかくだ。

これから同門になるのだし、少しお節介を焼くのも悪くはないだろう。

私は、シオン少年へと歩み寄った。

「リンネちゃん？」

背後で、ヨハンさんがちよつと焦ったような声を上げる。

それを無視して、私はシオン少年に話しかけた。

「私はリンネ！ 今日から君と一緒に剣を教わる事になった。よろしくな！」

「……………」

まずは挨拶を試みたが、シオン少年は何も応えない。

興味なさそうに私を一瞥して、素振りを続けるのみだ。

礼儀がなっていないな。

「シオン！」

さすがに、その態度は見過ごせなかったようで、ヨハンさんが注意するようにシオン少年の名前を呼ぶ。

しかし、それを遮るように、私はヨハンさんの前に手をかざして止めた。

そして、腰から木剣を引き抜き、宣言した。

「口で語る気がないなら、剣士らしく剣で語り合おうぜ。——勝負だ、少年！ 私が勝ったら普通に話をしろ！」

口で言っただけ聞かないのなら、剣を合わせて語り合う。

実にわかりやすく良いな。

弟子どもを教える時も、そんな感じだった。

とりあえず剣で叩きのめして、自分の至らぬところに身を持って気づかせるのだ。

口ではなく、行動で示すというやつだな。

具体的に言おうと、私の指導は、口1、行動9くらいの割合だった。

「ちよ!? リンネちゃん!?!」

「案ずるなヨハンさん。軽く揉んでやるだけだ」

「いや、むしろ、リンネちゃんの方が心配なんです！」

大丈夫だ、問題ない。

ヨハンさんの心配を一笑に付す。
任せておくがいい。

「リンネ。力を使う時は？」

「わかってる。ちゃんと考えて使う」

「よろしい」

母の説得も完了。

いや、母は別に反対していた訳ではないか。

なんだかんだで、母は剣術というものに理解がある。

決して、私に戦うなど言っている訳ではない

いじめるなど言っているのだ。

「さあ、構えろ少年。勝負だ」

「……何故、お前みたいになちんちくりんと戦う必要がある？」

ちんちくりん、だと？

……言ってくれるではないか、小僧。

「そのちんちくりんにビビってる奴に言われたくはないな。なんだ？

こんな年下の美少女から逃げるのか？ そんな臆病者に使われた

のでは、せつかくの剣が泣いているな！」

「……………」

お、シオン少年の顔が不機嫌そうに歪んだ。

ハハハ！ やはりまだ子供だな。

この程度の挑発に引つかかるとは。

私だったら、こんな事を言われても剣は抜かんど。

まあ、剣の代わりに拳が飛ぶだろうが。

「……………はあ。いいだろう。戦ってやる。その代わり、俺が勝った

ら、二度と俺に関わるな」

「言ったな！ 約束は守れよ！」

「お前もな」

そうして、シオン少年もまた、剣を構えた。

素振りをやめ、私に剣を向ける。

その姿は、中段、正眼の構え。

最も基本に忠実で、隙のない構えだ。

「では、——行くぞ」

私は軽く鬨気を纏い、一步の踏み込みで距離を詰めて、シオン少年の剣を狙って、下段から自分の剣を振り抜いた。

強い力で叩きつけられ、シオン少年の手から離れた剣が、回転しながら後ろへ飛んでいき、地面に突き刺さる。

「どうした？ 剣を拾え。勝負は始まったばかりだぞ」
「ッ!？」

そこでようやく、シオン少年は私の実力を正しく理解したのか、凄
い勢いで後ろに下がり、再び剣を構えた。

その表情には、さつき以上に余裕がない。

理解できないものを見る目で、私を見ている。

まあ、こんな美少女の力が、必死に頑張っている自分を遥かに超えて
いれば、そんな顔になるのも仕方ないだろう。

しかし、

「臆すれば、勝利は遠のくぞ」

私は再び一步踏み込み、間合いを詰める。

そのままシオン少年の脳天に向けて剣を振り下ろした。

しかし、シオン少年は私の剣に自分の剣を合わせ、見事に受け流し
てみせた。

「ほう」

中々にやるな。

だが、まだまだ甘い。

剣を受け流した事でがら空きになった体に向かって、私は肩から体
当たりをかました。

体重の軽い幼女の一撃と侮る事なかれ。

鬨気を纏う者の力は、そんな常識を軽く破壊する。

シオン少年は、まるで馬車にでも撥ね飛ばされたかのように吹き飛
んで行き、ヨハンさんの家を囲む柵にぶち当たった。

ここが戦場なら、追撃をかけてトドメを刺すところだが、こういう
勝負であれば起き上がるのを待つべきだろう。

私は油断せずに剣を構え続けた。

「し、シオンがこんな一方的に!? それに、今のは鬪気、ですよね? リンネちゃんて、いったい何者!？」

「なんでも、自称剣神の生まれ変わりだそうですよ」

「……これを見てみると、あながち冗談とは思えないですね。シオンだって、かなり強いのに」

む、母がヨハンさんに私の前世の事を話しているな。

でも、それは身内だけの秘密にしてほしい。

よし。

あとで、釘を刺しておこう。

「こんな……馬鹿な……」

お、シオン少年が起き上がってきた。

「俺は、努力してきた筈だ。最強の騎士になる為に。誰よりも、何よりも。なのに、何故、何故、こんな奴に、勝てない……?」

おお、打ちひしがれてるな。

それで良い。

そうして、自分の至らぬ点を探せ。

そうすれば強くなれる。

というか、シオン少年は最強の騎士になりたかったのか。

なら、元最強の騎士として、少しアドバイスしてやろう。

「強さだけでは立派な騎士にはなれないぞ、少年。もう少し周りを省みてみる」

多大な功績を残した私ですら、強さだけで騎士は務まらなかった。

私は戦う事以外に取り柄がなかったから、強さ以外の部分は大体、人に頼っていたがな。

それでも、人任せでもなんでも、足りないところを補っていたのは確かだ。

ただ強いだけでは、騎士どころか、兵士にも冒険者にもなれないと知れ。

「ふざけるな!」

しかし、私の言葉は、どうやら悩める少年の心には届かなかったよ

うだ。

やはり、人を教えるというのは難しいな。

弟子どもも、何故かクソ生意気な感じに育ったし。

そういえば、二番弟子ことユーリの奴に「先生は、教師の才能ないわね」とか言われた事があったな。

ほっとけ。

ん？

私がどうでもいい事を考えている間に、シオン少年は腕を前に突き出して、何かやり始めた。

「ボルティックランス！」

「なっ!? シオン！ やめなさい！」

ヨハンさんが慌てた様子で、シオン少年を静止した。

そして、シオン少年の前に、——雷で出来た槍が出現した。

ほほう！

剣だけでなく、魔法も使うか！

しかも、見たところ、中々の威力を持った中級魔法。

本当に、天才というやつだな！

「食らえ！」

そうして、雷の槍が私に照準を合わせて射出された。

ヨハンさんが慌てて飛び出して来たが、雷属性の魔法は、全魔法の中でもトップクラスの速度を誇る。

たとえ、闘気使用であっても、容易には追い付けない速度だ。

だが、ヨハンさんの助けはいらぬ。

いくら天才であろうとも、まだまだひよっこ。

私の敵ではない。

「飛剣！」

私の繰り出した空飛ぶ斬撃が、雷の槍とぶつかって相殺する。

もう少し力を籠めれば、相殺に留まらなかつたろうが……それは本意ではない。

これで良いのだ。

「飛剣まで!?!」

「クソッ！」

ヨハンさんが驚愕の声を上げ、シオン少年は悔しそうな声を出した。

しかし、まだ諦めてはいないらしい。

シオン少年の放った魔力が雷となる。

そして、剣が雷を纏った。

「飛剣・雷迅！」

今度は、斬撃の形をした雷が、私に迫る。

「ほうー！」

これは、規模こそ小さいが、前世における最後の戦いにおいて、子どもが私に放った魔法剣！

魔法の力に剣術の威力を乗せた、選ばれし魔法剣士にしか使えない大技ではないか！

この歳でこれを使う事ができるとは……素晴らしい。

ならば私も、敬意を表して本気で迎え撃ってやろう！

私は剣を上段に構え、闘気を全開にし、今の私にできる最高速度で振り抜いた。

「――神速剣・一閃」

最強の剣技とは何か？

その問いに対して、前世の私が人生をかけて出した答え。

それが、この剣技だ。

最強の剣技とは何か？

それは、相手に何もさせず、何かをする暇を与えず。

ただ神速の一太刀を持って斬り捨てる。

無慈悲の速攻である。

「ッ!？」

シオン少年では決して視認できない速度で振るわれた剣が、雷の斬撃を叩き斬った。

……腕が痺れる。

やはり、前世の屈強な体ならともかく、このぷりちーな幼女ボディでは技の反動が大きいな。

問題なく使えるのは、一日に一度か二度が限界だろう。

治癒の魔法でもあれば話は別だが……まあ、今は必要ないか。

私は、渾身の一撃をあつさりと打ち碎かれて呆然としているシオン少年に歩み寄り、その眼前に剣を突き付けた。

「私の勝ち、でいいな？」

それに対して、——シオン少年は抵抗しなかった。

6 天才少年の事情

「くっ……」

シオン少年は剣を握ったまま重そうに体を引きずり、そのままどこかに行ってしまった。

あの疲労した感じ……魔力切れか。

私は適性がなくて、闘気以外の魔法が使えないから滅多になった事はないが、魔力を使い過ぎると体が重くなるからな。

そして、魔法による魔力の消費量は、強力な魔法や、制御しきれない魔法を使うと加速度的に上がる。

らしい。

そっちは、普通の魔法が使える奴からの受け売りだが。

それにしても、勝負が終わった後に逃げ出すとは、何事か。

「すみません、リンネちゃん。少し、一人にしてあげてください」

追いかけてしようとした私の足は、ヨハンさんのそんな声に止められた。

ボコボコにして上下関係を叩き込んだ瞬間こそが、教育のチャンスだと私の経験が叫んでいるが……その辛そうな表情に免じて見逃しておくか。

そもそも、シオン少年の教育は、私の仕事ではないしな。

「すみません。あの子にも色々事情がありまして……聞きますか？」

「話したいのなら聞くぞ」

「……では、聞いてもらえると助かります。リンネちゃんには知っておいてほしいので。」

あ、リンダさんは大丈夫ですか？ 娘さんに結構重い話をする事になりますか……」

「気にしなくていいですよ。何事も経験です。それに、お友達になるかもしれない子の事情は知っておいた方が良いでしょう？」

む、お友達か……。

言われてみれば、これから同門の生徒になるんだし、私とシオン少

年が関係を持つとしたら、その関係性は友達……という事になるのか？

兄弟弟子と言った方が正しいような気もするが、ヨハンさんが師匠だと、何故かしっくりこない。

おそらく、私の年齢的に、本格的な修行ではなく、剣術教室みたいな緩いイメージを持ってしまっているのが原因だろう。

いや、シオン少年の様子を見る限りだと、緩くはなさそうだが。

まあ、とりあえず友達（仮）としておくか。

ぶつちやけ、今までは弟子に対して接するような気持ちだったから、少し考え方が変わった。

なら、上から目線で少年と呼ぶのもやめておこう。

ベル達と同じく、シオンと呼び捨てだ。

「さて、どこから話しましょうか……。とりあえず、一つだけ確かな事があります。——あの子が歪んでしまったのは、僕のせいなんです」

そして、ヨハンさんは語り出した。

溜まっていたものを吐き出すように、あるいは懺悔するかのよう

に。

あの天才少年の事情を。



元々、ヨハンさんはただの平民だった。

小さい頃に華々しいパレードか何かの主役を務めていた騎士に憧れ、必死に努力して騎士学校に入学。

そのまま厳しい授業と試験を乗り越えて、めでたく騎士になったらしい。

まあ、騎士という職業は、英雄と同じで、誰もが一度は憧れるものだ。

ヨハンさんがそうだったとしても、何も不思議な事はない。

実際、ユーリなんかも、その口だしな。

大抵はどこかで躓く、もしくは現実を見て他の職に就くものだが、ヨハンさんは憧れを貫き通せる実力があつたんだろう。

それは素直に誇って良いと思う。

そうして、今から数年前くらいまで、ヨハンさんの人生は順風満帆だつたそうだ。

十分な教育を受けていた貴族の子女とは違い、平民で一からの叩き上げで騎士になったヨハンさんの実力は高く、騎士の中でも更なるエリートのみが入れる近衛騎士団、王族の警護を担当する部署に若くして配属（これは本当に凄い）。

私生活の方でも、子供の頃から騎士になるという夢を応援してくれた幼なじみと結婚。

子供（シオン）も生まれて、家庭も円満。

誰もが羨む立身出世を果たし、ヨハンさんは完璧なりア充となつたのだった。

「しかし……それまでの反動ですかね。そこから先は不幸が続きました」

暗い表情でヨハンさんが言うように、その幸せは連鎖的に続いた不幸によって、いとも容易く崩壊した。

まず、元々あんまり身体が強くなかつた嫁さんが、流行り病で亡くなつたらしい。

これだけで、私はヨハンさんに心底同情した。

私も、前世で嫁が殺された時は盛大に泣いたものだ。

仇は討つたが、やりきれなさだけが残った。

ヨハンさんも、そんな感じだったのかもしれない。

……いや、死因が流行り病じゃ、感情をぶつける先さえないか。

ある意味では、私よりも悲惨かもしれない。

その後、ヨハンさんは妻を失つた悲しみを紛らわせるように、仕事に没頭したそうだ。

結果としてシオンに構ってやれる時間が減り、シオンは独りになった。

だが、シオンは中々に強い精神を持った少年だったらしく、空いた時間で剣と魔法の修行を始めたらしい。

ヨハンさん曰く、その頃のシオンにとっては、父が立派な騎士であるという事が唯一の誇りであり、その父のようになるのだという思いだけが心の支えだったのではないかとの事だ。

「ですが……それが災いしてしまいました」

そして、ここで更なる不幸が二人を襲う。

シオンが一人で修行をしていた時、彼はとある少年と喧嘩をした。

ヨハンさんが後から聞いた話によると、どうも相手の方から声をかけて来て、剣の試合みたいな事をしたらしい。

どうやら、シオンはその頃から才能の片鱗を見せていたらしく、相手の少年を普通に打ち倒したのだとか。

そこまではいい。

問題はその後だ。

あっさりと負けた相手の少年は、それが信じられないとばかりに何度もやり直しを要求し、それでも勝てずに負け続けると、今度はシオンに向かって暴言を吐き出したという。

『この僕がお前なんかには負ける筈がないんだ!』

『何か汚い手を使ったな!』

『平民上がりの息子のくせに!』

そんな感じの事をだ。

「そこまではシオンも必死に耐えていたそうなんですけど……どうも、亡くなった母親の事まで引き合いに出されたみたいで……シオンは怒って、相手の子をボコボコにしてしまったんです」

「うむ。それは切れて当然だな」

子供の前で、死んだ親の暴言を吐くとは……私の前でやっていたら殺していたかもしれんな。

いや、さすがの私でも子供を殺しはしないか。

だが、確実に拳骨は飛んでいた。

「ええ、僕もそう思います。ですが、事はそれで終わらなかつたんです。そのシオンが殴ってしてしまつた子というのが、お忍びで城下町

に来ていた、大臣職を務める公爵様の息子さんだったらしくて……」
ああ、なるほど。

この先の展開が読めた。

「息子を害された公爵様は激怒し、親子もろとも即刻処刑せよと言
出しました。幸い、騎士団長や同僚達が庇ってくれたので最悪の事態
は免れたのですが……僕は責任を取らされて王都を追われ、辺境のこ
の村に左遷させられた訳です」
「なるほどな」

権力を傘に着た横暴。

力に溺れたクソ貴族の仕業か。

どこまでも、ありがちな話だ。

世直しの旅（笑）の最中に、何度出会い、何度叩き潰した事か。

だが、潰しても、潰しても、なくなりやしない。

まったく、人が命懸けで救った国で、つまらない事やりやがって。

「そして、この村に来てからのシオンは、より一層修行に励んで……い
や、自分をいじめるようになりました。

誰よりも強くなって、最強の騎士になって、かつての剣神エドガー
のように、今度は理不尽な権力を自分の手で斬ってやるんだと、そう
言って」

「ほう」

中々に根性があるな。

まあ、ただ物理的に強くなれば権力を倒せると思っっている辺りは、
まだまだ甘い子供の考えだが、そのガッツは称賛する。

「僕は、無茶な修行を続けるシオンを止める事ができなかった。たと
え、復讐に近い動機でも、何か目標を持って、前を向いていてほしかっ
た。何もさせずに、ただ落ち込ませるよりはと思った。

……いえ、言い訳ですね。

僕の騎士という立場が、あの子の人生を歪めてしまった。

それだけじゃない。妻が死んだ後、もつとシオンに寄り添っていれ
ば。もつと、親子二人で支え合えていれば。

そう後悔しているうちに、あの子にどう接すればいいのか、わからなくなってしまう。あの子がああなってしまったのは、全て、僕の責任です」

ヨハンさんはそうして、また自嘲するように笑った。

「いや、さすがにそれは自虐が過ぎると思うぞ……」

「そうね。子育てに悩む気持ちはわかりますけど、自分を責め過ぎるのもどうかと思いますよ」

たしかに、ヨハンさんにも少しは責任があったとは思いますが、一番悪いのは、どう考えても流行り病とクソ貴族だろう。

ヨハンさんが、ここまで気に病む必要はない。

まあ、気持ちはわからんでもないが……。

こういう、どうにもならない時に自分を責めてしまうのは、人間のサガだしな。

「やごと」

じゃあ、行くか。

私は、歩いてこの場を去る。

「リンネ？ どこに行くの？」

「シオンを探してくる。まだ約束を果たしてもらってない」

「……そう。行ってらっしゃい」

母は何も言わずに送り出してくれた。

やはり母も、このまま何もせずに帰るのはどうかと思っているのだろう。

シオンは、このまま放置すれば確実に悪化すると、私の直感が叫んでいる。

なら、何でもいいから話をするべきだ。

やらずに後悔するより、やって後悔しろという言葉もある。

「ちよ!? リンネちゃん!? あの、今は一人にしてあげてほしいんですけど……」

「頭なら、ヨハンさんが長々と話してる間に冷えてるだろう。なあに大丈夫だ。軽く話してくるだけだから。では、行ってくる！」

「ちよ……待っ……!?」

止めようとするヨハンさんを無視して走り出す。
ヨハンさんは追いかけては来なかった。
母が説得してくれたのかもしれない。



そうして、シオンを探して村の中を走り回る事しばらく。
昨日シオンと出会った大樹の下で、ようやく迷える少年を発見した。

また素振りをしている。

疲れているだろうに、本当によくやる。

「よ、探したぞ、シオン」

「……………」

声をかけたが、シオンは無視して素振りを続けた。

私は、必殺の切り札を使った。

「約束。私が勝ったら普通に話をしろ」

「……………」何しに来た。負け犬を笑いに来たのか」

シオンは滅茶苦茶嫌そうに、それでも約束を守って返事をした。
うむ。

それでいい。

良い子だ。

「いや、笑いに来た訳じゃないぞ。少し話をしに来ただけだよ
よっこらしよっと。

私は大樹に背中を預け、胡座をかいて座った。

「さて、お前が強さに固執する理由はヨハンさんに聞いた」

「……………父さん。余計な事を」

シオンの顔がますます不機嫌そうに歪む。

まあ、ヨハンさんも苦しんで、誰かに吐き出したかったんだろう。
許してやれい。

「で、そんなお前に改めてアドバイスだ。……もう少し周りを省みてみる。強さだけで騎士は務まらないぞ」

「お前に何がわかる」

「わかるさ。他の誰よりもよくわかる」

当然だろう。

何故なら、

「――私は、剣神エドガーの生まれ変わりだからな」

両親にしか明かしていない、私のトップシークレットを教えてやった。

同門のよしみ、そして同情からの特別処置だ。

「……ふざけてるのか?」

「失礼な。大真面目だ」

「なら、父さんにでも見てもらえ。あの人は治癒の魔法が使える」

「頭の痛い奴とでも言うつもりか!」

まったく、失礼極まりない奴だ!

真実を話して損した!

「ゴホンッ! で、そんな元剣神からのアドバイスだ。ありがたく聞いておけ」

「治癒の魔法は頭にかけてもらえよ」

「いいから、黙って聞け!」

話の腰を折るな!

「……私は、昔から頭を使うのが苦手だった。強さだけが取り柄だった。今のままだと、お前は昔の私みたいになるだろう」

「……………」

「だが、私とお前で決定的に違う事がいくつかある」

私は、人生の後輩に諭すように言った。

「今だけは、友達(仮)としてではなく、元剣神として、人生の先輩として語る。」

「まず、お前と違って、私には到らぬところを補ってくれる仲間がいた。支えてくれる奴がいた」

同僚、上司、部下、そして嫁だ。

本当に良い奴らだった。

「それに私は元剣神。そして救国の英雄だ。ちよつとやそつとでは揺るがないだけの立場と実績があった」

ちよつと騎士としての仕事をサボっても、貴族としての仕事を放り投げて、決してクビにはならなかったしな。

「だが、お前にはそれが両方ともない。強さだけだ。そして、強さだけでは剣神エドガーのようにはなれない。お前が憎む権力に打ち勝つ事はできない」

「……………なら、どうすればいいんだ」

ポツリと、小さな声で呟かれた言葉。

まるでヨハンさんのような、弱々しい声だった。

「努力すれば、強くなれば、エドガーみたいになれると思ってた。でも、違うんだろう？」

それに、俺はあんなに努力したのに、年下の女一人に勝てなかった。お前に負けた。俺は、弱い。……………どうすればいいんだよ」

シオンは……………泣いていた。

涙を流しながら、剣を振り続けていた。

……………案外、これがこいつの素顔なのかもしれない。

がむしやらに努力して、目標に向かつていないと自分を保っていられない、強がっていただけの子供。

自分の強さという寄る辺よるべをへし折られて弱気になった、ヨハンさんに似て精神の弱い、ただの子供。

天才なんかじゃない、ただの悩める少年。

「だから何度も言ってるだろう。憧れの剣神様のアドバイスはちゃんと聞け」

そんなシオンに、私は手を差し伸べる。

同門のよしみと同情、そして私自身のエゴの為に。

この国は、私と私の仲間達が命懸けで守り抜いた国だ。

だからこそ、そこに暮らす連中には、つまらない事で不幸になってほしくない。

できるなら、平和に、幸せに暮らしてほしい。

そっちの方が、守って良かったと思えるから。

その為に、私は世直しの旅（笑）とかやっていたのだから。

そんな、私の勝手な理屈だ。

偽善でしかない。

それでも、そんな偽善でも救えるものはあると、私は信じている。

「どうすればいいんだ、だったか？ 解決はできなくても、改善するのは意外と簡単な問題だぞ」

「……………どうすればいいんだよ？」

「何、本当に簡単な事だよ。まずは私と…………」

「あ……………」

「あ……………」

その時、私が悩める少年を救い出すという感動的なシーンに邪魔が入った。

突然聞こえてきた大声の方に顔を向けると、そこには案の定、見知った顔が。

「ベル…………」

「リンネ！ お前、こんなところで何してんだよ!?! 今日家の仕事を手伝うとか言って、俺の誘いを断ったくせに！

それに、そいつ昨日のいけすかねえ奴じゃねえか！ どういう事だ!?!」

「お前…………ホントに空気読め」

「何の話だよ!?!」

はぁ。

何故、こんな事になったのやら。

ん？

いや、待てよ。

これは…………むしろ、チャンスじゃないか？
よし。

「ベル。私はある人に正式に剣術を習う事にしたんだが、お前も一緒にどうだ？ その人に付いて行けば英雄になれるかもしれないぞ」

「詳しく」

「おい！ お前、何のつもりだ!?!」

ベルは一瞬で真剣な顔になり、今度はシオンが噛みついてきた。なに、簡単な話だ。

「シオン、さっきの話の続きだ。――まずは私と友達になれ。あと、このベルともな」

「はあ!?　なんでこいつと!?!」

ベルとシオンの声が見事に被った。

それが気に食わなかったのか、二人で睨み合いを始めた。

なんだ、意外と仲が良いじゃないか。

喧嘩する程、仲が良いというやつだろう。

「友達が出来れば、色々と変わるだろう」

友達を作る事が、周りを省みる事の第一歩だ!

そうすれば、本当に昔の私みたいになれるかもしれないぞ?

ついでに、こつちも大分ひねくれてるベルの矯正になれば、一石二鳥だ。

私は、未だに睨み合う二人を見て、これなら大丈夫そうだと満足し、とても晴れやかな気分です。

7 剣術教室

シオンとの勝負と、ヨハンさんへの弟子入りから数日後。本格的に開催されたヨハンさんの剣術教室は、やたらと賑やかな事になっていた。

「し、シオンに友達が……い！」

ヨハンさんは、そんな感じで感動しっぱなしだ。

涙まで流して喜んでいる。

息子に更正の兆しが見えたのが、そんなに嬉しいか。

ちなみに、そのお膳立てをしたのは私だ。

感謝してもいいんだぞ？

で、そんなヨハンさんの視線の先では、シオンが新しく出来た友達と遊んでいた。

「うおおおおおおお！」

「食らうっす！」

「チツ……い！」

「み、皆頑張れ……！」

正確には、シオンが新しく出来た友達と試合をしていた。

相手はベルとオスカーだ。

ラビが離れた所で応援している。

ベルを誘ったら、当たり前のように残りの二人も付いて来たのだ。

友達がいっぱいである。

「らあああああああ！」

「そいー！」

「くっ……い！」

そして、ベルとオスカーの二人は、意外にも天才シオンを相手に善戦していた。

二人がかりの上に、ハンデとしてシオンの両手足には重りが装着され、魔法の使用も禁止されているが、それにしても二人の方が優勢と
いうのは予想外だった。

特に、オスカーの動きが地味に良い。

力の限り暴れるベルを、後方から弓矢でサポートしている。
あいつの父親は、村の自警団にも入ってる狩人だからな。

親に教わって弓を覚えたと言っていた。

まあ、これは殺し合いではないのだから、当然、放たれる矢は木製であり、矢の先には布が何重にも巻かれて安全を確保している。

だが、当たれば普通に痛いだろう。

それに、緊張感を出す為、シオンはできる限り矢を避けるか、叩き落とさなければならぬルールになっているからな。

そして、ベルも、なんだかんだで数年に渡って私の遊び相手をしてきたせいで地味に強い。

決してシオンみたいな天才ではないが、私の見ていないところで努力していたのだろうか。

動き方に、どこか私の面影がある。

剣を教えてくれる相手などいなかったベルは、私の動きを真似る事で強くなろうとしたに違いない。

強者から技を吸収しようとするのは良い事だ。

「守ノ型・流！」

「おごっ!?!」

だが、それでもまだシオンには届いていないな。

シオンの使った技、騎士や兵士の使う王国剣術の型の一つ、相手の剣を受け流してカウンターを狙う技がベルの腹に直撃する。

そのまま、ベルは踞った。

「攻ノ型・飛脚！」

「あいたっ!?!」

そして、脚に力を籠めた特殊な歩方でオスカーとの距離を詰め、パークソンと頭を打って、こっちも沈めた。

二人は戦闘不能だ。

「それまで！ 勝者シオン！」

ヨハンさんが試合の終了を宣言し、頭と腹を抱えて踞る二人に駆け寄る。

「ヒール」

そして、二人に治癒魔法をかけた。

それだけで二人は完全復活だ。

やはり、治癒術師が一人いると便利だな。

「クツソオオオオ！ また負けた！」

「乙女の頭を叩くとは何事っすか！」

「……勝負での事だろうが」

キャンキャンと吠えるオスカーを、シオンがめんどくさそうにあしらう。

そのうち、ラビが駆け寄ってきて二人を宥めた。

あまり、効果はなかったがな。

しかし、そんなシオンも結構息が上がっている。

だが、満更でもなさそうな顔だ。

やはり友達と遊ぶのは楽しいか。

実に微笑ましいな。

思わず、ニヤニヤとした顔でシオンを見てしまう。

「……なんだよ」

「いや、別に」

シオンは不機嫌そうに、私から目を逸らした。

ひねくれ小僧め。

「では、皆疲れてきたみたいなので、今日の稽古はここまでにしますね」

「はーい」

「うむ」

「ああ」

ヨハンさんが、本日の剣術教室終了を宣言する。

そう、皆と言うように、実は私も結構疲れているのだ。

ヨハンさんとの試合稽古によって。

さすがは、元エリート騎士という事か。

ヨハンさんは、現時点の私よりも強かった。

ユーリやマグマと同じ、闘気使いの魔法剣士だ。

弱くなった私には良い練習相手だった。

まあ、負けるのは悔しかったから、意地で勝率六割にまで持っていったがな。

時には神速剣まで使った。

結果、神速剣は禁術に指定されてしまったが。

「さて、今日はこの後ちよつと特別な事をやろうと思ってます。少し待っていてくださいね」

そう言って、ヨハンさんは家の中に入って行った。

かと思ったら、一分もしないうちに戻って来た。

その手に青い水晶玉を持って。

……はて？

あの水晶玉、どつかで見た事があるような？

「お待たせしました」

「ヨハンさん、それなんだ？」

「ええ、これは魔法適性を見極める魔道具です。できるなら、皆に魔法も覚えてもらおうと思ひまして」

「おおー」

「グツジョブつす、ヨハンさん！」

「ああ、なるほど」

適性検査の魔道具だったか。

どうりで、どこかで見た事あると思つた。

「まずは、魔法について軽く説明しますね。

魔法とは、体内の魔力を使って発動する不思議な現象の事です。火を出したり、水を出したり、怪我を治したり、そういう事ができるようになります」

ヨハンさんは、魔法の基礎的な事から語り始めた。

まあ、私も自分が使えなかつたからって事で、かなりうる覚えだし、ちよつどいいかもしれない。

「そして、魔法を使えるかどうかは、魔法適性を持っているかどうかで決まります。火の適性を持っていれば火の魔法を。水の適性を持っていれば水の魔法を、といった感じに。

そして、この魔道具に手をかざすと、水晶が自分の持っている適性

の色に光るんです。

あ、ちなみに、僕は水の適性を持っていますよ。だから、今は青く光っています」

「へー！」

ヨハンさんの説明を聞いて、ベルとオスカーが目を輝かせる。

ラビも声こそ出さないが、興味津々なようで、ベル達と同じ目をしている。

冷静なのはシオンだけだ。

あいつは、既に魔法が使えるからな。

「なあなあ、最強の魔法って何なんだ！」

「最強の魔法ですか？ うーん、そうですね。やっぱり……」

「光と闇だろう」

ヨハンさんの言葉を遮って、私がベルの質問に答えた。

光と闇。

それは、前世における最強の敵が使ってきた魔法だ。

反吐が出るが、奴の力だけは本物だった。

「光と闇ですか。彼の剣神エドガーの宿敵、『魔帝』サタナエルが使ったとされる魔法ですね。たしかに、単純な戦闘能力という意味では、その二つが最強かもしれません」

「えー……でも、それ悪役の力だろ？ なんか思ってたのと違うぜ」

ベルが不満を漏らした。

まあ、気持ちは嫌ってくらいよくわかるが、これだけは言っておきたい。

「力は力だ。結局は使う奴次第だぞ」

「リンネちゃんの言う通りですね。それに、光と闇は相当に希少な属性です。片方だけでも、適性を持っているのは万人に一人と言われていますし、そんなに気にする必要はないですよ」

「……そっか。そうだな！」

ベルはあっさり切り替えた。

うむ。

素直でよろしい。

「では、話を戻しましょう。誰から測りますか？」

「もちろん、俺から……」

「いや、私がいくー！」

ベルを押し退けて、私はいの一番にヨハンさんから水晶を借りた。ヨハンさんの手から離れた水晶玉は青く光るのをやめ……透明になった。

くっ……やはり、こうなったか。

「……あの、その、これは適性なし……ですね。で、でも、適性を持っているのは五人に一人くらいの確率なので、気を落とさないでください！　そ、それに、リンネちゃんは闘気が使えるんですから！」

「励ますな、ヨハンさん。私は気にしていない」

私は前世でも魔法適性がなかったからな。

身体が変わっているから、もしかしてと思ったが、あまり期待はしていなかった。

それに、ヨハンさんの言う通り、私には闘気がある。

闘気は体を鍛える事によって後天的に獲得できる特殊な魔法適性という話もあるし、私は全然気にしていない。

「アハハ！　ダッセー……！」

「ダサイっす！」

「何だと！　お前らあああ！」

だが、とりあえず、笑いやがったベルとオスカーは締め上げておいた。

安心しろ。

ちゃんと手加減はしている。

存分に悶絶するがいい！

そんなすったもんだを終えて、今度はベルが測る事になった。

「さあ！　未来の英雄に魔法を授けろ！」

そんなアホくさい台詞と共に、ベルは水晶玉を天に掲げる。

果たしてその色は……透明であった。

「……適性なしですね」

「なんでだあああああああ!?!」

「ぷっ」

「アハハハハハ！」

「笑うなあああああああああ！」

暴れるベルを取り押さえる。

「どうだ、下手な事を言うと言分に返ってくるんだぞ！」

良い勉強になったな！」

「じゃあ、次はあたしっすね」

そして、次はオスカーの番。

オスカーが持った水晶玉は……緑色に光った。

「これは風の適性ですね。直接的な攻撃力も高く、索敵や移動補助なども行える良い魔法です。オスカーちゃんなら、矢に纏わせて使うというのもありですね」

「よっしやあ！ やったっす！」

「オスカーアアアア！ この裏切り者！」

「痛っ!? やめるっす、ベル！」

私は、暴れるベルを今回は止めなかった。

毎回止めるのは疲れるからな。

決してオスカーを憐んだ訳ではないとだけ言っておこう。

「では、最後はラビちゃんですね」

「えっと……私は、その……」

最後に残ったラビは尻込みしていた。

まあ、この水晶玉を渡された奴は、全員笑われるか、しばかれてるからな。

気弱なラビが尻込みするのもわかる。

「ラビ。減るもんじゃなし測っておけ。魔法は使えて困るもんじゃやない。それに、こんなチャンスは滅多にないぞ」

「う、うん。リンネちゃんがそう言うなら……」

うーむ……ラビはもう少し自主性を持った方が良いな。

まあ、まだ6歳だし、これから育んでいけばいいか。

そうして、ラビも両手で水晶玉を持った。

色は……青だな。

「ラビちゃんは、僕と同じ水の適性ですね。攻撃力は低いですが、鍛え方次第では治癒の魔法を覚える事ができます。ラビちゃんに向いていそうな魔法です」

「あ、あわわ……」

ラビは自分に魔法の才能があると言われて、なにやら目を回していた。

嬉しくないのか？

治癒術師は一人いると、本当に便利なんだぞ。

「ラアビィ……」

「ひうっ！」

だが、ここで嫉妬の化身がラビに標的を定めた。

ラビは、私の後ろに隠れてプルプルしている。

そこに飛びかかってきた嫉妬の化身を、私は容赦なく迎え撃った。

「えーと……それじゃあ、明日からは魔法の訓練も始めますから、よろしくお願ひします……ね」

「……はあ。父さん、誰も聞いてないぞ」

その後、ヨハンさんの家にはしばらく、ベルの悲鳴とオスカーの笑い声が響いた。

今日も平和である。

8 娘は天才

——ジャック視点

俺の名はジャック。

冒険者を引退し、美人な嫁と可愛い娘に囲まれて辺境で隠居暮らしを送る、人生の勝ち組である。

娘は、自分の事を剣神の生まれ変わりだと言ってしまふ、少し頭の痛い子に育ってしまったが、それも個性だ。

気にする事はない。

仮に、本当に剣神様の生まれ変わりだったとしても、かまうものか。あんなに可愛いのだから、誰の生まれ変わりだろうと関係ない。

あの子にパパと呼ばれる度に顔がニヤけてしまふ。

そんなリンネは、可愛い可愛い俺達の娘だ。

だが、そんな幸せな生活を送る俺にも、最近ちよつとした悩みがある。

事の始まりは、リンネが剣を習いたいと言い出した事。

俺は最初、反対だった。

剣術とは、言うまでもなく戦う為の力だ。

そして、俺は元冒険者として、戦う事による悲劇を腐る程に見てきた。

リンネはやたらと男勝りなところがあるが、女の子だ。

なら、そんな血生臭い世界になんて踏み込まずに、できるだけ安全な場所で健やかに育ってほしい。

そう思っていた。

……だが、結局俺はリンネのおねだりに負けた。

あの上目遣いは反則だろう。

何でも言う事を聞いてあげなくなる。

そうして迎えた稽古初日。

俺は、人生で初めて剣を持った娘にボコボコにされた。ありえないと思った。

俺はこれでも、元A級冒険者だ。

場合によつては、領主や国からの依頼を受ける事もある、トップクラスの冒険者だった。

いくら引退して衰えたとはいえ、子供があつさりと打倒できる相手ではない。

明らかに常軌を逸している。

俺が冒険者人生の全てを費やしても習得できなかった闘気まで使
いこなしていたし、間違いない。

ウチの娘は天才だったのだ！

……しかし、俺を倒したリンネは、いきなり自分が剣神の生まれ変わ
りだったんだとか、変な事を言い出してしまった。

たしかに、そう言われても納得できるだけの強さではあつたが……
おそらく、想像以上の自分の力に酔って、痛い妄想をしてしまったの
だろう。

あの子は、エドガーの絵本を読むのが大好きだったからな。

もつと小さい頃に、よく読み聞かせてやったものだ。

まあ、それはいい。

良くはないが、悩む程の事でもない。

せいぜい、俺の父としての威厳が失墜し、リンネに十年後くらいに
悶絶するだろう黒歴史が生まれたただけだ。

……意外と大問題じゃないか。

もう少し真剣に考えるべきかもしれないな。

話が逸れた。

俺が悩んでいるのは、その事ではない。

問題は、リンネの師匠という立場を、あの優男に取られてしまった
事だ！

だが、悔しい事に、奴は左遷されたとはいえ、元エリート騎士。

天才のリンネを教えるのなら、たしかに、それくらいの実力は必要
だろう。

誠に遺憾ではあるが、奴の強さだけは認めている。

しかし！

奴は腹が立つ程のイケメンであり、無駄に色気のある野郎だ。

もし万が一、億が一、リンネが奴に惚れてしまったらと思うと……
いかん！ いかんぞ！ あんな奴にリンネは渡さん！ ロリコンは死ねえい！

しかも、最近ではリンダまで奴に好意的だ。

いや、決して浮気を疑っている訳ではないし、実際、リンダも「ヨハンさんも色々と苦労してるのよ」と言っているだけだ。

その感情は、好意というよりは共感か何かだろう。

奴にも息子がいるという話だし、子育ての苦労話か何かで意気投合したのかもしれない。

だが、最愛の妻と娘の気が他の男に向いているというのは、やはりおもしろくない。

まあ、百万歩譲って、リンダの方はまだいいだろう。

彼女は奴を気にかけているだけだ。

惚れている訳じゃない。

リンダの愛は俺だけのものだ。

そして、俺の愛も彼女だけのものだ。

ベッドの上では毎晩のように、情熱的な夜を過ごしているしな。

だが、リンネの方は駄目だ！

何も惚れた腫れたの話だけではなく、父である俺を差し置いて、リンネの尊敬だとか、その他諸々の好意的な感情が奴に向いてしまうかもしれないというのが、純粹に悔しい。

俺だって、娘に良いところ見せたい。

あのクソイケメンよりも尊敬されて、「パパ凄いい！ カッコいい！」
と言ってもらいたい。

ただ、それだけなんだ。

「しかし、具体的にどうするかだな」

俺は今の仕事である家畜の世話をしながら考える。

この牧場仕事は、リンダと結婚した時に彼女の両親から受け継いだものだ。

同時に、我が家の収入源でもある。

ここで出来た牛乳やチーズなんかを、ご近所に渡して、他の物と物々交換するのが、この村での生き方だ。

それに、昔の伝つてで近くの街の冒険者ギルド（に併設されている酒場）に定期的に卸してもいる。

どんなに悩んでいる時でも、サボる訳にはいかない。

「……いっそ、これでいくか？」

リンネに良いところを見せるぞ計画。

それをこの牧場仕事……ではなく、仕入れ先の冒険者ギルドで実行してはどうかと考える。

リンネは確かに強いが、冒険者としての経験はない。

そこで、リンネと一緒に冒険者ギルドで軽めの依頼を受け、冒険者としての技術で俺が良いところを見せる、というのはどうだ？

「いや、でもなあ……」

それだと、リンネが危険に晒される。

あの子の強さなら滅多な事は起こらないとは思うが、それでも何が起こるか分からないのが冒険者の仕事だ。

依頼を楽観視して死んでいった連中は、あまりにも多い。

俺だって、何か少し違えば、とつくの昔に死んでいた。

それに、リンネが冒険者に興味を持ってしまうのも危ない。

たしかに、冒険者という仕事は楽しいだろう。

苦痛と絶望に満ちてもいるが、同時に夢と希望にも満ちている。

俺にとっても、パーティーの仲間達と共に大冒険を繰り広げた日々の思い出は宝物だ。

だが、親としては、子供に冒険者なんて危険な仕事は選んでほしくない。

もつとも、俺は「英雄になるんだ！」と息巻いて実家を飛び出した口だから、あまり強くは言えないが……。

そして、リンネはそんな俺の娘だ。

本気で冒険者になりたいと思ったなら、俺と同じように、親の制止を振り切っても行く可能性は高いかもしれない。

あの子の友達には、昔の俺にそっくりなヤンチャ坊主もいるしな。

そいつが冒険者になると言い出して、リンネもそれに付いて行ってしまうという未来も考えられる。

「……だったら、俺が何かしても結果は同じか？」

それに、昔こんな言葉を聞いた事がある。

『子供は親の思い通りには育たない』

リンネには、安全な世界で健やかに育ってほしい。

だが、それは俺の望みだ。

むしろ、あの子の並外れた戦いの才能の事を考えれば、冒険者や騎士を目指し、その才能を活かせる道に進む事こそが幸せなのかもしれない。

結局、あの子の生き方は、あの子自身が決める。

なら、俺にできる事なんて、リンネに少しでも広い世界を見せてやる事と、自分の経験を伝えてやる事くらいなのかもしれないな。

その為に、一度冒険者ギルドに、いや、街に連れて行ってやるというのも悪くないか。

「なんてな」

柄にもなく真面目ぶって考えてみたが、結局は、リンネに良いところを見せるぞ計画の建前みたいな事を考えてしまった。

まあ、なんにせよ、街に連れて行くにしても、冒険者の真似事をさせてみるにしても、あの子がもう少し大きくなってからの話だ。

それに、俺一人で決める事でもない。

今夜あたり、リンダにも相談してみよう。

そうして俺は、諸々の思考に一旦区切りをつけ、仕事へと意識を戻した。

9 最寄りの街トリス

前世の記憶を思い出してから二年程が経ち、私は8歳になった。少しは身体も成長し、最近では神速剣に頼らずともヨハンさんに勝ち越せるようになってきた。

もつとも、お互いに本気でとなると話が変わってくるだろうが。

ヨハンさんは、騎士の正式装備である魔剣も抜いていないしな。

そして、私以外のメンツも成長が著しい。

シオンは相変わらずの天才だし。

ベルは正式な師匠の下で基礎を覚えたおかげか、魔法禁止ルールならば、一対一の試合で、たまにシオンに勝てる程の急成長を遂げた。オスカーとラビも、それぞれ魔法を習得し、なんだかんだで剣術の稽古にも強制参加させたせいで、動きが格段に良くなっている。

今や、全員でかかって来られると、私ですら苦戦するレベルだ。

あくまでも、闘気禁止ルールでの話だが。

……いや、目標のある私とシオンはともかく、他の連中はこんなに強くなってどうする気だ？

ベルに関しては、ある日突然「俺は英雄になるんだ！」とか言い出して冒険者にもなる可能性が高いと睨んでいるが、オスカーとラビはどうするんだろうか？

村の自警団にでも入るのか、それとも、ベルかシオンに付いて行くのか。

まあ、何でもいいか。

変に力に溺れたりしない限りは、いざという時に身を守る力というのはあった方が良く。

人生、何が起こるか分からない。

平和に暮らしていても、ある日突然、悪の帝国が侵略してくる事だってあるからな。

と、そんな感じで日々を過ごしていた時、父が興味深い話を持ってきた。

「街？」

「ああ。パパがよく街に行ってるのは知ってるだろう？ リンネも大きくなってきたし、一度、パパと一緒に村の外に出てみないか？」
ほう。

つまり、お出かけか。

うむ。

断る理由はないな。

私も、いつかは村の外に出ようと思っていた。

今まではきっかけがなかったが、そのうち、弟子どもものいる王都まで行くつもりだしな。

今回のお出かけが、そのきっかけになるのなら望むところだ。

それに、親子でお出かけというのは、実に楽しそうではないか！

「うん！ 私も行く！」

「よし！ じゃあ、二日後くらいに出発だ！」

「おー！」

という事で、父と共に街に行く事が決定した。

私が了承すると、父はわかりやすいくらいに、はしゃいでいた。

そんなに娘との外出が楽しみか。

そんな父を、母が生暖かい目で見ていたのが印象的だった。

そして、その話を剣術教室でしたところ、

「お前だけズルいぞー！ 俺達も連れてけー！」

「そうっすよー！」

案の定、ベルとオスカーにブーイングを食らった。

話すんじゃないかったかもしれない。

いや、どうせすぐにバレる話か。

「お出かけですか。良いですねえ。僕は仕事柄、この村を離れられないので、少し羨ましいです」

一方のヨハンさんは、クソ真面目だな。

村の防衛は自警団だけで十分なんだし、左遷された身なんだから、ちよつとくらいサボってもバチは当たらないだろうに。

私なんて、しよつちゆう仕事を放り出して、遊び歩いてたぞ。

「あ！ そうだ。リンネちゃん、もしよかったら、シオンも一緒に連れて行ってくれないか？」

「は？ 何で俺が……」

「シオン。騎士になりたいなら、少しでも外の世界を見る事も大事ですよ」

「……………」

お、シオンがヨハンさんに言い負かされた。

それと、この気安い会話を見てわかるように、二人の親子関係は、この二年でそこそこ改善している。

これも、賑やかし組が入って剣術教室の空気が明るくなったのと、友達が出来て、シオンが若干丸くなったおかげだ。

つまり、私のおかげだな。

称賛してくれてもいいんだぞ？

で、他の連中も連れて行きたいという話を父にしたところ、保護者の許可が出たらオツケーという事になった。

シオンは、保護者であるヨハンさんが、むしろ推奨してるので同行決定。

ベルとオスカーも、割りとすんなり許可が下りた。

唯一、ラビのところが少し難航したらしいが、意外にもラビ自身の強い希望によって許可されたそう。

なんでも、一人で置いてきぼりにされるのは嫌だったのだからか。

納得の理由だ。

ちなみに、それを聞いた父は少し落ち込んでいた。

もしかしたら、親子水入らずという状況を楽しみにしていたのかもしれない。

すまん事をした。

今度、何か埋め合わせをしよう。



そして二日後。

私達は最寄りの街、トリスに向かって出発した。

徒歩だと三日はかかる距離だが、我が家においてロビンソンの次に優秀なペットである、馬のチャールズが引く荷車に乗り込む事によって、移動時間を半日に短縮。

朝一で出発した為、その日の夕方にはトリスに到着する事ができた。

よくやった、チャールズ。

そして、街の門で通行税を支払……う事なく、そのまま門を通過した。

これは、父の冒険者という立場のおかげだ。

冒険者は、基本的にこの手の税金が免除され、ランクによっては色々な恩恵を受ける事ができる。

父は引退したとはいえ、A級冒険者としての資格を失った訳ではない。

身分証明である冒険者カードを見せれば、街の門くらいは顔パスという訳だ。

むしろ、門番達が「いつも、お疲れ様です」って感じで頭を下げていた。

父は、よくこの街に通ってるからな。

門番とは顔見知りなのだろう。

で、街の中を荷車でガタゴト進み、配達先である酒場にたどり着いた。

街の中心にある、一際大きな建物だ。

ヨハンさんの家よりも、余裕でデカイ。

その扉は、来る者拒まずというかのように、開け放たれている。

「おおー、これが冒険者ギルドか！」

「うっひゃあ……でっかい建物っす」

「す、凄いね……」

そんな酒場ごと、冒険者ギルドを見上げて、三人組が感嘆の声をもらす。

よく見れば、シオンですら若干目が輝いていた。

やはり、子供にとって冒険者ギルドとはテンションが上がる場所という事か。

私？

私は前世でよく（酒場として）利用していたから、そんなでもないな。

「じゃあ、おじさんは裏手に行って配達を済ませてくるから。中でおとなしく待ってるんだよ？」

「はいーいー！」

「はい……」

「わかってます」

父の言葉に、私とベルとオスカーが元気に返事をし、ラビとシオンは控えめながらも、ちゃんと頷いた。

そして、父は荷車を引くチャールズと共に、建物の裏手へと消えて行った。

私達は、それを見届ける前に巨大な扉を潜って、ギルドの中に入る。と同時に、ベルとオスカーが受付目掛けてダッシュした。

「あ?! お前ら!」

こいつら、事前に打ち合わせでもしてやがったな!

一糸乱れぬ同時スタートだったぞ!

そんな二人の後を、私は必死に追いかける。

床を壊すとマズイから、闘気は封印だ。

「……はあ」

「お、置いてかないでえ!」

走る私達を、シオンは呆れながら、ラビは置いていかれない為に、追いかけてくる。

しかし、この二年でやたらと身体能力の上がった二人は、私達が追い付く前に空いている受付へと到達してしまった。

「冒険者登録お願いします！」

「え、えーつと……」

そして、受付嬢を困らせていた。

何やってんだ、本当に……。

「お前ら……」

「冒険者になりたいだど？ やめとけ坊主ども」

だが、私が声をかける前に、一人の男がベル達に近づいて話しかけた。

眼帯を付けた中年の男だ。

手には酒の入ったコップを持っている。

酔っぱらいである。

「なんだよ、おっさん！ 俺達の邪魔するな！」

「そうっすよ！」

「黙れ！ たしかに冒険者になるのに年齢は関係ねえがな！ それにしたってお前らは若すぎる！ せめて、あと五年してから出直して来い！」

この酔っぱらい……酔っぱらいのくせに、言ってる事はただの子供を心配するおっさんだな。

案外、悪い奴じゃないのかもしれない。

「寝ろ」

!?

しかし、その一言を呟いた瞬間、酔っぱらいの雰囲気ガラリと変わった。

眼光が鋭くなり、酒の入ったコップを受付に置き、凄まじい速度で動き出す。

その動きで、その殺気で、二人を攻撃しようとしているのがわかった。

私は反射的に闘気を解放し、床をおもいつき踏み込んで、二人の前に一瞬で移動した。

「劣化神速拳！」

「ぬおお！」

そして、手加減抜ききの拳を酔っぱらいに叩き込んだ。

未だに、一日数回しか使えない神速剣ではないが、それでも無理なく扱える範囲では最高出力の闘気を纏った一撃。

それを食らった酔っぱらいは、凄まじい勢いで吹っ飛んで行き、ギルドの壁にめり込んだ。

……やっちまったな。

「ド、ドレイクさん!？」

「あいたたた……こいつは驚いた。嬢ちゃん、いったい何者だよ?」

だが、酔っぱらいは割りりと平気な感じでめり込んだ壁から出てきた。

ほぼ無傷かい。

さっきの攻撃は咄嗟に左腕でガードされていた。

そんな事ができるこの酔っぱらいこそ、ただ者じゃないだろう。

まあ、その左腕が、魔道具の義手だったのには、少し驚いたが。

マントで隠れて見えなかった。

「そう言うあんたこそ何者だ?」

「俺か? 俺はな……」

「ああ……!？」

酔っぱらいの声を、ベルの大声が遮った。

いきなり、どうした?

「その左腕の義手! あんた、もしかして、あのS級冒険者『隻腕』のドレイク!？」

「おっと。そっちの坊主は俺を知ってるみたいだな」

隻腕のドレイク?

知らない名前だ。

だが、ベルが知ってるという事は、たまーに村に立ち寄る吟遊詩人か何かから聞いたんだろう。

つまり、そこそこの有名人って訳だ。

にしても、

「なるほど、S級冒険者か。どうりで」

強い訳だ。

S級冒険者とは、上位の騎士にすら匹敵するか上回るとまで言われる、冒険者の最高位。

国内に僅か数人しか存在しない、戦闘と探索のエキスパートだ。そして、この酔っぱらいは、おそらく現役のS級冒険者。

下手したら、ヨハンさんや今の私よりも強いかもしれない。

流れでぶん殴っちまったが、ヤバイ奴に喧嘩を売ってしまった。さて、どうするか。

「で、そんな俺をぶっ飛ばしてくれた嬢ちゃんは何者なん……」

「ドレイクウウ……!」

しかし、そんな強者の後ろに、いつの間にか誰かが回り込んでいた。

その誰かは酔っぱらいの肩に手を乗せ、地の底から響くような怨嗟の声を出している。

酔っぱらいの肩がビクツと震えた。

「お前、何、ウチの娘に殺気ぶつけてんの？ 死にたいの？ 俺に引導を渡してほしいの？」

「じゃ、ジャック……!?! ひ、久しぶりじゃねえか。あ、あの嬢ちゃん、お前の娘だったのか……」

「元パーティーメンバーのよしみだ。言い訳くらいは聞いてやる。早く話せ」

「うっ……!」

その人物とは、何を隠そう父であった。

いつの間にか配達を終えて、こっちに來ていたらしい。

そして、そんな父の飛びつ切りの殺気に当てられて、完全に素面に戻った酔っぱらい改め、ドレイク。

戦闘力なら父を遙かに超えている筈なのに、何故かおもいつきり怯えていた。

どうも、昔の知り合いみたいだけど、それを差し引いても、今の父からは抗い難いオーラを感じる。

怒った時の母と同じオーラだ。

初めて、父を怖いと感じた。

「い、いや、俺は若すぎる坊主達が、無謀にも冒険者登録しようとして

「だから、止めたただけだ！」

「本当にそれだけか？」

「……あー、その、俺も酔っぱらってたからな……ちよつとイラついて手が出ちまったというか、なんというか……」

「なるほど。歯あ食いしばれ」

「ちよ、待っ……」

父の渾身の一撃が、ドレイクの顔面に突き刺さった。

殺気に吞まれて防御できなかつたのか、それをもろに食らつたドレイクは、またも吹き飛んで、さつきとは反対側の壁にめり込んだ。

ギルド内は、何故か拍手喝采の嵐に包まれる。

酒と喧嘩は、酔っぱらいどものテンションを上げるのだ。

ギルド職員は困り顔をしている。

そして、私達は終始呆然としながら、その一部始終を見ていた。

その後、冷静になった父は、おとなしく待っているという言葉を見せつけた。ベルとオスカーを叱り、

ついでに、正当防衛とはいえ暴力を振るつた私に、軽くお説教をした。

だが、結局は友達を守ろうとしたという事で褒められた。

やはり、父は甘い。

結局、ベルとオスカーの冒険者登録は、保護者の許可がなければダメだという事で却下され、

その日は、おとなしく宿屋に泊まって、翌日に街を一通り見て回ってから村に帰るといふ事になった。

ちなみに、私と父が壊した壁と床は、子供に手を上げようとした酔っぱらいが全部悪いという事になり、修理代は全額ドレイクが支払うそうさ。

本人曰く、軽く気を失わせるだけのつもりだったとの事だが、減刑はされなかった。

なんだか、少し哀れだ。

ただ、——なんだかんだで私の為に父が怒ってくれたのは嬉しかった。

た。

親の愛情を感じたな。

そう考えれば、あの時の父は少しだけカッコ良かったような気がする。

帰りの荷車の上で、それを素直に父に伝えると、

父はとても晴れやかな顔で、デレデレと笑ったのだった。

10 冒険者登録試験

初めて街へ行った日から一ヶ月後。

私達は再び、件の街トリスくだんに向かっていた。

メンバーは前回と全く同じだ。

しかし、前回とは目的が異なる。

今回の目的、それは、——私達の冒険者登録である。



前回のお出かけが終わった後、その結果に不満を漏らした奴が二人程いた。

言うまでもなく、ベルとオスカーだ。

問い詰めたところ、やはり二人は共謀していたらしく、親の目を盗んで冒険者になるのが前回街に行った目的だったそうだ。

その時に二人の吐いた台詞が、これである。

「登録さえしちまえば、こっちのもんだと思った」

「反省はしてるけど、後悔はしてないっす」

馬鹿じゃないのか？

あまり頭が良い方ではないと自覚している私ですら、そう思った。

あんな考えなしの行動で成功すると思っていた辺り、所詮は子供の考える事と言うべきか。

呆れてものも言えない。

だが、しかし。

馬鹿でも情熱だけは本物のようで、二人は冒険者になる事を決して諦めなかった。

前回の失敗を活かし、まずは親の説得を目指したのだ。

最初からそうしろという話である。

……というか、ベルはともかくとして、オスカーにそこまでの冒険

者にかける情熱があつたとは驚きだった。

気になつて本人に理由を聞いてみたところ、

「んー、やっぱりベルと一緒に馬鹿やってるのが一番楽しいんすよ！」と返つてきた。

ああ。つまり、こいつは別に冒険者になりたい訳ではなく、ベルに付いて行きたいだけなのかと納得した。

何はともあれ、二人は割りと真剣に冒険者としての将来を考えている訳だ。

しかし、これに焦つたのが一人いた。
ラビだ。

あの子は本当に友達に置いていかれるというのが怖いようで、二人が冒険者になるなら、自分も付いて行くと言い出した。

当然、ラビの両親は大反対。

それはそうだろう。

あんな気弱なラビが冒険者になりたいとか言い出したら、私でも止める。

というか、実際止めた。

だが、ラビは珍しく自分の意思を押し通し、この一ヶ月で「まあ、とりあえず一回くらいなら」という曖昧な答えではあるものの、両親の許可をぶんどつてきた。

それを満面の笑みで報告された時は仰天したものだ。

絶対に、途中で言いくるめられて諦めると思つてたぞ。

そして、ベルとオスカアの両親も、二人の冒険者登録に許可を出した。

どうも、こつちは割りとおつさり許可が出たらしく、二人は肩透かしを食らつて微妙な顔をしていた。

聞いた話によると、二人とも「自分の好きな道に進んだら良い」と言われたそうだ。

だから、最初から親に相談しておけと言つたんだ。

かくして、私達は、晴れて全員が親の許可を得て、冒険者になる事が決定した。

そう、全員と言うように、その中には私とシオンも入っている。私は、いつか行く（というか、定期的に通うつもりでいる）王都への通行証代わりに冒険者資格を取る事を決めた。父がやんわりと反対していたが、母は賛成してくれたし、その父も強くは言わなかったなので、すんなりと許可は貰えた。シオンは、騎士になる為の実績を作るべく、まずは冒険者になるのも悪くはない、との事。

まあ、実際は、シオンが一人だけ仲間外れになる事を危惧したヨハンさんに、上手い事言いくるめられた結果だけだな。何にせよ、そんな感じの経緯で、私達は再び街に行く事になった訳だ。



前回と同じく、チャールズの引く荷車と共に、私達は冒険者ギルドへと到着した。

今回も父の配達に同行するという形で来たからな。

必然的にそうなる。

「じゃあ、おじさんは配達を済ませて来るから。今度こそおとなしく待ってるんだぞ。特にその二人」

「わ、わかってるぜ」

「了解っす」

父は、割りとしっかりしてる方である私とシオンに、「頼んだぞ」と目線で訴えてから、チャールズと一緒にギルドの裏手に消えて行った。

そして、私達は再びギルドの中へ。

今回は、二人が暴走してもいいように、即座に首根っこを掴める位置に立つ。

しかし、前回ドレイクにしばかれかけたのが効いたのか、意外にも

二人はおとなしかった。

「お？　よう、嬢ちゃん達じゃねえか」

そう言つて声をかけてくる、左腕に義手を装着した中年冒険者が一人。

「ドレイク」

「呼び捨てかよ。まあ、元仲間の娘だし、別にいいけどな。なんなら、気安くドレイクおじちゃんとか呼んでくれてもいいんだぜ？」

「ドレイクは、いつもここに居るのか？」

「無視かよ。まあ、いい。俺はしばらくこの街を拠点にしてるだけだ。少ししたら、また違う場所へ行くさ。一ヶ所に根は張らないタイプなんでね」

根無し草タイプか。

さすらいのなんちゃらというやつだ。

「近くに来たからジャックの顔でも拝みに行こうかと思つてたんだがな……とんだ再会になつちまつたぜ。あのパンチで歯が折れて、治療術師の世話になつたしな」

「親の前で娘に手を出そうとするのが悪い」

「誤解を招く言い方すんな！　まるで俺がロリコンみてえじゃねえか！」

「まつたく」と呟いて、ドレイクは話題を変えた。

「で、嬢ちゃん達は何しに来たんだ？　また冒険者登録でもしに来たか」

「そうだぞ」

「……正直に言うのと止めたいところだな。だが、前の一件で嬢ちゃんの強さはわかつてる。その歳にしちや異常な強さだ。十分に冒険者としてやっていけるだろう。」

だから、嬢ちゃんの事は止めねえ」

む？　少し含みのある言い方だな。

「だが、連れの坊主どもは別だ。悪い事は言わん。家に帰れ。半端な実力と覚悟で冒険者になつても、地獄を見るだけだ」

そう言つてドレイクは、真剣な顔で、しかも少し殺気を籠めて、脅

かすようにベル達を見た。

その迫力に、ベル達が後退る。

だが、

「ほう」

ドレイクが感心したような声を出した。

ベル達は確かに後退ったが、——それでも、強い視線でドレイクを睨み返していた。

「俺は冒険者になる！　そして、いつか英雄になるんだ！　こんな所で立ち止まってられるか！」

「ハッ！　威勢だけは良いじゃねえか」

ベルが吠える。

オスカーはちよつと呑まれていたが、ベルの言葉を聞いて持ち直した。

ラビは完全に怯えているものの、逃げてはいない。

シオンにいたっては、最初からビビっていなかった。

いつの間に、こんなに強くなつたんだろうか。

「だったら、俺が試してやろう。お前らが冒険者に相応しいかどうかをな。

冒険者になるにも試験つてもんがあつてな。今回は、俺がその試験官をしてやる。冒険者になりたきや、——この俺を認めさせてみる」

そう言い残して、ドレイクは去って行った。

そして、その足で受付に足を運んだ。

試験官をやる為の交渉でもしているんだろう。

お？　なにやら、受付嬢に怒られとる。

どうやら、交渉は難航しているようだ。

そんなドレイクから目を離し、ベル達に話しかける。

「だそうだが、お前らはどうする？」

「決まってるだろ！　受けて立つぜ！」

「おう！　やってやるっす！」

「が、頑張る……！」

「逃げる気はない」

好戦的だな。

まあ、このくらい強気の方が、冒険者には向いているか。
この分なら、まあ、大丈夫だろう。

その後、戻って来た父に「また騒動になったのか……」と呆れられながらも、冒険者試験の受付を済ませた。

本来ならギルドの試験官が監督するものなのだが、ドレイクの我が儘によって、今回は特例扱いとなったらしい。

S級冒険者という立場の成せる技だな。

ただ、それはベル達四人に対しての話であって、私だけは通常の試験を受ける事になった。

「お待たせしました。それでは、リンネさん。こちらへどうぞ」

「うむ。では、行って来る！」

「気をつけるんだぞ、リンネ！」

心配性な父に見送られ、私は一足先に試験会場であるギルドの中庭、訓練施設のような場所へと赴いた。

ちなみに、父達は見学ができる位置にいるから、大して離れていない。

そして、そこにいた試験官と思われるギルド職員から説明を受けた。

「それでは、これより冒険者登録試験を始めます。

試験の内容はいたって簡単。あなたには、これから私が用意する相手と戦っていただきます。

冒険者になるには、最低限、己の身を守るだけの戦闘力を持つ事が必須条件。それ故の試験内容です。

わかりましたか？」

「うむ。わかってている」

私とて馬鹿ではない。

そんな子供に言い聞かせるように話さなくても理解できるから安心せい。

「結構。では、対戦相手を用意しましょう。——クリエイト・ゴーレム

！」

「ほう」

試験官が地面に手をついて魔法を行使した瞬間、訓練場の地面が盛り上がり、一体の土人形が出来上がった。

クリエイト・ゴーレムか。

そこそこ珍しい魔法を見たな。

この魔法は、その名の通り、ゴーレムという土で出来た人形を作り出す、土の中級魔法。

だが、作るのにも動かすのにも魔力を消費し、しかもゴーレム自体がそんなに強くないって事で、使い勝手が悪く人気のない魔法だ。

極端な話、ゴーレムを作って殴るくらいなら、岩の弾丸でも作って発射した方がよっぽど手っ取り早くて安上がりな訳だな。

だが、たしかに、こういう試験の場とかでは結構便利な魔法かもしれない。

「それでは始めますが、準備はいいですか？」

「無論だ」

「よろしい。では、始め！」

試験官が開始を宣言した瞬間、私は地面を蹴ってゴーレムに接近し、速攻を仕掛けた。

全速力ではない。

全力を出すまでもない。

だが、それでも並みの人間では反応できない超スピードである事に変わりはない。

「よっ」

そして、その速度のまま突撃し、すれ違いざまに訓練用の木剣を一閃。

開始1秒でゴーレムを真っ二つにしてやった。

瞬殺。

一拍遅れて、縦に裂けたゴーレムが、ただの土塊へと戻っていく。

「んなっ!？」

それを見て試験官が絶句した。

事にあっけなかったが、これで私は合格という事でいいのか？
試験官に呼び掛けて確かめてみる。

「おーい」

「ハッ!? 失礼、呆然としていました」

「コホン、と咳払いした後、試験官は正気に戻って話を続けた。

「これにて試験を終了します。当然、あなたは合格です。おめでとう
ございます」

「うむ」

こうして、私は新米の駆け出し冒険者となったのだった。

訓練場の外を見れば、父がドヤ顔で鼻を高くしていた。

期待に答えられたようで何より。

さて、前座は終わりだ。

私が父の元へと戻ると、入れ違いにベル達が訓練場の中へと入って
行く。

「頑張れよ」

そんなベル達に、私はただ一言だけ応援の声をかけた。

「おうー!」

それにベルは気合いの入った声で応え、他の奴らも思い思いの言葉
を返してきた。

そして全員、顔が引き締まっている。

彼らの前に、いち早く入場したドレイクが立ち塞がった。

さあ、本番の始まりだ。

見届けさせてもらおうじゃないか、お前らの戦いを。

私は父の隣で腕を組み、観戦モードへと移行した。



「さて、いっつてもいっせ」

訓練場の中心において、ベル達とドレイクが対峙する。

念の為なのか、彼らの周りには、この場所に設置してあった特殊な魔道具で結界が張られた。

結界にも色々あるが、ここにあるのは内側と外側、両面からの魔法も物理攻撃も弾くタイプの結界だ。

しかも、そこそこ頑丈。

これがあれば、誰でも安心して観戦ができるという訳だな。

そんな場所の中央で、ドレイクは右手に木剣を持って佇んでいた。対するベル達が持つのも木製の武器だ。

本当なら、冒険者試験の前に武器屋に行く予定だったのだが、ドレイクのせいで後に回された。

まあ、対人相手の試験なら、事故が起こっても大丈夫な木製の方がいいだろう。

「ボルティックランス！」

「風魔の矢っすー！」

しかし、そんな事はお構い無しで、シオンとオスカーが殺傷力の高い攻撃を繰り出した。

雷の槍と、風を纏った高速の矢がドレイクを襲う。

「マジかよ……あの嬢ちゃん以外も、中々やるじゃねえか」

口ではそう言いつつ、ドレイクは余裕で二つの攻撃を防いだ。

矢はあっさり避けられ、雷の槍は剣で叩き落とされる。

まあ、そう簡単にはいかないわな。

見たところ、ドレイクはまだ闘気を使っていない。

にも関わらず、当たり前のように魔法を叩き落とした。

やはり強いな。

間抜けに見えて、実力は本物だ。

「うおおおおおおお！ 攻ノ型・槍^{そうが}牙！」

だが、ベルは臆さない。

突撃し、ヨハンさんから習った型の一つ、高速の刺突を繰り出す。

「ほう、王国剣術か。良い師匠がいるみたいだな」

それを、ドレイクは我流と思われる剣捌きで軽く受け流した。

技量の差は歴然。

そのまま、ドレイクはカウンターを狙う。

「飛劍・雷迅！」

「うおっと」

そこへシオンが横から攻撃を仕掛け、オスカーが良いタイミングで援護射撃をする。

その隙に、ベルは飛脚を使って離脱を試みるも、シオン達の攻撃を軽く受けきったドレイクに追撃された。

「ぐっ！」

「お、いっちょまえに防ぎやがったか」

ドレイクの攻撃を何とか剣で防ぐも、膂力の差によって吹き飛ばされ、ベルは盛大に地面を転がった。

全身打撲による、それなりのダメージ。

しかし、ラビが即座にベルに駆け寄り、治癒魔法をかけた。

「ヒール！」

「治癒術師までいるのか……なんとも、バランスの取れた良いパーティーだな。……最近の子供はどうなってんだ」

ベル達の子供らしからぬ強さと完成度に、ドレイクは驚いたような、むしろ一周回って呆れたような、何とも言えない顔をしていた。

あの四人を相手にして、そんな事を考える余裕があるとは。

私ですら、闘気なしで四人同時に相手すれば苦戦するというのに……。

少し、自信をなくすな。

やはり、私は元世界最強という事か。

弱くなったもんだ。

まあ、私は幼女だし、これから強くなるんだがな。

「攻ノ型・破断！」

「破断・雷！」

「嵐の矢っす！」

「なんだなんだ、強いじゃねえか坊主ども！ ……だが、まだまだ甘い！」

ドレイクが剣を振るう。

ベルの腕を叩き、シオンの足を叩き、オスカーに接近して腹を打った。

三人が苦痛に悶絶する。

ドレイクはここまでだと思ったのか、剣を下げる。

だが、まだ終わっていない。

「アクアランサー！」

「何っ!？」

回復に徹していたラビが突如として牙を向き、水の攻撃魔法を放つ。

回転する巨大な水の槍がドレイクを押し流し、その隙にラビは走って、三人の治癒を終わらせた。

さすがに全快はしていないが、普通に動ける程度には回復している。

……それにしても、少し驚いた。

あの気弱なラビが人に向かって攻撃魔法を、しかも普通の奴なら死んでもおかしくないくらいの攻撃を叩き込むとは。

剣術教室の時は、どうしてもできなかったというのに。

いや、それは相手が私達だったからというのもあるんだろうが、それを差し引いても、人に向かって殺し技を仕掛けるのは勇気がある。

だが、それくらいできなければ、冒険者としてやってはいけない。

この戦いで、ラビは少し成長したのかもしれない。

「あーあー……水浸しだ」

それでも、やはり実力差をひっくり返すには至らなかったようだが。

ドレイクが、ほぼ無傷の状態に戻ってくる。

まあ、だろうな。

どう見ても気弱なラビによる攻撃には少々意表を突かれたんだろうが、それで倒れるような奴がS級になれる筈がない。

「スパークー！」

水浸しで、いかにも電気を通しやすそうになったドレイク目掛けて、シオンが放電を仕掛けた。

だが、

「飛劍・嵐」

ドレイクの放った衝撃波のような斬撃が、放電を容易く散らす。

……闘気を使ってきたか。

ここまでだな。

「お前らの強さはよくわかった。認めてやる。文句なしに合格だ」

そう言いつつも、ドレイクの戦意は欠片足りとも消えてはいなかった。

それを察知しているからこそ、ベル達も戦闘態勢を解かない。

「だからこそ、今は俺に負けとけ。」

お前らは強い。だが、上には上がいる。そして、そういう格上とは、いつ遭遇するかわからねえって事を胸に刻んどけ」

そうして、ドレイクは魔道具の義手を掲げた。

「湯煙」

義手から吹き出した煙が結界の中に充満し、外からの視線を遮る。

その煙が晴れるまでにかかった時間は、僅か三秒。

三秒が経過し、煙が晴れた時。

——ベル達は、全員地面に倒れていた。

11 初依頼

「はい。これがあなた達の冒険者カードになります。なくさないでくださいね」

ドレイクによる大人げない試験が終了した後、私達は試験合格という事で冒険者カードを発行してもらい、晴れて正式に冒険者となった。

受付嬢が冒険者カードを手渡してくれる。

カードに書かれたランクはF級。

駆け出しの新米冒険者だ。

だが、これが夢への第一歩だとばかりに、ベルは盛大に喜んでいたり。オスカーとラビも似たような感じだ。

シオンだけは、ドレイクに負けたのが悔しいのか、ずっと不機嫌そう。しかめっ面のままだが。

続けて、私達五人でパーティーとして登録した。

パーティー名は『英雄の剣』。

英雄願望の強いベルが付けた名前である。

名前負けしたら恥ずかしいが、まあ、大丈夫だろう。

新人の冒険者が付けるパーティー名なんてこんなもんだ。

冒険者になろうなんて若者は、夢と希望と上昇思考に満ちているからな。

「よう、坊主ども。合格おめでとう。だが、冒険者ってやつは常に危険と隣り合わせ。油断した奴から死んでいく仕事だ。ちよつと強いからって調子に乗るなよ」

そんな夢と希望に水を差すかのようにドレイクが現れた。

先輩風を吹かせてやがる。

あんな大人げない事しておいて、よくやる。

「何、カッコつけてんだ。大人げなく本気で勝ちにいったくせに。今さら威厳を出そうとしても遅いぞ」

「いや、違うぞジャック。あれは大人として教訓を授けてやろうとしてだな……」

「嘘つけ。子供相手に地味に苦戦したのが悔しかっただけだろうが。闘気に加えて、義手に仕込んだ魔道具の一つまで使いやがって」

「うっ……だが、教訓を授けようとしたのも本当だぜ？」

「安心しろ。それはわかってる」

父とドレイクが仲良さげに話している。

前回のお出かけの後に聞いた話だが、父とドレイクは十年前くらいまで同じパーティーの仲間だったらしい。

そして、当時、A級冒険者パーティーとして活躍していた二人は、調子に乗ってパーティーメンバー達と共に難易度の高い依頼に手を出した。

油断して挑んだ結果、二人以外のパーティーメンバーは全滅。

その後、しばらくは二人で組んでいたが、父がこの街に配達に来ていた母に一目惚れして結婚した事で、完全にパーティーは解散したとの事だ。

そういう苦い経験があったからこそ、ドレイクは冒険者になろうとするベル達を止め、父は私が冒険者になろうとするのを、やんわりとだが反対した訳だ。

人に歴史ありだな。

「まあ、何にせよ、これからは同じ冒険者仲間だ。俺はそろそろ次の街に行くが、縁があつたらまた会おうや。」

試験官なんてやったよしみだ。その時は何かと助けてやるよ」

そう言っつて、ドレイクは去って行った。

……何だかんだで良い奴だったな。

父の友達みたいなもんだし、また会う事があつたら仲良くしてやろう。

そんな風に思った。



その翌日。

私達はドレイクのせいで遅れた予定を消化するべく、武器屋に来ていた。

「この店で一番良い装備を頼むー！」

「頼むつすー！」

「いや、この金額じゃ、ちよつと……」

親に貰ったお小遣いだけで、店番の兄ちゃんに無茶な注文をつけるベルとオスカーを尻目に、私は店内を物色していた。

今必要なのは、店で一番良い装備などではない。

自分の体に合った剣だ。

今の私は、身長の高い8歳の女の子な訳だから、素直にショートソードあたりを選んでおくのが無難だな。

なにせ、今日はこれから、初めての冒険に行く。

さつき、ギルドで初めての依頼を受けてきたのだ。

まあ、F級冒険者が受けられる依頼なんて、薬草採取が関の山だが、それでも薬草を取りに行こうとすれば、野生の魔物と出会う可能性もある。

つまり実戦、殺し合いが待っているかもしれない訳だ。

ならば、訓練用ではない本物の装備がいる。

一応、村の自警団の狩りに交せてもらった事はあるが、その時は自警団のお古を借りたからな。

正式に冒険者になったのなら、やはり自分の装備が必要だろう。

そうしてショートソードを探していた時、少し気になる物を見つけた。

「これは……」

「いや、これはまだ、リンネには早いんじゃないか？」

「わかってる。見てただけ」

私の目に入った物。

それは、緩く反りの入った片刃の剣。

この国ではあまり見ない、刀と呼ばれる武器だ。

和国という大陸の東にある国では多く出回っていると聞いた事が

あるが、前世の私はあまりこの国を離れた事がなく、必然的に刀を見る機会も少なかった。

だが、これは別に必要ないな。

珍しさから、つい目がいつてしまったが、刀は独特のくせがあつて扱いつらい。

慣れれば大丈夫だとは思うが、それなら既に慣れた直剣を使えという話だ。

それに、この刀は大人サイズで、今の体で振るにはデカすぎる。考えれば考える程にいらんな。

刀から意識を外し、当初の予定通りショートソードを探す。

最終的に、銀貨五枚の捨て値で販売されていた、数打ちの剣を購入した。

それと同時に鎧も購入。

成長期ですぐにサイズが合わなくなる事を見越して、できるだけ安く、サイズ調整のしやすい、皮製の部分鎧を選んだ。

値段は、全部合わせて金貨二枚。

そこそこの値が張ったが、これでも値引きはした（父が）。

それに、冒険者の装備としては、かなり安上がりな部類だろう。

私以外の面子の装備も似たようなものだ。

ベルは最後まで一番良い装備である魔剣に執着していたが、強制的に諦めさせた。

恨みがましそうな目で見られたが、知った事か。

魔剣は安い物でも金貨数百枚、最高位にいたっては金に変えられないだけの価値があるんだ。

子供のお小遣いで買える訳がなからう。

おとなしく諦めろ。

いつか出世して、自分の金で買え。

そうして装備を整え、いざ薬草採取に出発……の前に父が言った。

「本当は冒険者の基本セット一式も買いたかったけど……お金がないから、また今度にしよう」

そう言つて、父は、とりあえず自分が現役時代に使っていたという基本セット一式を見せて説明してくれた。

火を起こす魔道具、水を出す魔道具、照明の魔道具、解体用のナイフ、コンパス、さつき買ってきた回復薬、村から持ってきた保存食、などなど。

兵士時代に「とりあえず、これだけは持つておけ」と言われた装備一式に似てるな。

だが、こつちの方が種類が多い。

基本的に、兵士よりも冒険者の方が、やらなければならない事が多いのだろう。

だから、必要な装備も増える。

「これは冒険者をする上で絶対必要だ。このまま冒険者としてやっていくつもりなら、近い内に買って置きなさい」

との事だ。

これなしで冒険すると、冗談抜きで死にかねないので、私も改めて肝に命じた。

気を取り直して、薬草採取に出発！

目的の薬草が自生しているという、近場の森へと向かった。

元A級^父冒険者の指導の下という贅沢な環境で、私達は森の中を突き進んで行った。

道中、父が、よく採取依頼が出る薬草の類い（今回依頼された薬草とは別物）や、食べられる植物、足跡などから魔物の種類や縄張りを見極める方法を教えてくれた。

父は、娘に物を教えるのが楽しいのか終始機嫌が良さそうだったが……私は正直、難しくて半分も理解できなかつた。

こういうのは頭脳担当の奴に任せきつてたからなあ。こんな事なら、前世でもう少し真面目にやっておけばよかったかもしれん。

だが、わかっているささうなのは私だけではない。

馬鹿二人組、ベルは首を傾げるだけだし、オスカーは真面目に聞い

ているかも怪しい。

逆に、ラビとシオンは真剣に聞いていたが。

そうして、森を進む事しばらく。

私達の前に、一体の魔物が現れた。

「ビックボアか！」

それは、通常の猪の五倍くらいデカい、巨大な猪。

マーニ村の近くにも生息しているが、あの場所では縄張りの主を張れるくらいには強力な魔物だ。

村の周辺で遭遇した時は自警団が狩っていたから、私達が直接相手をした事はない。

「俺の獲物だあ！」

「風魔の矢つす！」

飛び出したベルを援護するように、オスカーが風を纏った矢を放つ。

しかし……矢はあっさりとビックボアの脳天を貫いて、それだけで狩りは終了した。

「へ？ 終わりつすか？」

「オスカーア！」

「いや、あたしのせいじゃないつすよ！」

二人のいつものじゃれ合いを軽く無視する。

その間に、父をはじめとした他の全員で、ビックボアの解体を始めた。

こうやって、遭遇した魔物を解体し、その素材を売るのも冒険者の貴重な収入源という話だからな。

私達は慣れていないので、父に教わりながらだ。

「ビックボアを瞬殺か……あれでも危険度Dの、そこそこ強力な魔物なんだけどな……俺が初めて戦った時は、すげえ強く感じたのに……」

解体を進めながら、父は哀愁の漂う声で、そう呟いた。

危険度Dというのは、D級の冒険者パーティーが相手をするレベルという意味だ。

そんな魔物を一人で討伐するという事は、オスカーは既に、一人でDランクパーティー並みの力があるという事になる。

他の面子も似たようなもんだ。

とんだ大型ルーキーだわな。

まあ、戦闘力だけだが。

私を含めて。

「……よし。気を取り直して、先に進もう」

解体したビックボアを、父が持ってきた大容量の物を入れられる空間収納の魔道具（超高級品）に入れ、先を急ぐ。

道中でそこそこの数の魔物と遭遇したが、どれもマーニ村付近で見かけた事のある雑魚ばかりであり、すぐに片付いた。

今まで見かけた中では、ビックボアが一番強かつたくらいだ。

私達の敵ではなかった。

「……おかしい。魔物の数が多すぎる」

ある時、ポツリと、父が呟いた。

なにやら、少しだけ焦っているように見える。

……言われてみれば、遭遇する魔物の数が多いか。

私達からすれば何ともないが、普通のF級冒険者にはキツイかもしれない。

たしかに、薬草採取という依頼で、これだけの魔物と遭遇するのは、おかしいと言えればおかしいのか。

運が悪かったただけという可能性もあるが。

「何かあるのかもしれない。急いで依頼を済ませてしまおう」

だが、父は事態を重く捉えているようで、少しペースを上げた。

ベテランの勘というものは、案外馬鹿にできない。

そのベテランが違和感を感じたというのなら、警戒するに越した事はないだろう。

油断した奴から死んでいくのは、兵士も騎士も冒険者も同じだからな。

そして、そこから少し進んだ場所で、私達は目的の薬草を採取する事に成功した。

「よし。すぐに戻ろう」

初仕事成功の余韻に浸る間もなく、父に急かされて撤退を開始する。

ベルとオスカーは、やや不満そうだが、こういう時に気を抜けば死ぬのが冒険者だという事を、父やヨハンさん、自警団の人達に口を酸っぱくして言われ続けたせい、文句は言わなかった。

もしかしたら、ドレイクにしばかれたのも効いているのかもしれない。

——しかし。

どれだけ警戒を重ねても、油断を排しても、死ぬ時は死ぬ。

出会う時は、危険と出会ってしまう。

それが冒険者だ。

昨日、ドレイクがこんな事を言っていた。

『お前らは強い。だが、上には上がいる。そして、そういう格上とは、いつ遭遇するかわからねえって事を肝に命じておけ』

まさに、その通りだった。

S級冒険者の忠告を体現するかのよう、それは私達の前に現れた。

「なっ……!?!」

それを見て、父が押し殺したような驚愕の声を上げる。

近くの茂みからヌツと現れた、赤黒い肌をした巨漢の魔物。

姿かたちは人間に近い。

腰に布を巻き、手に鋼鉄の棍棒を持っている。

だが、その頭部から生えた二本の角と、下顎から生える巨大な牙……そして、筋肉の鎧に包まれた、5メートルを遥かに越える巨体が、それが人間ではなく魔物なのだを教えてくれる。

今、わかった。

魔物がやけに多かった理由。

それは、こいつから逃げて来たからだ。

「オーガ……!?! 危険度A……!」

父が、その魔物の名前を呼んだ。

危険度A。

すなわち、Aランクという最高位に近いランクのパーティーが相手
をしなければならぬ、災害のような魔物。

それが、私達の前に現れたのだ。

オーガは、まるで何の感情も宿っていないかのような無機質な目を
私達に向け、静かに棍棒を振り上げた。

12 危険度A

オーガが戦闘態勢を取ったと認識した瞬間、私は剣を抜き放ち、全速力で駆けた。

「神速剣・一閃！」

出し惜しみはしない。

初手最高火力だ。

こいつの攻撃の矛先がベル達に向けば、間違いなく殺されるだろう。

そうなる前に、殺る。

しかし、オーガは私の神速剣を、棍棒を盾にして防いだ。

「チッ！」

剣が棍棒を切断し、オーガの肩口を大きく斬り裂くが、致命傷には至っていない。

このクラスの魔物は、素で並みの闘気使いよりも硬かったりする。今の身体能力だと、神速剣ですら一撃では殺しきれないか。

「……………」

オーガが、反撃に丸太のような巨腕を振るう。

「飛脚！」

それを王国剣術の一つ、シオンも使っていた特殊な歩方で避け、オーガの腕を足場にして飛ぶ。

そして、そのまま首筋を斬り裂いた。

……だが、傷は付けども首を飛ばす事はできなかった。

神速剣なら斬れたかもしれないが、今の私だと無理な体勢からでは放てない。

私が通り抜けた後、避けたオーガの拳が地面に突き刺さり、衝撃と共に、地面に大きなクレーターを作り出した。

凄まじい剛力。

まるで、マグマのようだ。

いや、あいつはもつと上だが。

それでも、私以外が受ければミンチ確定だな。

元A級冒険者の父なら、ギリギリ大丈夫かもしれないといったところか。

「リンネ！ 一人で突っ込むんじゃありません！」

「ごめん！」

私が、オーガから一旦距離を取ったタイミングで、父が怒りながら合流した。

今の父は現役時代に使っていたという魔剣を持っている。ならば、かなりの戦力だ。

オーガとも、まともに戦えるだろう。

魔剣とは、特殊な素材と製法を使って造られる、魔法の武器である。それを持つ者は、擬似的に闘気の魔法を使えるようになるのだ。

だからこそ、魔剣はやたらと値段が高い。

つまり、今の父は闘気使いと遜色ない働きができる。

加えて、ここ数年は私との稽古をかかさなかった為、少しは現役時代の勘が戻っている筈だ。

そんな父と私を主力に、ベル達をサポートに回せば、オーガは決して勝てない相手ではない。

幸い、今の一連の攻防だけでも、それなりのダメージを与えた。

致命傷でなくとも、かなり深く斬った。

血が流れれば、少しは弱体化も……

「何？」

オーガがゆっくりとこつちを向く。

浅くない傷を負わせた筈なのに、まるで痛みなんて感じていないかのような、無機質な目。

思えば、こいつは今まで呻き声の一つすら上げていない。

そして、その体に付いた傷からは、一滴足りとも血が流れていなかった。

「パパ……オーガってあんな感じだったか？」

「そんな訳ない！ あれは普通じゃないぞ！」

そりゃ、そうだ。

私は魔物退治の専門家ではないが、オーガと戦った事がない訳じゃ

ない。

一応、魔物退治の専門家である冒険者にも確認してみたが、結論は変わらず。

あのオーガ、普通じゃない。

変異種だ。

「俺もやるぜ！」

「駄目だ！ お前の戦える相手じゃない！ 下手したら本気のドレイク並みだぞ！」

血気に逸るベルに対して怒鳴りつける。

変異種というのは、大抵通常種よりも強いと、どこかで聞いた事がある。

オーガはただでさえ危険度Aの、戦闘力だけならS級冒険者に匹敵しかねない強敵。

ドレイクに瞬殺されていたベル達を、そんなのと戦わせる訳にはいかない。

それは、半ば自殺だ。

「私がメインで攻める！ パパ達は遠距離から狙撃！ 私は避けるから、気にせず撃って！ ベルは後衛の壁！ 基本は避けて、いざとなったら命懸けで後ろを守れ！」

「わ、わかった！」

「リンネ!? 待ちなさい！」

「ごめん！ ここは行かせて！」

父の静止を振り切って再突撃する。

同時に、オーガも踏み込みで地面を陥没させながら、こつちに突撃してきた。

高速の世界で、私とオーガが交差する。

「神速剣・流！」

二度目の神速剣でオーガの拳を受け流し、そのまま脚を斬り裂く。カウンターの剣技。

それを食らわせ、オーガの片脚を完全に切り落とした。

相変わらず血は出ないが、これでかなりの機動力を殺せた筈だ。

……だが、体への反動も大きい。
体感として、神速剣はあと一度が限界だろう。
ラビの治療魔法を受けられれば話は別なんだが、戦闘中にそんな暇はない。

「ああ、くそ、仕方がない！ 飛剣！」

「ボルテイツクランス！」

「嵐の矢！」

「アクアランサー！」

脚を失ったオーガに、容赦なく父達の遠距離攻撃が炸裂する。
的が大きい事もあって、全弾命中した。

オーガは変わらず無機質な表情を崩さないが、ダメージはある。
体の一部は、筋肉の鎧が剥がれ、骨が露出しているのだから。

しかし、やはり傷口から血は流れず、代わりに砂のように崩れていく。
見れば、さつき切り落とした脚も、砂となって消えた。

……不気味な相手だ。

「……………」

オーガが無言でベル達の方を向く。

怒気も殺気もない。

だが、放置すれば確実に害となる。

だから、オーガの矛先が父達に向かう前に、私が再度飛び出す。

「攻ノ型・槍牙！」

突きを放つも、オーガは腕を盾にして止める。

鬨気を纏い、切れ味を増した剣は、それなりに深く刺さっている。
だが、こいつ相手では切断くらいしななければ意味はないだろう。

即座に剣を引き抜き、飛脚で距離を取る。

離脱した場所をオーガの拳が通過し、また地面に突き刺さって衝撃
が発生、クレーターが出来上がる。

そこに再び、父達の遠距離攻撃が炸裂。

さつきと同じ光景だが、ダメージは確実に増えている。

不気味な相手だが、いくらなんでも、動けなくなる程に体を破壊す

れば死ぬだろう。

ならば、これでいい。

「……………」

その時、オーガが動きを変えた。

三度突撃する私には目もくれず、足下に落ちていた何かを右腕で拾い上げた。

それは、最初の攻防で破損した、棍棒の残骸。

オーガが、それを大きく振りかぶる。

狙いは……父達の方だ。

「ッ！ 神脚！」

そうとわかった瞬間、私は闘気の出力を最大にまで上げた。

更に、それを脚に集中し加速。

そして、オーガに辿り着いた瞬間、脚から腕へと闘気の集中箇所を変更。

渾身の力で、剣を振り抜く。

「神速剣・一閃！」

温存していた三度目の神速剣が、防御に回されたオーガの左腕を切断し、そのまま首までも斬り飛ばす。

まっとうな生物なら、これで死ぬ。

——しかし、オーガの動きは止まらなかった。

片腕、片脚に、頭部。

五体のうち三つを失ったオーガが、それでも残った右腕を動かし、棍棒を投擲した。

私は動けない。

神速剣に加えて神脚まで使ってしまった反動により、体が硬直していた。

骨が軋み、筋肉が痛み、腕にはおそらくヒビが入っている。

オーガの投擲を、ただ見ている事しかできなかった。

棍棒の残骸が、凄まじい速度で飛翔する。

「おおおおおおおおー！」

だが、それを父が魔剣を盾にして防いだ。

完全には止めきれずに父は吹き飛んだが、棍棒の軌道は変わって、見当違いの方向に飛んでいく。

あれくらいなら、父も死んではいないだろう。

助かった……！

「ッ！」

そつちに意識を取られた一瞬の隙に、オーガの拳が私に迫っていた。

投擲に使った右腕を体ごと回転させて繰り出された裏拳のような一撃が、私に直撃した。

そのまま、残ったベル達の方に吹き飛ばされる。

『リンネー！』

「ゴフツ……大丈夫だ！」

咄嗟に、再び闘気を全開にして受けた。

故に、致命傷は避けられた。

しかし、大丈夫ではない。

また全開闘気を使ってしまった反動と合わせて、体はボロボロだ。

「ヒール！」

ラビの治癒魔法が傷を治してくれるが、さすがに全快とはいかない。い。

これだけの傷だ。

たとえ、ヨハンさんであっても、ユーリであっても、一瞬で治しきるのは無理だろう。

まだ子供で、そこまで治癒魔法を習熟していないラビでは、焼け石に水程度の効果しか見込めない。

そして、事態は更に悪化した。

オーガが残った脚に力を籠め、こちらに向けて突撃してきた。

「！ ボルティックランナー！」

「ウインドブラストっす！」

「アクアブラスト！」

咄嗟に、魔法の使える三人が迎撃し、勢いは削れた。

しかし、未だにかなりの速度と質量を持った、オーガの突進は止

まっっていない。

「らあああああああー！」

迫るオーガの前に、ベルが立ち塞がった。

ベルにはさつき、いざとなったら命懸けで後ろを守れと言った。

その言葉を守って、ベルは私達を守る為に、強大な敵の前に立った。

「守ノ型・城壁！」

ベルが、剣を盾にオーガを止めようとする。

守ノ型・城壁。

本来ならば、盾を装備した者が使う技。

それによって、オーガを止めようと言うのか。

「うおおおおおおおー！」

ベルが咆哮を上げる。

少し遅れてシオンも合流し、二人でオーガを押しさえ込んだ。

結果、——オーガは止まった。

「ハッ」

私は、思わず笑ってしまった。

やるじゃないか二人とも。

足手まとい一歩手前くらいに考えていたのが恥ずかしいぜ。

そうだ。

子供達がこんな必死に戦ってるんだ。

なら。

ここで立たなきや、英雄じゃないよなあ！

「おおおおおおおー！」

ボロボロの体に鞭を打ち、オーガに向かって走る。

オーガは、残った右腕を振るおうとしている。

それを許せば、オーガに密着している二人は吹き飛ばされるだろう。

う。

闘気も纏えず、今の攻防で力を使い果たした二人は、それだけで死

にかねない。

ならば、そうなる前に、けりをつけるのみ！

「神速剣・破断！」

ラビのおかげで少しは回復した体を酷使し、威力重視の神速剣を振るう。

されど、威力を重視しようとも神速の一撃である事に変わりはない。

その剣が、オーガが腕を動かすよりも早く炸裂し、オーガの体を縦に斬り裂いた。

そうして、——首を落としても死ななかつた怪物が、遂に死んだ。真つ二つになったオーガの体が、砂となって崩壊していく。

もう、動き出す気配はない。

周囲に他の魔物がいる気配もない。

「勝った……」

私は勝利を確信し……そして、限界を迎えて意識を失つたのだつた。



どことも知れぬ、暗い部屋。

その部屋の奥に置かれた豪華な椅子。

玉座と呼んでも過言ではないその椅子に、一人の女が腰掛けていた。

「む？」

「如何されましたか、陛下？」

『陛下』と呼ばれたその女が、何かに気づいたように顔を上げる。

それに対して、対面に跪く巨漢の老人が疑問を呈した。

「いや、何でもない。実験用の人形が一つ壊れただけだ」

「左様でございますか」

そして、二人は何事もなかったかのように話を続ける。

その会話を聞く者は、他に誰もいなかった。

13 戦いに生きる覚悟

——ジャック視点

俺は今、気絶したリンネを背負い、ベルくん達と共にトリスの街を目指していた。

あの特異オーガとの戦いにより、俺達はかなり消耗してしまった。リンネや他の皆に治癒の魔法をかけた事で、ラビちゃんはほとんどの魔力を使い果たしたし、

ベルくんとシオンくんは、治癒魔法を受けてなお、オーガの突進を受け止めた時のダメージが治りきっていない。

三人、いや、リンネを含めたこの四人は、もう戦えないだろう。

余力があるのは、遠距離攻撃に徹していたオスカーちゃんと俺だけだ。

しかし、俺達も決して余裕ではない。

オスカーちゃんの魔力も、かなり目減りしている。

俺だって、重症ではないというだけで、治癒術師の世話になりたいと思うくらいには、深い傷を負ってるんだ。

だが、危険度Aの化け物、それも首を落としても死なないような変異種と戦って、死人が出なかつただけでも奇跡。

あれは、全盛期の俺が、当時のドレイクを含めたパーティーメンバー全員と一緒にかつたとしても、相当苦戦しただろう。

それこそ、死人が出てもおかしくない程に。

そんな化け物を、こんな子供ばかりのパーティーが討伐したんだ。奇跡と言う他にない。

「……………」

だが、俺に勝利の喜びはなかった。

心の中にあるのは、自分の不甲斐なさに対する憤りだけだ。

娘一人守りきれずに、何が元A級冒険者だ。

まったく、聞いて呆れる。

情けない。

情けなすぎて、笑えもしない。

しかし、それと同時に、仕方がなかったと思ってしまう自分もいる。あれは、格の違う戦いだっただ。

衰えた今の俺では、下手に割って入る事のできない高位の戦闘。実際、俺は投擲物を一つ食らっただけで、軽く吹き飛ばされた。それも、受け方を少し間違っていれば、こんな傷では済まなかっただろう。

できた事と言えば、せいぜい遠距離からのサポートが関の山だった。

そんな戦いを繰り返すなんて、本当にウチの娘は天才だ。

劍神様の生まれ変わりというのも、案外本当の事なのかもしれない。

だが、そんな天才も今は力尽き、俺の背中で寝息を立てている。そう。

どんな大天才であろうと、倒れる時は倒れるし、死ぬ時は死ぬ。それが、戦いに生きる者の宿命だ。

……やっぱり、リンネには、そんな人生を送ってほしくないな。

「……俺、何もできなかった」

と、その時、ベルくんがポツリと呟いた。

彼の方を見てみれば、悔しそうに俯いている。

ベルくんは、俺達の中で唯一、遠距離攻撃を持たない。

故に、今回の戦いでは、あまりサポートができなかった。

それを気にしているのだろう。

俺からすれば、オーガの突進を受け止めただけでも大金星だと思うけどな。

そう言って慰める事は簡単だが……

「それが冒険者の仕事だ。自分では歯が立たないような化け物と、不意に出会ってしまう事もある」

俺は、あえて違う言葉を選んだ。

ベルくんだけではなく、この場の全員に向かって、諭すように話をする。

「今回は運良く生き残ったが、次は死ぬかもしれない。冒険者は常に死と隣り合わせだ。……いや、冒険者だけじゃない。兵士や騎士も同じ。それが、戦いに生きる者の宿命なんだから」

子供達は、俺の言葉を真剣に聞いていた。
だからこそ、俺も真剣に話を続ける。

『運が悪かった』。ただそれだけの理由で、自分や大切な仲間が死ぬ。戦いに生きていけば、そういう事がさらにあるもんだ」

事実、俺やドレイクも仲間を失っている。

あれは、辛くて悲しかった。

戦いというのは、辛くて悲しいものなのだ。

「――それでも、君達は冒険者を続けるかい？」

やめるなら今のうちだと、暗に告げる。

何も、戦いだけが人生じゃない。

実際、俺は今、戦いの世界から離れて生きているが、幸せだ。

村で誰かと結婚するもよし。

それが嫌なら、街に出て商人にでもなるのもいいだろう。

戦い以外にも、人生の楽しみ方はたくさんあるのだから。

でも……

「……俺はやめない。俺は、いつか英雄になりたい。たとえ死んでも、夢を諦めたくない」

ベルくんは、もう覚悟が決まっているかのように、強い意思を感じさせる声で、そう言った。

……まるで、昔の俺みたいだな。

いや、俺なんかよりも遥かに強いか。

俺も昔は、英雄になるんだと息巻いていたが、最初に死にかけた時に心が折れて、それから身長の丈に合った仕事ばっかしてたからな。

最終的には、仲間にも恵まれてA級にまで登り詰めたが、結局、英雄にはなれずに、結婚して引退だ。

心残りすらない。

でも、あるいはこの子なら、俺が諦めた夢を叶えられるかもしれないな。

「あたしはベルに付いて行くつすよ！　そして、おもしろおかしく生きるつす！」

オスカーちゃんは……ちゃんと理解してるんだらうか？
少し不安だ。

だが、常に前向きである事は、冒険者にとって必要な資質でもある。そう考えれば、案外、オスカーちゃんは冒険者に向いているのかもしれない。

「わ、私も、冒険者続けます。そ、それで、今度は皆を守れるくらい、強くなりたいです」

ラピちゃんも、そう言ってグツと両手の拳を握った。

……ちよつと意外だ。

気弱なこの子なら、死の恐怖を感じたところで諦めると思っていたが。

子供というのは、大人が思うよりも、よほど強いのかもな。

それか、思いもしない速度で成長するという事か。

「俺は騎士を目指す事をやめるつもりはありません。冒険者も続けますよ。戦いから逃げるようじゃ、騎士にはなれない」

そして、シオンくんの考えも変わらずか。

リンネからの話で、この子も相当頑固な部類だというのは知っている。

それでも、命の危機を体験してなお、信念が欠片もぶれないというのは凄い。

あのクソイケメンの息子にしておくのがおしいくらいだ。

結局、子供達は誰一人として冒険者をやめる気にはならなかったか。

リンネにはまだ聞いていないが、多分、この子もそうだろう。

なにせ、リンネは勝者だ。

あれだけの強大な敵を打倒した、小さな英雄だ。

そんな子が、怖気づいて冒険者をやめるとは、どうしても思えなかった。

……最近の子供って、強すぎじゃないか？

いや、この子達が特殊なだけか。

最近の子供とひとくくりにするのは、よくない。

実際、他の村の子達は普通だ。

とにかく、これについて考えるのは、ここまでにしておこう。

今は、一刻も早く街に、冒険者ギルドに戻って、皆の治療をするのが先だ。

その後には、あの特異オーガの事を報告しておかなくては。

薬草採取の依頼で、あんな化け物と遭遇するなんて、どう考えてもおかしい。

この辺には、オーガなんて生息していなかった筈だ。

そもそも、あれの存在自体がおかしいだろう。

なんだ、首を落としても死なないオーガって。

あれじゃ、まるでゾンビだ。

ゾンビのめんどくささを搭載したオーガとか笑えないぞ。

実際に目にした今でも信じられん。

そうして、俺達は帰路を急いだ。

俺はずっと、訳がわからない現象に対する薄気味悪さを感じながら。



私が目覚めた時には、オーガとの戦いから既に二日が経過していた。

寝てる間に診てくれたという医者曰く、オーガ戦のダメージに加えて、極度の疲労が原因だろうとの事。

まあ、あれだけの死闘を繰り返せば、神速剣を四度も使用したのだから、当然の反動だな。

しかし、二日も目を覚まさなかったせいで、他の奴ら（特に父）を大いに心配させてしまったようで、

目が覚めた瞬間、父に力の限り抱きしめられて死ぬかと思った。他にも、ラビは涙目になっていたし、ベルとオスカーとシオンも柄にもなくホツとした顔をしていた。

そして、起きた後に、父からあのオーガについての事や、それに対するギルドの見解なんかを聞かせてもらった。

まず、あのオーガは首を落としても死ななかった事や、傷口が砂になって崩れていた事などから、ゾンビだったのではないかと考えられているらしい。

たしかに、言われてみれば、ゾンビの特徴と合致するな。

しかし、ゾンビとは普通、体が腐っていて、生前の力も残っていない。

あのオーガは、明らかに生前と同じ姿で、危険度Aの名に相応しい力を振るっていた。

しかも、通常のゾンビというものは、迷宮などの特殊な環境に放置された死体の変質して魔物化したものらしい。

知らなかった。

だが、この辺りに迷宮はなく、オーガも生息していない。

どこかから流れて来たのかもしれないが、真相は闇の中だ。

結局、オーガの死体も残らなかった為、これ以上の調査は不可能とギルドは判断。

正体は不明。

どこから来たのかも不明。

どこぞの迷宮で偶然ゾンビ化した可能性の高いオーガの変異種、という事で、ギルドの記録には残されるらしい。

そんな一連の話を終えてから、父は改まった様子で、私に語りかけてきた。

「……リンネ。冒険者を続けていれば、こうしてまた倒れる事もあるだろう。もしかしたら、そのまま死んじやうかもしれない。

それでも、リンネは冒険者を続けたいか？」

父は、憂うような目をして、そう聞いてきた。

……ああ、そうだった。

今回、私は倒れて、父に多大な心配をかけてしまったのだ。いくら、今世において初めての同格に近い相手との殺し合いだったとはいえ、オーガごときを相手に、まったく情けない限りだ。

元剣神が聞いて呆れる。

それでも……

「……ごめん、パパ。それでも私は、しばらく冒険者を続ける。それに、戦う事は戦えなくなるまでやめないと思う」

戦う事は、私の唯一の取り柄だ。

私から戦う事を取ったら、あまり残るものはない。

それに、私は戦っていないと、自分がいつでも戦えるのだと思っていないと、安心できないのだ。

平穏の中にいると、どうしても、その平穏がいきなり崩れた、前世の故郷の事を思い出してしまう。

あの時、前世の故郷が滅びた時に、私に剣神と呼ばれた頃の力があつたのなら。

そんな事はあるとわかってる。

それでも、どうしてもそう考えてしまう時がある。

当時の私は、まだ五歳かそこらの子供だった。

それも、今と違って何の力もない、ただの子供だ。

そんな無力な私は、あの魔帝率いる帝国軍から、ひたすら逃げる事しかできなかった。

だが、今は違う。

今の私も子供だが、力を持った子供だ。

今ならば、帝国軍のような理不尽が突然襲って来ても、抗う事ができる。

私の力は、その為の力だ。

いざという時に、大切なものを守る為の力。

その力を錆び付かせる訳にはいかない。

だから、私が戦いをやめる事はない。

前世のように、戦えなくなるその時まで、剣を置くつもりはない。それが、私の信念なのだから。

「……そうか」

父は、あまり落胆はしていなかった。

わかっていたとしても言うかのように、少し悲しそうな目をするだけだ。

……それでも、やはり親に心配をかけるのは心苦しいな。

だから、私は代わりの言葉を口にした。

「その代わり、パパが安心して見てられるくらいに、私は強くなるぞ！」

父の望む言葉とは違うだろう。

だが、それでも、これが私の精一杯の言葉。

この言葉だけは、違えるつもりはない。

それを聞いた父は、キョトンとした顔をした後に、

「そうか。頑張りなさい」

優しく笑って、そう言った。

「うん！」

私はそれに、精一杯の元気な笑顔で答えたのだった。

14 昇格試験に向けて

オーガとの戦いから三年が経った。

私は11歳となり、身長もだいぶ伸びてきたものだ。成長期というやつだな。

胸とかも、少しだけ膨らんできた。

もつとも、二つ歳上のオスカーや、同じ年であるラビよりも随分小ぶりなので、将来は絶壁かまな板になりそうだ。

まあ、元男としては、むしろそっちの方が嬉しいがな。胸など、戦いの邪魔だ。

そして、この三年間、冒険者として地道に活動してきた事で、私達『英雄の剣』の冒険者ランクはC級にまで上がっていた。

冒険者というものは、いくら実力があってもランクに見合った依頼しか受けられない為、基本的に飛び級という事はできない。

依頼を一定回数達成する事でのみ、一つ上のランクに上げられるのだ。

まあ、何事にも特例というものはある。

だが、特例とは、滅多にないからこその特例だ。

私達には関係なかった。

だからこそ、最初のF級の頃は薬草採取や猫探し。

その繰り返しでE級になったら、次は雑魚魔物退治と、『英雄の剣』なんてパーティー名とは裏腹に、本当に地道に依頼をこなしてきた。

私としては、猫探しが一番大変だったがな。

あれは、戦闘力だけではどうにもならない。

まあ、そんなこんな苦労を乗り越えて、私達はC級冒険者になった訳だ。

それに、C級になってから、もうしばらく経つ。

今のランクでの依頼も結構こなしたし、そろそろB級に上げられるんじゃないかと思っていた時だった。

ラビから、その話を聞いたのは。

「「昇格試験？」」

いつもの依頼が終わった後、冒険者ギルドにて、私とベルとオスカーの声が重なった。

その情報を私達に教えてくれたラビは、呆れたような顔をしていた。

シオンにいたっては、隠す事なく、馬鹿を見る目で私達を見ている。どうやら、この二人は知っているらしい。

知らないのは、私達、脳筋or馬鹿トリオだけのようだ。

「お前ら……受付で散々言われてきただろう。何故、知らない？」

「受付対応は二人に任せてたから、聞いていなかった」

「俺もだ」

「同じくっす」

「はあ……この馬鹿ども、俺が抜けた後、大丈夫なのか？」

シオンが頭が痛いとはかりに呟いていた。

まあ、シオンは15歳になったら、つまり、あと二年でこのパーティーを抜け、王都の騎士学校に入学する予定だ。

入学試験に落ちてもしない限り、そこから先は騎士の道に進み、冒険者は半引退という事になるだろう。

そうなった後の、このパーティーを心配しているようだ。

「……ラビ、頑張れよ」

「……うん」

シオンは、ラビに心底同情するような目を向けていた。というか、さっきから私達への扱いが酷いな。

自業自得だから、何も言えんが。

「で？ 昇格試験ってなんなんだよ？」

その扱いに気を悪くしたのか、ベルが少し不機嫌そうな声で尋ねる。

そこで不機嫌になるのなら、少しは改善すればいいものを。

私？

私は、自分が頭脳労働に向かないと諦めているからいいのだ。

オスカーも似たようなもんだろう。

いや、こいつは地味に地頭が良いから、単にめんどくさがってるだ

けかもな。

「えつとね。昇格試験っていうのは、B級以上に上がる為に受けなきゃいけない試験の事だよ」

「B級以上は、世間一般から見ても一流と呼ばれる領域だ。だからこそ、これまでと違って、昇格する為には依頼達成数の他に厳しい試験を受けなければならぬ。」

……何故、騎士を目指している俺の方がお前らよりも詳しいんだ。少しは頭を使え、馬鹿ども」

「なんだと！」

「今のは、さすがに言い過ぎっす！」

「文句があるのなら、まず常識を覚えろ」

「死ねえい！」

「くたばるっす！」

三馬鹿が仲良く喧嘩を始め、ラビがおろおろとしているのを尻目に、私は考える。

なるほど、昇格試験か。

たしかに、そんな話を小耳に挟んだ事があるような気がする。

それを聞いたのが、前世だったか、今世だったかは、忘れたがな。

いわゆる、B級以上の壁というやつだったか。

「り、リンネちゃん。止めないと……」

「ほっとけ。いつものスキンシップだ。それより、昇格試験はこの街で受けられるんだったか？」

「え？ う、ううん。もつと大きい街で、一年に何回かしかやってないみたいだよ」

「なるほど」

そういえば、そんな感じだったな。

思い出してきたような気がする。

「ちなみに、その時期はいつだ？」

「一番近いのは、10日後だっつて」

「そうか」

なら、一旦村に戻って、父や母に遠出してくると伝えないとな。

今回は父（それと、チャールズ）と一緒にではないので、村に帰るまでに約三日。

街に戻って来る時はチャールズの足を借りるとして、約半日。そこから、乗合馬車で大きな街とやらに行くのに数日はかかるだろうから……割りどギリギリじゃないか？

喧嘩なんてさせてる暇はないな。

私は三馬鹿を殴って気絶させ、強制的に喧嘩を終わらせてから、引き摺って村に帰った。



その三日後。

私達はそれぞれの親に事情を話し、遠出の許可をもらった。

ラビの両親も、ラビが立派に冒険者をやっているのを見て考えを改めたらしく、最近では反対する事もなくなったそうだ。

未だに心配はされるらしいが、それは当然だろう。

そして、私達は両親やヨハンさん、ロビンソンといった面々に見送られながら、父とチャールズと共にマーニ村を出発した。

チャールズはいつも通りの活躍を見せ、半日で街へと到達。

だが、今回はここで乗合馬車に乗り換えだ。

父とチャールズは、昇格試験の会場となる街までは付いて来ないので、お別れである。

「じゃあ、行って来る！」

「うう、リンネ。やつぱり、パパも一緒に……」

「牧場の仕事があるだろ。それに、ママに冷たい目で見られるから、やめた方がいいぞ」

「うっ……！」

「ごねる父を黙らせる。」

心配してくれるのは嬉しいが、過保護というのもよくないぞ。

それを案じたからこそ、母は今回の遠出に父の同行を禁じたのだらうし。

まあ、父が長期間家を離れたら、牧場の管理が大変になるというのが最大の理由だろうが。

「じゃあ、改めて、行って来る！」

「リンネ、本当に気を付けなさい。いくら、リンネが強くても、死ぬ時は一瞬だから」

「わかってる！」

もう、オーガの時みたいな不様は晒さない。

だから、安心して待っていてほしい。

そして、私達を乗せた乗合馬車が出発した。

馬車が見えなくなる手を振り続ける父に、私も飽きずに手を振り返した。



そうして、馬車を乗り継いで旅をする事、五日。

私達は、昇格試験が行われるという大きな街、領都シャムシールへと到着した。

「うおお！　すげえ！」

「なんすか、これ？」

「綺麗……」

ベル、オスカー、ラビの、大きな街を見た事ない組が、感嘆の声を上げた。

まあ、たしかに、この光景を初めて見るのなら驚くか。

なにせ、

「ハハハ。こういう街を見たのは初めてか？　凄いもんだらう？　街を覆う大結界ってやつは」

そう。

御者をしていた兄ちゃんが説明してくれた通り、この街には、街全体を覆う巨大な結界が張られている。

たまに淡く光る、透明な魔力の膜。

ドレイクがベル達と戦った時のやつとは違い、外側からの魔法攻撃のみを防ぐ、対魔法結界だ。

大きな街や前線の砦、貴族の邸宅なんかには、大抵、この結界が張られている。

何故、対魔法だけなのかというと、魔力の節約、及び、物理まで防いでしまうと交通が凄まじく不便になるからという理由だった筈だ。

昔、誰かに聞いた。

そのまま、乗合馬車は街の正門へと入り、停留所となっている場所で停車した。

「ほら、早く行くぞ」

初めての大きな街をキョロキョロと見回す三人に向かって、唯一、特に何も感じていないようなシオンが先を促す。

まあ、シオンは昔、王都に住んでいたらしいからな。

あそこは、こんな田舎領地の領都とは比べ物にならない、国の中心部だ。

それを知っていれば、この街を見ても、感動する理由はないか。実際、私とて欠片足りとも感動していないしな。

そうして、目移りが激しい三人組を引き摺って、この街の冒険者ギルドにやって来た。

さすがに、領都だな。

トリスの街のギルドよりも、遥かに大きい。

「え？ 昇格試験ですか？ 君達みたいなのが……？ へ？ 受験票？ ……ホントだ。か、確認しました。少々お待ちください」

そのこの受付に冒険者カードを提示し、トリスのギルドで発行してもらった受験票を提出して、昇格試験の登録は完了した。

受付嬢は少し面食らっていたようだが、私達の年齢を考えれば無理

もない。

ベルとオスカー、シオンが13歳。

私とラビにいたっては、11歳だ。

いくら冒険者登録に年齢制限がないとはいえ、この歳でB級昇格試験に挑む奴は稀なのだろう。

さて、登録は終わったし、試験まではまだ何日か時間がある。

宿を取った後は、適当に街をぶらついて時間を潰そうかと思っていた時、例によつてギルドと併設されている酒場に、見た事のある顔を見つけた。

昼間から酒をかつくらっている、眼帯を付けた中年だ。

悲しい事に、お一人様のような。

それを哀れに思った私は、せっかくだから声をかけてやる事にした。

「奇遇だな、ドレイク！」

「ん？ おお、誰かと思えば嬢ちゃんか！ しばらく見ねえうちにデカくなったな！」

その中年、S級冒険者のドレイクは、私を見た途端、笑顔になった。

やはり、可愛い女の子から声をかけられるのは嬉しいか。

こいつ、強面こわもてだからな。

笑顔で接してもらえる機会は少ないのだろう。

「そっちの坊主どもも久しぶりだな！ どうだ？ 少しは強くなったか？」

「当たり前だ！」

「今すぐリベンジしてやってもいいっす！」

「お、お久しぶりです」

「……ふん」

私に続いて、他の四人もドレイクに声をかけた。

ベルとオスカーは挑戦的。

ラビはビクついていて、シオンは不機嫌そうだ。

ドレイクに対する印象が、それぞれ違いそうだな。

「……聞いたぞ。あの後災難だったそうだな。まさか、あんなド田舎

にオーガの変異種が出るとは……」

と、その時、いきなりドレイクが神妙な顔して話し始めた。

ああ。

その話、ドレイクの耳にも入ってたのか。

どうやら心配してくれたらしい。

やはり、割りと良い奴だな、こいつは。

「問題ない！ 私も強くなったからな！ 今なら、あんな奴楽勝だ！」

「ハッ！ 威勢が良いな。どれ。機会があつたら、今度は嬢ちゃんも揉んでやるよ」

「セクハラだな。パパに言いつけるぞ」

「そういう意味じゃねえよ！ まだ揉むだけの乳もねえくせに、何ぬかしてんだ！」

冗談だ。

さすがに、ドレイクが私を性的な対象として見てるとは思っていない。

もしそうだったら、出会った時に、股間にぶら下がってる二つの玉を潰していた事だろう。

「で、嬢ちゃん達はなんでここに……ああ、大方、昇格試験でも受けに来たか」

「当たり前だ」

「その歳でなあ……これが才能ってやつか」

ドレイクは、なんとも言えない微妙な顔をしていた。

まあ、父曰く、父とドレイクがB級に上がったのは、20歳を過ぎたからだっただけらしいからな。

そんな顔にもなるか。

「なににせよ、応援しておくぜ。まあ、実力に関しちや心配してねえがな。だが、試験は戦闘力だけじゃどうにもならない事もある。せいぜい気をつけるよ」

「む……わかった」

頭使うのは苦手だが、まあ、頑張るとしよう。

私だって、別に馬鹿という訳ではないからな。

少し脳筋なだけだ。

ベルとは違うのだよ。ベルとは。

「ああ、それとな。ここだけの話って程でもねえが、嬢ちゃん達が遭遇したオーガと似たような変異種が、最近、国中に出没してやがる。」

だからどうしたって話でもあるが、まあ、用心だけはしておけよ」最後に、忠告するようにドレイクは言った。

あんなもんが国中に、だと？

……偶然か？

いや、何やらとてつもなく不吉な予感がするな。

言われた通り、用心だけはしておこう。

そうして、私達はドレイクと別れ、適当に宿を取った後、街をぶらついて時間を潰した。

ベルとオスカーは武器屋に直行。

ラビは、馬鹿二人が心配だったのか、付いて行った。

シオンは、宿の部屋で静かにしているそうだ。

私は……土産でも探しに行くか。

そんな感じで、試験開始までの数日は過ぎていった。



領都シャムシールから少し離れた森の中。

低ランクの冒険者達が、薬草採取などの依頼の為によく訪れるその森で、不可解な現象が起こっていた。

森の一角で、——空間の歪みが発生したのだ。

見る者が見れば、希少な空間属性の魔法によって起こされた現象だと見破ったであろう。

しかし、その場には、そのような有識者も、まして目撃者の一人すらいなかった。

そして、空間の歪みから、三人の人物が現れる。

「いや、着いた、着いた」

一人は、フード付きの真っ黒な外套を羽織った男。

その顔には、笑顔を模した黒い不気味な仮面をつけている。

全身黒づくめ。

街の中で発見されれば、即、不審者として通報される事だろう。

「えくと、ここら辺でいいですかね？ スコーピオンさんはどう思います？」

「場所なんて適当でいいだろうが。それよりも、早くおっぱじめようぜえ」

仮面の男の声に答えたのは、紫の髪をした口調の悪い女。

腰に巻いた剣帯に、一目で業物とわかる一本の剣を差している。

女は、男と同じ外套を羽織っているが、その下には、こぼれ落ちそうな程に大きな胸を包むチューブトップに、健康的な太ももを大胆に露出するショートパンツといった際どい服を着ており、

口調とは裏腹に、凄まじい色香を放っていた。

「かあ！ わかつてませんねえ！ こういう計画は、事前の準備が物を言うんですよ！ これだから野蛮人はお馬鹿さんで困る！
ねえ、そうは思いませんか、お客さん！」

「喧嘩売ってるのか？ てか、誰に言ってるんだテメエはよ。まさか、その人形に話しかけてる訳じゃねえだろうなあ？」

「おやおや、人形に話してはいけませんか？ 人形にだって心があるかもしれないじゃないですか！ まあ、あつたら確実に地獄でしようけどね！ おつと、こりや、一本取られた！ アツハツハツハ！」

「……オレ様は、テメエのそのノリが大っ嫌いだぜ」

「いや、それ程でも」

「褒めてねえよ！」

終始おどけた態度で喋る男と、不快そうにしながらも律儀にツツコミを返す女。

そんな二人を前に、最後の一人は無言を貫いていた。

「……………」

上半身裸で、フルフェイスの兜を被った巨漢の男だ。

その身体は屈強な筋肉の鎧で包まれ、その筋肉にも、歴戦を思わせる傷痕が多く付いている。

そんな個性的な外見に反して、兜の男はどこまでも無言で静かだった。

それこそ、まさに人形のように。

「さてさて。では、計画実行に相応しい場所を探した後、始めるとしますか。——全ては陛下の御心のままにく、つてね」

そうして、不審な三人組は森の中に消えていく。

彼らは、まごうことなき危険人物であり、災いの種。

決して、放置してはならない存在。

シヤムシールの街に、厄災が迫っていた。

15 魔物襲来

昇格試験当日。

私は、目の前に用意されたテスト用紙を前に唸っていた。

「ぐぬぬ……」

迂闊だった。

まさか、昇格試験の内容が、筆記と実技の二つに別れていたとは。

こんな事なら、予習の一つでもしておくべきだった。

いや、諦めるのは、まだ早い！

ドレイクも言っていたではないか。

試験は、戦闘力だけではどうにもならない事もあると。

まさに、今がその時だ。

根性見せなければ。

幸い、問題は冒険者としての基礎知識、探索のやり方や、特定の魔物の弱点や倒し方といった、決して解けなくはないものばかりだ。

父に教わった事や、前世で聞き齧った記憶まで引つ張り出せば、必ずなんとかなる！

咎だ！

自分の力を信じろ！

そうして、頭が沸騰しそうになりながらも、なんとか合格点は取れているんじゃないか？ というくらいの出来にはなった。

疲れた……。

しかも、これだけ頑張つて、合格点に達している保証はないという。

まあ、合格点に満たないのなら、別にそれでもいい。

試験の合否は、筆記と実技の合計点という話だ。

ならば、実技で満点を取ればいいのだ。

おそらく、ベルとオスカーも、その可能性に賭けているだろう。

……いや、オスカーは割りと要領がいいから、崖っぷちなのはベルだけかもしれない。

そして、筆記試験の時間が過ぎ、試験官を務めるギルド職員が立ち上がった。

「では、これにて筆記試験を終了します。続いて実技試験に移りますので、受験者の皆さんは速やかに会場に移動を……」

『緊急！・緊急！』

と、その時。

試験官の言葉を遮るように、放送用の魔道具から大きな声が聞こえてきた。

多分に焦りを含んだ声だ。

『街の東側、シールの森方面より、大量の魔物の群れが街に向かって接近中！ その数、少なくとも百体以上！ 住民は速やかに避難を！

騎士、兵士、冒険者の皆さんは、ただちに街の東門に集合してください

いー！』

「なんですって!?!」

試験官が驚愕の声を上げた。

受験者達も、結構混乱している。

だが、私は冷静だ。

こういう不測の事態ってやつは、ある日突然、なんの前触れもなくやってくる。

それを経験で知っているからな。

私は無言で席を立とうとした。

「失礼しますー！」

と同時に、他のギルド職員がやって来て、何やら試験官に耳打ちする。

何やら話がありそうなので、とりあえず、その場で待った。

既に街が襲われているという訳ではないみたいだからな。

そのくらいの時間はあるだろう。

「皆さん、これより試験は一時中断。街の防衛をギルドから正式に依頼します。

この依頼を受ける方は、ただちに街の東門へと向かってください」「待てや」

試験官の言葉を聞いて、私をはじめとした何人かは即座に立ち上がったが、一部は座ったまま静観を決め込んだ。

そして、そいつらを代表するかのようには、柄の悪い男が試験官に突っ掛かる。

私は、そいつらを見殺しにして歩き出した。

話を聞く時間はあるが、モタモタしている暇はない。

「試験を中断しておいて何もなしかな？」

俺は忙しい中、遠路はるばる、この街に来たんだ。試験を後日に回すじゃ納得できねえぞ」

「もちろん、埋め合わせはしますよ。この依頼はギルドからの正式案件。それ相応の報酬をお約束します」

「違うな。それじゃ足りねえ」

「……………」

がめついな、こいつ。

何様のつもりだ？

まあ、仕事で戦ってる騎士や兵士と違って、冒険者は基本的に金か名誉か自分の都合で動く。

だから、非難するつもりはない。

ちよつとばかりイラつとするから、ぶん殴りたいとは思うが。

「……………わかりました。緊急事態ですが、昇格試験は続行。街の防衛を実技試験の代わりとさせていただきます。

功績次第によって合否を判定するので、そのつもりでいてください」

「ふっ。その言葉が聞きたかった。行くぜ、野郎ども！ せいぜい派手に暴れ回るぞ！」

『おう！』

どうやら、話は纏まったらしいな。

部屋を出る寸前に、そんな会話が聞こえた。

まあ、防衛戦力が増えるのなら、何も言うまい。

そして、私は部屋を出てすぐにベル達と合流し、東門とやらに急いだ。

道中、冒険者に英雄としての過度な理想を持っているベルが喚いたが、まあ、仕方がない。

ああいう奴もいるって事で納得しておけ。
世の中、気に入らない奴の、百人や二百人いるもんだ。
一々気にしていたら、キリがない。
そう言っておいたが、ベルはずっと不機嫌なままだった。



街の中を疾走し、東門へと辿り着いた。

この街は土地勘がないから盛大に迷子になり、面倒になって、途中から建物の上を走って来たがな。

そのせいで、私達の中で一番体力がないラビは、若干息が上がっている。

まあ、ラビは後衛だ。

戦闘にそこまでの支障はないだろう。

「よう。来たな、嬢ちゃん達」

「ドレイクか」

私達が到着した時、東門には結構な戦力が集まっていた。

ドレイクをはじめとした、腕利きと思われる冒険者が……二十人くらいか。

加えて、昇格試験を受けていたC級冒険者が、約四十人。

騎士っぽい奴が約十人。

兵士が沢山。

騎士と兵士に関しては、街を囲う城壁の上にもいるだろう。

あそこには、大砲がある筈だからな。

これだけの数がいれば、有象無象の魔物の百体くらい、どうにでもなりそうなものだ。

しかし、この場は緊迫した雰囲気には包まれている。

どうやら、何かあるみたいだ。

「何かあったのか？」

「……それがな。実はとんでもねえ事になってやがる」

ドレイクは神妙な顔で語り出した。

絶望的とも言える情報を。

「斥候によると、街に向かって来てる魔物の数は約百体。それだけなら、まだなんとかなるんだが……問題なのは数より質だ。

最低でも危険度C。中には危険度Aの大物まで何体か交ざってるそう。嬢ちゃん達にとって因縁深いオーガもいるらしいぞ」

「は？」

「なんだ、そりゃ!?!」

「マジっすか!?!」

私は思わず間の抜けた声を上げ、ベルとオスカーは驚愕の声を上げた。

ラビとシオンは絶句している。

無理もない。

これはもう、一つの街だけで対処できる領域を軽く越えてるぞ。

もはや国が動くレベルの大災害だ。

「しかもな、それを聞いた連中がビビって逃げ出しちゃった。ここに来てる冒険者は、覚悟の決まってるベテランがほとんどだ。嬢ちゃん達も、逃げるなら今の内だぜ」

見れば、昇格試験にいたC級冒険者達が兵士からこの情報を聞いたのか、尻尾を巻いて逃げ始めていた。

その中には、あの試験官に噛みついた柄の悪い奴もいる。

ちなみに、そいつは、

「冗談じゃねえ! そんな化け物どもと戦ってられるか! 俺は田舎に帰らせてもらう!」

とか言っていた。

他の奴らも似たようなもんだ。

あれだけイキがっついておいて、これか……。

実に情けない奴らである。

「あいつらー!」

「坊主。冒険者は命あつての物種だ。責めるもんじゃねえぞ」

吠えるベルを、ドレイクが宥める。

そして、改めて聞いてきた。

「で、お前らはどうするっ？」

「俺は逃げねえ！ 英雄はそんなカッコ悪い事しねえんだ！」

「あたしは、ぶつちやけ逃げたいんすけど……まあ、ベルがやるなら付き合おうっす」

「ふ、二人が残るなら、私も」

「俺は騎士志望だ。冒険者と違って、自分の都合で逃げたりはしない」
「……ハッ！ 勇ましいこった！」

ドレイクは、諦めたような顔で笑った。

個人的には逃げてほしいのだろうが、実力があるから、止めるに止められないといったところか。

なんだかんだで、戦力は欲しいだろうしな。

「当然、私も残る！ 勝算はあるんだろ？」

「まあな。防衛戦なら結界と城壁、大砲が使える。

それに、今頃ギルドか領主が、通信の魔道具で国に救援要請を出してる筈だ。

最悪、一日くらい粘れば、国お抱えの空間魔法使いが、とびっきりの援軍を連れて来てくれるだろうさ」

そう言った後、ドレイクはニヒルに笑って、こう続けた。

「それに、——俺一人でも負けるつもりはねえしな」

それは、S級冒険者という称号を持つに相応しい、経験に裏打ちされた、確かな自信を感じさせる強者の笑みだった。

渋い中年であるドレイクには、よく似合っている。
ほほう。

中々にカッコいいじゃないか。

そう思ったのは私だけじゃないらしく、ベルがキラキラとした目でドレイクを見ていた。

考えてみれば、ドレイクはS級冒険者であり、吟遊詩人に歌われる程の冒険者だ。

冒険者として英雄を目指すベルにとっては、割りと憧れに近い存在

なのかもしれないな。

初対面の印象が悪かったから噛みついてるだけで、本当は握手とかして、サインとか貰いたいのもかもしれない。

「ドレイク殿、こちらに」

「おう、今行く。と、そうだ。嬢ちゃん達も付いて来い。これから陣形とかを決める作戦会議だからな。一緒に戦う以上、連携は大事だぜ」
「わかった」

という事で、ドレイクと一緒に他の冒険者達の所へと行った。

そこには、冒険者だけではなく、騎士や兵士達も集まっている。

どうやら、会議は既に始まっているらしい。

「待たせたな」

「ドレイク殿！ おや？ そちらの子供達は？」

「こいつらも今回の作戦の戦力だ。実力は俺が保証する。そうじゃなくともC級冒険者だ。参加する資格はあるだろ」

「なんと……！ その歳でC級とは。将来が楽しみですな」

そうして、私達は概ね好意的に歓迎された。

ドレイクのお墨付きというのが効いたのもかもしれない。

もしかしたら、ドレイクの弟子か何かと思われているのかもな。

まあ、そうだとしても別に構わん。

そして、会議が進行する。

「やはり、大砲で数を減らした後、引き付けて防衛に徹するのが無難ですかな？」

「だろうな。敵には危険度Aの化け物が複数いる。下手に突撃しても死ぬだけだろう」

「報告です！ 只今、国からの伝令がありました！ 大至急空間魔法使いを手配し、一日以内に王国最高戦力『三剣士』のお一人を派遣してくださいるそうです！」

「なんと！ それは本当か！」

「三剣士様が来てくださるのなら、まさに千人力ですな！ ならば、我々は街の門を閉じ、時間稼ぎを目的とした作戦を行うべきと考えます。異論はありますか？」

『意義なし!』

「俺も特にねえな」

「では、細かい陣形の相談に移りましょう」

私が適当に聞き流している間に、作戦はどんどん決まっていた。決して、サボっている訳ではない。

適材適所だ。

頭脳労働は、私の苦手分野だからな。

現場指揮官くらいならできるが、作戦とかを立てるのは無理だ。

だったら、作戦を立てるのはドレイク達に、それを聞くのはラビカシオンに任せて、私は決まった事の要点だけ聞いて、言われた場所で言われた通りに暴ればいい。

それが一番効率的だ。

そのまま、会議は恙なく進行し、終わった。

どうやら、基本的に籠城の構えを取って、援軍が来るのを待つという事に決定したらしい。

私達の仕事は、城壁に取り付いて来た魔物の迎撃だ。

というか、ほぼ全員が同じ仕事だ。

交代で、ひたすら迎撃する事になる。

持久戦だな。

そして、それぞれが配置に付き、こちらの準備が完了する。

それから一時間もしないうちに、魔物の群れが現れた。

鳴き声の一つすら発する事なく、不気味な程、静かに行進する魔物の群れ。

見ただけでわかる。

あれは普通じゃない。

三年前のオーガとそっくりな、不自然さと薄気味悪さを感じる。

「……一筋縄ではいかなそうだな」

不吉な予感を覚える。

だが、それで魔物の群れが止まる訳もなく、遂に先頭の魔物が大砲

の射程圏内に入った。
戦いが始まる。

16 領都防衛戦

「大砲用意！ 放て！」

指揮官の指示に従い、魔法兵達が大砲に魔力を送り込み、強力な魔法を発動させていく。

大砲とは、魔法使いの持つ杖の一種であり、

長さ5メートル、幅1メートルもあるが、効果としては普通の杖の強化版だ。

ラビとかも持っている普通の杖は、魔法の発動を助け、威力を増したり、消費魔力を節約したりといった効果がある。

大砲は、巨大化させる事によって、持ち運びや取り回しといった利便性を捨て、ただひたすらに杖としての性能のみを高めた兵器である。

いくら高性能でも、こんなデカすぎる杖を携帯する馬鹿はいない。だからこそ、大砲は砦や城壁にしか設置されていない訳だ。

だが、大砲は、そのあまりの不便さに目を瞑ってもいい程に、絶大な威力を発揮する。

たとえば、今のラビが、杖の代わりに大砲を使ってアクアランサーを放てば、あのオーガにすら致命傷を与えられるかもしれない。

そう言えば、そのヤバさがよくわかるだろう。

まあ、あくまでも、ノーガードの状態に直撃させられればの話だが。

「フレイムアロー！」

「サンダークラッシュ！」

「ストーンブラスター！」

そんな大砲を使って、複数の魔法兵達が強化された魔法を放つ。

炎の雨が、雷の閃光が、岩の弾幕が、魔物の群れを襲う。

しかしそれは、——魔物の群れから飛んできた魔法に相殺された。

「マジか」

「おいおい、勘弁しろよ。アレ、まさか全部リツチとかじゃねえだろうな？」

近くにいたドレイクが、魔法を相殺した人型の魔物を見てボヤク。

リツチ。

熟練した魔法使いがアンデット化する事で発生するとか言われている魔物。

危険度A。

私の目の錯覚じゃなければ、そんなのが複数体いるように見えるな。

しかも、あつちにいるのは、同じく危険度Aのケルベロスにサイクロプスか？

しかも、当たり前のように複数体。

ああ、ドレイクが言っていた通り、オーガもいるな。

複数体。

更に、危険度Bのグリフォン、キマイラ、ミノタウロス、その他もろもろ。

おまけに、危険度Cの雑兵がわんさか。

だとすると、あのリツチ以外の人型は、ヴァンパイアとかか？

もしそうなら、危険度Aだ。

……なんだ、この百鬼夜行は？

何故に、あんな強力な魔物どもが、当たり前のように徒党を組んでいやがる。

逃げた連中の気持ちだが、少しはわかったような気がする。

せめて、こつちに上級魔法使える奴がいれば、もう少し楽なんだろうな。

上級魔法は、広範囲の敵を圧倒的な火力で一気に薙ぎ払う大魔法。

その分、習得が困難で、上級魔法使いは闘気使いよりも少ない。

さすがに、こんな田舎領地には転がってない人材だったらしい。

むしろ、闘気使いがわかつてるだけでも二人（ドレイクと私）いるだけマシなのだろう。

「ちよっと撃つてみていいっすかね？」

「やめとけ。この距離じゃ、矢と魔力の無駄だ」

「風魔の矢っす！」

「聞けや！」

私の静止を無視して放たれたオスカーの矢は、もの凄い速度で飛翔し……ヴァンパイアっぽい奴にあっさりキャッチされた。

うむ。

やはり、あれはヴァンパイアと見るべきか。

「うわっ、マジっすか」

「だから、言わんこっちゃやない」

「いや、今のは結構良かったぞ。弓矢の嬢ちゃん、今度はもう少し引き付けてから撃て。なるべく弱そうなのを狙ってな。数を減らすのが最優先だ」

「わかったっす！」

ドレイクに言われて、オスカーがやる気を出した。

うむ、まあ、頑張れ。

とりあえず、もうヴァンパイアは狙うなよ。

無駄撃ちになるからな。

「り、リンネちゃん。私も撃った方がいいかな？」

「いや、ラビはいざという時以外は魔力を温存だ。お前の治癒が生命線だからな」

「わ、わかった」

逸りそうになったラビを諫める。

オスカーはともかく、ラビに後先考えない事をされると本気で困る。

もしも、この二人の能力が逆だったらと思うと、ゾツとするな。

「クツソオ！ 俺も早く暴れたいぜ！」

「俺達の仕事は魔物が接近してきてからだろうが。逸るな馬鹿」

「そんなくらい、言われなくてもわかってんだよ！ 気持ちの問題だ！」

「どうだか」

お、一番血気に逸りそうな馬鹿^{ペル}はシオンが止めてくれた。

まあ、いくらベルでも、無策で突撃する程、愚かだとは思っていない。
い。

本人も言う通り、気持ちの問題だろう。

それに、この分なら、すぐに出番は来そうだ。

その時に存分に暴れるがいい。

「……すげえな嬢ちゃん達は。普通、あれを見て、そんなに落ち着いてはいられねえだろうに」

「修羅場慣れでもしたんじゃないか？」

ドレイクの感心してるのか、逆に呆れてるのかわからない様子で言った言葉に適当に返す。

だが実際、オーガ戦を経て、あいつらは修羅場に慣れ、成長したのだと思う。

あの後、より一層の鍛練を重ね、今では私と父抜きでもオーガと渡り合えるんじゃないかと思える程に強くなった。

肉体的にも精神的にも。

だからこそ、こんな戦場で余裕を持っていられる。

本当に、子供とは思えない自慢の友だ。

「おっと。無駄話の時間は終わりみたいだな」

ドレイクが気を引き締めた。

私達も気を引き締める。

視線の先で、魔物の群れが突撃を開始したのだから。

「さあ、ここからが本当の戦いだな」

久しぶりの死闘だ。

ベルじやないが、せいぜい暴れるとしよう。

大砲の攻撃を突破し、最初に城壁に到達したのは、耐久力に優れる魔物、一つ目の巨人サイクロプスだった。

オーガからパワーを引いて、その分を防御力に足したような魔物だ。

そりや硬い。

「神速剣・破断！」

私は、それを一太刀で斬り伏せる。

一分だ。

今の私は、一分の間なら闘気を常に全開にし、神速剣を使い続ける事ができる。

こうして小分けにして使えば、限界は早々訪れない。

頭から真つ二つにしたサイクロプスの死体が、砂となって崩れ去る。

……やはりか。

「気をつける！ こいつら多分、全部変異種だ！ 首を落としても死なないぞ！」

「それを一撃で倒す嬢ちゃんは何者だよ……だが、大人として負けてられねえな！」

次に来た魔物に対して、ドレイクが突撃していく。

相手は、三つの頭を持つ狂犬、ケルベロス。

「湯煙ー！」

ドレイクは、ベル達との戦いでも使っていた煙幕によって、ケルベロスの視界を奪う。

「飛劍・嵐ー！」

続いて、右手に持ったやや短い剣を振り抜き、衝撃波でケルベロスを吹き飛ばした。

「アームド・ブースターー！」

更に、左腕の義手の拳部分が飛んで行き、ケルベロスの巨体を掴む。そのまま振り回して、後方のリッチの所へと投げ飛ばした。

ケルベロスとリッチが砂となって崩れる。

飛んで行った拳は、義手本体に接続されたロープが縮む事によって回収され、元に戻った。

……なんだ、その大道芸みたいな腕は。

父曰く、ドレイクは例の仲間達が全滅したという依頼の際に左腕を失い、義手を付け始めたらしい。

S級冒険者なら、腕を生やせるレベルの治癒術師に見てもらおう事もできただろうに、あえて使い続けているとの事。

そして、その義手に様々な魔道具を取り付け、予測困難な攻撃を仕掛ける事を得意とするそうだ。

だが、知識としては知っていても、実際に見ると曲芸みたいで、ちよつと驚いた。

しかし、見たところ、義手なしでも普通に強いな。
片手で放った嵐で、ケルベロスがズタズタになっていた。
ドレイクは、実はS級の中でもかなり上位の実力者なのかもしれない。

「俺達も行くぜ！」

次はベル達が突撃した。

相手は空を飛んで接近してきたグリフォン。

サイクロプスやケルベロスよりは格下だが、普通に考えれば強敵だ。

「攻ノ型・一閃！」

「破断・雷！」
いかずち

「風魔の矢つす！」

それを、ベル達は流れるような連続攻撃で瞬殺した。
ラビを温存してるのに、これか。

もはや、危険度Bではこいつらの相手は務まらないな。
成長が著しすぎるだろ、天才どもめ！

まるで、昔の自分を見ているようだ。

だが、それでも徐々に押し込まれてきた。

これは防衛戦だ。

私達の所だけ善戦しても、他が駄目なら意味がない。

騎士や熟練冒険者はかなり活躍しているが、兵士や他の冒険者、特に経験の少なそうな若手が随分と苦戦している。

「神速飛剣！」

「飛剣！」

「嵐の矢つす！」

「ギガボルティックランス！」

私達をはじめとした余裕のある奴らが、脆い所を遠距離攻撃で、時には駆けつけて援護するも、中々事態は好転しない。

やはり、相手の数が多い。

危険度Aの連中にいたっては、火力の足りない遠距離攻撃だと仕留めきれない。

せいぜい、城壁の下に落とすのが関の山だ。
あと、リッチどもの魔法が地味にウザい。

結界で威力が削れてなお、直撃すれば普通に死ぬ。
闘気使いなら大丈夫だろうが、そんな奴はほとんどいない。

それでも、籠城を選んだからこそ、この程度で済んでいる訳だ。
野戦を仕掛けなくて正解だったな。

……ぐ。

さすがに、そろそろ体が軋んできた。

「ラビ、頼む！」

「うん！ ヒール！」

ラビに治癒魔法をかけてもらい、悲鳴を上げ始めた体を修復する。

これで、まだまだ戦えるぞ！

それに、治癒術師はラビだけではない。

他の場所でも、戦線を支えるべく動き回っている。

これなら、まだまだ持つだろう。

最初に部隊を分けたから、疲弊してきても交代人員がいるしな。

そうして戦い続けて、一時間も経った頃だろうか。

それが戦場に現れたのは。

「なん……だと……!?!」

ドレイクが、空を見上げて驚愕する。

私も驚いた。

そこには、世界で最も強く、最も有名な魔物が、悠々と空を飛んでいたのだから。

全長30メートルは超えているだろう巨体。

全身を包む頑健な鱗。

城壁すらも一撃で破壊するだろう、巨大な爪と牙。

それは、あらゆる英雄譚に、強大な敵や、心強い味方として登場する怪物。

「ドラゴンか！」

ドラゴン。

危険度S。

すなわち、連携を取ったS級冒険者複数人でかからねばならない、化け物の中の化け物。

これを単独で討伐できるのは、前世の私のような『英雄』だけだろう。

そんな怪物が、この場に現れてしまった。

ドラゴンが大きく口を開け、そこに凄まじい魔力が集束していく。

ドラゴンの代名詞。

竜の息吹き、ブレスによる攻撃だ。

それが、発射されようとしていた。

「大砲だ！ 迎撃せよ！ 急げ！」

「フレイルムブラスト！」

「サンダーブラスト！」

「アクアブラスト！」

それに対抗するかのように、大砲から放たれた強力な魔法が、ドラゴンに向けて飛来する。

ブレスと魔法が、正面からぶつかった。

威力は……互角。

二つの力は相殺し、その衝突によって、凄まじい衝撃波が発生する。

「うおっ！」

「うっへえ……」

「きゃあー！」

「くっ……！」

その光景を見て、ベル達が驚愕の声や悲鳴を上げる。

ラビにいたっては踞ってしまった。

さもあらん。

……だが、今の攻防。

ドラゴンのブレスは、結界によって威力が落ちていたのだ。

その上で、これだ。

やはり化け物だな。

危険度Aの連中とは、格が違う。

そして、安心するのは、まだ早い。

ドラゴンは、早くも次のブレスの発射準備を始めていた。

あんなものを二度も三度も放たれたら、さすがに相殺しきれないだろう。

しかも、ドラゴンだけに気を配れば、他の魔物に蹂躪される。

……誰かが、ドラゴンの相手をする必要があるな。

「ラビ、いつでも治癒を使えるように準備しておけ」

「え？」

「私はちよつくら、——あのデカブツの相手をしてくる」

そう言って、私はドラゴンに目を向ける。

ドラゴンと、目が合った。

他の魔物と同じように、無機質で、何も映していないような瞳。

とても生者とは思えない、死んだ魚のような目。

そんな目をしてる奴が、これ以上暴れるな。

これ以上、無為な犠牲を出すな。

今、叩き斬って終わらせてやる。

「おい待て嬢ちゃん！ 何するつもりだ!？」

「ドレイク。ここは任せた。私はアレの相手をする」

「ふぎけんな！ 死ぬ気か!？ 行かせねえぞ！ 嬢ちゃんを死なせた

ら、俺はジャックの奴に合わせる顔がねえ!？」

……やはり、なんだかんだで優しいなドレイクは。

良い奴だ。

だが、心配は無用。

「安心しろドレイク」

「安心できるか!？ どこに安心できる要素がある!？」

あるんだよ。

何故なら、

「私は勝てない戦いはしない。勝算のない戦いで自殺するような真似は、断じてしない。

その代わり、——戦ったのならば、必ず勝つ。

たとえ勝率が限りなく低かろうとも、必ず勝利を引き寄せる。それが私だ」

それが、前世から受け継いだ剣神エドガーの……いや、私の生き様だ。

英雄とは、困難を打ち破り、強敵を打倒し、そして最後には必ず勝利して、生きて帰って来る者の事である。

「神脚！」

そして、私は脚に力と闘気を籠めて飛び上がった。

神脚は、王国剣術の型の一つ、飛脚の進化系。

この技を極めし者は、飛脚という技名の通り、空を駆ける。

私は闘気を全開にし、剣を握り締め、ドラゴンへと戦いを挑んだ。

17 ドラゴン討伐

空を走り、ドラゴンとの距離を詰める。

出し惜しみはなしだ。

初手から全力で決める。

「神速飛剣！」

最高速度で放った飛剣が、ブレスを放とうとしていたドラゴンの口の中へと吸い込まれ、ブレスを暴発させて爆発する。

まずは一度、厄介なブレスを封じた。

次は、完全に封じる。

「神速剣・一閃！」

ドラゴンの喉を切り裂くように、剣を一閃。

だが、やはり硬い。

闘気を纏っているとはいえ、こんな安物の剣では、鱗のない首筋すら切断できないか。

それでも、喉を潰した事に変わりはない。

傷口部分は、他の魔物と同じように、砂となって崩れている。

これで、もうブレスは撃てまい。

そして、これで終わりではない。

全力を出していられる一分の内に、できうる限りの攻撃を叩き込み、できうる限りのダメージを与える！

「うおおおおおおおー！」

ドラゴンの背に飛び乗り、翼に剣を突き立てて、そのまま超速で走り抜けた。

それによって翼を切断。

飛行手段を失ったドラゴンが、地上に向けて落ちていく。

私は、その間、ドラゴンの背中を滅多斬りにした。

ドラゴンが身を振って暴れれば、神脚で離脱し、別の部位を斬る。

ほとんどの攻撃は、鱗が硬くて、そこまで深くは斬れなかったが、決して浅くはない傷を刻んでいる筈だ。

そして、ズズンという大きな音を立てて、ドラゴンの巨体が地に落

ちた。

下敷きになって、何体かの魔物が潰れる。

だが、そんな事はお構い無しとばかりに、ドラゴンは暴れた。巨大な爪が、何度も私を狙って振るわれる。

「神速剣・流！」

それを受け流し、反撃に斬る。

だが、爪や腕の部分は特に硬く、かすり傷程度しか付かない。これでは駄目だな。

神脚を使つて、一旦距離を取る。

そこに、他の魔物どもが襲いかかって来た。

ヴァンパイアの爪が、リツチの魔法が、オーガの突撃が私に迫る。

「邪魔だ！ 神速飛剣・五月雨^{さみだれ}！」

それを飛翔する神速剣の連撃によつて粉碎する。

一秒に満たぬ間に百回は振るわれた剣が、魔物どもを粉微塵にし、砂へと還した。

しかし……

「ぐっ!？」

その瞬間、身体に鈍い痛みが走った。

チツ。

もう限界か。

我ながら貧弱な身体だな。

親に貰った身体にケチを付ける気はないが、鍛え方が足りん。

即座に闘気の出力を落とし、飛脚でその場から離脱した。

追い継るドラゴンには飛剣をぶつけてやったが、あまり効いていな
いな。

さすが、腐っても危険度Sといったところか。

今の私では、神速剣以外に有効打がない。

飛脚で空を飛び、城壁の上に戻る。

「ラビ！ 治癒！」

「う、うん！ ヒール！」

ラビの治癒魔法が、闘気の反動で傷付いた私の身体を癒す。

ラビは、昔よりも魔法の腕を上げた。

この程度のダメージなら、数秒もあれば回復する。

しかし、その数秒で事態は動く。

私という障害が消えた事により、ドラゴンが城壁へと突撃を開始した。

空を飛ばなくなり、ブレスを吐かなくなっただけ、まだマシだが、それでも見上げるような巨体が凄まじい速度で体当たりしてくるのは脅威だ。

迎撃に大砲が撃ち込まれるが、それは残りのリッチに相殺される。

リッチの数が減ったおかげで、何発かはドラゴンに命中し、私が挟った鱗を貫通してダメージを与えたが、ドラゴンは意にも介さない。

欠片も速度を落とす事なく、城壁に激突。

その部分が破碎する。

そのまま、ドラゴンは街の中へと侵入しようとした。

マズイ！

回復なんて待っている場合じゃないか!?

「させるか！ アームド・ブースター！」

「攻ノ型・破断！」

「破断・雷！」

「ストームブラストっす！」

だが、私が動く前に、ドレイク達の攻撃がドラゴンの巨体を押し返した。

おお！

さすがS級冒険者+天才ども！

しかし、状況は悪化した。

城壁が壊れた事によって、他の魔物どもがそこに集まり出している。

こっちも、それなりに優秀な指揮官がいるらしく、即座に指示を出して穴を塞ぐように陣形を組んではいるが、その分、他が手薄になる。苦戦は免れないだろう。

そして、肝心のドラゴンは、ドレイク達の攻撃によるダメージが薄い。

押し返す事を重視したせいで、傷にはなっていないのだ。

「リンネちゃん！ 終わったよー！」

「助かったー！」

一通り、戦況の分析を終えたタイミングで、私の治療も終わった。完全回復だ。

これでまた全力が出せる。

体力の消耗は激しいが、そんな事を言っている場合ではない。

「神脚！」

再度飛び出し、ドラゴンへと斬りかかる。

この化け物の相手は、私が務めなければならぬ。

こいつを野放しにすれば、今のように一瞬で戦況がひっくり返る。

誰かが止めなければならぬ。

そして、それは強い奴の仕事だ。

「神速剣・槍牙！」

今度は、大きな眼球を狙った刺突を繰り出す。

確実に、脳の奥まで破壊した手応えがあった。

だが、止まらない。

ドラゴンが爪を振るう。

それを避けるが、ドラゴンはそのまま体を回転させ、巨大な尾を叩きつけてきた。

「神速剣・一閃！」

それを真つ向から斬り伏せる。

回転した勢いのままに、私の斬撃とぶつかった竜の尾は、根元から切断されて宙を舞い、地面に落ちると共に砂となって崩れた。

それでも、ドラゴンは暴れ続ける。

尾を失ったのならば牙で。

それを避けられたのならば、再びの爪で私を狙う。

私は、その攻撃の全てを避け、受け流し、反撃でドラゴンを斬り刻んでいった。

今の私は強い。

まだまだ全盛期には程遠いが、それでも全力を出していられる一分の間は、古い衰えた老年期に迫る程の力を取り戻している。

つまり、剣神と呼ばれていた頃とほぼ同等という事だ。

その力があれば、ドラゴンごときに負けはしない。

「ぐっ……い！」

だが、それも一分間限定の話。

鍛えているとはいえ、まだ身体が出来上がっていない子供の身では、剣神の闘気には耐えきれない。

あの剣がない分、反動も減っているというのに。

それでも、身体が持たない。

やはり、鍛え方が足りん。

「神足剣！」

ダメージを与える事ではなく、弾き飛ばす事を目的として、強烈な蹴りをドラゴンの頭部に叩き込む。

ドレイク達に吹き飛ばされた時以上の勢いで、竜の巨体が浮いた。

「神速飛剣・嵐！」

そこへ、更に衝撃波の斬撃による追撃。

ドラゴンの足が止まる。

その隙に、再びラビの所へと撤退。

治癒によって回復し、三度突撃する。

「ハア……ハア……い！」

だが、ダメージはどうかになっても、体力の消耗が激し過ぎる。

反動で自分が傷つくような、身の丈に合わない闘気を使うという事。

それは、言うなれば、限界を遥かに超えた速度で走り続けているに等しい。

そんな事をしていれば、あつという間に体力は底をつく。

元々、持久戦など狙えはしないのだ。

短期決戦で終わらせるしかない！

「おおおおおおお！」

咆哮を上げながらドラゴンを斬り裂く。

神脚で跳ね回りながら、頭、腕、腹、背中とあらゆる部位をひたすらに斬り続ける。

そして、反撃の爪を再び受け流……

「ッ!?!」

ドラゴンの爪を受けた瞬間、――剣が、根元からボキリとへし折れた。

しまった……!

この剣は、前世で使っていた世界最強の剣ではない。

闘気を纏わせて硬度を上げていたとはいえ、どこにでもある安物の剣だ。

ドラゴンを相手にこれだけ打ち合えば、折れるのは当然であった。

クソッ!

体力の方を気にしすぎて、剣にまで意識が向かなかった!

元剣神にあるまじき大失態だ!

「くっ……!」

さすがに、剣もなしに防げる程、ドラゴンの攻撃は甘くない。

今まで受け流していたものを、全て回避せざるを得なくなった。

一時撤退する事すら容易ではない。

このままでは……マズイ!

「嬢ちゃん! 使え!」

だが、その時、ドレイクの大声と共に、後方から一本の剣が飛んで来た。

それを咄嗟に掴む。

これは……ドレイクが使っていた剣。

おそらく、片手で振るう事を前提としているのだろう、やや短めの剣。

だが、それは、小さな私の体にはよく馴染んだ。

そして、この剣からは凄まじい力強さを感じる。

さすがに、前世で使っていた剣程ではないが、さっきまでの安物とは比べる事すらもおこがましい強大な力。

間違いない。

この剣は……魔剣だ！

これならば！

「うおおおおおおー！」

私の闘気に、魔剣による疑似闘気が上乘せされる。

凄まじい力。

だが、同時に凄まじい反動が私を襲う。

今の私では、この状態で動ける時間は十秒とないだろう。

しかし、それだけあれば十分だ！

「神速剣・一閃ッ！」

渾身の力を籠めた神速剣を、ドラゴンの体に付いた数多の傷の中で、最も深い傷が刻まれた場所へと、寸分変わらず振り抜く。

結果、——ドラゴンの巨体は袈裟懸けに両断され、真つ二つに斬り裂かれた。

そして、他の魔物と同じように、傷だらけの竜の体は砂となって崩れていく。

その刹那。

ドラゴンと目が合った。

無機質……ではない。

さつきまでと違い、確かな意思を宿した瞳が、私を見据えていた。

「見事だ。小さき者よ」

そんな言葉を最後に、ドラゴンの体は完全に崩壊した。

後に残ったのは、巨大な砂の山のみ。

それすらも、戦場を吹き荒れる風に飛ばされ、すぐに散ってしまうだろう。

……終わった。

だが、最後ののは、いったい何だ。

この魔物どもは、意思なきゾンビみたいなものじゃなかったのか。いや、今はそんな事を考えている場合ではない。

ドラゴンとの戦いは終わったが、魔物どもはまだ残っている。それに、城壁が崩れた以上、もはや籠城はできない。

援軍を待つ余裕など、既がない。

速やかに殲滅しなければ、魔物どもは街の中へと攻め入る。

「もうひと踏ん張りだな」

私は限界に近い体を引き摺って動き出した。

まずは、ラビの所へ戻って回復しなくては。



「ありやりやく。ドラゴンやられちゃってますね」

「みてえだな」

魔物の群れが進行して来た森の中。

一際高い木の上に、三人の人物が乗っていた。

その内の二人、仮面の男と紫髪の女は、望遠鏡という遠方を見通す魔道具を目に当て、今まさに魔物の群れに襲撃されている街の様子を観察していた。

「やっぱり最強の魔物って言っても、あんなもんなんですかね」

ていうか、あの女の子やバイ。あんなにちっちゃいのに鬼のように強い。あの子に今回の事がバレたら殺されちゃうかも。

キヤー！ ワタシ怖い！ 助けて、スコープオンさん！」

「黙れボケカス」

「酷い！ スコーピオンさんの鬼！ 鬼畜！ ドS！」

騒ぐ仮面の男を嫌そうに睨み付けた後、紫髪の女はもう一度望遠鏡を覗き込んだ。

そこに映った、ドラゴンを討伐した少女を見る。

その顔には、恍惚の笑みが浮かんでいた。

「しっかし、暇だったから付いて来たが、良いもんが見れたぜ。餓鬼は嫌いだが、気の強い女は好きだぜえ。五年後くらいが楽しみだ」

女は腰の剣を撫で付けながら、「早く、あいつの苦痛に歪む顔が見てえ」と物騒な事を言つて笑つていた。

恍惚の表情で、まるで発情でもしているかのように息が荒い。せつかくの美貌と色香を台無しにする不審者っぷりであった。

「うっわ。変態さんに目を付けられるとか、あの子もかわいそ〜」

仮面の男は、さして同情もしていないような軽い調子でそう言った後、「さてさて」と呟いて、望遠鏡を懐にしまった。

「それじゃあ、任務は果たしたつて事で、帰還しましょうか。」

ワタシ、午後からデートの約束があるんで、報告とか早めに終わらせたいんですよ」

「てめえ、任務をなんだと思つてやがる」

「暇つて理由で付いて来た人に言われたくないですね〜」

そんな軽口を叩きながら、仮面の男が魔法を発動する。

再び空間の歪みが発生し、それが消えた後、彼らの姿はどこにもなかった。

シヤムシールの街を襲つた災害。

その実行犯達は、誰にも知られる事なく現れ、誰にも知られる事なく去つた。

しかし、事件はこれで終わった訳ではない。

この一連の事件は、後に始まる因縁のちの戦い。

その序章に過ぎなかった。

18 戦いの後

「これで……終わりだああああー！」

私がドラゴンを仕留めてから数時間後。

最後に残ったオーガを、三年前の雪辱とばかりにベルが斬り捨てた事で、魔物の群れは全滅した。

結局、援軍を待たずして戦闘は終了したが、こちらの被害も甚大だ。

城壁の一部が崩れ、そこにあつた大砲も破損。

街の内部も、城壁の穴から進行した魔物によつて一部破壊された。

幸い、その辺りの住人の避難は完了していたらしく、民間人の死傷者はいないみたいだが。

ただし、戦いに出た騎士や兵士、冒険者は負傷者多数。

決して少ない死者も出た。

だが、それでも、あの魔物の群れの規模を思えば、被害は奇跡的なまでに軽微だ。

私達の大勝利と言って差し支えない。

……戦いとはこういうものだ。

どんな英雄であろうとも、あれだけの戦力を前に、被害をゼロに抑えるなんて事は早々できない。

少なくとも、今の私にそこまでの力はない。

戦争に完全勝利などないのだ。

敗者は滅び、勝者は犠牲の上に掴み取った苦い勝利を噛み締めるのみ。

今回は、私の知り合いや友が死ぬ事はなかった。

だが、代わりに誰かにとつての大切な人が死んだ。

だから私は戦争が嫌いだ。

心底、ヘドが出る。

「嬢ちゃん。やったな」

私が出てしまった被害に思いを馳せていた時、ドレイクが話しかけてきた。

あれだけの数の魔物を相手にしながら、その体に大きな傷は見当たらない。

さすがだな。

「ドレイク、あの剣は助かったぞ。礼を言っておく」

「いいって事よ。ちよつとでも助けになれたんなら何よりだ。……正直、嬢ちゃんがドラゴンに向かって行った時は、心臓が凍る思いだったかな」

「だが、私の言った通りになっただろ。私は勝利を引き寄せた」

「ハッ！ まあ、そういう事にしといてやる」

ドレイクは愉快そうに笑った。

そして、その笑みが徐々に深くなっていく。

どうした？

「クッククク。それにしても、まさか本当に一人でドラゴンを倒しちゃうとはなあ。まさに小さな英雄ってか。ギルドがどう動くのか楽しみだ」

そう言つて、ドレイクは私に背を向けて歩き出した。

どっか行くらしい。

「じゃあ、俺は行くわ。またな嬢ちゃん。

それと、ギルドには明日あたりに顔出してみる。おもしろい事になると思うぜ」

「？ わかった」

そうして、ドレイクは去って行った。

また酒場にでも行ったのだろう。

それにしても、ギルドには明日あたりに顔を出せ、か。

元々、今回の報酬を受け取るのと、昇格試験の結果を聞く為にギルドには行くつもりだったが……何故に明日？

それに、おもしろい事？

……よくわからんが、まあ、先人の知恵には従っておくか。

「リンネちゃん！」

「おっと」

ドレイクが去った直後、今度はラビが現れた。

そして、いきなり私に抱きついてきた。
今にも泣きそうな顔で。

「よかった！ 生きててよかったよお！」

「……心配かけたみたいだな。よしよし」

「うええええん！」

ラビは泣き出してしまった。

私は孫でもあやすような気持ちで、ラビの頭を撫で続ける。

今回の戦いは、まるで戦争のような規模だったからな。

今までの冒険と違って、人も死んだ。

それに、私達の誰かが死んでもおかしくはなかった。

より一層、死を身近に感じた事だろう。

そんな不安と恐怖から解放された今、泣きたくなっても無理はない。
い。

むしろ、戦闘中に泣かなかっただけ立派だ。

その分、今は存分に泣かせてやろう。

「おーい！ リンネー！ ラビ！」

そうしてラビを慰めている間にベル達も帰って来た。

……こいつらは別に泣いてないな。

それどころか、ベルにいたっては満面の笑みだ。

遅いな。

「オーガを倒したぜ！ 三年前のリベンジ成功だ！」

「他にもいっぱい倒したっす！ 報酬は期待できるっすよ！」

「今度はドラゴンも俺達だけで倒してやるぜ！」

「む、弱いうちに挑んで無駄死にだけはするなよ」

「わかってるっての！ お前に負けてらんねえって事だ！」

「そういう事っす！」

「……騒がしい」

「皆、無事でよかったよお！」

なんにせよ、私達は全力で戦い、そして生き残った。

また、全員で馬鹿やって笑う事ができる。

そして、私達をはじめとした戦闘職が命懸けで頑張ったおかげで、

この街は守られたのだ。

今は、それを素直に喜んでおけば良い。

こうして、突然巻き起こった戦争のような戦いは、終結した。



そして、翌日。

復興に駆り出される大工や魔法使いの姿を尻目に、宿屋でぐっすり
と眠った私達は、それでも抜けきらない昨日の疲れを引き摺りなが
ら、冒険者ギルドを訪れた。

一応、昨日も「待つのは嫌だ！」とぬかしたベルとオスカーが突撃
したものの、何故か報酬も何も持たずに撤退してきた。

理由を聞いたところ、ギルド職員が目を回して過労死しそうな程に
忙しく動き回っていた為、さすがにこれ以上仕事を増やすのは哀れだ
と思つて退散してきたらしい。

本音は、順番待ちの列が嫌だったとか、そんなところだろう。

なるほど、ドレイクがギルドに顔を出すのは明日にしろと言つてい
た理由はこれだったのかと納得したものだ。

その反省を活かし、今日は午後にはギルドを訪れた。

さすがに、この時間帯なら多少は落ち着いてきているだろうとい
う考えだ。

空いた時間は、適当に街をぶらついて潰した。

私は武器屋に行つて来たな。

折れた剣の代わりを買つて来たのだ。

今回の反省を活かし、安物ではなく、そこそこに値の張る、そこそ
こに良い剣を買つた。

魔剣を買うという選択肢もあったが、あれを私が持っていては宝の
持ち腐れだろう。

全力で振るえば十秒しか持たないような切り札、使い時に悩むわ。

そんなものに大金をかけても、我が家の家計が傾くだけだ。
……しかし、武器屋の店主はやけに親切だったな。

まあ、私は街を守る為に戦った冒険者な訳だし、別に不思議ではないんだが、それにしてもだ。

この剣にしても、本来の半額以下で売ってくれたしな。
もしかしたら、店主はロリコンだったのかもしれない。

と、まあ、そんな感じで時間を潰し、ギルドにやって来た訳だが。

「おお、来たぞ！」

「あれがドラゴン殺しのお嬢ちゃんか！」

「それに、大活躍した子供達ね」

「まだ、ちっちゃいのに大したもんだ！」

私達を見た冒険者達が、やんややんやと騒ぎ始める。

内容は、大半が私達を称賛するものだ。

素直に「助かったぜ！　ありがとう！」と言ってくる輩もいる。

その声を聞いて、ベルとオスカーは鼻を高々と伸ばし、ラビは恥ずかしいのか、私の後ろに隠れた。

シオンも、満更でもなさそうだ。

私も、普通に気分が良い。

中には嫉妬の目で見てくる奴もいるが、それは仕方がない。
有名税というやつだ。

だが、そういう輩はごく一部だった。

大半の奴は好意的である。

冒険者つてのは、基本的に気の良い連中なのだろう。

ふと見れば、酒場の一角にドレイクがいた。

私と目が合うと、ニヤリと笑って親指を立てた。
なるほど。

おもしろい事とは、これか。

遂に、楽器を携えた吟遊詩人が私達の歌を歌い出した。

ラビが羞恥で茹で上がる前に、受付に赴く。

受付対応は、いつも通りラビとシオンだ。

ラビは若干壊れ気味だが、まあ、大丈夫だろう。

そんなラビに配慮したのか、シオンが先に受付嬢へと話しかけた。

「昨日の報酬を貰いたい。それと、昇格試験の結果を教えてください」

「はい。少々お待ちください」

受付嬢は笑顔でシオンに対応すると、奥から大きめの金貨袋を五つ持ってきた。

ほう、結構デカいな。

それぞれ、金貨百枚はありそうだな。

「こちらが、今回の報酬になります。そして、昇格試験の結果ですが、文句なしの合格です。こちらをどうぞ」

そう言って、受付嬢は五枚のカードを差し出した。

「皆さんの新しい冒険者カードになります。ランクはB級。一流冒険者の仲間入りです。なくさないでくださいね」

「おお！」

「やったっすー！」

ベルとオスカーが嬉しそうにカードを受け取り、ラビとシオンもそれに続く。

当然、私も受け取った。

これがB級の冒険者カードか。

……ん？

「なあ、私のだけデザインが違うんだが？」

「あ、はい。リンネさんは今回、ドラゴン討伐という多大な功績を挙げられた為、ギルド上層部の判断により、B級ではなくS級に特進という事になります」

「はっ」

今、とんでもない事を言わなかったか？

「なんだそりや!? リンネだけズリイぞー！」

「そうっすよー！ それなら、あたし達もA級くらいに上げるっすー！」

「いや、ドラゴンを討伐したんだ。妥当と言えば妥当だろう。文句があるなら、お前らもドラゴンを狩って来い」

「くっっー！」

「それを言ったらおしまいっすよー！」

「えっと、リンネちゃん、おめでどう」

素直に祝福してくれるのはラビだけか。

いや、後ろの方で「新たな英雄にかんぱーい！」って声が聞こえてくるが、そっちはどうでもいい。

……いや、ちよつと待て。

もしかして、この話はすでに拡散されてるのか？

だとすると、武器屋の店主がやけに親切だったのも説明がつくぞ。

まあ、だからなんだという話でしかないが。

はー……にしても、私がS級冒険者ねー。

不思議な気分だ。

宝の持ち腐れになりそうだな。

「え、えくと、それですね……」
ん？

まだ何か話があるのか受付嬢？

なにやら目が泳いでいるが、どうした？

「本来なら、功績に見合った特別報酬が支払われるのですが……なにぶん、今回襲撃してきた魔物は死体が残らず、素材を得る事ができなくて……」

つまり、その、街もギルドも収入が得られず、冒険者の皆さんへの報酬と街の復興資金の捻出で完全に大赤字な訳で……。

それに、事件の原因究明もしないといけないので、尚の事、出費が……」

ああ、なるほど。

そういえばそうか。

それは、御愁傷様としか言えんな。

だが、その話が私に何の関係があるんだ？

「それですね……リンネさんのS級昇格は、その特別報酬の代わりと申しますか……ぶっちゃけ、それで勘弁してください！ お金がないんです！」

そう言って、受付嬢は土下座するような勢いで頭を下げた。
必死だ。

「お願いします！　それで納得してください！　納得させられなかったら、私、クビになっちゃうかもしれないんです！」

ウチには食べ盛りの弟達がいるんです！　どうか！　どうか、お願いします！」

受付嬢は、恥も外聞もなく、頭を下げ続ける。

なんだ、これは？

冒険者ギルドの暗部を見た気分だぞ。

一気に気分が沈むわ。

私は、受付嬢の肩に優しく手を置いた。

「お姉さん……私は鬼じゃないからな。そういう事情がある場所から搾り取ろうとは思ってない。だから、安心しろ」

「……本当ですか？」

「ああ」

「ありがとうございますー！」

受付嬢は泣き崩れてしまった。

いったい、どれだけ上から圧力をかけられていたのやら。

なんにせよ、これで一件落着だな。

「……なんだ、この茶番は」

最後にシオンがそう呟いた。

それには激しく同意だった。

その後、私達はせつかくだから、宴会を始めた冒険者達に交ざる事にした。

ベルとオスカーはタガが外れたかのように騒ぎ、ラビは戦闘中に治癒魔法で助けられたというイケメン冒険者達に囲まれて茹で上がっていた。

シオンは、それを尻目にチビチビとコップを傾けている。だが、私は知っている。

あのコップの中身はジュースだ。

そして、私はドレイクと一緒に飲んでいた。

前世の体なら酒を飲むところだが、今回はシオンと同じくジューズだ。

未成年の飲酒は体に悪いし、父と母に怒られそうだからな。

「どうだい、嬢ちゃん。一気にS級冒険者、英雄の一人になった感想は？」

「まあ、驚きはしたな。そのくらいだ」

英雄として称えられるのは初めてじゃないからな。

感想としては、そんなもんだ。

「チツ。なんだよ、つまんねえな。せつかくギルドに入れ知恵して仕掛けたドツキリだつてのによ」

「ちよつと待て！ お前の仕業か！」

犯人はこんなところにいたのか！

「おいおい、睨むなよ。俺はちよつとばかり、S級に嬢ちゃんを推薦しただけだ。だから、怒るなつて」

「……別に怒つてはいない。ハメられたみたいで、ちよつとイラツとしただけだ」

「そうか。なら、飲め飲め。そういうのは飲んで忘れちまえ」

「ジューズだぞ？ それに、ハメた張本人が何をぬかすか」

そう言いつつも、私はジューズを飲んだ。

グビグビと飲んだ。

酒ではない筈だが、なんだか酔ってきたような気がする。

これは、いわゆる雰囲気酔ったというやつだろう。

「まあ、なんにせよ、これからは同じS級同士だ。よろしくな」
「うむ」

ドレイクが差し出したコップに自分のコップをぶつけて乾杯する。

ドレイクは、めちやくちや機嫌が良さそうだ。

「まさか、ジャックの娘と同じ階級になるとはな……感慨深いもんだ」
「そうか」

「ああ。人生、何が起こるかわかんねえな。あいつが冒険者を辞めると言い出した時に、俺達の道は完全に別れたもんだと思つてたんだが……」

そうして、酔ったドレイクは、父との昔話や、父と母の馴れ初めなんかを語り出した。

とても気持ち良さそうに酔っていやがる。

いい歳したおっさんがだらしないとは言うまい。

前世の私も、酔った時はこんな感じだったからな。

そして、一通り話して満足したのか、ドレイクは唐突に違う話を振ってきた。

「そうだ。嬢ちゃん、俺とパーティーを組まねえか？ あの坊主どもも一緒によ。」

俺もそろそろ歳だ。後輩を教えるだけ教えた後に引退つてのも悪くねえ」

……ほう。

興味深い話だな。

さしずめ、ドレイクは、前世の私がアレクを弟子に取った時と似たような事を考えているのかもしれない。

だが……

「それは、おもしろそうだな。だが、断る」

「なんでだ？ まだ親元を離れたくねえってんなら、何年か待ってもいいぞ？ ……それとも、俺が嫌いか？」

「いや、そうじゃない。って、なんで泣いてるんだお前は？」

私に嫌われるのが、そんなに嫌か？

まあ、知り合いの子供に嫌われたらショックではあるが。

「じゃあ、なんでだよ？」

「それはな……」

納得していなさそうなドレイクに向けて、私は話す。

ドレイクの誘いを受けられない理由を。

「私は、——しばらくしたら冒険者辞めるつもりだからな」

ドレイクに向けたその言葉は、予想外に酒場に響いた。

冒険者達が啞然とした顔で私を見る。

『……は？』

そして、ほぼ全員が、そんな間の抜けた声を上げた。ベルやオスカーもだ。

ラビも絶句しているし、シオンも目を見開いている。ん？

「言つてなかったか？ 私は王都で騎士になるつもりだぞ」

『はあああああああああああああ!?!』

絶叫が冒険者ギルドに響いた。

私は、それを尻目にジューズを飲み続けたのだった。



「そうか。襲撃は失敗に終わったか」

「その通りでございます陛下！ なんか、馬鹿に強い女の子がいますね。」

ドラゴンはその子にやられちゃいました！

他の魔物が全滅するのも、時間の問題だと思いますよ」

「ふむ」

どことも知れぬ暗い部屋。

そこに五人の人物がいた。

部屋の奥にある玉座に腰掛ける、陛下と呼ばれた女。

その側に控える、巨漢の老人。

玉座の前に立ち、おどけた態度で報告する仮面の男。

その隣で我関せずの姿勢を貫く、紫髪の女。

そして、どこまでも無言な兜の男。

「ドラゴンは期待外れであったな。まさか、三剣士を引き摺り出す事すらできぬとは。」

リッチやヴァンパイアも、コストの割には使えない。

やはり、人形は英雄と呼ばれる強き人間を使うのが一番という事

か。

まあ、実験としては有意義であつたし、今後も続けるが」

仮面の男の報告を聞いた陛下と呼ばれた女が、感情の感じられない冷たい声で、そう言った。

その様は、ただひたすらに冷酷。

女は怖じ気の走るようなおぞましい事を、平然と口にする。

「陛下、如何なさいますか？」

巨漢の老人が女に尋ねる。

「そうだな。シャドウは有望な人材を探せ。今回と同じように、モリメットを護衛につける。

其奴そやつのような強き者を連れて参れ」

「ハハア！」

シャドウと呼ばれた仮面の男は、まるで道家師のようなおどけた態度で、大袈裟な程に恭しく頭を下げた。

「スコープオン。其方そなたは教国に赴き、その剣で『神龍』を弱らせろ。

ただし、期が熟すまでは悟られるな。

他に指令があれば、追つて報せる」

「了解。チツ、ドラゴン相手か。つまんねえ仕事だぜ」

紫髪の女が一人ごちる。

それを巨漢の老人が鋭く睨み付けた。

「スコープオン。陛下の命が不服と申すか？」

「そういう事じゃねえつての。あんたは真面目過ぎるぜ爺さん」

「やくい！ 怒られてやんのく！ スコーピオンさんのお馬鹿さくん！」

「殺されてえのか！ テメエは不真面目過ぎんだよシャドウ！」

言い合いをしながらも、三人は仕事をこなす為に去つて行く。

あれでいて、与えられた仕事は真面目にやるのだ。

だからこそ、処理されずに重用されている。

「では、陛下。私も失礼いたします」

「ああ」

そして、巨漢の老人も去つて行き、部屋には女一人が残される。

彼女は虚空を見つめ、何かを考えながらポツリと呟いた。

「あのドラゴンを討伐する少女、か」

それが何を思っただの言葉だったのか。

それが、いったい、どういう意味を持つ言葉なのか。

それを知る者は誰もいない。

今はまだ。

19 将来の話

現在。

私は、実家のリビングにおいて、両親と対峙していた。

父はとてつもなく深刻な顔をしており。

母も、父程ではないが真剣な顔をしている。

それを見ていれば、自然と私の顔も引き締まるというものだ。

そして、遂に父が口を開いた。

「これより、緊急家族会議を執り行います」

その言葉で、会議は始まった。

議題は、おそらく、私の将来についてだ。

何故、こんな事になったのかと言うと、発端は私達が村に帰還したところまで遡る。



数日前。

あの、私は騎士になる発言をした宴会だが……あれは、その後も普通に続行された。

当然のように、私は質問攻めに合った訳だが、当たり障りのない発言で乗り切った。

私が騎士になろうと思った理由は前世にある。

故に、下手に説明ができないのだ。

前世の事を不特定多数の人間に話すつもりはないからな。

絶対に面倒な事になるのが目に見える。

ベル達にすら話してはいないくらいだ。

あんな口の軽そうな奴らに話せるか。

私は、前世の事を話すなら、相当親しい奴にだけと決めている。

具体的には、両親、弟子ども、あとは前世で腹心だった連中くらい

か。

例外としてシオンとかも知っているが……まあ、仕方がないだろう。

話しちまったのは、その場のノリだ。

こればかりは、どうしようもない。

で、話を戻すが。

宴会はその後、酔ったドレイクが私に振られた悲しみで暴れ出した事で、カオスに突入した。

ドレイクを取り押さえようとして、吹き飛ぶ冒険者。

吹き飛ぶギルド職員。

飛び交う酒瓶に、飛び交う野次。

どさくさに紛れてリベンジを挑み、ボッコボコにされたベル。

涙目で負傷者に治療をかけ続けるラビ。

当たり前のように、野次飛ばしてる連中に交ざっていたオスカー。

我関せずを決め込むも、結局巻き込まれたシオン。

そんな混沌の宴は、最終的に私がドレイクを殴って止めた事で終了した。

後に残ったのは、壊れきった酒場の成れの果てと、泥酔or気絶して転がる冒険者のみ。

修理代は、暴れたドレイクに出させるという事に決定した。

そして、宴が終わった後、変に疲れた私達は、とりあえず宿屋でもう一泊。

翌日には、二日酔いに苦しむドレイクに見送られながら、乗合馬車で領都を出発。

また五日かけてトリスの街に戻り、そこから三日歩いてマーニ村に帰って来た訳だ。

そこで出迎えてくれた父に、口の軽いベルとオスカーが、私の騎士になる発言を暴露。

私達の話す報告という名の冒険譚を、笑顔と驚愕の表情を交互に浮かべながら聞いていた父は、

それを聞いた瞬間に一瞬フリーズし、急に真顔になった後、私を連

れて家に帰った。

そして、ロビンソンと共に牛の世話をしていた母を呼びに行き……
緊急家族会議の開催を宣言したのだ。

そうして、現在に至る。



「まずは、お帰りなさいリンネ。無事に帰って来てくれて嬉しいわ」
「うん。ただいま。ママ」

母は優しく微笑んで、私の帰りを喜んでくれた。

その後、怪訝な表情で父を見る。

「それで、いきなり家族会議なんてどうしたのよ？ 私はまだ、詳しい話を何も聞いてないんだけど」

「……ああ。実は、リンネが騎士になりたいと言い出してな」

母の指摘を受けて、父は凄まじく重苦しい声で語り出した。

「そんなにか？」

私の発言は、そんなに重大な問題なのか？

「へえ、そうなの。リンネが騎士なんて意外……でもないわね。」

リンネはエドガーの絵本が大好きだったし。

でも、その何が問題なの？」

「騎士になる為には王都の騎士学校に入らいいいけない。その学費は結構高いんだ。我が家の経済状況では難しいと言わざるを得ない」

「まあ、そうね。でも、それはリンネの冒険者としての稼ぎでどうとでもなるわ。それで？ 本音は？」

「……………」

一瞬にして母に論破された父は黙り込んでしまった。

沈黙がリビングを包み込む。

ふと見れば、窓の外からロビンソンが心配そうに家の中を見つめていた。

お前だけが癒しだ。

そして、十秒程の沈黙を破り、父はやつと口を開いた。

「……………騎士になれば、国に命令された場所で働く事になる。つまり、この村には居られなくなる。」

リンネがいなくなってしまう。それが寂しくて……………」

「はあ……………そんな事だと思ったわ」

なんと……………!?

そんな事を思ってくれたのか！

いや、そりやそうだよな。

子煩悩な父の事だ。

そういう考えになっても不思議ではない。

しまった。

私の配慮が足りなかった。

「でもね、あなた。子供はいつか親元を離れるものよ。私はそうでもなかったけど、あなたはそうだったでしょう？」

それに、リンネは家出する訳じゃなくて、自分の夢を見つけてくれたの。

なら、背中を押してあげると、もし帰って来た時に優しく迎えてあげるのが、親の仕事よ」

「……………ああ。わかつてる」

本音を暴露し、弱々しくなった父の背中を、母が優しく撫でながらそう言った。

二人とも、私の選択を尊重してくれている。

この二人の子供で良かったと、心底そう思った。

「パパ、ママ、大丈夫だ！ 私は帰って来る！」

そんな二人を安心させるべく、私は将来設計の続きを話した。

「何故なら、騎士学校を卒業したら、適当な理由をでっち上げて、この村に左遷されて来る予定だからな！」

だから、何も心配はいらんぞ！

という意思を籠めて、グツと親指を立てながら、力強く宣言した。そうしたら、何故か二人はずっこけてしまった。

なにゆえ？

「えつと……リンネ？ 騎士になりたいって言い出したのは、騎士の仕事に憧れたからじゃないの？」

「違うぞ」

即答すれば、何故か母は頭を抑えてしまった。

逆に、父はなんか嬉しそうにしている。

騎士と聞いて、ヨハンさんでも思い浮かべたか？

「じゃあ、なんで騎士になりたいと思ったの？」

「……それには、とても深い事情がある」

そして、今度は私が真剣な声で語る番だ。

私の真剣さを理解したのか、二人も再び神妙な顔になる。

「まず、私は剣神エドガーの生まれ変わりな訳だけど」

「……ああ、そうだね」

「……そうね」

む！

二人の顔が、一気に緩んだ。

とてつもなく優しい目で私を見ている。

やめろー！

そんな目で私を見るなー！

「ゴホンッ！ それで、前世の私は命懸けでこの国を守ったんだ。

仲間も沢山死んだ。一番大切な奴も死んだ。

だから私は、あいつらの犠牲を無駄にしないように、戦争が終わつ

た後も、この国を守ってきた。

この国に生きる人々を守ってきた」

世直しの旅（笑）とかも、その一環だ。

人を襲う魔物を倒し、人を踏みにじる事しかできないクソ貴族を斬

り捨てたりしてきた。

あれだけの犠牲を出して、あれだけ辛く悲しく思いをしてまで守り

抜いた国だ。

そんな国で不幸になる奴を、できる限り減らしたかった。

できる限り平和で幸せな国にして、あいつらの犠牲は無駄じゃな

かったんだと証明したかった。

「そして、私は生まれ変わっても、それを曲げる気はないんだ。

だから、騎士になりたい。

権力と戦闘力。正しく使えば、最も人を助け、守る事のできる力を併せ持った騎士に」

さすがに、前世程の活躍はできないだろう。

力も衰えたし、剣神エドガーとしての名声も権力も、今の私にはない。

それでも、少しでも正しく力を使いたい。

大切なものを守るついでに、手の届く場所は守りたい。

それが私の望みだ。

それに、国の重要戦力である騎士になれば、弟子どもの持つ権力を笠に着れるだろうしな。

そうすれば、それなりの力は持てる筈だ。

「いや、それは……」

「良いんじゃないかしら」

渋い顔をした父の言葉を、母が遮った。

「スケールが大きすぎて、私にはよくわからないけれど、それがリンネのやりたい事なのよね？」

「うん！」

それは自信を持って言える。

これは、他の誰でもない、自分で考えて自分で決めた道だ。

「なら、よし。私は応援するわ。頑張りなさい、リンネ」

「……うん！　ありがとう、ママ！」

この瞬間、私は前世以上に立派な騎士になる事を決めた。

なんだかんだで、前世では適当に済ませていた部分も多いからな。

母に応援された以上、半端な事はできん！

「……はあ。こうなったら、俺だけ我が儘言う訳にもいかないな」

私と母を見ながら、ポツリと父がそう呟いた。

「正直、想像以上に壮大で驚いたけど……立派な夢だ。

パパも応援するよ。頑張りなさい。

でも、疲れたらいつでも帰って来ていいからな！」

「パパ！」

「よく言えました」

父が涙ぐみながらも賛同してくれた。

この瞬間、私は前世をも超える最高の騎士になる事を誓った。

父に寂しい思いをさせてまで進む道だ。

生半可な事はできん！

そうして、家族会議は、具体的にいつ頃騎士学校に通うのかという話に移った。

さすがに今すぐというのはなし。

騎士学校に通うのに、11歳は幼すぎるのだ。

結局、「どうせならお友達と一緒に行くのが一番じゃない？」と言いつ出した母によって、私が王都に行くのは二年後。

シオンの奴と一緒にという事になった。

一応、知り合いなら既に弟子どもとかが王都にいるのだが、二人はまだ私の前世を信じきっていないようで、あまり真面目には聞き入れられなかった。

ちなみに、王都までシオンとの二人旅になると決定しかけたところで、「若い男女が二人旅なんて、けしからん！」と父が吠えたが、私は男に興味はないし、再婚するつもりもない。

これでも、私は一途なんだ。

未だに、昔の女を引き摺っているのだよ。

それを二人に言ったら、凄まじく微妙な顔をして「孫の顔は見れないかも……」と呟いていた。

そして、シオンとの二人旅は許可された。

まあ、シオンが了承すればの話だが。

そうして、家族会議が円満に終わろうとした時、ふと思いついたように母が言った。

「そういえば、この村に左遷されるつもりって言ってたけど、それってどういう事なの？」

その質問に、私は自信を持って答えた。
ハッキリと。

恥ずべき事など何もないと言わんばかりに。

「ママよ……それはそれ。これはこれだ」

物事には優先順位というものがある。

たしかに、私はこの国や、そこに住む人々を理不尽から守りたい。
しかし、見知らぬ他人よりも、父と母の方が遥かに優先順位は上だ。
どちらか選べと言われたら、迷わず二人を選ぶ。

そんな二人と離れて、遠方で仕事なんてできるか！

大丈夫だ。

左遷されても立派な騎士にはなれる。

ヨハンさんのようにな！

それに、弟子どもに接触しておけば、普段はこの村でのんびりとし、
有事の際にだけ召集されるという特殊な勤務形態も取れる筈だ。

奴らの権力があれば、そのくらいの融通は利かせられる。

もし断られたら？

存分に語り合おうではないか。

肉体言語でな。

そう説明したら、二人の目がとても優しくなった。

なにやら、現実の见えていない子供を見るような目だった。

そんな目で見られるのは、誠に遺憾だ。



その夜、私が寝た後に、私抜きで二度目の家族会議が行われた。

議題は、昼間と同じく私の将来について。

こっそりと起きて聞き耳を立てたところ、「とりあえず、やるだけやらせてみよう」という結論に至ったようだ。

こうして、私の騎士学校入学は、家族公認となったのだった。

20 旅立ち

あの魔物襲撃事件から二年が経ち、私は13歳になった。

この二年、何故かちよくちよく出くわすドレイクの話によると、あの事件の真相は、結局わからずじまいだったらしい。

私達が領都を去った後、国からの支援金を得た領主が、冒険者ギルドに事件の原因究明の依頼を出し、

ドレイクをはじめとしたベテラン冒険者達が、国から派遣されて来た騎士団と合同で調査を行うも、成果はなし。

当初は、近場の迷宮から異常発生した魔物達だったのではないかと考えられていたそうだが、その迷宮に何も異常が見つからなかった為、調査は振り出しに戻った。

というより、迷宮はおろか、魔物どもが進行して来た森にすら異常が見つからなかったそうだ。

あの大進行によつて多少荒れてはいたが、逆に言えばそれだけ。

何も無い所から突然現れたとしか思えない。

それが、有識者の結論だった。

なんの役にも立たない情報だな。

で、そんな、なんの役にも立たない情報しか得られなかったが、これ以上は雲を掴むような話という事で、調査団は解散。

あとは、国の魔物研究者達が、独自に考察を重ねるしかない。

そうして、あの被害しか生まなかった事件はお蔵入りになりましたとき。

最悪だな。

再発防止すらできないとは。

そんな最悪の事件と違って私生活の方だが、こっちは特に変わりない。

前までと同じく、剣術教室をやり、冒険者活動をして、たまにちよつと遠くの街に行つてみたりもした。

そんなもんだ。

強いて変わった事を上げるなら、私以外の連中の冒険者ランクがA級に上がった事くらいか。

ベルだけが筆記試験で何度も落ちたな。

その度に猛勉強して、最近ようやくA級になったところだ。

……私も、特例でS級にならなければ、ベルと同じ勉強地獄を体験するハメになっていたかもしれない。

素直にS級になっておいて良かった。

だが、そんないつも通りの日常も、今日で一旦終わりだ。

季節は冬。

騎士学校の入学試験まで、残り一ヶ月半にまで迫っている。

この辺境から王都までは、乗合馬車で約一ヶ月という話だ。

そんな長旅なら、想定外のトラブルで遅れる可能性を考えて早めに出発するのは常識。

つまり、今日こそが私の、私達の旅立ちの日なのだ。

「リンネ、体には気をつけるのよ」

「わかった」

現在、私はチャールズの引く荷車の横で、母やヨハンさん、ベル、オスカー、ラビ、ロビンソンといった面子に別れの挨拶をしていた。

ちなみに、父は「トリスの街までは俺が送る。これだけは絶対に譲らない!」と言い張った為、チャールズの手綱を引いて待機中だ。

シオンは一緒に行くので、別れの挨拶は必要ない。

「リンネ! これだけは覚えとけよ!」

俺はいつか、お前を遥かに超えた英雄になる! そして、お前にリベンジを果たしてやるからな! その時はまた会おうぜ!」

ベルはそう言っつて、手を差し出してきた。

握手だ。

驚いたな。

こいつに、こんな良識的な対応ができるのか。

思わず、その手を凝視してしまった。

「なんだよ?」

「……いや、なんでもない。で、リベンジだったか。そうだよなあ。お前、結局、私に一回も勝てなかったもんなあ」

「なんだとー!」

ベルが顔を真っ赤にして怒る。

だが、その怒りが具体的な行動になる前に、私は神速でベルの差し出された手を握り返した。

「だから、私に勝つまでは死ぬなよ。また会おう」

「……へっ! 当たり前だ!」

ベルはそうして、勝ち気に笑った。

うむ。

良い顔だ。

これなら、心配はいらん。

「いやー、寂しくなるっすね。馬鹿が二人も減ったら愉快さ半減っすよ」

「オスカー……お前はあれだな。もう少し、その享楽主義なところを直した方がいいな」

「善処するっす」

「嘘つけ。今まで善処なんてした事ないだろ」

「ちよつと待て。何、さりげなく俺まで馬鹿扱いしていやがる」

ヨハンさんと話していたシオンがツツコミを入れてきたが、軽く無視してオスカーとも握手を交わす。

まあ、こいつも大丈夫だろう。

なんだかんだで、こいつが死ぬようなイメージが湧かない。

のらりくらりと生き残りそう。

そして、オスカーはシオンにも別れの挨拶をしに行き、煽り、ベルも巻き込んで、いつもの喧嘩を始める。

それを尻目に、私はラビと向き合った。

「ラビ、お前には大変な役目を任せる事になるな。私達が抜ける以上、あの馬鹿二人の手綱をお前一人で握らねばならない。

マジで大変だろうが、今のお前ならできると信じているぞ。頑張れ」

「うん……リンネちゃんも頑張ってるね」

ラビは別れが寂しくてなのか、目に涙を溜めながらも、必死に頷いていた。

心配だな。

だが、私は知っている。

冒険者を始めて一番成長したのは、間違いなくラビだ。

ならば、信じよう。

「それでも、もし寂しくなったり、どうしても駄目そうな事があったら、王都に來い。遠慮なく、私を頼っていいからな」

「……うん」

「その代わり、私が困った時はお前らを頼るからな。……また会おう」

「……うん！」

そうして、私は最後にラビの頭を優しく撫でる。

思い返すと、こいつに対しては、友達というより妹でも相手にするような感覚だったな。

しかし、もうラビは、私が守ってやらなければならない存在ではない。

まだまだ幼く頼りないが、もう庇護者の手を離れて生きていける、一人前の冒険者だ。

本当に困った時は助け、逆に私が困った時には助けを求める。

これからは、そういう対等の関係だ。

実は、この三人もまた、近いうちにこの村を出て行く予定なのだ。私達が村を出るのを良い機会だと考えて、今までのように定期的に街に行く感じではなく、本格的に色んな場所を巡ってみると言っていた。

ドレイクみたいなもんだな。

その果てに、どこかの街を拠点にするのか、父のように誰かと結婚でもして引退するのか、ドレイクのように歳をとっても放浪を続けるのか。

それは、わからない。

だが、生きていれば、また会えるだろう。

「リンネちゃん」

と、今度はヨハンさんが話しかけて来た。

シオンが馬鹿二人と喧嘩を始めたから、手が空いたんだろう。

「リンネちゃんには、本当に感謝しています。君のおかげで、シオンはあんなに明るくなった。本当にありがとうございます」

「私はそんな大した事をした訳じゃないぞ」

ただ、独りぼっちの少年に友達を作ってやっただけだ。

それも、無理矢理。

あれで上手くいったのは、単純にあいつら自身の問題だろう。

全部が全部、私の手柄だったと言う気はない。

「それでもです。キツカケは間違いなくリンネちゃん、君でした。だから僕は、君にお礼を言いたいんです」

「……まあ、感謝されたのなら素直に受け取っておく。どういたしまして」

「ええ。本当にありがとうございます」

そうして、ヨハンさんは優しい目で私とシオン、そしてベル達を見た。

息子とその友達、そして教え子の旅立ちなんだ。

感慨深さでも覚えているのだろう。

だが、その顔が急に真剣なものになる。

そして、その真剣な顔で、私に語りかけてきた。

「リンネちゃん。君にこんな事を言うのは非常に厚かましいんですが、聞いてくれますか？」

「うん？ 別に構わないが」

「では……騎士学校に入ったら、あの子を、シオンを支えてやってくれないか？」

む？

まあ、シオンもまた我が友だからな。

困った事があれば普通に助けてやるが……急にどうした？

「もしかしたらなんです……今の騎士学校には、僕が左遷されるキツカケになった騒動、それをシオンに仕掛けたという、大臣の息子

さんがいるかもしれないんです」

「……なるほど」

シオンにとっては、久遠の仇敵だな。

あいつが昔の事をどれだけ根に持っているかはわからないが、少なくともサラツと水に流せるような話ではないだろう。

「あの子も馬鹿じゃありません。もしその子を見つけても、安易に復讐に走ったりはしないでしよう。そんな事しても、また権力に潰されるだけだとわかってる筈なので。」

……でも、そんな相手が近い場所にいるというのは、凄まじいストレスになると思うんです」
だろうな。

私で言えば、あの何度殺しても殺し足りない程憎んでる魔帝のクソ野郎と、同じ学校に通うような話だ。

しかも、そいつは馬鹿強いから復讐もできない。

やってしまえば、自分だけではなく周りに迷惑がかかる。

……私だったらストレスで禿げ上がりそうだ。

なるほど、ケアが必要だな。

「わかった。そういう頭使うのは苦手だが、やれるだけの事はやる。私に任せておけ」

「……お願いします。本当に、できる限りでいいので」

そう言って、ヨハンさんは頭を下げた。

本気で息子が心配なんだな。

もしかしたら、ヨハンさんは、本当はシオンに騎士学校へ行ってほしくないのかもしれない。

それでも、シオンは何言っても止まらなかつたところか。

だから、こうして頭を下げる。

少しでも息子の助けとなるように。

……この人も良い親だ。

安心しろ。

その心意気には答える。

「ワンワン！」

少し重くなつた空気を切り裂くように、今度はロビンソンがやって来た。

グッドタイミングだ。

さすがは、我が家のペット筆頭。

「よしよし。お前ともしばらく会えなくなるな。家の事を頼んだぞ」

「ワンッ！」

ロビンソンは力強く吠えた。

多分、「あつしにお任せくださいませえ、ご主人様！」とか言っているのだろう。

実に頼りになる。

これで、我が家の守りは磐石だな。

その後、ロビンソンはチャールズに向かってワンワンと吠え、何かを言っていた。

道中は任せた的な事を言っているのかもしれない。

さすがは、我が家のペット筆頭。

「よし。それじゃあ、そろそろ行くか」

「わかった」

「はい」

父の言葉に従い、私とシオンはチャールズの引く荷車に乗り込んだ。

父が手綱を引き、チャールズがヒヒーン！ と鳴いて、荷車を発進される。

「行ってらっしゃーい！」

「また会おうぜ！」

「しばしの別れっす！」

「またねー！」

「頑張ってください！」

「ワンワン！」

「おう！ 行って来る！」

皆のそんな声に見送られながら、私達は村を出た。

その姿が見えなくなるまで、私は荷車の後ろから手を振り続ける。

隣を見れば、シオンも控えめに手を振っていた。
やはり故郷を離れるのだ。
それなりに思うところはあると見た。
ああ、いや、シオンの故郷は王都だったか。
だが、この村はもはや、シオンにとつて第二の故郷だろう。
顔を見れば、離れるのが寂しいと思っっている事は一目瞭然だった。



そして、チャールズはいつもの通り、半日かけてトリスの街に辿り着く。

ここで、チャールズと父ともお別れだ。

「リンネ！ 体には気をつけるんだぞー！」

「それはママに言われた」

「うぐっ！」

私にバツサリと切られた父が呻いた。

しまった。

素直に、うんと言っておくべきだったか。

「……それでもだ。リンネ、体には気をつけて。元気でいてくれ」

「……うん。わかった」

そして父は、泣きながら私を抱き締めてきた。

思いつきり嗚咽が聞こえる。

そんなに寂しいか。

だろうな。

私も寂しい。

「パパ、大丈夫だ。手紙も書くし、すぐに帰って来る」

「……うん。行ってらっしゃい、リンネ」

「……行って来ます」

そうして、父は抱擁を終わらせ、私を離した。

ちよつとした子離れ、親離れだ。

決して今生の別れではない。

また、すぐに会えるとも。

その後、父はシオンの方を向いた。

「シオンくん。リンネを頼んだぞ」

「はい」

「ただし、手を出したらタダでは済まさん」

「それは大丈夫です。俺はこいつに女としての魅力は感じていないので」

「ウチの娘の何が不満なんだゴラァ！」

「……どうしろと？」

シオンがめんどくさそうな顔になった。

父は吠えるが、私としては好都合だ。

前にも言った通り、私は男に興味はないし、再婚する気もないからな。

そして、乗合馬車が出発する時間がやって来た。

「リンネー！ 元気でな！」

「パパもなー！」

私は、またしても父の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

こうして、私とシオンは、王都に向けて旅立ったのだった。



「……まさか、お前と二人で行く事になるとはな」

乗合馬車の中で、シオンがポツリと呟いた。

なにやら微妙な顔だ。

何を考えているのやら。

「騎士学校でも、馬鹿のお守りか」

「なんだと！」

こいつ！

私は馬鹿ではない！

脳筋なだけだ！

失礼な事をぬかしたシオンの背中に回り、首を締め上げてやった。だが、慈悲深い私は、顔色が蒼白になったあたりでやめてやる。

今日は目出度い門出の日だからな。

このくらいで勘弁してやろう。

「まあ、なんにせよ、これからよろしく頼むぞ、シオン」

そう言つて、私は手を差し出した。

握手である。

「ゴホッ！ ゴホッ！ ……首を締め上げといて、何言つてやがる」

「あんなものは、軽いスキンシップだろうが」

いつもの事だろう？

「……はあ。騎士学校では問題を起こしてくれるなよ。俺にまで迷惑がかかる」

そう言いつつも、シオンは渋々といった感じで、私の手を握った。

良い心掛けだ。

「これからも、よろしくな」

「……ああ」

そうして、私達は王都への旅路に行く。

故郷を離れ、それぞれの目的の為に。

そして、——あいつらとの再会が、すぐそこにまで迫っていた。

番外 後に、剣神と呼ばれる少年

「ふん♪ ふん♪」

平和な王都の街並みを、水色の髪をした幼い少女が、鼻歌を歌いながら歩いていった。

今日の少女は機嫌が良かった。

彼女の親代わりをしている兵士達から、「たまには外で遊んで来い！」と言われて、お小遣いを渡されたからだ。

少女は、あまりそういう事に興味はなかったが、兵士達の優しさが嬉しかったのだ。

だからこそ、今日はこのお金で遊び尽くしてやろうと心に決めている。

「まずはどこに行こうかな〜?」

兵士達の真心が詰まった財布を大事に抱え、少女は街を歩く。

最近、デイザスロード帝国による侵略戦争が始まり、王都もややピリピリとしているが、まだこのグラディウス王国にまでは、帝国の魔の手も伸びていない。

治安も、そんなに悪くはない。

出没するとしても、せいぜいチンピラ程度。

その程度の相手ならば、少女の敵ではない。

引つ捕らえて、親代わりの兵士達に突き出してしまえばいいのだ。

そうだったが最後。

チンピラ達は、親バカ兵士達の制裁を受けて地獄を見る事になるだろう。

故に、少女は安心して街を出歩く事ができる。

クウ〜

と、その時、少女のお腹から、可愛い音が鳴った。

「……まずは食べ物かな」

少女は最初の目的地を決定した。

トコトコと歩き、食べ物の露店があるエリアへと辿り着く。

そこで、かなり好きな食べ物であるクレープを売っている店を見つ

け、走り寄った。

「おじさん！ クレープ一つください！」

「あいよ」

気の良い店主は、少女からお金を受け取ると、慣れた手つきで生地を焼き上げ、クリームを塗り、フルーツを挟み、あつという間にクレープを完成させた。

熟練の技を感じる、手際の良さであった。

「ほい！ クレープ一丁！」

「ありがとう！」

ヨダレを垂らさんばかりの様子でクレープが出来上がるのを待っていた少女は、我慢できないとばかりに、その場でクレープにかぶりついた。

「うまく！」

モキュモキュという擬音を立てて、少女は実に美味しそうにクレープを平らげた。

これには店主もニツコリだ。

可愛い女の子に喜ばれて、嬉しくない男はいない。

そこに、子供特有の愛嬌が加われれば、もう最強だ。

つつい甘やかしてしまっても、仕方あるまい。

「ハッハッハ！ そんなに旨そうに食ってくれるとは、料理人冥利に尽きるねえ！ よっしゃ！ サービスだ！ もう一個作ってやろう！」

「ホント!? ありがとう、おじさん！」

「良いつて事よ！」

男から巧みにクレープの代金金をせしめる。

狙った訳ではないのだろうが、その様は小悪魔を思わせた。

将来、悪女にならないか心配である。

「そういや、お嬢ちゃん。ここら辺には『ネズミ小僧』って盗人が出るんだ。その名の通り、ネズミみてえにすばしっこいガキンチョでな。

お嬢ちゃんも、財布を擦られないように気をつけろよ」

「ふあ〜い」

「ハッハッハ！ 口に物入れたまま喋るなよ！」

そうして、少女は気の良い店主の元を離れ、再び街を歩く。

先程言われた事を、少しだけ考えながら。

「ネズミ小僧かー」

そういえば、兵士達の話題にも少しだけ上がっていたような気がする。

近頃、王都のあちこちに出没する、子供の盗人。

やたらと足が速く、隠れるのも上手い。

現れてからそこそこ経ち、結構色々やっているのに、未だに捕まらないらしい。

まさにチヨロチヨロと逃げ回るネズミのような少年という話だ。

「上等だ！ ボクのお小遣いを狙うようなら、とっ捕まえてあげるよ！ どこからでもかかって来ーい！」

少女がテンションを上げてそう宣言した次の瞬間、――少女の手の中から、財布が消失した。

「へ？！」

少女の目は捉えていた。

一瞬の意識の隙を突いて、残像が残るような超速で財布をスツて行った小さな影を。

そう、目では追っていたのだ。

ただし、咄嗟に反応はできなかった。

「ツ?!」

瞬時に状況を理解した少女は、怒りの形相で下手人を追いかける。親バカ兵士達から「天才か……！」と言われた力、闘気を発動して身に纏い、全速力で追いかける。

だが、追い付けない。

何故か？

それは、逃げる下手人もまた、闘気を纏っていたからである。

「嘘っ!？」

少女は、心の底から驚愕した。

闘気とは、肉体を鍛えていった果てに習得する、特殊な魔法適性。言わば、剣士をはじめとした前衛職の奥義とも呼べる御業なのだ。闘気を使えるか否か。

それこそが、一流の剣士と、超一流の剣士の違い。雑兵と英雄の間にある、決して越えられない壁。

それこそが闘気と言っても過言ではない。

そんな代物を幼くして会得する『天才』というものも存在する。事実、少女はそんな数少ない天才の一人だ。

齢10にして闘気を使いこなす、未来の英雄候補。

それこそが、この少女の正体であり、親バカ兵士達が拳つて「ウチの子は天才だ！」と絶賛する存在なのである。

その少女が、盗人一人に追い付けない。

あり得ない話であった。

見たところ、盗人は小さな子供だ。

少女よりも、なお幼いだろう。

噂の『ネズミ小僧』の特徴と合致する。

？
というか、それ程の力があるくせに、何故盗人などやっているのか

少女は小さな少年の背中を追いかけながら、割りと本気で疑問に思っていた。

「……しようがない。子供相手にあんまり手荒な事はしたくないけど、そのお財布だけは譲れないんだ！ 返してもらおうよ！」

そして少女は、このままでは少年を取り逃がしてしまうと判断し、更なる力を解放する事を決意した。

少女の身体から溢れ出した魔力が形を成し、魔法となってこの世に顕現する。

「ウォーターボール！」

そう！

少女は闘気だけではなく、魔法まで使えるのである！

親バカ兵士達の鼻がニョキニョキと伸びている光景が幻視できる。それに、少女は天才であった。

そうして、水の弾丸が少年に迫る。
殺傷能力の低い、水の初級魔法。

それも、かなり手加減された一撃。

だが、それでも当たれば相当痛いだろう。

しかし、少年はまるで背中に目があるかのように背後からの攻撃を察知し、アクロバティックな挙動で水弾を避け、そのまま壁を走って三次元的な動きで逃げていく。

その動きは、ネズミというより、突然変異の猿のようであった。

「そんなら!」

それに動揺したのは少女だ。

渾身の一撃、とまでは言わないが、自信のあった攻撃を余裕で避けられた。

マズイ。

このままでは、逃走を許してしまう。

というか、そんな動きができるなら、ホント、マジで、どうして盗人なんてやっているんだ。

そんな思考が、グルグルと少女の頭の中を駆け巡る。

そんな思いに蓋をして、少女は必死で考えた。

この少年を捕らえる方法を。

絶対に、あの兵士達の真心が詰まった財布を持っていかれる訳にはいかないのだ。

そして、それとは別に、あの盛大に才能の無駄使いをしている少年に、もつとまともな就職先を見つけてやりたいという気持ちが芽生えつつあった。

まあ、わからなくもない。

「なら、これならどうだい! ウォータースプラッシュユ!」

少女が再び水弾を発射する。

先程よりも大きく、弾速が速い。

だが、この程度ならば、まだまだ少年にとっては対応圏内。

余裕を持つてとはいかなかったが、回避する事に成功した。

——と思った瞬間、水弾が弾けた。

まるで爆弾のように、水弾は内部から破裂し、その衝撃によって、少年は吹き飛ばされる。

「ッ!」

「よしっ!」

それを見た少女は、ガッツポーズを取りながら、吹き飛ばされて動きの鈍った少年に肉薄した。

しかし、少年はまだ諦めない。

傷を負った身体を必死に動かし、逃走を続ける。

ダメージのせいかな、そのスピードは落ちたが、それでもまだ大人の兵士より速い。

「ウォーターズプラッシュ! ウォーターズプラッシュ! ウォー

ターズプラッシュ!」

そこに、容赦のない少女の追撃!

無数の水弾が、少年に襲いかかる。

少年はそれを、先程の反省を活かし、破裂による攻撃範囲の外まで逃げる事によって避け続ける。

しかし、回避行動が大きくなれば、その分、少女との距離が縮む。

少女は、確実に少年を追い詰めていた。

「クッククック! そろそろ終わりだよ!」

というか、こいつらは財布一つの為に、どれだけ高度な戦闘を繰り広げているのだろうか?

この場に他の誰かがいれば、そんなツツコミを入れたかもしれない。

だが、そんな良識的な第三者はこの場に存在せず、あるのは、この盛大に才能を無駄使いたした戦いの決着のみであった。

「攻ノ型・飛脚!」

少女が、兵士達から教えてもらった特殊な歩方により、一気に加速する。

まだ、この技を覚えて日の浅い少女では、直線的な速度は出ても小回りが効かない為、今までは温存してきた。

だが、少年との距離は、この技による踏み込み一つで詰められるま

でに縮んでいる。

今こそが、切り札の使い時なのだ。

「とうー！」

「ぐっ……！」

直接攻撃が可能な距離まで近づいた少女が、少年に向けて手刀を放つ。

その鋭い攻撃を、少年は腕を交差させて防いだ。

しかし、防ぎ切れずに手刀……というよりチョップが、少年の頭を打った。

そして、少年は崩れ落ちる。

今ここに、決着はついた。

「ハッハッハ！ ボクの勝ちだね！」

「ク……ソ……！」

少女はまず、少年の手の中から財布真心を回収した。

が、そこである事実気付く。

少年の体は、思ったよりも深いダメージを負っていたのだ。

「あちゃー……えっと、その、ごめんね……！」

少女は、闘気使いなら大丈夫だろうと思って、結構強めの攻撃をしてしまった。

だが、一口に闘気と言っても色々ある。

闘気は身体強化の魔法だが、それによって強化される力には個人差があるのだ。

ある者は凄まじい剛力を手に入れ、ある者は鉄壁の頑健さを手に入れ、ある者は不死身のような生命力を手に入れる。

この少年は、おそらく速度に特化した闘気使いなのだろう。

だからこそ、防御力はそこまででもなく、少女の攻撃でかなりのダメージを負ってしまった訳だ。

ちなみに、少女の闘気は、やや防御寄りのバランス型である。

「ヒール」

そして、少女はとりあえず弱めの治癒魔法を少年にかけて傷を癒した。

あくまでも、弱めにだ。

何故かと言うと。

「おっと、どこへ行くこうと言うのかな？」

「くっ……！」

逃がさない為である。

少女は、這いずって逃げようとした少年に、上からのし掛かって拘束した。

少女には、この少年をこのまま逃がす気など毛頭なかった。

逃がしても、また窃盗に身を染めるだけ。

この少年には、もつと良い力の使い道がある。

まあ、それを差し引いても、兵舎の一員として、ネズミ小僧を逮捕しないという選択肢はないが。

つまり、この少年に、もう逃げ場などないのだ。

「ねえ、君。それだけの力があるのに、なんで盗人なんてやってるのさ？」

「……決まってる。やらないと生きていけないからだ」

「いやいやいや！ 君なら兵士とか冒険者とかでも食べていけるでしょ!？」 それだけの才能があれば、普通に雇ってくれると思うよ」

「兵士……冒険者……その発想はなかった」

その発言を聞いて、少女は確信した。

あ、この子、馬鹿だ、と。

「ねえ、行く場所が決まってないなら、せっかくだし、ボクの所に来ないかい？」

そして、少女は交渉を開始した。

丸め込める気しかなかった。

「どういう事だ？」

「実は、ボクのパパとママは兵士でね。まあ、二人とも死んじやったんだけど……。」

それで、ボクは今、パパ達の同僚だった兵士の皆に面倒見てもらってるんだ」

これは本当の事である。

少女の両親は数年前に殉職し、天涯孤独となった彼女を、両親の同僚であった兵士達が引き取ったのだ。

それ以来、少女は兵士達全員から、実の娘のように可愛がられている。

今や、少女にとって、兵士達は家族なのだ。

少女は、いつか彼らと肩を並べて戦いたいと思っている。

……もつとも、少女は既に、兵舎の中でも上から数えた方が早い程に強いのだが。

肩を並べるどころか、突き抜けている。

だが、兵士達の名誉の為にも、これ以上ツツコンではいけない。

「それでさ、君もボク達の所に来て、一緒に兵士にならないかい？」

「む……」

少女の言葉に、少年は真剣に考える。

足りない頭を振り絞って考える。

少年とて、別に何も考えられない馬鹿ではないのだ。

ただ、ちよつと脳筋なだけで。

と、その時。

グウッ

という、特に可愛くもない大きな音が、少年の腹から鳴り響いた。

「……兵士になれば、毎日ご飯が食べられるよ。盗人なんてやらなくても生きていけるさ」

「……」

その言葉に、少年の心はかなり大きく揺れた。

心の天秤が一気に傾く。

が、まだ少年は首を縦に振らない。

何故か？

それは、悔しいからだ。

自分をあつさりど打倒した少女の言う通りになるのが、なんとなく悔しかった。

要するに、子供特有の、つまらない意地である。

だが、その感情を見透かしたかのように、少女が「ハハッ」と呟

きながら、ニタリと笑ってトドメの一撃を叩き込む。

「それに、ボクに付いて来ないとリベンジの機会は永遠に来ないよ？」

君は巷で噂のネズミ小僧みたいだし、君がこの話を断るなら、ボクは君を逮捕して、牢屋にぶち込む事もできるんだ。

つまり、この誘いを断るといふ事は、君はボクとの再戦が怖くて牢屋の中に逃げたという事になる！

君みたいな男の子が、ボクみたいなぶりちーな美少女から逃げるなんて、恥ずかしくないのかな？」

「……なんだと」

かかった。

こんな安い挑発に引っ掛かるとは、本当に馬鹿な奴である。

まあ、子供なんて、皆そんなものなのかもしれないが。

「ボクに付いて来るなら、ボクはいつでも君のリベンジを受けてあげよう。どうする？」

「上等だ、この馬鹿女！　すぐに吠え面かかせてやる！」

「ハッハッハ！　いつでもかかって来るといいよ！」

こうして、少年は少女へのリベンジを誓い、あっさりと丸め込まれたのであった。

実にチョロい。

きつと、頭の中まで筋肉なのだろう。

そして、その頭の中の筋肉まで闘気を纏っているに違いない。脳筋っぷりが強化されているのだ。

誰だ、こいつが馬鹿じゃないと言った奴。

「ああ、そうだ。自己紹介がまだだったね。

ボクはシャーロット。皆はシャロって呼んでるよ。

君の名前は？」

「……エドガーだ」

「そっか。じゃあ、エドだね。よろしく、エド！」

少女が、少年に手を差し出す。

握手だ。

少年は少し不機嫌そうにしながらも、差し出された手を拒む事はな

かった。

「フツフツ。なんか、弟が出来たみたいで嬉しいな〜」

「誰が弟だ」

その後、二人は手を繋いだまま、少女の家である兵舎に向かって歩き出した。

ちなみに、手を繋いでいるのは少年の逃走を防ぐ為であり、どちらかと言えば連行と言った方が正しいだろう。

こうして、少年エドガーは、少女シャーロットと出会った。

これが、後に『のち剣神』と呼ばれ、世界最強の剣士となる少年の、始まりの物語だったのである。

第2章 入学編

2-1 王都

シオンと二人で旅をする事、一ヶ月と少し。

道中で盗賊に襲われたり、その盗賊を根絶やしにしたりといった些細なトラブルはあったが、最終的に、ほぼ予定通りの期間で王都へと到着した。

王都。

正確には、王都グラディウス。

それは、その名の通り、このグラディウス王国の中心であり、国内最大の街である。

かつて、私がドラゴン討伐を成し遂げた大きな街、領都シヤムシルとは比べ物にならない大きさと賑わい。

単純な面積でも人口でも、シヤムシルの十倍、二十倍では利かないだろう。

そして、そんな巨大な街を守る堅牢な城壁と、街を完全に覆い尽くす極大サイズの対魔法結界。

相変わらず、圧巻の眺めだな。

田舎者のベル達が見れば、放心していたかもしれない。

それにしても……

「ふむ。懐かしいな」

「それは俺の台詞だ。お前は来た事ないだろう」

私が懐かしさに浸っていたところで、シオンが余計なツツコミを入れてきた。

お前には私の前世を話していた筈だが、まだ信じていないのか。

まあ、いいだろう。

私が王都に来た目的の一つを考えれば、どうせすぐに真実を目の当たりにする事になるのだから。

王都の正門を抜け、私達の乗って来た乗合馬車が停留所に停車す

る。

門を潜る時に手続きが必要だったが、冒険者カードを見せたら一発だ。

なにせ、シオンはA級、私はS級。

どちらも一流の冒険者。

門番は、私達の年齢で侮る間抜けではなかったようで、快く通してくれたものだ。

というより、私の噂が王都にまで流れていた。

弱冠11歳にしてドラゴンを狩り、異例の若さでS級冒険者になった少女『天才剣士』リンネ、だそうだ。

私にもドレイクと同じで異名が付いたのは知っていたが、まさか王都にまで知られていたとは。

人間というのは、本当に噂話が好きだな。

ちなみに、シオンやベル達にも異名が付いたのだが、今は関係ないだろう。

馬車を降り、ここまで共に旅をした御者のおっちゃんと同行者達に別れを告げる。

そうして、私は久しぶりに、具体的に言うと13年ぶりに王都の地を踏んだのだった。

前世の私が死んでから、今の私に生まれ変わるまでのタイムラグは、ほぼなかったからな。

暦を見て確認したから、間違いない。

「さて、まずは宿でも取るか」

「いや、入学試験の手続きが先だ。行くぞ」

勝手知ったるといった様子で、シオンが歩き出す。

こいつは王都出身だし、騎士学校はシオンの父であるヨハンさんの母校だ。

場所は知っているんだろう。

ちなみに、私も知ってはいるが、ぶつちやけ、うろ覚えだ。

前世では、学校に興味なんてなかったからな。

弟子どもをぶち込んだ事くらいしか接点もないし、街並みも私が知るものと大分違っていて、迷わずに行ける自信はない。

ここは、おとなしくシオンに付いて行くのが正解か。

……それにしても、宿を取るよりも先に学校へ向かうとは。

余程、待ちきれないと見た。

実に微笑ましい。

「……なんだ、その目は」

「微笑ましい若者を見る温かい目だ」

「馬鹿にしてるのか」

そんなやり取りをしつつ、騎士学校を目指す事しばらく。

私達は、よくわからない場所にいた。

「シオン、これはどういう事だ？」

「……俺の住んでいた頃とは、街並みが違う」

「なるほど、迷子になった訳か。そして馬鹿か」

「お前にだけは言われたくない。……おい、やめろ。その目で見るな」

私は、失敗した若者を見る温かい目でシオンを見た。

まさか、優秀なシオンがこんな初歩的なミスを犯すとは。

らしくもない。

柄にもなく緊張しているのか、なんなのか。

実に微笑ましい。

「シオンよ。人生の先輩として、一つアドバイスしてやろう」

「お前の方が年下だろうが」

「いいか？ 困った時は変な意地を張らず、素直に人に聞くのが一番だ。」

「おーい！ そのお嬢ちゃん達！」

「え？ あ、はい。なんででしょうか？」

「わたくし達ですの？」

「……」

私は、とりあえず一番近くにいた通行人に話しかけた。

シオンと同一年くらいの少女が三人。

内一人は、腰に剣を差して武装している。

……これ、お忍び中の貴族か何かじゃないか？

口調や雰囲気から高貴な感じがする。

それに、上手く気配を消しているが、この子達に話しかけた瞬間、周囲から複数人の視線を感じた。

おそらく、隠れた護衛がいるんだろう。

適当に話しかけたが、些か面倒な相手を選んでしまったかもしれない。

よく見れば、三人の内二人の少女は銀色の髪と赤い髪をしていて、どこことなくユウリとマグマに似ている。

あいつらは、血筋的にはかなりの上級貴族だ。

その親戚か何かだとすれば、このお嬢ちゃん達も結構なお偉いさんという事になる。

となると、もう一人は付き添いの護衛だろうな。

「えっと……どうかしましたか？」

「ん？ ああ」

まあ、別にいいか。

悪い子達ではなさそうだし、余程無礼な事でもしなければ問題ないだろう。

「すまんが、騎士学校がどこにあるのか教えてくれないか？ ちよつ

と、この馬鹿のせいで道に迷ってしまったな」

「誰が馬鹿だ」

シオンのツツコミは華麗に無視する。

事実だろうが。

「騎士学校……もしかして、入学希望者の方ですか？」

「まあな」

銀髪の子の質問に軽く答える。

「あら。じゃあ、もし合格すれば、あなたの同級生ですわね。

ねえ、あなた達。道は教えてあげますから、入学した時にもしよろ

しければ、この子のお友達になってくれませんか？」

「ちよ!? スーちゃん！」

「ん？ 別に構わないが。……その子は友達がないのか？」

「そうなのですわ。わたくしや崇拜者みたいな連中はいるのですけれど、お友達となると中々……」

「スーちゃん！」

銀髪の子が、スーちゃんと呼ばれた赤髪の子を止める。

銀髪の子は、ちよつと涙目になっていた。
なるほど。

この子はボツチなのか。

それは気の毒に。

「わかった。そこのお嬢ちゃんは、私達が責任を持ってボツチから脱却させてやる。な、シオン」

「何故、俺まで……お前が勝手にやれ」

「何を言っている。迷子になったのはお前のせいだろうが。責任はしっかりと取れ」

「……チツ」

不満そうだな、シオンよ。

だが、これはどつちかというと、お前にとって必要な事なんだぞ。

高位の貴族と因縁があるお前にとって、同じ高位貴族との人脈は値千金の価値があるのだと何故気づかない？

「まあ、なんにせよ、よろしくお願いいたしますわ」

「うむ。任された」

「あわわ……話がドンドン纏まっていきます……」

銀髪の子があわあわ言っていたが、それでどうにかなる訳でもなく、話は纏まった。

というか、この慌て方、どこことなくラビに似ているな。

和む。

「スー様……」

「あなたは黙っていないさいオリビア。心配しなくとも、考えあつての事ですわ」

「ハッ。失礼いたしました」

そして、赤髪のスーちゃんとやはらは、苦言を呈そうとした護衛の少

女を黙らせた。

……自分で言うのもなんだが、私達みたいな怪しい連中を友達にしようとか、この子もかなり大胆だな。

少なくとも、普通の貴族の感覚じゃねえ。

やり手なのか、ただの馬鹿娘なのかはわからんが。

「では、案内しますわね。こちらですわ」

そうして、謎の少女達は、私達を騎士学校に案内してくれた後、華麗に去って行った。

なんでも、休日シヨツピングの途中だったらしい。

あの銀髪の子の息抜きが目的だったそうだ。

そして、別れてから気づいたが、名前を聞くのを忘れた。

これでは再会するのが大変そうだ。

まあ、あの子達が本当に貴族なら、貴族らしく貴族の情報網でも使って、向こうから会いに来るだろう。

私が心配する必要はあるまい。

そのまま、今度は騎士学校の門番に話しかけ、入学試験を受けたい旨を伝えた。

「ふむ。入学希望者か。それならば、あそこで受付をしている。

だが、入学試験は何かしらの推薦がなければ受けられないぞ。大丈夫か?」

その話はヨハンさんから聞いているから大丈夫だ。

推薦というのは、貴族や騎士、あるいは剣術や魔法の道場主から「この者は騎士になるに相応しい」と認められる事で受けられるものである。

そして重要なのが、この推薦を貰っていないながら何かやらかしたりすると、推薦した者の顔に泥を塗る事になるという事だ。

故に、推薦はする方もされる方もかなり慎重になる。

この推薦を貰えるか否かが、騎士になる為の最初の関門だな。

私も昔、弟子どもを推薦した事があったつけ。

懐かしいな。

で、私達はヨハンさんに書いてもらった推薦状があるから、問題なしだ。

ついでに、伝家の宝刀、冒険者カードもある。

冒険者カードは、冒険者ギルドに認められた証でもあるので、高位の冒険者カードは、ある意味、推薦状と同等以上の価値がある訳だ。それを受付の兄ちゃんに提出したところ、

「え!? あなたが、あの天才剣士!? なんで騎士学校に!?!」

と、大層驚かれた。

驚き過ぎて、業務に支障をきたしていた。

おい、手が止まっているぞ。

そういうのはいいから、早く手続きを済ませろ。

そう伝えたところ、

「は、はい! 只今!」

と、受付の兄ちゃんは敬礼しながら、即座に手続きを済ませてくれた。

さつきとは比べ物にならない手際の良さだ。

ふむ。

どうやら、中々に優秀な人材だったようだな。

「お待たせしました! こちらが入学試験の受験票になります。なくさないでくださいね」

そして、受付の兄ちゃんは、冒険者ギルドの受付嬢を思い出すような事を言いながら、受験票を差し出してきた。

そこには、試験開始の日時と受験番号が記載されている。

シオンが349番。

私が350番だった。

「あなた達なら、試験の成績次第では特別生も十分狙えます! 頑張ってください!」

あと、ファンです! サインしてください!」

「うむ」

受験票の後に差し出された色紙にサインを書いてやる。

昔の癖で、うつかりエドガーと書きそうになり、その部分を塗り潰してからリンネと書く。

……少し汚くなったな。

「相変わらず汚い字だ」

「うるさい」

「ありがとうございますー!」

シオンは微妙な顔をしていたが、受付の兄ちゃんは喜んでいた。ならば、よしとしよう。

その後、騎士学校の場所をしつかりと覚えてからその場を離れ、宿を取る為に王都の街並みを歩く。

また迷うのはゴメンなので、宿は騎士学校に近い所にあるものに決定した。

お互いに異論はなかった。

という事で、近場の宿に直行。

受付の姉ちゃんに話しかける。

シオンが。

「泊まりたい。二人部屋一つで、とりあえず五泊だ。空いているか?」

「はいはい。空いてますよ。食事付きで、一泊銀貨八枚です。外で食べるなら、その分割り引きするけど、どうします?」

「いや、そのままでもいい」

「まいど〜」

そうして、サクサクと受付は終了した。

何故、五泊なのかというと、入学試験が五日後だからだな。

万が一、そこで落ちた場合は田舎に帰る事になる。

だからこそ、とりあえず五泊なのだ。

ついでに言うと、合格した場合は入学試験から正式な入学までの間お世話になる。

入学してしまえば学生寮があるのだが、それまでの間は家なしだからな。

……ああ、いや、一応、前世の屋敷に突撃するという手もあるか。

だが、家がないから泊めてくれというのは……なんとなくヒモのよ
うで嫌だ。

うむ。

行くのは入学試験が終わってからにしよう。

「うふふ。それにしても、若い男女が相部屋なんて。これはラブ
ロマンスの予感！」

「……はあ。こいつとは、そういう関係じゃない。怖じ気が走るから、
そういうのはやめてくれ」

「あらく残念」

寝言をのたまう姉ちゃんはともかく、順調にいけば、しばらく世話
になる宿だ。

名前はしっかりと覚えておくか。

ふむ、『次元の荒鷲亭』だな。

覚えた。

なんとも不思議な名前だが、覚えた。

その後は、「英気を養う」と言っただけで宿に引きこもったシオンに荷物の
番を任せ、私は久しぶりの王都を歩き回った。

軽く迷子になったが、まあ、なんとか晩飯までには帰還できたから
問題はない。

こうして、私達の王都暮らしが始まったのだった。

22 入学試験

入学試験当日。

私は、目の前に用意されたテスト用紙を前に唸っていた。

「ぐぬぬ……」

迂闊だった。

まさか、入学試験の内容が、筆記と実技の二つに別れていたとは。

こんな事なら、予習の一つでも……なんか、前にもあつたな、こんな展開。

あれだ。

冒険者の昇格試験の時だ。

私は、あの時と全く同じ過ちを繰り返している！

だが、しかし！

同じ展開という事は、攻略法もまた同じである筈！

思い出せ！

あの時はどうやって乗りきったのかを！

……そうだ！

思い出した！

あの時の問題は、決して回答不能な難問などではなかったのだ。

今まで培ってきたものを頭の中から引き摺り出せば、十分に解ける問題であつた。

今、私の前にある問題はどうか？

決して解けない難問か？

否！

たしかに、一部の教養的なものを測っているような問題は解けないが、それ以外の問題は十分に攻略可能！

なにせ、私は元騎士だ！

元騎士が、騎士に関する問題を解けない道理はない！

唸れ！

私の灰色の頭脳！

ここに刻まれた前世の記憶を掘り起こすのだ！

できなければ、落第してマーニ村にとんぼ返りだぞ！

あれだけ感動的な別れをやった手前、それは滅茶苦茶恥ずかしい！
絶対にベルとかオスカーとかに笑われる！

父と母に生暖かい目で見られて慰められる！

それだけは、絶対にあつてはならん！

その意志で、なんとか筆記試験を乗りきった。

これは、ギリギリ合格点には達しているんじゃないだろうか？
達していなかったら本気で困る。

神にでも祈っておこう。

そうして筆記試験を乗り越え、脳に凄まじい疲労を抱えながら、他の受験生と共に移動を開始。

実技試験を行う訓練場へとやって来た。

冒険者ギルドにあった訓練場と同じで、結界生成の魔道具が近くにいくつか転がっている。

だが、冒険者ギルドよりも全体的に高級そうだ。

金の匂いがする。

というか、筆記試験を受けている時から思っていたが、受験者の数が少ないな。

50人くらいしかいない。

私の受験番号が350である事を考えれば、明らかに少なすぎる。

これは、試験の日時が違うのか、それとも会場が違うのか。

……いや、どうでもいいか。

何故に、疲れた脳みそで、そんな下らない事を考えているんだ私は。
「では、実技試験を開始する。形式は試験官と一騎打ちの試合形式だ。
ここでは諸君らの戦闘能力を見る。」

戦闘能力は、王国の剣である騎士にとって最も重要な能力だ。弱い者に騎士は務まらん。励めよ」

『はー…』

試験官の言葉に、受験者達が一斉に良い返事をする。
ふむ。

さすがは騎士にならんとする連中だな。
礼儀正しいのが多い。

王国の未来は明るそうで何よりだ。

そして、実技試験が始まった。

この場にいる試験官は五人。

その五人が、50人の受験者達を一人ずつ相手にしていく。

受験者達の動きは、かなり良い。

さすがは推薦を受けたエリートという事だろう。

若い奴が多い……というか、若い奴しかいないというのに、そんなによそよそりの冒険者とは比べ物にならない。

弱い奴でもC級冒険者並み。

強い奴だと、B級の端に引つ掛かるかもしれん。

まだ入学してもいないのにこれとはな。

本当に、王国の未来は明るい。

だが、試験官達はそれ以上だ。

将来有望なガキどもの攻撃を簡単に捌き、反撃に転じて防御の技術を測る。

時に魔法が飛ばうとも、当たり前のように叩き落とす。

その様は、かつてベル達を軽くあしらったドレイクを彷彿とさせた。

騎士学校の教員は、ほぼ全員が騎士か元騎士だという話を聞いた事がある。

その証拠に、試験官達は全員、騎士の制服に身を包んでいる。

つまり、全員がヨハンさん並みの実力者という事だ。

いや、ヨハンさんは騎士の中でも相当強い部類だが。

あの人は、今の私ともまともに斬り合える強者だしな。

それでも、他の騎士達がヨハンさんより大きく劣っている訳ではない。

この光景を見れば、そう断言できる。

「次！ 349番！」

「はい」

そんな感じで試験を見守っているうちに、シオンの番がやってきた。

「相手は老境の騎士だ。」

基本に忠実な中段の構えで、シオンが仕掛けるのを待っている。対するシオンもまた、中段の構え。

「あいつも基本に忠実だからな。」

「行きます」

「来なさい」

二人がそう言葉を交わした瞬間、——シオンの姿が消えた。そう錯覚する程の速度。

私には到底及ばないが、それでも相手の騎士よりも速い。

何故なら、シオンは闘気を纏っている。

「まだまだ未熟な闘気ではある。」

だが、シオンは闘気使いの、超一流の域へと足を踏み入れたのだ。既に、そこらの騎士よりも余程強い。

「ッ!?!」

その予想外の速度に驚きつつも、老騎士は慌てて防御態勢を取る。シオンの技は正面からの振り下ろし。

「王国剣術、攻ノ型・一閃。」

それを防ぐべく、騎士の剣が頭上へと掲げられる。

「!?!」

しかし、そこでシオンの剣の軌道が変わった。

振り下ろしから、横薙ぎの抜き胴へと。

「これもまた、王国剣術の型の一つ。」

単純なフェイントではあるが、決まれば十分に有効な技。

「その名も、」

「攻ノ型・陽炎かげろう!」

「ぐう……!」

綺麗に決まった陽炎が、試験官の腹を叩く。

「だが、少し浅い。」

試験官も、咄嗟に足を動かして直撃を避けた。
良い判断だ。

あの体勢からでは、回避も迎撃も難しかっただろうからな。
しかし、一発食らってよろめいた時点で致命的だ。

試験官の周りを、雷の魔法が被い尽くす。

さながら檻のように展開した雷魔法は、即座に圧縮され、内部の試験官を握り潰すように炸裂した。

「サンダージェイル！」

「ぐあああああああー！」

試験官が、おもいつきり感電して倒れ、体からプスプスと黒い煙を上げる。

まあ、これは試験だ。

シオンも手加減していたようだし、死にはしない。

気絶もしていなし、傷も浅い。

その傷も、近くに控えていた治療術師の手によって、すぐに治された。

だが、治療術師が出張って来た時点で、試合は終了だ。

「それまでー！」

「……………ふう」

他の試験官が試合の終了を宣言し、シオンが息を吐きながら構えを解く。

やはり、柄にもなく緊張していたらしい。

そんな状態で騎士を倒すとか、やはりシオンは天才だな。

やるじゃないか。

「いやあ、綺麗にやられましたな。さすがはA級冒険者『雷剣』のシオン。見事なものです」

「……………どうも」

やられた老騎士が、手放してシオンを褒める。

お、常時仏頂面のシオンが、ちよつとだけ笑いおったぞ。

付き合いの長い奴じゃないと気づかないくらい微妙にだが、口角が上がっている。

嬉しかったようだ。

一方、老騎士の言葉を聞いた受験者達はざわついていた。

「A級冒険者!？」

「なんで、そんな奴が……」

「フツ、噂通りという訳か」

「クソツ……! S級におんぶに抱つこの雑魚じゃなかったのかよ……!？」

「冒険者……平民の分際で……!」

「クールでカッコいい……」

反応が個々人で違うな。

シオンの事を知っている奴、知らない奴、知った上で見下している奴、純粹に称賛する奴。

色々だ。

だが、そんなに騒ぐのは騎士としてはダメだな。

「静まれ! 試験中だ!」

『はい!』

そら、試験官に叱られた。

まあ、当然だな。

騎士がうるさいのは褒められた事ではない。

冒険者じゃあるまいし。

さてと。

次は私の番だ。

いっちよ、やってやるか。

そうして、一步踏み出した時……

「どうやら、有望そうなのがいるみたいね」

そんな、聞き覚えのある声を聞いて、私の足は止まった。

この声は!

声の方に振り向く。

発生源は訓練場の入り口。

そこに、その女がいた。

白銀の髪に、シオン並みの仏頂面。

他の試験官同様、騎士の制服に身を包み、腰に華美な細剣を携えた、女騎士。

「ユーリ様！」

試験官達はその女の名前を呼び、最敬礼を取った。

ユーリ。

かつての私の二番弟子にして、現在はグラディウス王国最高戦力と称される、王国『三劍士』の一人。

——『氷劍』のユーリ・ナイトソード。

受験者達が、またざわめき出す。

ユーリは、そんな受験者達と最敬礼を取り続ける試験官達を見回して苦笑した。

もつとも、付き合いの長い奴じゃないと気づかない程度の表情変化だが。

「……あまり畏まる必要はないのだけれど。私も、ここでは一教師に過ぎないのだし」

……教師？

教師。

教師!?

こいつ、教師になりやがったのか!?

つまり、ユーリが私の先生になると。

私の事を「先生、先生」と呼んでいた小娘が！

これでは立場逆転ではないか！

……人生、何が起こるかわからないな。

「さて、試験はどこまで進んだのかしら？」

「ハッ！ 受験番号349番まで進みましたので、次の350番で最後になります」

「そう。という事は、あの子が」

お、ユーリが私の方を向いた。

手でも振っておくか。

「ごら！ 無礼だぞ！」

「別に構わないわ。そういうのは後で教育すればいいでしょう？ それよりも、彼女と話がしたいのだけれど」

「ハッ！ かしこまりました！」

ユーリが試験官を宥めつつ、私の方に向かって来る。

私の周りから人が消えた。

受験者達がめっちゃビビって後ずさった。

ユーリ……お前、教師向いてないんじゃないか？

「はじめまして。私はユーリ。ここの教師の一人よ。それと、王国三剣士の一人。どうぞよろしく」

「うむ。知っているぞ」

「そう。私もあなたを知っているわ。

S級冒険者『天才剣士』リンネ。私が出向く筈だった、シヤムシールの魔物襲撃事件を解決させた英雄。そう聞いているわ
ほう。

ユーリもあの事件の事を知っている……というか、お前が来る予定だったのか、あの時。

そういえば、時間を稼げば三剣士の一人が来るみたいな事を、誰かが言っていたような。

結局、ドラゴンに城壁を破壊されたから、籠城ができなくなつて、慌てて殲滅したんだったな。

二年くらいしか経っていないが、ちよつと懐かしい。

ユーリが威圧するような冷たい目で私を見てくる。

だが、これは純粹に興味深いものを見る目だな。

こいつの表情は、慣れていないとわかりづらい。

受験者達は、ユーリの雰囲気気に気圧されてるのか、シオンの時みたいにヒソヒソ話をする余裕もないようだ。

「あなたには前々から興味があったの。だから、あなたの試験官は私がしたいのだけれど、構わないかしら？」

「別にいいぞ。私も今のお前らの力は知りたかったところだ」

「？ おかしな言い回しね。まあ、別になんでもいいけれど」

そうして、私は急遽、ユーリと戦う事が決定した。
まさか、王都に来た目的の一つが、こんなに早く達成できると思
わなかった。

屋敷に襲撃でもかけてやろうかと思っていたが、嬉しい誤算だな。
ユーリが木剣を手にして、訓練場の中央に立つ。

私もそこへ足を踏み入れた。

その後、私達の周りを結界が包み込む。

誰にも邪魔はさせないと告げるかのように。

と、その時、結界の外のシオンと目があつた。

若干心配そうな顔で私を見ている。

なので、任せるとばかりに親指を立てておいた。

シオンの顔が、心配して損じた的な呆れ顔に変わる。

なんだ、その反応は。

そんなシオンはさておき、剣を構え、ユーリと正面から対峙する。

三剣士とS級冒険者の戦い。

そんな、世界最高峰の戦いを、周囲は固唾を呑んで見守っていた。
さて、こいつと一対一で向き合うのなんて何年ぶりだろうか？

忘れたが、かなり久しぶりだというのはわかる。

その月日でどれだけ強くなったのか、この師に見せてみるがいい、
弟子よ。

「行くぞ」

「ええ、いつでもどうぞ」

そうして私は、かつての弟子へと斬りかかった。

23 『氷剣』のユーリ

さて、まずは小手調べだ。

「飛剣！」

上段に構えた剣を振り下ろす。

特別な工夫はせず、フェイントも何も挟まず、ただ真っ直ぐに放った飛翔する斬撃がユーリに迫る。

全力ではないが、手加減はしていない。

並みの騎士ならば、これだけで倒せても不思議ではない程の威力は籠めた。

「守ノ型・流」

そんな斬撃は、——ユーリが僅かに動かした剣により、いとも容易く受け流された。

……ほう。

やはり、昔より上手くなっているな。

こいつの剣術は、受け流し主体の守りの剣。

それが、前に見た時よりも遥かに洗練されている。

どうやら、修行はかかさなかったようだな！

褒めてやろう！

「飛脚！」

私は、ユーリが飛剣を受け流している瞬間を狙い、飛脚で急接近した。

飛剣で少しでも体勢を崩すようなら、この連続攻撃は脅威だったろう。

だが、ユーリの体勢に一切の崩れはない。

普通に迎撃されるだろうな。

「攻ノ型……！」

それでも私は、真っ向から突撃する。

飛脚による踏み込みから、ユーリに接触するまで一秒未満。

そんな高速の突進力をも力に変え、超速の刺突を放つ構えを取る。

攻ノ型・槍牙。

それを繰り出す……直前。

私の体がユーリの剣の間合いに入る直前に、新たに繰り出した飛脚によって、速度を落とさぬまま、直進から斜め前へと軌道を変える。

他の技に見せ掛けつつ、急激な方向転換により、残像を残しながら相手の視界より消え、側面を取るフェイント技。

「朧！」
おぼろ

それをユーリに向かって繰り出す。

全く別の方向から放たれた刺突を……

「流」

ユーリは容易く受け流し、反撃の斬撃を叩き込んできた。

「むんー」

それを即座に引き戻した剣で受け、そのまま懐へと潜り込む。

そして、間合いの内側で剣を振るうも、ユーリはこれも軽く剣で受け止め、その衝撃を利用して後ろに下がった。

「飛剣」

しかも、下がりながら斬撃を飛ばしてくる手癖の悪さ。

だが、その程度では甘い！

「流ー」

今度は私が飛剣を受け流し、逃がさぬとばかりに追撃する。

そんな私を見て、ユーリは若干驚いたような顔をした。

この程度で驚かれるとは、随分と過小評価されたものだな！

「攻ノ型・一閃！」

「む……」

さつきよりも鬨気の出力を上げ、ユーリの予想を上回る速度で剣を振るう。

急に加速した私に対して、ユーリはほんの僅かに対処が遅れ、鉄壁の剣技に綻びが生じる。

その綻びを広げるように、態勢を立て直す暇を与えず、攻め続けた。振り下ろし、刺突、フェイント、連続斬り。

一閃、破断、槍牙、陽炎、朧、五月雨、その他もろもろ。

その全てを、ユーリは防いだ。

だが、一撃防ぐごとに態勢は崩れていく。
そして……

「もらったー！」

致命の隙が生まれる。

私はその隙目掛けて、容赦なく剣を振るっただった。
……しかし。

「――アイスウォール」

その攻撃は、ユーリの展開した氷の魔法によって防がれる。

そして、私の攻撃を防いだ直後に氷は自壊し、それを目眩ましにしてユーリの剣が振るわれた。

私は後ろに下がる事でそれを避け、距離を取る。

「ようやく使ってきたか」

「……ええ。正直、驚いたわ。まさか私に魔法を使わせるなんて。

噂に聞いた以上の強さね」

そう言いつつ、ユーリは息切れの一つもしていない。

当然、傷の一つもない。

つまり、あれだけやって効果なし。

この状態の私だと、ユーリの足下くらいにしか及ばないという事だ。

正直、予想以上に強くなっていやがるな、こいつ。

「……見えたか？」

「いや、殆ど目で追えなかった」

「これが、三剣士とS級冒険者の実力……！」

『天才剣士』の噂は尾ひれが付いてると思ったら、そんな事なかった……」

外野が騒がしいな。

しかも、さっきは飛んできた試験官の叱責がない。

彼らも、この戦いに見入ってるのだろう。

まあ、そんな事はどうでもいい。

「さて、そろそろ本気で行くぞ」

「……それは、今まで手を抜いていたという事？」

「ああ。私は軽々しく本気を出せない理由があるからな」

まだ、本気の闘気に体が耐えきれないのだ。

成長期を経て、体も大分出来上がってきたが、それでもまだ足りない。

持って十分。

まあ、それだけあれば、大概の相手はどうかなるんだが。

今のユーリ相手だと……微妙だな。

ユーリが愛剣を持っていない事を差し引いても、勝率は四割といったところか。

だが、それだけあれば充分。

充分に勝利を持ってこれる。

私は、剣をユーリに向けて宣言した。

「手にするのは木剣。アレクとマグマもない。あの時とは随分状況が違うが、まあ、構うまい。

——殺す気で行くぞ。

構えろユーリ。あの時の続きだ」

「ッ!？」

私は、今までの余裕を消しさり、剥き出しの殺気をユーリに叩きつけた。

それを感じたユーリが目を見開き、本気の日になる。

そして、私は踏み込んだ。

「神脚！」

さつきまでとは比べ物にならぬ速度。

当然、それに続くのは、さつきまでとは比べ物にならぬ速度の斬撃！

「神速剣・一閃！」

「なっ!？」

驚愕しつつ、ユーリはしっかりと私の神速剣を受け流してみせた。

だが、反撃の余裕はない。

そこへ、追撃を叩き込む。

「神速剣・嵐！」

「くっ……！」

本来なら飛剣として使い、衝撃波のように広範囲を薙ぎ払う技。それを至近距離で炸裂させる。

間近で発生した刃の暴風に刻まれ、ユーリが血を流す。

そして、そのまま吹き飛ばされて行った。

無論、私はそれを追いかける。

魔法剣士相手に、距離は空けさせん！

「ブリザードストーム！」

ユーリが吹き飛ばされながら放った氷の魔法。

凍てつく冷気の風が、空間を凍らせながら私に迫る。

だが！

「小賢しい！」

嵐で冷気を吹き飛ばす。

私の速度は欠片たりとも落ちない。

この程度では、足止めにもならんぞ！

「！」

しかし、冷気を吹き飛ばした時に気づいた。

私の進行方向に、ユーリはもういない。

どこに消えた？

決まっている。

冷気を目眩ましにして姿を隠したのなら……奇襲！

「攻ノ型・一閃！」

「神速剣・一閃！」

私の側面を取ったユーリの斬撃と、私の斬撃がぶつかり合う。

威力は互角。

しかし、速度は私の方が上！

ならば、攻めるのみ！

「神速剣・五月雨！」

「守ノ型・流！」

神速の連撃を、ユーリは全て受け流す。

その顔に余裕はない。

余裕はないが……当たらない！

このままではダメだな。

「神速剣・陽炎！」

「！」

五月雨の乱れ斬りを止め、フェイントを混ぜる。

そして、陽炎を繰り出す……と見せ掛けて、神脚で高速移動。

二重のフェイント。

「神速剣・隴！」

「ッ!？」

しかし、ユーリはこれも防ぐ。

だが、体勢は崩れた。

ならば、次は受け流せない威力を叩き込む！

「神速剣・破断！」

「うっ……！」

威力特化の大技。

その分、若干速度が落ちる。

ユーリはそれを見逃さず、剣で受け流すのではなく、受けた。

剣を盾に斬撃を受け止め、飛脚を併用して、勢いに逆らわずに後ろ

へ跳ぶ。

これは……守ノ型・城壁！

その変型！

上手い！

クソッ！

崩せない！

崩し切れない！

このまま時間が経てば、活動に時間制限のある私の負けだ。

単発の神速剣に切り替えればもっと持つだろうが、それじゃユーリ

には通じないだろう。

強い。

本当に強い。

これが、今のユーリか！

上等だ！

超えてみせろよ！

この私を！

私は、壮絶な顔で笑った。

「神速飛剣——」

「飛剣——」

吹き飛ぶユーリに向けて、飛剣を構える。

ユーリもまた、吹き飛ばされながら、剣を振りかぶっていた。

そして、両者の必殺剣が放たれる。

「大嵐！」

「氷龍！」

破壊の暴風と、氷の龍が中心地点でぶつかり合う。

威力はほぼ互角。

二つの技は相殺し、その激突によって、凄まじい衝撃が発生した。

「まだまだアー！」

その衝撃の中を突っ切り、私はユーリに向けて走る。

だが、ユーリは動かない。

剣を片手で持ってぶら下げ、もう片方の手を私に向けて突き出している。

構えを解いた、だと？

あの手は、何かの魔法を打とうとしているようにも見えるが、魔力の流れは感じない。

「……何の真似だ」

接近し、首筋に木剣を突き付ける。

それでも尚、ユーリは動かなかった。

本気で、なんの真似だ？

「ストップよ。静止を呼び掛けたつもりだったのだけれど」

「何故だ？」

「何故だ、じゃないわよ。……この惨状が目に入らないの？」

「惨状？」

言われて周りを見回してみる。

破壊され尽くした演習場の跡地。

ヒビ割れ、辛うじて形だけを残した結界。

腰を抜かす受験者達。

呆然とする試験官達。

呆れた顔で私を見るシオン。

あー……。

「やっちゃまった……？」

「疑問形にしないでちょうだい。修理代は請求するわよ」

「断る！ 試験中の事故だ！ 経費で落とせ！」

「はあ……」

ユーリがやれやれとばかりに深いため息を吐いた。

そして、どうしようもないものを見るような冷たい視線を私に向ける。

なんだ、その目は？

師に対して、失礼極まりないな。

「で？ これだけの力を見せつけたあなたは、いったい何者なのかしら？」

予想はつくけれど、信じがたいから、納得のいく説明が欲しいところね」

ユーリはジト目になって私を見た。

責めるような目だ。

いや、そんな目をされてもな……。

「……まあ、ここで話すような事じゃないだろ。後でお前らの家に行くから、その時に話す」

「……それもそうね。今は入学試験の最中だし、人目のある所でする話ではないわね」

納得してくれたらしい。

どんな時でも冷静に物事を考えられるのは、こいつの美点だわな。マグマだったら、こうはいかないだろう。

……にしても、これで終わりか。
仕方のない事とはいえ、いささか消化不良だな。

その後、試験はつつがなく、とは言えないまでも無事終了した。
結果は後日発表するから、その時にまた学校へ来いとの事だ。
そして、解散。

半分くらいは貴族の子女らしく馬車で帰って行き、私とシオンを含
めた残りの半分は、普通に徒歩で帰った。

次元の荒鷺亭に帰ってからは、さすがに疲れが出てすぐに寝た。
限界まで動いた訳ではないが、激戦だったからな。

しかも、その前には苦手な頭脳労働までやったんだ。
そりゃ疲れる。

逆に、シオンは元気が有り余ってるのか、私の戦いに触発されたの
か、冒険者ギルドに行つて来ると言つて出て行った。

適当な冒険者を捕まえて、訓練でもするんだろう。
心配はいらない。

こうして、王都生活最初の山場、入学試験は終了したのだった。

24 ナイトソード家

ナイトソード公・爵家。

それは、今から約70年前に、『劍神』エドガー・ナイトソードが、戦場での武功により貴族の位を得た事によって作られた家。

当初は子爵家だったが、エドガーが劍神となり、救国の英雄と呼ばれるようになった時に侯爵家へと格上げされた。

そして、エドガーの死後。

家を継ぐべきエドガーの子孫がいらない為、仕方なく一番弟子であるアレクがナイトソードの名と家を引き継ぐ。

だが、その時、既にアレクは、現王の妹であり、兄弟弟子でもあったユーリ・グラディウスと恋愛結婚をしていた。

結果として、侯爵が王族と縁を結ぶ事態となり、ナイトソード家は更に公爵家へと格上げされる。

そうして、現在。

ナイトソード家は、互いに『三劍士』の名を持つ最強夫妻が守り、エドガーの始めた事業を引き継ぎ、一人娘も生まれて、順調に発展を続けているのだ。

……というのが、噂話などから知り得た、私の前世の家の現状である。

アレクとユーリがイチャコラしたのは周知の事実だったし、あいつらの娘は、私も実の孫のように可愛がってたから、よく覚えている。公爵家に格上げされてたのには驚いたが、まあ、理由を聞けば普通に納得できた。

しかし、ツツコミどころもある。

私の始めた事業ってなんぞ？

そんなもんを始めた覚えはないぞ。

ぶつちやけ、私は貴族としての仕事の殆どを部下か弟子に放り投げて放浪してた、お飾り侯爵だった。

騎士としての仕事はちゃんとやったが、貴族としての事業なんて、

これっぽっちも手をつけていない。

やった事と言えば、世直しの旅（笑）くらいだ。

ああ。

あとは、野良犬感覚で孤児とか拾ってきたな。

アレクもそんな感じで拾ってきた孤児の一人だったし、他のナイトソード家で働く執事とかメイドとか番兵とかの九割は、私が拾ってきた元孤児だ。

その教育を押し付けた部下を過労死させそうになったのは良い思い出だな。

ん？

待てよ。

そういえば、その部下が、孤児救済を事業扱いにして、私がパーティーとかをすっぽかす言い訳に使っちゃまえとか言ってたような……。

まあ、どうでもいいか。

で、私は今、そんなナイトソード家の前に来ていた。

シオンは宿で留守番だ。

込み入った話もしたくないからな。

王都の外れにある緑に溢れた広大な敷地。

そこに建った巨大な屋敷。

敷地全体……とまではいえないが、屋敷部分を完全に覆い尽くして余りある対魔法結界。

まさに公爵家の名に相応しい威容だが、実は最初の子爵家時代から引越してはしていない。

改築はしたがな。

たしか、英雄に相応しい屋敷を与えたいけど、王城近くに子爵ごときを住まわせたなら、他の高位貴族から苦情が来るかもしれないとか、そんな感じの複雑な事情があつて、こんな王都の外れの方に屋敷を与えられたんだつたな。

今となつては懐かしい。

そんな屋敷の門の前に立つ門番が二人。
成長しているが、見覚えのある顔だ。

私が拾ってきた元孤児だな。

遅しく成長してはいるが……気が緩んでるな。

門番なら、もう少しシヤキツとしろ。

もしかしたら、白昼堂々、公爵邸に襲撃をかける大馬鹿がいるかもしれないだろう。

そう、今の私のように。

「ねえ、そこのおじちゃん達」

「ん？」

「どうしたんだい、お嬢ちゃん？」

私は、悪乗り全開の媚びた美少女ボイスで門番どもに話しかけた。

門番どもは、ちよつと頬を緩めていた。

フツ。

母譲りの美貌を持つてすれば、この程度容易いわ！

「あのね、えつとお……」

そして、もじもじとしながらチラチラ門番どもの顔を見るといふ、
我ながら気持ち悪い事をしながら、おもむろに腰に差した木剣を抜いた。

「隙だらけだ」

そのまま、ちよつとデレデレしながら私を見ていた門番に木剣を叩きつけ、吹き飛ばす。

門番は、屋敷を囲う柵にめり込んで沈黙した。

ロリコン死すべし、慈悲はない。

いや、死んではいけないが。

まあ、門番のくせに油断するからそうなる。

「なっ!?!」

「ハア！」

「ぐへっ!?!」

慌てて剣を抜こうとしたもう片方の門番には突きをお見舞いする。
そいつも吹き飛び、一人目と同じく、柵にめり込んで沈黙した。

……情けない。

こんな美少女相手に、助けを呼ぶ事すらできないとは。さて、次だ。

「たのもーうー！」

私は、屋敷全体に響き渡る大音量で叫び、突撃を開始する。

理由？

ちよつとしたサプライズだ。

弛み防止の為に、前もよくやっていた。

まあ、稽古みたいなもんだな。

「何奴?！」

「私は曲者だ!！」

「そ、その間抜けで適当な返し方は旦那様の……ぐはっ!？」

ワラワラと出てきた番兵どもを、木剣で叩き潰しながら屋敷を指す。

どいつもこいつも手応えがない!

弛んどる!

まあ、私に殺意がないからなのか、向こうも本気で殺しにきてはいないがな。

本気を出せば、もう少しマシになると信じたい。

「曲者だ! 迎え撃て!」

「うわようし、よつよい」

「おい、ちよつと待て。クソ強い幼女って、ユーリが言ってたお客様じゃね?」

「そんな事言ってる場合か! もう何人やられたと思ってんだ!」

「……なんか懐かしいな、この感じ」

「旦那様を思い出しますね」

「いいから、早く行け!」

そんな呑気な事をぬかす番兵どもを蹴散らしながら敷地内を駆け抜け、屋敷に突撃。

だが、そこからは剣を持ったメイドや執事が立ち塞がった。

「そこまでです! いくらお客様と言えど、この家でこれ以上の狼藉

は許しませぬぞ！」

「だったら、力づくで止めてみる、トーマス！」

まあ、お前はこの家で、二を争うくらいに弱いから無理だと思うがなあー！」

「な、何故それを?! まさか本当に旦那様の……」

「そらー！」

「ぐはあああ!?!」

矢面に立った老執事のトーマス(よく仕事を押し付けていた最古参の部下)を軽く小突いてぶっ飛ばし、他の連中も同様に叩きのめす。

正直、外の番兵どもよりも手応えがあった。

私が屋敷内の備品を壊さないように戦っている事を差し引いても、普通に強い。

まあ、こいつらには、指導という程ではないが、わたし剣神自ら多少の手解きをしてやった。

それを、しっかりと糧にしているようで何よりだ。

……というか、今さらだが、番兵がメイドより弱いとか、この家は大丈夫なのだろうか？

番兵どもにも、こいつら以上の手解きをしてやった筈なんだがな。

「！・おっとー！」

そんな事を考えている最中。

死角となった場所から鋭い斬撃が放たれた。

それを木剣で受け、そのまま襲撃者とはばぜり合いになる。

襲撃者は、眼鏡をかけ、メイド服を着た歳かきの女だった。

「メアリーか！ 老けたな！」

「余計なお世話です」

そのまま、襲撃者メアリーと何度か斬り結ぶ。

ユーリには及ばないが、普通に強いな！

ヨハンさんと同じくらいには強いかもしれん。

前から思ってたが、こいつはメイドにしとくには惜しい人材だ。

「やるな！ 前よりも強くなってるんじゃないか？」

「お褒めに預り光荣……です！」

言いながら、メアリーが激しく攻めて来る。

当たり前のように纏った闘気に、剣という長物を屋内で完璧に使いこなしてみせる技量。

相変わらず見事だ！

褒めてやろう！

「だが、まだまだ私には届かん！ 神速剣・一閃！」

「ッ!？」

急に速くなった私の剣を、それでもメアリーは防いだ。

神速剣は、一流の剣士ですら視認困難な速度を誇る。

それを防ぐという事は、超一流の領域に、英雄と戦える領域に踏み込んでいるという証。

本当に、なんでそんな奴がメイドなんてやってるんだか。

まあ、そこにこいつなりの理由がある事は知っているがな。

「神速剣・槍牙！」

「うっ……!？」

そんなメアリーを、神速の突きで弾き飛ばす。

咄嗟に剣で防いでいたから、怪我はしていないだろう。

そして、メアリーが復活する前に先を急ぐ。

目的地は二階だ。

廊下を走り回り、階段を駆け昇る。

そうして辿り着いたのは、この屋敷の執務室。

私がたまくに使ってた部屋だが、事業を始めたつてからには、ここに居る筈だ。

「この屋敷の現当主が。」

「頼も……うー！」

執務室の扉を蹴り開け、中に乗り込む。

そこに奴はいた。

私の予想通りの顔がいた。

「お待ちしてました」

そう言いつつ、困ったような顔で私を出迎えたのは、腰に二本の剣を差した、黒髪の剣士。

昔から落ち着いた奴だったが、年齢を重ねて、より安定感を増したように思う。

こいつこそが、我が一番弟子にして王国三剣士の一人。

そして、当代『剣神』。

即ち、世界最強の剣士。

「久しぶりだな、アレク！」

「ええ、お久しぶりです師匠……でいいんですよ？」

『剣神』アレク・ナイトソードは、若干懐疑的な目で私を見た。

なんだ、その目は？

生まれ変わってまで会いに来てやったんだから、もっと敬え。

何はともあれ、こうして私は、13年ぶりに一番弟子と再会した。



「——という感じで、私は転生して、お前らに会いに来た訳だ。

どうだ、わかったか？」

「はい。一応は理解できました。ユーリから聞いてはいましたが、まさか本当に師匠の生まれ変わりだったとは……」

その後、執務室において、一部の重鎮（トーマスとメアリー）を含めた三人を相手に、私は転生した事やこれまでの事、王都に来た理由と目的なんかを話した。

ユーリとマグマは仕事中という事で欠席だ。

そして、アレク達は「信じがたいです」と言いつつも、すんなりと私の話を信じてくれた。

曰く、白昼堂々、公爵邸に襲撃をかける馬鹿は私くらいだそうだが、言い方に棘があるな。

他にも、雰囲気や剣技がエドガーの生き写しという事、

ユーリに放ったエドガーしか知らない筈の台詞なんかも判断材料になったそうだが。

「それにしても転生ですか。そんなもの、おとぎ話だと思っ
たが……。」

師匠、何かこの世に未練でもあったんですか?」

「いや、全くなかった」

本当に、何故に私が転生したのか、その理由は未だに謎だ。

一応、心当たりがなくてもないが……確証なんてこれっぽちもない
勘に過ぎないからな。

言う必要はないだろう。

「旦那様あ! 生きておられたのなら、何故もつと早く知らせてくれ
なかったのですか!」

このトーマス! 旦那様が亡くなられて、どれだけの悲しみに暮れ
た事か!

この家の者達は、皆みなそうですぞ!」

「いや、お前らより両親の方が大事だったし。

それに、お前らならぞんざいに扱っても大丈夫だろ?」

「なんとこの言いくさ!」

「トーマスさん、諦めましょう。旦那様はこういう方です」

吠えるトーマスを、メアリーが宥めた。

というか……

「そもそも、エドガーはもう死んだんだ。死人をいつまでも引き摺る
な、見苦しい」

私は、お前らに後を託して天寿を全うしたんだ。

本来なら、それで終わり。

それがひよっこり帰って来たからってギャーギャーと。

いつまでも死人に頼るな。

……ん?

三人が微妙な顔で私を見ている。

なんだ、その顔は?

「師匠がそれを言いますか……」

「奥様の事をずっと引き摺っておられる方に言われましても……」
「説得力がありませんね」

ぐっ！

痛いところ突いてきやがった！

だが、それはそれ！

これはこれだ！

「うるさい！ とにかく、これから私の事は師匠とか旦那様とかじゃなく、リンネさんとでも呼べ！

昔みたいに私に頼るなよ！ エドガーは死んだんだからな！」

「……師匠に頼った事なんてありませんたっけ？」

「仕事を押し付けられた記憶しかありませんね」

「これ、二人とも！ 旦那様も昔は頼りになったのです！ 昔は！」

「喧嘩売ってんのか！」

「この恩知らずどもが！」

また骨の髄まで教育して、私の偉大さを叩き込んでやろうか！？

そう思ったが、やめておいた。

今は感動的な再会の場だ。

教育なら、後でできる。

……その代わり、本当に後で覚えとけよ。

不甲斐なかつた番兵どもと一緒に鍛え直してやる。

「それで、師匠……」

「リンネさん」

「……リンネさん。こうして戻られた訳ですし、また劍神に戻りませんか？」

「何言つてやがる。劍神の証はお前らに託しただろ。今さら返されてもいらんわ」

「いえ、それがそうでもないというか……リンネさん。これを見てください」

そう言つて、アレクは一本の剣を差し出してきた。

さつき、アレクが腰に差していた剣の一本。

全体がガラスのように透き通った、美しい剣。

『神劍』か」

神劍。

これこそが、歴代の剣神に受け継がれてきた、世界最強の剣。いったい、いつ作られたのかはわからない。

どうやって作られたのかもわからない。

ただ、記録に残らない程の太古の昔から、代々の剣神に振るわれてきた、剣神の証。

前世の最期において、私が弟子どもに託した剣だ。

「で、これがどうした？」

「よく見てください。この剣は、師匠が使っていた頃から、何も変わっていない。」

「あん？」

言われて、神剣を鞘から抜き、まじまじと見る。

ガラスのような透き通った造形。

だが、その形は、芸術品のような美しさに反して、どこまでもシンプル。

装飾もなく、一切の飾りが無い。

まるで、そこらの兵士が持つ、数打ちの量産品のような外見。

世界最強の剣という割にはシヨボい。

だが、神剣はこれで良いのだ。

この剣は、使い手に合わせて形を変える。

その代の剣神が最も使いやすい形へと姿を変えるのだ。

この形状は、兵士上がりであった前世の私に合う形。

……ああ。

つまり、そういう事か。

「なるほどな」

「ええ……神剣は、俺を主として認めていないんです」

剣神の代替わりというのは、基本的に先代を倒した者が『神剣』と『剣神』の称号を受け継ぐ。

実際、私も戦場において先代剣神を斬り殺した事で剣神になった。

だが、前世の私の死因は病だ。

ほぼ老衰とも言う。

誰にも倒される事なく、弟子どもとの決着がつく前に寿命が来てし

まった。

戦いの中で倒れたのだから私の負けだと思うが、神剣はそれを認めていない訳か。

それを証明するかのようには、私の手の中へと戻って来た神剣が、淡く光って形を変えた。

今の私の小さい体に合うような、短く軽いショートソードへと。

これは、未だに神剣が私を主と認めている証。

なんとという事だ。

一番死人を引き摺っていたのは、この剣だったのか。

「……やっぱり。師匠が転生したと聞いた時から、そんな気がしてたんです。」

『剣神』の称号はあなたのものだ。お返しします」

アレクは、なにやら苦しそうな顔でそう言った。

……なんだ、その顔は？

何故、そんなに苦しそうな顔をする。

何故、そんなに思い詰めたような顔をする。

……これは一度、腹を割って話し合う必要があるか。

「おい、アレク」

私は、項垂れるアレクに声をかけて立ち上がった。

「剣を取れ。出かけるぞ」

私の前世に、未練などないと思っていた。

その考えは今でも変わらない。

だが、未練はなくとも、どうやら、やり残した事はあったらしい。

さあ、前世の決着をつけに行くか。

25 『剣神』アレク・ナイトソード

トーマスにアレクの仕事を押し付け、メアリーにちよつとしたお使いを頼み、後顧の憂いをなくしてからやって来たのは、王都から少し離れた場所にある広大な草原。

ここは、かつて弟子どもと最後の戦いを繰り広げた場所。前世の私が死んだ場所。

あの時の続きをするのに、これ以上相応しい場所はないだろう。

「さて、アレク。わざわざ剣を持って、こんな場所まで来た理由……言わなくてもわかるな？」

「……はい」

ならいい。

私はスラリと剣を抜いた。

神剣が、怖いくらいに手に馴染む。

そして、アレクもまた剣を抜いた。

それは、アレクが持っていたもう一本の剣。

『剛剣グラム』

神剣を除けば世界最強と称される十の魔剣『十剣』の一つ。

かつて、私が剣神になる前に振るい、後にアレクへと受け継がれた剣だ。

「……戦う前に、一つ聞く。

アレク、お前は剣神の称号に拘りでもあるのか？」

「え？」

「え？　じゃないわ。自分が神剣に選ばれてないと言った時、妙に沈んだ顔をしただろうが。

なんだ？　剣神の名を継げなかった事が、そんなにショックか？」

アレクにジト目を向けながら問いたです。

こいつは名声や称号に執着するような奴じゃなかった筈だ。

「で、どうなんだ？」

「それは……ええ、ショックでしたよ」

そして、アレクは語りだした。

抱え込んでいたのであろう悩みを。

私に向かつて吐き出した。

「俺は師匠に託されたのに……ユーリとマグマの二人にも勝って、認められて、二人からも次期剣神の座を、王国の守護神の座を任されたのに……それなのに俺は、どうしても神剣に認めてもらえなかった。

俺は剣神でなければいけないのに、皆に託されたのに、その使命を果たす事ができない。どこまで行っても偽物の剣神にしかなれない。……シヨックでしたよ」

言い終えた後、アレクは弱々しい表情で項垂れた。

……そんな風に思ってやがったのか。

今のアレクは、自分で自分を追い詰めている。

それも無駄に。

まったく、この馬鹿は……

「アレク」

「はい……」

「この馬鹿弟子があー！」

「ぐはっ！」

とりあえず、全力でぶん殴っておいた。

アッパークットだ。

それが顎にクリーンヒットし、アレクは数十メートル上空まで吹き飛ばされ、その後、重力に引かれて地面に落下した。

傷は浅い。

闘気のおかげだ。

「お前は、そんな事でウジウジ悩んでたのか！」

「そんな事って……」

「いいか、アレク！ 私は確かにお前に、お前らに神剣と剣神の称号を託した！

だが、それにそこまで深い意味はないぞ！ ただの遺品の一つとして受け取っどけ！」

ぶっちゃけ、人生の最期にそれっぽい事をしただけだ！

それを無駄に深刻に捉えやがって！

「そもそも、劍神が王国の守護神ってなんだ!? そう呼ばれてたのは知ってたが、元を正せば敵を殺してぶんどった称号だぞ！」

守護神もクソもあるか！ 劍神の称号を重く考え過ぎなんだよ、お前は！」

確かに、私は国を守りたいと思った。

そういう風に行動した。

だが、それはあくまでも私個人の思想だ。

それをお前が無理に受け継ぐ必要はない。

「というか、その悩みユーリとかには相談したのか？」

「いえ……情なくて誰にも話せてないです……」

「馬鹿野郎！ 私は教えたよな！ 困ったり辛かったりする時は、素直に他人を頼れと！ 私が教えた中で一番重要な事を忘れおって！」

本当に、この馬鹿は……！

呆れて物も言えんわ。

「はあ……。アレク、無駄に思い悩むな。

神劍に認められなかったくらいでお前を責めるような奴はいない。

というか、お前に継がせた張本人である私は、そこまで劍神の称号に拘りはない。

それで騒ぐのは、せいぜい、クソ貴族連中くらいだろ。そんなのは無視しろ、無視」

……さて、言いたい事は言った。

後はアレクの気持ちの問題だ。

「それで、お前はもうどうしたい？ 劍神の名を継ぐのは、決して義務ではないぞ。

それでも欲しいか？ 劍神の称号が。

それでも成りたいか？ 世界最強の劍士に」

私はアレクに問う。

強制はしない。

私の跡など、継ぎたくなければ継がなくていい。

劍神の称号など、いらぬなら捨ててしまえばいい。

だからこそ、問う。

これは、アレクの気持ちの問題だ。
そして、アレクは答えた。

「……はい。それでも俺は、劍神になりたい。
自分の意思で、師匠の後を継ぎたい。
今でも、そう思っています」

「そうか……」
ならば、もう何も言うまい。
無駄な重責は取り払った。

その上で決めたのなら、後は言葉の代わりに劍を交えるのみ。
「構えろ、アレク。最後の稽古の続きだ。」

真の劍神になりたいくば、私を倒して神劍を継承してみせろ」

「……はい！」

アレクが応じると同時に、私は鬨気を全開にし、神劍の力を解放した。

神劍もまた、分類としては魔劍の一つ。

即ち、魔劍特有の擬似鬨気を使う事ができる。

当然、その出力は世界最高だ。

「ぐっ……」

まだ解放しただけだというのに、凄まじい反動が私を襲う。

やはり、自分の鬨気にすら耐えられない体で神劍を使うのは危険過ぎる。

全力で戦える時間は一分とないだろう。

だからこそ、その一分に全てを懸ける！

わざと負けてやるつもりはない！

「行くぞ！」

「はい！」

開幕速攻！

「神脚！」

初手から全力の神脚で距離を詰める。

全盛期には及ばないが、確実に老年期を超えた速度で突っ込む！

「神脚！」

それに対して、アレクは全く同じ戦法で応えた。

アレクは、三人の弟子の中で唯一、私の神速剣を継承している。

そして、今のアレクは最後に戦った時、20歳に満たない餓鬼だった頃より遥かに強い。

その結果……

「神速剣・一閃！」

ぶつけ合った初撃の威力は、全くの互角だった。

僅かにつばぜり合いをした後、互いに弾かれるように後退する。

そのまま様子見……なんて真似はしない。

時間がないんだ。

攻めて！ 攻めて！ 攻め続ける！

「神速剣・五月雨！」

目にも留まらぬ連続斬り！

神剣によって更に強化され、速さを増したこの技。

たとえ、防御の達人であるユーリであろうとも容易には捌き切れないだろう。

さあ、どう受ける!?

「神速剣・五月雨！」

「何ッ!？」

アレクは、真正面から同じ技で迎撃してきた。

連続攻撃に対して、寸分変わらず剣を合わせて防いでくる。

マジか……!!

五月雨同士で打ち合うならば、攻め手よりも、それに合わせなければならぬ受け手の方が、圧倒的に難易度が高い。

それを私相手にやるか!

しかも、隙あらば主導権を奪おうとしてくる!

こやつめ!

「ならば、これならどうだ!? 神脚乱舞！」

このままでは決め手に欠けると判断した私は、即座に離脱し、神脚によって上下左右前後に跳ね回る。

そして、四方八方からアレクへと斬りかかった。

「くっ……！」

アレクもまた神速で剣を振り、私の攻撃を防ぐ。

だが、臙を交えた複雑な動きを捉えきれず、体に小さな傷が増えていく。

いけそうだ。

このまま押しきる！

「神速剣・嵐！」

そんなジリ貧の状況を打開しようとしたのか、アレクが次の一手を打ってきた。

嵐は広範囲を衝撃波で吹き飛ばす技。

たしかに、捉えられない速度を相手に範囲攻撃は理にかなってはい

る。

だが！

「それは悪手だろ！」

嵐や飛剣は、剣に纏わせている闘気の魔力を打ち出す技だ。

だが、この技には欠点がある。

斬撃を飛ばす為には、剣に魔力を集中させなければならない。

その工程を挟む分、他の技よりも遅いのだ。

無論、アレクの技量を持つてすれば、それでも相当速い事に違いない。

だが、こと神速剣同士の戦いにおいて、この僅かな遅れは致命的な隙を生む。

技を繰り出す直前の隙を突き、私の剣がアレクの腕を斬り飛ばした。

切断されたアレクの左腕が、クルクルと宙を舞う。

しかし……

「ぐあ……!!? そういう事か!?!」

その直後、まるで腕を斬り飛ばされる事を想定していたかのようにアレクは動き、

体を回転させながら残った右腕で剣を振るって、攻撃の直後に一瞬硬直した私の右足を斬り裂いて行った。

やられた……！

嵐を撃とうとしたのはフェイント。

私とその隙を突いて腕を落としに行くこと予測し、腕を掴に使用して、逆にカウンターを仕掛けてきやがった！

結果としてアレクは左腕を失ったが、私は右足を奪われた。

即ち、私の機動力を殺した。

読み合いはアレクの勝ちだ。

「神脚乱舞！」

そして、今度はアレクが私の周りを跳び回る。

立場逆転だ。

さつき有効だった攻撃が、そのまま私に返ってきた。

唯一の救いは、アレクも片腕になった事で剣速が低下した事だが、その分、神脚による加速力がある。

一方、足をやられた私は回避すら困難。

完全にアレクの優勢だ。

「ぐっ……！」

しかも、そろそろ体の限界も近い。

一分という短すぎるタイムリミットは、すぐそこにまで迫っていた。

……だからなんだ！

「まだだア！」

私は最後まで全力で戦う。

全力で勝ちを目指す。

それが私のやり方だ！

「神速剣・槍牙！」

「がっ……！？」

全神経を集中し、針の穴を通すような精密な刺突で、アレクを捉える。

その突きが、アレクの脇腹を穿った。

「くっ……！」

だが、アレクは後ろに下がりながら反撃の一撃を繰り出した。

引き技の斬撃。

それを避けきれず、左目を斬り裂かれた。

「ハアアアアア！」

後ろに下がったアレクが、すぐに態勢を立て直して再度突撃してくる。

「あああああ！」

私は、それを真っ向から迎え撃つ。

おそらく、これが最後の攻防になるだろう。

これ以上は体が持たない。

決着をつけるぞ、アレク！

「神速剣……！」

互いが技の構えを取る。

私は上段に剣を振り上げ、アレクは腰だめに剣を構えた。

そして、最後の一撃が放たれる。

「一閃ッ！」

選んだ技は、互いに同じ。

私は剣を振り下ろし、アレクは体を捻って抜刀術のように剣を振り

抜いた。

私の剣がアレクの肩にめり込む。

それによって、アレクの剣は勢いを失った。

腕の根元を両断されれば、当然、腕は動かない。

だが、アレクは知った事かとばかりに、体の回転で強引に剣を振り切った。

その剣速は、——私よりも速かった。

アレクは、私の剣がその体を斬り裂くよりも速く駆け抜け、私の腹に横一文字の傷を刻む。

傷は深い。

血がドクドクと溢れ出す。

体が動かない。

戦闘継続は、不可能だ。

「……見事だ」

最後にそれだけを口にして、私は倒れた。

戦闘の余波によって更地となり、剥き出しになった地面に倒れ込む。

地面に血が広がっていった。

「師匠ー」

そこへアレクが走り寄り、私を抱き起こしながら、懐から回復薬を取り出して傷口へとぶちまける。

それによって僅かに傷が治り、血が止まった。

まあ、早急に治療師に見せなければ死ぬだろうが。

それでも、少しだけ話す余裕は生まれた。

「アレク、お前の勝ちだ。受け取れ……」

私は最後の力を振り絞って、アレクに神剣を差し出す。

前世の最後と同じ光景。

あの時と同じように、アレクは残った腕を震わせながら、神剣を受け取った。

そして、神剣は淡く光って形を変える。

飾り気のないショートソードから、少しだけ装飾のある直剣へと。

その形状は、アレクが最も扱いやすそうな形をしていた。

アレクは、神剣に認められたのだ。

「あの時は見届けられなかったが……今度こそ確かに見届けたぞ。

アレク……お前が次の『剣神』だ」

「はい……」

アレクは、涙を流しながら何度も頷いた。

……剣神という称号について、その立場について、義務について、こいつなりに苦悩したのだろう。

深く深く悩んだのだろう。

その涙には、万感の想いが籠められているように感じた。

私はそんなアレクを、とても穏やかな気持ちで見詰めた。

「しかし……弟子に追い抜かれたら、もつと悔しいもんだと思ってた

んだがな……」

なんだろうか。

悔しさは確かにある。

だが、それ以上に嬉しいという気持ちの方が勝るのだ。

不思議な感じだ。

負けず嫌いな私の思考とは思えない。

そんな益体もない事を考えている内に、意識が遠のいていった。

目が霞む。

どうやら無理をし過ぎたらしい。

酷く眠い。

今の私には、この微睡みに身を任せる事しかできない。

「師匠？」

今日は疲れた。

少し寝よう。

少し休もう。

それが良い。

「師匠！」

そんな、うるさいアレクスの声を聞きながら、私は意識を落とした。

26 シオンの入学初日

騎士学校の入学式の日。

宿に一人残されたシオンは、合格発表と同時に学校から支給された白の制服に着替え、いつものように腰に剣を差し、一人で騎士学校へと向かった。

これからは学校の寮へと入るので、この宿ともお別れだ。

シオンは荷物を纏めた。

未だに帰らないリンネの分も含めて。

そう、シオンの同行者であるリンネは未だに帰っていないのだ。

一週間程前。

入学試験を終えた翌日に、「ちよつと、劍神の家を襲撃して来る」という、ふざけた事をぬかして宿を出て行ったきりである。

その日からリンネは帰らず、代わりにリンネの使いを名乗る一人のメイドがシオンの元を訪ねて来た。

「あなたがシオンさんですね。リンネ様から手紙を預かっています。こちらをどうぞ」

そうやってメガネのメイドが差し出した手紙。

そこには、確かにリンネ本人の汚い字で、こう書かれていた。

『シオンへ。』

お前がこの手紙を読んでいるという事は、私は既にこの世にはいないだろう。

割りと冗談抜きでその可能性があるが、まあ、心配するな。

大丈夫だ、多分。

で、具体的な話をすると、私はこれから劍神に挑む事になった。

冗談も手加減も抜きのガチバトルだ。

死ぬ気はないが、最悪の場合は死ぬし、死なずとも大怪我くらいはするだろう。

というか、この手紙が届いている時点で大怪我確定だ。

おそらく、お前がこの手紙を読んでいる頃、私は治癒術師の世話になっっている。

という訳で、怪我がある程度治るまでは帰れないから、そのつもりでいてくれ。

もしかしたら入学式にも間に合わないかもしれん。

その場合は、寂しいだろうが一人で行ってくれ。

くれぐれも、因縁のクソ貴族に会っても暴走するなよ。

以上だ。

健闘を祈る。

リンネより。

PS・試験に落ちてたとかだったら、すまんが一人で田舎に帰ってくれ』

そんな、思わず読み始めた瞬間に握り潰したくなるような、ふざけた内容の手紙だったが、

この手紙を運んで来たメイド曰く、この話は真実であるらしい。

シオンは、ひとまずこの話を信じた。

というのも、剣神の家、ナイトソード家の使用人を名乗るこのメイドが、物腰から見て相当な実力者であると思えたからだ。

それこそ、剣神の部下を名乗るに相応しいと思える程に。

加えて、リンネ直筆の手紙もあり、これが盛大なドツキリである可能性は低いと判断した。

見舞いに来るかと思われたが、それは断った。

こんな、王都に来て早々に大問題を起こした馬鹿の事など考えたくもない。

シオンは、リンネの事を頭の片隅へと追いやり、騎士学校への道を急ぐ。

学校に到着した後、まずはこれから世話になる寮へと向かった。

騎士学校は三年制。

つまり、何事もなければ、これから三年間世話になる場所だ。

そしてこの寮、本来は二人部屋だが、入学試験で優秀な成績を残したシオンとリンネは特別生として優遇されており、二人部屋を一人で

使う事ができる。

シオンは、空いているベッドにリンネの荷物を適当に放り投げた。本当ならリンネに与えられた部屋に運んだ方が良いのだろうが、その部屋は当然ながら女子寮だ。

女子寮は男子禁制。

シオンは立ち入れないのである。

一応、学校の職員に事情を話せば通してくれるかもしれないが、馬鹿の為にそこまでしてやる気など、シオンには更々なかった。

荷物を置いて部屋にきちんと鍵をかけ、入学式が行われる会場へと向かう。

まだ時間に余裕はあるが、時間厳守は騎士の基本だ。

遅刻など、もつてのほかである。

ならば、早めに行動するくらいが丁度いい。

シオンは、遅刻どころか初日から不登校をかます、どこぞの不良生徒とは違うのだ。

そして、騎士学校の生徒ともなれば、シオンと同じく真面目な者が多いようで、彼が到着するよりも前に集まっている者はそれなりにいた。

そこには、シオンと同じ白い制服を着た生徒の他に、黒い制服を着た生徒もいる。

色の違いは、学校の違いである。

白い制服が騎士学校の生徒。

黒い制服は文官学校の生徒なのだ。

その証拠に、白い制服を着た者だけが腰に剣を差して武装している。

騎士学校と文官学校。

正確には、王立騎士学校と王立文官学校。

この二つの学校は、共に国を担う最も重要な人材を育成する機関であり、

それ故に、相互の理解を深める為、同じ敷地を共有する程に深く繋

がっている。

それこそ、最早一つの学校と呼んでも差し支えないレベルだ。

当然、そこまで深く繋がった両校は、入学式や卒業式など共通のイベントを合同で執り行う。

つまり、この場には両校合わせた全ての一年生が出席する訳だ。

この一人一人が、将来国を背負って立つ人材だといふのだから凄まじい。

まあ、中には、どこぞの馬鹿リンネのように不参加を決め込んでいる不良生徒もいるのだろうが。

そんな中であつて、シオンは知っている顔を見つけた。

シオンが気づいたのと同時に、相手もシオンに気づいたようで、その少女は白銀の髪をふわりとなびかせて、シオンの方に振り向いた。

「あんたは……」

「あ、はい。お久しぶりです。試験には無事に合格されたみたいですね。おめでとうございます」

そう言つてニコリと微笑む、可愛らしい少女。

それは、王都に来た初日に出会った三人の少女の内一人だった。

リンネが珍しく真剣な顔で「仲良くしといた方が良くぞ」と言つていた相手。

リンネの分析では、彼女達はかなり高位の貴族である可能性が高いそうだ。

それは、シオンも薄々感じていたが、馬鹿リンネに同じ事を言われたせいで一気に自信がなくなつた。

まあ、だからと言つて、殊更に避けようという気もないのだが。

「あ……」

同年代の女の子を相手に何を話せばいいのかわからず、シオンが言葉に詰まる。

今までシオンが接してきた同年代の女といへば、馬鹿リンネと馬鹿オスカと妹ラビビみたいな奴だけだ。

シオンは、まともな女の子と話す機会がなかった。

ましてや、立場的には目上の貴族が相手。

しかも、よく考えてみれば名前すら知らない相手。
シオンが停止するのも無理はなかった。

「ああ、そういえば自己紹介を忘れていましたね。」

私はアリスと申します。あなたの名前は？」

その沈黙をどう捉えたのか、少女、アリスが自己紹介を始めた。

これは、シオンにとつても渡りに船である。

可愛い女の子とお近づきになるチャンス、期せずして到来であった。

「シオンだ」

「シオンさんですね。改めて、よろしく願います」

「ああ」

しかし、やはりシオンは素っ気ない態度しか取れない。

まあ、シオンだから仕方あるまい。

リンネ一行の中では常識人枠だったが、それは周りが馬鹿過ぎたせいで彼自身の欠点が目立たなかっただけ。

シオンは元来、不器用な性格なのだ。

リンネがいなければ、友達を作る事すらできなかつたかもしれない。
い。

そうして、二人はぎこちないながら（主にシオンが）会話を続けた。
幸いにして話題はあつた。

リンネが入学前から大問題を起こし、入学式を欠席した事。

アリスの実家で、ちよつとした騒動が起こつたらしい事。

そういう細々とした世間話を続ける事ができた。

ちなみに、アリスを高位の貴族と見て、シオンは敬語を使うべきかとも考えたが、他ならぬアリス自身に止められた。

友達付き合いをするなら、必要ないだろうとの事だ。

シオンとしてはその方が助かるが、おかしな貴族だとも思った。

そうしている内に、入学式が始まる時間が近づいてくる。

二人は、規則を重んじる騎士候補生らしく会話を切り上げ、式に集中した。

丁度、話題も尽きてきたところなので、シオンにとつてはベストな

タイミングだったのかもしれない。

そして、会場となった場所の壇上に、黒い制服を着た赤髪の少女が現れ、入学式が開始された。

「あ、スーちゃんだ」

アリスが小さな声でポツリと呟く。

彼女の言う通り、壇上に現れたのはシオンも知っている顔。

シオン達をアリスの友達にしようと画策した、あの少女であった。

その後ろには、あの護衛の少女も控えている。

何故、あんな場所にいるのか？

シオンが不思議に思っていると、次の瞬間、彼女は驚くべき事を語り始めた。

「新入生の皆さん、はじめまして。

わたくしは王立文官学校生徒会長、スカーレット・グラディウスと申します。

以後、よろしくお願いいたしますわ」

その自己紹介を聞いて、シオンは目を見開いて驚愕した。

文官学校生徒会長。

そんな立派な肩書きを持っていた事にも驚きだが、最大の驚きは彼女が名乗った名字だ。

スカーレット・グラディウス。

このグラディウス王国において、その名字を名乗れる者は一握りしかない。

王国の名を背負う者。

それは、この国の頂点、王族のみである。

彼女は、シオンの予想を遥かに上回る大物だった。

そして、それはスカーレットをスーちゃんなどと気安く呼ぶアリスも同じだ。

リンネの予想は見事に的中していた。

シオンは信じられない思いだ。

その六割は、リンネの予想が当たっていた事に対するものである。シオンの中で、リンネはそれ程にアホなのだ。

「あなた達は厳しい入学過程と試験を乗り越え、見事この王立学園に入学を果たした、選ばれし精鋭達ですわ。

いずれは、あなた達がこの国を背負って立つ事になるでしょう。故に、その自覚をしっかりと持ち、立場に恥じない活躍を期待しています」

シオンが愕然としている間にも、スカーレットのスピーチは続く。壇上に立つ彼女は、まさに上に立つ者、王族としてのカリスマ性に満ちており、その声にはとてつもない覇気があった。

彼女は、自分で言った言葉を体現している。立場に全く恥じない活躍をしている。

そんな彼女が語る言葉には、素晴らしい説得力があった。

「——以上です。これにて、わたくしの挨拶を終わりますわ」
そして、スピーチが終了した。

誰からともなく拍手が巻き起こり、麗しき生徒会長を祝福する。

その拍手に見送られながら、スカーレットは壇上を降り、続いて校長の長くてつまらない話が始まる。

校長の話が長くてつまらないというのは、どこの学校でも変わらない常識に近い現象だ。

だが、今回は特にその傾向が顕著だった。

それはそうだろう。

誰だって、おっさんの長々とした話よりも、麗しの美少女生徒会長の話聞いていたい決まっている。

そんな校長の話もじきに終わり、入学式は終了した。

この後は、それぞれの学校に別れ、各生徒会メンバーが軽く学校内を案内してくれる予定だ。

つまり、スカーレットは文官学校の方へと行き、こちらには騎士学校の生徒会メンバーがやって来た訳だが……

——その時、シオンは自分の視界が真っ赤に染まったような感覚に陥った。

「はじめまして。僕は騎士学校の生徒会長、フォルテ・アクロイドだよろしく」

シオンは、騎士学校の生徒会長を名乗った、一見穏やかそうに話すこの男の顔を殴り飛ばしてやりたい衝動に駆られた。

『平民上がりの息子のくせに!』

昔、この男に言われた言葉が脳裏にフラッシュバックする。

あの時よりも成長している。

背が伸びている。

声も変わっている。

だが、シオンが見間違える筈がない。

なにせ、自分達家族を壊しかけた相手の顔なのだから。

『どうせお前の母親も、騎士に尻尾を振るしか脳のない無能な平民だったんだろ!』

心の内で暴れる怒りに、必死の思いで蓋をする。

今殴れば、前と同じ事になる。

自分はおろか、尊敬する父をも巻き込んでしまったあの時と同じになる。

シオンは、怒気を決して顔に出さず、完全に抑え込んでみせた。

「やあ、アリス」

不快の権化が、シオンの隣にいたアリスを見て笑顔を浮かべた。

おぞましい、吐き気のする笑みだ。

少なくとも、シオンにはそう見えたし、アリスも顔をしかめている。

「……お久しぶりです、アクロイドさん。新生の案内をしなくていいのですか?」

「勿論、仕事はするさ。でも、愛しの婚約者様の顔を見たら我慢できなくなってしまうってね」

フォルテがアリスの頬に手を添えた。

条件反射なのか、アリスは身を固くしてしまっている。

少なくとも、好意的な反応ではなかった。

「……正式には決定していないお話でしょう」

「そうだね。でも、時間の問題さ。」

僕以上に、君に相応しい男はいない」

一見、イケメンと美少女の逢瀬に見える場面に、新入生達の一部が黄色い悲鳴を上げていた。

一方、シオンは吐き気を堪えるのに必死だった。

そして、シオンの中で急激にアリスへの仲間意識が芽生えていく。被害者の会的な発想である。

「おや？」

その時、フォルテの視線がシオンに向いた。

表面上は笑っているが、シオンにはわかる。

今のフォルテは、虫を見るような目をしていて。

昔と何も変わらない、平民を見下す視線であった。

「君は、噂の『雷剣』だね。会えて嬉しいよ。」

是非、仲良くしようじゃないか」

ふざけるな死ね。

シオンの内心を言葉にするのなら、これ以上適切な表現はないだろう。

だが、シオンは殺意をなんとか飲み込み、握手を求めるように差し出されたフォルテの手を掴んだ。

このまま握り潰したくなかったのは言うまでもない。

「さて、じゃあ、学校案内を始めようか」

その後、フォルテとその取り巻きである生徒会メンバーによる学校案内を受け、最悪の入学初日は終わった。

そして、シオンが疲れた顔で寮の自室へ引き上げようとした時。

「お待ちください」

シオンは、背後からかけられた声に呼び止められた。

振り返ると、そこには……

「あんた……」

「ええ。またお会いしましたね、シオンさん」

メガネをかけ、腰に剣を携えた、物腰の鋭いメイドが立っていた。そう。

シオンにリンネからの手紙を届けた、剣神の使用人を名乗るあのメイドだ。

「何のご用ですか？」

「旦那様からのご命令です。あなたを当家へお連れするようにと申し付けられました。一緒に来てください」

「……は？」

シオンの怒涛の一日は、まだ終わっていないかった。

27 目が覚めて

「うーん……」

ちよつとした寝苦しさを感じながら、私は目を覚ました。どうやら、私はベッドに寝かせられているらしい。

だが、動くのはキツそうだな。体中が重くてダルい。

そして、痛い。特に腹が痛む。

最後、アレクにぶつた斬られたところだ。

目を開けば、見慣れぬ天井が見えた。

だが、全く見覚えがない訳じゃないな。

どこかで見た事がある。

どこだったか。

屋敷の客間だったか？

「どうやら、目が覚めたようね」

そんな、割りとうでもいい事を考えていた時、ベッドの脇から聞き覚えのありまくる声が聞こえてきた。

そつちに目を向けてみれば、クールな眼差しの女の姿が。

「ユーリか」

「ええ、そうよ。記憶はハッキリしてるかしら、先生？」

お、私の事を先生と呼ぶという事は、アレク辺りから事情を聞いたな。

まあ、それは置いといて、とりあえず質問に答えるか。

「ああ。記憶も意識もハッキリしてるぞ」

「そう。それは良かったわ。アレクに無様に倒されたという屈辱の記憶が先生の中から消えなくて」

「お前は相変わらず口が悪いな。それと、私の事はリンネさんと呼べ」

「わかったわ、リンネ」

「呼び捨てか！ まあ、別にいいが」

師匠に対する敬意が足らん。

ぶつちやけ、弟子どもの中で私に敬意を払ってたのはアレクだけだ。

そのアレクでさえ、そこまで敬ってはくれなかったしな。

……マジで、もう一度教育してやろうか。

「ん？　そういえば、なんでお前がここに居るんだ？　仕事はどうした？　サボりか？」

「ちゃんと有休取ったわ。私が居るのは、あなたの治療の為よ。

アレクは治療院に連れて行こうとしたけれど、さすがにボロボロの剣神が瀕死の幼女を抱えて行ったら、変な噂になりそうなもの。

だから、私を含めた屋敷の治療術師で対応したのよ」

「なるほど」

想像してみる。

いい歳した公爵様が、ボロ雑巾のようになった美少女を治療院に連れ込む姿を。

事案だな。

少なくとも、剣神としての権威は急降下するだろう。

「はあ。それにしても、今日は入学式だったのだけれどね。

娘の晴れ姿を見逃しちゃったわ。この埋め合わせはしてもらおうから」

「ああ、私そんなに寝てたのか。

というか、アリスは元気か？」

お！　そういえば、お前らが私の跡を継いだって事は、あの子は正式に私の孫娘になった訳か！

なあなあ、元気なのか!？」

「……まあ、体は元気ではあるわね。

最近は色々悩んだり、悪い虫につかれたりして苦労してるけれど」「なんだと!？」

アリスに悪い虫だと!？」

許せん!

即座に駆除してくれる!

「ああ、その害虫は高位の貴族だから、安易に殺したりはしないでね。」

問題になるわ。

今、政治的に追い詰めているところだから、邪魔しないで」

「ぬ……い……ぐぐぐ……そういう事なら我慢しておこう。」

だが！ 必ずお前らが潰せよ！」

「言われるまでもないわ」

一見わかりづらいが、そう語るユーリの目は怒りに燃えていた。

どうやら、ユーリとしても、その害虫に関してはかなり腹に据えかねてるようだ。

これなら、任せても大丈夫そうだな。

と、そこでユーリが思い出したように、ベッド脇に置いてあった呼び出し用のベルを鳴らした。

多分、私が高きたら鳴らすように言われてたのだろう。

忘れてたのか。

そして、そのベルが鳴ってすぐにアレクが現れた。

「師匠！ 目が覚めたんですね！」

「ああ。悪いな心配かけて。それと、私の事はリンネさんと呼べ」
駆けつけて来たアレクは、私と違って完全回復していた。

体に傷は見当たらないし、左腕もくっついていてる。

というか、その左腕で部屋の扉を開けた。

それも勢いよく。

……なんだろうか。

今になって悔しさが。

「こらっ、アレク。左腕はまだ使わないようにって言ったでしょう？

傷口が開いたらどうするの」

「うっ、ごめんユーリ」

「ヒール。まったく、気をつけなさい。」

私としては、先生よりもあなたの方がよっぽど大切なんだから」

「ユーリ……い！」

「おーい。人の目の前でイチヤつくなー」

仲良き事は素晴らしいが、時と場所を考えろ。

そういうのは、寝室のベッドの上でやれ。

私も昔、似たような事を言われた。

それを言った奴は、呪い殺さんばかりの嫉妬の目つきをしていたが。

「旦那様！ よくぞお目覚めにー！」

「ご無事なようで何よりです」

「ああ」

続いて、トーマスとメアリーがやって来た。

これで全員集合……じゃないな。

『……………』

扉の前に、大量の執事&メイドがいる。

全員が奇っ怪なポーズで部屋を覗き込んでいたが、すぐに我慢できなくなっただのか、部屋の中に雪崩れ込んできた。

しかも、続々と集まってくる。

番兵どもまでやって来た。

客間が狭く感じる！

「旦那様！ 本当に旦那様なんですわね!?!」

「わく！ こんなに可愛くなっちゃって〜！」

「眠り姫状態も可愛かったけど、起きたらおめめがパツチリで尚可愛いー！」

「これでスツピンとは……！」

「末恐ろしい！」

「あのクソ爺と同一人物とは思えないな」

「まったく、とんだ詐欺だぜ」

「一瞬ときめいた俺の心を返せ！」

「おい、誰かこのロリコン排除しろ」

「ラジャ」

「ぬわー！ 何をするー！」

ええい！ 鬱陶しい！

なんなんだ、こいつら!?!

あ！ こら、頭を撫でるな！

水を得た魚のようにはしゃぐんじゃない！

とういか！

「おい！ こいつらにも私の正体バラしたのか!？」

「リンネ様が悪いのですよ。初日にあれだけ暴れ回れば、普通にバレます。」

「ここにいるのは、あなたに扱しじかれた者ばかりなのですから」

私の反論は、メアリーに切つて捨てられた。

うぐつ！

そう言われると、何も言えん！

くそう！

ノリと勢いで襲撃なんてかけるんじやなかった！

「まあ、でも、この状況はいけませんね。」

皆さん！ 怪我人をもみくちやにするものではありません！

ふれあいの時間は後日改めて取るので、今は早く仕事に戻りなさい
！」

「かしこまりました！」

「さすがメイド長！ わかっていらつしやる！」

「うし、仕事に戻るか」

「おうー！」

「頑張るぞー！」

メアリーの一喝によって、使用人軍団は退散していった。
た、助かった。

「ああ、そういえば旦那さ……ではなくリンネ様。」

使用人一同にバレたついでという訳ではございませんが、リンネ様の正体は、どの程度まで他の方々にお話しになるのですか？」

「ん？ お前らだけでいいんじゃないか？」

トーマスの質問に軽く答える。

私はそこまで前世の事を流布するつもりはないからな。

あと伝えるのは、せいぜいアリスとマグマくらいだろう。

「いえ、それはダメでしょう」

そこにユーリが口を挟んだ。

何か問題でもあるのか？

「先生……リンネは自分の影響力を甘く見すぎね。

たしかに、むやみやたらと流布するものではないけれど、それでも必要最低限の人達には知らせておいた方がいいわ」

「具体的には？」

「そうね……とりあえず、遠征中のマグマは確定。

あとは兄上達、王家にも話しておくべきかしら」

あー、王家か。

となると、シグルスとフレアの二人だな。

ああ、いや、あいつらの息子と娘にもか。

前に会った時はガキだったが、今頃はそれなりに成長してるだろうし。

「屋敷全体にバレたなら、アリスにも話していいんじゃないか？」

「そうね、アレク。あの子だけ仲間外れにするものではないわ」

「では、私がお嬢様をお迎えに行きましょう。そろそろ学校も終わる頃でしょうし、知らせるのなら早い方がいいでしょう」

「お願いします、メアリーさん」

「では、私は王家の皆様への取り次ぎをして参りましょう。

事が事ですので、近い内に内密の会談が執り行われる筈です」

「お願いね、トーマス」

なんか凄い勢いで話が纏まり、メアリーとトーマスが部屋を出て行くこうとする。

だが、メアリーが何かに気づいたように動きを止め、私の方へと振り返った。

どうした？

「そういえば、シオンさんはどういたしますか？」

彼も事情を知っているのであれば、ご招待する必要があると思いませんが」

「あ」

忘れてた。

そういえば、シオンの奴、宿屋に置きっぱなしだ。

そういや、アレクと戦う前に、メアリーにシオンへの手紙を渡した

んだったな。

危うく忘却の彼方に消し去るところだった。

「じゃあ、連れてきてくれ。あいつも一応、事情知ってるから」
「かしこまりました」

そうして、メアリーは今度こそ去って行った。

トーマスもいなくなり、この部屋にはアレクとユーリだけが残る。
そして、ユーリがポツリと呟いた。

「……シオンって、あの入学試験にいた子よね。」

リンネ、あなたの正体って、どれだけの人間が知っているの?」

「ん? シオンの他には両親くらいだが。あー、いや、そういうえばヨハンさんも知ってたか?」

初めて会った時に、母がポロツとこぼしてたような気がする。

それを聞いたユーリは頭を抱えた。

「この調子だと、不特定多数に話してそうで怖いわね」

「いや、他には話してないぞ。話した相手にも口止めはしたしな」

「口止めって……どうせ、誰にも話すなって口頭で伝えた程度でしよう?」

「よくわかったな。それに、私が前世の事を話しても殆ど誰も信じてくれなかったし、問題はないと思うぞ」

「……それを聞いて、少しだけ安心したわ」

まあ、両親にはその内信じさせる予定だけだな。

それが私なりの誠意というものだ。

実の親を騙すような真似を、他でもないこの私ができる筈がない。

「そういえば師しよ……リンネさん。俺は正式に神剣を受け継いだので、グラムを使わなくなっただけですけど、代わりにリンネさんが使いますか?」

と、今度はアレクが話しかけてきた。

ふむ。

グラムか。

……あっても使いこなせる気がしないな。

「いや、いらん。今の私にはグラムでも身に余る。」

なにせ、自分の闘気にすら耐えられない体だからな。

グラムはメアリーにでも渡しとけ」

「闘気に、耐えられない？」

「そういえば、入学試験の時に軽々しく本気を出せないとか言ってたわね。それに関係する事？」

そういえば伝えてなかったな。

今の私の現状。

まあ、こいつらになら話してもいいか。

という事で、今の私の体について話しておいた。

まだ体が出来上がっていないせいで、全開の闘気には短時間しか体が持たない事。

故に、魔剣を装備して擬似闘気を上乗せすれば、より体に負担がかかって、活動限界を縮めてしまう事などの話だ。

それを聞いた二人は、

「自分の闘気で傷付くなんて聞いた事ないですね。

でも、身の丈に合わない魔剣を使った時の症状に似てますし、あり得なくはないのか」

「道理で。治療した時に、いくらなんでも体が傷付きすぎだと思ったのよ。そういう事だったのね」

と言って、自分なりに納得していた。

そして、とりあえず無茶すんなど言われて怒られた。

まあ、私とて好き好んで無茶したい訳ではない。

無茶しなければならぬ事態にでも陥らない限りはやらんさ。

そう言っても信用されなかったが。

その後は、別れていた十年ちよつとの話をして盛り上がった。

私は今世でも、波乱万丈とまではいかないが賑やかな人生を送ってきたし、

こいつらはこいつらで、私が死んでからも退屈しない人生を送ってきている。

話題は尽きなかった。

特に、アリスの成長についての話は興味深い。

……本当なら、この屋敷に帰って来てから真つ先にやりたい事があつたんだがな。

だが、そろそろアリスも帰って来るといふし、仕方ない、後日に回そう。

その時に、纏めて報告すればいいか。

そうして、屋敷での穏やかな時間は過ぎていった。

メアリーと名乗ったメイドに連れられ、シオンは馬車に乗せられた。

質実剛健といった風情の、余計な装飾よりも純粋な機能美を求めた高級そうな馬車。

それを引くのは、マーニ村でよく世話になった馬チャールズとは比べ物にならない、見ただけでわかる気品に満ち溢れた漆黒の名馬。

その馬を操る御者は、穏やかそうな顔をした中年の執事。

この執事も、メアリー程ではないが、立ち振舞いに隙がない。結構な実力者であろう。

馬車、馬、人材。

その全てにおいて非常に充実したこの構成を見るだけで、メアリーの仕える家が相当の高位貴族であると改めて認識させられる。

だが、それ以上にシオンを驚かせた事があった。

メアリーが馬車の扉を開け、そこに乗り込んだ時、先客がいる事に気づいたのだ。

相手もまた、シオンが現れた事に驚いていた。

「アリス？」

「え、シオンさん？ あれ？ なんでウチの馬車にシオンさんが？」

先客の正体。

それは、ついさつき別れたばかりのアリスであった。

ここで、シオンの明晰な頭脳が高速で回転する。

劍神、高位貴族、ウチの馬車という言葉、そしてアリス。

それらの要素を総合的に分析し、シオンは一つの結論へと到達した。

「あんだ、もしかして劍神の娘か？」

割りと誰でも気づきそうな答えだったが。

「……そういえば、まだ名字までは名乗っていませんでしたね。

改めまして、アリス・ナイトソードと申します。

仰る通り、劍神アレク・ナイトソードの娘であり、先代劍神エド

ガー・ナイトソードの孫に当たります。

もつとも、お祖父様とは血が繋がっていませんが。
改めて、よろしくお願いしますね」

「あ、ああ」

シオンは、自分の事を語るアリスを見て、少しだけ違和感を覚えた。
今の台詞。

剣神の娘だと語ったその言葉には、感情が乗っていないように感じたのだ。

家柄を誇る気持ちすら感じられない。

心なしか、目のハイライトが消えていたような気すらする。

シオンは、何か複雑な事情がある事を察して、深入りするのをやめた。

彼は、人のデリケートな部分にズケズケと踏み入ってくる、どこぞの少女とは違うのだ。

「それで、シオンさんはどうしてここに？」

「俺は、この人に連れて来られた。

あんたの家に突撃して行ったウチの馬鹿が関わっているらしい。

……迷惑をかけていたら、すまん」

「突撃……？ ウチの馬鹿……？ どういう事なの、メアリー？」

混乱したアリスがメアリーに助けを求める。

「屋敷で起こった事件に関係する事です」

詳しいお話は屋敷に着いてからご説明いたします」

「そ、そう……」

メアリーがメガネをくいつと持ち上げながら言った言葉を聞いて、アリスは思ったよりも大事おおいとになっていく様子に息を呑んだ。

一方、シオンは、思ったよりも大事おおいとを巻き起こしてくれたらしい馬鹿の事を思つて頭を抱えた。

最初に剣神の家に行くと言い出した時、冗談だと思つて流さずに、殴つてでも止めるべきだった。

もし時を巻き戻せるならば、シオンは確実にそうするだろう。

そして、リンネの反撃を食らつて地に沈むだろう。

案外、これでよかったのかもしれない。

そうして、馬車に揺られ、シオンは王都の外れにある緑に囲まれた巨大な屋敷、ナイトソード公爵家へとやって来た。

ここにリンネがいる筈だ。

そして、リンネの行動によつては敵認定されているかもしれない。シオンは気を引き締めた。

場合によつては土下座する覚悟すら決めた。

その時には、当然、リンネの頭も一緒に地面に叩きつけるつもりだ。「ただいま戻りました」

「あ、お帰りなさいませお嬢様〜！」

「アリスちゃん、お帰り！」

「今、夕食の仕度をしてるから、もうちよつと待つててくれ」

アリスが帰宅を告げ、使用人達がやたらフレンドリーに返す。

その最中も、ドタドタと慌ただしく廊下を走る使用人の多い事多い事。

その、あまりの雰囲気の違いに、シオンは唖然とした。

高位貴族というものは、もつと堅苦しいものだと思っていたが、その常識が音を立てて崩壊していく。

まあ、こんなに気安い公爵家など、普通はあり得ないのだが。

原因は全て、この家の先代当主であるエドガーにある。

彼は平民上がりであり、それ故に貴族の堅苦しさを嫌った。

加えて、ここの使用人達は、大体がエドガーの拾ってきた元孤児である。

いくらトーマスなどに教育を受けたとはいえ、元孤児が意図的に貴族の雰囲気染まる訳もなく、結果としてこんな感じになったのだ。

しかも、現当主のアレクもまた元孤児。

つまり、彼らにとつてのアレクは、主というより弟か兄みたいなものなのだ。

その事実が、この気安い雰囲気拍車をかけた。

もはや、ナイトソード家は、なんちゃって貴族の領域である。

とてもアットホームな職場です。

「あなた達……一応、お客様の前ですよ。」

おもてなしモードに移行しなさい」

「あ、そうでした！」

「旦那さ……リンネ様のお知り合いだっというから、つい」

「すみませんでしたメイド長！」

そんなメアリーの発言により、使用人達の雰囲気が変わる。

急に猫の皮を被ったかのようにおとなしくなり、走るのをやめて気品のある歩き方に変わる。

そして、玄関の前に並んで、一子乱れぬお辞儀をした。

『お帰りなさいませ、お嬢様。いらっしやいませ、お客様』

そう。

なんちゃって公爵家とて、常に緩い訳ではないのだ。

ちゃんとしたお客様が来る時は、それ相応の持て成しができる。

それくらいには教育が行き届いている。

そんな使用人一同を見回して満足したのか、メアリーが「よろしい」と呟いた。

「それでは、シオンさん。改めまして、当家へようこそいらっしやいました」

「いや、今更取り繕われてもな……」

「あ、あはは……」

シオンの至極真つ当なツツコミに、アリスは苦笑していた。

だが、メアリーは意にも介さない。

それを見てシオンは思った。

アリス以外、全員おかしいと。

「それで、旦那様達はどうなっていますか？」

「はい。先程、食堂へと移動されました。夕食はもうすぐ出来上がる予定です」

「よろしい。では、お嬢様、シオンさん。食堂の方へとお越しくださいませ。旦那様方が待っておられます」

「あ、はい」

「わかった……わかりました」

ここで、シオンは言葉使いを改めた。

これから大貴族に、それも剣神に会うのだから当然の反応だろう。シオンは敬語の使えない子ではない。

今までは、この家の雰囲気^{雰囲気}に吞まれていただけだ。

そして、シオン達はメアリーに連れられて、ナイトソード家の食堂へとやって来た。

メアリーが大きな扉をノックし、中へと声をかける。

「お嬢様とシオンさんをお連れいたしました」

「ああ、入ってください」

中から聞こえてきたのは、優しそうな男の声。

この声の主が剣神だろうか？

シオンがそう考えている間に扉は開き……

「アリス〜！」

中から弾丸のような勢いで一人の少女が飛び出し、アリスへと抱き着いた。

「え？　え？」

「おお！　お前はあの時の！　なるほど、お前がアリスだったのか！

大きくなったなあ！」

喜色満面でアリスに抱き着き、頭を撫ではじめる少女。

それは、シオンのよく知る馬鹿^{リンネ}であった。

何故か全身に包帯を巻いているが、いつも以上に元気いっぱいである。

「はっ！」

予想外の事態にシオンが面食らい、アリスが抱き着かれたまま硬直する。

その様子を食堂の奥から見ていた一組の男女。

優しそうな黒髪の男は苦笑し、クールそうな白髪の女はため息を吐

いていた。

「やつぱりこうなったか……生まれ変わっても、相変わらずアリスにデレデレだ。どうしようか？」

「どうしようもないでしょうね。このまま説明するしかないんじゃない？」

そのまま二人は、アリスに引っ付いたリンネを、アリスごと引き摺って食堂の一席に座らせた。

一方、シオンはまるで狼狽えた様子のないメアリーによって、同じく食堂の一席に座らされた。

そして、そのまま黒髪の男が話しはじめた。

「とりあえず、お帰りアリス。そして、ようこそシオンくん。

俺はアレク。剣神アレク・ナイトソードだ。

リンネさんがこんな状態だから、詳しい話は俺から説明するよ」

まだ混乱が抜けきらないシオンは、剣神から更に驚愕の話を聞く事になる。

ずっと前にリンネが語っていた与太話。

ただの痛い妄想だと思って流していた話が真実であったという、驚愕の話を。



そろそろアリスが帰って来るという事で、アレク達との話を切り上げ、

一緒に夕飯を食べながら色々と話そうという事で、食堂へと移動した。

動くと傷が痛んだが、さすがに眠っていた一週間もの間、治癒魔法をかけ続けられていたおかげか、悲鳴を上げる程の痛みではなかった。

そうして、食堂で待っていたら、じきにメアリーがアリスを連れて

来た。

私は何も考えずにアリスに突撃し、抱き締めながら頭を撫でた。
可愛い。

孫娘、めっちゃ可愛い。

前に会った時は気づかなかったが、よく見てみると、アリスにはアレクとユーリ両方の面影があるな。

白髪の美少女で、全体的にはユーリに似ているが、優しそうな顔立ちにはアレク似だ。

赤ん坊の頃の面影もあるな、

私の事を「じーじ」と呼んで甘えてきた頃を思い出す。

ヤバイ。

孫娘、可愛いすぎるわ。

この子を泣かせるような奴がいたら、私がぶつ殺してやる！

「アリス〜！」

そうして、私が孫娘を存分に愛でている間に、アレクとユーリが、アリスとシオンに私の正体の事を話していた。

二人とも唾然としていた。

そして、シオンがポツリと、

「リンネの痛い妄想じゃなかったのか……」

と呟いていた。

失礼な！

私がアリス成分補給中じゃなければ、ぶつ飛ばしてるところだ！

「ええつと……お祖父様、なのですか？」

「そうだぞ、アリス！　というか、私の事は覚えてるか？」

「あ、はい。うっすらと」

おお！

それは嬉しいな！

私が死んだ時、アリスはまだ2歳くらいだったからなあ。

「昔みたいにな、じーじと呼んでくれてもいいんだぞー！」

「いえ、それはちよつと……リンネさんと呼ばせていただきます」

「む。ちよつと他人行儀だな」

なんだろうか？

他の連中相手ならそれでよかったのに、アリス相手だとなんか嫌だ。

もっとフレンドリーに呼んでほしい。

うーむ……。

「よし！　じゃあ、私の事はリンネちゃんと呼べ！」

「ええ!？」

さん付けよりは、ちゃん付けの方が親しみやすいだろう。

祖父としての威厳はなくなりそうだが、今の私は幼女だしな。

いつその事、妹路線を開拓してみるのも良いかもしれん！

「ああ、師匠が暴走している」

「ほっときましょう。私達が気にする事じゃないわ」

「……こいつは、昔からこうなんですか？」

「そうだね。アリス相手には、よく暴走していたよ」

「別に、アリス相手じゃなくても、騒がしい事に変わりはなかったわね」

「自由奔放を体現されたようなお方です。振り回される方はたまったものではありません。」

恩義も感じていますし尊敬もしていますが、ぶん殴りたくなった事も一度や二度ではありませんね」

「わかる」

「剣神エドガーってこんなだったのか……理想を粉々に打ち砕かれた気分だ」

なにやら外野が騒がしいが、今の私はとても気分が良いからな。

聞き流してやろう！

「え、えっと……リンネちゃん？」

「うむー」

ああ……浄化される。

天使だ。

アリスは天使だったのだ。

そんな感じで、アリスと楽しくお喋りしている間に、食事の時間は

終わった。
マジで楽しかった。

アリスとの楽しい食事会の翌日。

アリスとシオンは朝一の馬車で学校に戻り、アレクとトーマスとメアリーも、それぞれの仕事に戻った。

ただ、ユーリだけは今日も有休を取っている。

私もアリス達と一緒に学校に行くつもりだったが、突然入った予定のせいでキャンセルだ。

ユーリと私が学校を休んだ理由。

それは、予想外に早くセツティングされた、王家との会談が理由である。

「おー。久しぶりに近くで見るとデカく感じるな」

「あなたの背が縮んだせいでしょう」

現在。

私とユーリは、この王都の中心にある巨大な城、王城シルバーソードの前に来ていた。

トーマスの仕事が早すぎるせいだ。

さすが、いつも私に仕事を押し付けられていた社畜の鑑。

まあ、それにしても王家側の対応が早すぎると思うが。

たまたまスケジュールに余裕があったのか、それとも無理矢理ねじ込んだのか。

どっちでもいいな。

ちなみに、現在の時刻は正午だ。

いかに仕事の早い連中でも、昨日の今日で朝一からというのはさすがに無理だったらしい。

その空いた時間で、私はどうしてもやっておきたかった事をやれたから良かったが。

あと、午前中に治癒魔法をかけまくられたおかげで、包帯が取れたな。

おかげで、王城に来て、そこまで奇異の目で見られずに済んでい

る。まあ、三剣士が幼女連れて来てる時点で、だいぶ目立ってはいるが。

「お待ちしておりました、ユーリ様。此方へどうぞ」

「ええ」

そうして城の中に入ると、あらかじめ待機していた騎士の一人（制服から見て、近衛騎士団）に小部屋まで案内された。

密会だからな。

謁見の間で堂々とやる訳にもいかない。

「こちらです。国王様も間もなくいらつしやいます。しばらく、お待ちください」

「わかったわ」

「それでは、お連れの方。剣をお預かりいたします」

「ん？ ああ、そうだったな。ほれ」

腰に差していた剣を騎士に渡す。

普通に考えて、国王と会わせるのに武装を許す訳がない。

例外は、前世の私や三剣士だけだ。

これは信用と実績の問題だな。

剣がないと落ち着かんー。

なんて思いながら待つ事、少し。

小部屋の扉がノックされた。

「国王様がいらつしやいました」

「どうぞ」

そう言つて、ユーリが素っ気なく入室を許可すると、部屋の扉が開いた。

そこから、ユーリと同じ白銀の髪をした男が現れる。

こいつがグラディウス王国の国王。

この国の最高権力者。

シグルス・グラディウス。

「やあ。久しぶりだね、ユーリ」

「ご無沙汰しております、兄上」

そして、ユーリの兄でもある。

この生意気な馬鹿弟子が、珍しく敬語を使う相手だ。

いや、こいつ相手に敬語を使わなくていい奴など、この国にはほぼ存在しないだろうが。

……ふむ。敬語か。

よし。

ちよつと、からかってやろう。

「それで、君は……」

「はじめまして国王様。」

私はリンネ。S級冒険者であり、現在は騎士学校の末席を汚させていただいております。

この度は、訳あってユーリ様にご同行させていただきました。

以後、よしなに」

「ああ、君が『天才剣士』か。噂は聞いているよ。こちらこそ、よろしく。」

それと、今は非公式の場だ。

もう少し肩の力を抜いてくれていいよ」

「ハハア！」

急に敬語を使い出した私を見て、ユーリが驚愕の表情をしていた。

どうした？

私だって敬語くらい使えるんだぞ。

昔、騎士になった時に、叩き込まれたからな。

「それで。今日は何の用件かな？」

トーマスからは緊急の案件としか聞いていないんだけど」

「……………」

「ユーリ？」

「……ハッ。失礼しました。この世のものとは思えない光景を見て放心していたようです」

「う、うん？」

そこまでか。

私の敬語は、そこまでレアか。

まあ、そういえば、こいつらの前で使った事はなかったような気がする。

「では、率直に用件をお伝えします。」

「今日来たのは、私達の師こと、先代剣神エドガーに関しての事です」「彼の御仁がどうかしたのかい？ 亡くなつてから随分経つけど、隠し子でも見つかったとか？」

おい、こら。

それだと、私が浮気したみたいだろうが！

冗談にしても笑えない。

ぶっ飛ばすぞ、お前。

「率直に言おうと、先生は生まれ変わって帰って来ました」

「……ちよつと、何言ってるかわからないな」

「ちなみに、このリンネが先生の生まれ変わりです」

「待って。ちよつと待って」

「シグルスウ。隠し子とは、言ってくれるじゃないか。あ、あ？」

「……ドツキリかな？」

「残念ながら違います。神剣が反応しましたし、間違いないでしょう。現実を受け入れてください、兄上」

ちよつと殺気を籠めて睨み付けてやると、シグルスの顔がドンドン青くなつていった。

失言した自覚はあるらしい。

そこには、一国の王としての威厳など欠片も残つてはいなかった。

「あの、その、エドガー殿……」

「リンネさんと呼べ」

「リンネ様！ 生意気言つてすみませんでした！ どうかお許しを！」

シグルスはバツと椅子から立ち上がり、流れるように土下座した。そこには、一国の王としての威厳など欠片も残つてはいなかった。むしろ、こんなのが国王で大丈夫なのかと心配になる情けなさだけがあった。

だが、まあ、こいつがここまで下手に出るのは、私とフレアの二人

だけだ。

私は昔、王族の権力で調子に乗ってたガキンチョ時代のこいつを脅威きょうい苦くした事があるからな。

どうにも、それがトラウマになってるらしい。

なお、フレアに関しては、単純に尻に敷かれている。

「顔を上げるシグルス。」

なあに、私は優しいからなあ。寛大な心で許してやろう。

それに、今は非公式の場だ。

もう少し肩の力を抜いていいぞ」

「ハハア！　ありがたき幸せ！」
む。

さっきの台詞をそのまま返して慌てさせてやろうと思ったんだが、これはガチで怯えてるな。

慌てる余裕すらないと見た。

ここまで脅かすつもりはなかったんだが……。

まあ、失言したこいつが悪いか。

だが、この態度を公式の場にまで引き摺るなよ。

絶対に面倒な事になるからな。

「兄上、その癖、まだ治っていなかったんですね。」

それで、緊急の用件というのは、リンネの処遇に関する事なんです
が……そろそろ、椅子に戻って真面目に話し合いませんか」

「あ、ああ。そうだね」

そうして、シグルスは席に戻り、真面目な話し合いが始まった。

「それで、リンネ様。私に会いに来られたという事は、何かご用件が
ありなのでしょうか？」

「いんや、別に。お前ら王家には話を通しておいた方がいいって言
われたから来ただけだ。」

私は前と同じように、細かい事はお前ら若い衆に任せて半隠居、
じゃないな。今回は青春してるから、有事の際だけ頼れ」

「了解しました！　家族にも伝えておきます！」

「兄上。公式の場でその態度はやめてくださいね」

さて、伝える事はこれで終わりだな。

あとは、気になってた事聞いとくか。

「そういえば、二年前の魔物襲撃事件は知ってるか？ シヤムシールの領都を襲ったやつだ」

「え？ いや、知ってはいますが……急に話が変わりましたね」

「私も現場にいたからな。ずっと気になってたんだ。」

で、私の聞いた話だと、王都の学者連中が調べてるらしいが、何かわかったか？」

現状、あの事件の情報はドレイクからの又聞きでしか知らないからな。

できれば、もう少し正確な情報を知っておきたい。

頭脳労働は苦手だが、それでも知っているのといかないのでは、今後の対応に差が出る。

あの事件は、私をして頭に入れとかなければならないと思うような、不気味で不吉な事件だった。

そして、私の直感が言っている。

あれで終わりではないと。

「そうですね……。あれ以降、いえ、もつと前からですが。程度の差はあれど似たような魔物が王国各地で目撃されています。」

それらの調査報告を纏めた資料ならありますが、お渡ししましょうか？」

「いや、そんなもん渡されてもわからん。要点だけかいつまんで話せ」

「ですよ。それに関しては、現在、マグマ率いる騎士団が大規模な調査に赴いています。報告は彼の帰還を待ってから聞かれるのがよろしいかと」

「ほう。そんな事になってたのか」

マグマが遠征中つてのは知ってたが、まさかあの事件の調査に行ってるとは思わなかった。

王国最高戦力の一角を送り出す辺り、国全体でもあの事件、というよりあの魔物どもを重く見てるって事か。

それが聞けただけでも収穫だな。

細かい話は、言われた通りマグマが帰って来てから聞こう。

「他には何かございますか？」

「他か……あ、そういやフレアはどうした？ 姿が見えないが」

「彼女は、ジークと共に聖アルカディア教国へと外交に行っています。しばらくは帰って来ないでしょうね」

「なるほど。そりゃ寂しいな」

「ええ。本当に」

教国かー。

あそことは、昔から同盟国だったからな。

そりゃ、外交くらいするわな。

で、フレアは息子共々出国中と。

王族も大変そうだ。

「ちなみに、娘はどうした？」

「スカーレットですか？ あの子は文官学校に通っていますよ。

たしか、アリスとも仲が良かった筈です」

お、そうなのか。

じゃあ、近い内に会いそうだな。

「もちろん、スカーレットにもリンネ様の事は伝えておきます。無礼のないようにさせますので」

「別に構わないがな。ちよつとくらい無礼でも。

昔のお前みたいに、権力に胡座かいて暴走でもしてない限りは、脅威苦も死導もしないから安心しろ」

アリスと仲が良いって事は、スカーレットも良い子なんだろう。

ん、待てよ。

前に城下町でアリスと一緒にいた子がスカーレットだったんじゃないか？

フレアと同じ赤髪だったし、可能性高そうだな。

仲良くなれそうだ。

「……それを聞いて、心底安心しました」

「……お前は私にビビりすぎだな。私の事を何だと思ってるんだ」

「あら、兄上にトラウマを植え付けたのを忘れたのかしら？」

あの傲慢だった兄上が、『私は臣民の皆様がいなければ何もできないゴミ虫です。ゴミ虫が調子に乗ってすみませんでした』と死んだ目で語るようになった事件、私は忘れていないわよ」

「やめてくれー！ それはトラウマなんだ！」

シグルスが頭を抱えて苦しみ出した。

そんなにか？

そんなトラウマになるような事したか？

ちよつと、護衛も装備も食料もない状態で、迷宮の奥底に拉致して数日間放置したりしたただけだろうが。

他にも色々やったが、どれもこれも弟子どもに課した修行よりは軽い。

ここまでのトラウマになるようなもんじゃなかった筈だ。

「さて、兄上が壊れてしまったし、今日の会談はここまででいいかしら？」

そろそろ、スケジュールが押しけると思うのよね

「ん？ 私は構わないぞ。聞きたい事は聞けたしな」

「そう」

そうして、ユーリはテーブルの上にあった呼び鈴を鳴らした。

実は、この呼び鈴も魔道具であり、防音仕様の部屋の外にまで音が響くような仕掛けになっているのだ。

たしか、地味に高級品だったと思う。

その音を聞いて、外に待機していた近衛騎士が部屋へと入って来て、トラウマに悶えるシグルスを立たせて連行して行った。

国王に対する態度ではないが、まあ、こういう事はたまにあったかな。

慣れてるんだろう。

その後、私達は城の外に待機させておいた馬車に乗って屋敷へと帰った。

さーて、明日からは学校だ。

気合い入れていこう。

こうして、国王との密会は終わったのだった。

30 初登校

城から帰って来た後の時間は、前にメアリーが言っていた使用人一同とのふれあいタイムに費やされ、もみくちやにされてる内に一日が終わった。

私にメイド服を着せようとしてきた奴らは何なんだ？

私、お前らの親代わりみたいなのもんだぞ？

親にメイド服着せようとすんなし。

いや、最終的には着たが。

そして、それを見たユーリに、絶対零度の視線で睨み付けられたが。

そんなこんなで翌日。

使用人一同に別れを告げ、朝一の馬車でユーリと共に学校へと向かった。

遂にやってきたのだ。

私の初登校の日が！

という事で、校門でユーリと別れた後、まずはシオンの部屋へとやって来た。

ここに私の荷物があるって話だったからな。

その荷物の中に制服もあったので、遠慮なくシオンの部屋の真ん中で着替えた。

恥じらいとかは一切ないのだ。

そうして着替え終わった制服姿を鏡で見て確認し、

「ほう！ 中々に可愛いではないか。シオンはどう思う？」

「凄まじいな。躊躇なくスカートを履くお前の神経が」

シオンに意見を求めたら、そんな答えが返ってきた。

そうじゃなくて、もつと容姿に関する客観的な意見が聞きたかったんだが。

騎士学校の制服はカッコいい。

女子の制服は、そこに可愛いを追加されてカッコ可愛い。

母譲りの美貌を持つ私がこれを装備すれば、その可愛さはアリスにすら並ぶだろう。

その事実を他人の口からも聞きたかったのだが、シオンでは無理か。

こいつは、私の事を女として見ていないからな。

まあ、女として見られても困るが。

だからといって、まるで昨日のユーリのような絶対零度の目で見られるのも納得がいかん。

何がそんなに気に食わんのだ？

ユーリもお前も。

「嬉々として女装する剣神エドガー……幻滅だ」

「？ おかしな事を言う奴だな。」

今の私は美少女剣士リンネだ。美少女がスカートを履いて何が悪い？」

「……はあ。もういい。もういいから、早く女子寮に行ってくれ。」

これ以上、人の幻想を壊すな」

そうして、私は部屋からつまみ出されてしまった。

全くもって失礼な奴だな。

だが、まあ、もうすぐ始業の時間だ。

口論している暇もないし、今回は見逃してやろう。

その後、女子寮にある私に与えられた部屋に荷物を置き、校舎へと向かった。

初登校である。

本当はアリスと一緒に行きかけたのだが、私とした事がアリスの部屋がどこにあるのか聞き忘れた。

仕方ないので、今日は一人で登校だ。

部屋に関しては、校内でアリスを見つけて聞き出そう。

そして、私が登校する頃には、他の生徒達もまた登校を始めていた。

白い制服を着て、腰に剣を差した騎士候補生達。

彼らの大半が十代後半であり、二十を越えていそうな奴は殆どいな

い。

これにも、たしか理由があつた筈だ。
なんだつたか。

騎士を目指す為に勉強や鍛練のみに集中できるのが二十くらいまで、それを過ぎたら他の仕事で食つていかねばならないからとか、そんな感じの理由だつた気がする。

あとは、騎士候補生の半数くらいを占める貴族の子女を、親が学校に送り出すのがそのくらいの年齢なんだつたか？

細かい事は忘れた。

だが、一つ言える事があるとすれば、そのくらいの年頃の少年少女達の中で、頭一つ小さい私は少し浮くという事だ。

実際は、前世まで計算に入れると、逆の意味で頭一つ分どころではなく浮いているのだが、それを知る生徒はいない。

二人くらいしかいない。

なら、問題はないな。

そのまま通学の波に乗り、自分のクラスへとやって来た。

私のクラスは、一年A組だ。

その扉を開けて中に入る。

そして、とある席へ向かつて弾丸のように飛翔した。

「アリス〜！」

「わっ!? リンネちゃん!?!」

その席に座っていた、我が愛しの孫娘に抱き着く。

アリスと同じクラスだというのは、一昨日の食事会の時に聞いた。
た。

アリスと一緒にの学園生活。

ここは天国か!

「あれは天才剣士!?! 何故、アリス様になつている!?!」

「手懐けたのか? さすがアリス様」

「尊い……美少女と美少女尊い……」

なんか、外野が騒がしいが無視だ。

「はあ……。朝から騒がしい」

と、そこで、もう一人知ってる奴がいる事に気づいた。

「シオン。お前も一緒のクラスだったのか」

「……一応伝えておいた筈だが、そうか、聞いていなかったな」
聞いていなかった。

いつ言った？

食事会の時か？

あの時はアリスに夢中だったから、他の事を気にする余裕などなかったのだ。

「お？」

そんな事を考えていたら、ゴーンゴーンという鐘の音が近くから聞こえてきた。

多分、学校の中心に設置されてたやつだろう。

定刻になると自動で鳴る魔道具の鐘だったか。

たしか、この鐘が授業開始の合図だった筈だ。

という事は、

「そこ。鐘が鳴ったら自分の席に戻りなさい」

鐘が鳴っている最中、教室の扉を開けて一人の女がやって来た。

こうして来るという事は、こいつがこのクラスの担任なのだろう。

思いつき知り知ってる顔だったが。

「ユーリ！ お前が担任か！」

「ええ、そうよ。わかったら自分の席に戻りなさい。」

あなた、実技はともかく筆記試験は落第寸前だったのだから、不真面目な態度を取るようなら退学させるわよ」

「ぐはっ!？」

ユーリの口撃によって、私は計り知れないダメージを受けた。

そうか……。落第寸前だったか……。

自分でも薄々そうじゃないかとは思っていたが、アリスの前で言われるとダメージが大きい。

孫の前でカッコ悪いところを見せてしまった。

……。真面目に勉強するか。

私は、とぼとぼとした足取りで、自分の席に座った。

あ、荷物置くの忘れてた。

「では、ホームルームを始めます」

そうして、ようやく私の学園生活が始まったのだった。



ホームルームを終え、いくつかの授業を乗り切り、休み時間になった。

「つ、疲れた……」

「お、お疲れ様です」

「リンネが真面目に授業を受けるとはな。明日は槍でも降ってきそっ
だ」

黙れ、シオン。

そう言いたいのが、反論する元気もない。

最初の授業と次の授業は座学だった。

しかも、私が一番苦手で興味も持てない、数学や地理の授業。

地理に関しては世直しの旅（笑）の経験をなんとか活かしたが、より専門的な内容になると付いて行けない。

グラディウス王国の隣に聖アルカディア教国があり、更に王国と教国をはじめとしたいくつかの国と隣接するように、巨大なダイザスロード帝国がある。

更に、その周辺に中小規模の国々が点在してるという基礎知識まではなんとかなったが、

その周辺諸国の名前を上げろだとか、国内の領地の名前と特色を答えろだとか言われると、もう無理だ。

旅の経験？

そんなもん、フワツとしか覚えてないに決まってるだろ！

大して役にも立たなかったわ！

そして、数学に至っては普通に苦手だ。

この時点で、もう頭痛がした。

だが、まだ悪夢は始まったばかりであった。

その次の授業は、座学以上に興味の持てない礼儀作法の授業だった。

騎士は下級とはいえ貴族の一員。

つまり、こういう授業も当然ある。

しかし、私だって元侯爵だ。

昔、トーマスとかに叩き込まれたおかげで、礼儀作法も最低限はこなせる。

そう。

最低限は。

だが、それでは駄目だった。

教師にめっちゃ駄目出しを食らい、動きを修正され続け、疲れ果てた。

肉体的にはなく精神的に。

あまりに精神が荒んだせいで、私と同じで平民出身のくせにシレッと完璧にこなしていたシオンに殺意が湧いたレベルだ。

あの野郎、ヨハンさんに習ってやがったからな。

それでも、他の平民出身の生徒達は私と同レベルの奴も多かったのだ、赤っ恥をかくという程ではなかったのが救いか。

周囲の生暖かい視線が多少気になったが。

なんだ「ドジっ娘幼女尊い……」って。

喧嘩売ってんのか？

そうして、私は授業の度に疲れ果て、アリスに癒しを求めて抱き着き、なんとか気力を充電しているのが現状だ。

若干、学校に来た事自体を後悔したが、私はまだ大丈夫だ！

アリスがいれば乗り越えられる！

！
まあ、そのアリスは、私とは比べ物にならないくらい優等生だがな

聞けば、アリスもまた特別生なのだそうだ。

私みたいに戦闘力でゴリ押ししたタイプではなく、純粋に様々な分野で優秀な成績を修めた正統派の特別生。

おじいちゃんは鼻が高いぞ。

ならば、私も負けてはいられん！

次は私のターンだ！

「よし！ 充電完了！ 行くぞ！」

「お、おー……」

「はあ……」

次の授業は戦闘訓練！

そう！

私の唯一の得意分野！

優秀な孫に良いところを見せる機会がようやくやってきたのだ！
張り切って行くぞ！

その為に、まずは更衣室で運動服に着替えを……

「ん？ どうした、アリス？」

「え、えくと……リンネちゃんは普通に女子更衣室使ってますね……」

ああ、そういう事か。

「安心しろ。小娘どもに興味はないし、私は一途だからな。変な事はしないと誓おう」

「……わかりました。信じます」

フツ。

そんな事を気にするとは、アリスもお年頃だな。

まあ、そんなアリスの為にも、とつとつ着替えて先に出ておくか。
更衣室に入った瞬間、私は躊躇なく即行で制服を脱ぎ捨てた。



そうして着替えた後は、授業が行われる訓練場へ直行。
入学試験が行われた場所とよく似た所へとやって来た。

ここは第二訓練場というらしい。

おそらく、似たような施設が学校中にあるのだろう。

「揃ったわね。それでは、これより戦闘訓練を開始するわ」

A組が勢揃いしたのを見て、教官のユーリがそう言った。

「どうやら、戦闘はユーリが教えるらしい。」

今さらだが、王国最高戦力に指導を受けられるというのは贅沢な事だな。

いや、元王国最高戦力も騎士団や兵士達に、たまに指導はしてたが。

まあ、本格的な修行をつけたのは弟子どもだけだがな。

他は、軽い手解きといったレベルだ。

「さて、今日は入学後初めての戦闘訓練という事で、あなた達の現時点での実力を見極めさせてもらおうわ。」

まずは、適当に二人組を作りなさい」

その言葉を聞いた瞬間、私は迷わずアリスの手を取った。

渡さぬ。

この役は誰にも渡さぬ。

アリスも、苦笑しながら受け入れてくれた。

ちなみに、A組は全部で二十人なので、仲間外れが出る事はない。

友達作りが苦手なシオンも安心だ。

「組んだわね。それじゃあ、そのペアで試合を行ってもらおうわ。」

木剣を使った一本勝負。

目的は教師が見る事だから、試合は一組ずつ順番ね」

「なん……だと……!?」

アリスと戦わねばなんのか!?

いや、だが、これも愛の鞭!

アリスだって騎士候補生。

つまり、騎士を目指しているのだ。

ならば、こういう場で甘やかすべきではない。

甘やかされて騎士になっても、死ぬだけだ。

だったら、弟子どもにしたのと同じように、真剣に相手をして鍛えてやる事こそが愛!

堪えろリンネ！

ここは心を鬼にする時なのだ！

「アリス……厳しく行くぞ」

「！はい！」

私の気迫を感じ取ったのか、アリスがとてつもなく真剣な顔で答えた。

よし。

私も覚悟を決めた。

可愛い可愛いアリスを容赦なく叩きのめし、弟子どもを超える最強の剣士へと育て上げるのだ！

「あれ……？　なんででしょう、寒気が……？」

アリスがポツリとそう呟いた。

寒いかな？

私は熱いぞ。

この心は使命感で燃え滾っている！

「……嫌な予感がするわね」

ユーリが何か言ったような気がしたが、小声すぎて、よく聞こえなかった。

その後、試合はつつがなく進行。

入学試験の時と同じように、試合は結界の中で行われるので、派手な魔法を使おうとも、シオンが無双しようとも、外への被害はなし。

怪我人が出れば、ユーリの治癒魔法で回復させられる。

そして、一試合終えるごとに、ユーリは手元のノートに何やら書き込んでいた。

真面目に教師をやっているようだ。

そして、遂に私達の番がやってきた。

腰に差してある真剣を置き、木剣を手にしてアリスと向かい合う。

私からすれば、孫娘との特別な戦い。

他の生徒から見ても、特別生同士の注目試合だ。

場の緊張感が高まっていく。

「リンネちゃん……胸をお借りします！ 全力で行かせてもらいますよ！」

「いいだろう！ かかって来い、アリス！」

お互いに油断なく木剣を構え、そして……

「では、始め！」

ユーリの合図と同時に、試合が始まった。

31 アリス VS リンネ

「飛脚！」

試合が始まった直後、アリスは飛脚を使った鋭い踏み込みで、私との距離を詰めてきた。

ふむ。

良い動きだ。

少し重心移動がぎこちないが、この歳にしては十分な練度だろう。

「攻ノ型・一閃！」

「守ノ型・流」

アリスの一撃を受け流す。

む？

思ったよりも軽いな。

これならば……

「攻ノ型・五月雨！」

「守ノ型・塞^{さい}」

中々に速いアリスの連続斬りを、受け流すのではなく受け止める。

守ノ型・塞。

最も基礎的な守りの型であり、守ノ型・城壁の簡易版とも言える技だ。

城壁や流と違って、威力のある攻撃は止められない技なんだが、アリスの攻撃は普通に止められる。

年齢差や体格差を考えれば、アリスの方が身体能力は上。

それなのに、こんなにあっさりと防げてしまう。

……やはりな。

アリスの攻撃はそこそ速いが、代わりに一撃一撃がやけに軽い。闘気を使っていない私が軽く受け止められるレベルだ。

しかも、速度に拘り過ぎているのか、技の切れも悪い。

格下相手ならば速度に任せて強引に勝てるだろうが、同格以上には通じないぞ。

これは、要改善だな。

あとで手解きしてやろう。

私は剣に力を籠め、アリスを弾き飛ばした。

「ッ！」

「今度はこちらから行くぞー！」

攻撃の次は防御を見てやる。

まずは小手調べ。

速度を緩め、されど鋭く正確に。

「攻ノ型・槍牙！」

真似しやすく、手本となるような刺突を放つ。

「守ノ型・流！」

「ほう」

しかし、アリスはそれをあっさりと受け流してみせた。

攻撃時のような無理した感じではない。

まさに川の流れのように、流麗にして自然な動きで私の攻撃を防いだ。

しかも、上手くカウンターまで繰り出している。

素晴らしい！

さすが、私の孫！

「やるな！」

その反撃の一撃を正面から防ぎ、つばぜり合う。

……今の一撃には、しっかりと重さが乗っていたな。

うっかり、さつきと同じ感覚で受けていれば、吹き飛ばされていたかもしれない。

まさか、さつきまでの動きは、私を油断させる為のフェイクか？

だとしたら、恐ろしい子である。

「次だ！ 攻ノ型・重槍牙！」

「！ 流！」

幾重にも重ねるような刺突の連打。

それも、さつきよりも速度を上げている。

だが、これもアリスは防いだ。

反撃する余裕まではなさそうだが、このままでは突破できる気もし

ない。

「陽炎！」

「ッ！」

途中でフェイントの抜き胴体へと切り替える。

これにも対応された。

今のは、闘気なしでの最高速度で振るったんだがな。

フェイントと、急速な速度の変化。

二重の技法を用いた技を、アリスはまたも受け流す。

受け流しというものは、受け止めるの発展系だ。

ただ剣を盾にすれば良い受け止めと違って、受け流しは相手の攻撃を正しく把握し、それに適した動きをする事でしか成し得ない。

つまり、相手の攻撃を見切る余裕がなければできないのだ。

それ即ち、アリスは私を相手に、まだ攻撃を受け流すだけの余裕があるという事。

素晴らしいを通り越して凄まじい！

さすが、私の孫！

カッコ可愛い！

「ならば、更に速度を上げるぞ！ 五月雨！」

「うっ……！」

私は軽く闘気を解放し、目にも留まらぬ連続斬りを繰り出す。

アリスの顔から、完全に余裕が消えた。

剣が掠り、その体に小さな傷が増えていく。

同時に、私の心が罪悪感で大ダメージを受けていく。

しかし、まだ崩れない。

決定的な一撃は入らない。

それどころか、徐々に対応してきている！

一撃を繰り出すごとに、攻撃がアリスへと届かなくなっていく。戦う程に相手の剣を学習し、より完璧な守りへと進化する。

天性の守りの才。

まるで、幼い頃のユーリを相手にしているようだ。

ならば！

「飛脚乱舞！」

「!?」

どこまで付いて来れるのか試してやろう!

アリスの周囲を飛び回り、徐々に闘気の出力を上げていく。

その状態で、四方八方から斬りかかる。

真上からの振り下ろし。

半歩横にずれながら、受け流された。

低く身を屈めながらの足払い。

飛脚で飛び退き、かわされる。

背後からの首狩り。

背中に回された剣で止められた。

側面からの刺突、と見せかけて空中で軌道を変え、正面に回っての

薙ぎ払い。

剣で防がれるも、威力を殺し切れずに、アリスは後方へと吹き飛ぶ。

それを追いかけて、一閃。

崩れた体勢からでは受けきれず、アリスは転んで地面を転がって

いった。

「ここまでだな」

それを更に追いかけて、一本と判定されるような軽い一撃を放とうとした。

今の攻防。

簡単に勝敗が決したように見えたが、私は急速にギアを上げ続けていた。

最終的には、今のシオンすら上回る闘気を纏っていたのだ。

だが、そんな攻撃を、不恰好ながらアリスは防ぎ続けた。

誇って良い。

お前は素晴らしい剣士だ。

そして、まだまだ強くなる。

刹那の内にそんな称賛の言葉が頭を巡り、しかし、アリスへと剣を

振り下ろした瞬間に気づいた。

アリスはまだ、諦めていないという事に。

「ッ！」

アリスの前方に、急速な勢いで魔力が集まっていく。魔法が発動しようとしている。

妨害……できなくはないが、ここは迎撃する。

アリスの可能性を知りたい。

「アクアブラスト！」

そうして放たれたのは、ラビやヨハンさんと同じ水の魔法。

私相手に手加減はいらないとわかってはいるからか、完全に殺す気としか思えない、津波のような質量の水流が私に迫る。

「飛剣！」

軽く振るった飛剣によって、それを迎撃する。

水流が真っ二つに割れるが、消滅はせずに結界の中を水浸しにしていく。

私が一瞬、溺れる事を懸念した際に、アリスは次の攻撃準備を完了していた。

「飛剣・水刃！」

高密度に圧縮された水の刃。

まともに食らえば痛いじゃ済まないだろう。

まあ、まともに食らうつもりなどないが。

「守ノ型・流」

水刃に剣を添わせ、最低限の動きと力で軌道を変える。

だが、私が防ぎ終える頃には、もう次の攻撃魔法が放たれる。

「レインアロー！」

続いて放たれたのは、雨のように降り注ぐ水の矢。

避けられなくもないが、吹き飛ばした方が早い。

「飛剣・嵐！」

衝撃波で雨を散らす。

しかし、アリスは魔法も上手いな。

今の魔法は、どれもこれも相当の威力があった。

バリエーションも豊富だし、発動速度も速い。

魔法使いとしてやっていっても大成するだろう。

さすが、私の孫。

だが、これだけの魔法が使えるなら、何故に今まで使わなかったのか？

……いや、考えるのは後だ。

今は最後までアリスの相手に集中する。

さつきアリスを過小評価し、試合が終わったなどと思って油断したばかりだ。

剣士たるもの、油断して戦いに臨むなど、決してあってはならない。いくら、殺し合いではなく試合の場だったとしてもだ。

さつきの私は剣士失格だった。

だからこそ、次はない。

より真剣に、アリスの全てを受け止める！

「来い！ アリス！」

「はい！」

アリスの背中に、水の魔力が集中していく。

水はアリスの背中で形を変え、まるで蝶の羽のような、幻想的で美しい形状へと変化した。

こ、この技は……！！

前に似たような技を見た事がある。

ならば、効果も似ていると見るのが妥当か。

となれば、来る！

今までとは比較にならない攻撃が！

「飛脚・水蓮！」
すいれん

アリスが、水の羽から出る水流を推進力として、飛脚の速度を大幅に向上させ、突撃してくる。

速い！

神速剣にこそ及ばないが、さつきまでの私よりも速い！

それに驚愕しつつも迎撃しようとして……

「わ!? あわわ！」

「ん？」

様子がおかしい事に気づいた。

高速で接近してくるアリスが焦っているのがわかる。
そのまま、アリスはコントロールを失い、水浸しの地面に墜落して滑った後、ガンツと凄いい音を立てて、盛大に結界に衝突した。

「きゆう……」

「アリス……!?!」

「それまで」

ユーリが試合の終了を宣言し、結界が解除される。

私は急いでアリスの元へと駆け寄った。

アリスは……頭から血をダラダラと流して気絶していた。

「ユーリッツッ!」

「わかってるわよ。ヒール」

ユーリの治癒魔法によって、血は止まった。

だが、目を覚まさない。

あばばばば!

どうすれば!?!

「落ち着きなさい。死んではいけないわ。」

とりあえず保健室に送って寝かせてあげて。しばらくすれば起きる筈よ」

「保健室だな! わかった!」

私はアリスをお姫様抱っこし、闘気を全開にして、神速で保健室へと向かってダッシュした。

待っている、アリス!

すぐに助けるからな!

「……保健室の場所知ってるのかしら?」

去り際に、ユーリのそんな声が聞こえたような気がした。



「う、うーん……ここは？」

「アリス！ 目が覚めたか！」

あの後、半狂乱になりながら学校中を走り回り、血走った目で職員に保健室の場所を吐かせ、なんとか辿り着いた保健室のベッドにアリスを寝かせた。

そのまま、ベッドの側に張り付く事、約三十分。

ようやく、アリスが目を覚ました。

「大丈夫か？ 痛いところはないか？ 思いっきり頭打ってたが、記憶はハッキリしているか？」

「あ、はい。大丈夫です。ご心配をおかけしました」

アリスの受け答えはしつかりしている。

どうやら、後遺症とかもなさそうだ。

一安心である。

私は安堵のため息を漏らした。

「情けないですよね……。せっかくリンネちゃんに見てもらえる機会だったのに、最後は自分の技を制御できずに自滅だなんて……」

と思ったら、なんかアリスが卑屈になった。

憂いを帯びた美少女は絵になるが、私は辛気臭いのは苦手だ。

「いや、そんな事はないぞ。

たしかに最後こそアレだったが、それまでの戦いには目を見張るものがあった。

特に防御面は素晴らしい。

正直、同年代の頃の私を超えてるぞ」

だから、励ます。

そして、これはお世辞でも何でもない本心だ。

アリスは卑屈になる必要などない。

自分の実力を誇っていい。

「……本当ですか？」

「ああ。私が保証する。自信を持って。

それに、最後のにしたって全力を出し切ろうとした結果だろう？

あれは実戦じゃない。訓練だ。

なら、あれで良いんだよ」

実戦の、殺し合いの場であんな不安定な技を使うのは褒められた事じゃないが、それが訓練の場となれば話は別だ。

むしろ、訓練ならば、様々な技をドンドン試すべき。

たしかに、アリスが自滅した時は焦ったが、冷静に考えてみれば、あの場には治癒が使えるユーリがいた。

そのユーリが落ち着いていた以上、私があそこまで取り乱す必要はなかった訳だ。

そこは、私も少し反省だな。

「そうですか……。あ、あの、リンネちゃん！」

「ん？ どうした？」

アリスが顔を上げ、真っ直ぐに私を見つめる。

その時のアリスの目は……。やけに真剣だった。

まるで、この前戦った時のアレクを思わせるような、真剣な目だった。

「私は……。『剣神』になれるでしょうか？」

だからだろうか。

その問いには、その言葉には、私が考えるよりも重い感情が籠っているような気がした。

アリスの祖父として、元剣神として、私はこの問いに対して、真剣に答えなければいけない。

そんな気がした。

「……アリスは剣神になりたいのか？」

「はい。それが私の義務ですから」

義務？

「何故、そう思う？」

「何故って……。私はナイトソード家の娘で、お父様もお祖父様も剣神で、だから……」

「だから何だ？ それは理由にならないぞ」

私の言葉に、アリスは絶句していた。
そうか。

アリスは、そういう考えを持っていたのか。
なら、少し訂正しておこう。

「これはアレクにも言った事だが、剣神の称号を継ぐのは決して義務ではない。

元は、私が敵を殺して奪った称号だ。

そんなものを強制的に受け継がなければならない道理などない。

他の誰が認めなくとも、他の誰でもないこの私が認める。

剣神の称号をお前が受け継ぐ義務はない。

それを重荷に感じているのなら、下ろして構わん」

そう告げた時、アリスは……泣いた。

俯き、涙をボロボロと流して泣き出してしまった。

「アリス!? 何故、泣く!? 大丈夫か!」

「そんな……それじゃあ……私は、何の為に今まで……」

マズイ!

もしかして、私はとんでもない事をしてしまったのかもしれない!

アリスの重荷を取り払ってやるつもりだったが、この反応を見るに、アリスにとって剣神になるという義務感は、心の支えか、人生の指針だったのかもしれない。

私は、それを奪ってしまった訳だ。

しかも、なんか予想以上に思い詰めてたっぽい。

早急にフォローしなくては!

「アリス!」

「……はい」

弱々しく応えるアリスの頬を両手で掴み、私の方を向かせる。

そして、言った。

「アリス、改めて問う。

お前は剣神になりたいのか?」

「……………」

「答えなさい。」

ナイトソード家の娘だからとか、義務感とか、そういうのを取っ払って考えてみる。

お前が、お前の意志で剣神になりたいのかどうかを」

「……………わかりません」

わからない、か。

まあ、今はそれでもいい。

「なら、考えなさい。

考えた上で、それでも剣神になりたいと思ったのなら、——私は応援するし協力する」

「……………え？」

「何を驚いている？」

私は剣神を継ぐ義務はないとは言ったが、剣神を継ぐなどとは言っていないぞ」

アレクの時と同じだ。

結局は自分の好きなようにすれば良い。

自分で決めた道を行くのが一番良い。

少なくとも、私はそう思っている。

「アリス。お前には才能がある。

本気で剣神を目指すのならば、なれる可能性が十分にある程の才能が。

そして、お前が自分の意思で私やアレクの跡を継ぎたいと思ったのなら、私は全力で背中を押してやる。

他のものになりたいと思っただ時でも、真剣に相談に乗ってやる。

私はいつでもお前の味方だ。

とりあえず、それだけは覚えておけ」

そう言い終えたところで、ゴーンゴーンと、授業の終了を告げる鐘の音が聞こえてきた。

「さて、昼休みの時間だな。

難しい事を考えるのは一旦やめて、飯を食いに行くぞ！

立てるか？」

「は、はい」

アリスの手を取り、ベッドから立ち上がらせる。

ふらつくようなら、私が飯を運んで来ようかとも思ったが、これなら大丈夫そうだな。

そのまま保健室を出て、食堂へと向かう。

「あの、リンネちゃん」

「ん？」

「ありがとうございます」

「うむ」

礼を言われるような事は何もしていないし、アリスの悩みも解決していない。

それでも、アリスの顔はどこか晴れやかだった。

少しでも力になれたのなら何よりだ。

私は、軽い足取りで食堂へと向かった。

——そこに、最悪な出会いが待っているとも知らずに。

32 大臣の息子

食堂に辿り着いた私達は、まず学食を頼んで席を探し、一人寂しくボツチ飯してるシオンを見つけたので、哀れに思って同席してやった。

「……なんだ、その目は？」

「同情」

「表に出ろ」

そんなやり取りがあつたが、気にはいけない。

それにしても、最近のシオンは、若干ベルに似てきたな。

幼なじみの影響を受けているらしい。

そうして和気藹々と食事を楽しんでいた時、二人の女子生徒がこっちに向かつて来るのがわかった。

人波が割れて、彼女達の道となる。

そうして現れたのは、黒い制服を着た赤髪の少女と、白い制服を着た護衛っぽい少女。

前にアリスと会った時に見かけた二人だった。

「ごきげんよう。あなたが噂のリンネさんだったのですね？」

「そう言うお前は、もしかして、スカーレットか？」

「その通り。あなたの事はお父様から詳しく聞いておりますわ。

是非とも仲良くするようにと」

ほう。

人前だからか若干言葉を濁したが、これは私の正体まで知ってるな。

シングルスも家族には伝えとく的な事言ってたし、間違いないだろう。

そうなつてくると、気になるのはもう一人の方か。

私は、チラリと護衛少女の方に目を向けた。

「ああ、この子は、わたくしの護衛のオリビア。

彼女も事情を知っています。

ですから、お気になされずとも大丈夫ですわ」

「へえ。信用はできるんだな？」

「ええ。オリビアとは幼い頃からの付き合いですし、彼女自身も国の重要戦力である空間魔法使い。」

「言わば、半分身内ですので」

「ああ、空間魔法使いだったのか、この子。」

「たしかに、空間魔法は利便性の計り知れない超魔法であると同時に、逃げるのに最も向いた魔法。」

「だから、有事の際以外は王族の護衛に付いてる事が多いんだっただけだ。」

「そして、空間魔法使いは国内に十人いるかどうかという程に希少だから、絶対に国を裏切らないように幼い頃から教育され、厚遇される。」

「故に、信用はできるって事だ。」

「改めまして、オリビアと申します」

「うむ。よろしくな」

「ハッ。ですが、私はスカーレット様をお守りする盾。」

「どうぞ主を優先し、私の事は空気のように扱ってください」

「おお、忠誠心が高いな。」

「だが、どこかズレてるような気がするぞ。」

「なんだ、空気のように扱ってくださいって？」

「……この子、あまり自己主張をしないのですわ。」

「わたくしが危ない事をすれば口を挟みますし、話しかければ応えてくれますけれど……平時は本当に後ろに付いて来るだけと言いますか」

「私ごときが、常日頃からスカーレット様の行動に口を挟むなど、畏れ多い事ですので」

「あはは……オリビアさんは、スーちゃん至上主義者ですからね」
なるほど。

「そういうタイプか。」

「まあ、いいんじゃないか？」

「忠義の形も人それぞれ。」

「上司と部下の関係も人それぞれだ。」

ナイトソード家も相当特殊な主従関係だし、他所の主従関係にまで口は出さんよ。

仲も良いみたいだしな。

「まあ、それはそれとして。」

お食事中ですよ？　ご一緒してよろしいかしら？」

「ん？　別に構わんが、いいのか？　王族が私達みたいな庶民と一緒にいて」

「それを言うなら、公爵令嬢のアリスも同じですよ」

む？

言われてみれば、確かにそうだな。

「シオンさんもよろしいかしら？」

「お構いなく。俺が意見しても変わらないでしょう」

「あら、敬語ですね。」

寂しいですわ。前にお会いした時はタメ口でしたのに」

「……さすがに、王女様に対してタメ口をきく度胸はありませんよ」

「あら、残念」

そうして、私達の昼飯にスカレットとオリビアが加わった。

良かったな、シオン。

最初はポッチ飯だったのに、今では両手に花どころか前後左右に大輪の花だ。

ハーレムだな！

そう言ってみると、

「……こんな頭の痛いハーレム、いらない」

と、小さな声で呟いていた。

権力に囲まれて頭が痛いのもかもしれん。

まあ、この場にいる全員、その気になれば簡単にシオンを破滅させられるからな。

権力にトラウマのあるシオンからすれば、気が休まらないってところか。

そうして、スカレットのせいで食堂中の注目を集めながら飯を

食っていた時だ。

そいつが現れたのは。

最初に反応したのは、忠犬意識の高いオリビアだった。

主への良からぬ気でも感知したのか、バツと音の鳴りそうな勢いで、ある方向へと顔を向けた。

そのただならぬ様子に、私も反射的に警戒態勢を取り、即座にオリビアの視線の先を見る。

それに一拍遅れて、他の三人も反応した。

そして、私達の視線の先で、人波が割れる。

スカーレットが登場した時と同じ光景だが、心なしか周囲の反応に怯えの色が強いような気がした。

そうして現れたのは、四人の少年。

一人の少年を先頭に、その取り巻きみたいなのが三人。

先頭の奴の左手首に嵌められた、金だけかかってそうな趣味の悪い腕輪がやけに目に付く。

そいつらを見た瞬間、スカーレットとオリビアが殺気を放ち、アリスすらも僅かに顔をしかめた。

シオンも、隠しているようだが臨戦態勢に入っている。

かく言う私も、頭の中で戦闘のスイッチが入った。

私の直感と本能が囁いている。

こいつらは敵だと。

取り巻きは、明らかにこちらを（正確にはシオンと私を）見下すような目で見ているし、

先頭の奴も、一見友好的な笑みを浮かべているが、その雰囲気からは隠しきれない腐臭が漂っている。

その雰囲気は、かつて腐る程に潰してきた、権力に溺れたクソ貴族どもとよく似ていた。

若干、大昔のシグルスにも似ている。

私の勘が間違っていないければ、脅威きょうい苦くが必要な手合だ。

「どうも。ご無沙汰しております、スカーレット様。

そして、おはようアリス。君は今日も美しいね。

さすがは、僕の婚約者だ」

「あ？」

先頭の奴のその台詞を聞いた瞬間、私の中でこいつの評価が最底辺にまで落ちた。

なるほど、こいつか。

ユーリの言っていた、アリスに付きまとっている害虫というのは。思わず、ドスの効いた声が出てしまった。

取り巻き三匹が私に不快そうな視線を向けてくる。

不快なのはこっちの方だ。

殺気を叩きつけて黙らせた。

三匹の害虫は、それだけで顔を青くして震え上がった。

小物だな。

だが、先頭の奴は意にも介さない。

大物だな。

虫にしては。

「フォルテ。何しに来ましたの？」

見ての通り、わたくし達は楽しく食事中ですわ。

邪魔をしないでほしいのですけれど」

「ハハ、邪魔をするなどは悲しいですね。

僕はただ、可愛い婚約者と一緒に食事がしたかっただけなのです
が」

「何が婚約者ですか。

その話は、あなたの家からの一方的な申し出でしょう」

「今のところは、ですよ。

あなた様にもわかっておいででしょう？

僕以上にアリスの伴侶に、次代の『剣神』に相応しい男はいないと」
……ほほう。

どうやら、このフォルテとかいうクソ虫は、剣神の称号目当てに、ウチの可愛いアリスをたぶらかさそうとしているらしい。

殺すぞ。

そして、なんとも愚かな考えだ。

別にアリスと結婚しても劍神にはなれないというのに。劍神の称号は、家柄や血筋で継いでいくものではない。劍神とは、この世で最も強い劍士だけが名乗れる称号。お前には無理だ、クソ虫！

「……ッ！」

その時、ゴミ虫の口から劍神という単語が出た瞬間、私は隣に座るアリスの変化に気付いた。

これは……恐怖？

それとも、悔しさ？ 怒り？

ともかく、アリスの表情が、そんな苦しんでいるような感じに変わった。

俯き、目を伏せ、唇を引き結んでいる。

その痛ましい姿を見て、私は悟った。

こいつだ。

アリスがさつき私にしてきた質問。

劍神になれるかという問い。

その時に、やたらと苦悩していたアリス。

こいつだ。

あんなにもアリスを追い詰めた原因は、間違いなくこのクソ虫にある。

そう、確信した。

私はアリスの手を取り、強く握る。

ハツとした顔で、アリスが私の方を見た。

大丈夫だ。

お前は私が守る。

そんな意志を籠めて、私は力強く頷いた。

それを見たアリスは、少しだけ安心したのか、僅かに微笑んでくれた。

「……ふう。しかし、こんなに拒絶されてしまったては、楽しく食事という訳にもいかなそうですね。

今回はスカーレット様の顔を立てて退散させてもらいます。

じゃあ、またね、アリス」

別れ際、クソ虫がアリスの頬に手を伸ばしてきた。

条件反射なのか、アリスが身を固くする。

それを見た瞬間にシオンが立ち上がり、オリビアが剣に手をかけた。

しかし、二人よりも遥かに早く私が立ち上がり、神速の動きで伸ばされたクソ虫の右手を掴み、万力で締め上げる。

「ッ!?!」

「おい。誰の許可を得てアリスに触ろうとしてんだ？ あ、あ？」

ギリギリと、手首を粉碎するくらいの気持ちで締め上げる。

クソ虫の額に冷や汗が伝った。

「なっ!?! 貴様!?!」

「無礼な！」

「平民ごときが！ フォルテ様になんという事を！」

「黙れ」

「二ヒイツー!」

取り巻き三匹は、殺気一つで戦意喪失した。

小虫が。

囀るるな。

耳障りだ。

一方、クソ虫の方は……ほう、小癩にも鬨気で腕を守ってきたか。

小賢しい。

こちらも掴む手に鬨気を纏い、ガードの上から強引に締め上げる。

「ッ!?! ……貴様、公爵子息である僕に向かって、こんな真似をしてただで済むと思っているのか？」

なんだ？

今度は脅しか？

これだから、権力だけのクソ貴族は芸がない。

「やれるもんならやってみろ。今回のこれは、嫌がる女性に手を出そうとしたお前が明らかに悪い。」

スカレットアリス
王族と公爵令嬢が証人だ。

王族と公爵家の後ろ楯を持つS級冒険者相手に、お前ごときが何かできると思うなよ」

言い終えた後、掴んでいた手を乱暴に離して突き飛ばす。

「失せろー!」

「くっ……!」

クソ虫は、手首を押さえながら惨めに退散していった。

取り巻き三匹が慌てて後を追う。

二度と私達の、いや、アリスの前に現れるな!

おととい来やがれ!

私はクソ虫どもに向かって、中指を立てておいた。

「お見事ですわ!」

そして、クソ虫どもが消えた後、スカーレットがわざとらしくパチパチと手を叩いて、拍手を始めた。

オリビアが即座に追従し、それが食堂中に広まっていく。

拍手をする生徒達の顔は、心なしか晴れやかだった。

ふむ?

「これは、どういう事だ?」

「簡単な事ですわ。あのクソ、失礼。フォルテは学校中の、とは言いませんが、結構な数の生徒に嫌われているのですわ。

権力を使つた横暴が目立ちますから」

「なるほど」

どこまで救いようがないんだ、あのクソ虫は。

暗殺でもしてやろうか?

……いや、ユーリが駆除作業の真つ最中だつて話だし、やめておくか。

「で? なんて、あんなクソ虫にアリスとの婚約なんて話が出たんだ?」

「クソ虫……言い得て妙ですわね。

それも簡単な事ですわ。あんなのでも実力と権力だけはあるのですよ、あの男。いえ、あのクソ虫」

そうか?

あいつからは強者特有の雰囲気を感じなかったが。私の動きも目で追えてなかったし。

ああ、だが、闘気の強さだけはそこそだったな。

闘気を使えるというだけでも凄いのに、出力も大体グラムの擬似闘気より少し下つてくらしいの強さだった。

他の十剣に匹敵するレベルだ。

……あれ？

そう考えると、あのクソ虫って相当優秀なのか？

虫にしては。

「フォルテの生家であるアクロイド公爵家は、王国の建国期から続く歴史ある名家。

その現当主であるピエール・アクロイドは、王国の重鎮である大臣職を務めています。

加えて、フォルテ自身も騎士学校最強の魔法剣士。

教国から留学中の『剣聖』と、唯一まともに戦える生徒なのですわ」

「何!?! 剣聖だ?!?!」

剣聖。

教国最強の騎士に代々受け継がれる称号だったな。

私

も会った事あるが、当時の剣聖は前世の私よりも歳上の爺さん

だった。

その爺さんが留学中……な訳ないな。

代替わりしたんだろう。

となると、当代の剣聖はかなり若いのか。

って、話が逸れた。

今は剣聖の事など、どうでもいい。

「という訳で、無駄に有能なあのクズを排除するのは難しく、今まで手をこまねいていました。

城下町であなた達にアリスの友人となつてくれるように頼んだのも、あの害虫からアリスを守ってくださる存在を欲しての事。

それくらいに、あれのアリスへの干渉は酷いのですわ。

本当に、あのクソ虫は……! わたくしが男であれば、アリスをわ

たくしの婚約者にして守れたのに！ そう思った事も一度や二度ではありません」

「あ、あはは……情けなくてごめんね……」

アリスが力なく笑う。

というか、スカレットのアリスへの入れ込みようが凄い。

まあ、スカレットはシグルスの娘であり、アリスはシグルスの妹であるユーリの娘。

つまり、この二人は従姉妹、身内なのだ。

身内を害されて怒る姿には好感が持てる。

少しだけ同性愛を疑ってしまったが、それは別にいい。

スカレットになら、アリスを任せられると感じた。

お祖父ちゃん公認だ。

もし本当にそうなら応援してやろう。

まあ、それはそれとしてだ。

「事情はわかった！ 私が来たからにはもう安心だ！ あのクソ虫には、金輪際アリスに近づかせん！」

「頼もしい限りですわ！」

私はスカレットと硬い握手を交わした。

アリス親衛隊の結成だ。

ついでに、シオンとオリビアの手も繋いで強制参加させておいた。

これだけの守りがあれば、ひとまずは安心だろう。

「それにしてもだ。アリス。お前ももう少し抗った方がいいぞ。

家柄的には同じ公爵家なんだし、体に触られるくらいなら、殴り飛ばしても大した問題にはならないだろう」

「そうですね。大義名分があれば、わたくしも擁護できますわ」

「いや、その……」

アリスがどもった。

なんだ？

まだ、何かあるのか？

「私はアクロイドさんより弱くて、強く出られないと言いますか……」。

「君の義務は剣神を継ぐ事。もしくは次代の剣神の伴侶となり、ナ

イトソード家を存続させる事だろう?」と言われると、反論ができません……」

「あのクズ! そんな事言っちゃがったのか!」
殺してやる!

ウチのアリスに余計な重荷を背負わせやがって!
やはり、私は正しかった!

アリスの悩みの原因作ったの、あのゴミだった!

「スカーレット! どうにかして、あのカスを合法的に潰す方法はなにか!?!」

「そんな都合の良いもの……」

「ありますわよ」

「あるのか……」

シオンがなんか言っていたが、今は無視だ。

「一つは、政治的にアクロイド家を追い詰め、潰す事。

しかし、これはさすがに学生であるわたくし達には無理ですし時間がかかりすぎます。

お父様達、大人に任せるしかないでしょう」

ユーリが言っていた方法だな。

多分、アレクとかトーマスとかもやってるんだろうし、そっちはあいつらに任せればいいというのは同意だ。

というか、シグルスも絡んでるのか。

「二つ目。フォルテを支える要素の一つである、個人の優秀さを奪う事。

具体的には、衆人環視の下でこっぴどく叩きのめし、騎士学校最強の称号を奪ってやる事ですわね。

そうすれば、今程大きな顔はできなくなるでしょう」

おお!

わかりやすくして良いな!

たしかに、あいつがアリスに言い寄ってる最大の武器は、自分が次代の剣神だとかいう、謎の自信によるものが大きいと見た。

ならば、それを潰してやれば、少しはおとなしくなるかもしれん。

「そして、その為の場ですが、都合の良い事に二つありますわ。

一つは騎士学校の伝統行事『武闘大会』。騎士候補生は、この大会に必ず参加する義務があります。

外部の冒険者や兵士も参加する大きな大会ですから、そんな場で赤っ恥をかけば効果絶大でしょう」

「おおー。そういえば、あつたなそんな大会！」

昔、たまに観戦してたわ。

それに、弟子どもを強制参加させた事もあつたな。

「で、それはいつだ？」

「一ヶ月後ですわ」

「遅いー！」

そんなに待ってられるか！

「落ち着いてください。本命はもう一つの方ですわ。

もう一つは、来週の初めに騎士学校で行われる、一年生と二年生合同の戦闘訓練。

武闘大会に比べれば観衆も少ないでしょうが、それでも結果が学校中の噂くらいにはなりますわ。

そこで、あの虫を叩き潰してくださいまし！」

「なるほど、了解した！ やってやるぞー！」

滾る！

滾るぞー！

あのクソ虫を負け犬に、否、負けゴミ虫してやるのが楽しみだ！

……だが、この作戦。

私がやるよりも効果的な手が、一つあるな。

「アリス！」

「は、はいー！」

私は、ちよつとノリに付いて来れていないアリスに目を向けた。

そう。

この問題はアリス自身の問題。

そして、アリスもまた騎士候補生だ。

私が助けるのもいいが、できる事なら、自分で解決した方が良いに

決まっている。

「お前は言ったな。自分はそのクソ虫よりも弱いから強く出られないと。」

その時、悔しいと思ったか？」

「……え？」

「どうなんだ？」

私は真剣な目でアリスを見つめながら、問う。

「……正直、悔しいです。剣神の娘として、剣士として、あの人に劣っている事が」

「そうか。なら、奴よりも強くなりたいと思うか？」

「はい！」

良い返事だ！

だったら、方針は決まった！

「ならば、特訓だ！ 今週末の決戦に向けて、私が本気でお前を鍛え上げる！ そして、お前自身の手で奴を倒せ！」

「は、はい！」

「よし！ そうと決まれば、今日の授業は早退だ！

時間がない！ 帰って早速、特訓を開始する！」

たしか、特別生の特典の一つに、ある程度の授業免除というのがあつた筈だ。

さすがに必修科目の授業は出ないといけないが、今日はもうない。帰って特訓だ！

「ちよつと待て」

「……なんだ、シオン？」

まさか、真面目に授業を受けろとか言うんじゃないだろうな？

私が授業サボりたいと思っただけでいいんですか？

失礼な。

そんな気持ちは、ほんの少ししかないぞ。

だが、シオンの言葉はちよつと予想外のものだった。

「その特訓。俺も協力させてくれ」

「む？ 構わないが、なんだ、アリス親衛隊の自覚でも出てきたのか

？」

「違う。たしかに、義憤に駆られたという気持ちもあるが、そうじゃない」

「じゃあ、なんだ？」

シオンが義憤と仲間意識以外でアリスに協力する理由……何か、あったか？

「……あいつなんだよ。フォルテ・アクロイド。」

「あいつが、俺の因縁の相手だ。奴に一泡吹かせられるのなら、協力は惜しまない」

「……ああ、なるほど」

例のヨハンさん左遷事件の元凶。

あいつだったのか。

私の中で、更にクソ虫の評価が落ちた。

最底辺を突き破って、奈落の底にまで落ちていく。

下手したら、帝国に並ぶレベルだ。

どこまで落ちれば気が済むのやら。

とにかく、そういう理由なら大歓迎だ。

ついでだから、この機にシオンも鍛え直してやろう。

「よし！ 行くぞー！」

「ああー！」

「はいー！」

「頑張ってくださいませー！」

こうして、私達は学校を早退し、秘密特訓を開始したのだった。

33 秘密特訓

学校をサボ……早退してやって来たのは、ナイトソード家の中庭にある特設訓練場。

昔、弟子どもを鍛える為に作った場所だ。

機能は、騎士学校や冒険者ギルドにある訓練場とあまり変わらない。

そこで特訓を開始してから約五時間。

アリスとシオンは、

「う、うう……」

「く、くそっ……」

訓練場の地面に、疲労困憊の様子で倒れ伏していた。



五時間前。

訓練場にやって来た直後に、私はある事をアリスに尋ねた。

「アクロイドさんの戦術ですか？」

「ああ。本格的にお前を強くするには、さすがに時間が足りないからな。

故に、今回はあのクソ虫に勝つという一点のみを重視して鍛える。その為には、まず情報だ。

敵の手の内を知っているのといないのでは、勝率が大きく違うからな」

「リンネが理知的な事を言っているだと……!?!」

「黙れ、シオン。今はボケている時間も惜しい」

大体からして、私はこういう戦闘に関する事では頭が回るのだ。

戦争や戦略となるとお手上げだが、単純な戦闘の勝ち負けについてなら一家言ある。

私は馬鹿ではない。

「そうですね……アクロイドさんは風の魔法を使う魔法剣士です。闘気による身体強化と、風魔法の移動補助による高速戦闘を得意としています。

速さ勝負になると私では勝てませんし、離れても高威力の遠距離攻撃に加えて、多彩なバリエーションの魔法を持っているので、決して有利にはなりません。

……正直、今のままだと勝てる気のしない強敵です」
「なるほどな」

あのクソ虫の戦闘スタイルが、なんとなくわかった。
要は、ベルとオスカーを合体させた感じか。

ベルは私に影響されたのか、速度でガンガン攻めるスタイルを好んでいたし、
オスカーも、接近された時に風魔法の移動補助を使う事はよくあった。

そうになると、仮想敵役は私とシオンが務めればいいか。
如何にクソ虫が速いといっても、おそらく私よりは遅い。

直に奴の闘気に触ってみた感じからして間違いないだろう。

あそこに風魔法の加速が加わったとしても、正直、速さ勝負では負ける気がしない。

もちろん、他の分野でも負ける気はしないが。
だが、魔法に関しては私では再現不能だ。

そこでシオンの出番だな。

シオンとクソ虫では系統が違うが、シオンの雷魔法はクソ虫の風魔法よりも遥かに速い。

雷魔法の速度に対応できるようになれば、大概の魔法攻撃は怖くないのだ。

それでも仮想敵として不足なら、暇してる番兵どもの中から風魔法使いを拉致ってきて相手をさせればいい。

よし。

方針は決まったな。

「アリス。クソ虫の全力を見た事はあるか？」

「あ、はい。去年の武闘大会で剣聖さんを相手にしていた時に」

「そうか。なら、ちょっと私がシオンに向かって徐々にスピードを上げながら斬りかかるから、それを見て、クソ虫と同じくらいのスピードになったら教えろ」

「はいー！」

という事で、まずはシオンと私が戦う事になった。

まあ、戦いというよりは確認作業だな。

シオンに求められているのは、私の攻撃をひたすらに防ぐサンドバックとしての役割だ。

「では、行くぞ」

最初からそこそこの速度で斬り込む。

そして、アリスと戦った時と同じように、そこから急速にギアを上げていった。

数撃もしない内に、剣速はシオンの対応限界にまで達する。

「くっ……！ー！」

シオンがキツそうな顔になった。

ここで私がフェイントを交えた動きでもすれば、シオンは瞬く間に倒れるだろう。

だが、アリスからの静止の声はまだかからない。

更に速度を上げる。

「ぐう……！ー！」

シオンが闘気を全開にして耐える。

アリスはまだ止めない。

更に加速。

「ぐあっ……！?!？」

遂に、訓練用の木剣が、シオンの頭部をしたたかに打ち抜いた。「ストップ！ それくらいの速さでした」

というところで、ようやくアリスが静止した。

……マジか。

これは、思ってたより強いなクソ虫。

「技も何も無い速度だけでシオンを倒せるレベルか……。しかも去年の時点でこれという事は、実際はもう少し速いだろうな。」

チツ。クソ虫のくせに戦闘力だけはいっちよまえか」
しかも、これに魔法攻撃まで加わるときた。
やたらとハイスペックな野郎だな。

自称次期剣神を名乗るのも、少しは納得できる。

まあ、私からすれば楽勝のレベルではあるが、アリス達には少々キツイ。

まったく、虫のくせに。

だが、嘆いても始まらない。

「さて！　では相手の戦力も予測できたし、特訓を開始する！」

「はい！」

「内容はいたってシンプル。私がクソ虫を超える速度で斬りかかるから、アリスはそれに慣れる。」

途中で、魔法対策にシオンとの試合や、場合によっては番兵の風使いとの試合も挟む。

後は、ひたすらに戦い続ける！　戦闘は経験がものを言う！　死ぬ程キツイが根性見せろよ！」

「はい！　よろしくお願いします！」

「よし！　良い返事だ！」

そして、アリスの無限地獄が始まったのだった。

可愛いアリスを痛めつけるなんて心が張り裂けそうだが、これも愛の鞭だ。

耐えるのだ、アリス。

そして、耐えるのだ、私。

こうして、特訓が開始された。



で、五時間後。

エンドレスバトルに疲れ果て、二人は倒れてしまった。

まあ、この五時間、ほぼ休憩なしで戦い続ければこうもなる。

アリスが本格的にダウンしたら、その合間にシオンを鍛え。

最低限の体力が回復したら、また試合再開を繰り返してきたからな。

私の教育方針は、基礎トレ、試合、基礎トレ、試合、基礎トレ、試合の無限ループが基本だ。

弟子どもを育成してた時は、これに結構な割合で実戦を混ぜた。

寝てる隙に迷宮の底に拉致したり、盗賊のアジトに売り飛ばしたりしたなー。

その状態から魔物や盗賊を殲滅し、自力で帰還させるという訓練だった。

実戦に勝る稽古はないというのが私の持論だからな。

ただし、実戦だけでもいけない。

基礎トレーニングで技や基礎能力を向上させ、試合で試して修正し、そうして初めて実戦に送り出せる。

まあ、今回は実戦をやる為に敵がいる場所まで行く時間はないし、基礎トレで能力を向上させるにしても、数日程度では焼け石に水な

ので、結果として試合をエンドレスでやらせた訳だが。

今回の目的は本格的に鍛える事ではなく、あくまでもあのクソ虫に勝つ事。

その為の特訓だ。

ならば、これでいい。

「なんだか懐かしいです……」

仕事の合間に様子を見に来たアレクが、過労でぶっ倒れながらゲロを吐くシオンを見て遠い目をしていた。

過去のトラウマが疼くそうだ。

輝かしい青春の思い出と言ってほしいものだな。

さて、そうして続けてきた特訓だが、さすがに二人とも限界だ。日も暮れてきたし、今日の特訓はここまでだな。

泥だらけの二人を回収し、屋敷へと戻る。

そして、メイドに頼んでアリスを風呂場に直行させた。

その後は私が入り、最後にシオンだ。

風呂の湯は魔道具で入れ替えてるので、シオンが美少女二人の残り湯を堪能する事はできない。

残念だったな。

それはさておき。

風呂から上がっても、まだ夕飯まで少しは時間がある。

その時間を使い、屋敷の一室で今日の反省会をする事にした。

「さて、特訓初日は無事終了した。

二人ともよく頑張ったと言っておこう」

そう言う私の服装は、メイド軍団の画策によって、猫耳パーカー付きのパジャマに変わっている訳だが、気にしない方針でいこう。

二人とも、疲れ過ぎてツツコム気力もないみたいだな。

「でだ、アリス。特訓を終えてみてどうだ？ 何か掴めたか？」

「そうですね……速さに大分慣れたのは大きいと思います」

自分で言う通り、アリスは随分と超速の剣に慣れた。

防戦一方であれば、十分くらいはまともに打ち合える。

たった一日で凄まじい成長……というより、それを可能とする土台は既に出来ていた感じだな。

これは、アリスに剣を教えたアレクやユーリの手柄だ。

そして今日、限界ギリギリまで試合を重ねた事で、その能力に磨きがかかった。

……もつとも、まだフェイントや駆け引きに対応する余裕まではないし、魔法を同時に使われたりしたら終わりだろうから、先は長いんだが。

「シオンは何か気づいたか？」

「そうだな……アリスは防御は凄いんだが、逆に攻撃が拙いと思った。無理に速さを出そうとして、技のキレを失ってる感じだ。」

守りに徹されると容易には崩せないが、攻撃中に反撃すれば割りとは簡単に勝てた」

「ああ、それは私も思ったな」

「うっ……！」

アリスの剣は、ユーリに似た防御型の剣技。

ただ、そこに無理矢理アレクや私が使う攻めの剣を足している感じだ。

それが噛み合っているなら良いのだが……どうにも、合わない剣技を無理して使っているだけに見える。

「よし！ アリス、明日は下手に攻めるの禁止だ。攻撃する時は、カウンターを狙うか魔法を使い」

「え!？」

あの攻撃も悪くはないから、ちゃんと鍛えればものになると思う。が、どう考えても、数日であのクソ虫に通じるレベルにはならないだろう。

故に、今回は封印だ。

強引な攻めという事で例の大技、飛脚・水蓮だったか？ あれも封印だな。

そっちに関しては、今度、時間がある時にじっくりと見てやろう。その時には、アレクやユーリも巻き込むか。

あと、マグマもだな。

奴はあれと似たような技を持っていたから、教わるには持ってこいの人材だろう。

「あ、あの、どうしても攻めるのは禁止ですか？」

「ん？」

何やら、アリスが落ち込んだ感じで聞いてきた。

「どうした？ もしかして、攻撃に拘りでもあるのか？」

「はい……攻めの剣、速さの剣は、お父様がお祖父様から受け継がれたものですから。」

だから、私もと思って、いました……」

……なるほどな。

アリスが長年悩んできた、剣神関連の拘りか。

だが、残念な事に、その考えは、

「アリス、それは違うぞ」

完全に間違っている。

「お前は騎士候補生だ。そして、騎士は何よりもまず勝利を優先しなければならぬ。

騎士が剣を振るうのは、国の為、そして何かを、誰かを守る為。

故に、騎士に敗北は許されない。騎士が負ければ、守るべきものを危険にさらす」

その許されない敗北を喫し、大切なものを失ってきたのが私だ。

その時の苦しみ、悲しみ、怒り、罪悪感、無力感、全て覚えている。だからこそ、この言葉には誰よりも重みを乗せて語る事ができる。

「お前も騎士になるのであれば、自分の拘りよりも強さを取り、勝率を少しでも上げる事を優先しろ。

そうでなければ、戦場で死ぬ仲間の数が増えるだけだ。

それを覚えておけ」

「……はい」

うむ。

わかればよし。

「さて、ちょっとお説教のようになってしまったな。気を取り直して……」

そこまで言った時、コンコンと部屋の扉がノックされ、私の言葉は中断された。

「皆様、お食事の用意ができました。食堂にお越しください」

続いて聞こえてきたのはメアリーの声。

……どうやら、時間切れのようだな。

「まあ、そういう事だ。腹が減っては戦はできぬ！ 今は食事を優先するー！ 行くぞ」

「はいー」

「ああ」

そうして、扉の前に待機していたメアリーに連れられて食堂へと向かった。

そのメアリーの腰には、見覚えのある剣がぶら下がっている。剛剣グラム。

どうやら、私が言った通り、メアリーに受け継がれたらしい。

……そういえば、この家にはもう一本、使い手のいない名剣があったな。

個人的に、あれはあのまま安置しておきたいが、それはあまりにも勿体ない。

アリスに拘りよりも強さを取れとか言ってしまったばかりだし、もう少し成長したらアリスにあの剣を譲るのもありかもしれないな。

まあ、その前にアレクの神剣かユーリの氷剣を継ぐ可能性もあるから、まだなんとも言えんか。

そんな事を考えながら食堂へ。

その場にはアレクとユーリも居たので、クソ虫と喧嘩するつもりだというのを話しておいた。

二人とも頭を抱えていたが、クソ虫の行動に腹を立てていたのはこいつらも同じだったので、やるなら徹底的にやってくれと言われた。

任せておけ！

まあ、後始末の事を考えると頭痛がするとも言っていたが。

そして、食事も終了し、しばらく作戦会議の続きをした後に就寝。せつかくだから、アリスと一緒に寝た。

幸せな夢が見られそうだ。

ちなみに、明日は必修科目がないので学校は休む。

特訓漬けの一日になる予定だ。

張り切っていくぞ！

そんな事を考えた瞬間、隣のアリスがビクリと震えたような気がしたが、気にせず私は夢の世界へと旅立った。

34 『炎剣』のマグマ

マグマ・プロミネンス。

別名、『炎剣』のマグマ。

グラディウス王国最高戦力『三剣士』の一人。

同時に、建国期から王国を支える大貴族、プロミネンス公爵家の現当主であり、更に王国騎士団の団長でもある。

プロミネンス家は武の家系。

代々の当主が、家宝であり十剣の一つでもある『炎剣イフリート』と共に王国騎士団長の役職を継いできたのだ。

そんな、血筋も実力も持っている偉大な男が……

「この、クソ爺がああああ！」

現在、いたいけな幼女に向かって拳を振り上げていた。事案である。



マグマが遠征から帰って来た。

それを私が知ったのは、アリス達の秘密特訓二日目の事だった。

仕事の合間に様子を見に来たアレクが教えてくれた。

ちなみに、アレクは私と違って真つ当に貴族としての仕事をこなしているのだ、地味に忙しいのだ。

クソ虫の実家を潰す作業も、大半はアレクの仕事だしな。

なんでも、クソ虫の実家は権威と歴史だけが取り柄の家であり、現存は腐りきって不正や横暴のオンパレードをしているから、時間さえ掛ければ正攻法で潰せるそうだ。

クソ虫家の横暴を見るに見かねた王家まで参戦している為、陥落は時間の問題だと聞いた。

だが、相手は腐っても公爵家。

当然、一筋縄ではいかない。

故に、アレクは忙しい。

とはいえ、社畜生活五十年以上の大ベテラン、トーマスがサポートに付いているので、目を回す程の忙しきではない。

ちゃんと休憩が取れるホワイトな職場となっている。

その休憩時間で娘の指導ができるレベルだ。

父親に構ってもらえて、アリスは喜んでいた。

娘の相手ができて、アレクも喜んでいた。

親子だなあ。

二人とも似たような悩み抱えてたし、本当にこいつらは似ている。心底そう思った。

話が逸れたな。

今はマグマの話だ。

奴が帰還したのであれば、当初の予定通り私の正体を明かす必要がある。

それに関して異論はない。

元々そのつもりだったし、アレクにもユーリにもアリスにも使用人軍団にも教えたんだ。

あいつだけ仲間外れにするつもりはないからな。

という訳で、マグマ帰還の翌日、メアリーにお使いを頼んで、マグマをナイトソード家に連れて来てもらった。

当日じゃないのは、まず国王とかに遠征の成果を報告するが先で、マグマが忙しかったからだな。

そして、本日。

アリスとシオンが限界を迎えてぶっ倒れ、私の時間に空きが出来たベストなタイミングで、マグマはやって来た。

早速、馬車から降りてきたところを狙って声をかける。

「久しぶりだな、マグマー！」

「……誰だ？」

私は失望した。

久しぶりに再会した馬鹿弟子は、師匠の顔も忘れるような薄情者に

なっていたのだ。

残念だ。

非常に残念だ。

昔は男気に溢れた熱血馬鹿だったというのに。

まあ、冗談はさておき。

これはあれだな。

まだ私の情報がマグマに伝わっていないのだろう。

外でおいそれと話せる内容でもないし、仕方がない。

「……なんだ、その責めるような目は？」

だが、せっかくだ。

そういう事なら、少しからかってやろう。

「失望の目だ！ 私にあんな事をしておいて、まさか忘れるとは！

とんだクズ野郎だな！ 女の敵め！」

「おい!? 人聞きの悪い事言うんじゃないやねえ！」

なんだ!? 俺はお前に何をしたんだ!? 待ってる！ 今、思い出す

！

私の発言に加えて、近くにいた使用人軍団に白い目を向けられ、マグマは額に手を当てて必死に考え出した。

きっと、ありもしない記憶を探っているのだろう。

いやあ、相変わらず馬鹿はからかいやすくて楽しいな。

そして、使用人軍団よ。

咄嗟に私のノリに合わせるとは、やるではないか。

いつの間に、そんな空気が読めるようになったんだ？

「マグマさん……まさか、リンネさんに手を出すなんて」

「変態」

「ロリコンどころの騒ぎじゃねえな」

「なんと、おぞましい……」

「死ねばいいのに」

このノリの良さよ。

使用人軍団は、まるでゴミを見るような目をマグマに向けていた。迫真の演技だな。

唯一、メアリーだけはため息を吐いているが。さて、からかうのはこれくらいにしておくか。

「なんてな。冗談だ、冗談。半分くらいは。そんな真剣に悩まなくてもいいぞ」

「……お前、今の冗談は洒落にならねえぞ。初対面の男に向かって何やってんだ」

お？

いつもなら、ここでブチギレるんだが、マグマは疲れたようにため息を吐くだけだ。

これは、私がない間に成長したという事か？

あの直情馬鹿が大人になって……！！

実に感慨深いな。

「だが、失望したのは少しだけ本当だぞ。師匠の顔を忘れるとは何事だ、この馬鹿弟子が」

「なんだ、そりゃ？ また、からかってるつもりか？

ていうか、マジで誰だよ、お前？ アリスの新しい友達か？」

む？

信じていないな、この馬鹿弟子が。

よかろう。

そういう事なら、私にも考えがある。

「あれは、良く晴れた日の昼下がりの事だった」

「おい、いきなりどうした？」

「私が庭で弟子二人をしごいていた時、レドラに連れられて生意気そうな少年がやって来た。

レドラは言った。「私の孫だ！ こいつも鍛えてやってくれ！」と

私は、マグマと出会った時の出来事を歌うように語り出した。

ここからが、おもしろい話なのだ。

「元上司の頼み。別に断る理由もなかったたので、私は普通に受け入れた。

だが、しかし、ここで少年は思いもよらぬ行動に出た」

「おい、やめろ！ その先はやめろお！」

マグマが顔色を変えた。

だが、やめてやらない。

大声で続ける。

「ませた少年は、庭先で懸命に剣を振る白銀の美少女に一目惚れ〜。

出会って最初に言った言葉は、「俺と結婚してくれ！」だった〜。

それに対して少女は答えた。「失せなさいデカブツ。あなた、体臭がキツイのよ」と。

実に辛辣！ その後、すぐに少女の内面を知って幻滅し、少年の初恋は終わった〜。

そして、その出来事は長年に渡ってネタにされ続け、私がおもしろ半分で吟遊詩人に話したら、尾ひれが付きまくって拡散され、哀れ国中の笑いに〜。

あれは実に愉快であ……」

「黙れ！ この、クソ爺がああああ！」

この日。

グラディウス王国の英雄『炎剣』のマグマは、いたいけな幼女に手を上げた。

それは、紛れもない事案であった。



マグマの拳をヒラリと避け、仲裁に入ったメアリーによってマグマは沈静化された。

その後、アレクの執務室まで行き、事情を説明。

この間、アリスとシオンには二人で試合をしているように言っていた。

「話はよくわかった。ようするに、クソ爺の亡霊が舞い戻ってきた訳か」

「亡霊とは失礼な。今の私は可憐な美少女リンネだ。リンネさんと呼べ」

「何が可憐な美少女だ、気色悪い。てめえなんぞ呼び捨てで十分だ、リンネ」

さっきの出来事を根に持っているのか、マグマはめっちゃ不機嫌だった。

だが、私がエドガーだという事は、もはや疑っていないらしい。呼び捨ては、まあ、許してやろう。

ユーリもそうだったし、こいつらが私に敬意を払ってないのは今さらだしな。

「で、王都に帰って早々、アクロイドの倅せがれに喧嘩を売り、今はアリスを鍛えていると……」

相変わらず、周りを振り回しやがって」

「反省も後悔もしていない！あのクソ虫は一度徹底的に叩く必要がある。」

これでも、暗殺に走らなかつただけ自重したんだぞ」

「それに関して文句はねえよ。スカーレットの奴もお冠だったからな。むしろ、良い機会だろう。」

だが、考えなしに行動すんのはやめろって話だ」

「いや、私だってそれなりに考えたぞ？」

「どうだか」

マグマが疑うような目で睨み付けてくる。

失礼な奴め。

「まあ、この話はここまでにしよう、マグマ。リンネさんも勝算があるみたいだし」

「ふん。まあ、なんにせよ気をつけろよ。アクロイドの連中は手段を選ばねえ。試合前に一服盛るくらいは普通にしてくると思え」

「それ、ユーリにも言われたな。安心しろ。私はそういうのにも敏感だ」

これでも元侯爵。

闇討ちや暗殺、毒殺の類いには常に気を配っている。

世直しの旅（笑）のせいもあって、結構恨みを買ってたからな。生まれ変わっても、その癖は抜けていない。

「じゃあ、次の話だな。お前が帰ってきたら聞こうと思ってた事がある」

「なんだ？」

「お前の遠征の成果だよ。例の謎の魔物どもに関して知りたい」

私の目が真剣さを増した事に気づいたのだろう。

マグマもまた眼光が鋭くなった。

「……そうか。そういうヤリンネってのは噂の『天才剣士』の名前だったな。連中の事を知りたがるのも道理か」

マグマがポツリと呟く。

馬鹿のくせに鋭い。

まあ、こいつは所謂、頭の良い馬鹿だから不思議はない。

「わかった。どこから知りたい？」

「全部だ」

「だろうな。説明する。アレクも聞け。こいつは、下手すりゃ王国全土を揺るがす情報だ。王国最強の騎士として耳に入れとけ」

「……わかった」

そうして、マグマは語り出した。

あの事件の真相。

そこに繋がる情報を。

「結論から言うぞ。まだ推測に過ぎねえが、——あの魔物どもは十中八九、人災だ。

連中を操り、王国に攻撃を仕掛けてる黒幕が存在する可能性が高え」

「なっ!？」

アレクが驚愕の声を上げた。

一方、私はどこか納得していた。

奴らを自然現象と思うよりは、黒幕がいると言われた方がよっぽど説得力がある。

あれだけ強力な魔物どもが、単体で現れて暴れるならともかく、徒

党を組んで街を襲撃するなんて、普通の魔物の生態から考えると、どう考えてもおかしいからな。

「俺は今回、あの魔物どもが多く出現する何カ所かの場所へ調査に赴いた。学者連中と一緒にな。」

結果は完全に空振り。迷宮を探ろうが、森を探ろうが、山を探ろうが、何一つとして手掛かりは出てこなかった。

学者連中は、揃いも揃って「突然現れたとしか思えない」これしか言わねえ」

駄目じゃねえか。

「だが、それはいくらなんでもおかしい。自然現象なら、必ず何かしらは情報が出てくる筈だ。」

それがねえって事は、人為的に情報が消されてる可能性が非常に高い。

そこで、俺達は調査方針を変えた。

どうすれば人為的にあの現象を起こせるか。

それを徹底して調べた」

ふむふむ。

それで？

「結果は、わからないだ」

駄目じゃねえか！

「睨むな。話はまだ終わってねえ。」

こつちに関しては、少しは情報が入ったし、推測も立てられた。

まず、魔物が突然現れる現象に関しては、空間魔法で飛ばされたんじゃないかって説が有力だ。

で、肝心の魔物どもをどうやって操ってるかだが……」

マグマはそこで溜める。

室内に緊張が走った。

「学者連中がある魔法の情報を掴んできた。」

——死霊魔法。

その名の通り、アンデッド系のモンスターを作り出して使役する、闇魔法の禁術だ」

闇魔法……か。

嫌な奴を連想する魔法だ。

しかし、闇魔法使いがアンデッド……少し違和感があるな。

「だが、それも確定じゃねえ。

調べたところ、死霊魔法で作れるのは普通のゾンビだけって話だ。生前と同じ力を持ったアンデッドなんて作れねえ。

しかも、理論上ゾンビ一体作って維持するだけで馬鹿みてえな魔力を消費する。

王国全土に出現するだけの膨大な数を動かすと……」

「その特殊なアンデッドを作れる術者が数人、いや、数十人はいる事になるのか……現実的じゃないな」

「その通りだ、アレク。しかも、そいつらを支援する空間魔法使いが最低でも一人はいるって事になる。

自分で言っというてなんだが、そんな集団がいるとは思えねえだろうな。

そもそも、闇属性の適性持ちは万人に一人。

それに、闇魔法というのは、全魔法属性の中で最強の攻撃力を誇る。ぶつちやけ、わざわざゾンビ作るより普通に戦ってた方がよっぽど強いのだ。

それを捨ててゾンビ作りに走る変人は少数だろうよ。

少なくとも、私なら絶対にやらん。

「だが、これ以外の推測となると、もっと突拍子もねえ事になる。

アンデッドを生み出す迷宮を制御したとか、僅か数人でこれだけの事ができる、規格外の魔力を持った闇魔法使いが複数人いるとかだ」
まあ、そうなるか。

そうなつてくると、もう推測なんて無意味だな。

だが……

「だがな。一つだけ確実に言える事がある。

得体の知れない強大な敵がいて、そいつらが王国を狙ってる可能性が高いって事だ。

それだけは絶対に忘れるな」

「ああ、わかつてる」

「……肝に命じておこう」

帝国による侵略戦争が終わってから数十年。

王国は平和を維持してきた。

少なくとも、あれ以来戦争は起こっていない。

だが、今回の敵は強い。

強くてデカイ。

シャムシールを襲撃してきた戦力は、戦争をしに来たと言っても過

言じゃない規模だった。

そんなもんを平気で使い潰してくる敵がいる。

下手すれば、巻き起こるだろう。

もう一度、国を揺るがす戦争が。

あの地獄の時間が、再びやってくるかもしれない。

その時、私はどうするのか？

決まっている。

大切なものを守る為に、剣を取って戦う。

それが私の生き様だ。

来るべき戦いの時に備えて、私は覚悟という名の刃を研いだ。

35 非道の刺客

マグマとの話し合いは終わった。

実に有意義な情報を得られたものだ。

強大な敵がいると認識するだけでも、気が引き締まるからな。

まあ、その強大な敵と戦うのはまだ先だ。

まずは目先の敵に集中するべし。

つまり、クソ虫死すべし慈悲はないという事だな。

実にわかりやすく良い。

「……なあ、さつきから気になってたんだが」

私が席を立ってアリス達の所に戻ろうとした時、マグマが窓の外を見ながらポツリと呟いた。

「アリスと一緒にいるあの小僧……もしかして、ヨハンの倅か？」

「む、ヨハンさんを知ってるのか？」

予想外のところからヨハンさんの名前が出てきた。

あー、いや、そういえばヨハンさんは元近衛騎士って言ったな。

なら、騎士団長のマグマと面識があってもおかしくないのか。

「爺が、さん付けだと……!? ヨハンの奴、何やったんだ!？」

「故郷で剣の練習相手になってもらった。ある意味、今の私の師匠と言えなくもないかもな」

そう考えると、ヨハンさんにとってマグマは孫弟子か？

いや、ヨハンさんに師事したのほ、あくまでリンネであってエドガーじゃないから違うか。

もしそうだったら、マグマとの上下関係逆転でおもしろかったんだが。

「そ、そうか。まあ、なんにせよ田舎で上手くやれてるみたいだな。安心したぜ」

そう言うマグマは、本当にホツとしたような顔をしていた。

……思ったよりも、ヨハンさんと深い関係だったのか、こいつ？

「あいつら親子には悪い事をしちまったからな……」

嫁が死んで消沈するヨハンをフォローしてやる事もできず、アクロ

イドの馬鹿を止める事もできなかった。

部下を守れない。上司としても、騎士団長としても失格だ。

俺はあいつらに、結構な負い目があるんだよ」

私の疑問が顔に出ていたのか、マグマは後悔するような顔で語ってくれた。

負い目か。

ヨハンさんは、別に上司を恨んでる感じではなかったがな。

まあ、それとこれとは別か。

この様子だと、マグマは最善を尽くしたんだろうが、力不足だったのは結果が物語っている。

この直情馬鹿なら、そりゃ負い目の一つも感じるか。

「そう思うなら、息子に罪滅ぼしでもしてきたらどうだ？」

ちようど、今は元凶を潰す為の特訓中だしな。

アリスのついでにシオンを鍛えてやると良い。

負い目があるなら、行動で精算してこい」

「……そうだな。幸い今日は時間がある。一肌脱いでくるか」

そうして、マグマが特別講師に加わった。

困惑するシオンに向かって頭を下げ、その後は頼れる兄貴的なポジションに収まって指導を開始してした。

私としてはシオンよりもアリスを優先してほしいところだが……

まあ、ここは何も言うまい。

アリスを無視してる訳でもないし、それに珍しい事にシオンがマグマになついたのである。

なんでも、マグマはひねくれる前のシオンと面識があつたらしく、シオンはその頃の事を覚えていたのだ。

とにかく、マグマの加入によって、特訓は更に有意義なものとなったのだ。



そして、必修科目以外の試験をサボりながら特訓する事、五日。遂に秘密特訓は終了した。

明日は、来るべき合同訓練の日だ。

正直、五日程度で上がった力など高が知れている。

だが、それでもクソ虫対策だけは殺す気で詰め込んだし、アリス達は死ぬ気で覚えた。

ことクソ虫に対する対応力だけは、大きく向上した筈だ。

あとは、己の努力を信じて全てを出し切るのみ。

「よし！行くぞ、アリス、シオン！」

「はいー！」

「ああ」

緊張した面持ちの二人と共に馬車に乗り込む。

何故、シオンまで緊張しているのかというと、当然、シオンもクソ虫と戦う予定だからだ。

今回の目的はクソ虫を叩き潰す事であり、できればそれをアリスにやらせて、クソ虫の言い分を完全否定する事。

だが、いくら対策を練ったとはいえ、実力差は明白であり、アリスが敗北する可能性もまた高い。

その場合は、誰かが代わりにクソ虫を叩きのめし、最低限、奴の面子だけでも潰す必要がある。

実力的には私がやるのが一番だが、心情的に考えると二番手はシオンだ。

私達の中で、奴に対して一番怒りを抱いているのはシオンなのだから。

それも当然。

なにせ、私達の中ではクソ虫による最大の被害者がシオンだ。

優先順位では、現在進行形で被害を受けているアリスが上にくるが、次に戦う権利がシオンにはある。

せっかくの合法的に恨みを晴らせるチャンスなのだ。

なんなら、アリスが勝った場合でも、ダメ押しとばかりに連戦を挑

んでボコボコにすべきだろう。

その場合は、もちろん最終的に私も戦う。

アリスを追い詰め、シオンを傷付けた罪、存分にその身で償えクソ虫い。

そうして、気合い十分な私達を乗せた馬車が、騎士学校に向けて出発する。

例の授業は午後からだが、出発は朝一だ。

不慮の事故で遅れでもしたら洒落にならないからな。

つまり、今日は他の授業も受けなければならぬという事だ。

私のテンションが少しだけ下がった。

「！」

そんな、戦意の中に少しだけ憂鬱の混ざった複雑な気持ちを抱えていた時、私の野生の勘が危険を感知した。

次の瞬間、馬の嘶きが聞こえて馬車が止まる。

「なんだ？」

「なんでしよう？」

「警戒！」

私は車内の二人に短く警告を発しつつ、馬車の扉を蹴り開けて外に出る。

そこでは黒装束に身を包んだ連中が、白昼堂々、ナイトソード家の馬車に襲撃をかけていた。

数は十人弱。

既に御者の執事と、隣に乗っていた護衛の番兵が剣を抜いて応戦している。

「敵襲だ！ 二人とも、馬車の中から出るな！ その状態で警戒！」

貴族の馬車は特注品だ。

馬車自体が並みの攻撃魔法を弾く魔道具である。

これに籠ってさえいれば、乗り込まれない限りは安全。

そんな事を考えながら、私は剣を振るい、容赦なく襲撃者どもを

真つ二つにしていく。

こいつら、そんなに強くない。

正直、馬車を守りながらも、護衛の二人だけでなんとかなるレベルだ。

だが、念には念を。

何かが起こる前に、迅速に処理する。

「攻ノ型・一閃！」

「ヒッ……!?!」

私に襲いかかろうとした襲撃者の首をはねる。

愚かな事に、襲撃者は向こうから襲ってきたくせに怯えていた。

戦場で臆せば命を持っていかれる。

襲撃者は、最期の瞬間を恐怖に身をすくませるといふ愚行で潰しながら、命を落とした。

他の奴も同様に始末する。

飛脚によつて高速で駆け、流れるように殺していく。

首をはねる、胴を薙ぐ、顔突き刺す。

そうして死体を量産していった。

「!」

不意に、背後から炎の矢が飛んできた。

結構な練度の魔法!

他の襲撃者どもとは比較にならない!

その魔法を剣で叩き落とし、魔法が飛んできた方向を見る。

そこには、普通の街人の格好をしながら、私に向かって短杖を向ける女の姿があった。

しかし、そいつはすぐに身を翻して去っていく。

チツ。

民衆に紛れて逃げたか。

民衆達は現在、街中で突然に始まった殺し合いに驚いてパニック状態だ。

その混乱に乗じて逃げるのは、然程難しくない。

それでも追おうと思えば追えるが……やめといった方が良さだろう

な。

あくまでも、アリス達の安全が最優先。

去る者を追って馬車の側を離れる訳にはいかない。

代わりに、他の襲撃者どもを即行で殲滅する。

護衛が何人か斬つてくれた事もあり、戦闘開始から十秒としない内に、逃げた奴以外の襲撃者は全滅した。

だが、最後の一人はあえて生かしている。

こういう輩はできれば生け捕りにし、黒幕の情報を吐かせるのがセオリーだ。

「ヒイ!? やめろ! 来るなあ!」

「もう抵抗しても無駄だ。お前は兵士に突き出す。死にたくなければ、そこでキリキリと情報を吐くんだな」

「嫌だ! 嫌だああああ!」

武器を持っていた腕を斬り落とされ、恐怖で半狂乱になった最後の一人は、腰を抜かしながらズリズリと後退している。

そんなに怯えるなら、最初から襲撃なんてするなし。

「死にたくねえ! 死にたくねえよお!」

「往生際が悪……!?!」

そこで、私は異変に気づいた。

襲撃者の腹の中に魔力が集中している。

最初は魔法でも使うつもりかと思っただが、違う。

この現象には見覚えがある。

「そいつから離れろ!」

「ああああああああああああああああ!」

私が警告を発した直後、悲鳴を上げる襲撃者の腹が、異様なまでに膨れ上がる。

そしてすぐに、――破裂した。

爆炎が、王都の一角を吹き飛ばす。

「一閃!」

それを剣の一振りですり裂き、どうにか馬車だけは守りきった。

元々、民衆も殺し合いの場から逃げていたので、巻き込まれた奴も

いない。

だが……襲撃者の体は、見るも無残に爆散してしまった。その成れの果てである、焼け爛れた手足や生首が周囲に散らばっている。

「リンネさん、今のは……？」

「……腹の中に爆発の魔道具を仕込まれてたんだろ？」

人間爆弾。昔、帝国の狂った部隊がよく使ってた手だ」

もつとも、そいつらは自爆の瞬間ですら悲鳴一つ上げなかったがな。

今回ののは、誰かが連中と似たような発想で作った、使い捨ての部隊ってところか。

あの様子を見るに、多分、あの襲撃者は、捕まりそうになったら自爆しろという命令に縛られていたんだらう。

故に、即死した奴は爆発しない。

死人が魔道具を発動させる事はできないからな。

おそらく、道連れ狙いというよりは、口封じが目的の自爆だ。

……胸糞悪い事しやがって。

「お前ら、片方は屋敷に戻って報告してこい。もう片方はここで私達と共に待機だ。少しすれば兵士が駆けつけて来るだらう」

「了解！」

指示を出せば、元部下二人は迅速に動いてくれた。

御者をやってた使用人の方が屋敷に駆け戻り、護衛の番兵はここに

残る。

こいつら、なんだかんだで優秀なんだよな。

周囲を警戒する番兵を尻目に、私は馬車の中に戻る。

アリスの様子が気になったからだ。

そしたら、案の定、アリスは顔を青くして、シオンに背中を撫でられていた。

「アリス。人が死ぬのを見るのは初めてか？」

「……はい」

「そうか……。すぐには言わないが、慣れる。騎士を目指すなら、避

けては通れない道だ」

「はい……」

そうして、私はシオンからアリスを受け取り、優しく抱き締めて頭を撫でた。

今のアリスにはメンタルケアが必要だ。

私だって初めて人が死んだのを見た時は辛かった。

まあ、私が初めて人死にを見たのは、前世の故郷が滅びた時だ。

厳密に言えば、アリスが感じている気持ちとは少し違うだろう。

それでも、完全に共感する事はできなくとも、慰める事はできる。

「……………」

そして、シオンはそんなアリスを心配そうに見守っていた。

私は目線でシオンに感謝を伝えた。

そんなシオンも、少し顔色が悪い。

冒険者時代に盗賊とかを殺した事はあるが、あんな悲惨な死に様を

見るのはシオンも初めてだからな。

そんな状態でアリスを優先してくれた事に感謝しよう。

……それにしても。

今回の襲撃の目的が二人の精神を乱す事だとすれば、やってくれた
としか言えんな。

確実に午後の授業に響くだろうし、場合によっては欠席だ。

こんな事をして得をする奴なんて一人しか思い浮かばんぞ。

クソ虫い……ここまでやるか！

本当に手段を選ばんな！

クソを通り越して鬼畜の諸行だ。

絶対に許さん！

だが、それでも今はアリスが優先だ。

私は忸怩たる思いを内心に封じ込め、ただただアリスの頭を撫で続けた。



リンネ達を襲った襲撃者の一人。

魔法攻撃を放った女は、現場を離脱した後、服装を変えているかもしれない追っ手を巻き、裏路地を通りながらとある貴族の屋敷へと帰還した。

その屋敷は、何を隠そうアクロイド公爵家の別邸。

自らの領地を持つアクロイド家が、王都に住まうにあたって作られた豪邸である。

女は、そこに住まう己の主の下へと帰還し、膝をつきながら今回の件を報告した。

「ほお、襲撃は失敗しましたか」

「ハッ。天才剣士は想定以上の手練れでした」

「ふうむ。所詮は平民と侮り過ぎましたかね。まあ、戦果は大して期待していなかったから別に構いませんが」

報告を聞くのは、でっぷりと太った肥満体の中年男性。

人を人とも思っていない腐った貴族。

彼こそがアクロイド家当主、ピエール・アクロイドであった。

「さて、おねだりを聞いてあげましたし、力も与えてやったのですから、負ける事は許しませんよ、フォルテ。」

我がアクロイド家に、無能はいらないのですから」

そして、ピエールは興味を失ったかのように「下がりなさい」と命じ、女を下がらせた。

その顔に、実の息子へとかける期待も、情も、何もありません。フォルテに対するピエールの思いは一つ。

自分の役に立つか否か。それだけだ。

立てば良し。

立たねば、それはただのゴミ。

奴隷紋を刻み、無理矢理に働かせて使い捨てにした手駒と何も変わらない。

それがピエール・アクロイドという男の、醜く腐りきった考え方で

あつた。

そんな裏に潜む者の思惑をも乗せた、戦いの時はすぐそこにまで迫っていた。

36 合同訓練開始

「そんな事があったのですね……」

「またも食堂で会ったスカーレットとオリビアに、今回の経緯を話した。」

襲撃の後、駆けつけてきた兵士達に事情を話している内に時間が過ぎ、学校に着く頃には昼になっていた。

私は「休むか？」と聞いたが、二人は頑として拒んだ。

それだけ、今日に懸ける意気込みが強いのだろう。

「その心の強さは立派だ。」

「アリス……大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だから」

「そう言うアリスの顔色は悪い。」

強がって見せても、やはりコンデイションに影響が出ているな。

シオンは瞑想でもするように気を落ち着かせているが、それでも万全ではなさそうだ。

授業開始まであと少ししかないが、それまでに少しでも回復してくれる事を祈るしかない。

……それと、少し予定を変更した方がいいかもな。

「とりあえず、二人とも何か食べとけ。腹が減っては戦はできぬ。」

だが、食べ過ぎるなよ。満腹は動きを鈍らせるし、戦闘中に吐いたら目も当てられんからな」

「はい」

「……食事中に吐くとか言うな」

「そうして、私達は学食を取りに行つてモソモソと食べ始めた。」

「さっき言った事を加味して、食事はサンドイッチが一つと飲み物だけだ。」

二人とも、少し進みは遅いが普通に食べられている。

「食欲があるのなら、思ったよりは平気そうだな。」

「で、さっきの襲撃に関してだが……お前は どう見る、スカーレット

？」

「そうですね……」

スカーレットが顎に手を当てながらそう呟いた時、オリビアがスツと懐からある魔道具を取り出して、机の上に置いた。

風の魔法で周囲の音を遮断する、簡易式の盗聴防止魔道具だ。

気が利くな。

前回は使わなかったが……まあ、それは何か理由があつたんだろう。

たとえば、あえてあの会話を周囲に聞かせる事で、クソ虫との敵対を大々的に周知させる為とか、そんな感じの理由が。

「まず襲撃者の正体ですが、アクロイド家の手の者である可能性が一番高いでしょうね。」

聞いた話ですと、かなり杜撰な襲撃だったようですし、それで得をするのはフォルテくらいしか考えられませんわ」

「だろいな」

むしろ、それ以外の可能性があるのかという次元の話だ。

「しかし……少し不可解ですね」

「む？ 何がだ？」

「白昼堂々ナイトソード家の馬車を狙うという行動そのものがです。」

それを行ったという証拠が出てくれば、いくらなんでも追及を免れませんし、そうでなくとも疑惑は深く残り続けます。

政治的に見れば、今回の事件は王家やナイトソード家を本格的に敵に回す愚行なのですわ」

……言われてみれば、その通りかもしれんが。

じゃあ、なんだ？

つまり、どういう事だ？

「そんな愚かな事を公爵ともあろう者がするとは思えません……では、他に何か目的が……？ アクロイド家の仕業に見せかけて、他の誰かがやったという可能性もなくは……いえ、しかし……」

スカーレットが自分の世界に行ってしまった。

傍目から見ても、高速で頭を回転させているのがわかる。

よし、任せておこう。
頭脳労働は苦手だ。

こういうのは、できる奴に任せるのが最善だろう。
ややあって、スカーレットは顔を上げた。

「……ふう。わたくし一人で考えていても埒が明きませんわね。
詳しい事は情報を集めてから改めて考える事にいたします。
それよりも今は……」

「ああ。直接対決の方が大事だろう。わかっている」

細かい理屈捏ね回すのは苦手だが、今やらなければならぬ事くらいはわかる。

クソ虫を真つ向勝負で叩き潰す事。

これが最優先であり、決定事項だ。

「アリス、シオン、行けるか？」

「……はい。これくらいで折れる程、弱くはないつもりです」

「俺もだ。あまり見くびるな」

そうか。

たとえ、アリス達が戦えなかつたとしても、私一人で戦いに赴くつもりだったが、この調子なら大丈夫そうだな。

正直、まだ心配ではある。

だが、そんな事を言っていては何もできない。

今は、二人を信じる。

そして、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴った。

この後は、すぐに午後の授業が始まる。

例の合同訓練は午後の始め。

つまり、この後すぐだ。

「よし！ 行くぞー！」

「はい！」

「ああ！」

「ぐ」武運をー！」

そうして、私達は決戦の場へと赴いた。



合同訓練が行われる決戦の場は、第二訓練場。

少し前に、アリスと私が戦ったあの場所だ。

アリスにとつては、強敵相手に全力を出し尽くして戦うという事を既に経験した場所。

決戦の場としては悪くないだろう。

「やあ、アリス」

そして、そこに奴はいた。

他の二年生達に交ざる、不快な異物。

我らが宿敵、クソ虫ことフォルテ・アクロイド。

「聞いたよ。大変だったそうじゃないか。無理せずに休んでいた方がいいんじゃないかな？」

白々しい！

よくもまあ、ぬけぬけと！

クソ虫は心配そうな顔を作ってはいるが、目が笑っているし、声も言葉とは裏腹にへばりつくような気持ち悪さがある。

確信した。

犯人はこいつだ！

「そこ、私語は慎みなさい」

「おっと。これは失礼しました」

教師であるユーリの言葉には素直に従い、クソ虫は一旦引いた。決めた。

あいつは徹底的に潰す。

情けも容赦も拘りも捨ててぶつ潰す。

今、そう決めた。

「では、これより一年A組と二年A組による合同訓練を開始するわ。

今日の目的は相互理解。お互いの実力を確かめる意味で、一対一の試合を行います。」

双方の合意さえあれば、誰が何度戦おうと構わないわ。

二年生は、一年生に胸を貸すつもりで戦いなさい」

『はい…』

この一見まともな事言ってるように感じるユーリの言葉だが、当然、私達の目的をサポートする為の方便である。

ユーリは、教師としての権限を私的な目的で使う事に少し難色を示したが、最終的に背に腹は変えられないという事で協力してくれた。これで、クソ虫が不様に逃走さえしなければ、私達は全員が奴と戦う事ができるという訳だ！

お前が虐げた者と元剣神の怒り、存分にその身で味わうがいい！

「じゃあ、最初は……」

「私が行こう」

前に出ようとしたアリスを手で制し、私が手を上げた。

アリスとシオンが驚いた顔で私を見る。

事前に決めた予定と違うからな。

だが、ここは押し通す。

「二人とも、悪いが、ここは私に任せてくれ。私が先陣を切る」

鋭い視線で二人を見ながら、私はそう宣言する。

目的は一つだ。

まずは私が確実な勝利を手にし、強引に流れを引き寄せる。

本来ならまず二人に任せるつもりだったが、今の二人は不調だ。

まずクソ虫と精神面で対等になるには、私が最初に勝って勢いを味方に付けるしかない。

「……わかりました。頑張ってください、リンネちゃん！」

「俺達の出番を奪うんだ。情けない真似はするなよ」

「もちろんだ。——必ず勝ってくる」

二人もそれをわかっているのか、否定せずに送り出してくれた。

他のクラスメイト達も、何かを察しているのか、私に一番手を譲ってくれた。

その想いには、死んでも答える。

「二年生は決まりのようね。では、二年生は……」

「勝負だ。フォルテ・アクロイド」

ユーリの言葉を遮り、クソ虫を指差して宣言する。

高位貴族に対する割りとは無礼な行いに、他の生徒達がざわめいた。

「貴様あー！ フォルテ様に対して無礼にも程があるぞー！」

「黙れ」

「ヒイ!？」

なんか見た事あるような奴が絡んできたが、殺気を叩きつけて黙らせる。

よく見たら、前にいた取り巻き三匹の中の一匹じゃないか。

相変わらずの小虫だ。

「構わないよ。僕が出よう」

「フォルテ様!?! しかし……」

「いいんだよ。身の程を知らない一年生を教育してあげるのも、先輩としての役目さ」

「ハッ!? その通りです！ さすが、フォルテ様！」

なにやら寸劇じみたやり取りがあつたが、なんにせよ、向こうも戦う気はあるらしい。

好都合だ。

そして、お互いに試合開始地点に立ち、訓練用の木剣を手に向き合う。

私達の周囲を、結界が包み込んだ。

「準備はいいわね？ では、始め！」

ユーリが試合の開始を宣言した。

クソ虫は動かない。

……どういふつもりだ？

「来ないのか？」

「先手は譲つてあげるよ。後輩くん」

「そうか。ならば、遠慮なく行かせてもらおう」

その瞬間、私は高出力の闘気を纏い、それを脚に集中した。

「神脚」

本気の踏み込みで地面が凹み、私は一瞬にしてクソ虫との間合いを

詰めた。

そして、木剣の一撃を、クソ虫の木剣に向けて打ち込む。

「ッ!」

「どうした? 戦場で剣を落とすなんて、剣士として失格だぞ。早く拾え」

公衆の面前で恥をかいだクソ虫の顔が、羞恥と怒りで歪む。

ハハハ!

いい気味だ!

「なめるな!」

即座に木剣を拾い、クソ虫は私から距離を取った。

そして、魔法を発動させる。

「風纏い!」

クソ虫は、闘気の上から風の鎧を纏った。

あれは鎧であると同時に、術者の動きをサポートし、その速度を大きく引き上げる移動補助の魔法。

たしか、そこそこ習得の難しい魔法だった筈だ。

「風神・槍牙!」

その状態でクソ虫が突進してくる。

確かに速い。

技のキレも悪くはない。

だが、私よりは圧倒的に遅い。

繰り出された突きを軽くかわし、続く連撃もことごとく防ぐ。

クソ虫の顔が驚愕に歪んだ。

「何故だ!? 何故、当たらない!」

「お前が弱いからだろう」

「グハッ!」

そう言いながら、クソ虫の腹を木剣で叩く。

踞ったところを足で蹴り飛ばし、再び距離が空いた。

「飛剣・風刃!」

「飛剣!」

「ぐっ……!?!? そんな……馬鹿な……!?!」

クソ虫の放った風の刃を飛剣で迎撃し、逆に押し返して吹き飛ばした。

「トルネードウィンド！」

「飛剣・嵐！」

次は大風の魔法。

これも押し返して粉碎する。

そして、再び神脚で距離を詰めた。

「ッ!? 来るなあ！」

「遅い」

迎撃に繰り出された剣は、あまりにも遅い。

劣勢に追い詰められてからの立て直しが、全くと言っていい程できていない。

格下をいたぶる事しかできないのか、こいつは？

……醜い。

「神速剣・五月雨！」

「ぐああああああああ！」

怒涛の連続斬りで、クソ虫の全身を滅多打ちにする。

「神速剣・重槍牙！」

「ぐううううううううう！」

次は連続の刺突。

最後の突きでクソ虫の体を吹き飛ばし、地面に這いつくばらせた。

「痛い……痛い……」

「惨めな」

こいつには、私だけではなく、アリスやシオンの剣を受け止める義務がある。

故に、この一戦で潰れないように加減はした。

それなのに、この体たらく。

いくら強くとも、根性のない奴は酷く脆い。

「私の勝ちだ。フォルテ・アクロイド」

「それまで。勝者、リンネ」

結界が解除され、ユーリが静かに試合の終了を宣言した。

そして、ユーリがクソ虫に近づき、嫌そうな顔で治癒の魔法をかける。

周囲の反応は様々だ。

驚愕する者。

奇声を上げながらクソ虫に駆け寄る者。

ボロ雑巾になったクソ虫を半笑いで見つめる者。

とりあえず、クソ虫の面子を叩き潰す事はできたようだな。

「こんな……馬鹿な事が……あつていい筈がない……！ クソ……！」

そして、少し回復したクソ虫は、小声で自分の名前を叫びながら、怨嗟の目で私を睨み付けていた。

なんだ、まだ元気そうじゃないか。

安心したぞ。

「お前え！ 覚えていろ！ 僕を敵に回した事を後悔させてやる！」

「……何が覚えているのだ。まさか、これで終わりだとも思っているのか？」

私が殺気を籠めて睨み返すと、トラウマでも刻まれたのか、クソ虫は顔を青くして冷や汗をかいた。

いい気味だ。

もつともつと追い詰めてやりたくなる。

だが、それをやるのは私ではない。

「ここからが本番だ」

そう言い残して、私は一年生の所へと戻る。

そして、そこで待っていたアリスの肩を叩く。

「行けるか？」

「はい」

「そうか。頑張れ」

「はい！」

私と入れ替わるように、アリスが前へと進み出る。

その背中へは、なんだか頼もしく見えた。

「アクロイドさん。あなたに勝負を申し込めます」

そうして、アリスは凜とした声で、クソ虫に勝負を申し込んだ。

37 アリス VS フォルテ

リンネに手酷く打ちのめされたフォルテは、その直後にアリスから申し込まれた試合の申し出を受けた。

このままでは終われない。

挽回しなければならぬという気持ちに突き動かされての事だろう。

治癒をかけられてなお痛む体を引き摺り、取り巻きの制止を振り切つて、アリスとの戦いを強行した。

「……………」

しかし、戦いが始まってから少し、アリスは動かない。

微動だにせず、ただ静かに剣を構えて佇んでいた。

その姿は、一枚の絵画を思わせる程に美しい。

結界の外でリンネが悶えていた。

(チツ。厄介な)

逆に、フォルテは互いに動かぬ睨み合いとなつた現状を苦々しく思っていた。

アリス・ナイトソードという剣士は、受けに回れば相当に強い。

それは傲慢であるフォルテも認める事だ。

それでも自分が負けるとは思わないが、念の為、今まで戦う機会があった時は、彼女の父であるアレクや祖父であるエドガーの事を引き合いに出し、挑発してアリスから仕掛けるように誘導していた。

だが、今回はそれができるとは思えなかった。

今のアリスは、凧の湖を思わせるように静かだ。

以前、食堂でリンネに歯向かわれた時の報復を父に頼み、その結果として今日の朝に精神を乱すような嫌がらせを行うと聞いていたのだが、どうやらその効果は芳しくないらしい。

それ程に、今のアリスは研ぎ澄まされていた。

それに、リンネにボコボコにされた今のフォルテが何かを言ったところで、強がりには聞こえないだろう。

(まあ、いい。どうせ僕がアリスに負ける事などありえないのだから)

そう考え、フォルテは頭を切り替えた。

今の自分は、父に授か^つった闘気の鎧の上から、更に風の鎧を纏っている。

アリスがいくら防御に特化していたとしても、フォルテの守りを突破できる攻撃力がない時点で詰んでいるのだ。

至近距離から魔法の直撃でも食らえば危ないかもしれないが、高速で攻め続けて、魔法を使う暇を与えなければ、どうとでもなる。

フォルテの勝利は、99%確定している。

「来ないのなら、僕から行くよ」

「ええ。どうぞぞ」

「では、遠慮なくー！」

そうして、フォルテは王国剣術の型の一つ、飛脚によってアリスに飛びかかった。

「風神・槍牙！」

闘気と魔法によって大きく速さを増した攻撃。

超高速の刺突がアリスに迫る。

それをアリスは、——剣すら使わずに容易く避けた。

「なっ!?!」

それにフォルテは驚愕した。

防がれるとは思っていた。

それくらいには、アリスの力を認めている。

だが、こんなあっさり避けられるとは思わなかったのだ。

そして、その驚愕によって、フォルテに大きな隙が生まれた。

「守ノ型・空蟬^{ううせみ}」

「ぐっ……いー！」

アリスのカウンターがフォルテの胴を叩く。

守ノ型・空蟬。

剣で受けるのではなく、避けて反撃を食らわせる、基本的な返し技の一つ。

だが、それを速度で圧倒的に勝る相手に食らわせるのは、至難の技である。

それをアリスはやって見せた。
結界の外でリンネが歓声を上げた。

「クソッ……い！」

フォルテは咄嗟に打たれた腹を左手で押さえながら、残った右手で剣を振るい、アリスを追い払う。

それに抗わず、アリスは飛脚で後ろに跳んで距離を取った。

フォルテのダメージは浅い。

だが、無傷ではない。

今の一撃だけで、確かにフォルテは傷を負った。

(何故……!?)

そう考え、彼はすぐに答えに行き着いた。

リンネだ。

今のフォルテは、リンネにやられたダメージが回復しきっていない。
い。

結果、闘気の上からの攻撃でも衝撃は内側に浸透し、傷を開いてしまったのだ。

だが、当然それだけでは終わらない。

痛みに呻く今のフォルテは、格好の的なのだから。

「アクアランサー！」

「くっ!？」

アリスの放った水の槍を、木剣を盾にして防ぐ。

今度は完璧に防いだ。

アリスの魔法は剣撃よりも威力があるが、闘気を纏った武器を粉碎する程ではない。

それが、一発だけならば。

「レインアロー！」

「ッ!？」

続いて放たれたのは、無数に降り注ぐ雨の矢。

一発一発の威力は大した事はない。

だが、全てを振り払う事はできず、被弾し、少しずつダメージが蓄積していく。

風の魔法で吹き飛ばせばいいのだろうか、フォルテの魔法発動速度はアリスに劣る上に、攻撃を食らいながらでは上手く発動できない。

無理に踏み込まず、フォルテの隙を突いて魔法による遠距離攻撃を叩き込み、確実に削っていくアリスの作戦。

フォルテは見事に、アリスの術中にはまっていた。

「なめるなあー！」

しかし、このままでは終わらない。

フォルテは、仮にも騎士学校最強の一人。

そのプライドが彼を突き動かした。

防御を闘気の鎧に任せ、多少のダメージは無視して突撃する。

斬り合いになれば勝てる。

自分のスピードを持つてすれば必ず勝てる。

そんなフォルテの考えは、——直後に打ち砕かれた。

「何故だ!? 何故、当たらない!? あの平民どころか、お前にまで!」

フォルテが狂乱しながら振り回す剣を、アリスはことごとく防いで見せた。

避け、受け流し、受け止める。

先程のリンネや、たまに稽古をつけてくれる母の動きを手本として、アリスは踊るようにフォルテの攻撃をいなし続ける。

アリスは酷く冷静な自分自身に驚いていた。

ついさっきまで、初めて見た人の死と、壮絶な断末魔の叫び声が脳裏にこびりついていた。

なんとか落ち着いてはいたが、万全には程遠い精神状態だったという自覚がある。

それが、戦いが始まってみれば一転した。

フォルテの動きがよく見える。

自分の思い通りに体が動く。

頭がとても冴えている。

絶好調という次元を通り越し、アリスは極度の集中状態へと至っていた。

原因は何だったのだろうか？

リンネに諭され、試合に余計な重荷を背負わずに臨めた事だろうか？
それとも、特訓を経て自信を付けられたから？

あるいは、リンネに圧倒されるフォルテを見て、敵は決して勝てない相手ではないと確信できたからかもしれない。

決して揺るがない絶対強者の背中を見て安心したのも大きいだろう。

そうして今、アリスは最高に近いコンディションで剣を振るえていた。

以前は勝てる気のしなかったフォルテの剣が、まるで脅威に感じない。

防ぐだけではなく、確実にカウンターを当てる事ができる。

確かに速い。

威力も凄まじく、まともに食らったら一撃でやられるのは間違いない。

だが、リンネや父の剣はもっと速かった。

もつと重かった。

それに、こうしてまともな打ち合いになって初めて気づいたが、フォルテの剣にはキレがない。

そこに鋭さはなく、技巧を凝らした戦略もない。

フォルテはただ、闘気と身体能力に任せて剣を振っているだけ。

ただ、速いだけの空っぽな剣。

もちろん、フォルテとて技術が全くない訳ではない。

むしろ、剣術の腕だけでも、彼は同年代の中では上位に位置するだろう。

それは、フォルテ自身の努力の結果だ。

しかし、逆に言えばその程度。

リンネはおろか、シオンにも、そしてアリスにも遠く及ばない凡人。

良くて秀才止まり。

それがフォルテの正体であった。

「そんな馬鹿なああああああ!?!」

フォルテが叫ぶ。

彼が抱いた感情は、怒りか、恐怖か、それともこんな筈ではないという混乱か。

いずれにせよ、精神が乱れれば動きはより単調になり、剣は速さと鋭さを失っていく。

元々、リンネにやられて心も体も弱っていたフォルテは、更に弱体化の一途を辿った。

「トルネード……」

「攻ノ型・一閃！」

「がっ……!?!」

焦って魔法を使おうとしたフォルテの首を、アリスの一閃が叩く。

魔法に意識を割けば、体の方は疎かになる。

故に、あのユーリやマグマですら、斬り合いの中で魔法を使う時はかなり慎重に使っているのだ。

考えなしに魔法に頼れば、当然、こうなる。

それに、今のアリスの一撃は、以前の無理矢理速さだけを求めた歪なものではなく、しっかりと体重を乗せ、手本通りに振り抜く事で本来のキレを取り戻した、良い技であった。

それこそ、闘気に守られたフォルテに有効打として通じる程に。

結界の外で、リンネが「クリーンヒットオ！」と叫んだ。

「アクアブラスト！」

「ぐあっ!?!」

すかさず追撃。

攻め合いになれば不利とわかっているアリスは、攻撃手段に魔法を選択。

水の砲撃がフォルテの体を吹き飛ばし、結界の壁に叩きつけた。

至近距離からの魔法の直撃。

今までにない手応え。

大ダメージを与えたという確信があった。

「アクアランサー！ ウォーターカッター！ 飛剣・水刃！」

アリスは、この機を逃さない。

フォルテが態勢を立て直す前に、魔法の連続攻撃を叩き込む。大量の水がフォルテの体を打ち、水圧に潰されて息ができない。フォルテは、確実に追い詰められていた。

(僕が……負ける!? アリスに!?)

ずつと格下だと思ってきた。

次期剣神となる自分を飾る花としか思っていなかった。

そんな奴に負ける？

まるで現実感がない。

才能と権力に恵まれて生まれた。

ずつと勝ち続ける事が、勝つ事が当たり前の人生だった。

大昔、まだ未熟だった頃に屈辱の敗北を喫した事はあったが、今の自分は強くなった。

父に与えられた力もある。

与えられた力と、自ら手に入れた力。

二つを合わせれば勝てない相手などいないと、そう思っていた。

実際、去年の武闘大会において、フォルテはあの『剣聖』をも激戦の末に敗っている。

打ち倒した訳ではなく、あくまでもルール上の勝利だが、勝ちちは勝ちだ。

その事実が、フォルテを調子に乗らせた。

元々傲慢だったフォルテは、自分が負ける筈がないという思い込みで支配された。

それが、今はどうだ？

ポツと出の平民ごときに完膚なきまでに叩きのめされ、ずつと内心で見下してきたアリスにすら負けようとしている。

不様だ。

不様にも程がある。

そんな現状を、プライドの高いフォルテが認められる訳がない。

「調子に乗るなああああああああー!」

盛大なブーメランを投げつつ、フォルテが咆哮を上げる。

そして、防御を解き、未だに続く魔法攻撃の全てを甘んじて受けた。

痛みがフォルテを襲う。

その痛みを、屈辱を、怒りに変えて、フォルテは剣に闘気を集中し、強大な風の魔法を纏わせる。

ダメージと引き換えに、フォルテは、捨て身の全力攻撃を放とうとしていた。

「飛剣・風龍！」

フォルテの発動した風の魔法が、徐々に巨大な龍の姿を形作っていく。

それは、その技は、魔法剣士が習得できる最強の技の一つ。

当然、その練度はまだまだ未熟。

発動速度も遅く、威力もユーリやマグマには遠く及ばない。

それでも、フォルテは魔法の雨に打たれながら、耐え難い激痛の中にあつて、最強の必殺技を発動させてみせた。

歪ながら、強い執念の成せる業である。

その圧倒的な圧力を前に、アリスは瞬時に悟った。

（駄目です！ 防げない！）

自分では、この攻撃を防ぐ事は叶わない。

だからといって、避けるのも無理だろう。

風の龍は、単純に大きい。

攻撃範囲は結界の内側全て。

逃げ場などない。

ならば、どうする？

防御も回避も不可能。

残された選択肢は……一つ！

（攻めるしかない！）

アリスに残された唯一の勝ち筋。

それは、あの攻撃が自分に到達する前にフォルテを打ち倒す事。

その為の手段が、アリスにはあった。

まだまだ制御に難があり、リンネに使用を禁止された切り札。

しかし、特訓中にマグマによる指導を受け、なんとか使えなくはないというレベルだが、形にはなった必殺技。

(一か八か……やるしかないです！)

そう決めた瞬間、アリスは風の龍に対抗するように水の魔法を発動させた。

水はアリスの背後に集い、一瞬にして蝶のような幻想的な水の羽を作り上げる。

その羽から放たれる水圧を推進力とし、アリスは飛んだ。

「飛脚・水蓮！」

この技は、三剣士『炎剣』のマグマが使う技の一つに酷似している。かつてマグマは、他の二人に比べて速度で劣る事を気にして、その技を開発した。

エドガーから聞かされた、とある人物の技を参考に、自分なりに改良を加えて作られたその技は、炎の射出を推進力として加速するといふもの。

それと酷似したアリスの技もまた、目的を同じくする。

すなわち、放たれる魔法を推進力とした超加速。

その瞬間的な速度は、——フォルテを完全に凌駕していた。

「ああああああ！」

「やあああああ！」

そして、二人の技が激突する。

風の龍による殲滅と、水の羽による速攻。

その結果……

——フォルテが剣を振り抜く前に、アリスの剣がフォルテの腹に突き刺さった。

「ぐはっ!？」

使用されたのは木剣。

加えて、フォルテには闘気による守りがある。

故に、アリスの剣がフォルテを貫通する事はなかった。

しかし、フォルテは激痛によって腹を抱えて踞り、アリスは息を切らしながら、そんなフォルテの眼前に剣を突き付けた。

「それまで。勝者、アリス」

ユーリの声が静かに響き、結界が解除される。

そして、アリスは……気が抜けたように大きく息を吐き出した。

「や、やりました……」

そんな弦きが聞こえた瞬間、訓練場に歓声が響き渡った。

リンネによる一方的な処刑の時には聞こえなかった声だ。

歓声を上げる彼らは、ただただアリスの勝利を祝福していた。

「アリス…… よくやった……」

そして、もはやお約束とばかりに、リンネが感動の涙を流しながら突進し、勢いよくアリスに抱きついたのだった。

38 合同訓練終了

私は今、猛烈に感動している！

アリスが！ 我が孫娘が！

いくら私が弱らせたとはいえ、遥か格上を相手に実力差を見事にひっくり返して勝利したのだ！

素晴らしい！

クソ虫が最後に根性見せた時は、ヤバイと思つて結界を破壊して助けに行こうとしたが、必要なかつたな！

「本当によくやったぞ、アリスー！」

「り、リンネちゃん……苦しいです……」

私は、アリスを力いっぱい抱き締めた。

大丈夫だ！

闘気は使っていないから、締め殺すなんて事態にはならない！

だが、苦しめるのは本意ではないな。

名残惜しいが、抱き締める力を弱めた。

代わりに、思いつきり頭を撫でる。

アリスはちよつと困った顔をしつつも、笑顔で受け入れてくれた。

「ありえない……！ 認めない……！ こんな！ こんな事が！

あつていい筈がない！」

と、私がアリスを褒めまくっていた時、惨めに踞っていたクソ虫が叫びを上げた。

そして、凄まじい憤怒の形相で私達を睨み付けてきた。

こいつ、さつきまで私に怯えていた筈だが。

怒りと屈辱が恐怖を塗り潰したか。

「許さない！ 許さない！ 許さない！ ここで死ねええええええ！」

クソ虫が、踞ったまま、趣味の悪い腕輪のはまった左腕を私達に向けた。

その掌の先に魔力が集中している。

どうやら、逆上して魔法を放つつもりのようだ。

どこまでも愚かな。

私は疲れきったアリスを守るように背中に隠し、剣を抜いた。

さすがにこれは看過できないようで、ユーリと二年生の教師もこちらに向かつて来る。

だが、それよりも速くクソ虫に駆け寄る者がいた。

「ストーム……」

「いい加減にしろ！」

そいつは、クソ虫が魔法を放つ前に、雷を纏った拳でクソ虫の顔面を殴り飛ばした。

元々弱りきっていたクソ虫は、その鬨気と魔法と怒りの乗った渾身の一撃を避けられず、もろに食らい、きりもみ回転しながら吹き飛んで訓練場の壁にめり込んで気絶した。

ついでに、失禁している。

「これ以上、人に迷惑をかけるな」

そして、クソ虫を殴り飛ばした男、シオンは静かにそう言ったのだった。

その後、保健室に搬送されたクソ虫と、それに付いて行った取り巻き以外は普通に授業を続け、

それ以降は特に何事もなく終了したのだった。

だが、この授業の影響は、後日になって大きく現れる事となる。



「皆さん、よくやってくれましたわ！」

翌日、いつもの食堂において、私達はスカレットに劳われていた。スカレットは凄まじく「機嫌だ。

おそらく、それ程にクソ虫に対する鬱憤が溜まっていたのだろう。

「フォルテの敗北は、既に噂として学校中に流しておきました。

昨日の今日ですが、もう効果が現れ始めていますし、今後、フォル

「テが大きな顔をしてアリスに近づく事は難しいでしょう」
「さすが王女。仕事が早いな」

これで、クソ虫によるアリスへのつきまとい行為はなくなる訳だ。
これにて、一件落着だな。

「……なんだか、アクロイドさんが哀れに思えてきました」
ポツリと、アリスがそう呟いた。

「アリスは優しいな。だが、敵に情けは無用だぞ。
その感情は剣を鈍らせる。勝てる戦いにも勝てなくなる。

今思う分には構わんが、決して戦いの場にまでは優しさを持ち出す
な。わかったか？」

「……はい。わかりました」
「うむ。よろしい」

そう言つて、私はまたもアリスの頭を撫でた。
優しさは美德だが、戦いにおいては邪魔になる。

日常と戦場の切り替えが重要だ。
それでいて常在戦場。

思考だけ日常に戻して、意識や感覚は戦場のまま固定し、いつどん
な事が起きても対処できるようにしておくのが理想だが。

言うは易し、行ふは難し。
まあ、こういう事は少しずつ教えていけばいい。

そうしてアリスの頭を撫で終わった頃、ふと、我関せずで飯を食っ
ているシオンの姿が目に入った。

「そういえば、シオンはあれでよかったのか？」
アリスと一緒に死ぬ気で特訓したのに、結局、食らわせたのはパン

チ一発だけだろ？」
なんなら、クソ虫が気絶した後には叩き起こして、濡れたズボンのま

ま、もう一回戦やつといた方がよかったかもしれん。
「いや、あれでいい。あの一発には全ての怒りを籠めた。それなりに

満足だ」
「ほー。そういうもんかね？」

意外と、シオンの恨み辛みは、そこまで強いもんじゃなかったのか

？

……いや、考えてみれば、シオンがクソ虫に被害を受けてから何年も経ってるんだ。

その間に父親ヨハンさんと和解し、友達を作り、その友達と冒険して。

そうしている内に、時の流れがクソ虫への恨みを薄れさせたのかも
しれない。

もちろん、大っ嫌いな事には変わりはないだろうが、なにがなんでも
殺してやりたいとまでは思わなくなったのかもな。

とりあえず一発は殴って、落とし前はつけたと言えなくもないし。
と思っていたら、シオンは言葉が続けた。

「それに、あいつがあれで終わるとは思えない。必ずまたぶつかる事
になると俺の勘が言っている。

だから、今回はお前達に譲った。

俺とあいつの決着は、その時につける事にする」

あー。

なるほど、そういう考え方もあるか。

納得した。

それに、こっちの方がシオンらしい答えだ。

「……わたくしもシオンさんと同意見ですわね。

フォルテは今、取り巻きに当たり散らす程、精神が不安定になつて
いるようですが、逆に言えば皆さんに対して怒る気力が残っていると
いう事。

おそらく、このままでは終わらないでしょう。

当面の問題は解決したと思いますが、引き続き警戒は必要ですわ」
シオンの勘を補強するように、スカーレットは不吉な可能性を示唆
した。

まあ、だろうな。

相手はクソ虫。

性根まで腐ったクソ貴族だ。

当たり前のように襲撃者を送り込んで来るような相手だし、次は暗
殺者でも送り込んで来るかもしれん。

色んな意味で警戒が必要だろう。

まあ、なんにしてもだ。

「警戒も大事だが、今は素直にアリスの大勝利を祝福するぞ！ 改めて乾杯だ！」

次の戦いに備える為にも、今は思いっきり祝杯を上げるべき！

兵士時代もそうだった。

どんなに辛い事があっても、大勝利の時は必ず宴をしていたものだ。

勝利を祝福してこそ、人は前に進めるのである！

「それもそうですわね。では、乾杯！ ほら、オリビアもやりなさいな！」

「か、乾杯」

「乾杯」

スカーレットだけではなく、オリビアとシオンも乗ってきてくれた。

その意気だ！

「では、改めて！ アリス、よくやった！」

「あ、ありがとうございます……」

アリスは少し恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうに笑った。

なんだかんだ言っても、あの勝利は、アリスにとつて大きなものだった筈だ。

ならば、思いっきり祝福してやるのが私の役目だろう。

さすがに学校の食堂で思いっきりはっちゃける事はできなかったが、それでも昼休みに行われた細やかな勝利の宴は、とても楽しかった。

そうして、クソ虫との最初の戦いは終わったのだった。



「という感じだったぞ」

「そうでしたか」

後日、私はナイトソード家に足を運び、事のあらましをアレクに報告しておいた。

報告は来てるだろうし、ユーリ辺りから話も聞いているだろうが、私の口から直接言つといた方が伝わるだろうと思つたからだ。

後でアリスも自分の口から勝利報告をすると言っていたが、他者から見た意見も重要だろう。

アリスの喜んだ顔とか、本人では確認のしようがないしな。

「あの子は最近、暗い顔ばかりしていましたが……そうですか、素直に喜んでいましたか。」

本当に良かった」

その言葉には、安堵と喜びの感情がにじみ出ていた。

アレクが、どれだけ娘を大切に思っているか、わかるうというものだ。

ユーリも、あの授業の後はやたらと機嫌が良かったし、愛されてるなアリスは。

私が微笑ましい気持ちになっていると、急にアレクが真面目な顔になって、私を見つめてきた。

「リンネさん。いえ、師匠。」

この度は、アリスを助けていただき、本当にありがとうございました。

それだけでなく、俺自身の問題にまで向き合ってくれて……感謝の言葉もありません」

そうして、アレクは頭を下げた。

ひたすら真摯に頭を下げた。

……あれだな。

生意気な弟子が頭を下げてくるといふのは、なんだか、むず痒いな。「礼には及ばん。身内を助けるのは当然の事だ。」

それに、困った時は助け合い。そう教えただろう？」

「……そうでしたね」

「まあ、これを恩に感じるのなら、いつか私を助けて返せ。わかったか？」

「はい。わかりました」

「うむ。よろしい」

お前はもう、私より強い。

頼りにしているぞ、アレク。

「さて、報告も終わったし、私はそろそろ行く。

お前も色々頑張れよ」

「ええ。リンネさんも頑張ってください。

これ以上成績が落ちるようなら本気で落第させるとユーリが言っていましたし、気をつけてくださいね」

「……マジか」

ユーリならやりかねん。

あいつ、仕事に私情を挟みそうにないからなあ。

今回みたいな例外を除いて。

……もう少し真面目に勉強するか。

そんな事を考えながら、アレクの執務室を出る。

そして、玄関に向けて歩いてる途中で、トーマスと出会った。

「ああ、リンネ様。学校にお戻りでしょうか？ それならば馬車を手配いたしますが」

「いや、まだ戻らないぞ」

「では、お泊まりですか？ それならばパジャマをご用意いたしますが」

「いや、泊まる訳でもない。戻る前にちよつと寄る所があるだけだ」

「……ああ、なるほど。行ってらっしゃいませ」

「うむ」



トーマスに見送られた後、ひたすら廊下を歩く。
やがて玄関に辿り着き、番兵どもに挨拶されながらデカイ庭を横切った。

そのまま緑に囲まれた敷地内の森に入り、少しだけ整備された獣道のような細い道を通って先に進む。

その道を抜けた先に、小さいが綺麗な泉がある。

そして、泉の畔に建てられた、小さな墓が二つ。

それぞれの墓石の前に、一本ずつ鞘に入った剣が供えられている。

一本は、私が騎士になった時に国から貰った剣。

騎士の正式装備である量産品の魔剣だ。

だが、当時持っていたグラムや、後に手に入れた神剣の方が圧倒的に強かったせいで、結局、全くとっていい程使われなかった剣。

そんな物でも、トーマスとかの手によって大切に保管されてきた、前世の私の遺品。

これがあるという事は、つまり、この墓は前世の私、『剣神』エドガー・ナイトソードの墓という事だ。

では、もう一つの墓は？

それも答えは簡単。

この墓に供えられている剣は、グラムに匹敵する強力な魔剣。

『守護剣アイビス』

『十剣』の一つでもあるこの剣を振るった剣士の名は、このグラディウス王国において、あまりにも有名である。

剣神エドガーの無二の相棒であり、最愛の伴侶でもあった女剣士。侵略戦争の末期に、私を庇って死んだ馬鹿女。

その名は、——『劍姫』シャーロット・ナイトソード。

ここは、そんな女の墓なのだ。

そして、ここに来ると、いつもあいつの姿が脳裏に浮かんでくる。あいつの声が聞こえるような気がする。

今も、自分の墓石の上に座って足をブラブラしながら私を見つめる不謹慎な奴の姿が。

綺麗な水色の髪の少女の姿が見えるような気がした。

39 墓参り

『やあ、エド。また来たね』

「ああ。また来た」

生まれ変わってからここに来るのは、もう二度目だ。

一度目は、王城に行った日の朝に足を運んだ。

本当なら、屋敷に来たその日に来たかたかったんだが、アレクとの勝負とか、アリスとの食事会とかで時間が潰れてしまったからな。

未練がましいとか言っではいけない。

私だって自覚している。

『見てたよ、エド。生まれ変わっても大活躍じゃないか！ さすが、ボクの旦那様！』

アリスちゃんに付いてた悪い虫も追い払えたみたいだし、安心したよ』

「あれは私の手柄じゃない。アリス自身の功績だよ。さすが、私達の孫だ」

『ふふ。そうだね。さすが、ボク達の孫だ』

シヤロはそうして、嬉しそうに微笑んだ。

……この笑顔は果たして私が見ている幻想なのか、それともシヤロの幽霊なのか。

それは、未だにわからない。

わからなくていい。

こうして、この墓の前で近況を報告するのは、私にとって儀式みたいなものだ。

お前が命懸けで守った私は、ちゃんと人生を謳歌していると。

お前の死は決して無駄ではなかったんだと、シヤロに伝える為の儀式。

『アレクくんの悩みも解決したし、良かった良かった。』

ボクもあの子達の事は心配してたからね。

時々暗い顔してるのを見ても、この体じゃ慰めてあげる事もできない。

ホント、エドが戻って来てくれて助かったよ』

「……あいつらは、私がいなくても、自力で何とかしてたと思うけどな」

アレクにしても、アリスにしてもそうだ。

剣神として相応しいとか相応しくないとかいう、どうでもいい理由で悩んでいたアレクだが、私がいなくても、いずれ吹っ切っていただろう。

あいつには、剣神の称号なんぞよりよっぽど大事な家族ものがある。

それを守らねばならない事態に直面した時、アレクならば確実に迷いを振り払って覚醒していたと断言できる。

間違っても大切なものを履き違えたり、重圧で潰れるたりする程弱い男ではない。

アリスの方は、まあ、自力で何とかするのは難しかったかもしれない。

だが、あの子には支えてくれる奴らが沢山いる。

アレク、ユーリ、スカーレット、使用人軍団。

マグマやシグルス、フレアなんかも困ったら助けてくれただろう。

実際、アレクやユーリはクソ虫の排除に動いていた。

スカーレットは当たり前のように守ってくれていた。

私がいなくても、他の誰かに助けられて窮地を脱していたと思う。

それに、あの子はまだ子供。

いくらでも成長の余地がある。

案外、私が手を貸さなくとも、自力でクソ虫を退けていたかもしれない。

若者の可能性は無限なのだ。

『それでもだよ。君が頑張ってくれた事には変わりはないさ。お疲れ様』

「……ああ」

そうだな。

私も今回、それなりに頑張った。

自分の頑張りを否定する気はない。

困った時は助け合い。

戦闘力しか取り柄のなかった私に、こいつが教えてくれた事だ。

それを、しっかりと果たせた。

今は、その事を素直に誇ろう。

「……だが、これで終わった訳じゃない」

クソ虫は倒したが、心を折ってはいない。

シオンやスカーレットの予想通りなら、また私達の前に立ち塞がるだろう。

ひよつとしたら、今回の屈辱をバネに、より厄介に成長してくるかもしれない。

マグマの言っていた、未知の敵の事もある。

オーガの時、シャムシールの時と、今世の私に度々絡んでくる不気味な強敵。

王国を狙ってくると言うのなら、いずれその黒幕とも戦う時がくるだろう。

他にも、まだ私の知らない敵や、生きている内に遭遇してしまう脅威だって、きつとある。

戦いはまだまだ終わっていない。

むしろ、まだ始まったばかりだ。

「私の二度目の人生は始まったばかり。そして、戦いはこれからも続く。

……私はもう一度頑張ってみる。見守っていてくれ」

そう告げて、私はシャロの墓に背を向けた。

もう十分だ。

私は未練がましい奴だか、いつまでも感傷に浸って動けなくなる程弱くはないつもりでいる。

だから私は、シャロの墓に背を向けて、歩き出す。

『頑張れ。ボクはいつでも君を見守ってるよ』

後ろから、そんな声が聞こえたような気がした。

だから最後に、一度だけ振り返る。

「じゃあな。また来る」

『うん。行ってらっしゃい、エド』

そうして、私は歩みを進めた。

墓のある泉から離れ、森の中を歩く。

歩きながら考える。

今言葉にした通り、私のリンネとしての人生は始まったばかりだ。

それに、もしかしたら、私が女として生まれ変わったのは、私の為に死んだシャロの分まで生き抜けと、そういう意味なのかもしれない。

いささかロマンチックに過ぎる考えかもしれないが、そう思う事は自由だろう。

ならば、私のすべき事は一つ。

前世でそうしたように、今世も最後まで全力で生き抜き、今度こそ胸を張ってシャロに会いに行く。

その為にも、戦いの途中で死んでなんていられない。

シャロの分まで生きるのだから、もう一度、天寿を全うしてやる。強くなろう。

今度こそ、戦いの中で大切なものを失わないように。

今度こそ、全てを守りきれるように。

それは理想論かもしれない。

私一人ではどうにもならない程に戦いが大きくなれば。

それこそ、もう一度戦争でも起こってしまえば。

私は必ず、何かを失う事になるだろう。

戦争とはそういうものだ。

敵味方問わず、大切なものを根こそぎ奪っていく。

それでも、その理想を目指す事をやめる気はない。

どんな理想も、目指さなければ叶わないのだから。

私は英雄だ。

かつての『剣神』エドガー・ナイトソードの生まれ変わり、『天才剣士』リンネだ。

ならば、英雄は英雄らしく不可能を可能にしてやろう。

その為の努力は惜しまない。

せいぜい、前世を超える大英雄を目指してやろうではないか。
大切なものを救う、最強で無敵な大英雄をな。
墓参りからの帰り道、私はそんな決意を固めたのだった。



「許さない……許さない……許さない……！」

王都にある、とある屋敷。

アクロイド公爵家の別邸の廊下を、一人の少年が歩いていた。

その様子は、正気とは言い難い。

怒りと恨みの籠った言葉をブツブツと垂れ流し、使用人達を怯えさせていた。

「許さない……！ この僕にあんな屈辱を……！ 絶対に許さない……！ 殺してやる……殺してやる……殺してやる……！ どんな手を使ってでも……！」

壊れたように殺意を口にする少年、フォルテ・アクロイド。

彼が目指すのは、父、ピエールの執務室である。

大方、ピエールの持つ権力と、私兵による兵力を当てにしているのだろう。

この時、殺意によって視野狭窄に陥ったフォルテは、自分を見つめる不気味な視線に気づかなかった。

「おやおやく」

歩き去るフォルテを見ながら、どこか愉悦の感情の籠った声を上げる男がいた。

フード付きの真っ黒な外套を羽織った怪しい男。

その顔には、笑顔を模した黒い仮面をつけている。

全身黒づくめ。

街中で見かけたら即通報されるような、怪しさ全開の格好だった。その男の隣には、フルフェイスの兜を被った上半身裸の巨漢が立つ

ている。

実に怪し過ぎる二人組であった。

「今の少年、大臣さんの息子さんですかね？　モリメツトさんはどう思います？」

「……………」

「無視！　無視は寂しいですねえ！」

仮面の男のおどけた言葉に、巨漢の男は何も答えない。

もし、この場に彼ら事情を知っている者がいれば、今のやり取りを滑稽な一人芝居だと不気味に思った事だろう。

だが、そんな事を知っている者など、この場には一人としていなかった。

「さてさて。なんにしても、あの少年、実に良い目をしていましたねえ！

これは何か面白い事が起こりそうです！　もうちよつとこの国に留まってみますか」

仮面の男は一人で結論を出し、うんうんと頷いている。

そうして少しの間止まった後、二人は静かに歩き出した。

目的地は、フォルテと同じくピエールの執務室。

それすなわち、王国を蝕む敵が、王国を蝕む腐敗貴族と繋がっているという事。

不吉な影は、王国の裏へと確実に忍び寄っていた。

第3章 辻斬り編

40 休日

「ひっ!?!」

王都の郊外にある街道。

そこに恐怖に染まった男の悲鳴が響いた。

男は貴族であり、隣の街へと赴く為、護衛を付けた馬車で王都を出発したばかりだった。

ちよつとした遠出など、男にとっては日常茶飯事。

王都周辺の街道は、騎士団や兵士団による定期的な狩りのおかげで、魔物も滅多に出没しない。

加えて護衛も腕利き揃いであり、男は何の心配もなく馬車に揺られていた。

だが、そんな男は今、恐怖に引きつった顔をしていた。

辺りに広がるのは、護衛達の血によって出来た、真つ赤な血の池。

十人いた護衛達は、全員が斬り殺され、血を流すだけの肉塊へと変わり果てている。

馬車も破壊され、馬はどこかへと逃げた。

だが、馬は逃げられても、男は逃げられない。

何故なら、この惨状を作り出した襲撃者が、血の滴る紅色の刀を男の眼前に突きつけているのだから。

「貴殿に恨みはない」

そう語る襲撃者は、不健康そうな男だった。

長い髪は色素が抜け落ちて真つ白に染まり、目の下にはどす黒い隈が出来ている。

顔色は今にも死にそうな程に悪い。

だが、この男はたった一人でこの惨状を作り出したのだ。

走る馬車に真正面から対峙し、正々堂々、真つ向勝負にて護衛達を斬り捨てた。

彼らが主を逃がす間も与えず、一瞬にして十人の腕利きを死体に変

えたのだ。

そんな襲撃者は、腰を抜かして座り込む男に向けて言葉を続けた。「だが、これも仕事だ。せめて苦しまぬよう、一瞬である世へと送ってしんぜよう」

「ま、待つ……」

「御免」

男が抵抗する暇もなく、襲撃者は一瞬で男の首をはねた。

返り血に染まりながら、襲撃者は腰の道具入れから火の魔道具を取り出し、壊れた馬車と一緒に、その場にある全ての死体を燃やした。まるで、死者を吊い、火葬するかのよう。

「……嗚呼、虚しい」

空へと登っていく煙を見上げながら襲撃者はそう呟き、すぐに炎に背を向けて、その場から立ち去ったのだった。



「暇だ」

クソ虫との対決から一週間後の週末。

私はナイトソード家の執務室で、茶菓子を貪りながらダラダラしていた。

これには、ちゃんとした理由がある。

今日は休日、それも連休の初日なのだ。

まあ、それはいい。

むしろ、喜ぶべき事だろう。

問題は、せっかくの休日に私が暇をもて余しているという事よ。

何故なら、私と遊んでくれる奴がないのだ。

アリスはクソ虫との対決に向けた特訓の時に、盛大に授業をサボった分の遅れを取り戻そうと勉強に励んでる。

そんな事しなくても、あの子の成績は学年トップだというのに。

なんで、そんなに頑張るのか聞いたところ、「ナイトソード家の娘として恥ずかしくない成績を残したいんです!」と返ってきた。

だが、その理屈で言うと、一番ナイトソード家に相応しくないのは私だ。

だから別に気にしなくてもいいと言ったら、「私がやりたくてやっている事ですから」と返ってきた。

ウチの孫が頑張り屋さん過ぎて泣ける。

そんなアリスの邪魔をするなんて、私にはできなかつた。

何？

お前も一緒に勉強しろ？

私は平日の授業だけでお腹いっぱいだから無理だ。

次にシオンだが、こいつも駄目だった。

暇潰しに修行でもつけてやろうと思って男子寮に突撃してみたら、忽然と失踪していたのだ。

城下町にでも行ってるんだろう。

肝心な時に使えない奴だ。

スカレットとオリビアとは、アリスなしで遊ぶような仲ではないので除外。

しかも、なんか二人とも忙しいらしい。

王女ともなると色々あるのだろう。

アレクとユーリとマグマは普通に仕事中。

貴族に休日はない。

なんとというブラック職業。

我が弟子どもながら、よくそんな環境で生息できるものだ。

トーマスの社畜根性でも受け継いだのだろうか？

そうになると、あと残るは使用人軍団くらいだが……。

あいつらと遊ぶつてのもなあ。

メイド軍団に話を持っていったら、シヨツピングにでも連れ出されて着せ替え人形にされそうだし。

休日にも、そんな面倒な事したくはない。

一人で修行でもするのもありっちゃありだが、修行は一人でやって

も効率が悪い。

ある程度、実力の拮抗した相手と戦うのが一番成長できるのだ。いつそ、使用人軍団と一緒に修行するか？

……いや、それをやったら、修行じゃなくて指導になるな。

面倒だからパスだ。

「という訳で暇なんだが、なんか、おもしろい事ないか、お前ら〜？」

「そんなに暇なら、俺達の仕事を手伝ってください」

「だが、断る」

アレクの救援要請をバツサリと切り捨てる。

悪いな。

書類仕事は嫌いなんだ。

「無駄ですよ、アレク。リンネ様にこういう書類仕事を期待してはいけません。馬鹿なんですから」

「おい、トーマス」

「失礼。口が滑りました」

まったく、誰が馬鹿だ！

元主に対する敬意が足りんぞ、トーマス！

私はちよつと脳筋なだけだ！

頭脳労働が性に合わないだけで、やる気になればできなくはないんだぞ！

まあ、やる気になる事なんて、前世ではついぞなかったがな。

「ひくまくだ〜！」

「……人が仕事してる前で堂々とゴロゴロされると殴りたくないので、どこか他の場所でやってくれませんかねえ？」

おっと。

アレクの額に青筋が浮かんだ。

ちよつと調子に乗りすぎたか。

まあ、アレクが怒っても、毛ほども怖くはないがな。

「はあ。リンネ様。そんなにお暇でしたら、最近巷を騒がせる辻斬り退治でもしてきてはいかがですか？」

「辻斬り？」

なんじやい、そりや？

聞いた事ない話だな。

「ああ、辻斬りですか。たしかに、リンネさんにぴったりの仕事かもしれないですね」

「ほー。とりあえず、詳しく聞かせろ」

「わかりました」

そうして、アレクが私に辻斬りとやらの情報を教えてくれた。

その間、トーマスは一切手を止めずに書類を仕上げている。

さすが社畜の鑑。

「件の辻斬りですが、奴は一年前くらいから王都の近辺に現れ始めた凶賊です。

神出鬼没で、狙われるのは、主に貴族や貴族と繋がりのある有力者。

当然、そういう権力者は優秀な護衛を雇ってるんですが……その辻斬りは、どんなに強い護衛が相手でも真っ向から斬り捨て、必ず目的を達する凄腕という話です」

「それはまた、物騒な話だな」

どんなに強い護衛もって事は、騎士なんかも殺られてるんだろう。

そのくらい強くなければ、とつくの昔に捕まってるだろうしな。

「特徴は、長い白髪に目の下のどす黒い隈。紅色に輝く不気味な剣を持った、まるで幽鬼のような生気を感じられない男だそうです。

ここに人相書きがあります」

「人相書きがあるんかい！」

なんで、そんな都合よく持ってんだ!?

「元々、俺達でなんとかしてほしいと国に頼まれていた案件ですからね。

ですが、今は忙しい上に難しい依頼なので、なかなか進展がないというのが現状です」

「難しい？」

やたらと強くなったこいつらをして難しいと言わしめるとは……。

「……まさかとは思いますが、その辻斬り、お前らでも勝てないとか言わないだろうな？」

「どうでしょうね。辻斬りと直接相対した事はないので、断言はできません。」

向こうも俺達の事は警戒しているのか、三剣士の前に姿を現した事はないですし」

ああ、そういう意味か。

たしかに、辻斬りの目的が権力者の暗殺なら、わざわざ馬鹿強い連中には近づかんわな。

「なるほど。それで、お前らが捕まえる事は難しいって訳か」

「そうなります」

弟子どもは、良くも悪くも目立つからな。

全員が何かしらの役職を持つてるから、身軽には動けない訳だ。

そして、身軽に動けなければ、神出鬼没の辻斬りとエンカウトするのは難しい。

三剣士が本格的に辻斬りを調べてるって話がどこから流出したら、姿を眩まされるのが落ちだ。

前世の私みたいに、全ての仕事を放り出した上で、身分を隠して世直し（笑）の為に動くって訳にもいかんだろうし。

「そこで私の出番という訳か！……と言いたいところなんだが、ぶつちやけ難しいぞ。」

さすがの私でも、休日の日や二日費やしたくらいで、神出鬼没の辻斬りを見つけられるとは到底思えん」

「ええ、わかってますよ。本題はここからです」

そう言つて、アレクは真剣な顔つきになった。

「……これはあくまでも憶測に過ぎませんが、その辻斬りは大臣と、アクロイド家と繋がっている可能性が高いと見ています。」

殺された有力者のほとんどが、大臣にとって不利益となる者ばかりですから。

つまり、辻斬りは、この前の騒動でアクロイド家の面子を潰したりンネさんやシオンくんを狙ってくる可能性があるんです」

「……ほう」

あのクソ虫一家の関係者だったのか。

それを先に言え。

俄然、やる気が出てきたわ。

あの戦いのアフターケアをしてやるよ！

「というか、そういう事はもっと早く言え！」

「そうですよね。失念してました。他の事で急がしくて、辻斬りの事が頭から抜けてたといいますか……」

「おい」

しつかりしろ剣神。

そんな事では、先代のような立派な男にはなれんぞ。

「ゴホン。それで、リンネさんにやってほしい事というのは……」

「生餌となつて辻斬りを釣り上げ、そのまま斬ればいいんだろ？」

「はい。その通りです」

わかりやすくて実にいいな。

覚悟しろよ辻斬り！

釣り上げられた魚のごとく、三枚におろしてくれるわ！

「さて！ それじゃあ、辻斬り退治に行くとするか！」

「くれぐれも注意してくださいね。相手は凄腕。いくらリンネさんでも、確実に勝てるという保証はないんですから」

「わかつてる。私は勝てない戦いはしないからな」
ちゃんと勝てる算段をつけてから挑むし、負けそうになったら逃げる。

私はもう剣神ではなく、最強ではない。

故に、慢心も油断もしない。

そもそも、剣神だった頃でさえ、最強ではあつても無敵ではなかったのだからな。

剣神が無敵ならば、代替わりなんて事は起こらない。

あの強さの化身のようだった先代、いや、先々代剣神ですら、若き日のエドガーに斬り殺されている。

どんな強者でも、死ぬ時は死ぬ。

油断すれば、死ぬ確率は一気に増す。

私はそれを知っている。

だからこそ、どんな戦いでも気を抜かないのだ。

圧倒的な実力差があったクソ虫との戦いですら、私は欠片も油断していなかったしな。

「では、行って来るー」

執務室を出て、廊下を歩く。

まずは、そうだな、冒険者ギルドにでも出向くか。

辻斬りの細かい情報が得られるかもしれないし、あわよくば辻斬りに狙われそうな奴の護衛依頼でも受けて、護衛の連中と一緒に袋叩きにでもできれば最高だな。

ついでに、学食代でも稼いでこよう。

学費は特別生として学費は免除されてるが、学食の代金で地味に貯金が目減りしてるしな。

「……行きましたか」

「行きましたね」

「しかし、よかったのですか、アレク？ 辻斬りがそんなタイミングよくリンネ様を襲撃する可能性なんて限りなく低いでしょうに。」

あれでは十中八九、無駄足になりますよ」

「この部屋でダラダラされるよりマシです。それに、あの人はもう少し働くべきだ」

「……それもそうですね」

なんか、背後の執務室からアレクとトーマスの会話が聞こえた気がしたが、その内容までは聞き取れなかった。

41 雷の侍

屋敷を出て、冒険者ギルドへとやって来た。

実は、ここ王都の冒険者ギルドに来るのは、地味に初めてである。あくまでも、今世ではという注釈が入るがな。

前世では酒場として、しょっちゅう利用していた。

修行の一環で盗賊に売り払った弟子どもが疲労困憊で王都に帰って来た時、その弟子どもを売った金で飲んだ私と、こここの店先で鉢合わせた時は軽い修羅場になったっけ。

懐かしいな。

そんな、ちよつとした思い出の残るギルドの開け放たれた扉を潜って中に入る。

ん？

なんか、前と雰囲気が違うな。

ギルドの中がやけに騒がしい。

耳を澄ませば、いや、澄まさなくとも冒険者達の騒ぐ声が聞こえてくる。

野太いおっさんの歓声が聞こえてくる。

何があつた？

気になって、騒ぎの元へと足を向ける。

冒険者達が騒いでいる場所は、ギルドの裏手にある訓練施設。

そこでは、二人の男が木剣を手に、結界の中で激しい戦いを繰り広げていた。

「やああああああー！」

「うらあああああー！」

雄叫びを上げながら激突する二人の男。

一人は、私もよく知っている眼帯を付けた中年。

左腕に特徴的な魔道具の義手を付けたS級冒険者『隻腕』のドレイク。

色んな所を旅する流離いの男……の筈なのだが、何故かちよくちよくエンカウトするレア度の低いS級だ。

だが、そんなのでも実力は確か。
私と同じS級冒険者の称号は伊達ではなく、本気の私を相手にしても勝ち目があるような実力者である。

しかし、注目すべきは、そんなドレイクと互角以上に渡り合う対戦相手の方だ。

若い男だった。

年齢は二十代前半くらいか。

こちら辺では見ない特徴的な服、たしか和服と言ったか？ それを着ている。

その名の通り、大陸の東にある和国で使われているという衣服だ。腰に刀も差してるし、彼は和国の剣士、侍というやつだろうか？

まあ、私は和国に行った事がないから詳しくは知らんが。

それは置いておくとして、侍（仮）の凄まじいところは、その剣技だろう。

技術で言えば、完全にドレイクを圧倒している。

加えて、当たり前のように闘気を纏い、その出力もまたドレイクよりも上。

つまり、この侍は普通にドレイクよりも強いのだ。

ドレイクも義手の機能を上手く使ったトリッキーな動きで翻弄して食らいついてはいるが、地力に差がある。

このままでは敗北必至だろうな。

義手に仕込んだ魔道具の数々を使えばまだわからないんだが、ドレイクはこういう場所で手の内の多くを明かす奴ではないから、それで逆転するという可能性は低いだろう。

驚いた。

まさか、こんな実力者がポンと現れるとは。

そして、そんな世界有数の実力者同士の戦いを見て、冒険者達は大いに盛り上がっている。

一人の戦士として、この戦いに胸を熱くしているのだろう。

「頑張れドレイクさん！ あんたに金貨十枚賭けちまったんだよ！」

「負けるな兄ちゃん！ 勝ってくれたら賭け金でなんか奢ってやるか

ら！」

「ああああ！ ドレイクさんが追い詰められていく！ 俺のなげなしの生活費がああああ！」

違った。

ただのギャンブルによる熱狂だった。

この賭け狂いどもが！

もう少し、まともな観戦はできないのか!?

まあ、私も前世でたまにやってたがな。

だが、さすがにギャンブル中毒者ばかりではないようで、中にはまともに熱狂してる奴らもいる。

一見クールを装って目が燃えてる奴とかもいるな。

というか、あれシオンじゃねえか。

失踪したと思ったら、こんな所に来てたのか。

ふむ。

どうせなら、こういうのは知り合いと一緒に見た方が楽しいな。

私はシオンに近づいた。

「よう、シオン！」

「……リンネか」

何故か、シオンは不機嫌そうな声で応えた。

そして、近づいてみてわかったんだが……シオンがなんか汚れてる。

具体的には、服に土と血の汚れがある。

「その服どうしたんだ？」

「……お前が知る必要はない」

あ、なんとなく察した。

ドレイクか侍のどっちかに勝負挑んで負けたな、これは。

シオンは前に、ベル達と一緒にドレイクに挑んで、こてんぱんにされた事があるから、リベンジを挑んだとしても不思議じゃない。

侍の方は……よく見ると、シオン以外にも服が汚れてる奴らがいる。かいる。

ドレイクとドンパチやってる事といい、道場破りにでも来たのかも

しれんな。

「シオン。何があったのか説明してくれ」

「……まあ、いいだろう。まず、俺は学食代を稼ぐ為に、何か依頼を受けようとしてギルドに来たんだが」

おい、思考回路が私と同じじゃねえか。

幼なじみって似るのだろうか？

「ここでドレイクに会った。そうして世間話をしている内に話題は俺の成長の事になった。「ちよつとは強くなったか？」と聞かれて、その後……クソツ」

ボコボコにされたと。

まあ、だろうな。

今のシオンとドレイクでは、まだドレイクの方が強い。

だが、天才シオンは凄まじい速度で成長している。

この前、アリスと一緒にちよつと特訓しただけで、クソ虫相手でも勝てんじゃね？ ってレベルまで強くなったからな。

私の見立てでは、あと二年もあればドレイク超えるんじゃないか？ もっとも、この見立てには、ドレイクが老化によつて衰える事も計算に入っているが。

「まあ、それはいい。で、その後だ。あいつがギルドに現れたのは」

そう言つて、シオンはドレイクと戦つてる侍を指差した。

シオンの話によると、あの侍はギルドに入つて開口一番こう言つたらしい。

『たのもーうー！ 拙者は道場破り！ このギルドで一番強い方と戦わせてほしいでござる！』

道場破りなら道場に行け。

一瞬そう思ったが、考えてみれば道場というのは未熟な奴が教えを乞う為に通う場所だ。

道場で強いのは教える側の人間だけであり、それなら戦闘力で生計を立ててる冒険者に挑んだ方が、結果的に強い奴と戦えていいのかもしれない。

で、その発言を聞いた腕白慢の冒険者達が、

『おうおう兄ちゃん。最強に挑むなら、まずは俺達を倒してからにしたらおうか』

『ドレイクさんが出るまでもないぜ！』

『やっちなえー！』

という感じで、侍に突っ掛かって行つたと。

そして、案の定、全員が一瞬で叩きのめされ、酔った連中が「次は俺だあ！」と言って突撃し、騒ぐのが大好きな連中が賭け事を始め、やんやんやと盛り上がって現在に至ると。

というか、王都最強の冒険者はドレイクなのか。

あいつ流離いだから、よそ者だろうに。

それで良いのか、王都の冒険者ども。

だが、実は王都にいる冒険者は、他の街にいる奴らより弱いんだよな。

なんせ、王都には大量の兵士と騎士がいる。

魔物の討伐とかは冒険者に頼るまでもなく、必然的に冒険者は仕事がなくなつて、迷宮とかが溢れてる辺境に行く訳だ。

したがって、王都にいる冒険者は、駆け出しか、流離いか、あるいは王都に根を張った奴だけ。

ドレイクが最強扱いされるのもわかる。

まあ、それはともかく。

「で、シオンもあれに挑んだのか？」

「……………チツ」

挑んだらしい。

それで、ボコボコにされたと。

まあ、だろうな。

ドレイクにも勝てないのに、ドレイクよりも強い侍に勝てる訳がない。

相性もあるとは思うが、やっぱり地力が違う。

だが、強い奴にガンガン挑むのは良い事だ。

強い奴との戦闘経験は、確実に自分を成長させてくれる。

私は、不機嫌そうなシオンを温かい目で見た後、試合の方に目を向

けた。

「湯煙！」

お。

ドレイクが勝負を仕掛けた。

前にシオン達を倒した技、煙幕で相手の視界を奪う魔法だ。

あれは自分の視界まで塞いでしまうが、ドレイクには何かしら視界に頼らずとも相手の位置を捕捉する手段があるんだろ。

私も、視界を奪われた程度じゃ負けないしな。

しかし、それを侍は、

「飛劍・嵐天！」
らんてん

雷を纏った衝撃波で吹き飛ばした。

おお！

あれは嵐にシオンと同じ雷魔法を加えた技か！

完成度高いな。

「破ッ！」

「うおっ!?!」

そして、目眩ましが失敗に終わったドレイクは、侍の反撃に合つて

木剣をはたき落とされた。

だが、

「アームド・ブースター！」

ドレイクは、剣を振り抜いて動きの止まった侍に、至近距離から予測困難な一撃を放った。

射出された義手の拳が、剣の間合いを飛び越えて懐に届く。

しかし、

「……参った」

侍は驚愕に目を見開きながらも冷静に対処した。

体を回転させて拳を回避し、そのまま流れるように木剣をドレイクの首筋に添えたのだ。

あの一瞬で見事な判断だったな。

「ふう。貴殿こそ見事でござった、ドレイク殿！ 勝負を受けていた
だき、誠に感謝するでござる！」

侍の勝利で試合が終了し、二人を囲っていた結界が解除される。賭けに勝った負けたで、冒険者達の悲喜こもごもの叫びが響き渡った。

まあ、それはどうでもいい。

「ドレイクー！」

「ん？ おお、嬢ちゃん。見てたのか。……カッコ悪いところ見せちまったな」

「気にするな。お前のカッコ悪いところなんて見飽きてる」

「……そうか」

元気がないな、ドレイク。

疲労のせいもありそうだが、侍に負けたのが余程ショックと見た。

「ドレイク殿。こちらのお嬢さんは？」

「ああ、元仲間の娘だ。こう見えても強えぞ。俺と同じS級冒険者だ。

下手したら俺よりも強えかもな」

「なんと!? その齢で、しかも女子おなじの身でありながら、ドレイク殿よりも!? 凄まじいでござるな！」

「ハッハッハ！ そうだろう、そうだろう！」

おい、ドレイク。

何故にお前が自慢げに話す？

というか、仲良いなお前ら。

あれか？

戦う、倒す、仲間になる、というやつか？

「申し遅れた！ 拙者の名はライゾウ！ 武者修行の為に国元を飛び出した流浪の武芸者にござる！」

お嬢さん！ よろしければ、貴殿の名を教えていただきたい！」

「ん？ まあ、いいが。私はリンネだ」

「では、リンネ殿！ 是非とも拙者と戦ってください！ いざ、尋常に勝負でござる！」

侍のライゾウが勝負を仕掛けてきた。

いきなりだな。

強者と見れば見境なしか、こいつ。

「……お前、疲れないのか？」

シオンやドレイクと戦った後だろうに。

「ハツハツハ！ 拙者、体力には自信があるでござるよ！ それに、強者との戦いは拙者の生き甲斐！」

そのせつかくの機会を、疲れたなどという理由で捨てたくないでござる！」

あー、なるほど。

こいつは戦闘狂か。

昔のシオンみたいに理由ありきで強くなりたいたいのではなく、純粹に強くなる事が楽しくて、鍛え上げた力を強敵相手に思う存分振るいたいと考えるタイプ。

要するに、生粋の武人と見た。

「別に戦ってもいいが……悪いな。今日はやめておく」

「そこをなんとか！」

「無理。これから辻斬り退治なんだ。余計な体力は使えない」

「辻斬り、でござるか？」

まずは受付で辻斬りの情報を仕入れて、辻斬りが狙いそうな奴の護衛依頼でもあれば、それを受ける。

まあ、そんな依頼が都合よく転がってる確率は低いだろうが。

もし空振りに終わったら、ライゾウと遊んでやろう。

という訳で、訓練場を離れて受付に向かう。

「おい、嬢ちゃん。辻斬り退治ってどういうこった？」

その途中で、ドレイクが真面目な顔で質問してきた。

まあ、ドレイク相手なら、軽く説明しておくべきか。

私を心配して言ってるんだろうし。

「ちよつと学校でやらかしてな。辻斬りが雇い主の命令で私とシオンを狙ってくるかもしれないから、先に探して斬る事にした」

「ちよつと待て。俺も狙われてるのか？ 聞いてないぞ」

「言っていないからな。私もついさつき聞いた話だし」

「また、嬢ちゃん達が妙な状況に……」

ドレイクとシオンが頭を抱えた。

「リンネ殿。辻斬りというのは、この近辺に現れるという、あの辻斬りでござるか？」

そうしたら、今度は辻斬りという言葉聞いてから沈黙していたライゾウが喋り出した。

「なんか、思案するような顔をしている。」

「あの辻斬りが、どの辻斬りかは知らんが、私の追ってる辻斬りはこいつだ。ほれ、手配書」

アレクの所から貰ってきた手配書を、ショートパンツのポケットから取り出して見せてやる。

ライゾウは、それを食い入るように見つめていた。

「うーむ……拙者の知る御仁に似ているような気がするのですが」

「ん？ お前、まさか辻斬りと知り合いか!？」

「こんな所に情報元が！」

「実は、拙者は元々、その辻斬りの噂を聞き付けて、この街にやって来たのでござるよ。」

辻斬りが振るうという紅色に輝く刃というのに、心当たりがあるのでござる」

そうして、ライゾウは静かに語った。

その心当たりとやらの話を。

「その刃の名は『妖刀紅桜』。世に名だたる最強の魔剣『十剣』が一振りにして、

拙者の故郷、和国においては『呪われし国宝』と呼ばれた、曰く付きの刀でござる」

……十剣だと？

これは思わぬ大物の名前が出てきたな。

十剣とは、この世界において『神剣』に次ぐと言われる、十の魔剣の総称。

手にするだけで英雄になれるとまで言われた、魔剣の最高峰。

辻斬りがその中の一本を持っていると言うのであれば、警戒度を大幅に引き上げる必要がある。

と、私がそんな事を考えていた時。

「た、頼む！そこをなんとかしてくれ！」

受付の方から、なにやら切羽詰まったような老人の声が響いてきた。

42 大臣の密会

時は少し巻き戻り、リンネがクソ虫と呼ぶ少年、フォルテ・アクロイドを打ち倒した日の翌日。

王都にある、とある屋敷。

絢爛豪華で金のかかっているような、まるで成金のような赴きの豪邸、アクロイド公爵家の別邸の中を、一人の少年が歩いていた。

「許さない……許さない……許さない……！」

彼こそ、リンネ達によって屈辱を味あわされた張本人、フォルテ・アクロイドである。

彼は呪詛の言葉を吐きながら、お供の一人も連れずに屋敷の中を歩いていた。

そして、辿り着く。

目的の部屋へと。

「ふうー……」

そこで、フォルテは一度深呼吸をして、心を落ち着かせた。

これから会う相手は、決して激情のままに突っ掛かっているいい相手ではない。

その事を、フォルテは誰よりもよく知っているからである。

そうして、なんとか煮えたぎる怒りや屈辱を腹の底へと呑み込み、フォルテは部屋の扉をノックした。

少しして、中から声が聞こえてくる。

「誰ですか？」

「フォルテです。父上」

「ああ、君ですか。入りなさい」

部屋の主からの許可を得て、フォルテは部屋の中へと踏み込む。

そこは、とある男の執務室。

部屋の中にいるのは二人の男。

片方は、壁に寄りかかり、刀を抱きながら胡座をかいている護衛の男。

そして、もう片方は、この部屋の、いや、この屋敷の主。

アクロイド公爵家当主、ピエール・アクロイドである。

ピエールは窓の前に立ち、手を後ろで組んで外の景色を眺めていた。

「何の用ですか、フォルテ？」

フォルテの、実の息子の方を向きもせず放たれた言葉。

まるで、どうでもいい者を相手にするようなその態度に、フォルテの背筋が凍った。

(薄々予想はしていたが、やはり……！)

その恐怖をなんとか飲み下し、フォルテは口を開く。

「本日は、父上にお問い合わせがあつて参りました」

「ほう、お願いですか。これは滑稽ですねぇ」

そう言つて、ピエールは笑う。

フォルテを蔑むように嗤う。

その醜悪な笑顔が、窓に映つてフォルテの目に入っていた。

「聞きましたよ。君、昨日の試合において、平民とナイトソードの娘に不様に負けたそうじゃないですか。」

君には期待していたというのに。その期待を裏切った無能が、恥知らずにもこの私にお願いとは。実に滑稽ですねぇ」

ピエールはケタケタと嗤い……急に真顔になつてフォルテに告げた。

「消えなさい。君には失望しました。二度と私の前に顔を出さないように」

「ち、父上……」

「ですがまあ、これ以上アクロイドの名に泥を塗られても困りますからねえ。最後の情けです。まだ『風神の腕輪』は預けておいてあげます。」

せいぜい、優秀な騎士となつて私の慈悲に応えなさい。

いいですね？」

「……はい」

フォルテは消え入りそうな声でそう言つて、トボトボとした足取りで部屋を出た。

しかし、彼の瞳にはまだ、執念の光が宿っていた。

(まだ挽回のチャンスはある！　そこで奴らを倒し、父上に認めてもらうしかない！　そうでなければ、僕は……)

恐怖。

リンネ達への怒りや屈辱すらも上回る恐怖が、今まで必死に目を背けてきた父への恐怖が、フォルテをより一層駆り立てる。

もう二度と敗北は許されない。

フォルテは今、追い詰められていた。

そして、追い詰められた獣は手強い。

その事実が証明されるのは、もう少し先の未来での話である。



「……あれは少し言い過ぎだったのではないか？」

一方、フォルテが去った部屋の中では、ずっと黙っていた護衛の男が口を開いた。

男の外見は特異だった。

色素が抜け落ちた長い白髪に、目の下にはどす黒い隈が出来ている。

生気を感じられない幽鬼のような出で立ちでありながら、その声音にはフォルテへの同情心が乗っていた。

悪辣な大臣の部下とは思えない、優しさを秘めた態度である。

「あなたが口を出す事ではありませんよ、カゲトラ」

「しかし……実の息子なのだろうか？」

「だからこそですよ。親子の問題に部外者のあなたが口を挟まないでください」

「……まあ、たしかにそうだな」

護衛の男、カゲトラは一応納得したようで、それ以上の追及をすることはこなかった。

再び沈黙するカゲトラを見て、ピエールは面倒な男だと内心で吐き捨てる。

しかし、彼がフォルテなんぞとは比べ物にならない程に有能だという事は認めているのだ。

その有能さに助けられた事は多い。

それに、他の者達と同じく、ピエールを裏切れないように処置もしている。

ピエールにとっては、実に良い拾い物であった。

(ですがまあ、所詮は平民。いくら優秀でも、道具は道具ですがねえ) ピエールにとって、平民は道具。

否、全ての他者が道具。

それがピエールの考え方である。

自分は公爵。

最高位の貴族であり、他者は自分の為に働く道具となつて然るべき。

平民とは、そんな道具の中でも最下級の、いくらでも使い捨てにしている駒。

選民思想の極地と言える考えだろう。

リンネが聞いたなら、「腐つてやがる！」と憤慨する事、間違いなしだ。「……さて、そろそろお客様が来られる頃でしょう。

いつも通り、頼みましたよカゲトラ」

「ああ、わかっている」

ピエールが時間を気にしながらそう呟き、カゲトラがあぐら座りをやめて立ち上がった。

それとほぼ同時に、部屋の扉がノックされる。

「ノックしてもしもし。開いてますか〜?」

「開いていますよ。お入りください」

聞こえてきたのは、公爵を相手にしているとは思えない、ひたすらにおどけた男の声。

入室に許可を出すと、二人の不審人物が部屋の中へと入ってくる。

「どうも〜! シャドウです〜! お久しぶりですね、大臣さ〜ん!」

「……………」

二人の不審人物。

一人は陽気でおどけた態度を取る、全身黒づくめの仮面の男。もう一人は、まるで人形のように無言で静かに佇む巨漢の男。

貴族の屋敷に上がり込むには相応しくない二人組。

だが、ピエールが彼らに対して礼を失する事はない。

「ようこそ、おいでくださいました。さき、立ち話もなんですし、お座りください。今、飲み物を用意させましょう」

「これはこれは！ 天下の大臣様におもてなしを受けるとは恐悦至極！ そのお気遣い、ありがたく頂戴いたしまゝす」

選民思想のピエールがここまで下手に出る存在。

それは本来、自分よりも上位に位置する王族相手くらいでしかあり得ない。

しかし、彼らは例外だ。

何故なら、彼らこそがピエールの、アクロイド家の切り札なのだから。

シャドウが客人用のソファに座り、護衛の男、モリメットがその後ろに控える。

それを確認してからピエールも席に座り、カゲトラが後ろに控える。

更に、「失礼いたします」と言って入室した執事が、すぐさま二人の前に紅茶を用意して出て行った。

シャドウが席についてから紅茶が用意されるまで、約十秒。

アクロイド家の使用人の優秀さが垣間見える。

主がクズでも、部下は有能という事である。

有能でなければ、いつ主の不興を買って処分されるかわからない。故に、彼らも必死なのだ。

「して、本日はどのようなご用件で？」

そんな使用人達の影の努力などつゆ知らず、ピエールは目の前の相手との対話を始めた。

「いえいえ、ほんのご機嫌伺いでげすよ。大臣さんはワタシ達にとつ

て、とつても大事な協力者。大臣だけに大事ってね！

そんな大事な大臣さんのご機嫌を伺うのは、至極当然の事ですよ
」

「それは光栄ですな」

口ではそう言いつつ、ピエールは相手の狙いに気づいていた。

おそらく、いや、どう考えても監視だろう。

土壇場になってピエールが裏切らないように、定期的に睨みをきかせに来ていると見た。

心配せずとも、ピエールが彼らを裏切る事はない。

少なくとも、今のところは。

「帝国と皇帝陛下にそこまで買っていただけとは、実に光栄。

陛下には、是非ともよろしくお伝えください」

「ええ、ええ、もちろんですとも」

そう。

彼らは帝国の犬。

かつて、侵略戦争によつて大陸全土を支配しかけた超大国、ディザスロード帝国の遣いなのだ。

故にこそ、ピエールは彼らに尻尾を振る。

腐った貴族らしく、その目的は当然、自らの野心の為。

「クーデターの準備は着々と整ってきています。

その時こそ、このピエール！ 陛下の為に身命を賭して戦いましょう！ どうぞ、頼りにしてください」

「わく！ 頼もしい！ よ！ さすがお大臣！」

「いえいえ、それ程でも」

ピエールの野望。

それは、近い未来に帝国が引き起こす、第二次侵略戦争に合わせて、内側から王国を陥落させ、王族を皆殺しにし、帝国の支配下となった王国の玉座に自らが座る事。

すなわち、このグラディウス王国の乗っ取りであった。

ピエールは、今の王国に不満を持っていた。

成り上がりのナイトソード家ごときが、古来より高貴なる血を受け

継いできたアクロイド家と同格の公爵となり、しかも、ナイトソード家の方がもてはやされる。

それを寛大な心で許し、更にその力を認めてやり、配下に加えてやろうとして血縁を結んでやるべく、ナイトソード家の娘に己の息子であるフォルテを差し向けたというのに、

あろうことか、彼らはアクロイド家に牙を向き、王家と組んで潰しにくる始末。

不敬にも程がある。

許せなかった。

成り上がりのくせに自分に齒向かうナイトソード家も。

それを黙認するどころか支援する王家も。

もつと遡れば、貴族を貴族とも思わず、世直しなどと嘯いてピエールの策略をことごとく潰して回った剣神エドガーも。

全てが許せなかった。

ピエールは選民主義者である。

だが、それ以上に危険で腐りきった思想を彼は持っていた。

それは、独善的で、どこまでも自己中心的な、エゴイズム。

ピエールにとって、最も大事なものは自分だ。

常に自分が最優先であり、他者の事などなんとも思っていない。

全てが自分の思い通りにならねば気が済まない。

自分がもてはやされ、肯定される世界でなければ許容できない。

選民思想は、そんなピエールのエゴを正当化する為の手段でしかないのだ。

だからこそ、ピエールは簡単に王国を裏切る。

帝国に寝返り、自分が思う存分権力に溺れる事のできる環境を望む。

そのあり様は、まさしく腐りきったクソ貴族であった。

「頼りにしてますよ、大臣さくん。あなたは優秀ですからね。必ずや、陛下のお力になっていただけると信じています。」

そくれくにく。あなたにも期待してますよ、カゲトラさくん」

そう言つて、シャドウはピエールの後ろに控えるカゲトラに目を向

けた。

その仮面の奥の目は、愉快そうにニヤニヤと笑っていた。

そんな目を向けら、カゲトラは嫌そうに顔をしかめた。

「いや、本当に残念ですよ！　あなたが大臣さんの部下じゃなかったら、絶対ウチにスカウトするのに！」

「どうです？　今からでも、大臣さんのところ辞めて、ウチに来る気はありませんか？」

「ふざけるな」

シャドウの言葉を聞いて、カゲトラは殺気を出しながら怒りの籠った目でシャドウを睨みつけた。

「落ちたとはいえ、それがし某も武士の端くれ。そう簡単に主を変えるつもりなどないわ」

「お、怖い怖い！　冗談ですってば！　だから、そんなに怒らないでほしいな〜！」

ワタシ、喧嘩は弱つちいので、そんなに睨まれると、おしっこ漏らしちゃいますよ！　いいんですか!?　立派なお屋敷が汚い水分で汚れても!？」

ふざけた態度でそう言いつつ、シャドウは護衛のモリメツトの後ろに回り込んで、彼を盾にした。

おそらく、彼の言った汚い水分とは、小水だけでなく血液という意味もあるのだろう。

すなわち、これ以上喧嘩腰でくるのならば、このモリメツトの旦那が黙ってねえぞ！

お前なんて血みどろだ！

という脅しの意味が籠められた言葉なのだろう。

多分。

「やめなさい、カゲトラ！」

「……失礼した」

ピエールの静止により、カゲトラが殺気を収める。

それを確認したシャドウは、「ふ、やれやれ」と呟きながら席に戻った。

「シャドウ殿。カゲトラが失礼をいたしました。申し訳ない。

しかし、冗談でもあのような事を言わないでいただきたいですねえ。彼
は私の大切な部下どっくなので」

「ええ、はい。こちらこそ、まっこと失礼いたしました。武士の誇り高
さを舐めすぎましたわ。いや、どうもすいませんね」

ピエールが牽制し、シャドウは全く悪びれた様子もなく口先だけの
謝罪を述べる。

当然、両者の間には、言葉に出した以上の思惑の交差があった。

その結果として、ひとまずカゲトラが帝国陣営に引き抜かれる事は
なくなつた訳だ。

「さて、カゲトラさんにも振られちゃいましたし、ワタシ達はもうおい
とまするとしますね」

あ、でも面白いもの見つけちゃつたので、少しの間は王都に留まる
予定です。

近い内にまた会うかもしれないので、その時はどうぞよろしくお願
いしますね」

「ええ、わかりました。どうぞ、お元気で」

「ではでは！ さようなら」

そう言い残してシャドウは魔法を発動させ、モリメットと共に、そ
の場から忽然と消えた。

それは、凄まじい速度で発動された空間魔法による効果である。

便利ではあるが、デメリットも多い空間魔法。

そのデメリットの一つである、発動速度の遅さをシャドウは克服し
ている事になる。

あんなふざけた態度を取っているが、中身は超一流という言葉でも
足りない、人外の魔法使い。

そんな貴重な人材を、惜しげもなく使い走りにする帝国。

ピエールは、そんな帝国に畏怖を抱き、同時に味方として上手く取
り入った自分を内心で褒め称える。

「……主。あまり、奴らを信用しない方がいいと某は思うが」

そんなピエールに、カゲトラが釘を刺す。

しかし、その言葉はピエールには届かない。

「それも、あなたが心配する事ではありませんよ。

あなたはただ、私の言う通りにしていればいいのです。

そういう契約でしょう?」

「……はあ。承知した」

カゲトラは、ため息を吐いて引き下がった。

たしかに、カゲトラにとって、ピエールが何を選択してどんな末路を辿ろうと知った事ではない。

ピエールを主として敬っているのは、あくまでも義理を通しているからに過ぎないのだ。

だが、義理はあっても忠誠心はない。

カゲトラのピエールに対する情は、とうの昔に消え去ってしまった。

それでも忠告をし、お節介を焼いてしまうのは、彼の生来の気質故だろう。

「さて、お客様も帰りましたし、あなたには次の仕事を頼みますかね。次の仕事は、ヤコブという商人の暗殺です。

私の小飼である商人の商売仇ですし、前々から邪魔だと思っていたのですよ。

決行は今週末。ヤコブが隣街への商談の為に王都を離れるタイミングを狙ってください」

「……承知した」

カゲトラはあまり気乗りしなさそうな声で仕事の依頼を了承した。だが、ピエールがそれに言及する事はない。

彼としては、仕事さえ果たしてくれれば、それでいいのだから。

「ああ、それともう一つ」

これ以上の要件はないと判断して部屋を出ようとしていたカゲトラに、ピエールが今思い出したかのように、追加の言葉を投げ掛けた。

「フォルテの件ですが、フォルテ個人はともかくとして、アクロイド家の顔に泥を塗った輩は許せませんねえ。」

なので、それをやった平民を探して斬りなさい。
たしか、その平民はリンネと言いましたっけ？」

「……子供、それも女か」

カゲトラが、とても渋い顔をした。

内心では快く思っていないのがまるわかりである。

「何か不満でも？」

「……いや、承知した」

だが、その苦い気持ちを呑み込んで、カゲトラは仕事の内容を了承する。

今の自分に選択肢などない。

その事を知っているが故に。

「では、よろしくお願いしますね。ああ、ナイトソードの娘の方は、大
事になりそうなので殺さなくて結構。」

平民に関しても、目立たないように、いつも通り王都の外で殺して
ください」

「ああ」

そうして、カゲトラは部屋を出て行った。

部屋には、ピエールだけが残される。

「ふう。疲れましたねえ。今日はもう食べて寝るとしましょうか」

ちなみに、現在の時刻はまだ夕方である。

更に言えば、ピエールの今日の起床時間は昼前であった。

傲慢な上に怠惰。

どこまでも救いようのない男であった。

「グフフ、今日はどの女で遊びますかねえ」

十色欲。

本当に、どこまでも救いようのない男であった。

43 護衛依頼

「た、頼む！　そこをなんとかしてくれ！」

受付から聞こえてきた、なにやら切羽詰まったような老人の声。

そこそこ大きな声だったせいも、それとも悲劇的な匂いがするせいか、その声はギルドの中に意外と響いて注目を集めた。

といつても、何人かが「なんだ、なんだ？」って感じで目を向ける程度だが。

ちなみに、私達は全員が注目していたので、少し会話が止まった。

声の主はヨボヨボの爺さんだった。

とは言え、杖をつきながらも、しっかりと二足歩行をしているので、まだまだ元気と言った感じだ。

と、その時、その爺さんと話をしていた受付嬢が、憂鬱そうにため息を吐いた後、ふとこっちを向いた。

私達の方を見ている。

正確には、受付嬢の視線の先はドレイクだ。

そのまま、受付嬢は爺さんに断りを入れてから、こっちに向かって小走りで近づいてきた。

「ドレイクさん。すみません、少しよろしいでしょうか？」

「ん？　どうした？」

「実は……あちらの方が護衛依頼を出したいと仰っているのですが、その条件にS級冒険者をご所望なんです」

む。

S級冒険者を護衛にしたいとな？

それはまた、ずいぶんと豪勢な護衛依頼だな。

何かありそうだ。

「なんでも、ご自分が例の辻斬りに襲われるかもしれないと考えられているようで。」

それで、王都にいるS級はドレイクさんだけなので話を持ってきたのですが」

「そりゃあ……」

ドレイクが、嫌な予感がするとばかりの困った顔でチラリと私を見た。

私は笑った。

不敵にニヤリと笑った。

ドレイクの顔がウゲツって感じに歪んだ。

「お姉さん……その話、詳しく教えてくれ」

「え？ あの、あなたは？」

「私はこういう者だ。話を聞く資格はあると思うが？」

そう言つて、私は冒険者セット一式を入れてある腰の道具入れから、冒険者カードを取り出して受付嬢に見せつけた。

そのカードには、光輝くS級の文字が！

「え、S級の冒険者カード!? という事は、あなたが『天才剣士』ですか!? 王都に来てるとは聞いてましたが……!」

受付嬢の驚愕の声がギルドに響き渡る。

冒険者達が思いつきり私に注目した。

ので、パチツとウインクしておいた。

何人かが胸を押さえて踞った。

奴らはロリコンだな。

要注意だ。

ちなみに、依頼人の爺さんもガツツリと私を見つめていた。

その目に浮かぶ感情は、ときめきではなく期待だったが。

「さて、じゃあ、詳しい話を聞こうか」

「は、はい！」

そうして、私は受付嬢に連れられて依頼人の爺さんの所へと向かったのだった。

何故か、当たり前のように他の三人も付いて来たが、気にする必要はないだろう。



そして、現在。

「いやー、助かったぞい。

まさか、駄目元で出した依頼でS級冒険者を二人も雇えるとは思ってらんかった」

私達は例の依頼人の爺さん（ヤコブという名前らしい）の馬車に揺られながら護衛をしていた。

私達の配置は、爺さんの馬車の中に私とシオンの二人。

外の護衛達に交じって、ドレイクとライゾウの二人という感じで別れた。

そう、この依頼を受けたのは私だけではない。

他の三人も受けた。

ドレイクは私を心配して付いて来てくれた。

シオンは、自分も当事者だからと言って付いて来た。

ライゾウ？

奴は強い奴と戦うのにワクワクする戦闘狂だからな。

辻斬りとの対戦を望んで付いて来た訳だ。

「リンネ殿！ 短い間ですが、よろしく頼むでござる！」
と言っていた。

まあ、ライゾウは冒険者資格を持っていなかったので一悶着あったんだがな。

だが、結局はその戦闘力を爺さんが見込んで、護衛として直接雇い入れる形となった。

なににせよ、これでS級クラス三人にA級一人という、かなりの戦力が集まった訳だ。

実に頼もしい。

これなら、辻斬り相手でも十二分に勝ち目があるだろう。

それに加えて、外には護衛として爺さんの私兵が十人くらいいる。どうもこの爺さん、かなり臆病な性格してるらしく、私兵だけじゃ

戦力が足りないと考えて、追加で冒険者を雇おうと思ったらしい。

本人曰く、「安全を金で買えるなら安いわい！」との事だ。

まあ、この場合、臆病というよりは慎重。

辻斬りの脅威を正しく認識してると言うべきか。

たしかに、本当に辻斬りが襲撃して来た場合、爺さんの護衛達だけだと守りきれないだろう。

護衛達が弱い訳じゃない。

物腰とかをパツと見ただけだから詳しくはわからないが、それでも

一人一人からB級冒険者並みの強さを感じた。

強い奴だとA級クラスに達してるかもしれん。

B級といえば、昇格する為に試験が必要な一流の冒険者。

それと同等以上の護衛というのは、一商人を守るにしては、むしろ過剰なくらいだ。

だが、それでも辻斬りには勝てないだろう。

今入ってる情報だけで考えても、件の辻斬りは相当強い。

依頼を受ける時に、今まで辻斬りの犠牲になってきた奴らの事や、

現在判明している辻斬りの情報を教えてもらったが、

アレクの言ってた通り、爺さん以上の権力者や騎士なんかも辻斬りに殺られていた。

その中には爺さん以上の護衛を雇ってた奴もいただろうし、騎士とかは普通に、この護衛達よりも強い。

それが殺られてんだから、爺さんが安全とは言い難いわな。

加えて、辻斬りがライゾウの言っていた知り合いだった場合、危険度は更に跳ね上がる。

ライゾウの話によると、そいつはカゲトラという男で、昔は和国でも有名な剣豪だったらしい。

貧しい生まれながら、並外れた努力で成り上がり、和国でも一、二を争う実力者とまで呼ばれるようになった立派な侍だったとか。

ところが、カゲトラは数年前、何かが原因でダークサイドに落ちたらしく、呪われた国宝『紅桜』を盗んで国を脱走。

それ以来行方知れずとなり、今回、ライゾウがカゲトラと特徴の合致する辻斬りの情報を掴んで追って来た。

まあ、ライゾウがカゲトラを追いかけている理由は、国の命令とか

ではなく、強い奴と戦いたいという極々個人的な理由だがな。

なんでも、ライゾウは前にもカゲトラと戦った事があるらしく、十剣の一つを手に入れてより強くなったカゲトラと戦いたいんだと。

「拙者、ワクワクしてきたでござるー」だそうだ。

この調子だと、負けて死んでも本望だろう。

そんなライゾウの思惑は置いておくとして。

辻斬りの正体が本当にカゲトラだった場合、私達は十剣を持った和国最強クラスの剣士を相手にしなければならぬ、という事になる。

それがどれだけ強いかと言えば……下手したら弟子どもクラスだろうな。

つまり敵の戦力は、最悪、グラデイウス王国最高戦力『三剣士』と同等。

全盛期より遥かに弱くなった私一人だと、正直、勝率は半分を切るだろう。

ドレイク達を連れて来て良かったと心底思う。

別に、私はライゾウみたいな武人じゃないからな。

一対一にも、真剣勝負にも拘りはない。

危険な敵を袋叩きにできるのなら、それが最善だ。

まあ、それも辻斬りが本当に襲撃してくればの話だが。

私達を乗せている馬車が止まった。

休憩、ではなく野営の時間だ。

見れば、日は完全に傾いている。

時刻は夕方。

今日はここまで。

到着は明日という事だ。

なにせ、爺さんが目指してる街までは、馬車でまる一日かかる。

私がギルドに行ったのが昼前。

そこから諸々の準備を整え、出発したのは午後だった。

故に、途中で野営する事になるのは最初から決まっていた訳だ。

本当は朝一番で出発して、その日の内に着くのが理想なんだが、爺

さんがギリギリまでS級冒険者の護衛を求めてギルドでござたせいで遅れたらしい。

なんでも、かなり前からギルドに通って申請し、それでも諦めずに時間ギリギリまで粘ったとか。

だが、そこまでしても爺さんの予想が外れる可能性もある。

すなわち、辻斬りが現れない可能性だ。

「本当に来ると思うか？」

野宮の準備を手伝ってる途中で、シオンが聞いてきた。

主語が欠けているが、このタイミングで話題に上る事など辻斬り以外にないだろう。

「まあ、普通に考えたら来ない方が良いんだがな」

襲撃なんて、起こらない方が良いに決まっている。

爺さんが払った私達への依頼料は、無駄使いになつてくれた方が良
い。

個人的には、戦力が揃っている今の内に辻斬りを仕留めたいという
思惑もあるが、それはそれ、これはこれだ。

「だがな。護衛つてやつは、襲撃があると思つてやるもんだ。そうし
ないと、いざという時に対応できない。警戒は怠るなよ」

「……ああ」

私の言葉を受けて、シオンは気を引き締め直したように真剣な表情
になった。

うむ。

さすがA級冒険者。

物わかりが良くて助かる。

「リンネ殿！ 拙者はちと厠に行つて来るでござるよ！」

それに比べて、こいつは……。

緊張感がないな。

それに、厠？

厠……？

ああ、便所の事か。

「とつとと済ませて来い。じゃないと、戦いに遅れても知らんぞ」

「むむー。それは困るー。では、急いで行って来るでござる！」
そうして、ライゾウはどこかへと走り去って行った。

まあ、生理現象なら仕方ないが、何故、私に言った？

持ち場離れる宣言なら、ドレイクにでも伝えりやいいだろうに。
だが、ライゾウが消えた直後に、そいつが現れた。

ズシン、ズシンと地響きを立てて、森の中から一匹の魔物が這い出して来る。

大きさは約五メートル。

岩のような鱗を持った、巨大なトカゲ。

ロックリザードという魔物だ。

「敵襲ー。魔物だー」

護衛達のリーダーっぽい奴が声を張り上げる。

しかし、その声に動揺はない。

むしろ、落ち着いてすらいる。

それも当然。

ロックリザードは凶体こそデカイが、その正体は危険度Dの雑魚。

鱗が固くて倒すのが面倒ではあるが、その分、動きがあまりにも遅い。
駆け出しのF級冒険者ですら、普通に走って逃げられる相手だ。

戦闘になっても、それ程強くない。

ここの護衛達なら楽勝だろう。

そして、私達は事前に取り決めた通りのフォーメーションを取った。

護衛達がロックリザードの前に立ち塞がり、私達は爺さんを頑丈な馬車の中に叩き込んだ上で、馬車を守る位置へと移動する。

役割分担というやつだ。

私達是对辻斬り用の戦力という事で体力を温存し、それ以外の奴は護衛達が相手をする事になっている。

護衛達がロックリザードを取り囲んだ。

魔法使いが魔法の発動準備を始め、まずは遠距離攻撃で弱らせよう

とした時。

——突如、頑健な筈のロックリザードの巨体が、真つ二つに割れた。

「どうやら、戦う準備はできているようだな」

『ッ!?!』

そして、それを成したと思われる人物が、濃密な殺気を放ちながら現れた。

色素の抜け落ちた長い白髪。

目の下のどす黒い隈。

右手に紅色に輝く不気味な刀をダラリとぶら下げた、幽鬼のような出で立ちをした一人の男。

手配書に描かれた通りの出で立ち。

「貴殿らに恨みはない」

男が、語る。

「だが、これも仕事だ。手向かう者は、悪いが死んでもらう」

そして男は、紅色の刀を私達に向けた。

「いざ、尋常に参る」

辻斬りが、地面を蹴って駆け出した。

4 4 辻斬り

辻斬りが最初に標的にしたのは、奴から最も近い位置にいた護衛の一人だった。

弟子どもと遜色ないレベルの闘気を纏った辻斬りは、目にも留まらぬ速度で標的に肉薄する。

見ながら動いたのでは到底間に合わない。

「神脚！」

故に私は、辻斬りが動く前に地面を蹴った。

視線の向きと殺気の方向性から敵の動きを読み、辻斬りが護衛に斬りかかるより先に、私が辻斬りに斬りかかる。

こんな幼女に先手を取られた事に驚愕したのか、辻斬りは目を見開いた。

「神速剣・一閃！」

「ぐっ……!?!」

神速の一撃が辻斬りを襲う。

しかし、これだけで倒せる相手ではない。

命中はしたものの、しっかりと刀で防がれた。

初見にも関わらず、辻斬りは私の神速剣を防いだのだ。

だが、咄嗟の守りだったが故に剣撃の威力までは殺しきれず、辻斬りは森の木々を薙ぎ倒しながら大きく後方へと吹き飛んだ。

私達の間には距離が開く。

「今の内だ！ 下がれ！」

「す、すまない」

私は追撃せず、標的にされた護衛に指示を出した。

こいつの力量では、私達の戦いには付いて来れない。

今の一瞬の攻防だけで確信した。

あれは英雄の領域だ。

英雄同士の戦いでは、一流の戦士ですら足手まといになる。

私達の戦いに直接立ち入る資格があるのは、闘気使いのドレイクとシオンくらいだろう。

だが、未熟なシオンはギリギリアウトだ。

あとは、ライゾウ。

他は遠距離からのサポートが関の山だろうな。

見れば、他の連中も即座に対辻斬り用の陣形へと切り替えていた。

私とドレイクが前へ。

他は馬車の護衛に。

そして、シオンをはじめとした、魔法を使える遠距離持ちがサポートする。

便所に行ったどつかの馬鹿を除けば完璧な陣形だ。

というか、早く戻って来いライゾウ。

「凄まじい剣技を操る、幼き女剣士……なるほど、お前が『天才剣士』リンネか。驚いたぞ。噂に聞いた以上の使い手だ」

吹き飛ばされた辻斬りが、森の中から再び現れた。

服に汚れが付いているものの、目立った外傷は見当たらない。

やはり、ガードの上から叩いた程度では駄目か。

殺るなら、確実に肉体を斬らねば。

「……子供を斬るのは心苦しい。本来なら、死なぬ内に、この場から立ち去れとでも言うところなのだがな」

は？

「なんだ、そりゃ？ そうすれば見逃してくれるとでも？」

「ああ。本来ならな。今の某は去る者は追わぬ。

だが、お前は別だ。某が受けた仕事の中に、お前の抹殺も入っている。悪いが、逃がす事は叶わん」

そう言いながら、辻斬りが刀を構え直す。

まるで、罪悪感を、振り払うかのように。

「それに……子供とはいえ、お前のような強き剣士を相手に、そんな事を言うのは失礼というものだろう」

辻斬りの雰囲気から、甘さが完全に消えた。

眼光は鋭く、物腰には一切の隙がない。

……チツ。

少しは、ロリーな美少女に遠慮してくれてもいいんだがな。

個人的には、失礼とかいくらでもしていいから、遠慮して弱体化してほしかった。

だが、こうなっては全力を持って迎え撃つ他にない。

小細工抜きの本勝負だ。

「やるぞ、ドレイク。サポート頼む」

「……無茶すんなよ。危なくなったら即交代だからな」

「わかって、る！」

その言葉を言い終わらない内に、再度突撃。

ドレイクも後に続いた。

「神速剣・破断！」

「一の太刀・斬！」

威力重視の私の剣と、鋭く振るわれた辻斬りの刀が激突する。

辻斬りの技は、長き修練を重ねた者特有のキレを持っていた。

クソ虫みたいな紛い物とは比べ物にならない、まごうことなき本物の強者の剣。

だが、それでも威力、速度ともに私の方が僅かに上。

ぶつかり合った斬撃は、その僅かな差で私が押し勝ち、辻斬りの体勢を崩した。

「!？」

「神速剣・槍牙！」

驚愕する辻斬りへと、容赦のない追撃の刺突を繰り出す。

狙うは心臓。

一撃必殺！

「五の太刀・柳！」

これを、辻斬りは斜めに構えた刀で受け流した。

刃同士がギヤリギヤリと音を立てながら交差する。

しかし、崩れた体勢からの防御では完全には受け流しきれず、軌道の逸れた剣が辻斬りの腕を削った。

「ぐっ……い！」

傷はそこそこ深い。

今の内に畳み掛ける！

「神速劍・五月雨！」

次に放ったのは、神速の連続斬り。

刹那の内に振るわれた無数の斬撃が、辻斬りの体に傷を刻んでいく。

致命傷だけは上手く防いでいるが、代わりに辻斬りの全身が傷だらけになっていく。

いける！

私は更なる力を籠めて、劍を振り抜いた。

異変は、その時に起こった。

「はっ？」

折れた刃が宙を舞う。

その形は、私がよく知っているもの。

今世の故郷を離れる直前に、成長期の自分の体格を考慮して購入した、今の私の愛劍。

その先端部分。

見れば、私の劍は、半ばから折れていた。

否。

切断されていた。

断ち斬られていた。

何の前触れもなく。

何故……!?

一瞬混乱し、すぐに気づく。

結論など、一つしかないという事に。

私の劍は、耐えられなかったのだ。

たった数回の激突に。

僅か十にも満たない刃の交差。

それも、ほとんど防戦一方の状況で。

鬨気を纏った私の劍は、辻斬りの持つ刀に叩き斬られた。

そういう事だ。

これが十劍の一つ、妖刀紅桜の能力。

すなわち、ただひたすらに圧倒的な、切れ味。

「四の太刀・刺竜しりゆう」

「ッ!?!」

呆然とした一瞬の間に、戦況は逆転していた。剣を失った私と、猛攻を耐えきった辻斬り。

攻守は逆転し、今度は私が攻められる。

辻斬りの放った刺突を、残った剣の残骸を使って、なんとか受け流す。

更に剣が削られた。

「六の太刀・連舞れんぶ」

続いて、連続斬りが私を襲う。

刺突の後に連続斬り……!!

私がやった事をやり返されてる気分だ。

しかも、剣を失った私は防ぐ事ができない。

避けるしかない。

方向は後ろ。

神脚によつて背後へと跳び、辻斬りの間合いの外まで逃げる。

「太刀脚たちあし」

しかし、そう簡単には逃がしてくれない。

辻斬りは、飛脚に似た技を使って追いかけて来た。

このままでは、いずれ追い詰められる。

私一人ではジリ貧だったろうな。

だが!

「交代だ、嬢ちゃん!」

「任せた、ドレイク!」

私は一人じゃない。

後ろに下がった私と入れ替わるように、ドレイクが前に出る。

そして、左腕の魔道義手を辻斬りに向けて突き出した。

「フラッシュ!」

「ぬっ!?!」

義手の掌が眩しく発光した。

目潰しだ。

ドレイクは普通に強いが、こういう、こすつからい搦め手も得意と
している。

目潰し一つ取っても、いくつかのバリエーションがあるのだ。

「嵐！」

そうしてドレイクは、辻斬りの視界を封じてから、衝撃波で確実に
吹き飛ばした。

だが、しっかりとガードされている。

ドレイクの攻撃力では、ガードの上から致命傷を与える事はできな
い。

「ボルティックランス！」

そこへ、シオンが追い討ちをかけた。

雷の槍が、嵐は直撃で動きのとれない辻斬りへとぶち当たる。

それを見てハツとしたかのように、魔法担当の護衛達も魔法を連発
した。

十人の護衛の中で、魔法使いは四人。

魔法剣士が二人。

そいつらの放った様々な属性の魔法が辻斬りを襲う。

いくら強力な闘気を纏っているとはいえ、さすがにこれだけ撃てば
ノーダメージとはいかないだろう。

私達が付けた傷も合わせれば、それなりのダメージにはなっている
筈だ。

「この機を逃すな！ ドレイク殿に加勢するぞ！」

『おう！』

「あ!?! 馬鹿、やめろ！」

それを好機と捉えたのか、護衛達のリーダーが号令を下し、遠距離
攻撃を持たない四人が辻斬りに向かって突撃して行ってしまった。

いくら負傷してるとはいえ、お前らでどうにかできる相手じゃない
事に変わりはないんだぞ!?

「止まれ！」

「飛劍・桜吹雪」

私が静止を呼び掛けるも、既に手遅れだった。

紅色の魔力を帯びた衝撃波が吹き荒れ、護衛達を吹き飛ばす。技の種類としては、嵐とほぼ同じだ。

だが、紅桜の力によって独特の進化を遂げた紅色の嵐は、護衛達の体をズタズタに引き裂いた。

魔剣と義手で防いだドレイクは無事だが、残りは全員虫の息となっている。

B級冒険者に匹敵する護衛達が、たったの一撃で倒された。

飛剣というのは、斬撃を飛ばすという性質上、直接斬りつけるよりも威力が落ちる。

しかも、斬撃を広範囲に拡散する衝撃波へと変換する為に薄める嵐は、更に威力が下がってしまう。

その薄めた攻撃でこれだ。

恐るべし紅桜。

そして、恐るべし辻斬り。

「剣を借りるぞー！」

「え？」

私は愛剣の残骸を放り捨て、呆然としていた残りの護衛、魔法剣士の奴から了承も得ずに新しい剣を奪取して前線に戻った。

無事に返す保証はない。

「ドレイク！ 盾！」

「わかってるー！」

短いやり取りだけで、ドレイクは察してくれた。

ドレイクの持つ魔剣は、私のと違って相当な業物だ。

おそらく、紅桜相手でもそれなりに打ち合える。

加えて、義手もまた特別製で、かなり頑丈。

紅桜の斬撃でも、何度かは受けられる筈だ。

だが、単純な剣士としての腕前で、ドレイクは辻斬りに劣る。

義手の機能を十全に使ったとしても、互角には一步届かないだろう。

だからこそ、ドレイクが盾となり、私が剣となって戦う。

それが最善の戦略！

「……凄まじいな」

ドレイクによる牽制の攻撃を捌きながら、辻斬りが口を開く。その隙を突くように、私はドレイクの後ろから、あるいは回り込ん で別方向から剣を突き出す。

だが、当たらない。

慣れない剣を使ってるせいで速度もキレも低下した。

紅桜と直接打ち合ってはいけないというのもキツイ。

だが、それ以上に……辻斬りが私の速度に慣れてしまった。

これは紅桜ではなく、この辻斬り自身の力。

いくら十剣と言えど、武器に振り回されるような雑魚が持っていたのならば、恐れるに足らなかつた。

だが、達人が最強の武器を持つてしまえば、この上なく強くて厄介だ。

まさに、鬼に金棒。

こいつ、本当に強い……！

「強いな。お前は本当に強い。仲間の力を借りているとはいえ、魔剣もなく、己の力のみで紅桜と渡り合うか。

努力だけでは越えられぬ壁を完全に越えている。

まさに『天才剣士』。お前は天に選ばれた、本物の強者だ」

辻斬りが語る。

おそらく、私に話しかけている訳ではない。

その声には、何か強い感情が籠っているように感じた。

その感情を言葉に乗せて、ただ、吐き出している。

「某は、お前が……」

「お一方！ 離れるでござるー！」

辻斬りが言葉を続けようとした瞬間、その大きな声が聞こえてきた。

咄嗟にそれに従って、私とドレイクは大きく飛びすさる。

直後、巨大な雷の斬撃が、辻斬り目掛けて炸裂した。

「飛劍・雷光！」

同じ雷でも、シオンとは比べ物にならない程に強力な一撃。だが、咄嗟に紅桜で雷を斬り裂いたのか、辻斬りに大きなダメージはない。

しかし、それでも構わない。

一気に戦況を覆す戦力が、やっと戻って来たのだから。

「お待たせした！ 拙者、只今参上でござる！」

攻撃の飛んで来た方向。

そこには、バチバチと放電する刀を握った、もう一人の侍。

もう一人の強者、ライゾウが立っていた。

やっと来たか！

遅いわ！

「シデンイン・ライゾウ……！」

そして、そんなライゾウを、辻斬りは強い感情の籠った目で見つめていた。

45 侍 VS 侍

「遅いぞ、ライゾウ！」

「すまぬ、リンネ殿！ 尻を拭くのに思ったよりも手間取ったでござる！」

「大の方だったんかい！」

「どうりで遅いと思った！」

「どうか、そんなきつたねえ話、聞きたくもないわ！」

「それはそれとして、お久しぶりでござる、カゲトラ殿！」

「しばらく見ぬ間に随分と老けましたな！」

「シデンイン・ライゾウ……お前は変わらんな」

ライゾウと辻斬り、カゲトラは知己の仲であるかのように言葉を交わす。

ライゾウの家名みたいなものを知っている事と言い、やはり二人は知り合いではあったようだ。

だが、互いに殺気をぶつけ合っているのを見れば、決して仲が良
い訳ではないというのはわかる。

一触即発。

今にも死闘が始まりそうだ。

そうして緊張が高まる中、ライゾウが声を張り上げた。

「カゲトラ殿！ 貴殿に一騎討ちの決闘を申し込むでござる！」

皆々様！ 手出し無用に願いたい！」

「はあ?！」

何言ってやがる!？」

いや、言うんじゃないかとは思っていたが、本当に言いやがった!

この馬鹿!

戦狂い!

状況わかってんのか!？」

「お前なあー！」

「嬢ちゃん、言っても無駄だ」

思わず文句を言おうとしたら、ドレイクに止められてしまった。

いや、私とてわかっている。
わかつてはいる。

まだ一日にも満たない短い付き合いだが、ライゾウの人柄は把握した。

あまりにも単純すぎて、簡単に理解できた。

あいつは、本当に生粋の武人なのだ。

強くなる事、強い者と戦う事だけが生き甲斐であり、それ以外には全く興味がない。

だからこそ、これは護衛依頼だとか、何を置いても勝利と依頼人の安全を優先しろとか、負ければ死ぬんだぞとか言ったところで、ライゾウには届かない。

そんな事、あいつには関係ないのだから。

ただ、強い奴と戦いたい。

それだけの為に、ライゾウはここにいる。

「……チツ！ 負けて死んでも自己責任だからな！」

「感謝するでござる、リンネ殿！」

私はしぶしぶ引き下がった。

本当なら、後顧の憂いをなくす為にも、カゲトラはここで、ライゾウを含めた総戦力で袋叩きにして確実に仕留めたい。

だが、そう言ってもライゾウは聞かないだろう。

下手に横槍入れて機嫌を損ねられても面倒だ。

もういい。

勝手にやれ。

ライゾウが勝てばそれでよし。

負けた場合は、弱ったカゲトラを残った全員で潰せばいい。

もう、それでいいわ。

私とドレイクは、シオン達のいる馬車の前まで下がった。

治癒の使える護衛二人が、倒れた護衛達を治療している。

どうやら、私達が戦ってる間に回収したらしい。

「さて、これで邪魔は入らぬ！ 貴殿が既に手負いの身であられるのは残念でござるが、それでも存分に戦いましょうぞ！」

今度は試合ではなく、死力を尽くした実戦殺し合いの中で！」
ライゾウが嬉しそうに笑いながら刀を構える。

それを鋭い視線で睨みながら、カゲトラもまた紅桜を構えた。

「いざー！ 尋常に参るー！」

そして、遂にライゾウが仕掛けた。

カゲトラに全く引けを取らぬ闘気を纏い、愚直に、正面から、最短距離を直進する。

速いな。

ドレイクと戦ってた時よりも遙かに。

まあ、試合の時と違って、魔剣の擬似闘気を使っている分、速くなつて当然なんだが。

しかし、それを差し引いても、スピードならば、カゲトラよりもライゾウが上だ。

「二の太刀・斬！」

その勢いのまま、ライゾウはカゲトラに斬りかかった。

……だが。

「二の太刀・反鬼はんき」

「ぬお!？」

カゲトラは半歩横にずれる事で、ライゾウの攻撃を冷静に避け、反撃の抜き胴を放つ。

ライゾウは凄まじい反射神経で後ろに下がり、これを避けた。
代わりに、ライゾウの攻撃も不発に終わる。

そして、ライゾウが距離を取って仕切り直した。

「太刀脚・天狗てんぐの型！」

ライゾウが加速し、今度は動き回りながらカゲトラを攪乱する。
その動きは、私の神脚乱舞に酷似していた。

どこの国にでも似たような技はある。

「九の太刀・旋風つむじかぜ！」

「五の太刀・柳」

そのまま、ライゾウは四方八方から斬りかかる。
だが、カゲトラには届かない。

どんな風をも受け流す巨木の如く、全ての剣撃を紅桜で受け流している。

……あれは相性の問題もあるな。

同郷だからか、二人が使う剣術は同じ流派だ。

私の神速剣と違って、知り尽くされた動きと技では、カゲトラに一手届かない。

それに、なんとなくわかってはいたが、カゲトラの戦い方には隙がないのだ。

ユーリのように、守りに特化している訳でも、

マグマのように、攻めに特化している訳でも、

アレクのように、速さに特化している訳でもない。

全ての技が優れている。

全ての技に、並外れた修練の跡がある。

だからこそ、わかりやすい強みが紅桜以外に無いにも関わらず、奴は強い。

「さすがでござるな、カゲトラ殿！ 前に戦った時よりも遥かに強いでござるよ！」

だが、対するライゾウも負けてはいない。

攻め切れてこそいないが、反撃を食らう事もない。

それに、いくら攻めても、ライゾウの刀が紅桜に断ち斬られる気配はない。

何故なら、ライゾウが持つ刀もまた『十剣』の一つ。

本人曰く、実家から持ち出してきたという希代の名刀。

その名も、『雷刀電光丸』。

雷の魔剣だ。

そこから放たれる、雷を帯びた鋭い斬撃。

補助に、高威力の魔法攻撃。

それら全てを斬り裂き、受け流す紅桜。

二人が暴れる事に、攻撃の余波だけで森が原型を失ってゆく。

巻き込まれないようにするだけでも一苦労だ。

私達の目の前で、そんな凄まじい激戦が繰り広げられていた。

「……凄い」

ふと、隣からそんな呟きが聞こえてきた。

声の主はシオンだった。

シオンは、二人の侍の戦いを真剣な目で見つめていた。

同じ、雷の魔法剣士であるライゾウの戦う姿に、何か思うところでもあるのかもしれない。

「シオン。お前はあれを見て、どう思う?」

少し気になって尋ねてみた。

「……世界には、まだまだ強い奴が沢山いる。俺より強い奴が沢山いる。」

俺は、あの戦いには付いて行けない。お前の戦っている世界には、まるで手が届かない。……未熟者だ」

シオンは、悔しそうに拳を握り締めた。

それはそうだ。

シオンは天才だが、まだまだ経験が足りない。

強敵との死闘という経験値が、圧倒的に足りていない。

ならば、そんな未熟なシオンのやるべき事は一つだ。

「だったら、この戦いを目に焼き付けとけ。」

強者から、先を行く者から一つでも多く学び、盗み、糧として成長しろ。

私から言えるのはそれくらいだ」

「……ああ。言われなくてもわかってる」

そうして、シオンはより一層真剣に二人の戦いを観察、いや、分析し始めた。

それでいい。

「……坊主。一つだけ言っとくが、お前が弱いんじゃないよ、嬢ちゃんがおかしいだけだからな。そこは間違えるなよ?」

ドレイクがなんか言っていたが、気にしなくていいだろう。

そうして外野が騒いでいる内に、侍同士の戦いは戦況の変化を迎えようとしていた。

ライゾウが今までの猛攻をやめ、停止した。

その代わりに口を開く。

「ああ、楽しい！ 心踊る！ これ程の死闘は久方ぶり！ この国に来て本当に良かったでござる！」

ライゾウが獰猛に笑う。

心の底から楽しそうな、修羅の笑みだ。

だが、対峙するカゲトラの目は、どこまでも冷たい。

「ならば、いい加減に本気を出したらどうだ？」

手加減したままで死闘などと……侮辱も大概にいたせ！」

……今なんと言った？

手加減？

ライゾウが、手加減していただと？

そんな、馬鹿な……!?!

「手加減とは人間が悪い。切り札を温存してただけでござるよ。

しかし！ これ程の戦い！ 切り札を切らぬままにいるのは、たし

かに失礼！ 非礼を詫びるでござる。

そして！ お望み通りお見せしよう！ これが拙者の全力でござ

る！」

そう言った瞬間、ライゾウの全身から稲妻が走る。

魔法を使ったというのはわかった。

だが、攻撃手段として使ったのではない。

ライゾウは、雷の魔法を身に纏ったのだ。

それは、まるで雷と一つとなったかのような、異様な姿であった。

「奥義・雷神憑依！」

そうして、雷となったライゾウが駆ける。

速い！

さつきとは比べ物にならない速さ！

単純な移動速度ならば、私すらも超えているぞ！

まさに、雷の如し。

雷を纏って速度を上げるとは……どんな理屈だ？

「一の太刀・斬！」

「くっ……！」

さつき簡単に防がれたのと同じ技。

だが、今は前提となる基礎能力値が違う。

先程とは違い、カゲトラも余裕を持って防ぐ事は叶わない。

それでも、防いでいる。

まだ倒せてはいない。

「雷速太刀脚！ 雷旋風！」
いかずちせんふう

「ッ!？」

再び、ライゾウがカゲトラの周囲を跳ね回り、四方から斬りかかる。

今度は雷のような速度で。

残像すら置き去りにして攻める。

「なめるなああああー！」

カゲトラが咆哮を上げ、紅桜を振りかぶって決死のカウンターを狙う。

紅桜と電光丸が真面目から激突した。

だが、これは……

「十一の太刀・虎鋏！」
とらぼさみ

「がっ……!？」

カゲトラの背後から飛来した雷の槍が、その背中に炸裂する。

後ろに回った時に魔法を使い、それが発動する前に正面に回って挟み撃ちか。

なんとという早業。

そして、予想外の攻撃によって体勢が崩れた隙を狙い、ライゾウの一撃がカゲトラの脚を斬り裂いた。

そのままの流れで首筋に一閃。

だが、それは紅桜で防がれ、しかし、踏ん張りがきかずにカゲトラは地面を転がる。

その勢いが止まった後、カゲトラは疲労困憊の様子で地面に膝をついた。

これは勝負あったな。

「本当に、本当に楽しかったでござるよ、カゲトラ殿。

とても手負いとは思えぬ、実にあっぱれな強さでござった。

ですが、これで終わりでござる！ 切捨御免！」

ライゾウがトドメを刺すべく疾走した。

カゲトラは……む？

何故か刀を構えず、右腕を宙にかざした。

正確には、右腕の手首に嵌まった腕輪をかざしている。

あの腕輪どこかで……ハッ!?

まさか!?

「転移！」

「む!？」

カゲトラに斬られる間際、カゲトラが腕輪に籠められた魔法を発動させた。

空間魔法の転移。

その場から退却する為の魔法。

逃がすか！

「神速飛剣！」

「ぐっ……！」

私の飛剣がカゲトラを斬り裂く。

しかし、それは左腕を盾に、犠牲にして防がれた。

片腕を切断するも転移は止まらず……

——空間が歪み、カゲトラの姿が消えた。

「クソッ！ やられた！」

まさか、あんな代物を持ち出してくるとは！

転移の腕輪。

本家の空間魔法と違ってランダムにしか飛ばず、移動できる距離も酷く短い。

おまけに、一回限りの使い捨て。

そのくせ、馬鹿みたいに希少で、アホみたいな値段の付けられる骨董品だ。

そんなもんを使われるとは、完全に想定外だった。

だが、それ以上に！

「ライゾウ！ お前、仕留めようと思えば仕留められたらろ！ 何故、

逃がした!？」

「い、いや、その、逃げられたらまた戦えるのではないかという思いが、一瞬、脳裏を過ってしまい……」

「このアホが!」

まったく!

倒せた筈の敵をみすみす取り逃がすとは!

やはり、ライゾウに任せろべきじゃなかったか!？」

「まあまあ、嬢ちゃん、落ち着け。」

とりあえず全員無事……じゃねえが、全員生きて辻斬りを退けられたんだ。今はそれで満足しとけ。な?」

「ぬうう……」

まあ、ドレイクの言う通りではあるんだが。

しかし、奴を逃がした以上、また私達の命を狙ってくるぞ。

この依頼が終わったら、私の連休も終わってしまうし。

千載一遇の好機だったというのに……。

「う、うう……どうなってるんだ?」

「隊長! 目が覚めたんですね!」

「よかったあ!」

ふと見れば、勝手に突撃してカゲトラにやられた護衛達が起き出し
ていた。

結構深い傷負った奴もいたが、命に別状はなさそうだ。

……まあ、たしかにドレイクの言う通り、護衛依頼は達成したし、誰も死なずに済んだ。

まことに遺憾だが、今はこれで満足しておくか。

こうして、私達は辻斬りを撃退したのだった。



「ハア……ハア……」

深い森の中で、一人の男が荒い息を吐く。

紅色の妖刀、紅桜を持った辻斬り、カゲトラだ。

「またしても……またしても某は、あやつに勝てなかった……まさか、手も足も出せんとは……」

カゲトラは今、敗北の味を噛みしめていた。

そして、己の過去へと想いを馳せ、フツと失笑する。

「呪いに見入られ、紅桜を手にしようと、結局何も変わらぬか。

なんと不様で情けない……」

カゲトラは、悔やむように、悔いるように、ただ苦しそうに笑った。

46 護衛依頼終了

爺さんを隣街に送り届け、商談が済むまで待ち、また護衛して王都に戻って来た。

そうして、やっと依頼達成。

その頃には、連休最終日の夕方になっていた。

なんか、無駄に疲れたな……。

こんな状態で明日から学校か。

気が滅入りそうだ。

「これで依頼は完了じゃな。本当に心から感謝するぞい。君達がいなければ、ワシは生きてはいなかったじやろう。

本当に、ありがとう」

無事に商会の前まで護衛し終えた時、爺さんに本当に助かったって感じで礼を言われた。

……まあ、辻斬りは逃がしたが、依頼人が無事でここまで感謝されたなら、今回の戦いは少なくとも無駄ではなかったと素直に思える。なら、いいか。

後の事は後で考えるところ、今は素直に喜んでくか。

「もちろん、報酬は弾むぞい！ それに感謝の気持ちを金だけで済ませるつもりはないわ！

何かあったら是非とも、このヤコブ商会を頼ってくれい！」

爺さんがドンと胸を叩きながら頼もしく宣言した。

そして、その直後、盛大に蒸せていた。

護衛の一人が爺さんの背中を撫でる。

うむ。

実に頼りないな。

だが、頼ってくれと言うのなら、素直に好意に甘えておこう。

ちようど、この爺さんに頼みたい事もある。

遠慮なく搾り取らせてもらおう。

「じゃあ、爺さん。剣を一本売ってくれ。できるだけ頑丈なやつを、できるだけ安く頼む」

「おお、そういえば君の剣は折れてしまったのだったな。

あいわかった。数日中には良い商品を見繕っておこう。

後日、また来てくれ」

「わかった。よろしく頼むぞ」

爺さんは、まるで孫でも見るかのような優しい目をしながら、私の願いを聞いてくれた。

まあ、前世まで含めれば私の方が歳上だと思うがな。

だが、なんにせよ、これで安値で名剣ゲットだぜ！

カゲトラとの再戦を考えれば、最低でも魔剣クラスに頑丈な剣の入手は必須だからな。

最悪、アレク辺りにたかろうかと思ってたが、安く手に入りそうではなかった。

そうして、爺さん達と別れ、依頼の達成報告の為に冒険者ギルドを目指す。

「リンネ殿！ この後、一戦どうでござるか？」

「一杯どうですかみたいに言うな。やらんぞ」

その途中でライゾウが話しかけてきた。

カゲトラとあれだけ戦っておいて、私とのバトルまで望むか。

重症だな。

というか、こいつは冒険者じゃないのだから、ギルドにまで付いて来る必要はないだろうに。

そこまでして私と戦いたいか？

「そこをなんとか！」

「い、や、だ！ 私は明日から学校なんだ！ これ以上疲れさせるな」

「ぐぬぬ」

それに、この後アレクに辻斬りの事を報告しとこうと思ってるんだ。

戦闘狂と遊んでいる暇はない！

「というか、そんなに強い奴と戦いたいなら、剣神に挑んだらどうだ？

もしかしたら、試合くらいなら受けてくれるかもしれんぞ？」

「それができるなら戦^やつてるでござる！　しかし、劍神殿に挑むのは主^{あるし}に禁じられているのでござるよー！」

ああ、なるほど。

まあ、たしかに、うっかりライゾウが勝って劍神が代替わりでもしたら、和国との国際問題になりかねないからな。

ライゾウに主なんてもんがいるなら、そりゃ止めるか。

……しかし、この戦闘狂に主か。

ちよつと会ってみたい気もするな。

きつと、苦勞しているのだろう。

「ですから、リンネ殿！　劍神殿の代わりに、どうか拙者と一戦！」

「断るー！」

そう。

まさに今の私のような！

「……ライゾウ。だったら、俺と戦ってくれないか？」

「シオン殿？」

私が断固として拒否していると、今度はシオンが口を開いた。

おお、友よ！

私の身代わりになってくれるとは、なんと友達想いな奴なんだ！

見直したぞ、シオン！

「今回の件で痛感した。俺はまだまだ弱い。だから、強いお前に鍛えてほしい。頼む」

おつと、どうやら私の為じゃなかったようだな。

だが、まあ、いいんじゃないか？

自分磨きをするのは良い事だ。

「む、指導でござるか。まあ、たまにはいいでござるなー！」

ライゾウも乗り気みたいだし、せいぜい仲良くやっつけ。

私は知らん。

ただ、シオンがライゾウみたいにならないように祈っておこう。

シオンよ。

自分のキャラは大切にな。

そんな会話を挟みつつ、ギルドに到着。

受付に報告して報酬を受け取り、その足でシオンとライゾウは訓練場に消えて行った。

さて、私も行くか。

「嬢ちゃん、ちよつと待て」

「ん？」

そうしたら、ドレイクに呼び止められた。

どうした？

「これだけは言つとこうと思つてな。

辻斬りにしてもなんにしてもそうだが、あんまり危ねえ事に首突つ込むな。

嬢ちゃんに何かあつたら、ジャックの野郎が悲しむ。

だから、もう少し静かに生きてくれ。頼むから」

「む……善処する」

たしかに、今回の事はドレイクにも心配をかけたし、うっかりカゲトラに負けて死んでたら、父や母を悲しませる結果になっていただろう。

遺される者の気持ちは、痛い程によくわかつてる。

戦う事は死と隣り合わせであり、今さらその生き方を変えるつもりはないが、死なない努力はする。

静かに生きる事に関しては……うん、善処しよう。

「信用ならねえなあ。まあ、嬢ちゃんの事も心配だし、俺はしばらく王都に留まる事にするぜ。

だから、何かあつたら頼れよ。いいな？」

「……ああ。わかった。約束する」

「よし。じゃあ、またな」

それだけ確認して満足したのか、ドレイクはギルドに併設されている酒場の方へと消えて行った。

やはり、ドレイクは良い奴だな。

それに、なんとなく父と似た感じがする。

私の保護者を気取ってるのかもしれない。

だが、悪い気はしない。

私も、ドレイクの事は、頼りになる親戚のおじさんみたく思っているのだ。

本人も言っている事だし、これからも存分に頼りにさせてもらおう。

そうして私は、悪くない気分でギルドをあとにした。



「という感じだったぞ」

「なるほど」

その後、私はナイトソード家に足を運び、アレクに事の顛末を説明した。

トーマスやメアリー、ユーリなんかは仕事中で、ここにはいない。アレクも仕事なんだが、事の重大さをかんがみて、一旦作業の手を止めて私の話を聞いた感じだ。

「まさか、リンネさんですら仕留めきれないとは思いませんでした。予想以上の使い手ですね、辻斬りは」

アレクが真剣な顔でそう言った後、「まさか、本当に遭遇するなんて……」と呟いていたのが少し気になったが、私がそれにツツコム前に、アレクは話を進めた。

「リンネさん。辻斬りと三おれたち剣士だと、どっちの方が強いと思えますか？」

「お前らだな。ちゃんと本気出して油断さえしなければ、十中八九、お前らが勝つだろう」

私は即答した。

あの辻斬り、カゲトラは確かに強い。

身体能力、技術、経験、どれを取っても超一流。

昔は和国で一、二を争う剣士だったと言われても、素直に信じられ

る本物の強者だった。

しかし、それでも弟子どもの領域には、あと一步届かない。

弟子どもやライゾウのような、剣神に手が届く最高峰の剣士達……すなわち、『最強』と呼ばれる領域には到達していない。

それが、奴と直接戦ってみた私の感想だ。

こう、上手くは言えないが。

あいつには、何かが足りない感じがした。

弟子どもやライゾウ。

もつと言えば、シオンやアリスからも感じる、最強に至らんとする剣士として必要不可欠な何かが、奴には欠けている。

そんな気がしたのだ。

それが、なんなのかはわからんがな。

あくまでも、私が直感で感じた事に過ぎない。

全くもって的外れな指摘である可能性も大いにある。

これについては、考えるだけ無駄だろう。

「まあ、なんにせよ、辻斬りが相当の凄腕だったというのは確かだ。

奴に一騎討ちで勝てる奴は、それこそ国内には私とお前くらいしかないだろう。

例外は外国人のライゾウだけだが、あれを当てにするのはやめとけ。

私以上の脳筋だ。連携なんて絶対に取れない」

「あ、はい。……リンネさん以上の脳筋？」

アレクは今一ライゾウの事が理解できていないようだが、まあ、構うまい。

あいつはカゲトラと違って敵ではないのだから。

そんなに気にする必要もないだろう。

「……しかし、そうなるって厄介ですね。

辻斬りがそこまでの使い手と判明した以上、手を打たない訳にもいきませんし、かと言って普通の騎士や兵士では倒せない。

俺達が出て行っても、神出鬼没故に捕らえられるかは怪しいところ……。

……頭の痛い問題です。大臣は、本当に厄介な手駒を持つてる」
「まったくだな」

いつその事、大臣とやらの屋敷に乗り込んで、直接ぶつ殺した方が早いんじゃないか？

とは思うものの、いくら私でも、確たる証拠もなしに公爵を殺つちまうのというは、さすがにヤバイと理解できる。

それだったら、アレク達が政治的に大臣失墜させるのを待った方が、まだいい。

それまでの間、カゲトラの影に警戒し続けるのは嫌だから、そつちは早めに対処したいとは思うが。

というか、今さらだが、なんであれ程の強者が大臣なんぞに協力してるんだ？

話してみた感じ、カゲトラは根つからの悪人という感じではなかった。

そんな奴が、何故にあのクソ虫の親に協力する？

？
案外、クソ虫はクソ虫でも、親の方はそこまでのクズじゃないのか？

……いや、ないな。

それだったら、アレク達が王家まで巻き込んで潰しにいく訳がない。
潰さねばならないような奴なんだろう。

そうなると、カゲトラの内心がますます謎だ。

……いや、奴がどう思っているも敵には違いないのだ。

なら、これも考えるだけ無駄か。

「……とりあえず、ユーリやマグマとも相談して、なんとか策を考えてみます。」

ただ、そんな上手い手が、そう都合良く出てくるとも思えないので、あまり期待はしないでください」

「わかった。それまでは引き続き警戒しておく」

「お願いします。くれぐれも気をつけてくださいね」

「ああ」

さて、話が一段落したところで、もうすっかり夜だ。

明日からまた学校だし、そろそろ寝るとするか。

「じゃあ、私はそろそろ風呂入って寝る。風呂と客間を借りるぞ。」

あと、明日の朝、学校までの馬車を頼む」

「風呂と客間はいいですけど、馬車の手配は自分でしてください」

「ケチめ。まあ、いい。そこら辺の奴にでも頼むか」

そうして私はアレクの執務室をあとにし、廊下を歩いていた使用人の一人に馬車の手配を頼んだ。

その後、風呂から出たら、当たり前のように着替えがフリフリの可愛いパジャマに変わっていたりしたが、気にする必要はない。

どうせ、メイド軍団の仕業だろう。

子供の悪戯みたいなものだ。

私は構わずフリフリのパジャマに着替え、明日からに備えて、客間のベッドにダイブしたのだった。

47 連休明け

翌朝。

「おはようー!」

馬車で学校へと戻って来た私は、教室のドアを勢いよく開けながら、元気良く叫んだ。

クラスメイト達の注目の視線が私に集中する。

まあ、私は目立つからな!

色んな意味で。

「あ、おはようございませす、リンネちゃん」

「アリス〜! 久しぶりだな!」

「えっと、まだ三日ぶりくらいですよ?」

私はいつも通りアリスに飛び付き、クラスメイト達の視線が、注目の目から微笑ましいものを見る目が変わった。

平和だなー。

まるで、辻斬り騒動が夢だったかのようだ。

そうして、私がアリスとのスキンシップを楽しんでいた時、教室のドアが開いて、そこからシオンが入ってきた。

ボロボロの姿で。

どうやら、ライゾウとの修行はハードだったようだ。

「おはよう、シオン。だいぶ派手にやったようだな」

「ああ」

「え!?! シオンさん、どうしたんですか!?! と、とりあえず、ヒール!」
心優しいアリスが、シオンの惨状を見て治療をかけた。
顔とかに付いていた傷が治っていく。

アリスに感謝するがいいぞ!

「助かる」

「それはいいんですけど……何があつたんですか?」

「別に何も無い。少し修行が激しくなっただけだ」

「え、ええつと……」

シオンの説明に納得してないのか、アリスが困ったように私を見て

きた。

説明してくれという事か！

アリスが私を頼っている！

任せろ！

「シオンは辻斬りとの戦いに付いて行けなかった事を気に病んで、凄まじく強い侍に修行をつけてもらっていたのだ！

だから、何も心配する事はないぞ、アリス！」

「えっと、心配の前にツツコミどころが多すぎるといいますか……本当に何があつたんですか？」

「おっと、説明不足だったな。」

私は、この連休中にあつた事をアリスに説明した。

一から十まで。

戦闘狂のライゾウの事や、心配性のドレイクの事。

そして、辻斬りことカゲトラが、クソ虫一家の刺客である可能性が高い事まで語った。

なにせ、もし本当にそうなら、アリスだって他人事ではないからな。カゲトラは、アリスの事も狙うかもしれない。

まあ、最後の最後に片腕斬り落としてやったから、しばらくは出てこないと思うがな。

失った四肢を復元するには、最高峰の治療術師でも一週間はかかる。

それまでは、おとなしくしてるだろう。

「そ、そんな事が!? それってつまり、私のせいでお二人が……」

「それは違う！」

それだけは断じて違うぞ！

「クソ虫に挑んだのも、辻斬りに挑んだのも、私達の意味だ！

お前が責任を感じる事ではない！」

「ですが……」

「それに、悪いのはどう考えてもクソ虫だ！ 責めるなら、自分ではなく奴を責めろ！」

そう言っても、アリスの表情は曇ったままだった。

しまった。

心優しいアリスに、ここまでの事情は話さない方がよかったか？

「リンネの言う通りだ。お前の責任じゃない」

「シオンさん……」

ん？

シオンが口を開いた。

慰めの言葉でも口にするのか？

「それでも気に病むのなら、今自分にできる事をして償いの代わりにすればいい。俺みたいにな。」

どうせ今の俺達には、自分にできる事をする以外に、強い奴らの役に立つ手段はない」

おい、なんだ、その後ろ向きな言葉は!?

と一瞬思ったが、言葉とは裏腹に、シオンの声には後ろ向きな感情など欠片も籠ってはいなかった。

むしろ、向上心に満ちている感じがする。

自分にできる事をやる。

シオンの場合は修行して強くなり、いつか私達に並び立ってやろうという強い意思を感じる。

そして、どうやらその熱はアリスにも伝染したらしい。

「自分にできる事を……そうですよ。私も頑張ります!」

胸の前で小さくガッツポーズを作る頑張り屋のアリスは、とてつもなく可愛いかった。

よくやった、シオン!

アリスをこんな可愛い状態にするとは!

まさに、お前にできる事をやった結果だな!

褒めてしんぜよう!

「……なんだ、その目は?」

「称賛の目だ」

「馬鹿にしてるのか?」

そんな事はないぞ。

断じてな。

そうしてお喋りをしている内に授業開始の鐘が鳴った。

そして、教室のドアが三度開かれ、そこから担任のユーリが現れる。

「そこ、静かにしなさい。ホームルームを始めるわよ」

ユーリに注意されてしまったので、私はしぶしぶアリスとのお喋りをやめた。

教室が静かになったのを見計らって、ユーリが再度口を開く。

「さて、入学式から約二週間。あなた達もだいぶ学校に慣れてきた頃でしょう。

もう少しすれば、あなた達にとって最初の山場である武闘大会が始まるわ。

それが終われば迷宮への遠征や中間試験と、イベントには事欠かない。

気を引き締めて臨みなさい」

『はい…』

クラスメイト達が騎士候補に相応しい揃った声で返事をした。

アリスやシオンも同じだ。

私だけ少しタイミングがズレた。

私って、実は騎士に向いてないのでは……。

そんな一抹の不安を抱きつつ、私は日常に戻ったのだった。



そして、昼休み。

「なるほど。そんな事がありましたの」

恒例となった、スカーレットとオリビアを交えたランチの時間。

二人に辻斬り騒動の話をしたところ、スカーレットからはこんな反応が返ってきた。

あまり驚いてないな。

「予想でもしてたのか？」

「まあ、予想はしてましたわね。騎士学校に潜伏させているオリビアからの報告で、フォルテが相当荒れている事は知っていましたから。」

親に泣きついて何かしてくるのではないか、とは思っていませんわ。

さすがに、こんなに早く、しかも、そんな強敵とぶつかるとは思っていないんですけどが……」

スカーレットは、少し憂鬱そうに顔をしかめた。

カゲトラの存在を、思ったより深刻に捉えているらしい。

まあ、気持ちはわかる。

あのレベルの戦力は、欲しいと思っただけで手に入るものではない。

それが敵の手駒の中にいて、しかも神出鬼没に現れて有力者を殺して回るといふのだから、その厄介さは政治的に考えると本当に厄介なのだろう。

政治方面に疎い私ですら、はつきりヤバイとわかるのだから相当なものだ。

「……まあ、わたくし達が憂鬱になっても仕方ありませんわね。」

切り替えていきましよう！」

スカーレットはそう言っただけでパンツと手を叩き、重くなりかけた空気を変えた。

さすが王女。

切り替えが早い。

そう。

スカーレットの言う通り、この件に関しては、私達がいくら悩んでも仕方がないのだ。

向こうは神出鬼没の辻斬りであり、こっちから仕掛ける事はできない。

それを釣り上げる策に関しても、完全にアレク達頼みだ。

当事者である私すらも、半分蚊帳の外。

つまり、学生がいくら悩んでも無駄。

ならば、難しい事は大人にぶん投げて切り替えるしかない。

昔、トーマスとかに仕事を投げていた私のように！

その辺り、スカーレットはよくわかっているな。

さすが王女。

上に立つ者は仕事の投げ方が上手い。

「さて！ 辻斬りに関しては身の安全に注意するしかないとして、明るい話題を出しましょう。

いきなりですが、明日の放課後あたり、皆でお出かけしませんか？
実は、フォルテが荒れているせいで騎士学校の生徒会の仕事が捗らず、しわ寄せがわたくしの方まできて、ストレスが溜まっているのです。

明日の放課後ならば時間が作れるので、気分転換に皆でお出かけしたいのですが、いかがでしょうか？」

スカーレットは楽しそうに微笑みながら、そんな事を言い出した。
ふむ、本当に話題を変えてきたな。

そして、お出かけか。

悪くない。

アリスとのお出かけ……！

「え？ でも、不用意な外出は危ないんじゃない？……？」

「いや、それは大丈夫だぞ、アリス。私がいる」

それに、最初にスカーレットと会った時のように、隠れ護衛も付いて来るだろうしな。

王女の護衛となれば、相当の腕利き揃いに違いない。

それこそ、全員で連携すればカゲトラの相手ができるようなレベルの。

私とそいつらが揃えば、何も心配する事はない。

それをアリスに伝えると、

「あ、それもそうですね。なら、私は構いません」と、参加を表明した。

やったぞ！

おじいちゃん、最近ちよつとした臨時収入があったからな。
色々買ってやろう。

存分に孫を甘やかすのだ！

「俺は遠慮しておく。女だらけの中に交ざる気はない」

「お、照れたか。このチェリーボーイめ」

「誰がチェリーだ」

お前だよ、シオン。

女性経験のまるでないチェリーそのものではないか。

私がお前くらいの頃は、既に恋人がいたぞ。

「まあ、チェリー云々は置いといて、お前も来い。荷物持ちだ」

「誰が行くか」

「リンネ様、荷物持ちでしたら私が」

と、ここまで背景だったオリビアが珍しく口を挟んできた。

それを見て、私はニヤリと笑った。

これはチャンスだ。

「聞いたか、シオン？ オリビアは立派だなー。それに引き換え、お前は女の子に荷物持ちを押し付けて逃げるのか？

なんと情けない。騎士にあるまじき情けなさよ。騎士ならば、紳士的にレディをエスコートしてみせろ！」

「……チツ。むかつく言い回しだ」

そうして、シオンは「行けばいいんだろ、行けば」と若干キレぎみではあるものの、参加を表明した。

よし。

これで全員参加だな。

やはり、こういうのは「皆」で行った方が楽しいだろう。

「あの、リンネちゃん、強制はダメですよ？」

「いいんだよ、アリス。これも修行だ」

戦場と日常のスイッチを切り替える為のな。

常時戦場モードでは事務仕事に支障をきたす。

だからと言って、常時日常モードでは戦えない。

騎士たる者、その切り替えが大事なのだ。

まあ、当然、そんな事は建前だけだな。

「では、決定ですわね！ 明日を楽しみにしていますわ！」

「おう！」

「はい、そうですね」

「……はあ」

シオンだけはため息を吐いたが、黙殺する。

美少女四人とデートできるといふのに、何が不満だと言ふのか？

実に女っ気のない奴である。

何はともあれ、こうして私達は、放課後息抜きデートに行く事になったのだった。

48 お出かけ

そうして、次の日の放課後。
お出かけデートの時間。

王都の中央通りにある人気の服屋において、私はフリッツフリのワンピースを着ていた。

「どうだ☆」

「うっ、吐き気が」

目元にワンピースを作って可愛いアピールをしてみれば、私のあまりの美少女オーラにやられたのか、シオンが口元を押さえて顔を青くした。

うむ。

我ながら、凄まじい破壊力だな！

「シオンさん！失礼ですよ！」

「よくお似合いですわ、リンネさん！」

アリスがシオンを叱り、スカーレットは普通に褒めてくれた。

オリビアも、珍しく自分の意思を見せてコクコクと頷いている。
ふむ。

悪くない気分だ。

私の中にも、年頃の少女としての感覚が少しはあるのかもしれない。
な。

このお出かけデートの主導権を握っているのはスカーレットだ。
発案者である事以上に、スカーレット以外に舵を切れる奴がいなかったという理由がある。

私は年頃の連中がこういう時どうするのかわからんし、シオンはボツチ気質、オリビアは自己主張がない。

唯一アリスだけは可能性があったが、普段から出かける時はスカーレットに進行を任せているらしく、無理に自分が仕切ろうとは思わなかったようだ。

結果、外出先はスカーレットの意見が採用され、この女性用の服屋

にやって来た訳だ。

そして、何を思ったのか、スカーレットはまるでナイトソード家メイド軍団のごとく、私を着せ替え人形にして遊び出した。

私が女っぽい私服を一着も持っていないと言ったら、何故かスカーレットの鬪志に火が付いてしまったのだ。

私は当初なされるがままになっていたが、アリスがおずおずと参戦してきて、スカーレットに協力したところで、やる気に火が付いた。

ノリノリで着せ替え人形からモデルへと転職し、そこまでいくと何故かオリビアまで参戦してきて、ファクションショーは盛大に盛り上がった。

シオンだけを蚊帳の外にして。

まあ、奴には審査という重要な役目があるんだがな。

その役目を果たしているかは、正直、微妙なところだが。

代わりに、アリスに聞いてみよう。

「アリス、どう思う?」

「とつても可愛いですよ」

「よし、買おう!」

即行で購入を決意する。

こういう服を着る機会はあまりないが、アリスが褒めてくれるのならば、何着か持つていても損はあるまい。

「まったく! リンネさんは素材が良いのですから、磨かないのはもったいないですわ!」

いくら以前が以前でも、今は今! もっと女の子としての自覚を持ち、女の子としての魅力を磨いても罰は当たりわせんわよ!」

「む」

スカーレットの言葉に、少し考える。

たしかに、私は元男だが、今は母の美貌を受け継いだ美少女。

その魅力を磨かないのはもったいない、いや、母に対して失礼ではないだろうか?

これからは、もう少し認識を改め、少しは女らしくするべきかもしれない。

「……勘弁してくれ。女らしいリンネなんて鳥肌が立つ」

「シオンさん！」

まあ、シオンもこう言ってる事だし、女らしくは気が向いた時でいいか。

とりあえず、今日はアリスに進められた服を数着買うだけにしておこう。

そうしよう。

そうして買い物を終え、再び街へと繰り出した。

ちなみに、今着ているのは、ミニスカートがキュートなフアツションだ。

そして、履いてみてわかったが、ミニスカートって動きやすいな。

少しスースーするが、普段履いているシヨートパンツすら上回る動きやすさ。

いつそ、普段着にしてみようか？

悩むな。

そんな事を考えつつ、他の四人と喋りながら街並みを歩く。

シオンは荷物持ちだ。

さすがに、女四人に男一人という構成で、男一人であるシオンが荷物を持たないという選択肢はなかった。

もし拒否していれば、街行く人々から冷たい視線で見られていた事だろう。

そんな感じで歩いていたら、ふと、人だかりを見つけた。

道行く人々が足を止めて、その場に留まっているのだ。

なんぞ？　と思つて近づいてみると、近づくとつれて楽器の音色と歌声が聞こえてくるようになった。

どうやら、吟遊詩人が演奏しているらしい。

そして、人だかりが出来る事からもわかる通り、結構上手い。

耳に残る美声だ。

「せっかくですし、少し聞いていきましようか？」

スカーレットの提案により、私達もまた他の通行人と同じく足を止

めて演奏に聞き入った。

「どうやら、この歌の題材は前世の私、『剣神』エドガーの物語のようだ。」

私が剣神になる前の話、『剣姫』シャロットこと、シャロとのラブストーリーを歌っている。

今は、敵に拐われたシャロを私がカツコよく救い出すシーンだ。

使い古された題材だが、歌い手の腕が良いのか、感動的な良い曲に仕上がっている。

「これって本当の事なんですか？」

その演奏を聞いたアリスが小声で質問してきた。

モデルが目の前にいるという事で、気になったらしい。

「本当の事だぞ。まあ、かなり脚色が入っているがな」

この歌に登場する私はやたらとカツコよく、シャロがやたらと素直で可愛らしいが、まあ、嘘は語っていない。

史実と言えば史実だ。

「へ〜！」

それを聞いたアリスは、興味津々といった感じで歌を聞く事に集中した。

さすがに、ここまで美化された歌を孫に聞かれるのは、少しこそばゆいな。

逆に、シオンは実に胡散臭いものを見る目で私と吟遊詩人を見ている。

「そこまで疑われると、それはそれで腹立つ。」

そうしている間に演奏が終わった。

場は拍手喝采に包まれ、吟遊詩人目掛けて大量のお捻りが舞う。

私も金貨を投げておいた。

孫を楽しませてくれた礼だ。

遠慮なく受け取るがいい。

「ありがとうございます。では、好評につき、もう一曲歌わせていただきますしよう」

お捻りを投げて立ち去ろうとしたが、その言葉を聞いて私達の足は

止まった。

そして、吟遊詩人は楽器を構え、次の曲名を口にする。

『若き英雄達の歌』

そうして歌われ出したのは、遠方で活動する若き冒険者パーティー『英雄の剣』をモデルとした歌。

『英雄の剣』。

かつて、今世の私が幼馴染達と共に結成した冒険者パーティーだ。しかも、歌の内容は私の知らない出来事だった。

つまり、この歌は私達が脱退した後の『英雄の剣』の活躍を歌っている。

内容は、どこかの迷宮を面白おかしく攻略する物語。

実にあいつらしい。

「あいつらも元気でやってるみたいだな」

「……ああ」

私の独り言に返事があった。

返事したのはシオンだ。

やはり、幼馴染として、元パーティーメンバーとして、あいつらの現状は気になるらしい。

「お知り合いですか？」

「ああ、幼馴染だ。私とシオンもこのパーティーに入ってたんだぞ」

「あ、そうだったんですか」

「そういえば、聞いた事がありましたわ。『天才剣士』が所属していたパーティーの話。」

なるほど、彼らがそうなのですね」

それを聞いた事で、アリス達の歌への関心が高まったらしい。

さっきの私の歌の時と同じくらい、真剣に聞き入っている。

まあ、この歌もベル達の活躍がコミカルに表現されていて、聞いて楽しい。

やはり、この吟遊詩人は良い腕している。

そんな感じで、再び演奏が終わった。

またも拍手が巻き起こり、お捻りが宙を舞う。

私も、もう一度お捻りを投げておいた。

今回は銀貨だ。

あいつらの歌に金貨を払うというのも変な気分だったので、ちよつとケチツた。

すまん、吟遊詩人。

そうして演奏は今度こそ終わり、吟遊詩人は大量のお捻りを持ってホクホク顔で帰って行った。

私達も、これ以上この場所に留まる理由もないので、お出かけデートを続行。

色々な店を周り、女の買い物（特に王女というセレブの買い物）がいかにも凄まじいかを身を持って体験し、荷物持ちが闘気を解放しなければならぬ事態になった。

それでも、なんだかんだで楽しい時間だった。

しかし、それもそろそろ終わりだ。

日が傾いてきている。

辻斬りが出没する昨今、夜の外出は危ない。

つまり、お出かけデートはここまでだ。

元々、放課後の時間を使っていたが故に、あまり長時間の外出は無理だったのだ。

こればかりは仕方がない。

「さて、では帰るか」

「はい」

「そうですね」

「やつと、終わった……」

約一名、荷物持ちの生気がなかったが、まあ、気にする事はあるまい。

シオンは、この程度でくたばるような男ではない。

放置すれば、明日には元気になっているだろう。

「リンネちゃん、今日は楽しかったですか？」

帰り道で、ふとアリスがそう尋ねてきた。

もちろん、答えは決まっている。

「ああ！ 凄く楽しかったぞ！」

私は、心からの笑顔でそう言った。

辻斬りのせいで、どうしても少しピリピリしていた心が洗われたような気がする。

良い息抜きになった。

是非とも、また皆で来たい。

「それは良かったです」

私の返事を聞いたアリスは、とても優しく微笑んだ。

まるで、心のつかえが取れたかのような笑顔だった。

……もしかしたら、アリスは私達が辻斬りと対峙した件を、まだ気にしていたのかもしれない。

気にするなどは言ったが、それでも気に病んでしまう優しい子だという事は知っている。

もし、こうして元気な姿を見せた事で、アリスの心に安心を与えられたのなら良かった。

なんととはなしに、そんな事を思った。



そして外出を終え、皆で学校へと帰り、それぞれ寮の部屋へと戻った後の事だった。

「あー！」

私はある用事を思い出した。

別に今日やらなければならぬ用事ではない。

だが、なるべく早く済ませたいと思っていた用件だ。

まだ日は沈んでいない。

急げば、すぐに戻って来れるだろう。

「行くか」

即決即断。

私は再び寮を飛び出し、駆け足である場所へと向かった。目的地は、とある商店。

王都の中でもかなり大きく、様々な商品を扱っている有名店だ。受付で名前を告げ、しばらく待つ。

そうすると、従業員に上階の部屋へと案内された。

そこには、何人かの護衛を連れた、一人の老人の姿が。

「爺さん、来たぞ」

「おお！ 待つとつたぞ、リンネちゃん。

さあさあ、約束通り、良い剣を揃えておいたぞい」

そう言つて従業員に指示し、色々な剣の積まれた台車を運ばせている老人の名は、ヤコブ。

辻斬りことカゲトラと遭遇した事件において、私達が護衛していた商人だ。

カゲトラの狙いは私だったようだが、タイミング的に本来の狙いはこの爺さんだったんじゃないかと、私は睨んでいる。

まあ、それはともかく。

私は、爺さんが約束通り用意してくれた名剣の数々を物色していった。

一本一本振つてみて、自分に合うかどうかを確かめる。

その結果、次の愛剣候補は三本にまで絞られた。

「うーむ……悩むな」

そう呟きながら、もう一度一本ずつ手に持って確認する。

今度は、爺さんが剣の解説を入れてきた。

「それは世界最硬と言われる鉱石、アダマントタイト鉱石を素材に作られた剣じゃな。

耐久性において、その剣の右に出るものはないじやろう」

そんな解説をされたのは、飾り気のないシンプルな形状をした剣。

世界最硬の鉱石を使っているという話だが、見た目は普通の剣だ。

質実剛健と言った感じで私好みではあるが、少し刃渡りが長く、今の身体に合わない。

まあ、このくらいなら、振ってる内にすぐ慣れるとは思うのだが、そこが決めかねている理由だ。

アダマンタイト製の剣を置き、次の剣を手取る。

「黒剣。武具の素材として優秀な金属、黒鉄くろがねを使った剣じゃな。

アダマンタイトには僅かに劣るが、強度は保証付き。

何より、黒鉄特有の凄まじい破壊力を秘めておる。

それもまた、おすすめ商品じゃな」

次に手に取ったのは、漆黒の剣身を持った剣。

大きさはアダマンタイト製と同じくらい。

しかし、重い。

黒鉄特有の重さがある。

闘気を纏えば問題なく扱えるレベルだし、これが破壊力の秘訣なんだろうが……微妙に好みと合わないな。

次だ。

私は、最後に残った剣を手取った。

「それが一番のおすすめじゃぞ。なにせ、その剣は魔剣じゃ！ それも、かなり高位のな！

さすがに十剣には劣るが、それがワシの店にある中で最高の剣であると断言しよう」

爺さんの言う通り、その剣は魔剣だった。

意識して使えば、魔剣特有の擬似闘気が私を包み込む。

爺さんの言葉に嘘はなく、私の目利きが正しければ、この剣は相当

高位の魔剣だ。

おそらく、格としてはドレイクの持っていた剣と同格のレベル。

普通なら、金貨何千枚という価値があるだろう。

それを、爺さんは格安で売ってくると言っている。

それでも相当の額にはなるが、S級冒険者の稼ぎを持ってすれば、払えなくはない額だ。

しかし、

「うーむ……」

私は悩む。

硬度ならばアダマンタイト製。

破壊力ならば黒剣。

性能重視ならば魔剣だ。

魔剣に関しては、擬似闘気を纏えば硬度の面でも他の二つを超えるだろう。

だが、しかし。

魔剣には大きな欠点がある。

今の私は自分の闘気の反動にすら耐えられず、全開の闘気に耐えられる時間は約十分しかない。

そこにこの魔剣による擬似闘気を上乘せすれば、その制限時間は一気に縮むだろう。

一分か、二分か。

おそらく、その程度の時間しか全力は出せない。

切り札としてはアリだが、一分でカゲトラを倒せるかと言われると

即答はできない。

やはり、魔剣はなしだな。

そうじゃなくても、普通に高いし。

そうなってくると、残るはアダマンタイト製と黒剣の二つ。

どちらも一長一短だ。

おそらく、どちらを選んでも総合的には大差ないだろう。

ならば、自分の好みを優先するか。

「よしー。決めたー」

私は次なる愛剣を再び手に取った。

選んだのは、アダマンタイト製の剣。

どことなくグラムを思わせる、シンプルな剣だ。

やはり、私にはこういうのが合っている。

刃渡りに関しても、私が成長期である事を加味すれば、すぐに身体に合うようになるだろう。

よし、お会計だ。

「ふむ、それでいいのかね？」

「ああ。これに決めた」

「ふむ。ワシとしては魔剣を選んでほしかったが、まあ、自分で決めたのが一番じゃろうな。」

よし！ サービスしてやろう！」

「おおー。貰えるのか？」

「そんな訳あるかい！ 値引きするだけじゃない！」

そんな訳で、私は新たな愛剣を手に入れた。

お値段は金貨二十枚。

中々の大金だが、剣の性能を考えれば破格の値段と言っている。

私は爺さんに礼を言い、ホクホク気分で店を出た。

しかし、ここで誤算に気づいた。

「……少し時間をかけ過ぎたな」

私が店を出た時には、もうすっかり夜になっていたのだ。

まあ、気をつけて帰れば大丈夫だろう。

襲ってくる輩がいれば、愛剣の試し切りをしてやる。

そんな感じで夜道を歩く。

若い美少女の一人夜歩き。

そこはかたなく危険な匂いがするが、私はあえて堂々と歩いた。

私はロリーな美少女だが、元剣神である。

警戒はしても、過剰にビクつく必要はない。

そうして歩いている内に、前方から不審な奴が歩いて来るのが見えた。

ボロい外套で全身を隠した奴だ。

身長やシルエットから男だとわかる。

だが、フードを目深に被って顔を隠した様子は、不審者の一言に尽きる。

こんな時間帯に出歩いている事といい、実に怪しい。

私はそいつと普通にすれ違い、——その直後、そいつの首筋に新しい愛剣を添えた。

「こんな所で何をしている？ 指名手配犯」

「なに、ただの散歩だ。外を出歩くなどとは言われていないのでな」

その男は、首筋に剣を当てられた状態にも関わらず、至極冷静な声

で返答した。

私に、現時点では戦う気がない事を見抜いているのだろう。

さすがに、こんな街中でこいつと戦えば、周囲がどうなるかわからんからな。

まあ、それもこいつの対応次第ではあるが。

「数日ぶりだな『天才剣士』。ここで会ったのも何かの縁。少し話さないか？」

そう言っつて不審者は私の方に振り向いた。

フードの中に見える、色素の抜けた白髪。

目の下のどす黒い隈。

風にはためく外套は、左腕の部分の袖が大きく風に流され、その中身が存在していない事を指し示している。

その不審者の正体は、数日前に私達と死闘を繰り広げた辻斬り。

堕ちた侍。

カゲトラに他ならなかった。

49 カゲトラという男

私達は場所を移し、人気のない公園へとやって来た。

それでも、私達が本気で戦い、広範囲攻撃でも繰り出せばかなりの被害が出るだろう。

だが、街道の真ん中よりは、まだマシだ。

ここならば、少しは落ち着いて話とやらができる。

場合によっては、そのまま戦闘に突入だ。

腕を失って弱体化している今の内に、倒せるならば倒してしまいたい。

「それで？ お前は私に何を語ってくれるんだ？」

「そうだな……とりあえず聞きたい事を聞くがいい。答えられる事ならば答えてやろう」

カゲトラは公園のベンチに座りながら、まるで戦意を見せずにそう言った。

いったい何を企んでいるのやら。

全く読めない。

ならば、まずはそこから聞くべきか。

「とりあえず、お前の目的はなんだ？」

「目的？ 特にない。」

気分転換に散歩をしていたらお前に会った。

ちようど誰かと何かを話したい気分だったが故に、こうして世間話に誘った。

本当にそれだけだ」

そう語るカゲトラの顔には、表情がない。

本当か嘘かわからんな。

だが、カゲトラが戦意や殺気を見せないのも、また事実。

代わりに隙も見せないがな。

ここまでの、どのタイミングで斬りかかっても、おそらく仕留める事はできなかつただろう。

とりあえず、その隙を見せるまでは会話を続けるか。

なら、せつかくだ。

ずつと気になっていた事を聞いておこう。

「じゃあ、次だ。前々から気になってたんだが、どうしてお前程の強者が大臣なんぞに従う？」

「……そうだな。あえて言うのであれば、義理があるからだろう」

「義理？」

「ああ。今の主には義理がある。あとは侍としての最後の意地といったところか。

どんな外道であれ、主君を裏切りたくはない。

まあ、国を捨て、將軍様を裏切った男が今さら何を言っているのかとも思うがな」

カゲトラは、酷く自虐的に笑った。

傍目に見ても心を痛めているのがわかる。

心の乱れ。

すなわち、隙だ。

可能性こそ高くはないが、今、剣を振るえば、その首を飛ばせるかもしれない。

だが、私はそうはしなかった。

少しだけ、この男の抱える事情に興味がわいてしまったのだ。

敵に情けは無用。

深入りも禁物。

そんな事はわかっている。

それでも、私はこいつの事が気になった。

それというのも、私はこいつが悪人だとは思えなかったからだ。

前に戦った時も、もっとやりようはあった筈なのに、こいつは正面からの真っ向勝負しかしてこなかった。

たしかに、殺しにきていた。

だが、あの時、語っていた言葉に悪意は感じなかったのだ。

悪でなくとも敵は敵。

敵のままにいるならば、斬らねばならない。

それでも、こいつの言う通り、ここで会ったのも何かの縁だ。

この悪ならざる強敵の事を、少しは知っていてもいいのではないか
と思つた。

「……ライゾウから聞いたが、お前、元々は和国屈指の剣士だったんだ
ろう？」

「そもそもこの話、そんな奴が何故国を捨てた？」

「おそらく、この質問の答えが全ての元凶なのだという確信があつ
た。」

落ちぶれた強者を、今のカゲトラを作つた原因。

立派な侍を、こんな幽鬼のような辻斬りにしてしまつた出来事。

そんな核心に触れる質問を、私は投げ掛けた。

「……某は、元々貧しい家の生まれであつた」

カゲトラの口から出てきたのは、一見、質問とは全く関係のないよ
うな答え。

だが、私にはわかつた。

カゲトラは、事ここに至つてしまうまでの全てを、話そうとしてい
るのだと。

「物心ついた時には父はおらず、母は身体を売つてなんとかその日生
きるだけの金を稼いでいた。」

母はいつも辛そうな顔をしていたものだ。

やがて、そんな母も病で死に、某は行き場のない孤児みなしごとなつた。

幼い身体で必死で町を歩き回り、ゴミを漁り、誰かから盗み、なん
とかその日を生き抜く為の糧を手に入れる。

今思い返しても、地獄のような日々であつた」

それは……私にも少し経験のある話だ。

帝国に故郷を滅ぼされ、それからシャロに拾われるまでの間に私が
経験した事と同じ。

もつとも、私は帝国から逃げる為に魔物がひしめく森の中を逃げな
がら生活していた時間が長く、完全に同じ境遇という訳ではない。

それでも、凄まじく共感できる話である事に変わりはない。

「そんな日々を送る中で、某は思つていた。」

いつか、いつの日か、こんなゴミ溜めから抜け出し、這い上がり、成

り上がってやると。

往来を我が物顔で歩く、あの侍達のようになってやると思った。

その為には力がある。国に己を認めさせる程の力が。

そうして、某は力を求めるようになった。

それが全ての始まりだ」

なるほど。

カゲトラはそういう考え方をしたのか。

私は、シャロに拾われるまで、生きる事に必死すぎて、その日をどうやって生き抜くか、それ以外の事を考えるという発想自体がなかった。

だが、気持ちはわかる。

どこかで少し考え方が変われば、私も似たような思考に行き着いていた可能性は高い。

それに、方向性こそ微妙に違えど、最終的には私も力を求めた。

私とカゲトラの人生には、本当に被るところが多い。

まあ、それくらいに、ありふれた悲劇の形なのかもしれないが。

「そして、某は必死に己を磨いた。

生きる為に奔走する傍ら、ゴミの中から刀の代わりになる棒を見つけて出し、道場の稽古を外から盗み見て、なんとか真似しようとした。

空腹を堪え、寝る間を惜しみ、努力を重ねた。

自惚れになるかもしれないが、誰よりも努力したという自負がある。

——その甲斐あって、腕試しと賞金目当てに参加した武道大会において、某の剣の腕は將軍様の目に留まり、下っ端としてだが家臣として召し抱えられた」

「ほう」

將軍とは、たしか和国における国王の事だったか？

王の目に留まるとは、その時点で相当強かったんだらうな。

「そこからは順風満帆、とまでは言わぬが充実した生活だった。

下っ端の仕事はキツかったが、ゴミを漁る生活に比べれば極楽も同然。

家臣の中には当然、某よりも強い者が数多くいて、負けぬようにと

尚一層鍛えたものよ。

それまでと違い、正式な教えを受ける事ができた事で、某はみるみる内に強くなつていった。

そうしている内に仲間も出来た。

更に時間が経てば某は出世し、慕ってくれる部下達も出来た。

当然、辛い事も多い。

生まれや育ちから馬鹿にされる事はあつたし、足を引つ張られる事もあつた。

その被害が仲間達や部下達に行つてしまう事もあつた。

それでも、その仲間達や部下達、そして某を見出だしてくださった將軍様の為にと、至らぬながらも努力を続ける日々は楽しかった。

今思えば、某の人生の中で最も幸福な、輝かしい夢のような時であつたわ」

カゲトラは遠いどこかを見ながら、本当に大切な思い出を語るように言った。

いや、ようにではないな。

本当に大切な思い出なんだろう。

実際、今の落ちぶれた姿からは想像できない程に、カゲトラの語つた話は夢と希望に満ちている。

……だが。

「そんな奴が、どうしてここまで落ちた？」

そう。

いかに輝かしい思い出であろうとも、思い出は思い出。

過去の出来事に過ぎない。

つまり、カゲトラはそんな幸せを失つて今に至るのだ。

この、大臣などというゴミの使いつぱしりという現状に。信じられない程の落差だ。

本当に何があつたら、こうなる？

「……全ては、某の心の弱さが招いた事よ。

お前はシデンイン・ライゾウに某の事を聞いたと言つたな。

ならば、この刀の事はどこまで聞いている？」

そう言つて、カゲトラは外套をはだけさせ、腰に差した一本の刀を私に見せた。

鞘に収まっているが、わかる。

この刀は、紅桜だろう。

私の先代愛剣を叩き斬つた『妖刀』だ。

「……ライゾウからは『呪われた国宝』と呼ばれる曰く付きの刀としか聞いていない。

どうも、あいつも詳しくは知らないみたいだったがな」

「そうか」

カゲトラは軽く頷き、話を続けた。

「ならば、某が教えよう。この刀が何故『妖刀』と呼ばれているのかを。そして、その危険性をな」

話が変わつた……訳ではないのだろうか。

どうやら、カゲトラの失墜に、この刀が絡んでいらしい。

「まず最初に、この刀は持ち主の精神を蝕む。

一度握れば、目につく全てのものを斬り裂きたい衝動に駆られ、返り血を浴びる事を何よりの喜びと感じてしまう。

そして、完全に呪われてしまえば、持ち主はそのあまりの切れ味に依存し、己の意思で手放す事すらもできなくなる。

この刀の紅色の刀身は、そうして吸い上げた血の色。

故にこそ、この刀は『妖刀紅桜』と名付けられた」

「……なるほどな」

呪いの武器。

それも一際強力な。

この世界には、使い手に悪影響を与える呪いのアイテムが数多くあると言われている。

紅桜もその一つという事だ。

正直、ライゾウが「呪い」という言葉を使つた時点で、なんとなく、そんな気はしていた。

だが、その手のアイテムは、使い手の精神力次第で弾き返す事ができる。

カゲトラ程の達人剣士を狂わせる呪いという時点で、紅桜がいかに危険な代物かという事がよくわかる。

それでも、そんな危険性を差し引いても、紅桜は優秀な武器だったのだろう。

何せ、紅桜は『十剣』の一つ。

そして、十剣の名が世界に知れ渡ったのは、侵略戦争時代。

帝国の猛威に、なんとしてでも立ち向かわなければならなかった時代だ。

和国は帝国の侵略に耐えきった強国だが、その戦いが激しかったであろう事は考えるまでもない。

きつと、呪いの力にでもなんでも頼らなければならなかったのだ。

だからこそ、紅桜なんて危険物が今日こんにちまで残された。

呪われてはいても、国を守る大切な『国宝』として。

「某が最初に紅桜を手にしたのは、十年前の事であった。

当時、和国で暴れまわっていた厄災の魔物、邪龍を討伐する為の戦力の一人として某は選ばれ、その際に一時的に紅桜を預けられた。

某であれば呪いを御せると、將軍様にそう信頼されて」

で、期待を裏切ってしまったと。

それで歪んだ、いや、狂ったのか？

「幸い、その時は呪いに打ち勝つ事ができた。

呪いを御して邪龍を倒し、己の手にへばり付いて離れない紅桜をなんとか引き剥がして、国へと返した」

ん？

なら、カゲトラが狂ったのは、その時じゃないのか？

では、何故？

「某がこうなったのは数年前だ。

切欠は……下らない、今考えれば実に下らない出来事であった」

カゲトラは、自虐するように、当時の自分を蔑むように、その時の事を話した。

本当に苦しそうな、より一層生気のなくなった顔で。

「あれは御前試合での事。

將軍様の前で日頃の鍛練の成果をお見せする場での事だ。

そこで某は、——当時18の若造に完膚なきまでに叩きのめされた。

名門シデンイン家きつての天才と謳われた、シデンイン・ライゾウにな」

おい!?

まさか、まさか、お前か、ライゾウ!?

お前が全ての元凶か!?

「あれは衝撃であった。

まるで、今までの努力全てを否定されたかのような気持ちになった。

完膚なきまでに叩き潰しておきながら、「凄く強かったでござる!

また戦いましょうぞ!」と満面の笑みで言ってくるシデンイン・ラ

イゾウに、本気で腹を立てたものだ」

な、なんという死体蹴り……。

いや、ライゾウには全く悪気がないんだろうとは思う。

ただ、無自覚に惨い事やってんなとも思った。

「そこで某は思ってしまったのだ。

某は努力で這い上がってきた凡人に過ぎず、奴は天に愛された本物の天才であったのだ、とな。

今思えば、敗北を才能のせいにするなど、全くもって愚か極まりない」

いや……カゲトラはこう言うが、実際どうだろうか?

私がカゲトラと戦って感じた、こいつには何かが足りないという感覚。

それが才能だと言われれば、ストンと腑に落ちる。

落ちてしまう。

おそらく、カゲトラも口では愚かと言いつつ、内心ではその事実を正しく認識しているのだろう。

だから、あの時、

『某は、お前が……』

私と戦っていた時、カゲトラは少しだけ、ほんの少しだけ、羨まし
そうな顔で私を見た。

「某がこうなったのは、奴との戦いから少しした頃だ。

幼い頃より強くなる事を考えて生きてきた。

その果てに初めて直面した、どうしようもないと感じてしまった才
能の壁。

挫折、だったのだろうか。

その心の隙に、呪いはスルリと入ってきた」

……なるほどな。

そういう事だったのか。

「気づけば、常に紅桜の事を考えるようになっていた。

シデンイン・ライゾウとの圧倒的な才能の差。

紅桜があれば、その差を埋められるのではないか？

そんな考えが頭に浮かぶようになり、紅桜が夢にまで現れ……心が
弱っていた某は、遂に呪いの誘惑に屈した。

嚴重に保管されていた紅桜を盗み出し、和国を去った。

馬鹿な事をしたものだ。

いくら力があつたところで、仲間も部下も主まで捨ててしまつて
は、なんにもならないというのに」

力だけでは、強さだけではどうにもならない。

力だけあつても、力を振るうべき理由を失ってしまえば、なんの意
味もない。

哀れだ。

この男は、実に哀れだ。

「そうして某は全てを捨て、紅桜の命じるままに、目につくものを斬り
続けた。

どんどん正気を失い、無理に戦い続けたせいで体力も弱り、心労の
せいか姿もこんな有り様になって……いっそ、そこでのたれ死んでい
た方がよかったのかもしれない。

だが、天は某を生かした。

疲れ果て、どこぞの森で倒れ伏していた時、拾われたのだ。今の主

に」

ああ、それが大臣か。

そうして、今に至るといふ訳だ。

「その後は、今の主の命に従い、命じられた者を斬った。

命の恩は返す。義理は果たす。

だが、そんなものは建前に過ぎん。

本当は、呪いに取り憑かれ、嫌でも振るわれる刃に、せめて理由が欲しかったというだけ。

虚構でも、主の為に刃を振るっていると思いたかった。

それが某の最後の意地という訳だ」

……いくらなんでも、哀れに過ぎるだろう。

ここまで来ると、もはや呪いという言葉では生ぬるい。

呪縛だ。

カゲトラは縛られている。

呪いに、そして自責の念に。

ならば、いっそ、

「ここで殺してやるのが救いかもしれないな」

私は、無意識にそう呟いていた。

「……かもしれない。殺ってくれてもいいのだぞ？」

「いや、無理だろう。できなくはないが、ここで戦えば被害が大きくなりすぎる」

それに、私はまだ新しい剣に慣れていない。

代わりに、カゲトラは片腕を失っている訳だが……周囲を巻き込まないように戦った場合、勝率は低くもないが、高くもないといったところだ。

賭けに出る場面かと問われれば、即答はできん。

最初は、隙を突けば被害を出す前に一撃で殺せるかと思っただが、今の話を聞いて無理だと悟った。

おそらく、カゲトラ自身がいくら隙を晒そうとも、

いや、いっそ私に首を差し出したとしても、

紅桜の呪いがカゲトラの体を操り、勝手に戦い出すだろう。

カゲトラに隙があっても、紅桜に隙はないという事だ。

「そうか。ならば、某はもう行く。」

あまり長く王都を彷徨くと、主に叱られるのでな」

「ああ、そうかい。なら、とつとと行け」

お喋りは終わりという事だ。

カゲトラはベンチから立ち上がり、重い足取りで去って行く。

まるで、見えない鎖にでも縛られているかのような、苦しそうで辛

そうな足取りだった。

だからか、私は、

「カゲトラ！」

去り行くカゲトラの背中に、声をかけていた。

「こんな所で会ったのも何かの縁。

そのよしみだ。

次に戦場で会った時は、私が責任持って殺してやる」

本心からの言葉だった。

カゲトラは敵だ。

敵を助けようとする程、私はお人好しではない。

だが、敵ならば敵らしく、殺してやる事はできる。

殺して、呪いから解放してやる事はできる。

それが、この哀れな剣士の救いになると信じて、剣を振るおう。

間違えてしまったこいつの分まで、私は正しく刃を振るおう。

そんな事を思った。

そして、私の言葉を聞いたカゲトラは、

「フツ。楽しみにしている」

少しだけ穏やかそうな顔で小さく笑って、夜中の公園から消えて行った。

それを見届けてから、私も寮へと帰る。

次にあいつと会う時に備えて、気合いを入れ直しながら。

そうして、偶然に出会って発生した真夜中の会合は、終わりを告げたのだった。

50 試し斬り

「という事があった」

「……マジですか」

「うむ。マジだ」

翌日の放課後、私はまたもナイトソード家を訪れ、昨日の出来事をアレクに話していた。

ちなみに、学校ではアリス達にも話している。

もつとも、カゲトラの詳しい事情とか知っても、斬った後の後味が悪くなるだけだろうから、そこまでは話していないがな。

昨日の夜カゲトラに遭遇して、改めてあいつを殺す、いや、殺してやる決意を固めたとしか言っていない。

それはアレクに対しても同様だ。

まあ、アリス達には、何ナチュラルに危ない事やってんだと叱られたが。

「とりあえず、リンネさんが無事で良かったです。

あと、街が無事で本当に良かったです」

「後の方が本音だろ？」

「ええ、まあ。リンネさんは殺しても死にそうにないので」

お前、私が死んだところ見てるよな？

なのに、何故にそんな感想が出てくるのか。

不思議でならない。

「まあ、それはともかくだ。早く新しい剣に慣れたいから、練習相手になってくれ」

「あ、その為に来たんですね」

「その通りだ」

決して、世間話しに来た訳でも、決意表明を聞かせに来た訳でもない。

単純に、真剣での練習相手にアレクがちょうど良かっただけだ。

学生組に真剣を向けるのはマズイからな。

最初は、冒険者ギルドに行つてライゾウでも捕まえようかとも思っ

たんだが、シオン曰く、ライゾウはカゲトラを探して当てもなく走り回ってるらしく、ギルドにはいないだろうとの事だったので、やめといた。

あんなに私と戦いたがってたくせに、その気になった時には行方不明とは。

なんとも運のない奴だ。

「うーん……でも俺、この後少し用事が……」

と、アレクが言いかけた時、コンコンと扉がノックされた。

「どうぞ」

「失礼します」

そうして、扉を開けて入って来たのは、熟練メイドのメアリーだった。

手には来客用の茶菓子の乗ったトレイを持っている。

メアリーは、それを私の目の前に置いた。

しかし、昔よくつまみ食いをしていた私にはわかる。

この茶菓子、いつものよりグレードが低い。

使用人軍団がおやつに食べてるやつだ。

メアリーめ。

私が相手だからってケチリやがったな。

まあ、それでも遠慮なく食べるが。

「アレク、そろそろマグマとの会議の時間ですよ」

「ああ、もうですか。すみません、リンネさん。そういう事なので、俺はもう行かないと」

あ、用意ってマグマとの話し合いか。

そういえば、マグマ率いる騎士団とカゲトラ対策を話し合うって言うってたな。

なら、これを止める訳にはいかないか。

「ふおういうふおとなら仕方ないかたふあいふあ。ふいつふえふおい」

「リンネ様、口に物を入れたまま話さないでください」

メアリーに叱られてしまった。

仕方ないので、茶菓子を紅茶で流し込む。

中々に旨かったぞ。

やはり、こういうのは値段じゃないな。

私には、金の味などわからないのだから。

「アハハ、じゃあ、俺は行きますね。……あー！ そうだ！」

部屋を出て行く直前に、アレクは立ち止まって、何か思い付いたかのように手を叩いた。

どうした？

「リンネさん、剣の練習相手ですが、メアリーさんに頼むのはどうでしょう？」

「む」

「剣の練習相手、ですか？」

なるほど、メアリーか。

その手があったな。

こいつも、弟子ども程ではないが、かなりの腕前の剣士。

私の見立てでは、大体ドレイクと同じくらいだ。

まあ、搦め手を使えばドレイクが勝つと思うが、代わりに今のメアリーはグラムを持つてるからな。

互いに全力なら、良い勝負にはなるかもしれん。

それに、同じ十剣の使い手という意味で、対カゲトラ戦の仮想敵としてはぴったりだ。

「よし、メアリー！ 相手してくれ！」

「……よくわかりませんが、つまりリンネさんと試合をすればいいのですね？」

わかりました。ちょうど休憩の時間ですし、最近は少し体が鈍っていたところですよ。

お相手します」

「助かる！」

「じゃあ、頑張ってくださいね」

という訳で、アレクは馬車に乗って出掛けて行き、私とメアリーは中庭の訓練場に移動した。

念の為に、そこにある結界を発動させ、その中で向き合う。

「メイド服のままでもいいのか？」

「ええ、かまいません。私が剣を振るわなくてはならない事態は突然訪れるでしょうからね。今日のように」

「常在戦場の気構えか。その意気や良し！」

そうして、私達は剣を抜く。

私は昨日買ってきた愛剣を。

メアリーは、メイド服の腰に剣帯で吊るされていた十剣の一つ、『剛剣グラム』を。

……今さらだが、メイドが帯剣してる屋敷なんてウチくらいだろうな。

まあ、常に剣持ってるのはメアリーくらいだが。

他の奴らは、仕事の邪魔って事で、普段は自分の部屋にでも置いてる。

有事の際は、番兵軍団が足止めしてる内に剣を取りに行く訳だ。

話が逸れた。

今は、そんな事どうでもいい。

「じゃあ、まずは軽く行くぞ」

「お手柔らかに」

メアリーが応じると同時に、私は体と剣に高出力の闘気を纏わせた。

そのまま流れるように飛脚を使い、メアリーに急接近して、剣を振り抜く。

「攻ノ型・一閃！」

「ッ！ 軽くと仰られたのに、いきなり闘気を使ってきましたか……！」

そう言いつつ、メアリーはガツチリと私の剣を受け止めていた。

さすがだな。

全く危ないじゃないか。

「速度上げるぞ！ 神速剣・五月雨！」

「!? 守ノ型・塞！」

闘気の出力を上げ、神速の連続斬りを繰り返す。

それもメアリーは防いだ。

私もまだ全力じゃないとはいえ、メアリーにもまだまだ余裕が見える。

このまま続けても大丈夫そうだな。

「神速剣・陽炎！」

「ふっ！」

続いてフェイント技。

しかし、動きを読まれたのか、驚いた様子もなく防がれてしまった。いつもより技のキレが悪いな。

早く、新しい剣に慣れなくては。

「神脚！」

これ以上、近接攻撃をし続ければカウンターを貰うと考え、つばぜり合ってから力を抜き、同時に神脚で後ろに下がった。

そのまま仕切り直しとばかりに、再び踏み込む！

あえて正面から！

「神速剣・一閃！」

「攻ノ型・一閃！」

そして、互いに正面から斬撃をぶつけ合う。

速度は私の方が上。

しかし、威力はメアリーの方が上だ。

私の剣は押し込まれ、当たり負ける。

これが、剛剣グラムの能力。

グラムには、他の十剣と違って特殊な能力はない。

紅桜のような、圧倒的な切れ味はない。

その代わり、ただひたすらに、純粹に魔剣としての正当な強さを追求した剣。

それが、グラム。

魔剣特有の強さ。

それすなわち、擬似闘気である。

グラムは、十剣の中でも最強の擬似闘気を使い手に与えるのだ。

そして、グラム自体も、単純に頑強で鋭い名剣。

まさに正当派の魔剣。

まさに質実剛健。

故に、『剛剣グラム』。

そんな最高峰の魔剣を持ったメアリーの一撃を受け、私の小さな体は宙を舞う。

されど空中で一回転して華麗に着地した。

この程度ではやられんよ。

「ふう……相変わらず苛烈な攻めですね」

「まだ本気ではないぞ？」

「わかっています。リンネ様が本気ならば、私など、とうの昔に斬られているでしょう」

いや、そうでもないと思うがな。

今のメアリーを倒そうと思ったら、それなりに大変だろう。

「さて、では、今度はこちらから参ります」

「ああ、来い！」

「では」

そして、今度はメアリーから私に近づいて来た。

メイド殺法なのか、やたらと静かで音のしない飛脚によって、私との距離を詰めて来る。

「攻ノ型・槍牙！」

「守ノ型・流！」

そして、鋭い刺突！

私は、それを受け流しカウンターを……

「攻ノ型・重槍牙！」

「おっと！」

予想より速く鋭い連続突きに対し、カウンターを諦めて防御に専念する。

メアリーの剣術は基本に忠実だが、屋敷の中で戦う事を想定しているせいか、小回りの利く技、特に突き技を好んで使う傾向がある。

力はないが、鋭くて速い。

そして今は、その足りない力をグラムが補っている。

……正直、メアリーにグラムを渡せと言ったのは半分思い付きだっ

たんだが、予想外に上手くハマッていやがるな。

味方としては心強い。

「だが、まだまだ私には届かん！」

メアリーの連撃に対して、こつちも剣速を上げて対抗する。

神速剣がグラムを押し返し、打ち合いは私有利に方向に傾いていく。

このままでは、どんどん不利になると悟ったのか、メアリーが退く。

そこにタイミングを合わせ、私は追撃の刺突を繰り出した。

足を動かしている最中に放たれた攻撃を無理に防ぎ、メアリーの体勢が崩れる。

「もらったー！」

「ぐっ……！」

その隙を容赦なく突き、剣の腹でメアリーの胸を叩く。

自前の闘気とグラムの擬似闘気に守られている為、ダメージ自体はそれ程でもない。

だが、

「まずは一本だな」

「……はい。お見事です」

少し悔しそうにメアリーが言う。

こいつは負けず嫌いって程でもないが、やはり悔しいものは悔しいのだろう。

まあ、負けて悔しくなかったら、それこそ剣士として問題があるんだがな。

「それで、如何ですか？ 調子は？」

「うむ。悪くないな。だいぶ慣れてきた」

私は確かめるように、剣を何度か振るった。

今の攻防だけで、随分と手に馴染んできた感じがする。

それに、我が愛剣は、あれだけグラムと打ち合っただけで傷一つ付いていない。

私が打ち合う角度とかを考えて、折れないように気をつけていたのも大きいだろうが、それを差し引いても凄まじく頑丈だ。

これなら、気をつけてさえいれば、充分に紅桜とも打ち合えるだろう。

実に良い買い物をした。

「よし！・ どんどん行くぞー！」

「……はあ。わかりました。お付き合います」

「そう来なくては！」

その後、メアリーが仕事に戻るまで稽古を続けた。

神速剣を多用し過ぎたせいで体ガタガタになったが、使用人軍団の中にも治癒術師はいるからな。

終わった後には全快よ。

だが、傷は治っても体力までは戻らない。

にも関わらず、稽古が終わった後、風呂で汚れを落としてから直行で仕事に戻ったメアリーは凄まじいと思った。

ちなみに、その時、当たり前のように私も一緒に風呂に入れられたんだが、こいつに恥じらいというものはないのだろうか？

まあ、今の私は美少女だし、シヤロ以外に手を出すつもりもないから問題ないと言えば問題ないんだが。

……というか、こいつ若作りが凄いな。

三十手前くらいに見える。

実際は四十越えてるくせに。

「リンネ様、今、何か不穏な事を考えませんでしたか？」

「若作りが凄まじいと思った」

「殺しますよ？」

そんな会話をしつつ風呂から上がり、その後は例によって泊まる流れになった。

脱衣場に用意されていた、やたらと可愛いパジャマを着て屋敷の中を彷徨く。

前に泊まり込んだ時にはなかったパジャマだ。

何故か、どんどんバリエーションが増えていく。

そんな私の姿を見た使用人軍団の中で、歓声を上げる奴らと、吐き

気が笑いを堪える奴らとで抗争が起こっていたが、些細な問題だな。途中で帰って来たユーリには汚物を見るような目で見られたが、これも些細な問題だろう。

そうして、さあ寝るかという時間になった頃にアレクが帰宅した。

何故か、マグマを連れて。

話し合いが終わらなかつたんだろうか？

それとも……

私は、そんな二人に近づいた。

なんとなく、何かありそうだなという予感に突き動かされながら。

そして、数分後。

私の予感は的中する事となる。

51 辻斬り討伐作戦

「帰ったかアレク。そして、マグマ」

「ああ、リンネさん」

「おう、リンネ……か!?!」

二人に近づいた時、何故かマグマが私を見て目を見開いた。
どうした?

「なんだ、その格好は!?!」
ん?

ああ、このパジャマの事か。

今日のは、トラ柄だな。

ご丁寧に、耳付きのフードと尻尾がある。

……まさかとは思うが、誰かの手作りだろうか?

犯人はメイド軍団の誰かだと思いが、暇な奴もいたものだな。

まあ、なんにせよ、

「可愛かろう?」

「いつから女装に目覚めたクソ爺。焼き殺すぞ」

「女装ではない、今の私にとっては普通のパジャマだ」

「死ねえ!」

「危なっ!」

マグマが、いきなり殴りかかってきた!

美少女に向かって何をする!

この野蛮人め!

「こんなのが師匠だと思おうと泣けてくるぜ……」

そこまで酷いか、この格好!?

我ながら似合ってると思っただんだがな。

改めて自分の格好を見直す。

うむ。

可愛い。

何の問題もないと思う。

と、私がそんな事をしている内に、アレクがマグマの肩を優しく叩

いていた。

「諦めよう、マグマ。この人が変なのは昔からだ」

「そりゃそうだけだよ」

「おい、わかり合うな。失礼な奴らめ」

「騒がしいわね」

おっと。

玄関先で騒いませいか、屋敷の奥からユーリが出てきた。

風呂上がりなのか、かなり薄着だ。

……というか、化粧落とした顔見て改めて思ったが、こいつメアリーと同じで若作りが凄いな。

二十代前半くらいに見える。

実際は三十越えてるくせに。

「リンネ、今、何を考えたのかしら？」

「若作りが凄まじいと思った」

「死になさい」

「危なっ!？」

今度は氷の弾が飛んできた!

そして私が避けた後、氷の弾は屋敷を破壊する前に碎け散る。

無駄に高度な事やってんな。

「はあ。それで、何の話をしてたのかしら？」

「こいつの服装の話だ!」

「ああ……私もこれはないと思うわ。わぎわぎ、こんな服を作ってるネに着せるなんて、メアリーも物好きよね」

ん？

なんか今、聞き捨てならない事が。

犯人はメアリーだったのか!?

超意外だ!

あいつに対するイメージが変わりそうだぞ。

「共犯者が大量にいるのも理解できないけれど、まあ、それはいいわ。どうでも。」

で、あなたは何をしに来たのかしら、マグマ?」

「……ああ、そうだった。話が脱線しちゃったな。俺はリンネに用があつて来たんだ」

ん？

私か？

「辻斬りを釣り上げる作戦が出来た。協力してほしい」

「……ほう」

その言葉を聞いて、私はキリツと顔を引き締めた。

そして、詳しい話をするという事で、弟子どもと一緒にアレクの執務室へと向かったのだった。

……何故か、マグマとアレクが、ずっと苦い顔をしていたのが気になったがな。



「それで？ どういう作戦に決まったのかしら？」

執務室に入って早々、ユーリが本題を切り出す。

そんなユーリは、さすがに話し込むなら薄着はマズイと思ったのか、今はメイドから貰ったカーデイガンを羽織っている。

……というか、当たり前のように付いて来たが、お前も参加するの
か。

ユーリはこの件には関わっていない感じだったが、まあ、相手が大臣ともなれば無関係ではないし、ユーリにも話くらいは通すか。

それに、おそらく、アレクもユーリには相談してたんだろう。

相談場所が寝室とかベッドの上とかだったら、私がユーリの参戦を知らなくても不思議ではない。

「作戦を話す前に、まずは情報を整理するぞ。

例の辻斬りは大臣の手駒である可能性が極めて高く、その目的は大臣にとって不都合な有力者の暗殺だ。

ここまではいいな？

特にリンネ」

「何故に私を名指しする？ そのくらいわかるに決まっているだろう」

まったく。

私は馬鹿ではないと何度言えばわかるのやら。

「なら、次だ。

その大臣にとって不都合な有力者、辻斬りの標的になり得る奴らの中には、プロミネンス公爵家も入ってる。

お前らや王家との繋がりも深く、アクロイド潰しにも一枚噛んでんだ。まあ、当然だな」

だろうな。

プロミネンス公爵家は、代々当主が王国騎士団長を襲名してきた名家。

王家との繋がりは言うまでもなく、マグマが私の弟子になってる事からもわかる通り、ナイトソード家とも深い繋がりがある。

なにせ、マグマの祖母こと、先々代の当主が私の元上司だからな。そんな力ある名家が敵対してるとなると、クソ虫一家としては、かなりヤバくて鬱陶しいだろう。

カゲトラ使って殺せるなら殺したいと思うのも道理だ。

まあ、無理だと思うが。

カゲトラじゃ、マグマには勝てない。

「でだ。近々、ウチの嫁と娘が王都を離れる予定がある。

隠居して領地にいる親父とお袋に会う為にな。

しかも、俺は仕事の都合で付いて行けねえ。

腕利きで信頼のおける騎士達に護衛を任せるともりだったんだが……辻斬りの予想以上の戦闘力を考えれば、その程度の無理は押し通してくる可能性がある。

つまり、辻斬りが俺の家族を狙ってくるかもしれないねえって訳だ」

マグマはギリツと歯を食い縛りながら、そう言った。

……なるほど。

たしかに、マグマは倒せなくとも、その家族を狙う事はできるのか。

三剣士や騎士団がすぐに駆けつけて来る王都の中では無理でも、少数の護衛しかいない旅の道中ならば……カゲトラの力を持つてすれば、やってやれなくはないだろう。

ん？

「というか、今、サラッと聞き捨てならない話が出てきたような……ハッ!？」

「お前、結婚したのか!？」

「驚くところ、そこか!? 何を今さら……ああ、そういや、リンネには言ってなかったな」

驚いた。

純粹に驚いた。

でも、そうか、考えてみれば当然の事だな。

マグマはもういい歳だし、名家プロミネンス公爵家の当主だ。

跡継ぎの問題もあるだろうし、結婚していても何ら不思議ではない。

むしろ、結婚しない方がおかしい。

「あの、汗に濡れたユーリに発情してた小僧がなあ……実に感慨深い。結婚おめでとう!」

「やめろお! 人の黒歴史を掘り返すなあ!」

マグマが頭を抱えて悶え出した。

ユーリとアレクが、そんな事もあったなー、みたいな顔でマグマを見下ろす。

いたたまれない状況だな。

「だあああ! その話は忘れろ! 忘却の彼方に消し去ってくれ、頼むから!」

それより、今は辻斬りの話だろうが!」

マグマが半ギレになりながら、無理矢理話題を戻した。

まあ、たしかに少し脱線したな。

反省しよう。

「つう訳で、作戦つてのは、ウチの家族を辻斬りが狙って来た場合に、その場で取り押さえるって寸法だ。

さつきも言ったが、俺は同行できねえし、アレクやユーリが同行しても目立って辻斬りが来ねえ可能性が高い。

だから、その仕事をリンネにやってもらいたい」

「ふむ。まあ、話はわかった」

私なら、そこまで目立たないからな。

知名度で言えば私もそれなりだが、アレク達と違って役職がないから、急にいなくなっても特に目立たない。

こつそりと馬車の中にも潜り込んでおけば、敵の目くらい欺けるだろう。

だが、

「その作戦だと、お前の家族を危険に晒す事になるぞ？」

それがわからないお前でもないだろうが……」

そこが問題なのだ。

もし、マグマが辻斬り退治を優先して家族を犠牲にする外道になったのなら、私も怒る。

だが、多分、そうじゃないだろう。

何故なら、マグマは作戦を語る時、凄まじく苦い顔をしていたのだから。

「……ああ。正直に言うくと、こんな作戦やりたくねえ。

ところが、当の嫁と娘が乗り気というか、引かねえんだ。

領地訪問は前々から予定してた事。それを利用して早期に敵を釣り上げられるなら、やるべきです。

王国を守る騎士団長の家族として、危険な役割をこなす覚悟くらい決めています、とか言ってるな。

どうしてこう、俺の周囲には気の強い女が多いんだ……」

ほほう。

それはそれは、中々に肝の据わった婦人だな。

まあ、それくらいでないで、プロミネンスの女は務まらないのかもしれん。

実際、私の元上司も、フレアの奴も、相当気が強かったしな。

血筋だけじゃなく、外から嫁に来た奴まで気が強いというのは……

もはや運命だろう。

諦めろ。

「まあ、なんにせよ、そういう事なら私も文句はない。

それに、どのみち私が辻斬りをぶつ倒せば済む話だしな」

私がカゲトラに勝ちさえすれば、マグマの嫁も娘も無事に済む。

なら、何の問題もない。

もちろん、私が負ける可能性もあるが、その場合は私以外の護衛がなんとか逃がしてくれるだろう。

とりあえず、マグマの家族が死ぬ可能性はかなり低い。

安心するがいい。

「リンネさん、一応聞いておきますが、勝てるんですね？」

アレクが少しだけ心配そうな顔で尋ねてくる。

先日は剣をへし折られたと話したからな。

心配する気持ちもわかる。

だからこそ、私は自信を持って断言した。

「勝てる。私は勝てない戦いはしないからな。

絶対に勝てるという程自惚れるつもりはないが、絶対に勝つとは言っておこう。

だから、安心して待っている」

その言葉はアレクだけではなく、マグマやユーリに対しての言葉でもある。

大丈夫だ。

師匠を信じる。

そんな私の意思を正しく汲み取ったのか、ユーリが軽く肩をすくめてから口を開いた。

「だそうよ。昔より弱くなってるとはいえ、リンネの強さは本物。

ここは、リンネを信じましょう。

それで？ 作戦開始はいつなの？」

「……今週末だ。リンネ、家族を頼んだぞ」

「任せろ！」

私は力強く宣言した。

必ずマグマの家族を守り抜き、カゲトラを討ち取ってやろうではないか！

首を洗って待っている、カゲトラ！

まあ、あくまでも護衛優先だがな。

優先順位を履き違えるような真似はしない。

と、そこで私の脳裏にある人物の顔が浮かんだ。

そういえば、言われていたんだったな。

何かあれば頼れ、と。

「マグマ。その作戦だが、知り合いの冒険者に声かけてもいいか？」

「ん？ まあ、目立たない程度なら構わねえが」

「わかった」

言質は取った。

これで、あいつを招く事ができる。

あいつになら、私がカゲトラと戦ってる時の護衛を任せる事もできるしな。

襲撃者がカゲトラ一人とは限らないんだから、その役目を任せられる奴は必要だ。

まあ、護衛も私達だけじゃないんだから必要ないかもしれんが。

それでも、戦力はあっても困らないだろう。

そして、その後は細かい事を話し合い、その日の会議は終了したのだった。

52 プロミネンス家

作戦決行の前日。

隠し戦力である私達は、同行しているのが敵にバレないように、漆黒の外套を羽織り、夜の闇に乗じてプロミネンス家へと足を運んだ。プロミネンス家は、王都の中心近くにあるデカイ屋敷だ。

その大きさは、ナイトソード家すらも上回る。

さすが、王国建国期から続く大貴族。

なんちやって貴族のウチとは違うという事よ。

まあ、周りの森まで含めた敷地面積なら、ウチが勝ってるけどな。

「おいおい……嬢ちゃん、とんでもねえ貴族と繋がってやがるな。いったい、どうなってるんだ？」

その圧巻の眺めに同行者、ドレイクが呆然とした顔で、唾然とした声を出した。

そう！

私が頼った知り合い冒険者とは、ドレイクの事だったのだ！

シオンとライゾウは置いてきた。

シオンはカゲトラの相手をするには実力不足だし、ライゾウは絶対に目立つからダメだ。

そもそも、ライゾウに関しては、まだ当てもなくカゲトラを探して走り回ってるのか、行方不明だったしな。

まあ、そんな事はどうでもいいんだ。

「ほれ。ポーとしてないで行くぞ」

「あ、ああ。……マジでどうなってんだ」

混乱が抜けていないドレイクを連れて、プロミネンス家の門に近づく。

そこでマグマに貫った通行証みたいな物を門番に渡し、門の中へと入った。

「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへ」

「ああ」

そして、入ってすぐにメイドが出て来て、私達を案内し始める。

このメイドからは、しつかりと教育された気品と、隙のなさを感じる。

ウチの、隙だらけでフレンドリーさしか感じないメイド軍団に見習わせたい。

まあ、こんな堅苦しいメイドばかりじゃなかったら、普通に嫌だな。

メイドに連れられ、プロミネンス家の中を歩く。

ここに来るのは初めてではない。

故に、そこまで驚く事はなかった。

私はな。

ドレイクは別だ。

さすがのS級冒険者とはいえ、ここまでの大貴族の屋敷に立ち入るのは初めてなのか、凄まじくキョロキョロしていた。

いい歳したおっさんか恥ずかしい。

そうして歩いている内に、一つの部屋の前へと辿り着いた。

メイドが、その部屋の扉をコンコンとノックする。

「奥様、お客様をお連れいたしました」

「入りなさい」

中から若い女の声が聞こえた。

その指示に従ってメイドが扉を開き、私達を部屋の中へと招き入れる。

部屋の中には、予想通り一人の若い女の姿が。

「はじめまして、お客様方。」

私はプロミネンス家当主、マグマ・プロミネンスの妻。マルティナ・プロミネンスと申します。

以後、お見知りおきを」

そう言っつて優雅にお辞儀をするマルティナとやら。

まさに貴族令嬢の鏡といった感じだ。

なんちゃって王族のユウリよりも様になっている。

だが、私がマルティナに対して抱いた衝撃的な第一印象のせいで、そんな感想は頭から吹き飛んでしまった。

「え!? 若過ぎだろ!」

「嬢ちゃん!? 公爵婦人に対して失礼すぎるぞ!」

ドレイクの焦ったようなツツコミすら頭に入ってこない。

それくらい、マルティナの姿は衝撃的に過ぎた。

どう見ても、十代の美少女だ。

おっとりとした大人っぽい印象のせいでも多少は大人びて見えるが、それでも、やはり二十歳を越えているようには見えない。

マグマはガチでロリコン……いや、待て、落ち着け。

私の身近には、若作りが激しい連中が何人もいるではないか。

ユーリとかメアリーとか、もつと言えば母も実年齢以上に若く見え
た。

マルティナも、そういう感じの合法ロリなのかもしれない。

「失礼な事を聞くが、お前、歳はいくつだ?」

「公爵婦人をお前呼び!」

「ドレイク、うるさい。これは重要な問いなんだ」

マグマがロリコンか否かという分水嶺なのだよ。

「私は今年で16になりました」

「アウトだ!」

マグマめ……!!

まさか、二回り近く年下の少女に手を出すとは!

! あいつは弟子どもの中で一番年上だから、既に三十代半ばだろうに

そんなおっさんが、十代の美少女に手を出した挙げ句、孕ませて、娘
を生ませるなんて!

いや、さすがに政略結婚だとは思うが。

その場合、マグマに罪はない。

罪はない……筈だ。

しかし、跡継ぎ生ませるにしても、もう少し待てなかったのかと
……。

「あの、そろそろお名前をお聞かせくださいませんか?」

「ん? ああ、すまんすまん。」

私はリンネだ。で、こいつはドレイク」

「リンネ様に、ドレイク様ですな。」

「この度は私どもの護衛を引き受けてくださり、誠に感謝しております」

「うむ」

「や、やめてくれ、さい！ 俺は様付けされるような奴じゃね、ないですから！」

「ドレイク、敬語が変だぞ」

「嬢ちゃんはフレンドリー過ぎんだよ！」

そんなうるさいドレイクと、無礼な私を見ても、マルティナは楽しそうに微笑むだけだった。

懐が深いのか、それとも……

「ちなみに、お前は私の事はどこまで知ってるんだ？」

「リンネ様に関しては詳しく存じ上げております。」

主人を含めた三剣士様と深い縁のあるお方であり、王国にとって、掛け替えのない重要なお方であるとも。

主人からは、別に敬意を払う必要はないが、敬意を払われる事もないだろうから気をつけろと言われました」

「ふむ。大体合ってるな」

「嬢ちゃん、いったい何をした!?!」

さつきからドレイクがうるさいが、まあ、無視していいだろう。

それよりも、この言い方からして、どうやらマグマは、剣神エドガーの生まれ変わりという私の正体をマルティナには話したようだ。

それは別に構わない。

マグマの嫁、三剣士の伴侶ともなれば、国にとってもかなりの重要人物。

それに、私にとっても弟子の身内だ。

正体明かしても問題ないだろう。

国王に正体を明かした時と似たようなもんだ。

と、そんな事を考えていた時。

バーン！

という大きな音と共に背後の扉が勢いよく開き、そこから3、4歳

くらいの赤髪の少女が現れた。

「おまえらが、わたしのごえいだな！」

「イグニ！ 失礼ですよ！」

マルティナが、イグニと呼んだ赤髪の少女を注意する。

まだ少し舌足らずな、この少女。

もう見ただけでわかった。

プロミネンス家特有の、気の強そうなつり目と赤髪。

それに、マルティナやマグマの面影が残った顔立ち。

間違いない。

この子が、マグマの娘だろう。

「そう言うお前は、マグマの娘だな？」

「そうだ！ わたしはイグニ・プロミネンス！ よろしくな！」

「か……」

「か？」

「可愛いな！」

「わぶっ!？」

私はイグニを思いつきり抱き締めた。

もちろん、締め上げないように手加減はしている。

「嬢ちゃん!? 無礼にも程があるだろ!？」

ドレイクが騒いでいるが、無視だ、無視!

何せ、弟子の娘となれば、我が孫も同然!

この小生意気な感じ、アリスとはまた違った可愛さよ!

素晴らしい!

「はーなーせー!」

「おおう!？」

腕の中で暴れられ、思わず手を離してしまった。

当然、そつと地面に降ろしたが。

しかし、私の腕から解放された瞬間にイグニは走り出し、マルティ

ナの後ろに隠れてしまった。

そこから顔を出して、うー! と唸って威嚇している。

ああ……その姿も可愛いが、嫌われてしまった。

「ぐっ……!」

「嬢ちゃん?! なんて泣いてんだ!」

私は膝をつき、涙を流した。

絶望と後悔が私を襲う。

もつと優しく抱きつくべきであった。

「イグニ」

「ははうえ?」

「仲直りしなさい」

「えー……」

顔を上げて見れば、マルティナが嫌がるイグニを説得していた。

マルティナ!

私の中で彼女への好感度が上がっていく。

今まではロリコン野郎に手を出された哀れな犠牲者くらいに思っていたが、認識を改める必要があるな!

「リンネ様も悪い方ではないのです。」

それは、あなたもわかっているでしょう?」

「むー……」

説得されたイグニが、しゅしゅといった感じでマルティナの背中から抜け出し、トテトテと私の方に走り寄って来た。

か、可愛い……!」

そして、イグニは私の前で腕を組み、実に偉そうなポーズで（イグニがやると微笑ましきしか感じないポーズで）宣言した。

「おまえ、ゆるしてやる! ありがたくおもえよ!」

「イグニ……!」

「わぷっ!? や、やめろおおお!」

私の頭からはさっきの反省が吹き飛び、気づいたら、思う存分イグニを抱き締めて、撫で回していた。

そんな事をすれば、当然さっきと同じように暴れられ、イグニはまたしてもマルティナの後ろに隠れてしまった。

ああ……。

「やつぱり、おまえ、きらいだ!」

「ぐはっ!？」

イグニの言葉の刃か私に突き刺さる!

クリティカルヒット!

私は大ダメージを受けた!

元剣神にここまでダメージを与えるとは……!

イグニは、良い剣士になれそうだな!

「何やってんだ……」

ドレイクの呆れきったようなツツコミで耳が痛い。

仕方ないんだ。

これは、孫を前にした爺の条件反射みたいなものなんだ。

「イグニ」

「いやだ!」

「まだ、何も言っていないのに……でも、今はリンネ様も悪かったですね。反省してください。」

子供の嫌がる事はしない事。

いいですね?」

「わかった……」

マルティナに怒られてしまった。

その姿は、16歳とは思えない程しつかりとした母親であった。

私は、前世含めれば80年以上生きているのに、この様だということに……。

やはり、親というものには敵わんなあ。

その後、マルティナの尽力のおかげで、なんとかイグニの好感度を少しだけ上げる事に成功した。

もつとも、まだ頭を撫でようと伸ばした手を叩き落とされるレベルなのが悲しいが……まあ、仕方あるまい。

初対面でしくじった私が全面的に悪いのだから。

そして、更にその後は、明日の護衛を務める騎士達との顔合わせを行い、ある程度のフォーメーションを決めた。

これで、明日の準備は整った。
つまり、カゲトラを迎え撃つ準備が完了した訳だ。
さて、可愛い孫と弟子の嫁を守る為にも、頑張るとしようではないか。

そうして私は、明日に備えて、プロミネンス家の客室で眠りについたのだった。



リンネがプロミネンス家を訪れる数日前。

「次の標的は三剣士の一人、マグマ・プロミネンスの妻子です。

今回は殺さなくて結構。

目的は暗殺ではありません。

——誘拐してください。

殺すよりも、三剣士の弱みを握った方が、何かと有効活用できますからねえ」

「……承知した」

アクロイド家の屋敷において、当主であるピエールと、部下であるカゲトラとの間で、そんな会話が合った。

ピエールは、この作戦が成功した後の事を思って嗤い、カゲトラは明らかに不本意そうな顔で任務を受け入れる。

「フッフ。楽しみですねえ。」

プロミネンスの奥方はとても美しい。

私の下へお招きした暁には、たあっぷりと可愛がってあげましょう」

好色な笑みを浮かべるピエールを見て、カゲトラは小さく嘆息した。

そして、無言で部屋を出ていく。

戦いの時は、すぐそこにまで迫っていた。

53 護衛の馬車の中

作戦決行、というより、マルティナとイグニが領地訪問に出発する日の朝。

私とドレイクが二人が乗る馬車へと一緒に乗り込み、騎士達が馬車の周囲を固め、万全の護衛態勢を整えた上で、プロミネンス家の馬車は出発した。

さすがに公爵家の馬車は中も広く、私達四人が乗っても、まだ広さに余裕がある。

それに、乗り心地も快適。

イグニがマルティナの膝の上に乗っている光景も相まって、実に和む。

だが、これは護衛の仕事であり、同時にカゲトラを釣り出す作戦でもあるのだ。

決して低くない確率で、戦いは起こる。

和みっぱなしではいられない。

適度な緊張感を維持しなくては。

私はキリツとした顔で馬車に揺られていた。

「リンネは、そうしてれば、ちよつとはカッコいいのにな……」

「フッフッフ。そうだろう」

「あ、ダメになった」

イグニの言葉に一喜一憂する。

しかし、これでも緊張感はしっかりと維持し、いつでも戦える精神状態を保っているのだ。

これがプロというものよ。

だが、張り詰め過ぎるのも考えものだ。

適度にリラックスする事も重要。

という事で、イグニとお喋りをする事にしよう。

「そういえば、イグニは今いくつなんだ？」

「3さいだー」

「つまり、マグマは13歳くらいのマルティナに手を出した訳か……」

ロリコンめ」

私は、吐き捨てるようにそう言った。

昨日から、私のマグマに対する好感度は下がりっぱなしだ。

急降下が止まらない。

まさか、あの直情馬鹿がロリコンに育ってしまうとは思ってもしなかった。

師匠として情けない限りだ。

いや、もう情けないを通り越して、ちょっと身の危険を感じる。

何故なら、私も13歳なのだから。

……マグマの野郎は、犯^ヤられる前に、師匠としての責任取って、殺^ヤつとした方がいいかもしれん。

だが、師匠として弟子にかける最後の情けだ。

命までは取らん。

不貞を働けないように、股関にぶら下がってる二つの玉を潰すだけで勘弁してやろう。

帰ったら、マグマの股関に神足剣を叩き込んでやる。

「リンネ様、あまり主人を責めないでやってください。

その、こういう事を言うのは恥ずかしいのですが……私の方から誘惑した結果ですのぞ」

「……マジかよ」

「ゆーわく?」

「イグニには、まだ早いわね」

私ごとでつもなく不吉な事を考えていたら、マルティナが顔を真っ赤にしながら、驚きの発言でマグマをフォローしてきた。

いや、13歳の誘惑に負けたマグマが有罪である事に変わりはないが、それでも驚いたぞ。

てつきり政略結婚だと思っていたが、恋愛結婚だったのか?

「馴れ初めとか聞いてもいいか?」

「あ、はい。」

……私が主人と出会ったのは、彼の任務中の事でした」

そうして、マルティナは語り出した。

イグニの耳を塞ぎながら。

まあ、生々しい話になるなら、子供には聞かせられんか。

「あれは四年前の事で、当時の私は、お恥ずかしながらお転婆な性格をしていました。」

侯爵家の娘であるにも関わらず、護衛の目を盗んで屋敷を抜け出し、城下町を一人で出歩くような危険な真似もしたものです。

貴族としての生活に息苦しさを感じていたのもありますし、スリルを求めていたといえますか……」

それはまた、今のマルティナからは想像がつかんな。

そういうのは、むしろ、プロミネンスの連中がやりそうな事だ。

実際、スカーレットとかは似たような事やってた。

だが、しかし、スカーレットはあれでもオリーブという護衛を連れていたし、影から見守る親衛隊みたいな連中もいた。

それもなしに、貴族令嬢が一人で彷徨くというのは、本人も言う通り大変危険だ。

……先の展開が読めたような気がする。

「そうしたら案の定、一人で歩いている所を凶賊に目をつけられてしまいました。」

身代金目当てに私は拐われました。

しかも、奴らはそれだけでは飽き足らず、私は三日三晩、凶賊達の慰み者となって汚されたのです。

あの時の事は今でもたまに夢に見ます」

「それは……気の毒だったな」

なんか、予想以上にヘビーな話だった。

てつきり、物語のヒロインのごとく、間一髪のところをマグマにカツコよく助けられたとか、そんな感じかと思ったら、全然違った。

マグマ、間に合ってねえ。

現実には物語のようにはいかないという事だ。

これは素直にマルティナに同情する。

見れば、私の隣のドレイクも気まずそうに目を逸らしていた。

ドレイクですら目を逸らすのだ。

そりや、こんな話、イグニには聞かせられんわな。

「いえ、お心遣いはありがたいのですが、慰めは結構です。私の自業自得ですから」

いや、まあ、そうと言えばそうなんだが。

だが、一番悪いのはマルティナではない。

一番の悪は、当時12歳の美少女を誘拐してレイプした下衆野郎どもだ。

そんなクズは死ぬべきだな。

まあ、マルティナがこうして助かっている以上、死んだんだろうが。

「……そうして奴らに凌辱されている間、いつそ舌を噛みきって死んでしまおうかとも思ったのですが、結局、私は死ぬ勇気すらなく、ただ時間が過ぎるのを待つしかありませんでした。

そんな時です。

旦那様が来てくださったのは」

マルティナが熱っぽい瞳でそう語る。

なるほど。

それがマグマか。

正直、遅いと言わざるを得ないが、それでもマルティナにとっては救世主だったのだろう。

「騎士団を引き連れて現れ、瞬く間に凶賊を討伐し、私を救ってくださった、あの雄姿。

もう大丈夫だと、優しく頭を撫でて、抱き締めてくださった、あの腕の感触。

今でもはつきりと覚えております。

あの瞬間、私は私の英雄と出会い、恋に落ちたのです」

マルティナの頬が激しく上気している。

これは本気で惚れているな。

たしかに、その状況なら惚れもするか。

……このマルティナの幸せそうな顔に免じて、玉を潰すのは勘弁してやろうかな。

「その後、旦那様の事が忘れられなかった私は、この恋をなんとかして

叶えられないものかと苦心しました。

両親に相談し、旦那様に相応しい女になる為に、今まで嫌がっていた花嫁修業を死ぬ気で頑張り。

そうしている内に、なんと両親が旦那様との縁談を整えてくれたのです！」

マルティナのテンションが上がっている。

鼻息も荒い。

膝の上のイグニが、仕方のないものを見る目で母親を見上げているように見えるのは、多分気のせいではないだろう。

「時期が良かったのもあります。

あの当時、旦那様はプロミネンス家の当主として、いい加減身を固めろと言われていたらしく、私との縁談もその一環だったのです。う。

年齢差はありましたが、幸いにも家格は釣り合っていたので、縁談を断られるという事はありませんでした」

まあ、婚約じゃなくて縁談だしな。

とりあえず会うだけなら、わざわざ断られる事もないか。

「このチャンスを逃してなるものかと、私は持ちうる手段の全てを使って、旦那様を落としました。

幸いと言っていいのかわかりませんが、旦那様は、私に対して『もっと早く助けられていれば』という負い目があったので、そこを突いたと言いますか……。

一度凶賊に汚された身ですし、他に嫁の貰い手なんてありませんと脅迫……説得したのが効いたのでしよう。

旦那様は、「責任は取る」と仰って、私を娶ってくださいました！」
マルティナ……マジで手段を選んでないな。

この子、思ったよりも肉食系だ。

そういえば、マグマにも気が強いとか言われてたっけ。

「ベッドの上で誘惑した時もそうです。

「凶賊に汚された時の事が忘れられないのです。早く、あなた様の色で染め直してください」と言って、その後は……キャー！」

マルティナがイグニの耳から手を離し、頬に手を当てながら小さく悲鳴を上げた。

顔は茹でダコのように真っ赤っ赤。

羞恥と喜びの表情だ。

お幸せそうで何より。

うーむ……まあ、そういう事なら仕方ない、のか？

別にマグマがロリコンに目覚めたという訳ではなさそうだし。

マルティナは幸せそうだし、イグニという愛娘も生まれだし、もうそれでいいか。

それに、あの直情馬鹿の事だ。

義務感と責任感だけで、結婚して抱くなんて器用な真似ができる訳がない。

結婚したからには、抱いたからには、そこには確かな愛情がある筈なのだ。

実際、マグマは、この危険な作戦に赴くマルティナとイグニを心の底から心配していた。

私は、奴の家族への愛を既に確認している。

なら、もうそれでいい。

マグマをロリコンと罵るのはやめよう。

玉を潰すのもやめよう。

始まりがどうあれ、今は幸せな家庭を築いている事に変わりはないのだから。

私は、最初に思ったように、素直に弟子の結婚を祝福してやればいい。

マグマよ。

末永く爆発しろ。

「まあ、なんだ。末永くお幸せに……」

「敵襲！」

そんな、馴れ初めというか、惚気のような話を聞き終えた時、馬車の外から騎士の大声が聞こえてきた。

次いで、連続した爆発音が響く。

マルティナが身を固くした。

逆に、私の頭は瞬時に戦闘へと切り替わる。

直ぐ様、窓から馬車の外を確認。

そこには、いつか見たような黒装束の連中が、大挙して馬車に襲いかかっていた。

前に、そうクソ虫と対決した日の朝に、白昼堂々、王都のど真ん中で私達を襲ってきた連中とそっくりだ。

つまり、大臣の手先。

あの時と同じように、騎士達が仕留め損なった奴が自爆しているし、間違いないだろう。

騎士達は、さすがの腕前で割りとは余裕を持って迎撃しているが、自爆するなんて特殊な敵の相手はやりにくそうにしている。

今はどうにてもなっているが、ここにカゲトラが参戦してきたらキツそうだ。

そして、危惧していた存在が現れる。

紅色の刀を持った侍が、一直線にこちらへ向けて走って来るのが見えた。

来たな、カゲトラ！

予想通りだ。

飛んで火に入る夏の虫。

約束通り、ぶっ殺してやろう！

「ドレイクー！」

「おうー！」

ドレイクに声をかけ、同時に馬車の扉を開けて外に出る。

戦いに赴く、その刹那、

「リンネー！ がんばれ！」

背後から、そんなイグニの声が聞こえた。

私は無言で親指を立てる。

その言葉で元気100倍だ！

お祖父ちゃんに任せておけ！

必ず、お前らを守りきってやる！

そうして私は馬車から飛び出し、飛脚で空を駆ける。
騎士達を巻き込まないように、上空から角度をつけて、カゲトラへと先制攻撃を仕掛けた。

「飛劍・大嵐！」

「ぬう……！」

巨大な衝撃波に、カゲトラの体が吹き飛ばされる。

私は、神脚で加速しながらカゲトラを追いかけ、正面から斬りかかった。

それを、カゲトラは紅桜で受け止める。

しっかりと両腕で力を籠めて。

どうやら、腕の良い治療師に見てもらったようだな！

そして、剣と刀。

愛剣と紅桜。

二つの刃が、真っ向からぶつかり合った。

「待っていたぞ、カゲトラ！」

「天才劍士……なるほど、そういう事か」

自分が誘い込まれたという事に気づいたかのように、カゲトラは納得したような顔をした。

しかし、その顔に焦りはない。

そりやそうだ。

自分の命に頓着していない奴が、畏にハマったからといって焦る訳がない。

そのまま私の剣はカゲトラを吹き飛ばし、カゲトラもその力に抗わずに吹き飛ばされて距離を取った。

カゲトラは森の中へと突っ込み、私もそれを追いかけ、私達はその場で向き合う。

「さて……約束通り、今日ここで、お前を殺そう」

そう言っ私は、油断なく剣を構えた。

54 リンネ VS カゲトラ

私とカゲトラは、互いに武器を構え、睨み合う。

両者ともに隙はない。

故に、迂闊には手を出せない。

膠着状態のまま、時間だけが流れる。

こういう時、普段の私ならば、ガンガン攻めて無理矢理にでも隙を作り出すのだが、今回は少し事情が違うので、無理には攻めない。

何故なら、こうして膠着状態のまま時間が過ぎて、有利になるのは私の方だからだ。

私とカゲトラは睨み合ったまま動かないが、動いていないのは、あくまでも私達だけの話。

ドレイクや騎士達は、現在進行形でカゲトラ以外の敵と戦いを続けている。

そして、戦力差は圧倒的だ。

圧倒的にこちらが勝っている。

S級冒険者と腕利きの騎士という看板は伊達ではない。

これを突破できる戦力など、普通は用意できないのだ。

敵方に、カゲトラ並みの強者がもう一人いない限り、敵戦力はそう時間を置かずに駆逐される。

おそらく、敵の作戦は、雑魚を囷か肉壁にして、その隙に主力であるカゲトラが目的を達する事だったのだろう。

だが、こうして分断してしまえば意味がない。

囷も肉壁も、その裏に主力がいて初めて効果を発揮するもの。

単体で暴れても、どうにもならん。

無駄死にするだけだ。

つまり、待っていれば、私には増援が来る。

まあ、向こうの決着がついても、騎士達はどんな状況でも馬車の護衛を優先すると決めているから、こっちは来ない。

来るのはドレイクだけだろう。

だが、それで十分。

私とドレイクが揃えば、大抵の相手には勝てる。

それこそ、弟子どもが相手でも高確率で勝てるだろう。

そうやってしまえば、カゲトラの勝ち目は一気になくなる。

そして、それがわからないカゲトラではない。

必ず、向こうから仕掛けて来る。

私はその瞬間を待つ。

攻撃の瞬間には、必ず隙が出来るもの。

その隙を突き、後の先を取るのが、カウンターの基本。

私の性には合わないが、苦手という程でもない。

——私は元『劍神』。

終世に渡って、劍士の頂点に君臨し続けた者。

得意な型はあれど、苦手な型などない。

時間が過ぎる。

互いにフェイントを掛け合い、それを見破り、動かず、結果として

膠着したまま時間だけが過ぎる。

隙を見せれば一瞬で殺られる、極限の集中状態での睨み合い。

嵐の前の静けさ。

見せかけだけの静寂。

そして、——遂に均衡が破られる。

フェイントに紛れた本物の攻撃。

私は、カゲトラの動きの中から、確かにそれを見つけ出し、暴き出した。

見切った。

「四の太刀・刺竜！」

一瞬で間合いを詰められ、繰り出された鋭い突き。

だが、その技が放たれた時には、私は既に動いている。

もう、突きの直線上に私はいない。

足を動かし、最適の位置へと移動し、剣を振るって完璧な返し技を放つ。

「神速剣・空蟬！」

「くっ……!?!」

突き出した腕を切断するつもりで放った斬撃。

カゲトラはこれを、突きの勢いを利用し、体を無理矢理に捻る事で、直撃を避けた。

だが、その代償に、思いつきり体勢が崩れている。

その隙を見逃す私ではない。

「神速剣・槍牙！」

今度は私から突きを放つ。

カゲトラは、刀の腹でなんとか防いだが、突きの威力で、森の木々を薙ぎ倒しながら、後方へと吹き飛んでいく。

「破ッ！」

追撃しようと足を踏み出した瞬間、カゲトラが吹き飛ばされながらも、地面に強烈な蹴りを叩き込み、土砂を巻き上げて私の視界を遮る。

小賢しいぞ！

「神速飛剣！」

「飛剣・紅桜！」

「ぬっ!?!」

私の飛剣が、土砂の向こうから飛んで来た紅色の飛剣に斬り裂かれた。

あれは紅桜の能力！

圧倒的な切れ味は、飛剣にすら付与されるといふ事か！

これは、飛剣の撃ち合いでは絶対に勝てんな。

紅色の飛剣を避ける。

しかし、避ける為に動いてしまったせいで、追撃のタイミングを逃した。

おそらく、向こうの狙い通りに。

「飛剣・桜吹雪！」

続いて放たれたのは、前にも見た紅色の衝撃波。

紅色の嵐。

この技の破壊力は知っている。

まともに食らえば、闘気を纏う私でも大ダメージを受けるだろう。ならば、迎撃あるのみ！

「神速劍・一閃！」

真つ直ぐに振り下ろした劍が、紅色の衝撃波を斬り裂く。

二つに裂かれた衝撃波が、森を破壊していった。

周りの木々は、まるで本物の嵐が通り過ぎた後のように粉微塵になつたが、私の後ろだけは無事だ。

だが、助かったと安心していている場合ではない。

何故なら、衝撃波を足止め兼目眩ましとして使い、その隙に体勢を整えたカゲトラ自身が突撃してきたのだから。

「一の太刀・斬！」

「神速劍・流！」

良いタイミングで振るわれた紅桜を、劍速と技術に物を言わせて無理矢理に受け流す。

カウンター。

しかし、それは読まれていたのか、しっかりと受け止められる。

そして、そのまま、至近距離で真つ向からの斬り合いを演じた。

「ツ！」

「くっ！」

結果は、ほぼ互角。

力ではカゲトラの方が上。

速度と技術では私の方が上。

総合的な力では拮抗し、互いの斬撃が相手の体を掠め、互いに血を流す。

だが、こんな掠り傷で戦いは終わらない。

そして、あるタイミングで、まるで示し合わせたかのように劍と刀が正面から激突し、その衝撃を利用して、両者ともに距離を取った。

「……良い劍を手に入れたようだな。紅桜とこれだけ打ち合つて、まだ折れぬとは」

カゲトラが口を開く。

確かに、私の新しい愛劍は結構な刃こぼれこそしているものの、紅桜を相手にしてまだ折れていない。

実に頼もしいものだ。

「お前が前に狙った爺さんからの貰い物だ。辻斬りを斬るには相応しい剣だと思うが？」

「フツ。たしかにな」

戦いの合間に、軽口を叩き合う。

当然、言葉の裏では、互いに隙を探り合い、殺気をぶつけ合っている。

そこに、穏やかな雰囲気など欠片もない。

だと言うのに。

カゲトラは、何故か笑っていた。

楽しそうに。

嬉しそうに。

生気のない顔を歪めて笑った。

……私、そんなに、おもしろい事言ったか？

「何がおかしい？」

「いいや、おかしいのではない。

嬉しいのだ。

よもや、ここまで堕ちた身で、ここまで心踊る戦いに巡り会えるとは思わなかった」

「はあ？」

何を言うかと思えば。

こいつ、ライゾウと同じ戦闘狂か？

いや、もしかして侍って奴は、全員がこんな感じの武人なんだろうか？

私は、戦いを楽しいと感じた事はない。

試合なんかを楽しんだ事はあるが、命懸けの^{殺し合い}実戦を楽しんだ事など、一度としてない。

当然だろう。

負ければ死ぬんだぞ。

大切な者達を悲しませるんだぞ。

そんな悲劇と紙一重の戦いを、どうして楽しめる。

「共感できんな」

「フツ。まあ、女にはわかるまい」

元男だが、わからんぞ。

だが、いるんだよな。

広い世の中には、そういう輩も。

しかも、割と大量に。

「……まあ、共感はできんが、私は、お前みたいな人種にも多少の理解はある。

だから、せいぜい楽しんでおけ。

人生最後の戦いをな」

「ああ。そうさせてもらおう」

さて、仕切り直しだ。

互いに少しダメージを受けたが、状況は振り出しに戻った。

ここから、どう戦うか。

さっきのように、カゲトラから仕掛けて来るのを待つのも悪くはないだろう。

あれが有効な戦術であった事は確かだ。

状況は変わっていない。

時間を稼げば、ドレイクが来る。

だが、それは私らしくない。

私本来のスタイルは、圧倒的な剣速で先の先を取り続け、相手に何もさせずに勝利する速攻だ。

もちろん、この戦法はリスクを伴う。

格上相手であつても倒しきれぬ可能性を秘めているが、攻めが乱暴になれば、逆に付け入る隙を与えてしまう。

カゲトラ相手に攻めなかつたのは、決して奴をなめているからではない。

逆だ。

私を殺しうる強敵と認めているからこそ、確実性の高い戦い方を選んだ。

それを間違いだつたとは思わない。

しかし、少し及び腰になっていたのも事実だ。

思えば、カゲトラは私にとって、随分と久しぶりに現れた強敵。ここまで実力の近い剣士と命のやり取りをしたのは、本当に久しぶりだ。

アレクとの戦いは、死合ではあっても殺し合いとまでは言えなかった。

その前、オーガやドラゴンと戦った時も死にかけたが、やはり魔物相手と人間相手では違う。

野生の本能に任せて暴れる魔物よりも、洗練された技を持つ『達人』の方が強い。

少なくとも、私にとっては、後者の方が厄介だ。

私は今、そんな相手と剣を交えている。

『剣神』になって以来、私は同格以上の相手と戦う機会がなかった。あの頃の私は『最強』だったからな。

並び立つ者がいなかったのも当然の話だ。

だが、私は弱くなった。

老い衰え、死に、転生して、弱くなった。

もはや私は『最強』ではなく、目の前には同格の敵がいる。

実に数十年ぶりに体験した、同格の剣士との殺し合い。

気を抜けば、瞬く間に首が飛ぶだろう。

それ程までに近づいてきた『死』の影。

それが、私を無意識の内に慎重に、臆病にしていた。

それでは、いけない。

戦場で臆すれば、命を持っていかれる。

慎重であるのは悪い事ではない。

だが、臆した剣では逆に勝率を下げる。

さつき、飛剣を斬り裂かれた時がいい例だ。

あの時、避けるのではなく、受け流しながら懐に入っていれば、主導権を相手に渡す事はなかったかもしれない。

臆病になって身を縮めれば、勝てる戦いにも勝てなくなる。

「ふう」

軽く息を吐き出し、覚悟を決める。

私の雰囲気が変わったのを察したのか、カゲトラがより一層警戒するように目を細めた。

その意識が切り替わる一瞬の隙を突き、私は神脚で間合いを詰めた。

「ッ!?!」

「神速剣・一閃!」

カゲトラは、どちらかと言えばカウンターを警戒していたのだろう。

だからこそ、私から攻める状況に対して、ほんの僅かに対処が遅れた。

だが、私を相手に、その僅かな遅れは致命的だ。

「神速剣・五月雨!」

「五の太刀・柳!」

神速の連続斬りを、カゲトラは流に似た技で受け流す。

その最中。

私は受け流す為に添えられた紅桜を、逆に剣で押さえつけ、体格差を活かして懐に入った。

「神速拳!」

「ぐはっ!?!」

そして、左手を剣から離し、渾身のボディブローを叩き込む。

闘気の鎧を貫き、確実に肋骨あたりを何本かへし折った手応えがあった。

カゲトラが拳の威力で吹き飛んでいく。

追撃だ!

「飛剣・紅桜!」

カゲトラが、崩れた体勢から無理矢理に紅桜を振り抜き、紅色の飛剣を放つ。

それを避ければ、さつきと同じだ。

だが、私をなめるな!

「神速剣・流!」

「ぬっ!?!」

前に出ながら紅色の飛剣を受け流し、欠片も速度を緩めずに肉薄した。

カゲトラは、吹き飛ばされている上に、無理に刀を振るった反動で、体勢が崩れきっている。

これ以上ない好機！

ここで決める！

「神速剣・破断！」

「ぐお……！」

真上から、威力特化の神速剣を振り下ろす。

カゲトラは、紅桜の柄を右手で、峰の部分を左手で持つてそれを受け止めようとしたが、受け切れる筈もなく、私の剣が紅桜を押し潰して沈んでいく。

そして遂に、——カゲトラの右腕が、根元から両断された。

斬り飛ばされた右腕が、その手に握られた紅桜が、クルクルと宙を舞いながら、近くの地面に突き刺さる。

だが、それを見届ける前に私は……

「ぐっ……!?!」

カゲトラの左拳に真横から頬を殴られ、弾き飛ばされた。

木々を薙ぎ倒しながら吹き飛び、地面にめり込んで、ようやく停止する。

「べっ」

そして、口の中の物を吐き出した。

血と、歯が何本か地面に突き出される。

口の端を血が伝っていく。

それを乱暴にぬぐい取り、カゲトラの所へと急いで戻る。

戻った時、カゲトラは腰に差した鞘を、残った左手で構えて、待っていた。

「……なんだ。紅桜がなくても、立派な剣士じゃないか」

私は思わず、そんな事を口走った。

喋るだけで口の中が痛い、そんなものは気にもならん。

カゲトラも、右腕と紅桜を失ったというのに、どこかスッキリとし

た顔をしているように見えた。
そう。

まるで、呪縛から解放されたかのような、スッキリとした顔を。

「呪いは解けたのか？」

「……かもしれん。とても頭が冴えている」

「そうか」

紅桜を手放したからかね。

私は、腕と一緒に、呪いの鎖まで断ち斬ったのかもな。

「なら、一度だけ聞く。投降する気はあるか？」

「否だ。死するのならば、武人として死にたい」

「そうか」

落胆はない。

そう言うような気はしていた。

おそらく、カゲトラは投降しても死ぬだろう。

貴族を含めた何人もの有力者を殺してきた罪は重い。

極刑は避けられない。

ならば、ここで戦って散る。

理解できなくもない。

それに、おそらくだが、カゲトラは普通に投降する事すらできない
のではないかとも思う。

他の連中に仕込まれていた、あの自爆する仕掛け。

それが、カゲトラの体内にも仕込まれていたとしても、なんら不思議
ではない。

カゲトラの今の主、大臣は腐りきった性格をしてるみたいだから
な。

口封じくらいするだろう。

ならば、約束通り、私がここで引導を渡してやる。

「行くぞ」

「来い」

私は剣を上段に構え、カゲトラは鞘を腰だめに、居合いのような形
で構える。

そして、私は突撃した。

これが最後だと、そんな確信を抱きながら。

「神速剣——」

「三の太刀——」

神脚により、私達の距離は一瞬で近づく。

その刹那。

カゲトラと目が合ったような気がした。

とても穏やかな、感謝するような目をしていたような気がした。

「一閃！」

「孤月！」

そして、互いの一撃が放たれる。

一瞬の交差を終えた直後。

「見事だ」

背後から、カゲトラのそんな声と、地面に倒れる音が聞こえた。

振り向けば、体を袈裟懸けに両断され、血溜まりの中に沈むカゲトラの姿がある。

その目に、既に光はない。

カゲトラは、死んだのだ。

だが、その顔は、どこか満足そうな微笑みを浮かべていた。

「……お前も見事だった」

カゲトラの亡骸に、そう語りかける。

意識するのは、脇腹に生じた微かな痛み。

届いていたのだ。

カゲトラの最後の一撃は、確かに私に届いていた。

紅桜を失い、右腕を失い、それでも尚この剣士の一撃は、元世界最強の剣士に届いた。

「……………」

私は無言で腰の道具入れから、冒険者セット一式の一つ、火を起す魔道具である小さな杖を取り出し、カゲトラの亡骸へと向けた。

魔道具から放たれた炎が、カゲトラの亡骸を燃やしていく。

火葬して、吊っていく。

『斬……り……コ……コ……』

そうして、紅桜の声は聞こえなくなった。
ふん。

元剣神の精神力をなめるな。

その後、燃え尽きて骨だけとなったカゲトラの亡骸を、穴を掘って埋め、茶毘にふした。

ついでに、紅桜の鞆も回収しておく。

と、その時、

「嬢ちゃん！ 助けに来たぞ！」

向こうの戦闘が片付いたのか、ようやくドレイクが応援に来た。

遅いわ。

「あれ？ 嬢ちゃん、辻斬りは？」

「殺した。もう終わったぞ」

「ええ……」

なんだ、その微妙な顔は。

お前が遅いのが悪い。

私は悪くないぞ。

「ほれ、戻るぞ」

「釈然としねえな……」

そうして、私とドレイクは馬車へと戻る為に歩き出した。

最後に、もう一度だけ振り返る。

カゲトラが埋まっている（火葬した跡？）辺りを見る。

「……………」

「ん？ どうした、嬢ちゃん？」

「……………いや、なんでもない」

感傷を振り切るように、私は再び歩き出した。

死闘を演じた強敵に、心の中で黙禱を捧げながら。

こうして、王都を騒がせた辻斬り騒動は、幕を降ろした。



リンネが去ってしばらくした後。

カゲトラが埋葬された場所に、近づく影があった。

「どうも〜！ お久しぶりです、カゲトラさくん！ いや、そんなにお久しぶりでもないですかね！ アツハツハ！」

死人の埋まった地面の上で、不謹慎にもテンションを上げる不気味な男。

フード付きの真っ黒な外套を羽織り、笑顔を模した黒い不気味な仮面を付けた怪しい風体。

それは、シャドウと呼ばれた王国の敵であった。

「見てましたよ〜！ カゲトラさんの名勝負！」

いんや〜、素晴らしい〜！

相手があの子だった事と言い、この国に留まって良かったと思える程、良いもの見れました！」

シャドウはパチパチと手を叩き、地面の下に埋まったカゲトラに向けて拍手を送る。

そして……

「では、そろそろ始めますか。」

モリメットさくん。やっちゃってください」

シャドウの指示に従い、モリメットと呼ばれた巨漢の男が動き出す。

彼らの行いを見ていた者は、誰もいない。

55 辻斬り騒動の後で

「リンネ様、ドレイク様、この度は本当にありがとうございました」
「よくやった！」

カゲトラを仕留めた後、それ以上の襲撃はなく、無事にマルティナとイグニを目的地まで送り届けた。

マルティナは深々と頭を下げ、イグニはどことなく上から目線で労ってくれた。

そんなイグニも、実に可愛い。

抱き締めた。

嫌がられた。

お祖父ちゃんは悲しい。

「な、なに、お前達を助けるのは当然の事だからな。

また、何かあったら頼れ」

「フフ。では、その時はお言葉に甘えさせていただきますね」

マルティナの後ろから威嚇してくるイグニの姿にダメージを受けつつ、マルティナと言葉を交わした。

こいつらは、私にとって身内に等しい。

身内が困っていたら助ける。

当たり前前的事だ。

これからも、仲良くやっていきたい。

「では、またな」

「はい。道中、お気を付けて」

そう。

私達は、もう王都に戻る。

二人とは、ここでお別れなのだ。

まあ、マルティナ達も、そう長い事こっちに留まる訳ではないし、じきに王都に帰って来る。

そうしたら、いつでも会えるようになるさ。

だから、寂しくはない。

「ほら、イグニ。お札を言いなさい」

「うー……」

最後に、マルティナが背後に隠れたイグニを引っ張り出してくれた。

そしてイグニは、数秒うーうーと唸った後に、プイツとそっぽを向きながらボソツと言った。

「あ、ありがとう」

可愛い。

尊い。

そっぽを向きながら、若干顔を赤くしている姿は、まるで素直にない反抗期の子供のようで、凄まじく可愛い。

抱き締めたい。

だが、落ち着けリンネ。

ここで抱き締めては、同じ事の繰り返しだ。

私は学習する女。

別れの時まで孫に嫌われたくはない。

私はポストと、イグニの頭に優しく手を置くに留めた。

「どういたしました」

そして、穏やかな笑顔でそう言った。

この子を守れて本当に良かった。

本心から、そう思いながら。

イグニは、そんな私の手を払いのけなかった。

「じゃあ、またな」

「ん」

そうして、二人に別れを告げ、私はドレイクと共に王都への帰路を歩き始めたのだった。



「ドレイク。今回は助かったぞ」

「ハッ。ほぼ嬢ちゃん一人で解決してたじゃねえか」
帰り道。

私は乗合馬車の中で、ドレイクに話しかけていた。
まあ、結果だけで言えばドレイクの言う通りなんだが、それでも私は、ドレイクを連れて来たのが無駄だったとは思わない。
「お前がいたから、私は辻斬りとの戦いに専念できたんだ。感謝してる」

「……ふん」

素直に感謝の言葉を伝えると、ドレイクは決まり悪そうにそつぽを向いてしまった。

イグニと違って、全然可愛くないな。

おっさんがやっても絵にならん。

「……まあ、嬢ちゃんが何も言わずに一人で行くよりは良かったと思っておく。

今回は大して力になれなかったが、それでも、また何かあったら頼れよ。

何も聞かされずに、気づいたら嬢ちゃんが死んでたなんて事になったら嫌だからな」

「ああ」

こいつは頼りになる。

その時は、また声をかけよう。

「そういえば、ドレイクはこれからどうするんだ？」

辻斬りも倒したし、またフラフラと、どこぞの街に行くのか？」

「いや、もうしばらく王都に留まるつもりだ。

旅立つのは、武闘大会を見学してからだな。

嬢ちゃんと『剣聖』の戦いには興味がある」

ああ、そういえばもうすぐだったな、武闘大会。

今回の件で、またしても学校をサボったから、今一大会が近づいているという実感に欠けていた。

そして、剣聖か。

スカーレットの話だと、剣聖も留学生とはいえ騎士学校の生徒なん

だから、強制参加の武闘大会には出てくる筈だ。

まだまだ若造とはいえ、教国最強の剣士。

気を引き締めてかかる必要があるな。

まあ、今回と違って殺し合いではないのだから、そこまで張り詰める必要もないだろうが。

「あとは『風の貴公子』あたりも有望株だな。

去年の大会では、一応とはいえ剣聖に勝ってる奴だ。

油断してると、嬢ちゃんもやられちまうかもしれないぞ」

「風の貴公子？」

聞かない名前だな。

誰だ、そいつ？

「たしか、フオルテって名前だったか？ 貴族のボンボンって話は聞いたな」

「ああ、クソ虫の事か」

「クソ虫!？」

考えてみれば、あいつも強敵と言えば強敵なのか。

私からすれば余裕だが、アリスやシオンからすれば、まだまだ敗色濃厚な相手だろうしな。

それに、若者というやつは、時に短期間で予想外の成長を遂げる事がある。

前回の屈辱をバネに急成長してくる可能性もあるのだ。

というか、あいつ剣聖に勝ってたのか。

おや？

という事は、剣聖は意外と大した事ない？

……まあ、なんにせよ、クソ虫に関しても要警戒だな。

万一、大会で私達への雪辱を果たしたら、またデカイ顔してアリスに絡んでくるかもしれないし。

今度こそ、衆人環視の前で完膚なきまでに叩き潰し、心を折ってやるとするか。

「ま、まあ、なんにせよ、頑張れよ嬢ちゃん」

「うむ。……ん？ というか、ドレイクは参加しないのか？」

「ああ、俺はやめておくさ。引退間際のおっさんが若者に交ざるのはキツイんでな」

その理屈で言うとな、引退どころか一回死んだ爺が若者に交ざるというのも……いや、今の私は美少女だ。

天才剣士リンネちゃんだ。

ならば、なんの問題もないな。

と、そうして、とりとめのない話をしている内に馬車は進み、中継地点の街や村で何泊かしてから、私達を王都へと帰って来たのだ。た。



王都へと戻った後。

ちよつと思いついてヤコブの爺さんの所に寄り、空間収納の魔道具を買って、その中に紅桜をぶち込んで封印した。

空間収納の魔道具は、超高級品だけあってさすがに高かったが、必要経費だと思っておこう。

紅桜なんて超危険物、そこら辺に捨てておく訳にもいかないからな。

で、その後。

ドレイクが今回の祝勝会をしたいと言うので、一番馴染み深い酒場、冒険者ギルドにやって来た。

マグマへの報告は後でいい。

マルティナが早馬で手紙を出してたから、家族の無事と、辻斬りが討伐された事は知ってるだろうからな。

で、冒険者ギルドに辿り着いた頃には、時刻は夕方。

学校はとうに終わっている放課後の時間。

そして、ギルドに入ると、見知った顔が二人いたので、せっかくだ

から声をかけた。

「ええ!? カゲトラ殿を倒してしまったのでござるか!？」

それが、今声を荒げたライゾウと、ボロボロになったシオンだった。どうやら、シオンはここ数日、ライゾウに修行をつけてもらっていたらしい。

探せど探せどカゲトラを見つけれないライゾウとギルドで再会し、ライゾウの息抜きを兼ねて、シオンが修行の話を持ちかけたんだとか。

ライゾウは、そこそこ強いシオンと戦えてハッピー。

シオンは強くなれてハッピー。

ウインウインの関係という訳だ。

そういう取引がでるようになっていたとは、シオンのコミユカも上がったものだな。

昔は、ただのボッチだっというのに。

で、修行の後に一緒に飯を食ってたら私達が現れたと。

そこでカゲトラを仕留めてきた話をしたところ、ライゾウが驚愕した訳だ。

まあ、狙ってた獲物を、横からかつさらわれたようなもんだしな。

「何故、拙者を誘ってくださらなかつたのでござるか!？」

「いや、お前、絶対目立つじやん。そしたら、カゲトラが出て来ないと思っただよ」

「うっ!？」

心当たりがあり過ぎるのか、ライゾウは反論もできずに黙った。

一応は、自分を客観的に見れているらしい。

それに、そもそもライゾウが勝手にカゲトラを獲物認定していただけであって、私達がそれに遠慮する必要などないのだ。

故に、文句は受け付けない。

「リンネ」

ライゾウが意気消沈して崩れ落ち、ドレイクにドンマイとばかりに肩を叩かれていると、今度はシオンが私に話しかけてきた。

……なんとなく言わんとしている事はわかる。

「お前はまた、勝手にそんな事を」

「い、いや、勝手にではないぞ！ 一応、ちゃんと正式に決定した作戦だったし！」

シオンは少し怒っていた。

まあ、それも当然と言えば当然だろう。

今回、シオンには何も伝えてないからな。

知らん内に友が死地に赴いていたとなれば、そりゃ怒りもする。

しかも、シオンに声をかけなかった理由が理由だ。

実力不足だから置いて行った。

シオンは、言わずとも、それを察しているのだろう。

その証拠に、シオンは怒りつつ、凄い不機嫌そうな顔になっている。

「……はあ。まあ、力不足の俺に何かを言う資格はない。

だから、俺は何も言わないでおく。

だが、アリスあたりは何か言うかもな。覚悟しておけ」

「うぐっ!？」

シオンの言葉は、私の胸に深く突き刺さった。

そうだった。

今回の話をアリスが知れば、どんな反応をする事か……。

ああ、想像するだけで胸が痛い。

まあ、アリスも騎士の娘。

身内が危険な仕事をする事には理解があるだろうし、極秘作戦という事で自分に伝えられない事もあるとわかつてはいるだろう。

しかし、理解する事と、納得する事は別。

もつと言えば、納得する事と、それでどんな感情を抱くのかという事も、また別だ。

悲しい顔をされるかもしれん。

うっ！

胸が張り裂けそうだ！

だが、言わなければならん。

ずっと秘密にされた方が、もつと辛いだろうからな。

とりあえず、今日中に寮に行って話そう。

そして、全力で機嫌を取ろう。
うむ。

それが良い。

むしろ、それしかないな。

「うう……カゲトラ殿おー！」

「いい加減、落ち着けつての」

私が心の中でアリスに平謝りしていると、ライゾウが何故か泣いていた。

ドレイクが、しょうがねえなどでも言わんばかりに、背中を擦っている。

ライゾウ、お前……まさか、カゲトラの事が好きだったのか？

そっち系というやつか？

と思つたら、ライゾウの側には酒の入ったコップが置かれていた。

どうやら、酔ってるだけのようだ。

「ライゾウよお。そんなに強い奴と戦いてえなら、武闘大会にでも出てみたらどうだ？

そしたら、嬢ちゃんとか『剣聖』とかとも戦えるぜ？」

「それができたら苦労はないでござるー！」

ドレイクが至極もつともな事を言つて宥めたが、ライゾウは何故かキレた。

酒に弱いのだろうか？

「拙者、主に呼ばれてしまったのでござるよ！ 故に、すぐにでも戻らねばならぬのでござる！」

大会に出る時間などないのでござるよ！」

ああ。

そういえばこいつ、流浪の武芸者とか名乗ってたくせに主がいるんだつたな。

カゲトラの話だと、ライゾウは和国の名門出身みたいだし、色々あるのだろう。

……というか、すぐにでも戻らなければならんのなら、こんな所で飲んでていいのだろうか？

「そうだ！ リンネ殿！ 最後にどうか一戦！」

「酔っぱらいの相手をする気はないぞ。」

一度はカゲトラとも戦えたんだから、それで満足しとけ」

「そんな、ご無体なあああ！」

煩い。

尚もライゾウは騒いだので、「わかった、わかった、また今度な」と言って煙に巻いておいた。

まあ、また会う事があつたら、戦つてやるのもやぶさかではない。今回はことごとくタイミングが合わなかったが、別に試合くらいなら断る理由もないのだから。

そして、宴もたけなわ、祝勝会というより、ライゾウの送別会のようになってしまったプチ宴会も終わり、

ドレイクは宿へ。

私とシオンは寮へ。

そして、ライゾウはどこかへと帰る。

「リンネ殿！ 約束でござるからな！ 次に会った時は、勝負でござる！」

「わかった、わかった」

去り際に、ライゾウはそんな感じの宣言をして、そして、酔っているとは思えないしつかりとした足取りで去って行った。

なんとというか、ライゾウは最後までライゾウだったな。

「さて、私達も帰るか。またな、ドレイク」

「おう。嬢ちゃん達も元気だな」

そうして、ドレイクとも別れを済ませ、私達も寮へと引き上げたのだった。

56 裏で

「そうですか。カゲトラが死にましたか」

王都にある屋敷の一つ。

アクロイド公爵家において、この家の当主、ピエール・アクロイドは、淡々とした様子でカゲトラが死亡したという報告を聞いていた。その顔に悲しみはない。

ある筈もない。

ピエールが感じている唯一の感情は、——失望であった。

「情けない。せつかく目をかけてやったというのに、こんなにあつさり死んでしまうとは。

役立たずですねえ。

まあ、所詮は平民という事でしょう」

自分の為に尽くしてくれた者に対して、この言い様。

真性のクズであった。

しかも、吐き捨てるように「プロミネンスの奥方は楽しみにしていたというのに」と呟いているところが、なお一層タチが悪い。

真性のゲスであった。

「まあ、いいでしょう。カゲトラがいなくとも、どうとでもなります。

それに、暗殺者の代わりくらい、いくらでもいますしねえ」

カゲトラがおらずとも、自分には帝国の後ろ楯がある。

小飼の暗殺者も、使い捨ての道具も、まだまだ大量にいる。

さすがに、カゲトラに比べれば大きく質は落ちるだろうが、ピエールは大して心配していなかった。

自分は公爵。

そして、未来の国王。

栄光の未来が約束されているのだ。

有能な道具を一つ失った程度で、自分の立場は崩れない。

どうせ最後には全て上手くいく。

「私はもう寝ます。女どもを寝室に連れて来なさい」

「ハッ」

そんな根拠のない自信を胸に、ピエールは今日も惰眠を貪る。欲に溺れ、まだ見ぬ未来を思いながら、眠りにつく。

その行為の一つ一つが、自分の首を確実に絞めているとも知らずに。

いや、知っていたとしても、どうにかなると楽観して。

この愚かな男が報いを受けるのは、そう遠くない未来での出来事である。



リンネ達との別れを済ませたライゾウは、その足で王都を離れ、街道を歩いていった。

時刻は既に夜。

定期的に騎士や兵士によって魔物が狩られ、それなりに安全が保証された王都周辺とはいえ、危ない時間帯であった。

まあ、ライゾウ程の戦闘力があれば、さしたる問題でもないのだが。そうして、しばらく街道を進んだライゾウは、ふとした拍子に道を外れ、近隣の森の中へと入る。

わざわざ、自分から夜の森に入るなど、自殺行為とまではいえないが、危険な行いには変わりない。

ライゾウの戦闘力ならば問題はないだろうが、それでも普通に考えれば、無駄にリスクを増やす行いでしかない。

そう。

普通に考えれば。

ライゾウは、まるで人目を避けるかのように移動し、周囲に人の気配がない事を確認してから、懐に手を入れた。

そこから出てきたのは、中心に二つの特殊な石、魔石の嵌められた腕輪であった。

二つの魔石の内、片方が淡く光って点滅している。

ライゾウが腕輪に魔力を送り込むと、もう片方の魔石も光り、点滅を始めた。

この腕輪の正体は、とある特殊な魔道具である。

この腕輪を子機と例えるならば、対となる親機と言える魔道具がある。

そして、親機からの信号を受信すると魔石の一つが光り、こちらから魔力を流すと、もう一つの魔石が光る。

そして、親機の元へと信号が送られ、この腕輪の位置情報を報せるのだ。

原理としては、国や冒険者ギルドの所有している通信の魔道具と同じである。

通常、この手の魔道具は、国の許可を得て特殊な仕掛けを施さない限りは、街を覆う対魔法結界に信号を弾かれてしまい、機能しない。

だが、ライゾウの持つこの腕輪は、ライゾウが王都に滞在していた時から光り続けている。

つまり、この魔道具の力は、結界を貫通するのだ。

それだけの事ができる魔道具は少ない。

それこそ、この腕輪は、国宝級の価値を秘めていた。

そんな腕輪が信号を送る先はどこなのか。

答えはすぐに証明された。

ライゾウが腕輪に魔力を籠めて少しした頃、ライゾウのすぐ側で空間の歪みが発生し、そこから二人の男が現れた。

希少な空間魔法による転移。

カゲトラが使った紛い物の魔道具による効果ではない。

しっかりと座標を指定して飛んできた。

それこそが、今の転移が本家の空間魔法使いによつてなされた現象であるという、何よりの証拠。

だが、そんな事すら霞む、衝撃の光景がそこにはあった。

空間の歪みから出てきた二人の男。

一人は、フルフェイスの兜を被った、上半身裸の巨漢。

そして、もう一人は……

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！ どうもく！ お久しぶりですね、ライゾウさん！」

「久しぶりでござるな、シャドウ殿」

ライゾウに対して、酷く陽気でおどけた挨拶をする、全身黒ずくめの仮面の男。

それは、度々王国を狙う事件の裏に現れる存在。

帝国の走狗。

シャドウであった。

「まったくもく！ 返信が遅いですよ、ライゾウさん！ どこで何してたんですか！」

「いや、誠に申し訳ない。実は、新しく出来た友人と飲んでいたのでござるよ」

「えー……ライゾウさん、ワタシが言うのもなんですが、もうちょっと真面目に仕事しましょうよ」

「拙者、有事の際以外は好きにしたいと言われております故！」

「あー、そうでしたね！ うつらやましー！」

親しげな様子で会話をする二人。

そこに敵意はない。

言葉の裏に忍ばせた悪意もない。

まるで二人は、仲の良い同僚のようであった。

「さてさて。お喋りもこのくらいにしましょうか。」

本題ですが、陛下から十二神将全員に召集命令が下された感じですよ。

という訳で、一緒に来て下さいね」

「承知したでござる。しかし、何故、今？」

「陛下の容態が安定してきたって事ですよ」。

そろそろ本格的に動く予定らしいので、いつでも動かせるように十二神将を手元に置いておきたいんですよ。

まあ、別任務についてる人は例外ですけどね」

「なるほど。……しかし、それだと、しばらくは窮屈な生活になりそう

でござるな」

「文句言わない！」

ライゾウを論破しながら、シャドウは凄まじい速さで魔法を作り上げていく。

さつきも使った、転移の魔法を。

「ではでは！ 早速、帰還しますよ〜！ 転移！」

シャドウが魔法を発動させ、空間の歪みが発生する。

それに呑み込まれて、彼らの姿は消え失せたのだった。

57 そして、次の戦いへ

寮へと戻ってシオンと別れ、自分の部屋に荷物を置いた後、私は意を決してアリスの部屋を訪れた。

深呼吸して心を落ち着かせ、ドアをノックする。

コンコンという音が鳴り、中から「はくい」と可愛らしい返事が聞こえてきた。

「どちら様ですか？」

「リンネだ」

「あ、リンネちゃん。今、開けますね」

ガチャリと鍵が開けられ、ドアが開く。

そして、中からアリスが現れた。

「お疲れ様でした。どうぞ、上がってください」

「う、うむ」

アリスに連れられて、部屋の中に入る。

部屋の構造は二人部屋だが、アリスも特別生なので、私やシオンと同じように、二人部屋を一人で使っている。

実質、一人部屋だ。

ルームメイトがいないと、こういう身内同士の話をする時に便利だな。

……しかし。

「今、お茶を入れますね」

そう言つて、お茶を用意し始めるアリスをチラリと見る。

……普通だ。

前に遊びに来た時と同じ、いつも通りの対応だ。

もしかして、今回の件を聞かされていないのだろうか？

「あの、アリス……」

「はい。紅茶です。」

……辻斬り退治、お疲れ様でした。ゆっくりして行ってください
ね」

知ってた。

だが、その上でアリスは何も言わない。

しかも、なんか、慈愛に満ちた目で私を見てるんだが。と、とりあえず紅茶をいただこう。

「あちっ!？」

「大丈夫ですか!？」

うっかり舌を火傷した。

アリスが慌てて治療魔法をかけてくれる。

油断した。

まさか、この私が、こんな事でダメージを受けるとは。

どうやら、少し動揺しているようだ。

「……アリスは知ってたんだな。私が辻斬り退治に行ってた事」

「はい。お母様から聞きました。極秘作戦との事だったので、詳細は後になってから聞かされましたが」

「……怒らないのか?」

「え? 何をですか?」

いや、それはほら……

「お前に何も言わずに行つた事とか」

「ああ……そういう事ですか。怒りませんよ。大事なお仕事だったんでしよう?」

なら、私から言えるのは、お疲れ様でしたと、無事に帰って来てくれて何より、という事だけです」

……良い子だ。

凄良い子だ。

なんと尊い。

だが、

「もつとこう、色々言ってくれてもいいんだぞ?」

なんで、なんにも言ってくれなかつたんですか! とか。

また勝手に危ない事して! とか」

「ええ……リンネちゃんは怒ってほしいんですか?」

「いや、そういう訳じゃないんだが」

言いたい事があるならぶつけてくれという意味だ。

そう告げると、アリスは「うん……」と可愛く唸り、やがて何かを閃いたようにハツとした。

「じゃあ、今夜は一緒に寝てください」

「ふあ？」

ど、どういう事だ!?

それでは、ただのご褒美なんだが!

まあ、アリスがそうしたいと言うのなら、私に否はないが。

その後、他愛もない話をしたり、一緒に料理をして私が盛大に足を引つ張ったり、お風呂に入ったりした後、少し早めの時間に就寝。

いつもは私がアリスを抱き締めるのだが、今日は逆にアリスの方から抱き締めてきた。

後ろから抱き締められている今の私は、サイズ的な問題もあって、まるで抱き枕のようだ。

もしくは、ぬいぐるみ。

年齢的に、私の体はアリスよりも小さいから、むしろ、こっちの方がしつくりくるような気がする。

「……リンネちゃん。私も不安じゃなかった訳ではないんですよ」

私を抱き締めながら、アリスはポツリとそう言った。

その腕が、少しだけ震えていた。

「家族とか、知り合いとかが戦いに赴くのは慣れてます。

でも……心配はするに決まっています」

「……ああ」

私は小さく返事をしながら、アリスの腕をポンポンと優しく叩いた。

宥めるように。

安心させるように。

「リンネちゃん……無事に帰って来てくれて、本当に良かったです」
「ああ」

私はアリスを宥め続ける。

アリスは、私がそこにいる事を確かめるように、ずっと抱き着いてきた。

そうしている内に、ふと思い至る。
そうだ。

アリスに言い忘れていた言葉がある。

「アリス」

「なんですか?」

私は、凄く優しい声で、こう言った。

「ただいま」

「……はい。お帰りなさい」

そんなやり取りをしてから割りとすぐに、アリスは安心したように眠りに落ちたのだった。



翌日。

孫娘成分をこれでもかと吸収して絶好調の私は、ダルい授業を難なく攻略し、昼休みにスカーレット達に今回の顛末を話してダベリ、放課後、ユーリに呼び出された。

呼び出された場所はナイトソード家。

ユーリの他に、アレクとマグマもいた。

辻斬り退治の詳細報告が聞きたいのだろう。

どうやら、呼び出しの目的は、学校をサボりまくってる私への生活指導ではないようだ。

「リンネ、まずは礼を言っとく。家族を守ってくれて感謝するぜ」

そう言つて、マグマは頭を下げた。

その顔は、心底ホツとしたように緩んでおり、同時に心から私に感謝しているのが伝わってきた。

その姿は、家族の事を思う、一人の立派なお父さんに見えた。

「マグマ、これだけは言っておく」

そんなマグマに対し、私はとてつもなく真剣に告げた。

「末永く爆発しろ、このロリコン野郎が」

「お、おう」

私の、責めてるのか祝福してるのかわからない言葉を聞いて、マグマは萎縮した。

一応、自分がやらかした事は自覚しているらしい。

なら、まあ、許してやろう。

マルティナも幸せそうだったし、イグニは可愛かったし。

13歳を孕ませた件に関しては不問にしてやる。

寛大な処置に感謝せよ。

「まあ、マグマのロリコン問題については置いておきましょう。

それこそ、結婚当時から、さんざん議論された事だしね。

それよりも、今は辻斬りの話でしょう?」

「ユーリの言う通りだね。

リンネさん、今回は本当にありがとうございます。

これで辻斬りの犠牲者はいなくなりますし、それに大臣の力を大きく削ぐ事ができました。

アクロイド家の取り潰しも、より一層捗るでしょう」

「……ああ、そうだな」

カゲトラの身の上話を聞いた身としては、奴を斬った事を手放しに喜ぶ気にはなれない。

だが、それはそれ、これはこれだ。

あいつは倒すべき敵であり、あいつが死んだ事でこの先の犠牲者はいなくなり、アレク達は有利になった。

喜べはしなくとも、これで良かったのだと割り切る事はできる。

「浮かない顔ね。どうしたの?」

しかし、やはり、ちよつとした不満が顔に出てしまったらしい。

ユーリが目敏く、それを言い当ててきた。

「……ちよつと辻斬りと話す機会があつて、その人柄を知ってしまつてな。

少しだけやりきれないと思っただけだ」

「珍しいわね。敵に情けは無用とか言つてたくせに」

「まあな。私も毫碌したという事だろう」

それに、カゲトラは凶悪な辻斬りだったが、身内が被害に合った訳ではないし、誰かがカゲトラに殺される場面を目撃した訳でもない。私だって人間だ。

見た事も会った事もない被害者の為に、そこまで怒る事はできない。

帝国の時とは違うのだ。

それでも、戦闘中は情け容赦なく殺しに行っただから、情に流された訳ではないと思うがな。

「聞くか？ 辻斬りの身の上話。あまり気分の良い話ではないし、無理に聞く必要もないと思うが」

「……辻斬りはたしか、元は和国の侍という話でしたよね？」

「ああ。本人と知人の話だと、そこそこ出世してたらしいな」

「わかりました。聞きましょう。」

経緯はどうあれ、それだけの人物を殺してしまったとなると、和国との問題になりかねませんし。

その時に、事情を知っていた方がいいでしょうから」

アレクの言葉に、ユーリとマグマは異論を挟まなかった。

まあ、そういう事なら話しておくか。

そうして私は、アレク達にカゲトラの身の上話を話した。

貧しい身の上からのし上がり、一時は栄華を手に入れたものの、才能の壁にぶち当たって挫折し、

その心の隙を妖刀の呪いに付け込まれて破滅した、哀れな剣士の話を。

「それは、また……」

「愚かね。才能の壁にぶつかっただけくらいで呪いの武器に手を出すなんて」

「そう言うなや、ユーリ。あれは意外と心にくるぜ。」

騎士団にも、似たような理由で挫折する奴は結構いる」

「そんな事はわかってるわ。ウチの生徒にも同じような子はいるもの。」

それを踏まえた上で、呪いの力にすぎるのは愚かって言ったのよ。解決手段は他にもあるというのに、わざわざ破滅するとわかっている最悪の手段を選ぶなんて」

ユーリの言う事はもつともだな。

特に、人を教え導く教師であるユーリだからこそ、その言葉は重い。ただし、紅桜を実際に握って見た身としては、あれに支配されるのも仕方ないと思えてくるがな。

それくらいに強い呪いだっただ。

「それで、その妖刀とやらはどうしたんですか？」

「私が責任持って封印してる。これはお前らにも任せる気はないぞ。

あんな危険物に関わる人間は少ない方がいい」

「まあ、確かにその通りですね。なら、リンネさんに任せます」

「うむ。任せられた」

紅桜は空間収納の魔道具の中だからな。

その魔道具は、今まで使ってた道具入れの代わりに、これから肌身離さず持ち歩くつもりだ。

見た目は普通の道具入れと同じだから、わざわざ狙ってくる奴はいないだろうし、その中に危険な妖刀が入ってるなんて思う奴もいないだろう。

そもそも狙われなければ、盗まれる可能性は少ない。

ナイトソード家の金庫にぶち込むより安全だろうな。

主に、使用人軍団が事故で触る可能性を排除できるって意味で。

「和国の国宝って話だからな。せいぜい管理には気を付けるさ」

私は何気なく言ったその言葉を聞いた瞬間、アレク達が固まった。どうした？

「……リンネさん、今なんて言いました？」

「和国の国宝だから、管理に気を付けると言った」

「妖刀って、そんな大それた代物だったんですか!？」

「ん？ 言ってなかったか？」

「聞いてないわね」

「このクソ爺！ また重要な事を後から言いやがって！」

そんなに重要な事か？

こんな危険物、いつそどつかに埋めちまっても問題ないと思うが。いや、掘り返されるのが怖いからやらんが。

「絶対に和国との問題になる……」

「兄上にも報告しておくわ」

「問題が増えたな。頭が痛え」

なにやら、アレク達が騒ぎ始めたので、私は「頑張れ」とだけ告げて静かにフェードアウトした。

難しい話はお前らだけでやってくれ。

私は知らん。

私が必要になったら呼んでくれい。

そうして、私はいつものように面倒事を他にぶん投げて、屋敷を去った。



夜。

寮のベッドに寝転がりながら、少しだけ物思いにふける。

今回も色々な事があった。

カゲトラとの戦い。

ライゾウとの出会い。

ドレイクとの再会……はよくある事だが。

他にも、愛剣の代替わりに、紅桜という地雷の入手。

何より、一番大きかったのは、マルティナとイグニとの出会いだ。

また守りたいものが増えた。

なんというか、王都に来てからは、イベントに事欠かないな。

マーニ村にいた頃は、大きな事件なんて数年に一度あるかないかだったというのに。

冒険者やってた頃より冒険してる気がする。

不思議だ。

「で、次は武闘大会か」

クソ虫が出てくるし、遂にまだ見ぬ今代の剣聖も出てくる。

それに、シオンとアリス、ついでにオリビアも参加するのか。

騎士学校の生徒は強制参加だからな。

「本当にイベントには事欠かんなあ……」

妙な気分になりつつも、私は思考を打ち切り、布団にくるまって寝る姿勢に入った。

考えても仕方ない。

何をしてもしなくても時間は流れ、次のイベントがやってくる。

なら、さっさと寝て体力を温存しておこう。

そして私は、次の戦いに備えて、グツスリと爆睡したのだった。

番外 『英雄の剣』の大冒険！

「迷宮を攻略するぞー！」

王都からそれなりに離れた辺境の街、迷宮都市ガラハッドにある宿の一室において、一人の少年が吠えた。

彼の名はベル。

A級冒険者パーティー『英雄の剣』の若きリーダーである。

「別にいいですよー」

そんな彼の言葉に答えたのは、弓を担いだ独特な口調の少女。

パーティーメンバーの一人、オスカーである。

彼女は、基本的にベルの判断に否を挟まない。

さすがに無謀すぎると思っただら止めるが、基本的にはベルの好きなようにやらせるのがオスカーのやり方であった。

「わ、私は反対だよ。斥候もいないのに、いきなり迷宮攻略なんて……」

そう言って苦言を呈したのは、『英雄の剣』最後の一人、ラビだ。

三人の中で最も年下だが、最もしっかりしている事に定評がある。

他の二人のストッパーと言っても過言ではないだろう。

「ラビ！ お前はあんな事言われて悔しくないのか!？」

迷宮を攻略して見返してやろうとは思わないのか!？」

「そ、それは確かに悔しいけど……でも、危ないよお」

「危険が怖くて冒険者ができるかあ！」

ベルの言い分もわからなくはないが、この場合は、ラビの言う事の方が正しい。

冒険者は常に危険と隣り合わせ。

だからこそ、少しでも危険を減らす努力はするべきなのだ。

メンバーの足りない今のパーティーで、迷宮探索ならともかく、迷宮攻略に乗り出すのは危険。

それがラビの判断だった。

まあ、そんな事を荒ぶる今のベルに言っても通じないだろうが。

「どうどう。落ち着くつすよ、ベル」

「俺は冷静だ！」

「いや、どう見ても頭に血が上ってるっすよ。これでも飲んで落ち着くっす！」

「ぶがっ!？」

オスカーがベルの頭を押さえ、この地域でよく取れる果物を絞ったジュースを無理矢理飲ませて沈静化させる。

ベルは呼吸ができずに溺れているようにも見えるが、なーに、心配はいらない。

ベルとて腐つてもA級冒険者。

この程度で死にはしない。

ちなみに、このジュースは先程までオスカーが飲んでいたものであり、つまり、この状況は間接キスに当たるのだが、まあ、どうでもいい話であろう。

そんな色気はどこにもないし。

「ぶはっ！」

「落ち着いたっすか？」

「殺す気か!？」

ベルが吠えるが、それでも怒りのベクトルがオスカーに向いて、少しは頭が冷えたような気がしないでもない。

オスカーは一見ベルと同類の馬鹿に見えるが、その実、地頭は良く、ある程度はちゃんと考えて動いている。

だからこそ、こういう気づかいてもできるのだ。

さすがに、こんな冷静さを欠いた状態で迷宮に潜ったら死ぬ。

それがわからないオスカーではない。

シオンというもう一人のストッパーがいた頃は、そっちに仕事をぶん投げて好き勝手していたオスカーだが、

そのシオンが最大戦力であるリンネと共にパーティーを抜け、ストッパーがラビ一人になってしまった上に、

今までのように、最悪の場合はリンネが全てを蹴散らしてくれるという保険がなくなってしまう為、

オスカーは慎重になり、少しはストッパーの仕事をせざるを得なく

なつたのだ。

ベルの勢いに乗つかるのは楽しいが、さすがに、その勢いのまま無謀な道を通り走り、死へ向かってダイブする訳にはいかない。

考える事は増えたが、それはそれで楽しいと感じているオスカーであった。

さて、ここで話を戻そう。

何故、ベルがこうまで荒れていたのか。

話は少し前に遡る。



マーニ村にて、リンネ達と感動的な別れを済ませた三人は、その翌日には故郷を旅立った。

最寄りの街であるトリスまでは、リンネの父であるジャックが送ってくれたのだが、それは割愛しよう。

そして、トリスの街に辿り着いた三人は、意気揚々と乗合馬車に乗り込み、事前に決めていた通り、大小様々な迷宮がひしめく冒険者の街、迷宮都市ガラハッドに向けて出発したのだ。

これまでは、さすがにまだ子供という事で、故郷から遠く離れた場所へ行く事や、長期間の旅を禁じられていた。

しかし、ベルとオスカーが一応は成人として扱われる15歳となり、ついでに、シオンとリンネが遠くの王都に旅立つ許可を得た事で、先日、遂にその縛りが解かれたのだ。

やっと冒険者らしく、本格的な冒険が始められる。

彼らの心は軽かった。

意気揚々としていた。

まあ、正確に言えば、意気揚々としていたのはベルと、そのベルに乗ったオスカーの二人だけであり、ラビはいきなり迷宮都市へ行くという事実には少しビクついていたが。

そうして、十日ほど馬車に揺られ、辿り着いた迷宮都市。ベルは勢いよくこの街の冒険者ギルドへと突撃し、残りの二人も後に続いた。

受付で冒険者カードを提示し、少し有名になってきた『英雄の剣』の名に受付嬢がビックリして注目を集め、

そして、お約束とばかりに柄の悪い冒険者が、ベル達に絡み出した。「ああ、お前らあれだろ？ 『天才剣士』におんぶに抱っこのお子様パーティーだろ？

かー！ 羨ましいねえ！ 頼りになる天才様がいると！
おや、だが、その天才様の姿が見えねえなあ。

あ！ ひよつとして見捨てられちゃった？ かわいそうに！」

などという暴言を吐いておちよくってきたチンピラ冒険者は、ぶちギレたベルの一撃によって、あっさりとノックダウンした。

ベルとて、元剣神リンネや元近衛騎士ヨハネ、元A級冒険者ジャックに鍛えられ、この歳にしてA級冒険者となった天才なのだ。

酒場でくだを巻き、若者に絡む事しか能のないチンピラ冒険者など敵ではない。

ギルドとしても、今のは酔っぱらいのチンピラが悪いとして、殴りかかったベルを咎める事はなかった。

それに、冒険者の喧嘩など、この街では珍しくもない。
だが、チンピラが最後に言い捨てた台詞がマズかった。

「こ、このクソ餓鬼！ 迷宮攻略もした事ないような、にわか冒険者がイキがつてんじゃねえぞ！」

「あ、あ！」

「ひいっ!？」

ベルに殺気を叩きつけられただけで、チンピラは悲鳴を上げていた。

にわか冒険者に睨まれただけで震え上がるとは、全くもって情けない。

だが、その挑発が、ベルの闘志に火を付けてしまった。

「……………だ」

怒りを内側に溜め込むかのような小声でベルが呟く。

「上等だ！ やってやるよ、迷宮攻略！」

次いで、ベルは大声で宣言した。

冒険者ギルドの真ん中で、堂々と宣言してしまった。

かくして、物語は冒頭に戻るのである。



その後、オスカーのフオローと、ラビの必死の説得（泣き落とし）によつて、高難度の迷宮に突撃しようとするベルをなんとか宥め、

最初は初心者用の迷宮で、練習から始めるという事に落ち着いた。

いかにA級冒険者パーティーといえど、迷宮探索のノウハウもない状態で攻略に乗り出すのは無謀である。

そもそも、高難度の迷宮攻略など、迷宮攻略に秀でたS級冒険者が指揮を取った上で、トップクラスのパーティー複数を集めて当たるのが常識。

英雄の剣だけにかするのとは不可能に近い。

そもそも、初心者用の迷宮ですら、探索ならともかく、一パーティーだけで攻略する事は非常に難しいのだ。

そもそも、迷宮攻略とは何か。

何をもつて、迷宮を攻略したと見なすのか。

これを説明するには、迷宮という場所その物について、少し話をする必要があるのである。

迷宮とは、高密度の魔力が渦巻く場所の総称である。

洞窟、山脈、森林、海底、遺跡。

その形は様々であり、世界の各地に迷宮と定義される場所は存在している。

だが、迷宮の最大の特徴を上げるとすれば『魔石』と呼ばれる特殊

な鉱石が採れるか否かであろう。

世間一般では、魔石が取れる場所＝迷宮という認識がなされている程だ。

魔石は、人間の生活になくってはならない魔道具や、魔剣などを作る上で、決して欠かせない素材。

故に、その需要が尽きる事はない。

そして、迷宮の中では、その魔石が尽きる事なく生成され続けるのだ。

まさに宝の山。

冒険者達は、この魔石を求めて迷宮に潜る。

そこで高純度の魔石や、巨大な魔石、希少な属性の魔石などを手に入れば一攫千金だ。

だからこそ、迷宮に潜る冒険者は後を絶たない。

しかし当然、そう簡単に一攫千金を狙える訳ではない。

そんなに上手い話はないのだ。

迷宮の中には、多くの魔物が彷徨っている。

迷宮の放つ魔力に誘われたのか、それとも迷宮の中で発生したのか。

そのメカニズムは完全には解明されていないが、とにかく、迷宮には魔物が出る。

それも大量に。

迷宮の奥へと行く程、採れる魔石の質も高くなるが、

同時に、迷宮の奥に行く程、強い魔物がいる。

結果的に、高品質の魔石を強力な魔物を守る形となり、それが迷宮攻略の難易度を上げているのだ。

それだけでなく、複雑に入り組んだ地形は、それだけで侵入者の行く道を阻む。

地図もなしに進めば、待っているのは遭難と死。

それが、迷宮という場所である。

そして、迷宮を攻略するという行為だが。

これは、強力な魔物や複雑な地形を乗り越え、迷宮の最深部へと到

達し、そこにある、他とは一線を画した、一際高品質の魔石を採って来る事を指す。

当然、並大抵の所業ではない。

最深部への到達だけでも命がいくつあっても足りない上に、そこには必ず『守護者』と呼ばれる存在が待ち構えているのだ。

守護者とは、その迷宮の中で最強の魔物の事である。

最深部までの長く険しい道程を進んで来た冒険者達の前に立ち塞がる、最後にして最強の壁。

それを倒して初めて、迷宮は攻略される。

そんな偉業へと挑んだベル達は今……

「うおおおおおおお!?!」

初心者用の迷宮にて、魔物の大群から全力で逃走していた。

魔物の大量発生と呼ばれる現象にいきなり遭遇してしまったのだ。

初心者用の迷宮は、その名の通り初心者が迷宮に慣れる為の場所と言っても過言ではなく、その難易度は他の迷宮に比べれば遥かに低い。

それでも攻略となると少人数では難しいが、それはそれ。

当然、スタンピードが発生する確率も相当低い場所なのだが、起こる時は起こる。

そんなものに、いきなり遭遇してしまうとは、幸先が悪いなんてものではなかった。

「ストームソードっすー!」

「レインアロー!」

逃走しつつ、オスカーとラビが、風と水の魔法によつて魔物達を蹴散らす。

スタンピードとはいえ、所詮は初心者用の迷宮に生息する魔物。

一体一体は雑魚だ。

囲まればベル達でも死にかねないが、遠距離で削るくらいなら訳なかった。

現在、彼らはかなり特殊なフォーメーションを組んでいる。

パーティーの中で一番体力のあるベルが、一番体力のないラビをお

姫様抱つこで担ぎ、さらにオスカーをおんぶしているのだ。

ベルが機動力となり、残りの二人は魔法に専念する。

理にかなっていると言えばかなっているが、端から見れば、かなりカツコ悪い。

ベルに関しては、ラビを腕に抱き、背中にオスカーの胸が押し付けられているという役得の状態だが、そんな事を楽しむ余裕は一切なかった。

「げ!? 行き止まりだ!」

「……仕方ないっすね! 止まって迎撃するっす!」

「う、うん!」

ベルは立ち止まり、二人を降ろした。

そして、腰に差した剣を抜き、魔物の大群に対して正面から相対した。

「かかって来いやああああああ!」



「ハア……ハア……よっしやあ! 勝った!」

「あー、きつかったっす」

「疲れた……」

数分後。

なんとか魔物の群れを全滅させた三人は、荒い息を吐きながらも回復薬を飲み干し、勝利と生存の味を噛み締める。

結果を言えば、余裕とは言えないまでも圧勝であった。

ベルが身を呈して二人を守り、二人は魔法攻撃に専念できた事もあって、特に大きな怪我もなく勝利する事ができたのだ。

逃げながら魔物の数を減らしていたのも大きい。

なんにせよ、彼らはA級冒険者の名に相応しい活躍で、窮地を脱したのである。

「ところで、ハニはどことだ？」

ただし、代償に遭難したようだが。

逃げるのに必死で、地図を見ている余裕などなかったのだから仕方がない。

しかし、迷宮での遭難は死を意味する。

全然、窮地を脱していなかった。

「うわー……遭難とか勘弁してほしいっすね」

「ど、どうしよう!？」

魔力回復薬を飲み終えた二人が、焦ったように口を開く。

ラビは思いつきり狼狽え、オスカーの表情にも若干の焦燥が浮かんでいる。

だが、どうしようもないという程の危機でもないのだ。

ここは初心者用の迷宮。

階層は一つしかなく、地形もそこまで複雑ではない。

地図もあるし、何か目印になる場所を発見できれば、十分に生還は可能だ。

その事に地頭の良いオスカーがすぐに気づき、その説明を聞いたラビも落ち着きを取り戻した。

ベル？

よくわかっていないようだが、まあ、問題はないだろう。

リンネだって、他人に頭脳労働をぶん投げて上手くいっているのだから、ベルが同じ事をしてもなんとかなるさ。

多分。

「でも、とりあえずは休憩するっすー。疲れは取っという方がいいっすからねー」

「まあ、そうだな」

「うん。わかった」

そんなオスカーの言葉により、三人はこの場で一時休憩する事にした。

洞窟の壁を背にして座り込む。

しかし、ここでオスカーが体重をかけた壁が、ズズズと音を立てて

動いた。

「へ？」

その壁は、まるで扉のように奥へと向かって開き、予想外の事が起こったオスカーは、間抜けな声を上げてコロんと転がった。

そして、扉のような壁が開ききり、その先には……

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

咆哮を上げる、一匹の鬼がいた。

額から生えた二本の角。

下顎から生える巨大な牙。

筋肉の鎧に包まれた、5メートルを超える人型の巨体。

それは、彼らにとって因縁深い魔物、オーガであった。

どう考えても、初心者用の迷宮にいるような奴ではない。

少なくとも、通常のフロアを徘徊してはいないだろう。

だがオスカーには、こんな強い魔物がこの迷宮にいる理由に、一つだけ

心当たりがあった。

「……ひよつとして、あのオーガ『守護者』つすかね？」

そう。

迷宮の最深部に待ち構えるという守護者。

初心者用の迷宮とはいえ、守護者ならば危険度Aのオーガがいる理

由として納得がいくのだ。

つまり、オスカーが寄りかかった壁が、最深部への扉だったのだら

う。

暗くてよくわからなかった。

要するに、オスカーは意図せず最深部への扉を開いてしまった訳で

……

「オスカーア！ お前え！」

「い、今のは仕方のない事故だと思うつすよ！」

「喧嘩してる場合じゃないよ、二人とも！」

てんやわんやしなながらも、三人は咄嗟に戦闘態勢を取る。

それとほぼ同時に、オーガが手にした棍棒を振りかざして襲ってきた。

こうなったらもう、戦うより他に道はない。

戦って勝つしか、彼らに生き残る術はないのだ。

「上等だ！ お前を倒して、この迷宮を攻略してやる！」

「ウガアアアアアア！」

「行くぜえええええ！」

互いに咆哮を上げながら、オーガとベルが激突した。

オスカーとラビも、弓矢と杖を構え、矢と魔法でベルをサポートする。

ここに、迷宮攻略を懸けた戦いの火蓋が、切って落とされた！



数時間後。

ベル達の姿は、ガラハツドの冒険者ギルドにあった。

その姿はボロボロだ。

特に、リーダーであるベルの体は傷だらけ。

ラビの治療を受けても治りきらない傷を負ったという事に他ならない。

初心者用の迷宮でそこまでの負傷をした彼らを見て、一部の冒険者達が爆笑し始めた。

しかし、その嘲笑は、ベルが受付の買い取りカウンターに、ある魔石をドンツと勢いよく置いた瞬間、ピタリとやんだ。

「やったぜ」

ニヤリと、ベルが笑った。

その背後ではオスカーが同じく不敵な笑みを浮かべ、ラビもまた嬉しそうな顔をしていた。

そう。

彼らは成し遂げたのだ。

守護者を倒し、最深部の魔石を持ち帰った。

いくら初心者用の迷宮とさえど、たったの三人で、しかも初めての迷宮探索で、迷宮を攻略してみせた。

これは、紛れもない偉業である。

「き、君達！ ちょっといいかな!?」

そんな彼らに、一人の男が興奮した様子で近づいて行った。

その男は、背中に大きな楽器を背負っている。

吟遊詩人だ。

「君達の活躍に衝撃を受けた！ 是非とも取材をさせてもらいたい！」

その話にベルが凄まじい勢いで食い付き、今回の冒険話を、だいぶ美化して饒舌に語り出した。

オスカーもこれに悪乗りし、ラビはオロオロとしながらも訂正はできずに、取材は進んでしまった。

こうして、彼ら『英雄の剣』の冒険譚は歌となり、遠く離れた王都まで、彼らの元パーティメンバーの元にまで届く事になるのだが、それはまた別の話。

そして、取材が終わった後、吟遊詩人はこう言った。

「君達程の腕なら、王都で近々開催される武闘大会に出てみるのもいいかもね。」

きつと、大いに活躍できる」

「武闘大会？」

この言葉によって、一度は道を別った『英雄の剣』のメンバーが再会を果たす事になるのだが、

それは、少しだけ未来での話である。

第4章 武闘大会編

58 武闘大会に向けて

辻斬り騒動から二週間ほどが経過し、その話題が徐々に人々から忘れ去られてきた今日この頃。

騎士学校では、遂にこの時期がやって来たかと、別の話題で持ちきりになっていた。

それは……

「さて、いよいよこの時期になったわね。

休日を挟んだ三日後、遂に王都武闘大会が開かれるわ。

騎士学校の生徒は、授業の一環として、この大会には強制参加。

当然、成績にも響いてくる。

腕自慢の冒険者や兵士も参加してくるし、厳しい戦いになるでしょう。

その代わりに、自分の強さを存分にアピールできるチャンスでもある。

優秀な成績を残して、騎士団の上層部の目に留まれば、卒業後の配属先でも厚遇されるでしょうね。

頑張りなさい」

『はいー』

朝のホームルームで語られたユーリの言葉を受けて、クラスメイト達が沸き立った。

アリスやシオンも相当気合いが入っているように見える。

目標は、打倒クソ虫か、それとも打倒私か。

前者の可能性が高そうだが、後者もあり得なくはないな。

もし後者なら、私も真面目に相手をしてやろう。

「では、本日の授業を始めるわよ」

『はいー』

だが、とりあえずは今日も地獄の授業を乗り越えなくては。

話はそれからだ。



そうして、なんとか午前前の授業を乗り越え、昼休み。

いつものように食堂へ向かおうとした時、取り巻きを連れたクソ虫とすれ違った。

「……チツ」

クソ虫は殺気の籠った視線で私達を一瞥すると、小さく舌打ちして去って行った。

なんだ、あの態度は？

むきやつく。

舌打ちしたいのは私の方だ！

という事で、去り行くクソ虫達の背中に向かって中指を立てておいた。

「リンネちゃん、お行儀が悪いですよ」

「む……だが、アリス。奴らが嫌いなのはお前も同じだろう？」

「それはそれ、これはこれです」

アリスに窘められてしまったので、仕方なく中指を引っ込める。

だが、多分、次からも私はやると思う。

アレだ。

体が勝手にというやつだ。

一方、私以上にクソ虫が嫌いな筈のシオンは、私のように中指を立てる事も、クソ虫のように舌打ちする事もなく、無言で殺気を迸らせていた。

「リンネ、アリス。あいつは俺の獲物だ。手を出すなよ」

「わ、わかりました」

「まあ、前回は私達がやったしな。今回は譲ってやる。ただし、組み合わせ次第だぞ」

武闘大会は、まず参加者を4つのブロックに分け、バトルロイヤル

で競う予選と、

その予選を勝ち抜いた者による決勝トーナメントという形に別れている。

予選通過者は、各ブロック一名。

凄まじい激戦が予想されるな。

だが、この試合形式だと、シオンがクソ虫と戦える可能性は4分の1だ。

上手く同じブロックに振り分けられないといけないからな。

一応、二人とも決勝トーナメントに進んだ場合でも戦えるが、私もアリスも、その為にわざわざ手を引いて負けてやるつもりはない。

クソ虫と同じブロックになったら、容赦なくぶっ潰す。

これは決定事項だ。

「ああ、それはわかっている。それで構わない」

「なら、よし」

シオンも、その可能性については納得してるようで何よりだ。

まあ、もしシオンとクソ虫が同じブロックで、そこに私も放り込まれたりした場合は、因縁の対決を邪魔しないくらいの配慮はしてやるう。

そんな事を思いながら、改めて食堂へと向かう。

そこで、いつものように、スカーレットとオリビアの二人と合流した。

そして、いつものようにお喋りに興じた。

話題はもちろん、武闘大会についてだ。

「……遂にこの時期が来ましたわね。皆さん、わかっていると思いますけれど、ここでフォルテにリベンジを許せば、全てが水の泡ですわ。

精一杯頑張るのも大事ですが、それだけは忘れないでください」

「ああ、無論だ」

スカーレットに念を押されるまでもなくわかっている。

クソ虫は潰す。

これは決定事項であり、私にとっては最優先事項だ。

それが終わったら、あとは純粹に大会を楽しむ。

アリスの成長を見るのは楽しみだしな。

最近、休日や放課後に、アレクやユーリと特訓してるのは知っている。

まあ、そんな短期間で爆発的な成長はしないと思うが、いつだって若者の可能性は計り知れないものだ。

もしアリスと直接対決する事があつたら、その時は存分に相手をしてやろう。

「まあ、それはそれといたしまして。皆さん、頑張ってくださいね。わたくしは影ながら応援しておりますわ。

せっかくの大会なので、優勝候補筆頭のリンネさんを倒すくらいの気持ちでやっちゃってください」

「お、それは良いな。胸を貸してやるぞ若者ども！」

「あはは、頑張ります」

「言われるまでもない」

シオンは私に対しても闘志全開。

アリスも、少し腰が引けてはいるが、全力でぶつかるといふ気概を感じる。

大変結構。

それでこそ、私もやる気が出るというものだ。

「オリビア、あなたもですよ。期待していますわ」

「……ハッ！ 必ずや、スカーレット様の護衛として恥ずかしくない活躍をしてご覧に入れます」

どうやら、スカーレットの一言で、オリビアの闘志にも火がついたようだ。

挑戦者が増えて、私も楽しい。

私はライゾウみたいな戦闘狂ではないが、それでも、やはり一人の剣士として、闘争心というものはある。

殺し合いを楽しむ気にはならないが、試合として武を競うのは嫌いじゃない。

それに、将来有望な若者の挑戦を受けるといふのは、年寄りの楽し

みの一つなのだ。

まあ、今は私が一番の若者な訳だが、そこは気にしてはいけない。「あ、そうですね。せっかくですし、今日の放課後、コロシウムへ下見に行きませんか？」

そろそろ一般参加者の受け付けも終了しますし、組み合わせも発表される筈ですわ」

「お、悪くないな」

「あ、そういう事なら、私も行きます」

「同じく」

という事で、私達の放課後の予定が決定した。

なんだか、スカーレットが少しウキウキしているように見えるが、もしかしたら、スカーレットも試合を見るのは好きなのかもしれない。

あいつ、血筋的には武の家系であるプロミネンスの系譜だし、そういうのが好きでも、なんら不思議ではない。

そうしている内に、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴り、午後の授業が開始される。

さて、まずは地獄の授業を再び乗り越えなくては。

話はそれからだ。



そして、放課後。

私達は、武闘大会の会場となるコロシウムへと足を運んだ。

スカーレットとアリス、オリビアはお忍びモード。

シオンは冒険者スタイルで、私は前にアリス達と一緒に買い物をした時に買った私服だ。

こういう時くらい着ないともったいない。

あとは、いつものようにスカーレットの護衛部隊が隠れて数人付い

て来ているが、まあ、彼らは背景とでも思っておけばいいだろう。
そして、肝心のコロシウムだが。

ここは長い歴史を誇る巨大闘技場だ。

城とまではいながいが、下手な貴族の敷地よりも広い、円形の巨大な建物。

月一くらいで腕自慢が武を競い、時には騎士による御前試合なども行われる由緒正しい場所だ。

だが、そんなコロシウムでも、正式に『王都武闘大会』と名の付く闘いは年に一度だけ。

最も多い参加者が集まり、騎士候補生が強制参加させられ、最大の賑わいを見せる時期。

それが今。

王都武闘大会の開催期間なのである。

そんなコロシアムの外にデカイ看板が立てられ、そこに出場選手の名前が書かれていた。

予選ブロックの振り分けと共に。

私の名前は……お、あった。

「私はAブロックだな」

「オリビアもAブロックですわ。オリビア、いきなり最強の壁とぶつかってしまいましたわね」

「リンネ様、胸をお借りいたします」

「おう、かかって来い！」

オリビアの戦いは見た事ないから、少し楽しみだ。

特に、オリビアは空間魔法使い。

空間魔法使いは極端に数が少ない上に、大抵は魔法一筋で食っていきけるから、オリビアのように剣術まで使う奴は、私の長い人生の中でも見た事がない。

そういう意味でも興味深い一戦になるだろう。

ちなみに、オリビアが剣術に手を出した理由は、魔法以外でもスカーレットの役に立ちたかったからという、見上げた忠犬精神に基づくものらしいが、それは置いておこう。

「私はCブロックですね。他に知り合いの方はいないようなので、ホツとしたような、残念なような……」

ほう、アリスはCブロックか。

ならば、私と当たるとすれば決勝だな。

アリス、決勝で会おう！

「俺はBブロックだな。しかも……」

そこでシオンは言葉を切り、不敵にニヤリと笑った。

「あいつと一緒だ」

言われて見てみれば、確かにシオンと同じBブロックに、クソ虫の名前があった。

フォルテ・アクロイドという名が。

……正直、クソ虫という名前呼びすぎて本名を忘れてかけていた。

危ない、危ない。

いや、待てよ。

むしろ、クソ虫の本名などというクソの役にも立たない記憶は、忘却の彼方にすっ飛ばしてしまった方がいいのではなからうか？

「……剣聖はDブロックですわね。とりあえず、予選では皆さんと当たらないようですわ」

私が凄まじく無駄な事を考えていると、スカーレットがポツリとそう呟いた。

言われてDブロックの欄を見てみたが、そこでふと重要な事に気づく。

そういえば私、剣聖の名前知らんわ。

「ん？」

だが、その代わりに見知った名前をDブロックの欄に見つけてしまった。

しかし、よくある名前だ。

同名の別人という可能性も高い。

そう思っていたのだが……

「お、もう組み合わせが発表されてるっすよ。昨日登録したばかり

なのに、早いっすねー」

「俺の名前はどこだ!?」

「わー……おつきい建物」

そこに聞き慣れた声が聞こえてきて、同名の別人ではないと確信した。

見れば、シオンも私と同じ事を考えたのか、声の方へと振り向いている。

私も声の方へ目を向けると、そこには予想通りの顔ぶれが揃っていた。

「おーい！ お前らー!」

私は、笑顔でそいつらに声をかけた。

すると、向こうも私の存在に気づいたのか、こつちを見た。

いや、思ったよりも早い再会だ。

「久しぶりだなー!」

そこにいたのは、我が幼馴染にしてA級冒険者。

かつて私とシオンも所属していた冒険者パーティー『英雄の剣』のメンバー達。

ベル、オスカー、ラビの三人だった。

59 再会と開幕

「お、リンネとシオンじゃないっすか！ 久しぶりっすねー」

「そんなに久しぶりじゃないような気もするけど……」

幼馴染の内、二人。

オスカーとラビは普通に対応してきた。

そこに驚いたような様子はない。

まあ、王都に来れば私達と再会する事はわかっていただろうし、当然か。

だが、最後の一人。

ベルだけは、何故か、私を見て目を見開いていた。

どうした？

「リンネ?! お前、なんだその格好?!」

格好？

ただの私服だが。

ああ。

そういえば、村にいた頃は、こういう女の子っぽい服を着た事はなかったな。

私は、ミニスカート姿を見せつけるように、クルリとターンしてから満面の笑みでベルに告げた。

「可愛いかろう?」

「うっ?! 吐き気が!」

失礼な奴だな。

そして、いつぞやのシオンと全く同じ反応だ。

やっぱり、こいつら幼馴染に似てきてるわ。

なんか、シオンが「わかる」とでも言わんばかりに、ベルの肩を叩きながら強く頷いてるし。

ベルは、そんなシオンを見て固い握手を交わした。

お前ら、前は喧嘩ばっかしてたくせに。

いつから、そんなに仲良くなった？

「あの、リンネちゃん、この方達は?」

「ああ、私とシオンの幼馴染の冒険者だ。前に吟遊詩人が歌ってた『英雄の剣』っていただろう？ そいつらだ、そいつら」

私は、アリスにこいつらの事をざっと説明した後、耳元に顔を近づけて、小声で付け足した。

「ちなみに、私の前世の事は教えてないから、そのつもりで頼む」

「え？ いいんですか？ 教えなくて」

「こいつらに話したら、絶対拡散するからな」

特にオスカー。

おもしろ半分で吹聴する未来が見えるようだ。

いや、まあ、あいつも鬼畜外道ではないから、ちゃんと口止めすればわかってくれそうではある。

だが、しかし。

それをネタに色々ときれそうで、なんか嫌だ。

あと、ベルも危険だな。

こいつに至っては、普通に口を滑らせると思う。

なにせ馬鹿だからな。

ラビは……まあ、大丈夫だと思うが、他の二人に話さずラビにだけ話すというのもアレなので、言わなくていいだろう。

別に、前世の事を話すのは義務じゃないしな。

「はじめまして。私はアリスと申します。リンネちゃんの友達？ です。よろしくお願いしますね」

「あ、これはごく丁寧にどうもっす。あたしはオスカー。よろしくっす」

「ラビです。よろしくお願いします」

「俺はベルだ！」

私がそんな事を考えている間に、アリスがベル達と挨拶を交わしていた。

続いて、興味深そうな顔をしたスカーレットとオリビアが寄って来て、同じく挨拶を交わす。

……こいつらがアリス達の立場を知ったらどんな反応をするのだろうか。

少しだけ気になる。

とりあえず、ラビは盛大に驚いてくれそうだな。

「で、ここにいてるって事は、お前らも大会に参加するのか？」

「その通りだ！」

「正確にはあたしとベルだけっすけどね。ラビは応援っすよ」

「うん……人と戦うのは苦手だし」

ああ。

まあ、ラビだもんな。

多分、盗賊とかに襲われたらちやんと戦えるんだろうが、自分から積極的に戦おうとは思わないか。

どうやら、そこら辺は変わっていないようだ。

「それよりも！ リンネ！ シオン！ お前らは何ブロックだ!？」

俺はDブロックだ！」

「あ、ちなみに、あたしはCブロックっす」

「ほう」

ベルの方はさつき見て知ってたが、オスカーの方は知らなかったな。

そうか。

アリスと同じブロックか。

「私はAブロックだぞ」

「俺はBブロックだ」

「そうか！ なら、お前らと当たるのは決勝だな！」

お前ら二人とも、俺がぶっ飛ばしてやるから覚悟しとけ！」

ベルはビシッと私達を指差しながら、堂々と宣言した。

強敵相手に、堂々の勝利宣言。

中々にカッコいいな、おい。

「ベル、組み合わせ的に二人ともとは戦えないっすよ？」

「黙ってる、オスカー！」

しかし、オスカーの入れた茶々によって、ベルのカッコよきは霧散した。

うむ。

それでこそベルだ。

なんだか安心したぞ。

「とにかく！ この大会で優勝するのはこの俺だ！

決勝で会おうぜ！」

そうして、ベルは背を向けながら腕を横に突き出し、親指を立てるポーズをしてから去って行った。

なんか、吟遊詩人が歌ってた歌の中に、こんな感じのシチュエーションがあったような気がする。

そう思うと少し滑稽だが、ベルの闘志は本物だ。

村にいた頃、ベルは私に一度も勝てず、シオンにも負け越していた。そのリベンジに燃えているのだろう。

挑戦者が一人増えて、私も嬉しい。

「じゃあ、あたし達は観客席の予約をするつすよー」

「え？ 追いかけてくれないの？」

「ほっとけ、ラビ。今はカッコつけさせてやれ」

「……絶対に道に迷うぞ、あれは」

という事で、ベルが一人で勝手にフェードアウトした後、オスカーとラビの二人は観客席のチケットをかう為に残った。

が、

「そうですわ！ お二人とも、せっかくですし、わたくし達と一緒に観戦しませんか？

学校関係者は特別席が取れますし、おすすめですよ」

「お、いいんですか？ じゃあ、お言葉に甘えるつす」

「お、お願いします」

というスカレットの提案により、チケットをかう必要はなくなっってしまった。

王女様と一緒にいたら絶対注目されると思うが、まあ、知らぬが花だな。

というか、学校関係者の席って、部外者を招いてもいいのか。

なら、もう一人、哀れな中年ボッチを誘ってやろう。

酒場にも行けば遭遇できるだろうし、今日この後で誘ってくるか。

その後は、スカーレット達がオスカーとラビと親交を深めるべく、王都を適当に案内しながら食べ歩きとかして解散したのだった。女子比率が凄い事になってシオンが大変そうだったが、それはどうでもいい話である。



その日の夜。

アリスが夕飯に合わせてナイトソード家に帰るといっているので同行した。

用件は何かと思ってアリスに聞けば、アレクとユーリに呼び出されたんだそうだ。

なのに、何故かアリスがちよつとネガティブになっている。

「……ナイトソード家の娘として、不甲斐ない結果を残すなど警告されるのでしょうか？」

と、馬車の中でアリスがそんな弱音を吐き出した。

それは普通じゃないと思う。

「いや、普通に頑張れって激励したいだけだと思うぞ」

あいつらもアリス好きだからな。

少なくとも、キツイ言葉を吐く事はないだろうよ。

だが、アリスはつい最近まで剣神の娘としてのプレッシャーに悩まされていたからな。

だから、ついつい思考がそういう方向に行ってしまうのだろう。

とりあえず、大丈夫だと頭を撫でておいた。

そして、夕飯の席で孫家族は顔を合わせ、アリスの心配はやっぱり杞憂であったと確信した。

「アリス、今度の休み明けは遂に武闘大会だね。自分の力を信じて思

いつきりやりなさい。

勝つても負けても良い経験になるだろうから」

「私達も貴賓席から応援してるわ。秘密特訓もしたんだし、自信を持ちなさい。頑張ってるね」

「……はいー」

アレクとユーリは、どこまでも優しい目でアリスを見ながらそう言った。

無表情がデフォルトのユーリが微笑んでる事からもわかる通り、その視線は慈しみと愛に溢れている。

厳しい言葉で追い詰めるような真似はしない。

代わりに、優しい言葉で頑張れと言う。

やはり、私の予想は正しかったな。

その日は、私の提案によって、親子三人一緒のベッドで寝かせる事になった。

アリスは「この歳になって恥ずかしいですー」と言っただけだったが、ノリノリの両親と私と使用人軍団の勢いに負けてベッドイン。

今まで変に拗れてた分、存分に愛情を確かめ合うがよい！

翌朝、アリスは恥ずかしそうにしながらも、どこか満足げな表情を浮かべていた。

おじいちゃん、良い仕事したぜ。



そして、そこから休日を含んだ二日後。

遂に武闘大会開催の日がやってきた。

コロシアムの周辺には出店が立ち並び、観客は誰が優勝するかの賭けでやんややんやと盛り上がり、まるで祭りのような様相を呈している。

武闘大会は、予選に一日、決勝トーナメントに一日と、二日に別けて行う為、このお祭り騒ぎは二日に渡って続く事になるだろう。

ついでに、出店に突撃するベルとオスカーの姿を発見した。

余裕のある連中である。

「相変わらず凄え賑わいだな。さすが王都。何やるにしても大掛かりだ」

と、そこで、私の連れて来た中年ボッチこと、ドレイクが感嘆したように呟いた。

まあ、武闘大会は国王も見に来るような一大イベントだからな。

参加者の数も、観客の数も、会場の広さも、賑わいも、どれを取っても国内最大級だろう。

何度見ても驚くというやつだ。

まあ、それでも、

「キョロキョロしすぎるなよ、ドレイク。田舎者だと思われるぞ」

「田舎者は嬢ちゃんの方だろうに。てか、嬢ちゃんは特に驚かねえんだな」

「私は慣れてるからな」

「嘘つけ。王都に来てから、そんなに経ってねえくせに」

そんな会話を挟みつつ、コロシラムの中に入り、観客席へと足を進めた。

他の学生達も家族とか知り合いっぽい奴を連れていた為、ドレイクがそこまで目立つ事はなかった。

代わりに、ドレイクを見て私の父親じゃないか的なヒソヒソ話が聞こえてきたのは少々不快だったが。

「ハッ。嬢ちゃんと俺が親子ねえ。ジャックが聞いたらキレそうな話だ」

「失礼な。パパはそこまで狭量じゃないぞ」

「どうだか」

まあ、多分。

少なくとも、子供相手に大人げなくキレたりはしないと思うが。だが、八つ当たりでドレイクが殴られる可能性はあるか。

ヒソヒソ話を聞き流しつつ、他の面子がいる場所を目指す。

そして辿り着いた時には、出店の食い物にかぶり付くベルとオスカーに、控えめに食べているラビ。

楽しそうなスカーレットと、そのスカーレットと話しているアリス。

二人の側に影の如く付き従うオリビア。

緊張してるのか無口なシオンと、

既に私達以外は勢揃いしていた。

「よ、待たせた」

「あ、遅かったですね、リンネちゃん。

えつと、そちらの方は？」

「げっ!? ドレイク!」

「お、久しぶりじゃねえか坊主ども。そっちの嬢ちゃん達ははじめましてだな。

俺はドレイク。リンネの嬢ちゃんの知り合いで、S級冒険者だ。よろしくな」

「あ、はい」

「よろしくお願いいたしますわ」

私が見ている前で、ドレイクは気軽にアリス達との挨拶を済ませた。

アリス達の身分を教えてやったら、マルティナの時みたく、おもしろい事になりそうだが……まあ、今回はやめておくか。

祭りは、和気藹々とした方が楽しいだろうし。

そうして、ベル達が迷宮攻略の話を私やドレイクに自慢したりしている内に、大会の開始時刻がやってきた。

コロシウムに設置されている銅羅が打ち鳴らされ、グワーーン! というデカイ音が響き渡る。

そして、コロシアムの貴賓席からシグルスが出て来て、拡声の魔道具を使いながら武闘大会の開幕を告げた。

「今年もまた、この時がやって来た。」

己の武に絶対の自信を持つ強者達、そして、王国の未来を支える若

き騎士候補生達が全力でぶつかり合う、闘いの時だ。

しのぎを削れ。

死力を尽くせ。

全力を出しきれ。

私は、そんな諸君の活躍を楽しみにしているぞ。

——ここに、第91回王都武闘大会の開催を宣言する！」

『おおおおー！』

シングルスの宣言に、会場中が湧いた。

そこに、私に対して土下座していた愚王の面影など欠片もない。

あいつも、ちゃんとしてれば立派な国王なんだよ。

ちゃんとしてれば。

あと、どうでもいい話だが、スカーレットはあそこにいなくてもい

いのだろうか？

そんな思いで、横のスカーレットをチラリと見る。

すると、私の視線にスカーレットは気づいたらしく、スツと目を反

らした。

……なんだ、その反応は？

まさか、サボってるとか、そういう事じゃあるまいな？

いや、だとしても、サボりの常習犯である私が言えた義理ではない

か。

黙ってこう。

『それでは、これより予選Aブロックを開始します。

選手の皆様は、控え室に集合してください』

続いて、そんな放送が流れた。

よし、私の出番だな。

「では、行ってくる」

「リンネちゃん、頑張ってください！」

「任せろ！」

アリスの応援で元気百倍だ！

大活躍をしてみせようぞ！

「オリビア、あなたも頑張りなさい！」

「ハッ！ 全力を尽くさせていただきます」

隣では、スカーレットがオリビアに激励を送っていた。

負けんぞという視線をオリビアに向ければ、珍しく好戦的な目で睨み返された。

滾るな。

さて、ではやるとするか。

私は、気合い充分のベストコンディション状態で、オリビアと共に控え室へと向かったのだった。

60 予選Aブロック

この大会において、相手選手の殺害は禁止されている。当然だな。

前途ある騎士候補生を、こんな所で殺す訳にはいかない。

故に、武器は真剣の使用が禁止され、コロシウムが貸し出す木製の武器を使う。

オスカーとかに不利なルールだ。

さすがに木製の矢は用意されてないからな。

多分、あいつは弓矢なしで戦う事になるだろう。

そういう訳で、私も木剣を片手に、コロシウム中央に設置されたりリングの上へと向かった。

このリングから落ちたら場外負けだ。

あと、失神とかして戦闘不能になったと判断された者は、リングの外に待機してる魔法使いの手によって救出される。

敗北者に優しい仕様だな。

ちなみに、このリングの周りにも、当たり前のように結界が張られている。

これなら、私も思う存分、暴れられるな。

スタスタと、リングの中心に向かって歩く。

その途中で、私を知らないっぽい一般参加の兵士や冒険者が奇異の視線で見えてきたが、軽く無視する。

まあ、気持ちにはわかるがな。

こんな小さな女の子が大会に参加してるのは不自然だし。

そういえば、小さい頃の弟子どもをこの大会に放り込んだ時も、周囲が似たような反応してたな。

結果は、三人全員が決勝トーナメントに進んだ上に、当時10歳のアレクが満身創痍ながらも優勝したんだったか。

懐かしい。

『それでは、これより予選Aブロックを開始します！ 5、4、3……』
そんな事を思い出している間に、開始までのカウントが始まった。

そして……

『2、1……試合開始!』

グワーン! と再び銅羅の音が鳴り響き、遂に試合が始まった。
さて。

では、初撃を盛大に決めてやるとしよう!

「飛劍——」

私は木剣に闘気を集め、片足を軸に、もう片方の足を地面に擦り付けながら、クルリと回転し、横薙ぎに木剣を振り抜いた。

「大嵐!」

『ぐあああああ!?!』

リング中央から発せられた衝撃波によって、多くの選手達が吹き飛ばす。

さすがに、この大会に出てくる腕自慢だけあって半数も削れなかったが、武闘大会の始まりを告げる一撃としては十分に派手だろう。

この一撃で、私の周囲から人が吹き飛び、リング中央に空白地帯が出来た。

残った選手達は私の先制攻撃に警戒し、観客達は驚愕して、コロシアムは静まりかえる。

そして私は、そんな空気をぶち破るように、剣を空に向けて高々と掲げながら、堂々と宣言した。

「私はリンネー! S級冒険者『天才剣士』リンネだ!」

さあ、戦士達よ! 全員まとめてかかって来るがいい!」

放送の魔道具にも負けない大声。

闘気で喉を強化して発したこの台詞を聞いて、選手達が目の色を変えた。

「S級冒険者……あんな小さな子が」

「舐めた真似してくれやがって、カツコいいじゃねえか」

「相手にとって不足なし」

「噂の新生か。先輩として負けていられないな」

それぞれが、それぞれの理由で闘志に火を付け、私を囲って好戦的

に睨みつける。

そして……

『行くぞ!』

示し会わせたかのように、一斉に襲いかかってきた。

「食らえやあー!」

まず最初に接近してきたのは、筋骨隆々で大剣(木製)を振りかぶった大男。

おそらく、腕自慢の冒険者だろう。

それとほぼ同時に、大男含めて前方から四人、後方から三人。

加えて、横からいくつもの魔法が飛んできた。

「よっ」

私は大男の大剣を横にズレて避け、そのまま上空へ向かってジャンプ。

飛び上がる時、ついでのように大男の顎を木剣で打ち抜き、失神させる。

そして、ジャンプした事によって魔法を避けた。

そのまま飛脚を使って急降下し、着地と同時に、意識を失って倒れそうになっていた大男の脚を掴んで振り回す。

即席の鈍器によって、回りの選手達を殴り飛ばして場外に押し出し、最後には手を離して大男も場外へと放り投げた。

『なっ!?!』

「どうした、どうした! その程度か!」

私はまだ、開始地点から殆ど動いていないぞ!

ジャンプはしたがな!

「フレイムアロー!」

「ウインドカッター!」

「ストーンブラスト!」

だが、私が動かないのをいい事に、遠距離から魔法で狙ってくる奴が多い。

今も、我先にと攻めかかった奴らがあつという間に全滅して尻込みした前衛職の代わりに、後衛の魔法使いがまたしても魔法攻撃をして

きた。

鬱陶しい。

そんな、何の工夫もない単発攻撃でやられる私ではないわ！

「飛劍・嵐！」

衝撃波を放って魔法を散らす。

そして！

「飛劍！」

『うあああああ!?!』

こちらと同じ遠距離攻撃で、魔法使いを潰す。

遠距離攻撃は魔法使いだけの特権ではない。

熟練した剣士、闘気使いならば、遠距離戦でも並の魔法使い程度に後れはとらぬ。

まあ、そんな事をするくらいなら、近づいて斬った方が早いんだがな。

しかし、私が本気で攻めたら、速攻で試合が終わってしまう。

観客がいる大会でそれはマズイだろう。

故に、今の私はリングの王者だ。

相手から攻めさせ、その全力を受け止めて勝つ、霸王である。

さあ、もつと全力でかかって来い！

弟子どもを鍛えていた時の要領で、返り討ちにしてくれよう！

「調子に乗るなよ小娘！」

「先輩の力を教えてあげよう！」

次に襲いかかってきたのは、槍を持った冒険者風の男と、台詞からして騎士学校の先輩と思われる青年。

そして、その二人に追従するようにして、結構な数が攻めてきた。

「そらあ！」

「攻ノ型・槍牙！」

先頭の二人が突き技を放ってくる。

結構な練度だ。

二人とも、A級冒険者の上位くらいの強さはあるかもしれん。具体的に言うと、父よりも強そうだ。

「守ノ型・流！」

「がっ!？」

「ぐっ!？」

だが、私には届かん!

私に到達するのが早かった槍の攻撃を受け流し、先輩の剣にぶつける。

そうして体勢が崩れたところに、流れるようなカウンターを腹に叩き込んで、場外に吹き飛ばした。

「ハアアアアア！」

「オラアアアア！」

だが、二人が落ちても攻勢は止まらない。

残りの選手達がもう止まれないとばかりに、数の暴力に任せて殺到してくる。

剣士の放った斬撃を避けながら懐に入り込み、胴を叩いて吹き飛ばす。

槍使いの突きに対しては、避けてから槍の柄を掴んで捻り、獲物を手放させてから、逆に石突で急所を突いて倒した。

剣の間合いの内側に入ってきた拳闘士は、突き出された拳を素手で受け流し、こちらも拳で額を打ち抜いて失神させる。

斧を振りかぶる者がいれば、振り下ろされる前に喉元に突き。

隙を突こうと気配を消す者がいれば、出てきた瞬間に木剣で殴り付ける。

そうして私は、リング中央から動かぬままに、向かってくる連中を鎧袖一触とばかりに薙ぎ払っていった。

そうしている内に、リングの上に残っているのは私を含めて二人だけになる。

私に向かつて来た連中は全員脱落し、遠距離攻撃に徹していた連中は、もう一人の生き残りが仕留めたらしい。

私は、その生き残りに向かって声をかける。

「やはり、最後にはお前が残ったか。大したもんだな、オリビア」
「お褒めに預り光栄です」

会話を挟みながらも、オリビアは油断なく剣を構えながら、私の隙を窺っていた。

さすが王女スカレットの護衛。

空間魔法だけではないという事か。

「リンネ様。前言通り、胸をお借りします」

「よかろう。さあ、かかって来いオリビア！」

「では……参ります！」

そう言つて、オリビアが動く。

姿勢を低くし、脚に力が籠った。

そして、そこから繰り出される技は、

「飛脚！」

オリビアは、私も愛用している飛脚によつて間合いを詰めてきた。

そのまま、突きの姿勢へと移行した。

基本に忠実。

良い動きだ。

「攻ノ型・槍牙！」

オリビアの突きが放たれた。

それに対抗するように、私は剣を動かす。

しかし、その瞬間にオリビアの剣が軌道を変えた。

「攻ノ型・陽炎！」

フェイント技。

突きから横薙ぎへと変化した斬撃が、私の胴に迫る。

だが。

「守ノ型・塞」

私は動じずに、正面からオリビアの剣を受け止めた。

最初から、オリビアの動きは読んでいた。

少しかだけ突きの威力が弱く、重心が体の方に残っているのがわかつたからな。

たからな。

フェイントを使つてくるとわかつた。

それでも、並の剣士ならば普通に引つ掛かるくらいには綺麗な技だった。

「ッ！」

オリビアは、あっさりと剣を止められたと見るや、腕に力を籠めて私を押し、その反動と飛脚を合わせて即座に後ろへと下がった。

反応が早くて大変結構だが、その状態では追撃されるぞ！

「飛剣！」

私の放った、飛ぶ斬撃がオリビアに迫る。

だが、それは……

「ディメンジョン！」

オリビアの発動した魔法により、空間の歪みの中へと消えていった。

同時に、私のすぐ近くにも空間の歪みが発生する。

これは!?!

「おおっと!?!」

嫌な予感がして、その場から離れば、案の定、空間の歪みから私の飛剣が飛んできた。

なるほど、そうなるのか！

という事は、今の動きは私が飛剣を撃つ事を誘いやがったな！

「やるではないか！」

「光荣です。飛剣・断空！」

そうしたら、今度は飛剣が空間を歪ませながら飛んできた。

あれに当たったら、ただでは済まないだろうな。

最悪、闘気の鎧を無視して空間ごと斬られそうだな。

「攻ノ型・一閃！」

その一撃を、剣の一振りで斬り払う。

達人剣士の一太刀は、魔法を魔力ごとぶった斬るのだ。

だからこそ、剣士の頂点たる『剣神』が魔法使いを差し置いて世界最強と呼ばれる。

この程度の攻撃、私には通じぬぞ！

「転移！」

「ぬっ！」

しかし、オリビアはこれを防がれる事まで想定していたらしい。

転移で即座に私の背後へと現れ、剣を振るう。

それが防がれたと見るや、すぐに次の技を放ってきた。

「次元・槍牙！」

「む!？」

正面から繰り出されたと思った突きが空間の歪みに呑み込まれ、あらぬ方向から現れた。

それすらも避けるが、その時には再び転移を発動し、オリビアは距離を取っている。

それだけではない。

オリビアは、何もない空間に向かって、剣を振り下ろした。

「次元・一閃！」

「おおぅ!？」

振るわれた剣は、距離を越えて一瞬で私に届く。

しかも、現れる方向も角度もてんでバラバラ。

振り下ろしたと思ったら、横から出てくる事もある。

やりづらい……。

まさか、戦闘には向かないとされる空間魔法を、ここまで使いこなすとはな。

空間魔法が戦闘に向かないとされる理由は、たしか発動速度の遅さだったか。

だが、それは転移させる人数や、転移させる物の大きさ、転送距離なんかの問題が大きいと小耳に挟んだ事がある。

つまり、転送距離がこのリング程度で、転移させる物が剣や自分の体一つ程度なら、案外なんとかなるらしい。

それはオリビア自身が実証している。

だが、それでも相当な鍛練を積んだ筈だ。

空間魔法を使う魔法剣士など、私はオリビア以外に見た事がない。つまり、おそらく、この戦い方はオリビアの我流。

教えを乞う師もなく、この戦法を実戦レベルに昇華させるまでに、いったいどれだけの時間がかかった事か。

それだけの努力を積み上げてきただろうオリビアには、素直に称賛

を送りたくなる。

「だが」

それでもまだ、私には届かない。

オリビアは強い。

だが、私には遠く及ばない。

空間の歪みが私の近くに発生した瞬間、私はそこに向かって剣を突き出した。

向こうの攻撃が届くという事は、こちらの攻撃も届くという事。

タイミングさえ合わせれば、カウンターを狙える。

「うっ……!?!」

距離を越えた逆襲を食らったオリビアは、私の突きを腹に食らって、一瞬、動きが止まった。

そこに向かって私は飛脚で距離を詰める。

空間魔法に頼らずとも、このくらいの距離ならば一瞬で移動できるのだ。

「攻ノ型・一閃!」

「かはっ……」

オリビアが何かをする前に、頭を木剣で叩いて意識を奪った。

私を通りすぎた後に、オリビアが膝から崩れ落ちて意識を失う。

勝負ありだ。

「見事だったぞ。私を開始地点から動かした事、素直に誇るがいい」

『決着!・ 予選Aブロック、勝者はS級冒険者『天才剣士』リンネ選手!』

グワーン! と再び銅羅の音が鳴り響き、試合の終了を告げる。

同時に、観客達が歓声を上げ、拍手を送ってきた。

私はそれに応えるように、天に向けて拳を突き上げ、ガッツポーズを決めたのだった。

61 予選Bブロック開始

「帰ったぞー」

「お疲れ様です」

Aブロックの戦いを終え、私は観客席へと戻って来た。

隣には、つい先程まで激戦を繰り広げていたオリビアの姿もある。

オリビアを倒した後、一人で帰るのもアレだと思って、オリビアの治療が終わるまで待っていたのだ。

まあ、軽く頭をぶつ叩いて意識を飛ばしただけなので、待機してた治療術師に、軽く治療の魔法をかけてもらっただけで復活したかな。

で、観客席まで二人で戻って来た訳だ。

そして、帰って来て早々に、オリビアはスカーレットの前にひざまずいた。

「申し訳ありません、スカーレット様。ご期待に応える事ができませんでした」

オリビアは悔しそうな声で、深々と、それはそれは深々と頭を下げた。

スカーレットは、そんなオリビアの頭に優しく手を置き、よしよしとばかりに撫でた。

「スカーレット様……？」

「リンネさん。オリビアと戦ってみてどうでしたか？ 強かったですか？」

む？

このタイミングで私に振るか。

まあ、別に構わないんだが。

「強かったぞ。お世辞抜きで最後に戦った時のベル△級冒険者よりも強い。

空間魔法使いにしとくのが惜しい逸材だ」

「おい、ちょっと待て！」

ベルが吠えたが無視する。

今はスカーレットと話してるのだ。

お前はオスカーとでも遊んでろ。

「だそうですね、オリビア。あなたは、あのリンネさんに力を認めさせ
た。

十分な活躍です。わたくしも鼻が高いですわ」

「スカーレット様……！」

「よく頑張りましたわね」

「……ハッ！」

オリビアが感極まったのか涙ぐみ、スカーレットはひたすらにオリ
ビアの頭を撫で続けた。

うむ。

麗しき主従愛だな。

良いものを見た。

そうして、オリビアがスカーレットの護衛に戻り、他の連中とAブ
ロックの感想を言い合っている間に、土魔法使いが破損したリングを
修復していた。

そして、

『お待たせいたしました。これより、予選Bブロックを開始します。

選手の皆様は、控え室に集合してください』

Bブロック開始の時間がやってきた。

つまり、シオンの出番だ。

「……行ってくる」

シオンが緊張してる感じで、席を立った。

Bブロックにはクソ虫が出てくる。

因縁の対決だ。

緊張するのも無理はない。

だが、だからこそ。

「シオン」

「……なんだ？」

「頑張れよ！」

私は、シオンの背中をドンツと叩いた後、グツと親指を立てて、シ
ンプル・イズ・ベストな応援の言葉をかけた。

「……ああ」

ぶつ叩いた衝撃で少しは緊張が解けたのか、シオンは少しだけ穏やかな顔で答えた。

うむ。

これなら、心配はいらんな。

「シオンさん！ 頑張ってください！」

「お前は俺が倒すんだからな！ それまで負けんじやねえぞ！」

「ファイトっす！」

「が、頑張っつて！」

「気張れよ、坊主」

「フォルテを叩き潰してくださいませ！」

「ご武運を」

続いて、この場の全員が応援の言葉をかけた。

シオンはそれに対して、

「ああ。任せろ」

実に頼もしい不敵な笑みを浮かべながら、そう言った。

そして、シオンは控え室の方へと消えて行く。

そうして、戦いが始まった。



『それでは、これより予選Bブロックを開始します！』

5、4、3、2、1……試合開始！』

その放送と同時に銅羅の音が鳴り響き、予選Bブロックの戦いが開始された。

選手達の一部は、まずは優勝候補の一角を崩す為べく一時休戦し、このブロック最強の選手『風の貴公子』フォルテ・アクロイドに向かって突撃した。

「風の貴公子い！」

「その首もらった！」

「日頃の恨み！」

彼らは去年の武闘大会を見ている。

故に、一切の油断なく、手段も選ばず、数の暴力に任せてフォルテを襲撃した。

卑怯とは言うまい。

何せ、相手は去年の優勝者なのだ。

このくらいしなければ勝負にもならない。

「邪魔だ」

苛立ち混じりの小さな声でそう呟き、フォルテが腕輪のハマった左手を翳す。

その掌の中に膨大な魔力が集中し、それが魔法となって放たれた。

「テンペストウインド！」

『うあああああああ!?!』

特大の風は渦を巻き、巨大な竜巻となってコロシウムの中を蹂躪する。

出し惜しみなしの最高火力の魔法は、結界を歪ませ、選手達を吹き飛ばし、開始数秒にして殆どの選手を脱落させてしまった。

「ふう……」

上級魔法にすら匹敵する学生の身には不相应な程の魔法を発動させ、一気に大量の魔力を使ったが故の疲労を感じ、フォルテは軽く息を吐いた。

そして観客席、貴賓席の方へと目を向ける。

そこでは、フォルテの父であるピエールが、つまらなそうな顔でフォルテを見ている。

だが、その目に失望の色はない。

(なんとか、首の皮一枚繋がっているといったところか)

そんな父の姿を見て、フォルテは少しだけ安堵する。

以前、フォルテは戦闘授業の際に、平民とアリスを相手に敗北し、騎士学校最強の称号と、父からの信頼を失った。

それを取り返さなくては、フォルテに未来はない。

フォルテは勝たねばならない。

優勝する事、そして、フォルテに屈辱を味あわせた二人を打ち負かす事は必須条件。

それでいて、できうる限り派手に、戦いに理解のないピエールでもわかる程の圧倒的な力を見せつけて勝たねばならない。

難易度は高い。

高過ぎる。

まず、リンネに勝たねばならないという時点で半ば詰んでいるし、この大会には剣聖も出場しているのだ。

去年は、本格的な戦いになる前に、相手のミスによつて運良く勝てたが、今年はそうはいかないだろう。

教国最強の剣士と真っ向から戦って、果たして勝てるのか？

……わからない。

今までは意図して目をそらしてきた事だが、今度ばかりは逃げられない。

しかし、どの道、フォルテに選択肢はないのだ。

(勝つしかない。勝つしかないんだ……！)

焦燥に駆られながら、フォルテは決意を新たにす。

しかし、その行いは、

「よそ見とは余裕だな！」

目の前の試合に集中しないという、剣士として失格の愚行であった。

だが、それでも問題はないのだ。

フォルテは、闘気によつて強化された臂力によつて、先の魔法を耐えきつて反撃に出てきた巨漢の冒険者の拳を、片手で受け止めた。

「何っ!？」

「よそ見？ その通りだね。君達なんて眼中にないんだから」

そう言いながら、もう片方の手に持った剣に風を纏わせていく。

剣を中心に、まるで台風のような風が吹く。

それはまるで、強力な魔剣を思わせる光景であった。

そして、フォルテはその力を解き放つ。

「風魔・一閃！」

「ぐはあああああ!?!」

飛劍・嵐にも似た爆風の斬撃が、巨漢の冒険者を、まるで羽毛の如く軽々と吹き飛ばし、リングを覆う結界に叩きつけて場外負けとした。

体格差など、ものともしない。

圧倒的であった。

圧倒的な力を持つ絶対強者の戦いであった。

少なくとも、表面上はそう見えた。

「ッ!」

「こいつは……!」

「強い……!」

残りの参加者達の殆どが、フォルテを怖れて一步後退る。

単純な強さという意味でもそうだが、フォルテの放つ鬼気とした気迫が、余裕を失った手負いの獣のような気配が、戦士達の動きを鈍らせた。

「飛劍・大竜巻!」

『うあああああああ!?!』

選手達が、吹き荒れる風に浚われて吹き飛んでゆく。

魔力の消耗を度外視で放たれる、高出力の魔法の数々に襲われ、選手達は次々に脱落していく。

そして……

「スパーク!」

『ぐあああああ!?!』

その猛攻に耐えていた猛者達は、全くの別方向から襲ってきた雷の魔法によって倒された。

A級冒険者並みの猛者達が、感電して意識を失う。

あるいは、動きの止まった隙に風に吹き飛ばされて場外負けとなる。

そうして、リングの上に立つのは、風の魔法剣士と、雷の魔法剣士の二人のみとなった。

「やっと、この時が来た」

雷の魔法剣士、シオンが感慨深そうに呟く。

それに対して、フォルテは不快そうに顔をしかめた。

「ああ、君はあの時、僕を殴ってくれた……。」

本当なら、君にも相応の報いを与えなければいけないのだけどね。

でも、今の僕は、君に構っている暇はないんだ。

邪魔だから、どいてもらうよ」

その言葉の通り、フォルテの眼中にシオンは入っていない。

自分を殴ってくれた事には腹が立つし、その内、然るべき裁きを下してやろうとは思う。

しかし、今はリンネやアリスが先だ。

翌日の決勝トーナメントに向けて体力を温存するべく、フォルテは速攻で勝負を決めるつもりでいた。

「それはできない。お前は俺が倒す」

それに対して、シオンは毅然とした態度で相對した。

七年。

かつて、シオンがフォルテによつて人生を狂わされてから、それだけの時間が経っている。

幼き日に、この理不尽な権力を倒す事だけを考えて剣を振るつた。

その果てに、ようやく巡ってきた反撃のチャンス。

負ける訳にはいかない。

負けるつもりもない。

勝つて、あの日の因縁に決着をつける。

シオンの闘志は燃えていた。

轟々と燃え盛っていた。

「風纏い」

フォルテが、体表に風の鎧を纏わせる。

術者の速度を引き上げ、高速戦闘を可能とする移動補助の魔法だ。

かつて、シオンはその速度を再現したリンネの剣撃の前に、成す術もなく敗れている。

だが、シオンとて、あの時のままではない。

フォルテの風纏いに対抗するように、シオンもまた体表に魔力を纏

わせた。

闘気ではない。

それは既に発動している。

この技は、つい最近になって身につけたものだ。

これを教えてくれた師匠からすれば、まだまだ未完成と言われた未熟な技。

しかし、その効果は絶大だ。

シオンは見ている。

この技の完成形を発動させた男が、最強と呼ばれた元剣神リンネをも上回る力を発揮したところを。

「――奥義・雷神憑依」

シオンの体が雷を纏う。

和国から来た最強の侍、ライゾウから学んだ必殺技。

不完全とはいえ、僅か数日の師事での技を発動させるに至ったシオンを見て、ライゾウですら驚愕した、今のシオンが持つ最強の切り札。

観客席のリンネが「マジか!?!」と驚愕の声を上げた。

「なんだ、それは……!?!」

「行くぞ。フォルテ・アクロイド」

同じく驚愕するフォルテに向かって、シオンが突撃した。

因縁の戦いが、始まった。

62 シオン VS フォルテ

「飛脚・電光！」

「ッ!？」

シオンが、フォルテの予想を遥かに超える速度で肉薄する。

いや、予想どころか、確実にフォルテの速度をも超えていた。

そのままシオンは、まるでリンネを思わせる超速で剣を振るった。

「紫電・一閃！」

「ぐっ……!？」

雷を纏った一閃が炸裂する。

フォルテも咄嗟にガードはしたが、間に合わずに吹き飛ばされた。

しかも、その一撃は速いだけでなく、風と闘気の鎧を貫いて、決して軽くないダメージをフォルテへと与えた。

(痛い……)

フォルテは心の中で弱音を吐いた。

痛み。

それは、最もわかりやすい苦しみだ。

苦しみは人の心を蝕み、弱い心であれば、そのまま折ってしまう。

しかし、フォルテの心は折れなかった。

(あの時に比べれば!)

思い出すのは、リンネとの戦い。

否。

あれは戦いとも言えぬ、一方的な蹂躪であった。

一方的に叩きのめされ、痛めつけられた、屈辱と恐怖の記憶。

あんな思いをしたのは、人生で二度目だ。

あの完膚なきまでの敗北は、幼い頃のトラウマを刺激し、フォルテに多大なる恐怖を刻んだ。

虚勢を張り、屈辱に怒ったふりをして、無理矢理怒りで恐怖を塗り潰した。

大丈夫、一度目の時のように、父の権力にすぎれば何とかなると、必死に自分に言い聞かせて正気を保った。

その時に比べれば、この程度の痛みは屁でもない。

「飛脚・疾風！」

そうして、今度はフォルテから仕掛ける。

まるで先程の攻防の焼き直しのように、今度はフォルテが飛脚を使ってシオンに肉薄し、剣を振り抜く。

「風魔・一閃！」

「くっ……!?!」

今のシオンよりは遅いが、フォルテの一撃も十分に速い。そして、力に関してはフォルテが上だ。

シオンとフォルテでは、纏っている闘気のレベルが違う。先程のフォルテと違って、シオンのガードは間に合った。

しかし、ガードの上から強引に叩かれて、シオンもまたフォルテと同じだけのダメージを負う。

まさに、一進一退の攻防が続いていた。

「雷神・槍牙！」

「風神・槍牙！」

今度は、互いの突きが正面からぶつかり合う。

剣と剣の激突によって軌道が変わり、技は互いに不発に終わる。

それを認識した瞬間、ほぼ同じタイミングで両者は後ろへと飛んだ。

そして、今度は剣に魔法を纏わせ、放つ。

「飛脚・雷迅！」

「飛脚・風刃！」

属性の差により、雷の方が速く相手に到達する。

魔力の差により、風が雷を斬り裂いて直進する。

しかし、その時には既に、シオンは次の攻撃に移っていた。

「五月雨・雷雨！」

「!?! 守ノ型・塞！」

電光石火の連続攻撃を、フォルテは何とか防いでいく。

当然、速度でも技術でも勝るシオンの攻撃を防ぎ切れる筈もなく、防御に失敗した攻撃が確実にフォルテを弱らせていく。

もしも、これが真剣での斬り合いであれば、今頃フォルテは血塗れになっていただろう。

あるいは、なます切りにされていたかもしれない。

しかし、今使われているのは木剣だ。

ダメージにはなつても、決定打に欠ける。

「破断・雷！」

「守ノ型・流……ぐう!？」

僅かに速度を落とす、威力に特化した斬撃を放つシオン。

結果として、それが緩急を生む事となり、この攻撃を受け流せなかったフォルテに大きなダメージを与える事に成功した。

攻撃がヒットした左肩の骨は砕けるか、そうでなくとも大きな輝が入っているだろう。

だが、フォルテはまだ倒れない。

(チツ！)

心の中で、シオンは焦り混じりの舌打ちをした。

この状況、一見シオン優勢で進んでいるように見えるが、実際はそうでもない。

確かに、ダメージが蓄積し、フォルテは弱ってきている。

だが、同時にシオンもまた弱ってきているのだ。

ダメージを受けている訳ではない。

体力が削られている訳でもない。

しかし、シオンの戦う為の力は刻一刻と、それこそ一秒ごとに大きく失われている。

シオンが消耗している力。

それは魔力だ。

魔法の発動には必ず魔力が必要であり、その消費量は強力な魔法や扱い切れぬ魔法を使う事によって、加速度に上がってしまう。

シオンの使っている技。

雷神憑依は、もろにこの条件に当てはまっている。

ライゾウの生家に代々伝わる奥義であり、その難易度や魔力消費量は、この技を完全に極めたライゾウですら出し渋る程に凄まじい。

加えて、シオンはまだ15歳の子供。

魔力量はまだまだ成長途上であり、ライゾウに比べれば大きく劣る。

幼い頃より魔法を使い続けてきたシオンの魔力量は、そこら辺の大人よりも余程多い。

それでも、雷神憑依を使いこなすには不足に過ぎる。

今のシオンの魔力で、雷神憑依を発動していられる時間は、凡そ一分。

リンネの神速剣以上に明確な制限時間が存在するのだ。

一分を過ぎれば魔力は枯渇し、雷神憑依も闘気も解けた上に、魔力切れ特有の疲労感がシオンを襲うだろう。

そうなってしまうては、もはやフォルテには勝てない。

故に、シオンは勝負を急ぐ必要があるのだ。

「おおおー！」

シオンが雄叫びを上げながら、攻撃のギアを更に上げた。

先程よりも更に速い斬撃の連打が、フォルテを襲う。

しかし、

(当たらない!?)

(さっきよりも鈍い!)

その判断は間違いであった。

焦ったが故の判断ミス。

剣撃とは、ただ速ければ良いというものではない。

無理に速さのみを追い求めれば、振りの形が疎かになり、無駄に力が入り、結果として剣は鋭さを失ってしまう。

かつて、アリスが速い剣に拘ったが結果、陥った失敗。

勝負を急ぐあまり、シオンはそれと同じ失敗をしてしまった。

(マズイ!)

「もらった! 疾風・重槍牙!」

「くっ!?!」

そして、自分のミスに自分で気づいた時には、もう遅い。

その隙を突かれて攻守が逆転し、今度はフォルテが怒涛のラッシュ

でシオンを追い詰める。

フォルテの剣は速い。

それこそ、今のシオンやリンネといった例外を除けば、学生で並ぶ者はいない程に。

剣聖ですら、速度という一点においてはフォルテに劣る。

そんなフォルテの攻撃だ。

こうなってしまうえば、今のシオンと言えども容易くは逆転できない。

「五月雨・旋風^{せんふう}！」

「守ノ型・流！ くっ……い！」

そして、フォルテの攻撃は一撃一撃が重い。

受け止める事などでできず、受け流す事も至難。

防御に集中しなければ、瞬く間に敗北する。

だが、守っているだけでは確実に負ける。

制限時間は、もうすぐそこにまで近づいているのだから。

(どうする!?!)

フォルテの攻撃を必死に凌ぎながら、シオンは考える。

逆転の目を。

勝利への道筋を。

フォルテの攻撃は熾烈だ。

だが、その顔に余裕はなく、むしろ、フォルテもまた必死に剣を振っている。

シオンの与えた傷が効いているのだ。

先程までのシオンの攻撃は、フォルテの全身を打ち抜いた。

その内、剣を振るう腕に当たった回数も多く、特に左肩に当てた破断の一撃はかなり効いているだろう。

今のフォルテは痛みを堪えながら剣を振っている。

ならば、必ず限界がある筈。

どこかで必ず動きの鈍るタイミングが訪れる。

その隙が出来るのが先か、シオンの魔力が尽きるのが先か。

それこそが勝敗を別つ境目。

そして、——勝機は訪れた。

「ツ!?!」

突然、フォルテの動きが止まる。

左肩が上がらない。

遂に、痛めつけられた骨が悲鳴を上げたのだ。

骨に刻まれた罅が大きく広がり、砕けた。

壮絶な痛みがフォルテを襲う。

それが、フォルテの動きを止めてしまった。

「しまっ……!?!」

そこへ、待っていたとばかりに、シオンの一撃が繰り出される。

魔力は尽きる寸前。

これが最後の一撃。

その一撃に、剣の最後の一振りに、シオンは渾身の力を籠める。

イメージするのは、シオンが見てきた中で最も速く、最も鋭い至高

の剣技。

目の前の強敵を一方的に叩きのめした神の剣。

今のシオンでは逆立ちしても真似できない技。

だが、自分なりに少しでも近づこうと、その剣技を模倣し、雷神憑

依で速さを底上げし、その技を放った。

「神速剣・一閃!」

神速の領域へと、ほんの僅かに足を踏み入れたシオンの剣は、咄嗟に残った右手をガードに回そうとしたフォルテの稼働速度を遥かに上回り、——その頭部に、決定的な一撃を叩き込んだ。

「ぐ……あ……」

フォルテが、膝から地面に崩れ落ちる。

「ハア……ハア……」

対するシオンも完全に魔力を使い果たして肩で息をし、極度の疲労の中、気力だけで立っていた。

もう一歩も動けない。

しかし、倒れる訳にはいかない。
勝利が確定する、その瞬間までは。
だが、

「あああああああああー！」

倒れたフォルテが、獣のような咆哮を上げながら起き上がる。

頭から血を流しながら、震える手足に力を籠め、焦点の合っていない目を見開いて、立ち上がる。

倒れる訳にはいかない。

その執念のみで、フォルテは起き上がった。

『いいですか、フォルテ。我がアクロイド家に無能はいりません』

ぼやけた頭に浮かんでくるのは、遠い昔に父に言われた言葉。

幼い頃、人生初の大敗を喫して、父に泣きついた後の事。

『君には期待していました。君には剣と魔法の才能がある。使い方によっては『剣神』にできるかもしれないとまで思っていたんですよ。

なのに、君は同年代どころか年下の平民に完膚なきまでに敗れた。

正直、失望しましたよ。

ただ、まあ、君はまだまだ幼い。

成長の余地はいくらでも残されているでしょうし、ここで切り捨てるのはいささか早計というものでしょうからねえ。

ですから、慈悲をあげましょう。

二度とこのような事がないように自分を鍛えなさい。

そうして、誰にも負けない天才でいる限り、私は君を可愛い息子として扱ってあげます。

それができなかつた時は……わかっていますね？』

そう語る父の事が、怖かった。

怖くて怖くて堪らなかつた。

強くなければ、天才でなければ見限られる、見捨てられる。

その恐怖は、フォルテの心の中にいつまでも残り続けた。

だから、学校では必死に力を見せつけてきた。

権力を振るい、気に入らない者を迫害し、自分は強者なのだと自分に言い聞かせてきた。

自分は天才だ。
才能と権力に恵まれて生まれた。
ずっと勝つ事が、勝ち続ける事が当たり前なのだ、自分に言い聞かせてきた。

その影で、決して努力も欠かさなかった。
努力している天才は強い。

強いから負けない。

負けなければ、父に見捨てられる事はない。

そんな事をずっと考えながら生きてきたのだ。

幼き日に、青髪の少年に打ちのめされ、父にトラウマを刻まれたその日から！

そんな思恐怖いだけを原動力に、フォルテはシオンを睨みつける。

疲労困憊になりながらも、気丈な目付きで自分を睨む青髪の少年を見る。

そこで、フォルテはふと気づいた。

(そうか……こいつは、あの時の……)

目の前にいる少年の姿が、恐怖の始まりとなった悪夢と被る。

その思い出を、自らの手で払拭するべく、フォルテは無事な右手をシオンに向け、魔法を発動させようとした……

その瞬間。

フォルテの足が、ガクンと崩れた。

(これ……は……!?)

薄れゆく意識の中、フォルテは自分を襲うこの現象が何であるのか、理解できずにいた。

フォルテの症状、それは魔力切れだ。

Bブロックの戦いが始まって最初に使った大技。

その後にも魔力の消耗を度外視で派手な技を使い続けた代償が、ここにきて牙を向いたのだ。

再び地面に倒れ、意識を失う刹那。

フォルテは反射的に観客席に視線を向けた。

そして、見てしまった。

まるで虫を見るような目でフォルテを見下ろす、父の姿を。
心が絶望に支配されるのを感じながら、フォルテは意識を手放し
た。

63 予選Cブロック

「……ホント、最近のガキどもはどうなってんだ。ガキ同士の戦いじゃねえだろ、これはよ……」

シオンとクソ虫の激戦が終わった瞬間、ドレイクがポツリとそんな眩きを漏らした。

S級冒険者であり、私から見ても英雄の域に届いていると思わせる相当の強者であるドレイクが、思わずと言った様子で溢した言葉。

私はそれに内心で同意した。

前世の私が子供の頃もあんな感じだったような気がするが、それはそれ、これはこれだ。

とにかく、歴戦の強者である私やドレイクが認める程、シオンとクソ虫の戦いは凄まじかった。

片や、かなり荒いとはいえ、ライゾウの大技と、まさかの神速剣をこの短期間で習得してきたシオン。

片や、そのシオンを相手に真つ向から互角に戦ってみせたクソ虫。本当に、子供同士とは思えない素晴らしい戦いだった。

この国の最精鋭たる騎士ですら、これ程の戦いができる奴が何人いるか。

これで、この戦いを演じた片割れがクソ虫でさえなければ、手放しで称賛してスタンディングオベーションションしていただろう。

「さすがは俺のライバルだな！ そうじゃないと張り合いがないぜ！」

「いや、これ絶対ベルじゃ勝てないっすよ。シオン強くなりすぎ笑ったっす」

「やってみなけりゃわかんねえだろうがあ！」

「べ、ベルくん、暴れないで!?!」

ベルがオスカーに噛みつき、ラビが必死に宥めるのを無視しながら、私はこの場で最もこの勝利に興奮してる奴に目を向けた。

言わずもがな、スカーレットである。

「シオンさん……! 本当に、本当によくやってくれましたわ！」

！
前回大会優勝のフォルテが予選敗退、これは大きな大きな隙ですわ

この隙を突いて必ずや失脚させてみせます！
覚悟していなさい！」

「ス、スーちゃん、落ち着いて」

「スカーレット様、お喜びのところ申し訳ありませんが、あまりそのような事を大声で叫ぶのはいかなものかと」

「……そうですね。わたくしとした事が失敗でしたわ。以後、気をつけます」

どうやら落ち着いたようだ。

しかし、さっきのスカーレットは獲物を確実に仕留める猛禽類のような目をしていな。

実に頼もしいが少し怖い。

敵に回したくないわ。

この私にそこまで思わせるとは、こいつこそが最強なのではないだろうか？

と、そんな事を考えている間に、本日のMVPであるシオンが帰還してきた。

「やったな、シオン！」

私は因縁に決着をつけ、観客席へと凱旋したシオンの背中を思いつきり叩いた。

そうしたら、シオンが倒れた。

背中を叩いた衝撃のままに体が傾き、客席の椅子の角に頭をぶつけて昏倒した。

打ち所が悪かったのか、頭からは血がドクドクと流れている。

あ、なんかビクビクと痙攣し出した。

ヤベエ。

「シオン!？」

「シオンさん!？」

「シオンくん!？」

慌てて、アリスとラビが倒れたシオンに治療をかけていく。

それで、とりあえず血は止まったし傷も治った。
だが、意識は戻らない。

……これ、私のせいかな？

心なしか、他の連中の私を見る目がジトツとしてる気がする。

「ま、まあ、シオンはぶつ倒れる程、死力を尽くして戦ったという事だな！」

今はゆっくりと寝かせてやろう！」

誤魔化すようにそう言うも、皆のジト目は変わらなかった。

ぬぬぬ……。

「すみませんでした」

「嬢ちゃん、それはシオンの坊主に言ってやれ」

「リンネちゃん、シオンさんの看病はリンネちゃんがしてくださいね」

「はい……」

そうして、私はシオンの看病をさせられる事となった。

正直、こういうのは得意じゃないんだが。

とりあえず、受付までダッシュして雑巾を貰ってきた。

それで、シオンから溢れ出した血を拭き取り、客席の椅子をベッド代わりにしてシオンを寝かせる。

……というか、これもう医療室にぶち込めばいいのでは？

いや、もつと重症な奴が大量にいるからダメか。

それに、この状況でそれを言い出したら、また響燈を買いそうだ。

「……ベッドが固そうですね」

「そりゃ、椅子つすからねー」

「せめて、枕の変わりとかあれば……」

なんか、ラビが枕を探し始めた。

そんなもんは誰も持ってきてないと思うが。

「お、そうだ。嬢ちゃん、膝枕でもしてやったらどうだ？」

「はあ!？」

「あら、良いですわね。リンネさん、お願いいたしますわ」

ドレイクの血迷った発言に、スカーレットが賛同した。

「こ、こいつら!？」

完全に楽しんでやがる!

「そうですね……リンネちゃん、お願いします!」

「ア、アリス、お前もか!？」

いや、この目は……大真面目に言っている!？」

アリス!？」

お前は、もしかして天然なのか!？」

ぐぬぬ。

しかし、アリスに言われては断れない。

仕方なく、本当に仕方なく、私はシオンの頭を自分の太腿の上に乗せた。

うええ……気色悪い。

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!」

「アハハハハハハハハハハハハハハハ!」

「笑うなあ!」

「わ、笑っちゃだめだよ、二人とも……」

案の定、ベルとオスカーに爆笑された。

ラビも、笑う二人を諷めるだけで、助けてくれる様子はない。

ドレイクとスカーレットも面白そうにニヤニヤするだけだし、オリビアは背景に戻っている。

アリスに至っては、真顔で「よし」とか呟いていた。

やはり、天然か!？」

そんなアリスも可愛いが、今だけはやめてほしい!

「ドレイク! 代われ!」

「ここで俺を指名するとか、嬢ちゃんは鬼か?」

私だって、中身的にはお前と大差ないぞ!

爺だからな!

「嬢ちゃん、シオンの坊主は頑張ったんだ。なら、せめて女の子の膝枕くらいの役得はあってもいいんじゃないやねえか?」

いや、そんな真顔で言われても……。

シオンは私の正体知ってるし、これ意識戻ったら余計に体調崩すん

じゃないか？

実際、私はとつても気持ち悪い。

それなら、もうドレイクでもいいんじゃないや……

『これより、予選Cブロックを開始します。』

選手の皆様は、控え室に集合してください』

「お、出番つすね」

「では、行ってきます」

そんな事を考えている間に、リングの修復が終わって、Cブロック開始の時間がやって来た。

そして、出場者であるオスカーとアリスが席を立つ。

しかし、アリスは去り際、

「リンネちゃん、くれぐれもシオンさんをお願いしますね」

「……はい」

私にしっかりと釘を刺して行った。

くっ！

これでは、膝枕をやめるにやめられんではないか！

ここは地獄か!?

そして、私の苦労など知らぬとばかりに、Cブロックの戦いは始まったのだった。



シオンの頭を膝に乗せながら、Cブロックの戦いを見物する。

戦いが始まってから数分。

未だに大きく動く選手はいない。

まあ、普通はそうなるわな。

バトルロイヤルで目立てば袋叩きに合うのは目に見えている。

Aブロックの私や、Bブロックのクソ虫が異常だったただけだ。

私の視線の先では、アリスがあまり目立つ事なく、それでも確実に

活躍していた。

自分の長所をちゃんと理解し、守りとカウンターに徹して、向かって来た連中を確実に倒している。

バトルロイヤルでは最善に近い戦い方だろう。

さすが、アリス。

一方、オスカーもまた、意外な事にあまり目立っていない。

あいつの事だから、開幕直後にクソ虫みたいなド派手な魔法でもぶっ放つかと思っていたんだが、予想に反してかなり堅実に戦ってる。

やはり、本来の装備である弓が使えないのは痛いという事だろうか？

今のところ、風魔法の移動補助使ってチヨロチヨロしてるだけだな。

そんな感じで、先の2ブロックと違って、至極真つ当な戦いが展開されているCブロック。

だが、やはりというか、このままでは終わらなかった。

とある一団の行動を切欠にして、試合が動く。

「「フォルテ様の仇！」」

「え!？」

突然、とある三人組がアリスに襲いかかった。

どこかで見た事あるような気がするが、思い出せない。

でも、台詞を聞いただけで、こいつらは私の敵だという事はわかった。

「ああ。誰かと思えば、フォルテの取り巻きですわね」

スカーレットの呟きを聞いて、ああ、そういう奴らもいるのかと納得した。

クソ虫の取り巻き。

蛆虫か何かだろうか？

「強いのか？ あいつら」

「あら？ リンネさんは、あの三人と面識があった筈ですが？」

「いや、知らんぞ、あんな連中」

なんで、私があんな蛆虫どもと面識を持つてる事になってるんだ？

「ほら、あれですわ。フォルテとリンネさんが初めて会った時にいた「む？」」

クソ虫と初めて会った時？

奴を初めて見たのは、確か食堂でアリスに絡んできた時だよな。

あの時に……ああ、そういうえばいたような気がする。

取り巻きっぽい小虫が三匹。

私の殺気に怯えて失禁しそうになってた奴らだ。

影が薄すぎて、今の今まで完全に忘れていた。

「思い出しましたか？」

「一応な。クソ雑魚だという事くらいしか知らんが」

「それだけわかっていらっしやれば十分ですわ。あの程度の連中、アリスの敵ではありませんもの」

スカーレットの言う通りだな。

事実、リングの上では、アリスが華麗に踊るかのように小虫三匹の攻撃を完璧に受け流していた。

そして、何発もカウンターを当てている。

だが、小虫三匹は意外にしぶとい。

場外に吹き飛ばされそうになっても、ゴキブリのようなしぶとさでリングにへばりついている。

さっきのクソ虫といい、何気に根性あるな。

そして、このままでは絶対に勝てないと悟ったのか、小虫三匹は作戦を変えた。

「フレイムバースト！」

「アクアブラスト！」

「サンドストリーム！」

三匹ががりで、かなり強力な魔法を放ってきた。

消耗を考えていないのか、その魔法の威力は、三匹合わせればシオンと同じくらいには高い。

だが、逆に言えばその程度。

アリスには通用しない。

「ウォーターボール！」

高速回転する水の防壁がアリスを包み、それが小虫達の魔法を完全に防ぎきった。

シオンとアリスだと、剣術の腕はシオンが上だったが、魔法の腕はアリスの方が上だ。

そのシオンと同程度の魔法を、何の工夫もなく正面から撃った程度で、ウチの孫は倒せない。

さすが、アリス。

カッコ可愛い。

「クソツッ！ これでも通用しないか!？」

「こうなれば!！」

「最後の手段だ!！」

「お前達！ やってしまえ!！」

『ハッ!』

小虫三匹が号令を発した瞬間、リングのあちこちで戦っていた騎士候補生の一部が、一斉に集まってアリスを狙い出した。

これは……!？」

「スカーレット! これは、どういう事だ!？」

「彼らはフォルテの派閥の者達ですわ。思ったよりCブロックに集中していましたのね」

呑気に言ってる場合か!？」

アリスに向かって行ってるのは、Cブロック出場者の半数近く。

これが雑魚ばかりならアリスの敵ではないんだが、中にはそこそこ強そうなのも交ざってる。

多分、三年生だろう。

騎士学校卒業間近、つまり騎士一歩手前の手練れだ。

そんなのが徒党を組んで襲ってくれば、アリスといえども勝ち目は薄い!」

「アリス様、悪く思わないでください!」

「くっ……弱みさえ握られていなければ!」

「申し訳ない！」

なんか、その中の半分以上は嫌々やつてるみたいない感じが、それでも攻撃の手は止まらない。

「アリス！」

思わず、私はアリスの名前を叫んでしまった。

しかし、アリスは私の心配とは裏腹に、毅然とした態度で大軍に立ち向かって行く。

そうして、アリスとクソ虫派閥との戦いが始まった……かに思われた。

だが、事態は私の予想の斜め上へと動き出したのだ。

「アリス様をお守りしろ！ 我らが天使に奴らを近づけさせるな！」

『おおおお！』

突然、出場者のもう半数が、クソ虫派閥の奴らに襲いかかった。

こっちも、全員が騎士候補生だ。

しかし、こっちの奴らはクソ虫派閥と比べて、やる気に満ちている。

それこそ、狂信的な何かを感じるレベルで。

「スカーレット……これは、どういう事だ？」

「彼らはアリスの信奉者ファンクラブですわ。こっちも思ったよりCブロックに集中していたようですわね」

信奉者……そういえば、アリスに熱い視線を向けてくる奴らがたまにいたような。

そうか。

ファンクラブだったのか。

アリスは人気者だなあ。

これは……良い事なんだろうか？

私が微妙な気持ちになっている間に、試合は大きく動いていた。

今までは正統派のバトルロイヤルだったのに、今では宗教戦争の如き様相を呈して、クソ虫派閥とアリスのファンクラブがぶつかっている。

そして、僅かに交ざった外部の選手が、漁夫の利とばかりに派閥を問わず襲撃するのだ。

オスカーとかがそうだな。

あ。

「くそ！ 忌々しき狂信者どもめ！」

「お前ら！ 負けたら承知しないぞ！」

「負けたらどうなるか、わかってんだろうな！」

「トルネードブラストっす！」

「ぐわあああああ!?!」

オスカーの横槍で、小虫三匹が吹っ飛んだ。

そして、試合は司令塔不在のままカオスに突入していく。

渦中の人物である筈のアリスですら呆然としていた。

無理もない。

そのまま試合は進み、両陣営がかなり疲弊したところで、今まで力を温存していたらしいオスカーが台風のような魔法で全てを吹き飛ばし、

残っていた連中も相討ちのような形で倒れて、最終的にはオスカーとアリスの一騎討ちとなった。

「じゃあ、行くっすよ！」

「な、なんだか未だに混乱してるんですが……でも、勝負なら受けて立ちます！」

そうして、アリスとオスカーの一騎討ちが始まった。

アリスは、相手が後衛の弓使いと見て、今までの迎え撃つ構えから一転、攻勢に出た。

対して、オスカーは距離を取りながら風の魔法で迎撃する。

「ソニックアローっす！」

「守ノ型・流！」

しかし、魔法はアリスの剣に受け流される。

だが、アリスもまたオスカーとの距離が縮まない。

ならばと水の魔法で狙撃するも、当たらない。

単純にオスカーが速いのだ。

クソ虫と同じ風纏いの魔法を使って、オスカーは自分の速度を上げている。

それに、あいつだって元近衛騎士ヨハンの教えを受けた身。移動速度を上げる歩法、飛脚くらいなら使える。

「速いですね……だったらー！」
お。

アリスの背後に、水で出来た羽が現れた。どうやら、あれを使うつもりらしい。

「飛脚・水蓮ー！」

水の推進力によって、瞬間的に速度をはね上げる技。前に見た時よりも、随分安定している。

私が見ていないところでも、修行をかかさなかったらしい。さすが、アリス。

頑張り屋さんだ。

「うわ!? なんすかそれ!?!」

オスカーは初見の技に驚愕しながらも、なんとか避けていた。

あいつも、昔よりも動きが良い。

やはり、私達と別れてから成長したようだ。

だが、攻撃を外したアリスは、すぐに羽の向きを調整して進行方向を変えた。

もう完全にあの技を物にしている。

マグマよりも上手く使ってるんじゃないか？

「ひええ!?!」

しかし、それでもオスカーは避ける。

悲鳴を上げながらも避けて、避けて、避けきった。

やがて、アリスの魔法が解けて、仕切り直しとなった。

「……お強いですね、オスカーさん。本来の武器を持たずにこれなんて、本当にお強いです」

「そりやどうもつす。ま、一応はA級冒険者なあたしをなめるなつて事つすよ」

「そうですね……わかりました。できればこの技は決勝トーナメントまで秘密にしておきたかったんですが、オスカーさんに敬意を表して使わせていただきます」

ん？

そう言ってアリスが、より一層真剣な顔になった。

まだ奥の手があるのか？

「行きます！——闘気！」

「なっ!？」

なんだと!?

オスカーと一緒に私も驚愕した。

アリス、お前いつの間に闘気を!?

凄まじい成長速度!

やはり、アリスはシオン並みの天才だ!

さすが、我が孫!

抱き締めて褒めたい!

褒め称えたい!

「この状態で行きます！ 飛脚・水蓮！」

「ちよ、ちよつと待つ……ぐえっ!？」

そして、決着。

哀れ。

オスカーはアリスの奥の手の前に散った。

試合終了を告げる銅羅の音が鳴り響き、放送者がアリスの勝利宣言をする。

こうして、予選Cブロックの戦いもまた終結したのだった。

64 予選Dブロック

「ただいま戻りました」

「お疲れ、アリス！ よくやった、アリス！」

私はいつもの如く、観客席に戻ってきたアリスに抱き着いた。

その瞬間、膝の上に乗せていたシオンが落下し、「ウツ」と苦し気な呻き声を上げた。

しかし、意識は戻らない。

「リンネちゃん！」

「う、うむ……すまんかった」

私はおとなしく、再びシオンの頭を膝の上に戻した。

「いやー、こっぴどくやられたっす」

「ご苦労だった、オスカー。アリスの良い引き立て役だったぞ」

「うわあ、アリスとの扱いの差が酷いっす」
当然だろう。

誰だって、孫は可愛いものだ。

それに、なんとなくお前とベルはぞんざいに扱いたくなるんだよな。

悪友というやつだろう。

「フツ。遂に俺の出番がきたか」

そして、もう一人の悪友が、無駄にカツコつけた感じに笑って席を立った。

だが、あんまりカツコよく見えないな。

むしろ、微妙に滑ってる感すらある。

「行ってくるぜ。」

リンネ、シオン、アリス。決勝トーナメントで会おう！

そうして、ベルは一足早く控え室へと消えて行った。

その台詞、前にも聞いたな。

こういうのは、二度言ったらカツコつかないぞ？

まあ、本人が楽しそうだから何も言わないが。

「行っちゃったっすねー」

「行っちゃったなー」

「リンネ、ベルは勝てると思うっすか？」

オスカーがそんな事を私に聞いてきた。

そこまで興味なさそうだから、軽い雑談だろうな。

「まあ、普通に難しいんじゃないか？」

Dブロックには剣聖が出てくる。ベルが村を出た時からどれだけ強くなってるか知らんが、生半可な成長では勝てないだろうな」

「へー、剣聖ってそんなに強いんすね」

「多分な。見た事ないが」

「見た事ないんかい！」

オスカーが面白半分でツツコミの平手打ちを放ってきたので、軽く受け止めて手首を捻ってやった。

今の一撃には、地味に威力が籠っていたからな。

大方、私の頭を真下に突き飛ばして、膝の上のシオンとキスでもさせるつもりだったんだろう。

とんでもない奴だ。

手首の痛みに悶絶しながら反省しろ。

「ギブギブギブ！ 折れるっす！ 手首がねじ切れるっす！」

オスカーの悲鳴が本格的な悲壮感を伴ってきた辺りで解放してやった。

すると、すぐにオスカーはラビに治癒を頼んでいた。

根性がないな。

情けない。

「それはともかく。実際、剣聖の強さってどんなもんなんだ、アリス？」

「あ、ここで私に振るんですね。」

まあ、剣聖さんは強いですよ。去年の大会ではアクロイドさんに敗れていますが、あれは事故みたいなものでしたし。

まともに戦えば、確実にアクロイドさんよりも強いと思います」
ほう。

やはり腐っても剣聖、教国最強の剣士という事か。

少なくとも、クソ虫よりは強いと。

「ちなみに、去年はなんで負けたんだ？」

「剣聖さんが激闘で破損したリングのヒビに足を取られてこけたんです。」

そこにタイミングよくアクロイドさんの風魔法が当たって場外負けになりました。

ここからが本番と思った矢先の事だったので、観客もアクロイドさんもリングから落ちた剣聖さんも啞然としていましたね」

「……………」

どうやら、思ったよりも剣聖は間抜けのようだ。

これなら、ベルでも勝てるかもしれん。

その後も雑談を続けている内に、Dブロックの選手達がリングに上がってきた。

当然、ベルの姿もある。

私達に向かってサムズアップしてきた。

続いて剣聖の姿を探そうと思ったが…………よく考えたら、私は当代剣聖の顔を知らない。

ので、隣のアリスに聞いた。

「アリス、どれが剣聖だ？」

「えーと…………あ、あの人です。リングの真ん中辺りにいる、藍髪の」

言われてリング中央を見てみれば、確かにアリスの言う通り、騎士学校の白い制服を着た藍髪の男がいた。

鋭い目付きをした青年だ。

あれが当代剣聖か。

好好爺って感じだった先代とは似てないな。

『それでは、これより予選Dブロックを開始します！』

5、4、3、2、1…………試合開始！』

銅羅の音が鳴り響き、試合が開始される。

私の見ている中、ゆっくりと剣聖が動き出し、そして…………



ベルの視線の先で、一人の剣士が暴れている。

剣聖と呼ばれる、藍色の髪青年剣士。

歳はベルよりも少し上、20歳には満たないといったところだろう。

まだまだ若造と呼ばれる年齢だ。

だが、その年齢に反して、彼の実力は圧倒的だった。

まだベルは習得していない力である闘気を身に纏い、一切の油断を排したような真剣な表情で剣を振り続ける剣聖。

その一振りごとに爆風が吹き荒れ、選手達が吹き飛ばされていく。

まるで、Aブロックのリンネや、Bブロックのフォルテを再現したかのような、一騎当千の大活躍。

それでいて、フォルテとは違い、無理をしている様子が一切ない。

真の強者が、あるべき形で力を振るい、弱者を蹂躪している。

強い者が勝ち、弱い者が負ける。

今、ベルの目の前にある光景は、ただそれだけの当たり前の出来事ではない。

だからこそ、周囲の弱者は格の違いを感じ取り、臆する。

それは闘気使いですらも例外ではない。

そして、臆せば更に弱くなり、そんな弱い力では剣聖に傷一つ付ける事すら叶わず。

実力差は開く一方であり、闘気使いすらも蹂躪の対象となる。

剣聖は、ほんの一握りの者しか辿り着く事ができない領域、リンネや三剣士と同じ『英雄』の覇気を纏っていた。

「ヘッー」

そんな状況の中、絶対強者を前にして、ベルは不敵に笑う。

敵は圧倒的格上。

だから、どうした？ としかベルは思わない。

格上相手なんていつもの事だ。

ベルがまだ故郷であるマーニ村にいた頃、彼の周りの剣士は格上しかいなかった。

リンネ、シオン、ヨハン、ついでにジャックや自警団、おまけにドレイク。

歳上も、歳下も、同じ年も、揃いも揃って格上だらけ。

そんな連中に負けて、負けて、負け続けて、その末にベルは成長してきた。

その過程で、ベルの心は一度たりとも折れなかった。

リンネですら認めた不屈の闘志。

そんな鋼の心を持つベルが、今更ちよつと強い敵が出てきたからといって臆する訳がない！

「格上上等！ その首ぶんどつて俺が勝つ！」

尚、実際に首を取ったら、殺害によるルール違反で失格なのだが、そんなツツコミは不粋だろう。

とにかく、それくらいの意気込みで、ベルは剣聖に向かって突撃した。

まだ闘気を使えない純剣士であるベルには遠距離攻撃手段がなく、故に攻撃するには近づくしかないのだ。

あの暴力が吹き荒れる爆心地へと。

「うおおおおおおお！」

「飛剣・嵐」

「なめんな！ 飛脚！」

ベルの力量では回避不能、迎撃不能な斬撃の嵐の中を、飛脚によって強引に突っ切る。

ただし、考えなしの正面突破ではなく、四足動物のように身を低くし、更に剣を正面に突き出して衝撃波を突き破り、少しでも威力を削った上での突撃。

嵐に対する迎撃手段を持たないベルにとっては、ほぼ最善と言える行動。

観客席のリンネが「おお！」と感嘆の声を上げた。

昔、リンネに大人げなく嵐を連発された事が悔しくて、ヨハンに嵐

対策をみっちり習った成果がここで出た。

「攻ノ型・一閃！」

そうして接近する事に成功したベルは、剣聖に向かって剣を振るう。

選んだ技は、一閃。

リンネが好んで使い、そのリンネを見て剣を覚えたベルもまた最も得意とする攻撃。

単純ながらも鋭く、速い一撃が剣聖を襲った。

「甘い」

だが、それだけの剣では英雄に届かない。

剣聖は一步後ろに下がってベルの攻撃をあつさり避け、即座に最適なカウンターを打ち込む。

「逆鱗！」

王国剣術とは違う、剣聖の祖国である教国の剣術。

ベルにとっては完全に初見の技。

だが、冒険者として様々な魔物と渡り合ってきたベルにとって、初見の動きと相対するのは珍しい事ではない。

即座に的確な対応を取る事に成功した。

「守ノ型・塞！」

敵の攻撃を受け止める技、守ノ型・塞。

だが、普通に考えれば、これは悪手である。

剣聖は高出力の闘気を纏っており、対してベルは闘気を持たない未熟な剣士。

膂力の差は一目瞭然であり、塞で受け止める事などできる筈がない。

しかし、そんな事はベルとて百も承知。

彼は馬鹿だが、それでもA級冒険者。

戦いに関しては一流の戦士だ。

失敗するとわかりきった事をやる程、頭空っぽではない！

「守ノ型・流転！」

「!?」

劍聖の一撃を受けたベルが、そのまま足を地面から離し、独楽のように回転しながら、強烈極まりない劍聖の一撃を受け流す。

守ノ型・流転。

流とは違い、劍ではなく体全体を使って敵の攻撃を受け流す技。

だが、これは正式な王国劍術の型ではない。

王国劍術に、こんなアクロバティックな挙動の技はない。

普通に受け流すのなら、流で事足りる。

これは、ベルがリンネの攻撃を受け流す為に開発した技。

つまり、ベルのオリジナル技である。

マーニ村にいた頃。

ベルは何度か、リンネに本気で戦えと迫った事があった。

手加減してもらわなければ勝負にすらならないとわかっている、

ベルにだって男としてのプライドがあったのだ。

しかし、当然の事ながら結果は惨敗。

あまりに速いリンネの剣を、ベルは目で追う事すらできなかった。

そんな攻撃に対して、剣を合わせて受け流す技を放てる訳がない。

ならば、どうすると考えた末に出来上がったのがこの技、流転で

あった。

剣を動かす暇がないのならば、体で受けて体で受け流すしかない。

普通に考えれば、いや、無理だろ、となる理屈だったが、リンネに

負けたくないという意地と、並外れたベルの身体操作のセンスが、こ

の技を完成させた。

とはいえ、今でも流転の成功率は低い。

遥か格上の攻撃を受け流すのだ。

そう簡単にいく訳がない。

流転には、ダイナミックかつ繊細な動きが要求される。

加えて、この技は受け流すだけの技ではなくカウンター技である。

流と同じく、攻撃を受け流して、その勢いのまま反撃に転じるのが

流転。

遥か格上を相手にそこまでしようというのだから、その成功率は更に低くなる。

実際、ベルがこの技をリンネに対して成功させた事は一回しかない。

だが、その一回。

この技を初めて戦いで使った時、すなわち初見の時限定だったが。この技は、——あのリンネに対して有効打を与えた。

「おらあー！」

そんな秘蔵の一撃が、剣聖の頭部にクリーンヒットする。

流転の真骨頂は、相手の攻撃を受け流す為の回転をそのまま攻撃へと転用し、流よりも遙かに速く、かつ相手の攻撃の威力を自分の力に上乗せして放つ、カウンターの力強さ。

かつて、闘気を纏ったリンネの脛にヒビを入れた程の威力。

それが一番良いところに当たった。

奇跡である。

そんな一撃を食らった剣聖がよろめく。

脳が揺れたか、もしかしたら頭蓋骨にヒビでも入っているかもしれない。

なににせよ、明らかに効いている。

チャンスであった。

即座に空中独楽状態から抜け出し、猫のようなしなやかさで地面に着地したベルが、追撃を仕掛けた。

「攻ノ型・一閃！」

横薙ぎに振るわれた、再びの一閃。

剣聖は、よろめいた状態にも関わらず、これを防いでみせた。

だが、ベルの攻撃は止まらない。

「攻ノ型・五月雨！」

今度は目にも留まらぬ連続攻撃。

本来の五月雨とは微妙に違う、前のめりで、野生の獣のように苛烈な剣線。

リンネの神速剣と同じく、王国剣術を自分の得意な形へと変質させた、ベルの剣術。

そうして何度も何度も振るった剣の内、何発かが剣聖の体に叩きつ

けられ、確かな傷を刻む。

どうやら、頭をやられた事により、闘気の制御が乱れているようだ。この状態であれば、ベルの攻撃でも闘気の鎧を貫ける！

「まだまだあー！」

勝てる！

ベルはそんな確信を持って攻め続けた。

更に、剣聖が弱った隙を突くべく、残っていた選手達も一斉に攻撃を仕掛ける。

最後の大乱戦が巻き起こった。

その一方で、観客席は熱狂に包まれる。

まさか、あの剣聖が負けるのか。

そんな予想外の事態に対して、観客のテンションはマックスだ。

狂ったような歓声が鳴り響くが、今のベルはそんな声に耳を傾ける事なく、ひたすらにラッシュを続けていた。

今のベルには、油断も隙もない。

それどころか、興奮で実力以上の力を発揮していると言ってもいいだろう。

初見の技がクリティカルヒットした事といい、流れは完全にベルへと傾いていた。

まさかの大番狂わせが起こってもおかしくない。

「これで、終わりだあああああー！」

そして、最後の一撃が放たれる。

「攻ノ型・破断！」

威力重視の一撃。

それが弱りきった剣聖にトドメを刺すべく迫り、

「天歩」

次の瞬間、ベルの視界から剣聖の姿が消えた。

「は？」

「龍爪斬！」

「はっ!?!」

直後、ベルの脇腹へと強烈な一撃。

あばらが折れた感覚。

そんな激痛を感じながら、ベルはリングの端へと吹き飛ばされた。

「飛劍・嵐斬龍！」
らんきりゆう

『うわああああああ!?!』

続いて、ベルに便乗していた選手達が一斉に吹き飛ぶ。

その殆どは気絶し、そうではない者もリングオーバー。

一瞬で決着がついた。

リングに残っているのは、劍聖とベルだけだ。

「な、何が……!?!」

何が起きたのかわからない。

ベルはそう思っているだろう。

だが、これは当然の事なのである。

劍聖は、ベルの攻撃によって確かに揺らいだ。

しかし、攻撃の雨に去らされながらもすぐに持ち直し、反撃に転じた。

ただそれだけの話。

ここまでベルが善戦できていた事が奇跡だったのだ。

持ち直してしまえば、実力差は元通りとなってしまう。

ベルは混乱しながらも顔を上げた。

そこには、片手で頭を押さえながらも、しっかりとした足取りで立つ劍聖の姿があった。

「……まさか、闘気使いでもない者にここまで追い詰められるとは。

未熟な自分が恥ずかしい。

だが、本当に素晴らしい攻撃だった。

君のおかげで、俺はまた一つ成長できたような気がする」

劍聖はそう言い、剣をベルへと向けた。

その眼には、強敵に対する敬意だけがあった。

それに対し、ベルもまた痛む体を無理矢理に叩き起こす。

ダメージは大きい。

だが、負けを認めるには早すぎる。

「……俺は『劍聖』ランスロット。聖アルカディア教国の騎士。その誇

りにかけて、全力を持って君を倒そう」

「……俺はA級冒険者『猛剣』のベル。お前を倒す男の名だ。覚えとけ」

両者が互いを認め合い、名乗りを上げる。

それは、まるで物語の一幕のような、そして非常にベルが好みそうなシチュエーションであった。

「来るがいいー！」

「うおおおおおおおー！」

そして今、Dブロック最後の攻防が始まった。

実力差は圧倒的。

隙を突ける乱戦という状況ではなくなり、ベル一人だけを見据える剣聖には、最早どれだけ奇抜な技であろうとも容易には当たらないだろう。

そうなれば、自力の差が勝敗に直結する。

事ここに至れば、ベルに勝ち目など殆どない。

それでも、ベルは最後まで戦い続けた。

自分が戦闘不能になる、その瞬間まで。

65 大会初日終了

試合開始から僅か数分後。

リングの上は、死屍累々の有り様となっていた。

「く、くそ……」

最後の最後まで奮戦していたベルが、遂に倒れる。

これにて、リング上で立っているのは、ただ一人となった。

『け、決着！ 勝者は、聖アルカディア教国よりやって来た『劍聖』ラ
ンスロット選手！』

その放送が流れた後、遅れて銅羅の音が鳴り響き、Dブロックの終
了を告げた。

観客達は歓声を上げて盛り上がった後、徐にコロシウムから去って
行く。

今日の試合はこれで終わりだからな。

家にも帰るのだろうか。

「凄い戦いでした……劍聖さん、去年よりずっと強かったです」

「ベル、ボッコボコだったつすねー。カッコいい事言った後でこれは
恥ずかしいー。後でからかってやるつす」

「ダメだよ、オスカーちゃん！ ベルくんも、今度ばかりは本当に
シヨックだろうから」

ラビが本当に心配そうな顔で、医療室に運ばれて行くベルを見つめ
ていた。

いや、あいつの不屈の闘志はこんな程度じゃ折れないと思うけど
な。

からかうくらいで、ちょうどいいと思う。

だが、ラビが心配するのも無理はない。

そう思えるような試合だった。

Dブロックの内容を語るとしたら、たったの一言で済む。

蹂躪だ。

全ての出場選手が、たった一人の青年に、僅か数分で全滅させられ
た。

まさに圧倒的。

Aブロックの私を彷彿とさせるレベルだった。

そんなのを相手にベルは一撃入れて見せた。

それだけで、もう称賛に値する。

結局は負けたが、相手が持ち直した後ですら、圧倒的な実力差にも怯まず、最後まで戦い続けたのだ。

実に立派だった。

これが戦場での出来事だったら、敗北＝死だから立派もクソもないが、これは試合だから素直に称賛しよう。

実に立派だった。

だが、それでも勝利には届かなかったのだ。

それだけ、剣聖は圧倒的だった。

ベルに一撃入れられるという未熟な面もあったが、それを差し引いても、超高出力の闘気。

学生とは思えない達人のような剣術。

予想外の一撃で追い詰められても即座に立ち直る、リカバリーの早さ。

間抜けなんて、とんでもない。

あれは、まさに一国の頂点に立つ剣士だった。

『最強』の領域に足を踏み入れる資格を持つ者。

誇張抜きにカゲトラ以上の逸材だろう。

ベルが善戦できたのは本当に奇跡だ。

「で、どうよ、嬢ちゃん？　自分並みの力を持ったライバルが現れた感想は？」

「ドレイク？」

私が冷静に剣聖の戦力を分析していると、おもしろそうな顔したドレイクが話しかけてきた。

なんだ、その顔は？

「嬢ちゃんは、ずっと同年代の中じゃダントツの最強だったからなあ。

その座を脅かす奴が出てきた感想はどうよ？」

「なんだ、そんな事か」

下らない話だな。

そもそも、私はずっと同年代最強だった訳じゃない。

今世は年齢詐欺だからノーカンとして、前世じゃ、ずっとシヤロに負け続けてた。

そんなあの頃も今回も、行き着く結論は同じだ。

「負ければ悔しい。だから勝つ為に全力で戦う。それだけの事だ」

そして、もう一つ。

「あとな、ドレイク。一つだけ訂正しておけ。

——あいつより私の方が強いぞ」

私は自信を持って宣言する。

弱くなったとは言え、元剣神を舐めるな。

あの程度の戦いを見せられたくらいで揺らぐ自信など持っていないわ！

「……堂々としすぎだろ。たまには慌てる嬢ちゃんが見たかったんだがなあ」

「む。趣味が悪いぞ」

ただ、まあ、その趣向が理解できなくもない。

弟子どもをからかったり発破かけて遊んでた私や、ベルをからかって遊んでるオスカーに近い心理だろう。

ふっ。

不発に終わって残念だったな。

「う……うう……」

と、このタイミングで、膝の上のシオンが呻きながら起きた。

ぼんやりとした様子で目を開け、そして、状況が理解できなかったのかフリーズした。

「これは……俺はいつたい……？」

「あ、シオンさん、おはようございます」

「アリス、これはどうなってるんだ？　なんで、俺がリンネの膝の上で寝ている？」

「リンネちゃんが、うっかりシオンさんを気絶させちゃったので、責任を持って枕になってもらったんです。」

椅子はさすがに硬いので」

「……訳がわからん」

だろうな。

私も訳がわからない。

元はと言えば、思いつきでこんな提案をしてきたドレイクが悪い。
シオンよ。

ここは犬に噛まれたとでも思っただけで、冗談のノリで乗り切るしかないぞ。

という事で、私は思いつきふざけてみる事にした。

「シオン……おはよう☆」

「うっ!? オエエエエエ!」

「ぎゃあああああ!? 貴様なんという事を!?!」

こいつ!

よりにもよって、私の股の部分に向けて吐きやがったぞ!?

そんなに気持ち悪かったか!?

ちよつとウインクしただけだろうが!

というか、ゲロの感覚が気色悪い!

冗談抜きで殺すぞ、この野郎おお!

「ドレイク様、お望み通り、慌てるリンネさんが見れましたわね」

「いや、思ってたのと違う」

こうして、最後はすったもんだの騒動になりながらも、大会初日は
終わりを告げたのだった。

とりあえず、シャワー浴びたいぞ。



「では! 私達の決勝トーナメント進出を祝い! 同時に、大口叩いたくせにボコボコにされたベルを慰めるべく! かんぱーい!」
『かんぱーい!』

「やめろおおおおお！」

あの後、シャワーを浴びて着替え、シオンのゲロゲロを洗い流してから、私達は医療室にぶち込まれたベルを回収して酒場に繰り出した。

初日の打ち上げである。

まあ、決勝トーナメントは明日だから、予選を突破した私とシオンとアリスは、そんなにハメを外す訳にはいかないけどな。

ちなみに、スカーレットはこの後予定が入ってるらしく、オリビアを連れて帰った。

王族は大変だ。

「いやー！ 残念だったっすね、ベル！ 「決勝で会おうぜ！（キリッ）」とか言ってカツコつけたくせにボッコボコとか！ プークスクス！」

「うるせえええええええ！」

「べ、ベルくん落ち着いて！ 私はカツコよかったと思うよ！ 最後まで諦めなかったところとか！」

「そうっすね！ 最後までベルは諦めなかった！ 最後まで戦い抜いた！ その結果、サンドバックにされて、治癒魔法でも一日じゃ治しきれない大怪我したのを誇るといっすよ！」

「うがああああああ！ お前らああああああ！」

「わ、私はそんなつもりで言ったんじゃないよ!？」

お、オスカーが早速ベルを煽って、煽られたベルが暴れ出した。

しかも、フオローしようとしたラビまで巻き込まれとる。

懐かしいな、このノリ。

和むわー。

和み過ぎて、ラビだけでも助けてやろうかという気持ちじゃ萎えてくる。

「まあまあ、落ち着くっすよ、ベル！ そんなベルをあたしが慰めてあげるっす！」

「もがっ!？」

「わぶっ!？」

私が和んだその瞬間、オスカーがベルの頭部を胸に抱いた。ベルに締め上げられてたラビも、オスカーとベルの体に挟まれてサンドイッチになる。

何やってんだ、あいつは？

と思っただけど、よく見ればオスカーの顔が赤くなつて目がぐるぐるしてるのがわかった。

オスカーめ、酒飲んだな。

まあ、あいつは15歳で成人してるし、文句は言うまい。

「よーしよし！ よく頑張ったつすねー！」

「はーなーせー！」

「く、くるしい……」

くんずほぐれつ。

仲良き事は素晴らしきかな。

私とシオンが抜けても仲良く楽しくやれてるみたいで何よりだな。

まあ、それはともかく。

「うむ。たしかにベルは頑張ったな。あの土壇場で成功率の低い流転を頭にぶち当てた事といい、ボロ雑巾にされても立ち向かい続けた根性といい、天晴れだった。誇っていいぞ」

「あの、リンネちゃん……冷静に言っただけで助けた方がいいんじゃない……」

「心配するな、アリス。こういうのはよくある事だ。なあ、シオン？」

「……今は話しかけるな。俺はまだお前の膝枕の衝撃が抜けてないんだから、静かにさせてくれ」

「まだ言うか、こいつ！」

美少女の膝枕で悪夢を引き摺るとは、なんたる無礼者か！

クソ虫との戦いをほめてやろうかと思っただが、やめだやめ！

代わりに、明日の試合で焼き入れてくれるわ！

「ハッハッハ！ 楽しそうだな坊主ども！」

私が頬を膨らませながら怒りの視線でシオンを睨みつけ、「まあまあ、リンネちゃん」と嗜めるアリスに免じて許してやらなくもない的な思考が頭を過った辺りで、今度はドレイクが酒瓶片手にベル達に話

しかけた。

「今日は中々に良いもん見せてもらったぜ！ 王都に残った甲斐があつたつてもんよ！」

それを見せてくれた礼つて訳じゃねえが、一つ提案がある。

「どうだ？ お前ら、俺の弟子になつてみねえか？」

「そしたら、嬢ちゃんにも負けねえように鍛えてやる！」

「えい！」

「お？」

ドレイクがまた変な事言い出したな。

それに反応して、ベルがオスカーの胸に顔を埋めながらドレイクの方を見る。

二人の間に隙間が出来て、挟まれてたラビがホツとした顔になった。

「ドレイク、どういう風の吹き回しだ？」

「ちよつと興味が出たので聞いてみる。」

「なあに、俺も歳だからな。前にも言ったような気がするが、後輩に教えるだけ教えて引退つても悪くねえと前々から思つてたのよ。」

「こいつらには見込みがあるし、それに冒険者登録の試験官なんてやったよしみ。しかも、元仲間の娘の仲間ときた。」

「こいつらとは妙な縁がありやがる。」

「なら、も一つばかし、おかしな縁を増やしてもかまわねえだろ？」

「なるほど」

「要は、ベル達を改めて気に入ったからスカウトした訳だ。」

「酒の勢いもあるんだろうな。」

「思い返せば、前に私に似たような事を言ってきた時も、こいつは飲んでた。」

「だが、酔っぱらつてようとも本気ではあるんだろう。」

「冗談でこんな事を言う奴ではない。」

「だそうだが、どうするベル？」

「やる！ 俺はもつと強くなつてやるからな！ そんでもつて、リンネ！ 俺が強くなった時は、今度こそ勝負だ！」

「ハツハツハ！ いいだろう！」

「ベルがやるなら、あたしも付いて行くっす！」

「わ、私も……」

ふっ。

おもしろい事になったものだ。

ベル達がドレイクの弟子とは。

ドレイクは、私から見ても超一流の実力者。

しかも、今までベル達を教えてきた面子とは系統の違う実力者だ。

ドレイクから学べる事、吸収できる事は多い。

そんなのに鍛えられれば嫌でも成長するだろう。

今後が実に楽しみである。

その後は、前に私に振られた反動なのか、弟子入り決定で大いにテンションを上げたドレイクがベルの口に酒瓶を突っ込み、便乗してオスカーも突っ込み、へべれけになった冒険者組をラビが必死に介抱しながら宿に引き上げていった事で、打ち上げはお開きとなった。

ちなみに、試合は昼頃に終わって、そこから直で酒場に來た為、今はまだ夕方である。

この後、夜はナイトソード家で祝勝会があるのだ。

アレク達が企画してくれた。

マルティナやイグニも來るといふし、何よりアリスが主役の会なので、私に行かない理由はない。

だが、せっかくお呼ばれしていたにも関わらず、シオンは精神的にも体力的にも限界という事で、寮へと帰ってしまった。

まあ、仕方あるまい。

明日の私との第一試合までに、せいぜい少しでも体調を整えるがいい。

という事で、私はアリスと二人でナイトソード家への家路についた。

「アリス。この後さんざん言われると思うが、私からも先に言っておこう。……今日はよく頑張ったな。偉いぞ」

「……はい！」

その時、私は偉い偉いとアリスの頭を撫でた。

アリスは少し恥ずかしそうにしていたが、それでも嬉しそうに口元を緩める。

いつも通り、いや、いつも以上に、我が孫娘はとてつもなく可愛かった。

66 大会初日の夜

『お嬢様！ 決勝トーナメント進出おめでどうございます！』
パアーーン！

私達がナイトソード家の玄関を潜った瞬間、使用人軍団のそんな声と共に大量のクラッカーが炸裂し、紙吹雪が私とアリスを包み込んだ。

見れば、玄関ホールには盛大な飾り付けと『アリスちゃん おめでとう！』と書かれた垂れ幕。

花束を持ったアレク。

その隣で微笑むユーリ。

キラキラした目でアリスを見るイグニ。

誇らしそうなマグマに、優しい目をしたマルティナ。

って感じで準備万端だった。
なるほど。

祝勝会を試合直後じゃなくて夜にしたのはこの為か。

おそらく、アリスが勝つたのを見届けてから大急ぎで準備したに違いない。

負けた場合は、慰労会になっていたのだろうな。

そして、本日の主役であるアリスは、まさかここまで盛大に祝われるとは思ってなかったのか、唾然とした後、真っ赤になっていた。

そんなアリスも可愛い。

まあ、それは良いんだが。

「おう、お前ら。同じく決勝進出した私への祝いの言葉はなしか？」

「え？ 祝う必要ありますか？」

「当たり前の結果だもんな」

「大人げなく暴れといてよく言うわー」

「むしろ、負けてたら盛大にネタにできたのに」

『だよねー』

「よし、お前らの考えはよくわかった。そこに直れ！」

怒りに支配された私は、荒ぶる鷹のポーズを取りながら使用人軍団

に突撃し、一人ずつシメていく。

いつもの事ながら、元主に対する敬意が足りぬわ！

一回昇天してから反省しろ！

そうして私が使用人軍団をシメ上げていた時、アリスの方は待機してたアレクとユーリに花束を渡されていた。

私の事は完全スルーだ。

最近ではアリスも、このノリに慣れてきた感じがする。

「アリス、決勝トーナメント進出おめでとう。よく頑張ったね」

「闘気も上手く使えていたし、秘密特訓の成果が出たようで何よりね。明日もこの調子で頑張りなさい」

「……はい！ ありがとうございます、お父様、お母様！」

フリーダムな私を見て緊張が解けたのか、アリスは真っ赤な顔から一転、自然な笑顔で満面の笑みだ。

感無量って顔してる。

やはり、尊敬する父と母からの称賛の言葉は別格の喜びか。

おじいちゃんとして若干悔しい気持ちがないでもないような気がするが、それ以上に孫家族の仲が良好なのが微笑ましい。

私は、使用人軍団の一人にアームロックを決めながら、ほっこりした。

「アリス！ すごかったぞ！」

「水蓮も完全にものにしたな。教えた甲斐あったぜ」

「お見事でしたよ、アリスさん」

「ありがとうございます！」

そして、マグマ一家もアリスに祝福の言葉をかける。

その時、イグニがアリスに抱きついてた。

ま、孫と孫による夢のコラボレーションだど!?

ここは天国か!?

あまりに眼福な光景を見て私が固まった隙に、使用人軍団は私の拘束から抜け出し、思い思いの祝福の言葉をアリスにかけに行った。

その内、どこで用意したのかわからない巨大ケーキが切り分けられ、会場は和気藹々とした空気に包まれる。

私も使用人軍団を寛大な心で許してやり、アリスの側に突撃して存分にハシヤいだ。

メアリーにケーキを貰い、トーマスが持ってきた酒をかつくらう。未成年の飲酒は体に悪いって事で前世以来禁酒してきたが、今日だけは特別だ！

何？

ハメを外し過ぎて明日の試合は大丈夫なのかって？

大丈夫だ！ 問題ない！

いざとなったら回復薬の世話になるわ！

「アリスー！ 明日の初戦は剣聖だな！ あんな奴ぶつ倒して決勝で私と会おう！」

「あはは……できる限り頑張ります」

「む！ 弱気はいかんぞー！ 大丈夫だ！ 見たところ、今の剣聖は先代に比べてまだまだ未熟！ アリスにも充分勝ち目がある！」

「……具体的にはどれくらいですか？」

「二割！」

「低い……」

何を言うか！

二割なら充分持つてこれるぞ！ 勝利を！

実際、私が魔帝と戦った時なんて、勝率一割もなかったからな！

あのクソ野郎、腹立たしい事に、純粋な強さだけなら全盛期の私以上だもんよ。

まあ、そんな化け物を倒したからこそ、私が歴代最強の剣神と呼ばれてる訳だが！

「アリス、リンネさんの言う事はあまり気にしないでいいよ。これは実戦じゃなくて試合なんだ。強者の胸を借りるつもりでドンとぶつかればいい」

「お父様」

む！

アレクがなんか良い感じの事言ってる！

だが！

「いやーだー！ アリスに胸を貸すなら私が貸したいぞ！ そうだ！ 今貸してやろう！ ぎゅー！」

「わっ!? ちょ!? リンネちゃん!?」

アリスを思いつきり胸の中に抱き締める！

私の絶壁に顔を押し付けられて、アリスが若干苦しそうだ。

ぬう！

初めて巨乳になりたいと思ったかもしれない！

と、その時、こつちをドン引きして見ているイグニと目が合った。

そんな目で見られると、おじいちゃん悲しい！

よし！

お前も仲間に入れてやろう！

「イグニー！」

「やめろおおおおお！」

ジタバタと暴れるイグニを、アリスと一緒に抱き締める！

孫二人が私の胸の中に！

ここは極楽に違いない！

なんか頭もポワポワして気持ちいいし、間違いないな！

「うへへへへへ！」

「はなせ！ はなせ！」

「い、イグニちゃん!? 暴れないで!?!」

「しーあーわーせーだーぞー！」

笑いが止まらぬ！

「……リンネさん、完全に出来上がってるね」

「そうね。どれだけ飲んだのかしら。しかも、笑い上戸は昔のままだわ」

「いえ、今日はそんなに飲まれてはいない筈なのですが……」

「もしかしたら、体が変わった影響で、お酒への耐性がなくなったのかもしれませんね」

『あー』

「ふふ。リンネ様は楽しい人ですね」

「つて、言ってる場合じゃねえだろ!? とりあえず救助だ！ 止まれ

！ この暴走爺！

む!?

マグマが私の腕を二人から引き剥がしながら、巨体を活かしてつまみ上げおった!?

この至福の一時を邪魔するかマグマ!

許さん!

成敗してくれる!

「ローリング間接捻り!」

「いだだだだだだ!?! 無駄にアクロバティックな間接技仕掛けてくんじゃねえ!」

片腕を速攻でマグマの拘束から外し、もう片方の腕を掴んでいるマグマの腕を体全体を使って捻り上げ、そのまま肩に足を当てて拘束! 前世ではできなかつた、圧倒的体格差を活かした技だ!

存分に味わうがよい!

だが、そんな事をしてる隙に、イグニはマルティナの後ろに隠れ、アリスにも苦笑しながら距離を取られてしまった。

ああ!?

私の至福の一時が!?

「隙ありだ! やれ、ユーリ!」

「はあ……アイスボール」

「もがつ!」

絶望で力が抜けた隙にマグマに首根っこ掴まれ、ユーリに氷の弾を口の中に叩き込まれた。

そして、その氷はすぐに溶け、水となって私の腹の中へと流れ込む。胃の中に溜まっている酒の濃度が下がったような気がした。

幸せな気分が薄れていくうううう!

「ハッ!?! 私は何を!?!」

「どうやら落ち着いたようね」

「ったく、手間掛けさせやがって」

「……なんか久しぶりに見たなあ、これ」

弟子どもが疲れた顔で私を見ている。

なんだ、その目は？

そして、使用人軍団は仕方ない奴を見るような目で私を見ている。だから、なんだ、その目は!?

アリスも苦笑してるし、イグニは膨れてるし、マルティナはとても優しい目(○)で私を見てる。

味方がいない!?

「リンネ様」

「……はい」

そんな中、皆を代表するようにメアリーが前に出てきた。

何故か怖い。

「とりあえず、しばらく禁酒です」

「……はい」

その言葉に、私は粛々と頷くしかなかった。



その後、私はパーティーで騒ぎを起こした罰として、同じく決勝トーナメント進出した上に、因縁のクソ虫にトドメを刺してくれたシオンにケーキを持っていく役目を押し付けられた。

要するにパシリである。

あいつらめ!

元主を顎で使いおって!

まあ、ないとは思いますが、またカゲトラみたいな奴が出てきたらと思うと、他の奴ら(弟子どもを除く)が夜道を出歩くのも危ないし、別に構わないんだが。

それはそれとして、なんかむきやつく。

そんな感じで、まだ少し酒の残った頭で、シオンのいる学生寮への道に行く。

早く帰ってパーティーの続きがしたいから駆け足だ。

その結果、ケーキが崩れてしまっても、私は知らぬ存ぜぬで通す。だが、まあ、最低限の配慮はしてやろう。

できるだけ崩れないように、少しは気を使ってやる。

そして、学校の敷地内へと到着。

門番に軽く挨拶して学生証を見せてから、閉じられた門を飛脚で軽く飛び越え、男子寮の方へと走る。

シオンの部屋はわかってるから問題ない。

何せ、私が初登校した時はシオンの部屋から通ったんだからな。

あの時は、入学直後に勃発したアレクとのバトルで忙しかった私に代わり、マーニ村から持ってきた私の荷物をシオンが寮（の自分の部屋）に運んだんだった。

どうせなら私の部屋に運んどけと思ったが、それが転じてあいつの部屋の位置を掴めてるんだから、何が幸いするかわからんものだ。

尚、男子寮は女子禁制だが、そんな細かいルールを気にする私ではない。

そうして、シオンの部屋へと向かって走っていた、その時。

「9975！ 9976！」

「ん？」

男子寮の近くから、そんな掛け声が聞こえてきた。

同時に、ヒュツ、ヒュツ、という風切り音が聞こえる。

聞き覚えのありまくる音だ。

十中八九、素振りだろう。

……なんかデジャブだな。

シオンと初めて会った時を思い出すわ。

そのシオンにケーキを届ける途中で聞こえてくるとは、なんともタイムリーな。

そのタイミングの良さ故に若干気になった私は、音の発生源に向かってみた。

すると、そこには一心不乱に剣を振り回す藍髪の青年の姿が。

おっと、予想外の奴が出てきたな。

剣聖じゃねえか、あれ。

ここで見かけたのも何かの縁だし、祭りを盛り上げる為にも、宣戦布告の一つでもしてやろうか？

私は酒が少し残って浮わついた頭でそう考え、深く考えずに実行に移した。

気配を消して剣聖の背後へと回り込む。

そして……

「9997！ 9998！ 9999！ 10000！ ……ふう」

「わ！」

「ッ!？」

切りの良い数字で素振りをやめた剣聖に向かって、耳元で突然大声を出してビックリさせてやった。

この行動に特に意味はない。

なんとなく、ちよっかい掛けたい気分だったのだ。

「何者だ！」

その直後、剣聖は後ろの私に向かってノータイムで剣を振るってきた。

うむ、さすがに良い動きだ。

まあ、いくら私に敵意も殺気もなかったとはいえ、あの程度の隠形に気づかず背後を取られた時点で未熟だがな。

そして、とりあえず、剣聖の剣撃は間合いを詰めて腕を抑える事で止めておいた。

「!？」

「良い動きだな。さすがベルを倒しただけの事はある」

「き、君はAブロックの……!」

お、覚えてたか。

いや、まあ、普通に考えれば、同じ決勝トーナメント進出者の顔くらいは覚えてるか。

だが、一応は自己紹介をしておこう。

「如何にも！ 私はAブロックの覇者！ S級冒険者にして騎士学校一年生『天才剣士』リンネだ！ よろしくな！」

目元にピースサインを作りながら堂々と名乗りを上げた私を、剣聖

は困ったような目で見つめていた。

67 月下の剣聖

「……それで、君は何故こんな所に？ 女性の夜歩きは感心しないが」
剣聖はどうやら、私のポーゾングには一切ツッコまない方針で行くらしい。

普通に会話を振ってきた。

それはそうと、女性の夜歩きは感心しない、ねえ。

なんか初めてまともに女扱いされた気がするわ。

今まで私を女扱いしたのは父くらいだな。

ああ、いや、アリスやスカレットやオリビア、あとメイド軍団なんかは、たまに私に女の子っぽい格好をさせようとしてくる事があったか。

だが、男にされたのは父以外では初めてである。

そして、実際にやられてみた感想としては……まあ、嬉しくもなく不快でもなく。

うむ。

普通。

「なに、罰ゲームでパシラされてるだけだ。私は強いから気にするな」
「そうか……だが、やはり感心はしない。それに男子寮は女子禁制だ。早く用事を済ませて立ち去る事を勧める。なんなら、家まで送っていくが？」

「過保護か！」

強いから大丈夫つつつてんだろが！

それとも何か？

貴様には私がそんなに弱く見えているというのか！？

だとしたら、実にむきやつく！

「見くびるな！ 私とて決勝トーナメント進出者なんだぞ！」

「……そうだな。すまない、失言だった。なにぶん、女性には優しくしろと教えられて育ったものでね」

「紳士か！」

剣聖が予想外に大真面目な紳士野郎だった件。

ベルの仇だというのに、普通に好感が持てるわ。すまん、ベル。

ああ、そういうえば今思い出したけど、教国はそこら辺の教育に力を入れてるんだっただか？

連中の信仰対象である神龍に対して万が一にも無礼がないように、礼儀や道徳の教育には特に気を使ってるとか何とか聞いた事があるような、ないような。

正直、興味なかったからうろ覚えだが、たしかそんな感じだったよ。うな気がする。

そんな教国の騎士代表みたいな存在である剣聖なら、そりゃ紳士に決まってるか。

強けりやなれる剣神と違って、剣聖には品位も求められるって訳だ。

大変である。

「まあ、それはともかく。お前こそあれだな。こんな夜更けに素振りとは精が出るな」

「……俺はまだまだ未熟者だからな。剣聖の称号を頂き、国の名を背負ってこの国に来ておきながら、去年の大会では優勝を逃し、今日も格下の剣士を相手に追い詰められた。」

こんな事では、神龍様や教皇様に顔向けができない」

そう言って、剣聖は素振りを再開した。

心なしか、さつきよりも力が入ってるように見える。

マジで真面目だな。

昔のシオンを思い出すストイックさだ。

しかし、まあ、

「その心意気は大変結構だが、今日の戦いに関しては、自分を責める前にベルの奴を褒めてやった方がいいと思うがな」。

あいつのいぎって時の底力とド根性は称賛ものだ。

特にあの技に関しては、この私ですら初見じゃ防げなかったしな」

自分の弱さを責めるのもいいが、相手の強さを認める事も大事だぞ。

そこから学ぶ事で得られる強さもある。

私も、あのくそつたれな魔帝のクソ野郎や、その配下だった帝国十二神将に対してすら、その強さだけは認めてるのだからな。

当然、強さ以外の部分は全否定してるが。

「……それもそうだな。だが、それでも俺は自分の弱さが許せない。許す訳にはいかない。」

劍聖は教国最強の騎士。

故に、本来ならば敗北は許されない。

俺が不様を晒せば、教国の名に泥を塗ってしまう」

劍聖は素振りを続ける。

その横顔には余裕がない。

己を鍛え直すように、己の弱さを削ぎ落とすように、劍を振り続けている。

その様子は、ますます昔のシオンに、そして劍神の重圧で苦しんでいたアレクに似てる気がする。

そう思うと親近感がわくな。

酒の勢いも相まって、老人の癖でお節介を焼きたくなるわー。

「……色々と話しすぎたな。何故か君には何でも話してしまいたくなる不思議な魅力があるが、本来なら劍聖が弱味を見せる事も許されない。」

悪いが、今夜ここで話した事は聞かなかった事に……」

「まあまあ、少しは肩の力を抜けい若人よ！ これでも食ってな！」

「もがつ!？」

劍聖の口に丁度手元にあったケーキを突っ込む。

それによってシオンの取り分が減ったが、なあと、ケーキはまだまだ沢山あるんだ。

少しくらいは構うまい。

「どうだ美味いか？ ウチの連中が決勝トーナメント進出祝いに丹精込めて作ったケーキだ。一応、お前にも食う資格がなくはないだろう」

こいつも決勝トーナメント進出者だしな。

まあ、私達にとっては敵というか、ライバルだが。

劍聖は混乱しながらも、食べ物で粗末にするつもりはないらしく、無言で口を動かした。

そして、目を見開いた。

どうやら旨かったらしい。

「せいぜい、よく味わって食べる。存分に甘味を堪能しろ。そうして、少しは肩の力を抜け。そんなガチガチでは勝てる戦いにも勝てんぞ」
劍聖はもきゅもきゅとケーキを頬張り、飲み込んだ。

素振りを再開する気配はない。

どうやら、少しは余裕が生まれたようだ。

代わりに、怪訝そうな目で見えてきたが。

「俺にちよつかいを出して弱体化を狙っている……訳ではなさそうだな。君からは悪意を感じない。

なら、何故こんな敵に塩を送るような真似を？」

「送ったのは砂糖だが？」

「いや、そういう事ではなくてだな……」

「ハハハ！ わかっている、冗談だ！」

だからと言って、特に理由もないが。

「なに、特に他意のないお節介だよ。私にはそういう癖があつてな。

強いて私の利点を上げるなら、余裕のない手負いの獣と戦うよりも、噂に名高い劍聖と戦った方が、ウチのアリスにとって良い経験になるだろうってところか」

「なんだ、それは……」

まあ、あくまでも強いて言えばの理由だからな。

実際は、悩める若人にうんちく垂れるのが好きなだけだ。

それも多少なりとも興味を持った相手に限るが。

「お前がこの大会に懸ける意気込みは知らんし、劍聖としての責任うんぬんも知らん。

だが、勝ちたいなら少しは肩の力抜いて落ち着け。

自分を追い詰め過ぎてもろくな事はないからな。

わかったか？」

「あ、ああ」

「うむ。よろしい」

さて、お節介はこれくらいでいいか。

「では、私はそろそろ行く。もしもウチのアリスを倒せたのなら、その時は明日、決勝でまた会おう」

「わかった」

「ただし！ アリスに対して不実な真似しやがったら殺すからな！」

「わ、わかった。安心してくれ。試合の上とはいえ、女性に過度な乱暴を働く気はない」

「ならばよろしい！ では、さらばだ！」

そうして、私は剣聖に背を向けてダッシュした。

興味本位とはいえ、少し長く喋り過ぎたからな。

とつとつケーキ届けてパーティーの続きだ！

「なんとも不思議な子だな……」

最後に、背後からなんか声が聞こえてきたような気がしたが、風を切りながら走る私の耳には届かなかった。



明けて翌日。

武闘大会二日目にして最終日。

コロシウムは昨日以上の熱気に包まれていた。

王国の頂点（騎士を除く）を決める戦いを見るべく、昨日以上の観客がコロシウムに押し寄せ、やたら精巧で巨大な姿絵と共にデカデカと張り出された決勝トーナメントの対戦カードを見て興奮している。

それにあやかり「稼ぎ時じゃあああ！」とばかりに、今日も出店の連中は元気だ。

そして、私も元気一杯、気力充分絶好調の状態でこの日を迎えていた。

昨日はあの後、シオンの部屋に行っても中からの応答がなく、当然鍵も閉まっていたので、仕方なく玄関のドアノブにキーの入った箱を引っ掻けて屋敷に戻った。

あの箱の中には氷も入ってたし、朝までにケーキがダメになる事もないだろうと考えて。

そして、その後はマツハで屋敷に帰ってパーティーを楽しみ、存分に孫ニウムを補給してお肌ツヤツヤである。

若干二日酔いを今日にまで引き摺ったが、それも回復薬（というよりは解毒薬。もしくは酔い止め）のおかげでスッキリ爽快！

今の私に怖いものはない！

「き、緊張してきますね……」

と、その時、一緒に来たアリスがそんな声を漏らした。

まあ、今日は昨日と違って一対一の決闘、しかも決勝トーナメントだからな。

注目度は昨日の比ではない。

アリスが緊張するのもわからんでもないわ。

「大丈夫だぞ、アリス。負けても死ぬ訳じゃないんだ。気楽に行けい」

「は、はい！」

私のフォローに対して、アリスはやはり少し硬い声で答える。

だが、実のところ、今日のアリスの事はあまり心配していない。

何せ、こう見えても、アリスのコンディションは私と同様に良好だからだ。

昨日の疲れを引き摺らず、むしろパーティーで英気を養えたのか、私と同じく気力充分。

少し緊張こそしているが、それもガチガチになるレベルではない。

そこそこに程よい緊張状態と言えるだろう。

今なら、剣聖相手に三割くらい勝ち目ありそうだ。

剣聖が昨日の状態のままなら、もう少し上がったかもしれない。

……そう考えると、余計な事した感がなくもないな。

残りの参加者であるシオンと剣聖の状態はわからん。

二人とも、今日はまだ会ってないからな。

私とアリスは既にコロシウム入りしてるが、シオンはまだ来ていない。

昨日のクソ虫戦の疲労を引き摺っていないか少し心配である。まあ、もしそうなくても手加減はしないが。

「おーす！ リンネー、アリスー！ 今日も来てやったつすよー！」

「お。来たか、オスカー」

私がそんな事を考えている間に応援団が到着した。軽く手を上げるオスカーと、その後ろに続く三人。

『英雄の剣』の三人とドレイクだ。

だが、オスカー以外の顔色が悪い。

二日酔いと見た。

ラビは気疲れだろうか？

ちなみに、スカーレットとオリビアは今日はいない。

あの二人は、さつき軽く挨拶した後、貴賓席に向かった。

というか、むしろ昨日一般の席にいた事の方が異常だったらしい。

考えてみれば、アレク達も昨日は貴賓席で観てたしな。

王族であるスカーレットと、その護衛であるオリビアだって同じ立場だろう。

スカーレット曰く、アリスとオリビアの応援の為に、昨日はちよつと我が儘を言ってみたそうだ。

そうして、オスカー達と軽く談笑を交わし、アリスの緊張も抜けてきて、ますますベストコンディションに近づいてきた辺りで、もう一人の主役がやって来た。

「悪い、待たせた」

「来たな、シオンー！」

現れたシオンは、結構調子が良さそうに見える。

顔色も良いし、目の下に隈もなければ、足取りが重そうな感じもない。

昨日の疲れが完全に取れてるかはわからんが、少なくとも絶不調には見えんな。

「シオンさん、体調は如何ですか？」

「悪くはない。昨日は奴を倒した爽快感で良く眠れたしな。むしろ体が軽いくらいだ」

「ほほう。ならば、私との戦いに支障はないな。せいぜい盛大に揉んでやるから覚悟しておけ！」

今日の第一試合は、予選Aブロック勝者の私と、Bブロック勝者のシオンだ。

いきなりの激突。

むろん、友が相手であろうと容赦はせん。

青春しようぜ！

「ああ、それでいい。本気のお前を今日こそ超えてやる」

「言ったな、若造！ 楽しみにしているぞー！」

私はニヤリと不敵に笑う。

シオンは闘志の籠った静かな目で私を睨み付けてきた。

ライバルっぽくて楽しいな！

「あ、シオンさん、そういえばケーキは食べましたか？ 昨日、リンネちゃんが持つて行った筈なんですけど」

「……食べた。旨かった」

「そうですね。それは何よりです」

だが、そんな空気もアリスの無邪気な言葉で霧散してしまった。

アリス……やはり天然か。

そんなアリスも実に可愛い。

おそらく、こんな可愛さを萌えというのだろう。

この萌えの為ならば、シオンとのライバルっぽい雰囲気などいくらでも投げ捨ててくれるわ！

「アリスって、意外と空気読めないっすねー」

私が慈愛の眼差しでアリスを見詰め、シオンがため息を吐き、オスカーの言葉が虚しく響く。

そんな感じで、武闘大会二日目は幕を開けた。

68 リンネ VS シオン 再び

『試合開始まで残り10分となりました。リンネ選手、シオン選手は、控え室へと移動してください』

「……時間か」

「そうだな。では、行ってくるぞ!」

そうして、私とシオンは席を立った。

「二人とも頑張ってくださいね!」

「俺の分まで全力で戦ってこい!」

「が、頑張れ!」

「ま、せいぜい頑張るっす」

「仲間対決か。楽しみに観させてもらおうぜ」

「任せろ!」

アリスやオスカー、そして二日酔いを振り払ったベル達とそんなやり取りをしつつ、私とシオンは応援団と別れて控え室へと向かった。

選手同士の控え室は別なので、ここでシオンともお別れだ。

次に会うのはリングの上である。

そうして控え室でダラダラしている間に、10分などという短い時間はあっという間に過ぎ去り、試合開始の時間がやってきた。

『お待ちせいたしました! これより王都武闘大会決勝トーナメント、第一試合を開始します!』

『オオオオオオオオオオオオ!』

放送と歓声が鳴り響く。

それに合わせて、私は入場口から足を踏み出す。

同時に、反対側の入場口からはシオンが進み出てきた。

そして、互いにリングの上で向かい合う。

『Aブロック勝者、S級冒険者『天才剣士』リンネ選手! VS Bブロック勝者、A級冒険者『雷剣』のシオン選手!』

「そういうえば、お前とこうして真剣に向かい合うのはいつぶりだろうな?」

実況が選手紹介をする中、私はおもむろに口を開いた。

シオンとはマーニ村にいた頃から何度も模擬戦とかで戦ってきたが、こうして真剣勝負をするのは久々だなとふと思ったのだ。

そんな私の問いに、シオンは神妙な顔で答えた。

「……7年ぶり。俺とお前が初めて会った時以来だ」

「む？ そんな久しぶりだったか？」

「ああ。お前と真剣勝負で戦うのはな」

そんな事ないと思うがな。

私はいつでも真剣だぞ？

「リンネ、お前は強い。強すぎる程に強い。お前の正体を知った今なら、素直にその強さを認められる。

だが、だからこそ、お前は俺やベルとの戦いで本気になった事など一度もない。

そんな中で、真剣勝負をしたと言えるのは、たったの一度だけ。

下手くそなやり方で当時の俺を諫めようとした、あの最初の戦いの時だけだ」

「おい、誰のやり方が下手くそだつて？」

こいつ！

ナチュラルに私を馬鹿にしてきやがったぞ！

あれがお前の人生の転換点だったくせに！

「俺はあの時とは違うぞ。俺は強くなった。今度こそ、あの時のような同情からの真剣勝負とは違う、本当の意味でお前に本気を出させてやる。」

そして、その上で俺は今日こそお前に勝つ」

「……そうか。やれるものならやってみる。期待してるぞ若造が」

その威勢の良さに免じて、さっきの失言は見逃してやろう。

その代わり、本気でぶつかってこい。

若者の、お前の可能性を見せてみる、シオン！

『試合開始まで残り10秒！ 10、9、8、7、6……』

カウントが進み、リング上が緊張感に包まれていく。

シオンが木剣を構えた。

それに合わせて、私も木剣を構える。

『5、4、3、2、1……試合開始!』

「雷神憑依! 飛脚・電光!」

お! いきなりか!

試合開始と同時にシオンが駆けた。

必殺技と闘気を発動し、飛脚で私との距離を詰めてくる。

開幕速攻か。

まあ、私を相手にシオンの腕前で受けに回れば勝ち目はない。

合理的な判断だ。

だが。

「紫電・一閃!」

「まだまだ甘い!」

縦に振り下ろされたシオンの一閃に対し、軽く剣を当てて軌道を逸らす。

そのまま体を沈め、私は反撃の抜き胴を繰り出した。

手本のような守ノ型・流。

普通なら絶対に入るタイミング。

だが、こんな単純な結果をシオンが予測できない筈がない。

ただ速くなった程度で私を倒せると思う程、お前は私を舐めてはいないだろう?」

案の定、シオンは私のカウンターを縦に回転するように跳躍して回避した。

そのまま体の上下を反転し、飛び越えるようにして私の後ろを取る。

そこから更なる連撃を繰り出してきた。

「逆雷^{さかがみ}・一閃!」

「ほう!」

背後から迫る下段方向からの一閃。

なるほど、少し受けづらい攻撃だ。

だが、受けづらいのならば避けてしまえばいい。

シオンの攻撃を、横に半歩ずれて回避する。

そして、こちらもまた体を回転させ、横方向から次のカウンターを

放った。

「守ノ型・空蟬！」

今のシオンは上下逆さまの状態で空中にいる。

しかも、剣は振り抜いてしまつて使えない。

さあ、これをどう受ける？

まさか、考えなしにそんな体勢になつた訳ではあるまい？

激しく攻防を繰り広げる刹那の瞬間、私はシオンの次の一手を予想しながら笑つた。

この期待に応えてみせるがいい！

「流転・電流！」

「おー！」

その技は！

シオンは空中で更に体を捻り、私の攻撃を予想していたかのように、凄まじい反射神経で私の剣を足で踏みつけ防いだ。

そして、その反動を利用して更に体を回転。

私の剣の威力に自分の力を上乘せしたカウンターを放つてきた。

私は即座に剣を引き戻し、その攻撃を真つ向から受け止める。

「神速剣・塞！」

私に神速剣を使わせるとは！

やるな！

「……チツ」

それを防がれたと見るや、シオンは舌打ちしつつも、深追いせずには飛脚で一旦距離を取つた。

良い動き、良い判断。

悪くない！

悪くないぞ！

少しの間に見違えたなシオンよ！

「……さすがに、この程度の奇策で揺らぐ程甘くはないか」

「まあな。だが、お前の動きも中々に良かったぞ」

いつの間にベルのごときアクロバティックな動きを会得したのやら。

もしや、雷神憑依で身体能力を上げてるから可能になったのか？
まあ、それでも、それはベルの技だ。

シオンが無理矢理真似したところで、本家以上のキレは出ない。
それでも使ってきたのは、私の意表を突く為だろうな。

つまり、シオンはこの私を相手に、なりふり構わず本気で勝ちにきているという事だ。

大変結構。

実に楽しいではないか！

だが、その楽しい時間も長くは続かないだろう。

昨日の試合で雷神憑依の弱点は割れている。

それは持続時間の短さと、肉体への反動。

昨日、クソ虫との戦いを終えたシオンは、帰ってくるなりぶつ倒れた。

試合時間はそれ程長かった訳でもなく、そこまで大したダメージを負っていた訳でもないのだ。

それすなわち、雷神憑依による反動がそれ程に大きかったという事。

超速を得る事の代償か、それとも消費魔力の問題か。

なんにせよ、あの技は長時間発動してられない。

私の神速剣と同じく、制限時間を過ぎれば戦えなくなると見た。

長期戦ではシオンに勝ち目は無い。

故に、仕掛けてくるならば短期決戦。

勝つだけならば、シオンがバテるまで適当に耐えれば事足りる。

だが、そんなつまらん事をする気はない。

私は、私の隙を見逃すまいと鋭い視線で睨み付けてくるシオンに対し、軽く微笑んでから構えを解いた。

木剣を片手で持ってダラりとぶら下げ、もう片方の手で手招きする。

「！」

それを見て、シオンが息を呑んだ。

小細工無用。

真つ向勝負でケリをつけてやる。

「上等……！」

小さくそう呟き、シオンは身を屈めた。

全力疾走の予備動作。

来る。

「サンダーレイン！」

「！」

しかし、予想に反して、シオンが使ったのは魔法による遠距離攻撃。無数の雷の雨が私に降り注ぐ。

それに合わせて、シオンが走り出しているのが見えた。なるほど。

目眩まし、兼、魔法と剣撃による波状攻撃か。

ありがちだが有効な一手だ。

乗ってやろう。

「飛剣・嵐！」

シオンの思惑に乗り、あえて振りの大きい嵐で雷の雨を消し飛ばす。

それによって、私に僅かに隙が生じる。

予想通り、シオンはその隙を突いてきた。

「雷神・槍牙！」

雷を纏った超速の刺突が、剣を振り切って無防備な私へと突き出される。

だが、私は元世界最強にして『最速』の剣士。

この程度の隙は隙足り得ない。

「神速剣・流！」

シオンの刺突よりも尚速い剣撃を用い、余裕を持ってシオンの剣を迎撃する。

そのまま、さつきと同じくカウンター。

しかし、やはりシオンは防がれる事を読んでいたらしく、高速の飛脚で即座に離脱した。

「電光乱舞！」

そして、更なる飛脚を使つて、まさに雷のような速度とジグザグとした軌道で私の周囲を飛び回り、四方八方から攻撃を加えてくる。というか速いな。

単純な移動速度だけなら、私の神脚乱舞の足下くらいには届いているかもしれない。

だが、対等にはまだまだ程遠い！

シオンの連続攻撃を冷静に一つずつ捌く。

一閃は塞で受け、槍牙と破断は流で受け流し、時には城壁で止めてカウンターを打ち込んだ。

剣術の完成度の差が諸に出ている。

まだ今のシオンの力では、経験と技術に裏打ちされた私の守りを崩せないのだ。

そして、

「さて、今度はこちらから行くぞ！ 攻ノ型・一閃！」

「くっ!？」

攻めに關しては、それ以上の実力差が存在する。

シオンは私の一閃を、私と同じく塞で受けた。

しかし、纏う闘気の練度に差がある。

どうも、雷神憑依は速度こそ馬鹿みたいに上昇するが、筋力に關しては、そうでもないらしい。

結果、私の攻撃はシオンの防御を撥ね飛ばし、ガードの上から強引に吹き飛ばした。

「飛脚！」

そうして、今度はこちらから接近。

その勢いを有効活用し、速度の乗った突きを容赦なく繰り出す。

「攻ノ型・槍牙！」

「ッ！ 避雷流し！」

シオンはこれをなんとか受け流した。

だが、カウンターまで繰り出す余裕はない……かと思いきや、それでもなさそうだ。

雷神憑依恐るべしというべきか、それともシオン恐るべしというべ

きか、この速度の攻撃を受けて、もう迎撃準備ができています。しかし、それを素直に食らうつもりはない。

私は槍牙を放った後で密着した体勢から、飛脚で更に加速。剣に力を籠めてシオンの剣を封じながら、シオンの体を追い越して背後を取る。

右足を軸とし、そこで体を反転。

反転の勢いを殺さぬままに剣を振り抜いた。

「攻ノ型・廻かい！」

「がっ……!?!」

攻ノ型・廻。

本来であれば、つばぜり合いの状態から繰り出す技の一つ。

それを思いつきり背中に食らい、シオンがよろめいた。

真剣であれば、ここで終わっている。

だが、これは木剣による試合。

かなり痛いだろうが、根性があればまだ動ける。

終わったと判断するのは早計だ。

案の定、シオンは歯を食いしばりながら、倒れぬ為に足に力を籠めて踏ん張り、そのまま一切怯む事なく私へと向かってきた。

その眼に宿る闘志は些かたりとも衰えてはいない。

こいつは、この期に及んでまだ私に勝つつもりなのだ。

ならば、私もそれ相応の力を持って応えよう。

シオンが接近してくる刹那の間に、私はシオンの次の一手を予測する。

シオンは、奇襲も、奇策も、魔法も、真つ向勝負も私には通じなかった。

そうなれば、あいつの残る手札は自ずと限られてくる。

その中で私に対抗できる切り札は一つしかない。

まだ私にも見せていない隠し球がある可能性もなくなはないが、十中八九、次の一手はあれだろう。

シオンが剣を真上へと振り上げ、そこから、とてつもなく見覚えのある動きへと繋げる。

指、手首、肘、肩。

踏み込みの勢い、足運びの位置、筋肉の使い方。

その全てを一部の狂いもなく連動させ、動きから一切の無駄を省く事で到達する最速の剣技。

シオンのそれは、私やアレクに比べればまだまだ荒い。

それでも、その技は紛れもなく――

「神速剣・一閃！」

私の編み出した神速剣。

やはり、クソ虫との戦いで使えたのはマグレではなかったか！

不完全にも程があるとはいえ、この歳で紛いなりにもその剣技を使えるようになるとは！

本当にお前は天才だよ、シオン！

だが、やはり！

「まだまだ甘いぞ、シオン！ 守ノ型・挫くじき！」

「ッ!？」

シオンの剣が届く前に、私の剣がシオンの右手首を砕いた。

守ノ型・挫。

相手が攻撃の構えに入った瞬間、技を繰り出す前にこちらから攻めて手首を斬り落とし、出鼻を挫いて技を不発にさせるカウンター技。

如何に最速の剣技といえども、あんなにわかりやすい予備動作があつては、ただのテレフォンパンチに過ぎない。

そんなもの、軽くカウンターを合わせるだけで粉碎できるわ！
神速剣を使えた事は称賛に値する。

だが、今のままでは技に使われているだけ。
それでは怖くも何ともない。

手首を砕かれた事により、神速剣はあらゆる方向へと逸れて不発に終わる。
だが、その瞬間、――シオンは残った左手を剣から離し、拳を握つて私に突き出してきた。

「なっ!？」

「雷神拳！」

「ぬおお!?」

咄嗟に剣を引き戻し、剣の柄で拳を受ける。

ダメージはない。

だが、しつかりと体重の乗った拳の勢いに負け、体重差も相まって、私の小さな体は吹き飛ばされてしまった。

この威力……! !

咄嗟に放った拳の威力とは思えん!

まさか、最初からこのつもりだったのか! ?

扱いきれない神速剣を匣に使い、手首を犠牲にして、あえて私に力ウンターを打たせたと! ?

驚愕しながらも、足をリングに突き立てて減速する。

このままでは、吹き飛ばされて場外だ。

こうするしかない。

そして、私の体勢が崩れた瞬間を最後の好機と捉えたのか、雷のよきな速度でシオンが突撃してきた。

砕けた右手は剣から離し、私を殴る為に使っていた左手で剣を握り、袈裟懸けに振り下ろしてくる。

「紫電・一閃!」

おそらく、これが今シオンにできる最善。

シオンの力では、片手で神速剣は放てない。

故に、自らに扱い切れる最高の一撃を放ってきている。
見事。

実に見事だ。

ならば、私も本気を持って応えよう!

吹き飛ばされた状態から飛脚を、否、神脚を使い、強引に前へと出る。

そして、さつきのシオンと同じように、されどシオンよりも遥かに速く剣を振り上げた。

それこそ、並どころか一流の剣士ですら目で追えないような速度で。

よく見ておけ、シオン。

これが本家の力だ！

「神速剣・一閃！」

シオンの一閃を迎撃するように放った神速剣・一閃。それがシオンの剣を押し返し、吹き飛ばした。

そのままシオンは吹き飛んでいく。

抵抗すらできずに場外まで。

「ぐっ!？」

リングを覆う結界に叩きつけられたシオンが苦渋の声を漏らす。

これにて決着はついた。

『試合終了！ 勝者！ リンネ選手！』

『オオオオオオオオオオオオ！』

放送も私の勝利を宣言し、観客達の歓声が上がる。

それを聞き流しながら、私は倒れたシオンの元へと向かった。

シオンは、力尽きたように寝そべて空を見上げている。

「……負けたか」

「そうだな。私の勝ちだ」

「いけると思ったんだがな」

「ぬかせ。私に勝とうなんざ百年早いわ」

私に勝ちたければ、もっと実戦経験を積んでから出直してこい。

だが、まあ、

「シオンよ」

「なんだ？」

「最後、お前、私の剣を防いだな。見えたのか？ 目で追えたのか？」

最後の攻防。

私の剣とシオンの剣はぶつかった。

だが、私はわざわざシオンの剣にぶつけたつもりはない。

体を狙って剣を振るつたのだ。

それなのに剣がぶつかったという事は、——シオンが途中で剣の軌道を変え、防御したという事に他ならない。

この私の神速剣を。

「……ああ。結局は防ぎきれなかったがな」

やはりか。

こやつめ。

神速剣を目で追い、防ぐ。

それがどんな意味を持つのかわかってしているのか？

一流の剣士でも目で追えない神の剣技。

故に、神速剣。

紛いなりにもそれに反応できる者は、英雄と戦う資格を持った超一流の剣士だけ。

お前は、その領域に足を踏み入れたというのに。

「初めて会った時、最初の戦いの時、お前はこの技を前にして、ただ呆然とする事しかできなかったな。」

あの時から随分と成長したものだ。

——見事だったぞ、シオン」

そう言って、私はシオンに手を差し出した。

シオンの右手は砕けてるから左手をだ。

手を差し出されたシオンは、なんとも言えない顔でその手を見詰めた後、素直に握ってきた。

「そりゃ、どうも」

だが、口ではそんな小生意気な返答をしてきたシオンの手を引き、立ち上がらせる。

そのまま、魔力切れか体力切れかでふらつくシオンに肩を貸しながら、私達はリングを後にした。

シオンの顔は穏やかだ。

穏やかに笑っている。

悔しさよりも嬉しさが先にきたか。

可愛い奴め。

「……なんだ、その目は？」

「微笑ましいものを見る目だ」

「後で覚えてろ」

いつもの軽口を叩きつつ、歩を進める。

そんな私達を、観客達の歓声が見送っていた。

69 アリス VS 劍聖

「戻ったぞー」

「お帰りなさい、リンネちゃん、シオンさん」

私はシオンに肩を貸したまま観客席に帰還し、アリス達に出迎えられた。

本当ならシオンは途中の医務室に放り込んでくるつもりだったんだが、この後すぐに始まるアリスと劍聖の試合が見たいって言われたので、一緒に戻ってきた訳だ。

満身創痍で観戦とか馬鹿じゃないか？　と思うかもしれんが、それは問題ない。

「ラビ、悪いが治療を頼む」

「う、うん。わかった」

そんな感じで、シオンは帰還してすぐにラビを頼ったからだ。

治療術師が一人いると本当に便利。

アリスも同じ水魔法使って事で治療の魔法が使えるが、さすがに試合を控えた奴の魔力を頼る程、シオンも馬鹿ではない。

その後、ベルとオスカーの敗北者二人組が、同じく敗北者の仲間入りをしたという事でシオンを煽りに行った。

治療中につき動けないシオンは、ガヤガヤとやかましい二人の煽り言葉に対して見るからに不機嫌そうな顔で無言を貫いていたが、一分もしない内に堪忍袋の緒が切れたらしく、無事な左手を使って掴み合いの喧嘩が勃発。

そして、珍しく大声で怒ったラビによって静められた。

ドレイクが呆れながら、その光景を見守っている。

平和だな。

そんな、ほのぼのとした平和の裏で、私はアリスと話をしていた。

「さて、次はアリスだな。気負わずに頑張ってきて来い！」

「はーい」

試合を目前にしても、アリスの表情にそこまでの緊張は見られない。

これなら安心して送り出せる。

励めよ！

「ただ、劍聖が使う技は私達の王国劍術ではなく教国の劍術。お前にとっては、恐らく初めて戦う型だろう。」

どこの国でも基本の型はある程度被るもんだが、それでも微妙に違うし、予想外の動きが飛び出す可能性もある。

そこは特に注意しておけ」

一説によると、世界各地に伝わる基本の型は、全て世界を渡り歩いて教えを説いた初代劍神の技から派生したと言われている。

実際、この前初めて見た和国の劍術も、劍聖が使う教国の劍術も、どこか王国劍術の面影があった。

それに、飛劍とかこの国でも呼び方が同じだしな。

個人的に、この説の信憑性は高いんじゃないかと思ってる。

だが、初代劍神なんて大昔の人物だ。

たとえ元が同じ剣でも、各地の連中が長い時間をかけて技を発展させていけば、もはや別物。

王国劍術を相手にするつもりで劍聖と戦えば痛い目を見るだろう。

アリスもそのくらいの事は重々承知なのか、私の言葉にコクリと頷いた。

「わかってます。それに、劍聖さんとは一度三年生との合同授業で戦った事があるので、その技を少しは身で知っているつもりです。ご心配には及びません」

「うむ、そうか。……ん？ いや、ちよつと待て。合同授業？ そんなもんあったか？」

私の記憶にはないぞ。

そして、アリスは私と同じクラスで、私と同じ一年生。

つまり、私が経験していない授業はアリスも経験していない筈なんだが。

にも関わらず、全く覚えがない。

まずいな。

歳のせいでボケたか？

「リンネちゃんが辻斬り退治に行ってた時の事ですからねえ」

「ああ、なるほどな」

納得した。

だが、そうか。

その話を聞いて、ふと思った。

私が見てないところでもアリスも成長しているのだな、と。

思えば、シオンがあれ程強くなった事も私は知らなかった。

若者は知らぬ内にも育つものだ。

ともすれば、思いもよらない程に強く、逞しく。

ならば、ますます心配など無用！

存分に当たって碎けて来い！

勝ったら盛大に祝福し、負けたら抱き締めて慰めてやろう！

決して、そこで煽られてるシオンの二の舞にはさせんから安心しろ

！

『試合開始まで残り10分となりました。アリス選手、ランスロット選手は、控え室まで移動してください』

「では、行って来ます」

「うむ！ 頑張れ！」

「はい！」

そうして、私はアリスを送り出した。

シオン達も、思い思いの言葉で激励を送る。

特にベルは、自分を負かした相手との戦いに送り出すという事で何か思うところがあるのか、激励の言葉に一際力が入っていた。

そこに「自分の仇討ちを女の子に頼むとか、恥ずかしくないんすか」というオスカーの煽りが入り、ベルが荒れ狂って再びの喧嘩、もとい、じゃれ合いが発生。

そんな穏やかな雰囲気ではアリスを送り出す事ができた。

これなら多少の緊張も吹き飛ぶであろう。

健闘を祈る！

そして、程なくしてアリスはリングへと入場し、剣聖と向かい合った。

戦いが始まる。



剣聖と真っ向から対峙したアリスは、彼の放つ凄まじい気迫に圧倒されていた。

合同授業で戦った時とはまるで違う。

それは、剣聖が本気である事の何よりの証拠であった。

ここを真剣勝負の場と定め、一切の容赦も手加減もなくアリスを叩き潰しにくる。

そう確信させるだけの気迫。

今の剣聖は、それだけの威圧感を放っていた。

(呑まれたら負けです……！)

その一心で、アリスは震えそうな体と心を叱責し、平常心を維持する。

臆すれば勝利は遠退く。

リンネの、いや、アリスに戦い方を教えてくれた全ての師匠の教えだ。

まあ、アリスの師匠は、父であるアレクや、母であるユーリ、その兄弟弟子のマグマや、ナイトソード家の使用人軍団という、リンネの前世であるエドガーによって教えられた者ばかりなので、教えが被るのは当たり前なのだが。

だが、複数人から散々言われ続けて刷り込まれてきた教えのおかげで、アリスは遥か格上の気迫を受け止める事に成功していた。

英雄と戦う為の資格の一つを手に入れたのだ。

『王都武闘大会、決勝トーナメント第二試合！ Cブロック勝者！

騎士学校一年生の新星、アリス選手！ VS Dブロック勝者！

『剣聖』ランスロット選手！』

「……女性に剣を向けるのは気が引けるが、この場に立つ以上は女子

供であろうとも、誇りある一人の戦士だ。

——本気で行かせてもらうぞ、アリスくん」

そう言った瞬間、剣聖の気迫が更に膨れ上がる。

言葉にして完全に覚悟を決め、臨戦態勢に入ったのだ。

英雄が放つ、殺気にも似た本気の気迫を前に、アリスは母親譲りの凛とした顔で、表情で、正面から相対した。

「望むところです」

『試合開始まで、あと10秒！ 10、9、8、7、6……』

カウントが始まり、アリスと剣聖は互いに剣を構える。

近づく激突の瞬間に、観客達も息を呑んだ。

『5、4、3、2、1……試合開始！』

試合開始の合図と同時に、二人は鬨気を纏った超速の踏み込みで距離を詰め、手に持った木剣を正面からぶつけ合う……事はなかった。

現実、むしろ、その逆。

互いに剣を中段に構えたまま動かない。

先程の第一試合とは真逆の静寂。

アリスの狙いは、言うまでもなく得意技のカウンター。

いや、この場合はそれ以外の有効打がないと言った方が正しい。

アリスは自覚している。

自分の攻めは未熟であり、とても目の前の相手に通じるようなものではないと。

故に、待つ。

待ち構える。

ベルがそうしたように、反撃の一太刀で剣聖を倒す瞬間を。

そんなアリスの狙いを、剣聖は完璧に読んでいた。

アリスと剣聖は、合同授業で一度戦った事がある。

その時は軽い手合わせ程度だったが、それでも目の前の少女が類い稀なる返し技の達人である事は理解できた。

その技術だけならば、あるいは自分にすら匹敵するかもしれない。

剣聖は、それくらいにアリスの事を認めていた。

故に、迂闊には攻め込めない。

いくら乱戦で気が散っていたとはいえ、昨日の予選でも、カウナーによって痛い目を見たばかりなのだから。

そんな両者の思惑が絡み合い、試合は膠着状態に陥っていた。しかし、全く動きがない訳ではない。

剣聖は微かな動きを何度も見せている。

フェイントを仕掛け、アリスの隙を作ろうとしているのだ。

だが、アリスはその全てを受け流す。

フェイントならば、リンネや父との特訓で、もつと精度の高いものを何度も見てきた。

今更、この程度で揺らぐアリスではない。

(このままでは罅が明かないか)

そう考えるのは剣聖。

アリスに攻める気がない事は見抜いている。

加えて、フェイントにも掛からないとなると、このままでは千日手だ。

勝負がつかないどころか始まらない。

その状況を変えたいのであれば、アリスの思惑通り自分から攻めるしかないのだ。

(いいだろう。本気で攻める剣聖の技、防げるものなら防いでみろ！)

そうして、剣聖が動き出す。

中段に構えていた剣を大きく振り上げ、アリス目掛けて真っ直ぐ振り下ろした。

「飛剣！」

力強い斬撃が、飛翔しながらアリスへと迫る。

剣聖が放った飛剣は、手本通りという言葉が最も当てはまるだろう技だった。

まるで素振りをするかのように、正確に振り上げ、正確に振り下ろす。

斬撃の正確さ。

それこそが、あらゆる剣技の威力を大幅に上げる、基本にして最大の極意。

それを完璧にこなしした剣聖の一撃は、強すぎる師匠に囲まれて目が肥えたアリスをして、見事としか言い様のない絶技であった。

「ハッー！」

だが、そんな一撃を、アリスは最小限の動作で避ける。

サイドステップで横に飛び、その場でまるで踊るかのようにくるりと回り、

飛剣を撃つて隙の出来た剣聖目掛けて、こちらも剣を振るう。

その剣は、アリスの魔法で作りに出された水を纏っていた。

「飛剣・水刃！」

狙い通りのカウンターで放たれた水の刃が剣聖を襲う。

タイミングは完璧。

飛剣の反動でほんの一瞬動きが止まった剣聖へと、水の刃は激突した。

「ハアッー！」

しかし、その程度で倒れる剣聖ではない。

避ける事こそできなかったが、即座に剣を引き戻し、水の刃を受け止める。

その威力に押されて僅かに後退するも、すぐに剣を振り抜いて霧散させてしまった。

アリスと剣聖では、纏う闘気の質が違う。

いくら魔法の力を上乘せしたとはいえ、飛剣をただ当てた程度では有効打にはならない。

それこそ、ノーガードの状態に直撃でもさせない限り、効きはしないのである。

「天歩ー！」

そして、今度は剣聖が攻勢に出る。

鋭い踏み込みでリング上を駆け、一瞬にしてアリスとの間合いを詰めた。

今のアリスもまた、先程の剣聖と同じく、飛剣の反動で僅かに体勢が崩れ、動きが止まっている。

その隙を突いて、剣聖は一気に自分の間合いへと踏み込んだのだ。

だが、攻めて来るのであれば、アリスとしても好都合。より近くに居てくれた方がカウンターも当てやすい。

アリスの体勢が崩れていると言っても、それはほんの僅か。その程度ならば、

(大丈夫！ 返せる！)

たった今、繰り出されようとしている剣聖の攻撃。

それを返してカウンターを決めると、アリスは集中力を高めた。

しかし……

「龍爪斬！」

「ッ!」

剣聖の動きは予想よりずっと速く、その剣は予想よりもずっと重かった。

今振るわれたのは、王国剣術の一閃と似た、基礎的な攻撃。

それですら返す余裕はなく、なんとか受け流すので精一杯。

(昨日よりも速い……!?)

アリスは、そんな剣聖の動きに驚愕する。

それもその筈。

今の剣聖は、昨日Dブロックで暴れ回っていた時よりも数段強い。

何故なら、

(やはり、一対一だと戦いやすい！)

当代剣聖ランスロットは、まだまだ年若い。

にも関わらず、聖アルカディア教国最強の証である『剣聖』の称号を賜ったのは、ひとえにその才覚故だ。

剣聖ランスロットは天才である。

才能だけならば当代剣神アレク・ナイトソードに匹敵するか、あるいは上回るかもしれない。

だが、そんな彼には、アレクと比べて圧倒的に足りていないものがあった。

それは、経験。

ランスロットには、圧倒的に経験が足りていない。

特に生まれつきの気質なのか、乱戦や多対一の戦いは大いに苦手

としていた。

他にも、去年の武闘大会でフォルテを相手に不覚を取ったように、足下が疎か。

もつと言えば、予想していない不測の事態にも弱い。

その経験不足を補う為にも、ここグラディウス王国に留学させられたという経緯があるのだが、それは今は置いておこう。

つまり、何が言いたいかというと。

苦手な乱戦をしていた昨日よりも、得意な一騎討ちの戦いをしてい
る今の方が、ランスロットは圧倒的に強いという事だ。

これには観客席のリンネもビックリしていた。

そして、おもむろに立ち上がり、声を張り上げてアリスの応援をし
出した。

下がった勝率を、自分の声援で上げようとも思ったのかもしれない。
い。

まあ、その声は極度の集中状態にあるアリスには届かなかつたのだ
が。

(アリスくん、君は強い。だが、俺は負ける訳にはいかないんだ！)

「烈龍刃！」
れつりゅうじん

「うっ!?!」

五月雨に似た、しかし、もつと攻撃的な連続技を繰り出し、ランス
ロットが攻め立てる。

アリスはそれを後ろに下がりながら何とか受け流し続けるも、最後
の一撃だけは流しきれず、剣で受けてしまった。

互いの膂力の差、闘気の差によってアリスが力負けし、真横に吹き
飛ばされる。

しかし、アリスはしつかりと受け身を取り、すぐに立ち上がった。

アリスは、リンネとの修行で最低でも一分に一度は吹き飛ばされて
いた。

そして、すぐに起き上がらなければ追撃が来るのだ。

とても実戦的な修行である。

そのおかげで、今、反射的に最適の行動を取れた事に、アリスはリ

ンネの教えに感謝していた。

尚、教えた本人は、この厳しい修行で孫に嫌われやしないかとヒヤヒヤしていたのは余談であろう。

だが、いかに最適の受け身を取ろうとも、ランスロットの攻撃が止まる訳ではない。

さすがに、戦場ではなく試合で倒れた女の子を狙い撃つのは、紳士なランスロットとしては抵抗があったが、起き上がったのであれば容赦はしない。

アリスを吹き飛ばしてから追撃をかけるまでに、ほんの僅かな逡巡とタイムラグがあったものの、それも戦況に影響が出る程ではない。

「龍爪斬！」

「流！」

真上からの振り下ろしを、今度は上手く受け流す。

反撃の余裕こそないが、今のは何度か見た技だ。

ならば、対処できない攻撃ではない。

しかし、それにしてもランスロットの動きがおかしかった。

さつきと違い、必要以上に膝を曲げ、腰を落としている。

その様子からアリスは、ここから自分の知らない技が繰り出されると悟った。

しょうりゆうげき

「昇龍撃！」

「ッ!？」

振り下ろしの勢いを、そのまま振り上げの勢いに変換して放たれた攻撃。

単純だが、それ故に連続攻撃としての完成度が高く、何より速い。出だしを予期していたが故に防ぐ事はできたが、受け流す事はできずに、再び吹き飛ばされてしまった。

（このままじゃ……!）

防戦一方でジリ貧。

アリスの中に確かな焦りが生まれた。

しかし、それを気力で押し殺す。

（弱気になっちゃダメです!）

弱気になつてゐる暇があるなら、少しでも対策を考える。

アリスは瞬時にそう決断し、氣を持ち直した。

だが、思考に一瞬でも余計な考えが混ざってしまったのは事実。

それが最適な動きを阻害し、アリスは受け身を取るのに失敗した。

とはいえ、それもほんの僅かな失敗。

起き上がるまでの時間が、コンマ数秒伸びただけ。

しかし、戦いの場では、そのコンマ数秒が致命の隙なのだ。

アリスは追撃を受ける事を覚悟した。

だが、

(攻めて……来ない……?)

正確には、アリスが立ち上がるのを確認してから追撃してきた。

それを疑問に思うも、今はそんな場合ではないと思ひ直し、追撃を

捌く事に全神経を集中する。

「牙龍突！」

「！」

超速の突きがアリスに迫る。

回避は間に合わない。

突きに劍を添わせ、軌道を横へと逸らす事で受け流し、対処した。

「龍尾狩り！」

「!？」

今度は横に飛び、身を屈めてながらの足払い。

アリスの細足など簡単にへし折るだろう一撃を、アリスもまた咄嗟

に横へと飛ぶ事によって回避。

(でも、段々、慣れてきました……!)

そう思つてた瞬間、空いた距離を埋めるように飛劍が飛んできた。

それを冷静に避ければ、最初と同じように、飛劍を目眩ましにした

突撃。

だが、先程とは違い、正面から攻めるのではなく天歩で上に飛び、そ

こから落下の勢いを加えた強烈な振り下ろしが繰り出される。

「降龍撃！」

「ぐう!？」

完全に初見の技。

いくら慣れてきたとはいえ、さすがに、これを受け流す事はできなかった。

直撃こそ避けたものの、無理に受け止めようとしたせいで、またも吹き飛ばされる。

今度は完璧に受け身を成功させたものの、アリスは再びの違和感を覚えた。

(やっぱり、攻めて来ない……！)

やはり先程と同じく、ランスロットは吹き飛ばされるアリスを深追いする事なく、体勢を立て直してから攻撃を再開している。

手加減されている、いや、ランスロットの性格的な問題だろうと、アリスは瞬時に予測した。

以前の合同授業で垣間見た人となりを見ると、剣聖ランスロットは善人だ。

しかも、人に優しく、女性には特に紳士的で、逆に自分には厳しい。そんな、まさに騎士の鏡のような性格をしていた。

ならば、なるほど、いくら真剣勝負の場とはいえ、倒れた少女アリスに無慈悲な追い討ちをかけるような真似をしないのは理解できる。

(ならー！)

「龍霞りゆうがすみ！」

「!?」

今度は攻ノ型・朧に似た技を使ってきた。

歩方による緩急でタイミングを狂わされ、そこを狙って放たれた横薙ぎの攻撃に、またしても吹き飛ばされる。

だが、今回は今までとは違う。

アリスは、狙って吹き飛ばされたのだ。

吹き飛ばされて地を転がっている間は追撃が来ないと予測し、その隙を突いてある技を発動させる。

「マリンフィールドー！」

「む!?!」

その技は、ここまで殆ど使う暇を与えてくれなかった魔法。

アリスの水魔法によつて、リングが水の中に沈んでいく。攻撃魔法を繰り出しても通用しないと判断したが故の策だ。

この魔法に大した攻撃能力はないが、水流が膝下程度まで達し、更にその水が激しく渦を巻いて流れる事で、ランスロットの動きを阻害する。

逆に、アリスは体勢を立て直した後に、魔法と飛脚の応用で水面の上立った。

これで、一方的にランスロットの動きだけを阻害する事ができる。

しかし、

「甘い！」

ランスロットは即座に最善手を選択した。

天歩で宙に飛び上がり、激しい水流から脱したのだ。

天歩もまた飛脚と同じく、極めれば宙を踏み締めて空を飛ぶ事ができる。

これでは足下を乱しても意味がない。

そして、

「天歩！」

宙を踏み締めてランスロットが加速。

上空からアリス目掛けて強襲をかける。

魔法発動の直後にして、策を簡単に破られた直後という絶好のタイミングだ。

決まる。

観客の殆どがそう確信した。

だが、

（来た！）

この状況は、アリスの狙い通りだった。

自分の魔法が速攻で対処される事も、天歩で上に逃げられる事も折り込み済み。

むしろ、そう誘った。

そして、この位置関係からランスロットが繰り出すであろう技を、アリスは予測する。

真上からの強襲。

おそらくは、落下の勢いを加えた強烈な振り下ろしが来る。
そう、さつき一度見た、あの技が。

アリスが見せた隙を咄嗟に突こうとするならば、対処される事を見越して違う技を出そうと考える暇はない、筈だ！

「降龍撃！」

（やっぱり！）

ここにきて遂に、アリスはランスロットの動きを読み切った。

「守ノ型・流！」

「何っ!？」

そして、初めてまともなカウンターが当たる。

咄嗟の防御で急所に当たるのを避けたのはさすがだが、攻撃を受けたランスロットの体は真上へと跳ね返され、今度は彼が吹き飛ばされる事での無防備を晒している。

仕掛けるのならば、今こそが千載一遇のチャンス。

（今です！）

「アクアドラゴン！」

「!？」

ランスロットを釣り上げる為に使った魔法。

足下で渦を巻いていた水が形を変え、渦の中心が一瞬にして巨大な龍の頭になる。

この魔法は、ここまで考えた布石だったのだ。

これによつて、本来であればこの大技の発動までにかかるチャージ時間を、大幅に短縮する事に成功した。

そして、水の中に剣を突き刺し、闘気の流れし込む。

これが、これこそが、アリスの切り札。

「飛劍・昇り水龍！」

「ッ!？」

アリスが何とか発動に成功した、魔法剣士最強の技がランスロットを呑み込む。

水の龍が巨大な顎でランスロットに噛みつき、龍の体である渦巻く

水の中でミキサーのようにかき混ぜる。

そのあまりの威力に、アリスよりも圧倒的に上の闘気を纏う筈のランスロットがズタボロに引き裂かれていく。

死にはしないだろうが、大ダメージは確実だ。

「勝った……う？」

アリスがポツリと呟く。

観客席でリンネが、雄叫びのような歓声を上げる。

終わった。

あの剣聖を倒し、アリスがまさかの大金星を上げた。

会場の誰もが、そう思っていた。

だが、

「はおうげきりゆうは霸王激龍派アアアア！」

——突如として、水の龍が内部から爆ぜた事によって、その確信は否定される。

そして、水龍の残骸である水飛沫の中から飛び出し、その存在はリングの上へと舞い戻った。

「見事だった」

ランスロットが、剣聖が、素直にアリスを称賛する。

服が裂け、体は傷付き、木剣はひび割れ。

しかし、彼はしっかりと二本の足でリングに立っていた。

剣聖は、倒れなかった。

「嘘……」

逆に、アリスの方がふらりと地面に倒れる。

ランスロットの猛攻を防ぎ続けて体力が尽き、加えて身の丈に合わない大魔法を行使したせいで魔力も尽きた。

つまり、アリスは限界だったのだ。

そして、この場には倒れた少女と、傷付きながらも立ったままの青年が残される。

勝敗は決した。

『それまで！ 勝者！ 『劍聖』ランスロット選手！』

放送が試合の終了を宣言する。

観客達の間には静寂が流れ、やがて一人、また一人と、名勝負を演じた二人の剣士に向けて拍手を送り始めた。

リンネもまた激しく両手を叩きながら、涙声でアリスの健闘を称える。

そうして、決勝トーナメント第二試合は終了し、真の決勝に進出する二人の選手が出揃ったのだった。

70 昼休憩

「アリズブー！ー！ よぐやっだー！ー！ よぐ頑張っだなー！ー！
良い勝負だったぞ！」

試合が終了した瞬間、他の連中を置き去りに神速のダツシユで観客席を飛び出した私は、アリスのいるであろう医務室に突撃を掛けた。そして今、私は涙声で叫びながら、疲労困憊でベッドに寝ているアリスを全力で抱き締めている。

無論、アリスを絞め殺さないように気をつけてはいるが。

「あ、ありがとうございます。」

でも、結局は負けちゃいましたし、剣聖さんに与えられたダメージも大した事ありませんでした。

それに、そのダメージを与えられたのも、試合という形式に付け込んだからでしかありません。

私なんて、まだまだですね」

アリスはそう言つて力なく笑った。

ネガティブになるなあ！

「そんな事はない！ 誰が何と言おうとお前は立派だった！ 胸を張れ！」

「ふふ、そうですね」

そう言つて、アリスは朗らかに笑った。

……ん？

あれ？

これ、もしかして、そんなに落ち込んでない感じか？

なら、さっきの力ない笑いはなんだったんだ？

……ひよつとして、ただ疲労が顔に出ただけとか？

「あの剣聖さん相手にあそこまで戦えたんです。たしかに負けちゃったのは悔しいですし、決勝でリンネちゃんと戦えないのは残念ですけど、悔いはありませんよ」

「お、おう。そうか」

そう言うアリスの顔は、なんとというか、とても清々しかった。

本人の言う通り、本当に落ち込んでいないし、ネガティブになつてもいないのだろう。

少し前までなら、劍神の娘として情けないとか何とか言いそうなもんだが……なんか、思ったより孫のメンタルが成長してた。

喜ばしい事なんだが、ちよつとだけ複雑だ。

主に、その成長を感じ取ってやれなかったところが。

「リンネちゃん。決勝戦、私の代わりに頑張ってくださいね！」

両手をグツとガッツポーズを取りながら、アリスが私を激励してくれた。

可愛い。

この可愛さの前では、私の些細な悩みなど吹き飛んでしまうわ！
ならば、私の言う事は決まっている。

「うむ！ 任せておけ！」

私もまた片腕でガッツポーズを見せながら、自信満々に宣言する。

おじいちゃんがカッコいいところ見せてやろう！

期待しているがいい！

「そういえば、アリス。決勝戦は昼休憩の後だが、その頃には観客席に戻れそうか？」

「あ、はい。幸い怪我は殆どしてませんし、体力と魔力の回復薬もいただけだったので、少し休めば普通に動けるようになると思います」

「そうか」

良かった。

体調的な意味でも、私の活躍を見せる事ができるという意味でも。

まあ、それはともかく。

「なら、屋台で何か食い物でも買ってきてやろう。リクエストはあるか？」

「そうですねー……じゃあ、おまかせします。リンネちゃんのおすすめをお願いしますね」

「よしー 任せろー」

という事で、アリスの昼食を買いに行く事に決定した。

善は急げという事で早速医務室を飛び出せば、そこにはアリスの見

舞いに来たらしいシオン達の姿が。

ちやうど良いので、首根っこ掴んで買い出しに強制連行した。

ちなみに、外へ出る廊下の途中でアレクとユーリの二人とすれ違った。

「どうやら、私と同じでアリスの見舞い、兼、お疲れ様を言いに行くらしい。」

シオン達の首根っこ掴んでダツシユしながら「よう！」と言っておいた。

「向こうも、私が騒がしいのはいつもの事とでも思ったのか、何も言わずに軽く手を上げただけでスルー。」

アレクは苦笑し、ユーリは呆れていたがな。

「……おい、嬢ちゃん。今の三剣士の二人じゃねえか？」

「そうだぞ」

「三剣士イ!」

何故か硬直したドレイクの問いに軽く答えれば、ベルが驚愕の声を上げた。

振り向いてみれば、キラキラした目でアレク達の後ろ姿を見るベルの姿が。

英雄好きは相変わらずのようだな。

「ほえく、あれが王国最強の英雄様達つすか。意外と普通の人つすね」

「ど、どうしよう!! サインとか貰いに行った方がいいのかな!」

「落ち着け、ラビ。ベルの馬鹿に毒されるな」

「誰が馬鹿だ! シオンこらあ!」

「マジで嬢ちゃん何者だよ……プロミネンス家と交流あるからまさかと思ってたが……」

「ええい! 喧しいぞお前ら! そんな事より買い出しが最優先だ! 行くぞ!」

止まっていた連中の首根っこを再度引っ掴み、連行を再開。

ベルがごねて暴れて喚いたが、殴って沈静化。

サインが欲しいなら後で会わせてやるから、今は親子水入らずの間を邪魔しようとするんじゃない、この無粋者が。

そんなこんなでコロシアムの外へ。

途端に煩く聞こえてくる喧騒。

皆考える事は同じなのか、昼休憩の内に飯を買っておこうと、屋台に人が殺到していた。

単純に今は昼時というのもあるんだろうが。

それを尻目に、私は引き摺ってきた連中の方を振り返り、元気よく宣言した。

「よし、作戦会議だ！ アリスをできうる限り満足させる昼飯を買いに行くぞ！」

「お、おー……」

「……無駄に元気だな、お前は」

「まあ、嬢ちゃんらしいっちゃらしいが」

ラビ、シオン、ドレイクの三人は、やる気こそあまり感じられないが、返事を返してきただけマシだろう。

だが、ベルとオスカー、こいつらはダメだ。

アリスより自分の飯を買いに行きたいとばかりに、視線が屋台へと釘付けになっている。

普段なら勝手にしろとばかりに放置するところだが、今だけはそうもいかない。

昨日、屋台を制覇する勢いで食いまくってたこいつらの味覚情報は役に立ちそうだからな。

という訳で、首を掴んで強制的にこつちを向かせた。

「痛っ!？」

「では、作戦会議を開始する。議題はアリスに買っていく昼飯についてだ。

まず、こつてりしたのは却下だな。アリスは疲れてるんだから、胃にもたれるようなものはやめといった方がいい。

そして、アリスは少食だ。そんなに多くを買っていくのもダメだろう。

加えて、あいつは甘いものが好きだ。デザート代わりに買っていけ

ば喜ぶかもしれない。

となれば、料理の方はデザートをつけても食べられる軽めのものがないだろう。

よつて、必要なブツはあつさり系で軽めの料理が一つとデザートが一つという構成がベストだと考える。

異論はあるか？」

「り、リンネが頭を使ってるだ?!」

「明日は槍が降るっす！」

「やかましい！今は建設的な意見を言え！」

馬鹿二人組を一喝！

真面目にやれい！

「う、うん。良いと思うよ」

「俺も異論はない。普段もこれくらい考えて動けよとは思うがな」

「アリスの嬢ちゃんのこと好き過ぎだろ……あれか？そっち系ってやつか？」

真面目組の方からも反論は出なかった。

よし。とりあえず大雑把に何を買うべきかは決まったな。

だが、ドレイク、貴様の発言だけは訂正しろ。

私は女に興味はないし、ましてや孫に手を出すような狂人でもない！

私はシャロ一筋だ！

……む？

そういえば、シャロは女で、私も今は女だな。

という事は、私はそっち系という事になってしまふのだろうか？

まあ、どうでもいいか。

性別程度で揺らぐ私の愛ではない。

そんな事より、今はアリスの昼飯の方が大事だ。

「とにかく！これより買い出しを開始する！アリスはお腹を空かせているかもしれないんだ！できるだけ迅速に行くぞー！」

という感じで始まった買い出し、もとい屋台巡り。

あつちへふらふら、こつちへふらふらする馬鹿二人組を引き摺りな

がら探索を続ける事しばらく。

私達はある問題に直面した。

「あつさり系の料理って、意外と少ないな!」

たこ焼きだの、イカ焼きだの、焼きそばだの!

どこの屋台も、味覚へのインパクトを最優先してるのか、あつさり系が中々見つからん!

「ベル! オスカー! お前らが食った中であつさり系はなかったのか!」

「食ったもんなんて、一々覚えてねえよ」

「同じくっす」

「役に立たねえ!」

今回ばかりは期待していたというのに、その期待を見事に裏切りおつて! この馬鹿二人組!

だが、馬鹿が使えずとも、まだ真面目組が残っている!

私はグリンツと首を回転させ、真面目組の方に振り向いた。

「え、えつと……私も王都に来たの初めてだから、屋台の場所とかわからないんだ……その、ごめんね……」

「俺も、この祭りに来たのは子供の頃以来だからな。屋台の場所も種類も覚えていない」

「悪いが、俺もだ。王都に来たのは十年ぶりくれえだからなあ。細かい事は覚えてないぜ」

「なんという!」

真面目組まで使えないとは!?

かくいう私も、王都の祭りに来たのは13年ぶりだ。

ちよつと屋台巡ってわかったが、13年前とは店主達の顔ぶれも屋台の位置も変わってて、記憶が役に立たん。

そもそも、昔だつて、そんな記憶に残るような食べ歩きをしてた訳じゃない。

誠に遺憾だが、私も馬鹿二人組と同じく、食ったもんを一々覚えてないのだ。

まずい。

私を含めて、この場の全員が役立たずと化した。
誰か！

誰か、この状況を覆してくれる救世主はいないか!?
スカーレットとかオリビアとかが、都合良くこの辺りを彷徨いてた
りしてないか!?

「む!？」

と、そこで私は、人混みの中に知ってる顔を見つけた。
役に立つかは不明だが、役に立つ可能性はある。

ならば、声を掛けない理由がない!

私は人混みの間をすりと駆け抜け、その人物の肩に勢いよく手を
置いた。

「その劍聖、ちよつと待った!」

「うわっ!?! き、君は昨日の……!」

私が声を掛けた相手は、結構背の高い藍髪的青年。

この昼休憩の後、すぐに戦う予定となっている、劍聖その人である。
ライバルではあるが、別に敵ではない奴だ。

ならば、馴れ合っても問題ないだろう。

「うげっ!?! お前は!?!」

私がそんな思考を巡らせた瞬間、後ろからなんと嫌そうな声が聞
こえてきた。

振り向いてみれば、露骨に顔をしかめるベルの姿が。

まあ、こいつは劍聖にボッコボコにされたからな。

こんな反応になるのも、むべなるかな。

そして、そんなベルの後ろから他の連中が現れ、突然駆け出した私
と合流を果たす。

全員が、なんか驚いたような顔してた。

まあ、たしかに劍聖が屋台巡りしてるとか、ちよつとイメージと違
うしな。

驚くのもわかる。

「えつと……とりあえず、そっちの人達はじめまして。俺はランス
ロット。知つての通り、当代『劍聖』を拝命しています。以後よしな

に」

「そんな事はどうでもいい！　なんで、お前がこんな所にいるんだよ！」

いきなりベルが吠えた。

ので、その頭を即座に引っぱたく。

「痛え!?　何しやがるリンネ！」

「やかましい！　貴重な情報提供者に噛みつくな！」

「そうっすよ、ベル。いくらボコボコにされたからって、逆恨みしたらダメっすよ」

「うぐぐ……！」

これにて、ベル沈黙。

真つ赤な顔で更に煽ったオスカーを睨み付けている。

ベルはオスカーと絡ませておけば安心だな。

だが、劍聖は律儀にも、ベルに対して説明を始めた。

「ベルくん、俺がここにいるのは見聞を深める為だ。俺は「経験を積んでこい」と言われ、一人で留学させられた。」

故に、この国における様々な事を経験しよう……」

「いや、そういう話はどうでもいい」

私がバツサリ切り捨てると、劍聖は口元をひくつかせながら苦笑した。

気にせず質問を開始する。

「それより、どこかあっさり系の料理売ってる屋台知らないか？」

「それなら、向こうの角で冷やし中華が売っていたが……」

「冷やし中華か！　うむ、確かにあっさり系だな！　情報提供感謝する！」

それだけ言い捨て、私は宙を舞う飛脚で冷やし中華の屋台へと直行する。

その後は、さつき目を付けておいたクレープを買って、アリスの下へ帰還だ！

待っている、アリス！

「……嵐のようだな」

『わかる』

なんぞ、背後でそんな会話が聞こえた気がしたが、無視しておいた。

尚、買っていった昼飯はアリスに好評であった。

特にクレープが。

そして、そういえばシャロもクレープ好きだったなーと思い、血こそ繋がっていないが、祖母と孫の繋がりを感じた気がしてほっこりした。

71 決勝戦

「諸君、遂にこの時がやって来た」

拡声の魔道具を通した国王シグルスの静かな声が、コロシウム内に厳かに響き渡る。

私はそれを選手入場口前で聞いていた。

目を閉じて神経を集中させながら。

「此度の大会もいよいよ大詰め。激戦を勝ち抜き、今、頂点へ至らんとする二人の選手が出揃った。

待たせたな。

——これより、第91回王都武闘大会、決勝戦を開始する！」

『おおおおー！』

開会式の時と同じく、会場が熱狂の渦に包まれる。

いや、熱狂はあの時以上か。

何せ、今回は決勝戦。

大会のラストを飾る華々しいイベントだ。

しかも、その場に立つのは剣聖とS級冒険者という、今回の大会には出場していない騎士達すらも遥かに凌駕する達人同士。

そりゃ、観客のテンションも上がるというものよ。

『それでは、選手入場を開始いたします！　まずは冒険者界の幼い英雄にして、現在は王都騎士学校一年生！　S級冒険者『天才剣士』リンネ選手！』

その放送が放たれた瞬間、私の目の前にある入場口が爆発した。

比喩でも何でもなく、派手な爆音を響かせながら、盛大に爆発した。

そして、その爆煙の色はド派手な赤だ。

武闘大会伝統の演出である。

私は、その爆煙を颯爽と裂いて、リングに足を踏み入れた。

途端、響いてくる観客達の歓声と野次。

そして、仲間達の声援。

「リンネちゃん！　頑張ってください！」

「……俺に勝ったんだ。不様は晒すなよ」

「俺に負けるまで負けるんじゃないぞ！」

「ファイトっす！」

「が、頑張れ！」

「嬢ちゃん、一発かましたれ！」

『リンネ様ファイトー』

「おう！ 任せておけ！」

拳を天高く突き上げ、声援に答える。

なんか、最後に使用人軍団による、やる気0で適当な感じの声援が聞こえてきたような気がしたが、あれは無視しよう。

奴ら、後で覚えとけよ……！

『続いて、逆サイドに控えるは、聖アルカディア教国より留学中の最強剣士！ 見事強敵を撃ち破り、去年の雪辱を果たせるのか!? 『剣聖』ランスロット選手!』

その瞬間、向こう側の入場口も爆発した。

爆煙の色は、ド派手な青。

これが武闘大会の伝統なのである。

その爆煙の中を静かに歩いてくるは、聖アルカディア教国最強の騎士。

当代『剣聖』ランスロット。

先代に比べてまだまだ若く、未熟とはいえ、その実力は本物。

いつになく集中しているのか、その雰囲気はさっき会った時とはまるで違う。

まるで、抜き身の刃の如き闘志に満ちている。

油断も隙もない。

うむ。

相手にとって不足なしと言ってやろう。

「リンネくん。君は若い女性だ。本当ならば、こういう場であろうとも剣を向けたくはない。

だが、これまでの試合を振り返れば、君が強者であり、一人の誇りある戦士だという事は、わかりきった事実。

——ならば、本気で戦わせてもらおう。アリスくんに対してそうし

たように」

その瞬間、劍聖から吹き出す気迫が膨れ上がった。

正面から相對すれば、並みの闘気使いであろうとも気圧されかねない程の迫力。

なるほど。

ベルやアリスは、これ程のプレッシャーをぶつけられながら、あれ程の戦いを繰り広げたのか。

素直に称賛する。

天晴れだ。

だが、私にとっては、まだまだ温い。

幾度も死線を越え、幾度も命懸けの戦場を経験してきたこの私を。

そんな、殺氣の一つも乗っていない気迫で呑めると思うなよ、若造。

「ッ!？」

劍聖に合わせるように、私もまた完全に戦闘態勢へと入り、気迫を逆らせる。

さっきの試合でシオンに向けたものとは違う。

威嚇用の本気の気迫だ。

当然、殺氣も混じっている。

それに呑まれたのか、劍聖が目を見開きながら咄嗟に後ろへと下がろうとして……その足を止めた。

そして、恐怖を振り払うかのように気迫を強めてくる。

ほう、さすがは劍聖。

元劍神わたしの気迫にも呑まれんか。

弟子どもですら、初めてこの気迫を浴びせた時には失神しかけていたというのに。

教国も良い人材を抱えているものだ。

私は、若き劍聖に内心で敬意を表しながら、剣を構えた。

「今、本気で戦うと言ったな。

ならば、有言実行しろ。断じて、私の見た目に惑わされて手を抜いたりするな。

お前が今感じている圧力も恐怖も本物だぞ。

私は、お前よりも格上だと思え」

冷やし中華の恩返しと言うべきか。

同盟国の若者に発破を掛けるつもりで、そう宣言した。

恐らく、こいつに一番足りていないのは実戦経験だ。

だったら、この戦いを少しでも糧にしてくれたらと思う。

まあ、それはそれとして、私も負けるつもりはないので、手を抜くつもりもないがな。

『試合開始まで、あと10秒！ 10、9、8、7、6、……』

「ハアー……フワー……」

カウントに合わせて、劍聖が呼吸を整える音が聞こえた。

私の威圧で乱れた精神を立て直すかのように。

深く吸い込み、深く吐き出している。

さすがと言うべきか、この程度の動揺は一瞬で静めたようだ。

そして、

『5、4、3、2、1……試合開始！』

——試合が開始された。

私は動かない。

劍聖も動かない。

まるで、さつきアリスと劍聖が戦った時のように、あるいは私とカゲトラが相対した時のように、今回の試合は静寂から始まった。

劍聖は油断なく剣を構え、私の出方を伺っている。

その判断は正しい。

格上相手に下手に斬り込むと、カウンター一発で終わる可能性があるからな。

私のように攻めが得意な奴なら、シオンみたいに開幕速攻して自分の得意なスタイルを押し付けるといふ戦術もありなんだが、そうでないのなら、手堅いという意味でこっちの方が正解だろう。

特に、時間無制限の試合という形式ならば尚更。

さて、劍聖がそういう構えで来るのならば、私のやる事は決まっている。

お望み通り、私から攻めてやろうではないか。

劍聖の攻めの技術は、さっきのアリスとの試合で散々見た。なら、次は守りの技術を見てやる。

行くぞ！

早々に潰れてくれるなよ！

「神脚！」

「ッ!？」

まずは神脚で間合いを詰める。

これまでの試合とは段違いの速度に驚いたのか、劍聖の顔が驚愕に歪む。

だが、驚いている暇などないぞ。

間合いを詰めた劍士がやる事など一つなのだからな！

「神速剣・一閃！」

いきなり手加減抜きの一撃を叩き込む。

だが、さすがは劍聖、さすがは英雄級と言うべきか。

神速剣の速度に驚愕しつつも、ちゃんと反応して剣で防ぎおった。しかし、咄嗟の防御では力が入らず、激突の衝撃に負けて吹き飛んで行った。

さっきのアリスと同じ状態だ。

別に、孫がやられたから仕返ししてやろうとした訳では……ない事もないな。

「なんて速さだ……!！」

そんな事を考えながら神脚で距離を詰め、追撃をかけると、劍聖はすぐに体勢を立て直し、私を迎撃するように剣を振るった。

その眼からは、完全に私への悔りが消えている。

いや、最初から侮ってはいなかったが、私への評価を上方修正し、警戒レベルを最大まで上げたといったところか。

「牙龍突！」

そんな本気状態で放たれた劍聖の一撃。

私の胸を狙った刺突を最小限の動作で避け、反撃の抜き胴。

「神速剣・空蟬！」

「鱗止め！」

「ほうー！」

だが、刺突を避けられるのは想定内だったのか、剣聖は即座に剣を戻して私のカウンターを正面から受け止めた。

そのまま、つばぜり合いにもつれ込む。

剣聖は、さつきと違って吹き飛ばされる事もなく、その体は欠片も揺らがない。

それどころか、

「ハアッ！」

「おっと」

剣聖が、つばぜり合いの状態から体当たりの要領で体を押し出し、今度は逆に私の方を吹き飛ばした。

当然、私は押し込まれる前に自ら後ろへ飛んだ為、ダメージもなく、体勢を崩す事もなかったが。

だが、これでハッキリした。

純粋な膂力であれば、剣聖は私よりも上だという事が。

体格差の問題も勿論大きい。

しかし、それだけであれば、私の纏う闘気力でいくらでも逆転できる。

にも関わらず私が力負けしている理由は単純明解。

闘気を含めた総合的なパワーにおいて、剣聖は私を上回っているのだ。

確かに、私の闘気は速度に特化している分、他の要素が弱い。

だが、それはあくまでも同格の闘気使いと比べた場合の話だ。

そして、元剣神としての闘気をそのままに転生した私は、闘気使いとしても世界最高峰に位置する。

いくら体の方が未熟とはいえ、格下から見た私は、速度以外も充分過ぎる程の化け物に見えるだろう。

その私を、一分野のみとは言え、この歳にして凌駕するとは。

しかも、剣聖の闘気は、別に膂力に特化している訳ではない。

アリスの最強攻撃を受けて立っているのを見れば、決して防御力が低い訳ではない事は一目瞭然。

加えて、紛いなりにも私の神速剣に付いて来ているのだから、スピードも遅くはない。

ならば、劍聖の闘気は恐らくバランス型だろう。

つまり、劍聖は相性などではなく、純粋な闘気と肉体の練度で私を上回るパワーを持つという事。

全く、未恐ろしい若造だ。

「烈龍刃！」

つばぜり合いで押し勝った事で手応えを掴んだのか、今度は劍聖の方から積極的に攻めてくる。

その連続攻撃を、私は飛脚による移動で避けるか、ひたすらに受け流し続けた。

「ふむ。劍技の冴えも申し分ない。綺麗な劍筋だ」

「余裕、だな！」

私の言葉を煽りと思ったのか、劍聖の表情に少しだけ怒りの色が表れる。

素直な称賛なんだがな。

実際、こいつの劍技の完成度は、シオンやアリスを遥かに凌駕している。

私や弟子どもにこそ届かないが、下手すればカゲトラクラスだ。

十剣でも持っていれば、本気で私を倒せたかもしれない。

だが、それにしては妙な事もある。

これだけの剣士を相手に、ベルやアリスが善戦できた事だ。

特に、アリスはともかくとして、ベルだ、ベル。

あいつはまだ闘気が使えない。

いくら流転という初見殺しを使ったとはいえ、このレベルの剣士なら普通に防げただろう。

私がベルにしてやられた時のように、相当気でも抜いていない限り。

その辺りを考えると、こいつの弱点が見えてくるような気がするな。

要はこいつ、予想外の動きや出来事に弱いのではないか？

試してみるか。

「神脚」

「逃がすか！ 天歩！」

私はまず、神脚で後ろに飛んで距離を取った。

その距離を詰めるべく、劍聖が駆けてくる。

そのタイミングで、私はリングに思いつきり剣を叩きつけ、土煙と砕けたリングの破片で煙幕を発生させた。

「なっ!？」

その瞬間、煙幕に飲まれて姿が見えなくなる直前。

劍聖の動きが目に見えて鈍ったのがわかった。

どう動いていいのか咄嗟に判断ができず、硬直した感じだ。

「未熟だなあ」

この程度の奇策にすら対応できないとは。

搦め手のデパートであるドレイク辺りとぶつけたら、何もできずにボコられるのではないか？

ちよつと劍聖の将来を心配しつつ、私は飛脚で上に飛び、更に空中を蹴って、三角飛びの要領で劍聖の背後へと回る。

「飛劍・嵐！」

その頃になって、劍聖はようやく煙幕への対処法を思い付いたのか、嵐の衝撃波で全方位を吹き飛ばした。

煙を晴らす、兼、攻撃のつもりなんだろうが、甘い。

確かに、並みの使い手ならば、この一撃で吹き飛ばす事もできるだろう。

だが、同格以上の剣士であれば、この程度の衝撃波は斬り裂いてしまえる。

当然、私もだ。

紅桜による攻撃すら斬り裂いた私が、この程度の衝撃波を斬り裂けぬ道理はない。

私は衝撃波をものともせず、劍聖の背後から奇襲を掛けた。

「神速劍・一閃！」

「ぐっ!？」

煙幕のせいで一瞬私の姿を見失っていた劍聖は、その分反応が遅れた。

咄嗟に私の方に振り向くも、神速を誇る私の剣を相手に、その反応の遅れは致命的だ。

故に、劍聖はこの一撃を防ぐ事ができなかった。

私の木剣が脇腹にクリーンヒットし、鬨気の鎧を貫いてあばら骨を粉碎する。

その衝撃で、劍聖はリングの上を転がって行った。

「まだだ……！」

しかし、劍聖はすぐに立ち上がった。

粉碎したあばら骨が肺にでも刺さったのか、血反吐を吐いている。だが、その眼には欠片も諦めの色がない。

いや、というより、これは……

「劍聖に……敗北は許されない！」

劍聖が、比喻でも何でもなく、血を吐くように吠えた。

執念が体を動かしているのか。

その状態を悪いとは言わない。

その執念を、劍聖としての誇りからくる執念を悪いとは言わない。

だが、やはり、

「力が入り過ぎだ」

私は、満身創痕の劍聖に向けて突撃した。

あえて殺気を送らせ、次の一撃でケリを付けるとばかりに、手加減抜きの最高速度で突進する。

それを迎え撃つべく、劍聖もまた剣を振り上げた。

そして、激突の寸前。

劍聖が剣を振り下ろす寸前に、

「龍爪ぎ……！」

私は剣を天高く放り投げた。

劍聖の視線が放り投げられた剣を追う。

追ってしまう。

結果、劍聖の視線は私から離れた。

その隙を突き、私は劍聖の体に抱きついた。

「…………え？ ……なっ!？」

突然の美少女からの包容に、完全に劍聖の動きが止まった。

そして、現状を理解したと思われる瞬間、その顔が一瞬の内に赤く染まる。

思考まで停止してるんじゃないか？

うぶな奴め。

「神速バックドロップ!」

「ぐはっ!」

そんな劍聖を、容赦なく神速のバックドロップで投げ飛ばす。

見事に頭からリングに埋まった。

間抜けな絵面だ。

そんな光景をバツチリと見ながら、私は空から落ちてきた木剣を回収する。

カッコよくパシッとキヤッチした。

くつくつく。

この為に、落下地点を計算して投げていたのだよ。

「ぐっ……………! しゅ、淑女がなんてはしたない真似を……………!」

「おお、生きてたか」

私が無駄にカッコつけていたその時、リングに頭から刺さって奇つ怪なオブジェと化していた劍聖が這い出してきた。

どうやら、文句を言うくらいの元気はあるらしい。

「つて、鼻血が出てるな。なんだ？ 私に抱きつかれて欲情でもしたか?」

「断じてそんな事はない!」

「どうだかなー。いかにも女慣れしてない反応だったしなー」

「ツ!? 馬鹿にするのもいい加減にしろ!」

「馬鹿になどしてないぞ、ムツツリロリコン」

「誰がムツツリロリコンだ!？」

劍聖、改め、ムツツリロリコンの息が大分上がっている。

こんな状況で興奮するとは、なんとという変態…………という冗談はさて

おき。

「どうだ？ 少しは肩の力が抜けたか？」

私がそう言った瞬間、劍聖は訝しげな顔をした後、何かに気づいたようにハツとした。

「昨日も言ったが、お前は肩に力が入りすぎなんだよ。だから動きが硬い。ちよつと予想外の事が起こると対処できない。そんな事では、せつかくの實力が宝の持ち腐れだ」

「まさか、君はそれを俺に伝える為にあんな事を……？」

「まあな」

こいつは、つくづく惜しい劍士だ。

そういう若者を見ると、つい世話を焼きたくなるのは老人の悪い癖だろう。

特に、こいつはどこことなくシオンやアレクに似ていたから尚更な。

そんな私の言葉を聞いた劍聖は啞然としていた。

「ほれ、劍を構えろ。まだ動けるんだろう？ 決着をつけるぞ」

「……ああ、そうだな」

それだけ告げて、問答無用とばかりに劍を構える。

劍聖は色々言いたそうな顔をしていたが、ここが神聖な王都武闘大会決勝の場だという事を思い出したのか、これ以上は何も聞かずに劍を構えた。

その姿に、さつきまでの執念剥き出しな様子はない。

かと言って、力が抜けきった訳でもない。

もし抜けきっていれば、痛みで倒れていただろう。

程よい緊張感、というにはまだまだだが、少なくともさつきよりはマシな顔になっている。

どれだけ、そうして向き合っただろうか。

一瞬のようにも、永劫のようにも感じた。

そして、私達の間の、否、会場中の緊張感が限界に達した時、

「行くぞー」

劍聖に向けて、私は駆け出した。

神脚によって、互いの距離が一瞬で近づく。

劍聖もまた、残った力を振り絞り、全力でリングを蹴っていた。互いの体がリング中央で交差する。

私はともかく、劍聖は既に限界に近い。

この一撃で決着がつくという確信があった。

「神速劍・一閃！」

「はおうしんりゆうげき霸王進龍撃！」

一瞬の交差が終わり、互いに剣を振り抜いた状態で静止する。

その状態から先に倒れたのは、——劍聖の方だった。

奴が起き上がる気配はない。

勝負ありだ。

『それまで！ 試合終了！』

『オオオオオオオ！』

放送が試合の終了を告げ、観客達が声を上げる。

『決着！ 第91回王都武闘大会！ 優勝は！ S級冒険者『天才劍士』リンネ選手に決定しました！』

割れんばかりの拍手と歓声が私を包み込む。

それを背後に、私は倒れた劍聖の方に近づく。

劍聖は、仰向けに倒れながら空を見上げていた。

「おめでとう。君の勝ちだ」

「そうだな。で、こんな美少女に負けた気分はどうだ？」

「……不思議な事に、そこまで悔しくないんだ。なんというか、俺は負

けるべくして負けた。そんな気がする。

君はあらゆる面で俺よりも上だった。強い者が勝つべくして勝ち、

弱い俺は負けるべくして負けた。そんな気がするよ」

「そうか」

「ああ。俺はこの結果に納得している。悔しくはあれど、悔いはない」

そう語る劍聖の顔は、随分と穏やかだった。

昨日見た余裕のない顔に比べると、初期シオンと今のシオンくらいの

の差がある。

劍聖に敗北は許されないとか言ってたくせに、この顔。

どうやら、何かしら吹っ切れたようだな。

「ま、せいぜい精進しろ若者よ。お前なら立派な劍聖になれるだろうからな」

そう言いながら、私は劍聖に手を差し出した。

「ハハッ。若者って、君の方が若いだろうに。なんだい、それは？」
「気にするな。こっちの話だ」

そして、劍聖は笑いながら私の手を握った。

さつきシオンにしたように、私は手を引っ張って劍聖を起こし、肩を貸して会場を後にする。

そうして、武闘大会は決着した。

72 武闘大会終了

「おめでどう、リンネ選手」

「ありがとうございます」

全試合終了後に行われた、武闘大会の表彰式。

そこで表彰台の一番高い所に立った私は、国王様シグルス自ら金メダルを手渡されるという名誉を受けていた。

年に一度の王都武闘大会の上位入賞者には、こうして国王自らメダルを授与するというのが伝統なのだ。

勿論、入賞者が乱心して王を攻撃した場合や、入賞者が暗殺者だった場合に備えて、武器の持ち込みは禁止。

さらに、この国最強クラスの騎士（今回はアレク）が護衛に付いた上での事だが。

そうして嚴重に守られている筈の国王様の顔が若干引きつっているように見えるのは、きっと私の気のせいだろう。

この国の王ともあろう者が、まさかこんな公の場で、一個人への苦手意識を顔に出す訳がない。

信じてるぞ、シグルス！

「リンネ選手。君は、この栄えある王都武闘大会において、最上の栄冠を手にした。

この功績は、必ずや騎士候補者としての君の未来を明るく照らすであらう。

見事な戦いぶりであった」

「ありがたきお言葉」

そうやって私が頭を下げ、上げた瞬間、シグルスの顔は引きつるを通り越して真っ青になっていた。

そんなに私が怖いか!?

そんなに私に対して上の立場から声をかけるのが心臓に悪いのか!?

しつかりしろ国王！

私が若干目を細めて非難の眼差しを送ると、シグルスは顔色を青か

ら土気色に変えながら、逃げるように二位の剣聖の元へと移動した。

「おめでどう、ランスロット選手」

「ハッ！」

「君も素晴らしい戦いぶりであった。誰が何と言おうとも、君は君の国に誇れる戦いをしたと私は思う。見事だった」

「……ありがとうございます！」

剣聖は、感無量とまではいかないものの、かなり感動した様子で授与された銀メダルに視線を落とした。

どうやら、自分で語っていた通り、本当に優勝できなかった事に対する悔いはないようだ。

次に、シグルスは三位の場所へと移動した。

この大会に三位決定戦はないので、そこにはアリスとシオンの二人がいる。

そして、シグルスはまずシオンにメダルを渡した。

これは、単純に試合した順である。

「おめでどう、シオン選手」

「光栄です」

「騎士学校一年生にして、この功績、実に見事だ。君ならば真に我が国を支える良い騎士になれる事だろう。」

今後の活躍にも期待している」

「……陛下のご期待に添えるよう、全力を尽くします」

シオンは国王の前で緊張してるのか、若干動きも言葉も硬い。

でも、嬉しいものは嬉しいようで、やはり剣聖と同じように渡されたメダルを見て表情を緩めていた。

ついでに、シオンの事をスカレット娘の友人としても知っているシグルスのシオンに向ける視線は優しかった。

私との差が酷いな。

そして最後に、シグルスはアリスの前に立つ。

シグルスにとって、アリスは妹のユリ娘であり、つまりは姪、身内だ。

アリスに向ける視線は、シオンに向けたものの何倍も柔らかかった。

「おめでとう、アリス選手」

「はい！」

「君はこの大会において力を示した。それは他の誰でもない、君自身の価値だ。当然、両親も祖父母も関係ない君自身の価値を誰もが認めるだろう。その両親も、祖父母も、そして当然、この私もね。」

よく頑張った」

「……はい！」

そうした、アリスもまた嬉しそうにメダルを貰う。

シグルスの背後で、アレクが弛みそうになる顔を必死で抑えているのが見えた。

尚、私の顔は抑えるまでもなく弛みきつている事は言うまでもなからう。

何はともあれ、これで全てのメダル授与が終了した。

「諸君！ 激闘を勝ち抜き、栄冠を掴んだ彼らに、盛大な拍手と歓声を！」

『オオオオオオオ！』

シグルスの言葉に合わせて、会場が一気に盛り上がる。

おめでとうコールの嵐だ。

私達は、それに手を振って応えた。

アリスがちよつと恥ずかしそうにしている。

可愛い。

「では、これにて第91回王都武闘大会を終了する！」

シグルスの宣言により、これにて正式に武闘大会は終了した。

しかし、会場を包み込む拍手と歓声の嵐は、しばらくの間収まる事がないのであった。



「じゃあ、またな嬢ちゃん」

「ああ、達者でな」

武闘大会の翌日。

大会の翌日という事で学校が休みになった今日。

私とアリス、シオンの三人は、気が早い事にもう出発の準備を終えたドレイクとベル達を見送るべく、こいつらが留まっていた宿の前まで来ていた。

スカーレットとオリビアも来たがってたんだが、あいつらは武闘大会で見事に散ったクソ虫の駆除作業に精を出してるらしく、ここには来られない。

そもそも、王女の外出自体、護衛の都合とかもあって、そう頻繁には行えないらしいからな。

仕方あるまい。

その代わりに、昨日、あいつらと同じく貴賓席で試合を見ていたアレク達経由で、ドレイク達によろしく伝えてほしいという伝言が来てる感じだ。

「リンネ！ シオン！ 次に会った時、俺はお前らよりも強くなってるからな！ その時こそ、今回果たせなかったリベンジの時だ！ 首を洗って待ってる！」

ベルはいつも通り、そうやって元気よく吠えていた。

うむ、実にベルらしい。

「ハッハッハ！ 楽しみに待っているぞ！ その為にも、せいぜい、ドレイクにみっちりシゴいてもらえ！」

「当たり前だ！ 全ての技術を盗んでやるぜ！」

そうして、私とベルは前に村で別れた時と同じく、硬い握手を交わした。

「ベル、次会う時は、せめて鬨気くらい使えるようになっておけよ。そうじゃないと張り合いがないからな」

「ヘッ！ 上等だ！ すぐにお前なんか追い抜いてやる！」

「言ってる」

そして、ベルとシオンも硬く握手。

なんだかんだで、こいつらはお互いの事を幼なじみ、兼、ライバルとして認めてるんだらう。

不敵な笑みを浮かべ合う二人は、どことなく楽しそうだった。

と、私達が漢の友情的な何かで別れを飾っている時、隣では女同士が別れを惜しんでいた。

「オズカーさん、ラビちゃん、短い間でしたけど、とつても楽しかったです。ありがとうございます」

「いやー、こつちこそ、ラビ以外でまともな女友達って初めてだったから新鮮だったつすよ。また会ったら、その時はよろしくつす」

「ま、またね」

「はいー」

うんうん。

アリス、友達が増えて良かったな。

おじいちゃんとしては実に嬉しい。

なんか、サラツとオズカーが私をまともな女扱いしてない発言をした気がするが、今なら気のせいだと水に流してやらんでもないって気持ちになるわー。

「オズカーー！ ラビー！ お前らも元気だなー！」

「わかつてるつすよー。冒険者は元気じゃないと勤まらないつすからねー」

「リンネちゃんも元気でね」

「ああー！」

そうして、女二人組とも握手を交わした。

その手は、村で別れた時よりも遥かに力強い。

うむ、これなら心配無用だな。

「うし、そろそろ行くぞ」

「よつしやあー！」

「了解つす」

「は、はいー！」

ドレイクが出発を宣言し、ベル達がそれに続く。

次に会えるのは何時になるのやら。

まあ、今回僅か数ヶ月で再会したように、またどつかでサラツと再会しそうな気がしてならないがな。

おっと。

そういえば、一つ忘れてたわ。

「ドレイク」

「ん？ どうした？」

私は歩き出そうとしているドレイクを呼び止め、一枚の手紙を差し出した。

「なんだ、こりや？ ラブレターか？」

「違うわボケ。パパとママへの手紙だ。旅するなら、ついでに届けてきてくれ」

今まででも、たまに冒険者ギルドに依頼して届けてもらってたんだがな。

しかし、ここに便利な知り合いがいるなら、頼まない手はないだろう。

それに、ドレイクなら間違いなく届けてくれるという信頼がある。

何せ、父の元仲間だしな。

「おいおい、S級冒険者に配達依頼かよ。普通なら高くつくんだぜ」

「まったく」と言いつつ、ドレイクは手紙を懐に仕舞った。

どうやら、やってくれるらしい。

やはり、口ではなんだかんだ言ってもドレイクは便利、ゴホン、優しい奴だな。

「さて。じゃあ、今度こそ出発だ。俺の見てない所で無茶するなよ、嬢ちゃん」

「またな！ お前らー！」

「さらばっすよー」

「またね。バイバイ」

そうして、ドレイク達は去って行った。

私達はしばらく手を振って、その後ろ姿を見守る。

こうして、ドレイク達は再び旅に出たのだった。



明けて翌日。

普通に今日も学校が始まる。

その朝のホームルームにて、担任のユーリが話し出した。

「さて、とりあえず、一昨日は全員お疲れ様と言っておくわ。

予選で敗れてしまった者も安心なさい。審査員はその活躍を見逃していないわ。

特に、A、B、Dブロックは、突出した個人を相手に、それでも向かって行った根性を評価されているし、Cブロックもバトルロワイアルという形式にも関わらず発揮された謎の連携が評価対象になっていたわね」

それを聞いて、クラスメイト全体の顔がどことなく明るくなった。

まあ、中には私のような規格外に何もできないままやられたような奴もいるんだろうし、そこにユーリのこの言葉は、まさに救いの声か。

まあ、気休め程度かもしれないがな。

「では、次の課題ね。

武闘大会が終わったからと言って、あなた達に休息はないわ。

二週間後には、初の大規模な実戦訓練である迷宮への遠征が始まるし、それまでは一層厳しく授業を執り行うつもりだから覚悟しておくように。

そして、迷宮遠征までに、個人戦闘力の底上げ、集団行動と戦闘の基礎、他のクラスとの合同訓練、その他諸々。

覚える事は山のようにあるわ。それを容赦なく詰め込むから、そのつもりでいなさい」

『はー！』

そんなユーリの言葉に、クラスメイト達はいつものように、騎士候補生らしく息の合った返答をした。

私以外は。

……うん、この足並みの揃わなさは何とかするべきかもしれないな。
前世で騎士として戦った時は、気心の知れた連中と組むか、私が
単騎で暴れて他がサポートみたいな形だったので、実は私は集団行動
が決して得意とは言えないのだ。

まあ、一般騎士と英雄では求められる役割が違うが、それでも集団
行動スキルがあつて困る事はない。

せっかく騎士学校なんてものに通ってるんだから、少しは苦手を克
服する努力をするべきだろうか？

そんな、ちよつとした悩みを、休み時間でアリスに抱き着きながら
相談する。

そこにシオンも加わり、相談というか、もはやいつものお喋りに
なつてきた時。

バンツ！ と大きな音を立てて教室の扉が勢いよく開かれた。
何事かとクラスメイト全員が扉に視線を向ける。

その先にいたのは予想外の人物。
スラリとした長身に、引き締まった体をした藍髪の青年。

聖アルカディア教国からの留学生にして、武闘大会準優勝者。
当代『剣聖』ランスロットだった。

剣聖は教室内をグルリと見回すと、その視線を私にロックオンし、
いかにも教国の騎士っぽい礼儀作法完璧な歩き方で私に向かって来
た。

「やあ、リンネくん、アリスくん、シオンくん」

「あの、何かご用でしょうか？」

アリスが首を傾げながら問いかける。

私もシオンも訝しげな目で剣聖を見ていた。

三年生が一年生の教室に何の用だ？

まさか、武闘大会のお礼参りだろうか？

だとしたら受けて立つが。

「ああ。今日はリンネくんに用があつて来訪させてもらった」

「私か？」

そう言う剣聖の眼光は鋭い。

敵意、ではないが、何か強い感情を迸らせている。
いったい何なんだ？

「突然こんな事を言っても困惑するだろうが、どうか聞いてほしい」
お礼参りなら訓練場の使用許可がいるな。

あとでユーリにでも相談するか。

そんな事を考えていた私の前で、剣聖は何故か腰を落とし、片膝を
ついた体勢になる。

ん？

お礼参りにしては変だな？

そうやって、私の思考がトンチンカンな方向に向かって迷走してい
た次の瞬間、剣聖はとんでもない爆弾発言をぶっ放した。

ぶっ放してくれやがった。

「俺は君に惚れてしまった。どうか、俺と結婚を前提に交際してくれ
ないだろうか？」

「……………はっ？」

その瞬間、教室の空気が凍りついた。

私もまた、剣聖の言葉に思考が停止する。

どこから取り出したのか、剣聖の手の中には花束が握られていた。

お前、手品師の才能あるんじゃないか？

いや、今はそんな事を考えている場合ではない！

よく見れば、剣聖の顔は耳まで真っ赤だ。

洒落や冗談で言った訳ではない事がわかる。

そもそも、こいつの性格は私の予想が間違っていなければクソ真面
目。

こんな冗談を口にするキャラではない。

……という事は、マジか。

マジで言っているのか、こいつは。

チラリと隣を見れば、アリスが口元を両手で覆って、驚愕と言わん
ばかりのポーズを取っている。

シオンは、まるで狂人でも見るかのような視線を剣聖に向けている。

クラスメイト達は、驚愕しながらも興味津々の様子で私達を見ていた。

何がどうしてこうなった？

そんな事が頭に浮かぶも、私の言うべき事は決まっている。

「断るー！」

とりあえず、バツサリと切っておいた。

73 劍聖の告白

「ぐっ……い！ まあ、それはそうだろう。俺達はまだ知り合って間もない。断られるのは覚悟の上だ」

「なら、何故に告白してきた？」

「まずは気持ちを伝える事が大事だと思ってな。愛しているというのは、言わなければ伝わらないだろう」

『キヤーーーーー！』

何故かクラスメイト達から歓声が上がった。

特に女子。

「カッコいい！」だの「男らしい！」だのと歓声を上げている。まるで野次馬のようだ。

逆に、そうじゃない生徒（特に男子）は「こいつ、もしやロリコン……!？」という感じで、警戒の視線を劍聖に向けていた。

ちなみに、私が劍聖に向ける視線は、後者の連中とほぼ同じである。

「さて、断られたからには引き下がろう。今日のところは」

「完全に脈なしだから、二度と来なくていいぞ」

「そうはいかない。俺のこの想いは本気だ。君が誰かと結ばれて幸せになるその瞬間まで、諦めずにアタックを続けさせてもらおう」

『キヤーーーーー！』

またも女子から歓声が上がった。

その、あまりにストレートな愛の言葉に外野ですら照れたのか、野次馬女子達は思いつきり顔を赤らめている。

隣を見れば、アリスですら顔が赤い。

そして、シオンは相変わらず狂人を見る目をしている。

しかし、意外な事に、今度はそのシオンが口を挟んできた。

「あー、その、ちよつといいですか先輩？」

「なんだい、シオンくん？」

シオンが珍しく敬語で劍聖に話しかける。

一応は先輩にして教国の要人という事で、スカーレットと同じように敬語で接する事にしたらしい。

「ぶつちやけ、こいつのどこを好きになったんですか？」

「ああ、その事か。そうだな……最初のきつかけは大会予選の夜、不甲斐ないと自分を責めていた俺を、リンネくんが慰めてくれた事だった」

「……お前、そんな事してたのか」

「いや、ウジウジしてたから、尻を蹴っ飛ばしてやっただけなんだが」
シオンが呆れたような目で私を見てきた。

なんだ、その目は！

別にいいだろう、それくらい！

酔った勢いというやつだ！

「その時の慰めの言葉は話半分くらいに聞いていたのだがな。しかし、決勝の舞台上で再び同じ事を言われて諭された。

剣聖の重圧に負けるなど、肩の力を抜くと、言葉だけではなく、行動で俺を諭してくれた。認識を変えてくれた。それでスツと心が軽くなったんだ。

「どれだけ感謝してもし足りない」

「あ、それはわかります。凄くわかります」

おい!?

今度はアリスが心から同意すると言わんばかりに深々と頷いているぞ！

そして、剣聖と硬い握手を交わしおった！

なんだ!?! 準決勝で戦って友情が芽生えたのか!?!

お前はどっちの味方だ、アリス!?!

おじいちゃんが、こんな若造に盗られちゃってもいいのか!?!

「そして、その感謝の気持ちに恋心に変換された感じだ。あの衝撃的な抱擁が頭から離れなかったというのもある。

それに、俺は元々、隣に立って支えてくれるような女性がタイプだったからな」

「な、なるほど。それなら、確かにリンネちゃんはどストライクかもしれませんね」

「アリス!?!」

追い討ちはやめてくれ!

「……だそうだが、どうする、リンネ?」

「どうするもこうするもない! 断ると言っているだろうが! そもそもー!」

そこで一度言葉を切り、私は力の限り大声で宣言した。

「私は男に興味はない!」

教室が静寂に包まれた。

剣聖も唾然としている。

そこへ叩き込むように、私はトドメの一撃を撃ち込んだ。

「それに、私には好きな奴がいる! 嫁候補なら他を当たれ!」

「あの、リンネちゃん?! どうしてそこで私に抱き着くんですか?! これだと、あらぬ誤解が……!」

くくく、もう手遅れだ!

何故なら!

「百合?!」

「美少女と美幼女……尊い……」

「リン×アリだと……!?!」

「しよつちゅう抱き着いてるから、まさかとは思ったが……!?!」

「三角関係とか燃える! むしろ、萌える!」

等という声が教室中から聞こえてくるからな!

それに、私は嘘は一言も言っていないぞ。

確かに、私には好きな奴^{シヤ}がいるし、アリスの事だつて親愛的な意味では大好きだ。

目に入れても痛くない!

私はなんと誠実な女なのだろうか!

一方、そんな私の宣言を聞いた剣聖は、思いの外ダメージを受けていた。

「ぐはっ!? まさかのライバル登場だな……! だが、相手に取って不足なし! 負けるつもりはない!」

「え、ええ……」

訂正。

ダメージを受けた直後に復活し、逆に燃え上がっていた。
あれか？

「恋は障害が多い程燃えるというやつか？

迷惑この上ない！

他所でやれ！

私は剣聖を睨み付け、全力で威嚇した。

「……なんだ、このカオスは？」

シオンがポツリと呟く。

恋に燃える剣聖。

それを威嚇する私。

困惑するアリス。

色めき立つクラスメイト。

教室はまさに混沌の坩堝と化していた。

そして、次の瞬間、休み時間の終了を告げる鐘が鳴り、何一つとして問題が解決しないまま解散となった。



「なるほど。それで、こんな事になっているのですわね」

そして、昼休み。

いつもの如く食堂で再会し、軽い説明を受けたスカレットが、疲れたようにそう言った。

そんな私達を囲むのは、食堂中からの好奇の視線。

スカレット、オリビア、女王とその護衛、剣神の娘、A級冒険者、そしてS級冒険者という

豪華な面子のせい、こういう視線を浴びるのは、普段から割と慣れっこではある。

が、今回はそれに輪をかけて酷い。

しかも、視線の種類がいつもと違って、何やら熱いのだ。
今朝のクラスメイト達と同種の視線。

「どうやら、もう既に今朝のスキャンダルが学校中に広まったようだな。」

鬱陶しい事この上ない。

「リンネくん、隣に座ってもいいだろうか？」

「失せろ」

その元凶こと、剣聖が凶々しくも宣った。

のでバツサリと切れば、肩を落として他の席に行こうとする。

諦めがいいのやら悪いのやら。

「あの、剣聖さん。私の隣で良ければどうぞ」

「おい、アリス!？」

「む、そうか。感謝するアリスくん」

剣聖はアリスに深々と一礼してから、アリスの隣に座った。

ちなみに、アリスは当然の如く私の隣なので、奴は私の隣の隣に座った事になる。

なんとという事を！

私はアリスに密着しながら、小声で問いかけた。

「(アリス、どういうつもりだ!)」

「(いえ、その、仲間外れは可哀想かなって思いました……)」
くっ!?

アリスが優しくして尊い！

だが、その優しさと尊さは別の機会で発揮してほしかったと、おじいちゃん思う！

「(そもそも! アリスは私があんな奴に盗られちゃってもいいのか!?)」

「(えっと、リンネちゃんを幸せにしてくれる方なら良いかなって思ってます。剣聖さんは良い人そうですし)」

「(誰目線!?)」

アリスよ!

お前は私の保護者か!?

むしろ、私がお前の保護者なんだが!?

「(というか、あれと結婚しても私は幸せにはならんぞ! 私は今でもシヤロ一筋だ! ましてや、男と寝るなんて考えたくもない!)」

「(あ、そうですね……でも、それならどうしましょう? あの嬉しそうな劍聖さんの顔見ると、今から他の席に移ってくださいなんて言えないんですけど……)」

「(知るか!)」

アリス、こういうのは変な期待持たせるのが一番ダメなんだぞ!

脈がないなら、バツサリと切つて、キツパリと振る!

そうじゃないと変に拗れるからな!

そんな感じの話を誰かから聞いた事がある!

「という訳で、お前は出て行け!」

「ぐっ……! そうか……すまない……嫌がらせるつもりはなかったんだ」

傷ついた感じで、劍聖は席を立とうとする。

ふう、これでやつと嵐が去って……

「まあまあ、リンネさん、落ち着いてくださいませ。ランスロットさん、あなたはここに居て構いませんわ。わたくしが許可します」

「スカーレット!?!」

貴様もか!?

何の真似だ!

そう思つて憤慨していると、スカーレットがチヨイチヨイと私に向かって手招きしてきた。

なので、渋々アリスの隣を離れて、反対側の席に座るスカーレットの横へと移動した。

そして、またも小声で内緒話を始める。

「(で、どういうつもりだ?)」

「(簡単な事ですわ。劍聖であるランスロットさんをあまりに邪険に扱えば、下手をすると教国との国際問題になりかねませんので。」

リンネさんも、恋仲になれとまでは言いませんが、フオルテの如く嫌つて遠ざけようとするのはやめていただけると助かりますわ)」

「(うぐっ!?)」

それを言われると弱い。

剣聖の母国である聖アルカディア教国は、このグラディウス王国の貴重な同盟国。

また侵略戦争みたいな事が起こった時の為の、頼れる味方だ。

こんな馬鹿馬鹿しい理由で教国と喧嘩したいなんて、さすがの私でも思わない。

くっ……!

致し方ないか。

私は大人だ。

普段はともかく、こういう時は大人な対応をしなければ。

「(はぁ……仕方ない)」

「(では、よろしいですわね?)」

「(ああ)」

「良かったですわね、ランスロットさん。リンネさんの許可が取れましたわよ」

「感謝します、スカーレット王女……!。そして、ありがとう、リンネさん」

「……ああ。だが、相変わらず脈はないからな?。それだけは忘れるなよ」

「わかっている。君に脈を持たせられるかどうかは、これからの俺の努力次第という事だな。

必ずや、俺は君に釣り合う男になってみせる」

「……はぁ」

私はため息を吐きながら、もうそれでいいやとばかりに、諦めて反論しなかった。

こういう時、シャロが生きてれば「エドはボクのだからね!」とか何とか言っつて牽制してくれたんだがなぁ。

未亡人とは、ままならんものだ。

今だけでいいから、生き返って何とかしてくれないだろうか?

『いや、無理だから!。自分で何とかしてよね!。信じてるからね!』

おっと、墓の前でもないのに、変な電波を受信したぞ。そうだな。

男に迫られるなんて苦行でしかないが、私は何とか頑張ってみるわ。

草葉の陰から応援してくれ、愛する妻よ。

そんな事を考えながら、私はアリスの隣へと戻った。その直後。

「まあ、なんというか……頑張れよ」

「……ああ」

シオンにまで同情されて慰められてしまった。

なんていう悲劇。

「では、改めて。俺は聖アルカディア教国の騎士『劍聖』ランスロットだ。気軽にランスロットと呼んでほしい。

これから、よろしく頼む」

私達を見回しながら、劍聖ことランスロットは、そう言って控えめに笑った。

こうして、私の愉快的な学友が一人増えたのだった。

74 始動

「揃ったな」

どことも知れぬ暗い部屋。

そこに女の声が響いた。

その声を出したのは、部屋の最奥にある玉座に腰かけた一人の女。そして、女の前には六名の男女が膝まづいている。

その中の一人、巨漢の老人が、女の言葉に返答するべく、口を開いた。

「ハッ。帝国十二神将、ここに集結いたしました」

「と言っても、欠員だらけですけどね。しかも、来てない人も一人いますし」

「シャドウ、口を慎め。陛下の御前だ」

「ハイハイ。わかっていますよ」

老人の言葉に、跪いている中の一人である仮面の男、シャドウが軽い調子で茶々を入れ、速攻で老人に叱られた。

しかし、シャドウに反省の色はない。

だが、それはいつもの事であり、陛下と呼ばれた女はその態度を許している。

彼女にとつて、手駒である彼らは使えればそれでいいのだ。

品格など、二の次、三の次である。

そんな主の意向を正しく汲み取っているが故に、一番の忠臣たる老人は苦い顔をしつつも、それ以上の追及はしなかった。

「で？ 教国に派遣してたオレ様まで呼び戻して、今度はいったい何する気だ、陛下？」

「やるなら、強敵との死闘がいいでござるよー！」

次に口を出したのは、際どい衣装を身に纏った紫髪の女と、和服を着た侍風の男。

スコーピオンとライゾウである。

主を前に敬語すら使わない二人に、老人の不快指数は上がっていくが、いつもの事だと不満を胸の内に押し込める。

感情を殺すのは彼が最も得意とする分野であった。
そして、二人の疑問に陛下と呼ばれた女が答える。

「最近余の容体も随分と安定してきてな。この分であれば、あと一年程で完全に復活する事ができるのであろう。」

そして、その時こそ、我らがディザスロード帝国による第二次侵略戦争開始の時。

今回、其方^{そなた}らを呼び戻したのは、その先駆けの為だ」

そこで一度言葉を切り、女は抑揚のない声に少しだけ力を籠めて続きを語った。

「此度^{こたび}の目的は、かつて我が国を敗北に追いやった仇敵、グラディウス王国への本格的な攻撃。」

そして、空席となつている十二神将の補充だ。

此度の計画は、今まで行つてきた人形の実験を兼ねた嫌がらせとは違ふ。

現在の十二神将^{しんじやう}ほぼ全員と、手持ちの暗部を大量に投入する大規模な襲撃となるだろう。

各自準備を整え、来るべき時、存分に王国を蹂躪せよ」

その言葉に、スコープオンとライゾウが好戦的な笑みを浮かべた。シャドウもまた、仮面の下でニヤリと笑う。

表情を変えない者は三名。

一人は、感情の制御に優れ、鉄仮面を被る事に慣れた巨漢の老人。

もう一人は、まるで人形のように無反応な、上半身裸でフルフェイスの兜を被つた屈強な男。

そして最後の一人。

それは、全身を真っ黒な外套で隠し、腰に業物と思われる刀を差した剣士であった。

「作戦の詳細は追つて知らせる。下がれ」
『ハッ！』

その言葉に従い、各自部屋から立ち去っていく。

ある者は戦意を迸らせ。

ある者は任務への使命感で気を引き締めて。

そんな中、仮面の男シャドウは、立ち去る時剣士の男の肩にポンツと手を起き、おどけた態度で声をかけた。

「よろしくお願ひしますね、新人さくん」

その言葉に対して剣士の男は、まるで人形のように何の反応も返さなかつた。